

一般国道159号改築（鹿島バイパス）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

羽咋市

四柳白山下遺跡Ⅴ

〔本文編〕

2019

石 川 県 教 育 委 員 会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

よつやなぎはくさんした
四柳白山下遺跡Ⅴ
〔本文編〕

2019

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景(平成9年度撮影、北から)



遺跡全景(平成6年度撮影、南西から)



G地区 第0・1面全景



G地区 第0・1面全景 (北東から)



G地区 第Ⅱ-1面北半発掘状況



G地区 第Ⅱ-1面水田301～303発掘状況(南西から)



G地区 第Ⅲ-1面河跡3001(新)発掘状況(北西から)



G地区 第Ⅲ-1面河跡3001(新)発掘状況(南西から)



G地区 第17面南半完掘状況



G地区 第17面北半完掘状況



G地区 第V面全景(南から)



G地区 第V面水田区画完掘状況(東から)



G地区 第Ⅵ-2面全景



G地区 第Ⅵ-2面S1651完掘状況(北東から)



G地区 第VI-3-VII-1面完掘状況(北東から)



G地区 第VI-3面完掘状況(西から)

例 言

- 1 本書は四柳白山下遺跡第4・5次調査G地区に係る発掘調査報告書〔本文編〕である。
- 2 遺跡の所在地は羽咋市四柳町地内である。
- 3 調査原因は一般国道159号改築(鹿島バイパス)であり、同工事を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 現地調査は、石川県教育委員会からの委託を受けて、平成9(1997)年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が、平成10(1998)年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。また、平成14(2002)～17(2005)年度及び平成28(2016)年度に出土品整理を、平成25・28～30(2013・16～18)年度に報告書原稿作成を、平成30(2018)年度に報告書編集・刊行を、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(平成24年度まで財団法人石川県埋蔵文化財センター)が、石川県教育委員会からそれぞれ委託を受けて実施した。
- 5 調査に係る費用は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当課・担当者は次のとおりである。

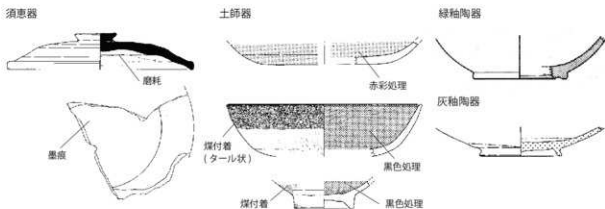
〔第4次調査〕	期 間	平成9年4月10日～同年12月24日	面 積	2,800㎡(G地区)
	担 当	調査課調査第1係	担当者	川畑 誠(主任)、白田義彦(主任)
〔第5次調査〕	期 間	平成10年5月12日～同年12月28日	面 積	7,900㎡
	担 当	調査部調査第1課	担当者	川畑 誠(主任主事)、加藤克郎(主事)
- 7 出土品整理は、企画部整理課(平成12～17年度)、調査部特定事業調査グループ(平成28年度)が担当した。
- 8 自然科学的分析として、木製品の樹種同定を平成17年度に(株)パレオ・ラボ、同28年度に(株)古環境研究所にそれぞれ委託して実施した。
- 9 報告書の作成は平成25・28～30年度に、編集・刊行は平成30年度に実施し、調査部関係調査グループが担当した。執筆分担は次のとおりで、遺物の写真撮影は池田拓が行った。

第1～5章、第7章	川畑 誠(調査部関係調査グループ)
第6章	(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所
- 10 調査には下記の機関、個人の協力を得た(五十音順、敬称略)。

国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、羽咋市教育委員会、出越茂和、中野知幸、加藤克郎
- 11 調査に関する記録と出土品は、石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記および次頁のとおりである。
 - (1) 遺構実測図等の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。
 - (2) 水平水準はT.P(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 遺構の名称は第3章第1節の略記号で表記し、遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。
 - (4) 写真図版の遺構、遺物は、任意の縮尺である。

【挿図等凡例】

- 1 遺構図版は縮尺1/60、1/80を基本とし、規模や図版の性格により縮尺1/30、1/40等を適宜用いた。
- 2 土器等遺物図版は縮尺1/3を基本とし、縮尺が異なる個体は都度縮尺を付した。断面の塗りわけ・トーン等による表現は、須恵器が断面黒塗り、その他は白抜きとし、トーン等の表現は次のとおりである。



- 3 木製品実測図の木取り等を示すために木目を描き込んでいるが、木目の間隔は目の詰まり具合を表現する程度で、実際の木目間隔を記したものではない。
- 4 遺物観察表のうち、須恵器、土師器の胎土については、次の表のとおり分類を行った。

須恵器

胎土分類	特徴	鑑定前地
a	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片は混ざらない。 -白色焼砂粒と1~3mm大の角張った石灰・長石等の砂雜が多量に混ざる。 -彫れ口はぼろつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋塚群跡 (中庭発跡北側)
b	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片が混ざる。 -赤紫色粒(シャモット)が多く混ざる。 -小さな気泡(吹きぶくれ)をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽時塚群跡
c	-素地は粘着で緻密な印象を受ける。海綿骨片は混ざらない。 -白色焼砂粒の他、2mm程度の細れた石灰・長石・赤色粒が若干混ざる。	鹿登 (高松発跡跡分)
d	-素地は粘着で、海綿骨片が混ざる。 -多量の焼砂粒の他、1~2mm大の石灰が混ざる。 -彫れ口はぼろつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋塚群跡分
e	-素地は粘着で、しっかりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 -焼砂粒は少なく、1~3mm大の角張った石灰・長石等の砂雜が多量に混ざる。	鳥屋塚群跡 (中庭発跡北側)
f	-素地は粘着で、しっかりとした質感をもつ。 -焼砂粒、1~3mm大の角張った石灰・長石等の砂雜が多量に混ざる。	鳥屋塚群跡 (中庭発跡北側)
g	-小と類似。素地は粘性に乏しく、海綿骨片が多く混ざる。 -焼砂粒、石灰粒がほとんど混ざらない。 -気泡をもつ。淡灰色の色調をもつことが多い。	羽時塚群跡
h	-素地は粘着で、海綿骨片が混ざらない。 -多量の焼砂粒の他、1~2mm大の石灰が若干混ざる。 -彫れ口はぼろつき。	鳥屋塚群跡 (中庭発跡西側)
i	-素地は粘性に乏しく、しっかりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 -焼砂粒の他、1~5mm程度の細れた石灰を主体とした砂雜が混ざる。	鹿登 (高松発跡跡分)
j	-素地は粘性に乏しく、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が混ざる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石が多く混ざる。 -彫れ口はぼろつき、土師器分類同に類似。	鳥屋塚群跡
k	-素地は粘性に乏しく、海綿骨片が混ざる。 -石灰質の焼砂粒、2mm大の石灰粒が少し混ざる。 -気泡が混ざり立つ。	羽時塚群跡分
l	-素地は粘着で、キメが細かい。海綿骨片は混ざらない。 -白色焼砂粒、1mm大の石灰粒がごく少量混ざる。	鳥屋塚群跡分
x	-その他	不明

土師器

胎土分類	特徴	備考
ア	-素地は粒子が粗く、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が多く混ざる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石・金雲母等の砂雜が多量に混ざる。	主に 食器類
イ	-素地は粒子が中や粗い。海綿骨片が混ざる。 -1~3mm以下の長石・焼砂粒を主体に、角張った1~3mm大の石灰・長石等の砂雜が混ざる。	
ウ	-素地は粘着で、海綿骨片が多く混ざる。 -比較的粒径が揃った3mm大の石灰・長石・赤色粒が混ざる。	
エ	-素地は粘着で、海綿骨片が多く混ざる。 -0.5mm大の赤色粒を含む焼砂粒が混ざる。	主に 炊飯具
オ	-素地は砂っぽく、海綿骨片が混ざらない。 -1~2mm大の石灰・長石が多く混ざる。 -気泡があり、彫れ口はぼろつきの質感をもつ。	
カ	-素地は粒子が粗く、砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が混ざる。 -石灰、赤色粒等の焼砂粒が混ざる。 -細かい気泡が混ざり立つ。	
キ	-素地は粘着で、海綿骨片が若干混ざる。 -石灰、赤色粒等の焼砂粒が混ざる。	
ク	-素地は粘着で、海綿骨片が多く混ざる。 -1~3mm大の角張った石灰・長石・赤色粒等が混ざる。	
ケ	-素地は粒子が粗く、海綿骨片が混ざらない。 -焼砂粒に加え、金雲母、1~3mm大の角張った石灰・長石等が混ざる。	

目 次

〔本文編〕

第1章 調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理等作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の方法と基本層序	13
第1節 調査の方法	13
第2節 基本層序	16
第4章 G地区の遺構と遺物	21
第1節 調査の概要	21
第2節 第0・I面の遺構と遺物	23
第3節 第Ⅲ-1面の遺構と遺物	115
第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物	154
第5節 第Ⅳ面の遺構と遺物	212
第6節 第Ⅴ面の遺構と遺物	306
第7節 第Ⅵ-1面の遺構と遺物	333
第8節 第Ⅵ-2面の遺構と遺物	357
第9節 第Ⅵ-3面・第Ⅶ-1面の遺構と遺物	395
第10節 第Ⅶ-2面の遺構と遺物	409
第5章 H地区の遺構と遺物	420
第1節 調査の概要	420
第2節 第0・I面の遺構と遺物	421
第3節 第Ⅲ-1・2面の遺構と遺物	425
第4節 第Ⅳ面の遺構と遺物	434
第6章 自然科学的分析	445
第7章 総 括	455
第1節 G地区第Ⅲ面の存続年代について	455
第2節 G・H地区の変遷	457
第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討	470
第4節 総括－古代の四柳白山下遺跡の評価を中心として－	489

挿図目次

第1図	調査地区区割り図(S=1/2,500) ……………	3	第30図	G地区第0-I面SB107平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	47
第2図	遺跡の位置 ……………	6	第31図	G地区第0-I面SB108平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	48
第3図	周辺の地勢 ……………	7	第32図	G地区第0-I面SB109平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	49
第4図	周辺の遺跡分布図(S=1/25,000) ……………	9	第33図	G地区第0-I面SB110、SA103・105平面図 (S=1/60) ……………	50
第5図	調査地区グリッド配置図(S=1/500・2,000) ……………	14	第34図	G地区第0-I面SB110、SA103土層断面図 (S=1/60) ……………	51
第6図	G地区グリッド配置・土層柱状図位置図 (S=1/600) ……………	15	第35図	G地区第0-I面SB110、SA105土層断面図 (S=1/60) ……………	52
第7図	第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ 模式図 ……………	16	第36図	G地区第0-I面SB111平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	53
第8図	G地区東壁土層柱状図(S=1/60) ……………	18	第37図	G地区第0-I面SB112・113平面図・断面図 (S=1/60) ……………	54
第9図	G地区第0-I面全体図(S=1/300) ……………	24	第38図	G地区第0-I面SB114平面図・断面図 (S=1/60) ……………	55
第10図	G地区第0-I面SB・SA配置図(S=1/300) ……………	25	第39図	G地区第0-I面SB115平面図・断面図 (S=1/60) ……………	56
第11図	G地区第0-I面SE・SK・SD地配置図 (S=1/300) ……………	26	第40図	G地区第0-I面SB116平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	57
第12図	G地区第0-I面平面図1(S=1/80) ……………	27	第41図	G地区第0-I面SB117・SA106平面図・ 土層断面図(S=1/60) ……………	58
第13図	G地区第0-I面平面図2・3(S=1/80) ……………	28	第42図	G地区第0-I面SB118平面図・断面図 (S=1/60) ……………	59
第14図	G地区第0-I面平面図4(S=1/80) ……………	29	第43図	G地区第0-I面SB119平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	60
第15図	G地区第0-I面平面図5(S=1/80) ……………	30	第44図	G地区第0-I面SB120平面図・断面図 (S=1/60) ……………	61
第16図	G地区第0-I面平面図6・7(S=1/80) ……………	31	第45図	G地区第0-I面SA101・102平面図・土層断面 図(S=1/60) ……………	62
第17図	G地区第0-I面平面図8(S=1/80) ……………	32	第46図	G地区第0-I面SA104等平面図・土層断面図 (S=1/60・100) ……………	63
第18図	G地区第0-I面平面図9・10(S=1/80) ……………	33	第47図	G地区第0-I面SB出土遺物実測図1 (S=1/3・1/6) ……………	64
第19図	G地区第0-I面平面図11(S=1/80) ……………	34	第48図	G地区第0-I面SB出土遺物実測図2 (S=1/3・1/6) ……………	65
第20図	G地区第0-I面平面図12(S=1/80) ……………	35	第49図	G地区第0-I面SB・SA出土遺物実測図 (S=1/6) ……………	66
第21図	G地区第0-I面平面図13(S=1/80) ……………	36	第50図	G地区第0-I面SA出土遺物実測図(S=1/6) ……………	67
第22図	G地区第0-I面平面図14・15(S=1/80) ……………	37			
第23図	G地区第0-I面F地区SB104平面図・ 土層断面図(S=1/60) ……………	39			
第24図	G地区第0-I面SB101平面図・断面図 (S=1/60) ……………	40			
第25図	G地区第0-I面SB102平面図・断面図 (S=1/60) ……………	42			
第26図	G地区第0-I面SB103平面図・断面図 (S=1/60) ……………	42			
第27図	G地区第0-I面SB104平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	43			
第28図	G地区第0-I面SB105平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	44			
第29図	G地区第0-I面SB106平面図・土層断面図 (S=1/60) ……………	45			

第51図	G地区第0-I面SE平面図・土層断面図1 (S=1/30)	70	第73図	G地区第0-I面下確認調査概略図 (S=1/500)	106
第52図	G地区第0-I面SE平面図・土層断面図2 (S=1/30)	71	第74図	G地区第0-I面下確認調査土層断面図 (S=1/60)	106
第53図	G地区第0-I面SE平面図・土層断面図3 (S=1/30)	73	第75図	G地区第0-I面下確認調査出土遺物1 (S=1/3)	107
第54図	G地区第0-I面SE・SK平面図・土層断面図 (S=1/30)	75	第76図	G地区第0-I面下確認調査出土遺物1 (S=1/3)	108
第55図	G地区第0-I面SE出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)	76	第77図	G地区第0-I面建物等変遷案(S=1/500)	113
第56図	G地区第0-I面SK平面図・土層断面図 (S=1/60)	78	第78図	G地区第Ⅲ-1面全体図(S=1/300)	116
第57図	G地区第0-I面SK出土遺物実測図1 (S=1/3・1/6)	79	第79図	G地区第Ⅲ-1面主要遺構配置図(S=1/300)	117
第58図	G地区第0-I面SK出土遺物実測図2 (S=1/3・1/6)	80	第80図	G地区第Ⅲ-1面平面図1(S=1/80)	118
第59図	G地区第0-I面ビット土層断面図(S=1/60)	82	第81図	G地区第Ⅲ-1面平面図2-3(S=1/80)	119
第60図	G地区第0-I面ビット・SD土層断面図 (S=1/60)	83	第82図	G地区第Ⅲ-1面平面図4(S=1/80)	120
第61図	G地区第0-I面ビット出土遺物実測図1 (S=1/2・1/3・1/6)	85	第83図	G地区第Ⅲ-1面平面図5(S=1/80)	121
第62図	G地区第0-I面ビット出土遺物実測図2 (S=1/3・1/6)	86	第84図	G地区第Ⅲ-1面平面図6-7(S=1/80)	122
第63図	G地区第0-I面SD土層断面図(S=1/60)	88	第85図	G地区第Ⅲ-1面平面図8(S=1/80)	123
第64図	G地区第0-I面SD出土遺物実測図(S=1/3)	89	第86図	G地区第Ⅲ-1面平面図9-10(S=1/80)	124
第65図	G地区第0-I面整地土・暗渠排水配置図 (S=1/500)	92	第87図	G地区第Ⅲ-1面平面図11(S=1/80)	125
第66図	G地区第0-I面整地土土層断面図1 (S=1/60)	93	第88図	G地区第Ⅲ-1面平面図12(S=1/80)	126
第67図	G地区第0-I面整地土土層断面図2 (S=1/60)	94	第89図	G地区第Ⅲ-1面平面図13(S=1/80)	127
第68図	G地区第0-I面整地土等出土遺物実測図 (S=1/2・1/3)	95	第90図	G地区第Ⅲ-1面平面図14(S=1/80)	128
第69図	G地区第0-I面包含層等出土遺物実測図1 (S=1/3)	96	第91図	G地区第Ⅲ-1面平面図15(S=1/80)	129
第70図	G地区第0-I面包含層等出土遺物実測図2 (S=1/3)	97	第92図	G地区第Ⅲ-1面SB・ビット平面図・ 土層断面図(S=1/60)	131
第71図	G地区第0-I面包含層等出土遺物実測図3 (S=1/2・1/3・1/6)	99	第93図	G地区第Ⅲ-1面SB・ビット出土遺物実測図 (S=1/3)	132
第72図	G地区第0-I面包含層等出土遺物実測図4 (S=1/3)	100	第94図	G地区第Ⅲ-1面F20・21区SD平面図 (S=1/60)	133
			第95図	G地区第Ⅲ-1面SD土層断面図1(S=1/60)	134
			第96図	G地区第Ⅲ-1面SD土層断面図2(S=1/60)	135
			第97図	G地区第Ⅲ-1面SD出土遺物実測図(S=1/3)	137
			第98図	G地区第Ⅲ-1面水田301～303平面図 (S=1/100)	138
			第99図	G地区第Ⅲ-1面水田等土層断面図1 (S=1/60)	139
			第100図	G地区第Ⅲ-1面水田等土層断面図2 (S=1/60)	140
			第101図	G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物 実測図1(S=1/3)	142

第102图	G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物 実測図2(S = 1/3 · 1/6)	143	第127图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図1(S = 1/3)	175
第103图	G地区第Ⅲ-1面SX他平面図·土層断面図 (S = 1/60)	145	第128图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図2(S = 1/3 · 1/6)	176
第104图	G地区第Ⅲ-1面SX他出土遺物実測図 (S = 1/3)	145	第129图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図3(S = 1/3 · 1/6)	177
第105图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3)	147	第130图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図4(S = 1/3 · 1/6)	178
第106图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/2 · 1/3)	148	第131图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図5(S = 1/3)	179
第107图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3)	149	第132图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図6(S = 1/3)	180
第108图	G地区第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/2 · 1/3)	150	第133图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図7(S = 1/3)	181
第109图	G地区第Ⅲ-2面全体図(S = 1/150)	154	第134图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図8(S = 1/3)	182
第110图	G地区第Ⅲ-2面平面図1(S = 1/80)	155	第135图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図9(S = 1/3)	183
第111图	G地区第Ⅲ-2面平面図2(S = 1/80)	156	第136图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図10(S = 1/3)	185
第112图	G地区第Ⅲ-2面平面図3(S = 1/80)	157	第137图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図11(S = 1/3)	186
第113图	G地区第Ⅲ-2面平面図4(S = 1/80)	158	第138图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図12(S = 1/3 · 1/6)	187
第114图	G地区第Ⅲ-2面耕作單位復元図(S = 1/300)	159	第139图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図13(S = 1/3)	188
第115图	G地区第Ⅲ-2面SD土層断面図1(S = 1/60)	161	第140图	G地区第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物 実測図14(S = 1/3 · 1/6)	189
第116图	G地区第Ⅲ-2面SD土層断面図2(S = 1/60)	163	第141图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3)	191
第117图	G地区第Ⅲ-2面SD等出土遺物実測図 (S = 1/3)	163	第142图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3)	192
第118图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図1 (S = 1/3)	164	第143图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3)	193
第119图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図2 (S = 1/3 · 1/6)	165	第144图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/3)	194
第120图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図3 (S = 1/3 · 1/6)	166	第145图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3)	195
第121图	G地区第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図4 (S = 1/3)	167	第146图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図6 (S = 1/3)	196
第122图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001(古)完掘狀況 平面図(S = 1/200)	168	第147图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図7 (S = 1/3)	198
第123图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001(新)完掘狀況 平面図(S = 1/200)	169	第148图	G地区第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図8 (S = 1/3)	199
第124图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図1 (S = 1/80)	171			
第125图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図2 (S = 1/80)	172			
第126图	G地区第Ⅲ-1·2面河跡3001土層断面図3 (S = 1/80)	173			

第149図	G地区第Ⅲ面変遷案(S=1/500)	201	第178図	G地区第Ⅳ面SB417平面図・土層断面図 (S=1/60)	244
第150図	G地区第Ⅳ面全体図(S=1/300)	213	第179図	G地区第Ⅳ面SB418平面図・断面図 (S=1/60)	245
第151図	G地区第Ⅳ面主要遺構配置図(S=1/300)	214	第180図	G地区第Ⅳ面SB419平面図・土層断面図 (S=1/60)	246
第152図	G地区第Ⅳ面平面図1(S=1/80)	215	第181図	G地区第Ⅳ面SB420平面図・土層断面図 (S=1/60)	247
第153図	G地区第Ⅳ面平面図2(S=1/80)	216	第182図	G地区第Ⅳ面SB421平面図・土層断面図 (S=1/60)	248
第154図	G地区第Ⅳ面平面図3・4(S=1/80)	217	第183図	G地区第Ⅳ面SB422平面図・土層断面図 (S=1/60)	249
第155図	G地区第Ⅳ面平面図5・6(S=1/80)	218	第184図	G地区第Ⅳ面SB423平面図・土層断面図 (S=1/60)	250
第156図	G地区第Ⅳ面平面図7(S=1/80)	219	第185図	G地区第Ⅳ面SB424平面図・土層断面図 (S=1/60)	251
第157図	G地区第Ⅳ面平面図8・9(S=1/80)	220	第186図	G地区第Ⅳ面SB425平面図・土層断面図 (S=1/60)	252
第158図	G地区第Ⅳ面平面図10(S=1/80)	221	第187図	G地区第Ⅳ面SB426平面図・断面図 (S=1/60)	253
第159図	G地区第Ⅳ面平面図11(S=1/80)	222	第188図	G地区第Ⅳ面SA402・403平面図・ 土層断面図(S=1/60)	255
第160図	G地区第Ⅳ面平面図12(S=1/80)	223	第189図	G地区第Ⅳ面SA404～406平面図・土層断面図 (S=1/60)	256
第161図	G地区第Ⅳ面平面図13(S=1/80)	224	第190図	G地区第Ⅳ面SA407平面図・土層断面図 (S=1/60)	257
第162図	G地区第Ⅳ面平面図14(S=1/80)	225	第191図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図1(S=1/3)	258
第163図	G地区第Ⅳ面SB401平面図・土層断面図 (S=1/60)	226	第192図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図2(S=1/3)	259
第164図	G地区第Ⅳ面SB402平面図・土層断面図 (S=1/60)	228	第193図	G地区第Ⅳ面SB出土遺物実測図3(S=1/3)	260
第165図	G地区第Ⅳ面SB403平面図・土層断面図 (S=1/60)	230	第194図	G地区第Ⅳ面ピット土層断面図(S=1/60)	261
第166図	G地区第Ⅳ面SB404・405平面図・土層断面図 (S=1/60)	231	第195図	G地区第Ⅳ面SB・ピット出土遺物実測図 (S=1/3)	262
第167図	G地区第Ⅳ面SB406平面図・断面図 (S=1/60)	232	第196図	G地区第Ⅳ面ピット出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)	263
第168図	G地区第Ⅳ面SB407平面図・土層断面図 (S=1/60)	234	第197図	G地区第Ⅳ面SE4001平面図・断面図 (S=1/40)	265
第169図	G地区第Ⅳ面SB408・SA401平面図・ 土層断面図(S=1/60)	235	第198図	G地区第Ⅳ面SE4001出土井戸枿材実測図1 (S=1/12)	266
第170図	G地区第Ⅳ面SB409平面図・土層断面図 (S=1/60)	236	第199図	G地区第Ⅳ面SE4001出土井戸枿材実測図2 (S=1/12)	267
第171図	G地区第Ⅳ面SB410平面図・断面図 (S=1/60)	237			
第172図	G地区第Ⅳ面SB411平面図・土層断面図 (S=1/60)	238			
第173図	G地区第Ⅳ面SB412平面図・断面図 (S=1/60)	239			
第174図	G地区第Ⅳ面SB413平面図・土層断面図 (S=1/60)	240			
第175図	G地区第Ⅳ面SB414平面図・土層断面図 (S=1/60)	241			
第176図	G地区第Ⅳ面SB415平面図・土層断面図 (S=1/60)	242			
第177図	G地区第Ⅳ面SB416平面図・土層断面図 (S=1/60)	243			

第200图	G地区第IV面SE4001出土井戸杵材実測図3 (S = 1/1/6・1/12)	268	第225图	G地区第V面平面図5(S = 1/80)	313
第201图	G地区第IV面SE4001出土遺物実測図 (S = 1/1/3・1/6)	269	第226图	G地区第V面平面図6(S = 1/80)	314
第202图	G地区第IV面SD土層断面図1(S = 1/60)	272	第227图	G地区第V面平面図7(S = 1/80)	315
第203图	G地区第IV面SD土層断面図2(S = 1/60)	273	第228图	G地区第V面平面図8(S = 1/80)	316
第204图	G地区第IV面SD出土遺物実測図(S = 1/3)	274	第229图	G地区第V面平面図9(S = 1/80)	317
第205图	G地区第IV面SX平面図・土層断面図1 (S = 1/30・1/60)	276	第230图	G地区第V面平面図10(S = 1/80)	318
第206图	G地区第IV面SX平面図・土層断面図2 (S = 1/30・1/60)	277	第231图	G地区第V・VI面土層断面図1(S = 1/60)	319
第207图	G地区第IV面SX出土遺物実測図(S = 1/3)	278	第232图	G地区第V・VI面土層断面図2(S = 1/60)	320
第208图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3)	280	第233图	G地区第V・VI面土層断面図3(S = 1/60)	321
第209图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3)	281	第234图	G地区第V面水田区画平面図(S = 1/100)	323
第210图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3)	282	第235图	G地区第V面水田区画断面図1(S = 1/60)	325
第211图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/3)	283	第236图	G地区第V面水田区画断面図2(S = 1/60)	326
第212图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3)	285	第237图	G地区第V面SD土層断面図(S = 1/60)	327
第213图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図6 (S = 1/3)	286	第238图	G地区第V面出土遺物実測図(S = 1/3・1/6)	328
第214图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図7 (S = 1/3)	288	第239图	G地区第V面変遷図(S = 1/600)	330
第215图	G地区第IV面包含層出土遺物実測図8 (S = 1/3)	289	第240图	G地区D・F・G地区水田区画配置図 (S = 1/600)	331
第216图	G地区第IV面包含層等出土遺物実測図9 (S = 1/3)	290	第241图	金沢市梅田B遺跡水田区画全体図 (S = 1/800)	332
第217图	G地区第IV面主要遺構変遷図1(S = 1/500)	295	第242图	G地区第VI-1面全体図(S = 1/250)	334
第218图	G地区第IV面主要遺構変遷図2(S = 1/500)	296	第243图	G地区第VI-1面平面図1(S = 1/80)	335
第219图	G地区第V面全体図(S = 1/300)	307	第244图	G地区第VI-1面平面図2(S = 1/80)	336
第220图	G地区第V面遺構等配置図(S = 1/300)	308	第245图	G地区第VI-1面平面図3(S = 1/80)	337
第221图	G地区第V面平面図1(S = 1/80)	309	第246图	G地区第VI-1面平面図4(S = 1/80)	338
第222图	G地区第V面平面図2(S = 1/80)	310	第247图	G地区第VI-1面平面図5(S = 1/80)	339
第223图	G地区第V面平面図3(S = 1/80)	311	第248图	G地区第VI-1面SK、ビット平面図、 土層断面図(S = 1/40・1/60)	340
第224图	G地区第V面平面図4(S = 1/80)	312	第249图	G地区第VI-1面SD実測図(S = 1/40・1/60)	342
			第250图	G地区第VI-1面SD土層断面図(S = 1/60)	343
			第251图	G地区第VI-1面SD等土層断面図(S = 1/60)	344
			第252图	G地区第VI-1面ビット、SD出土遺物実測図 (S = 1/3)	345
			第253图	G地区第VI-1面SD、SX出土遺物実測図 (S = 1/3)	346

第254図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図1 (S = 1/3)	347	第281図	G地区第VI-2面出土遺物実測図2 (S = 1/3)	381
第255図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図2 (S = 1/3)	348	第282図	G地区第VI-2面出土土器分類図(S = 1/6)	386
第256図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図3 (S = 1/3)	350	第283図	周辺の弥生時代の集落遺跡分布図 (S = 1/60,000)	388
第257図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図4 (S = 1/2・1/3)	351	第284図	周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図1 (S = 1/140,000)	390
第258図	G地区第VI-1面包含層出土遺物実測図5 (S = 1/3)	352	第285図	周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図2 (S = 1/140,000)	391
第259図	G地区第VI-1面主要遺構復元案(S = 1/300)	354	第286図	G地区第VI-3・VI-1面全体図(S = 1/300)	396
第260図	G地区第VI-2面全体図(S = 1/300)	358	第287図	G地区第VI-3・VI-1面平面図1(S = 1/80)	397
第261図	G地区第VI-2面平面図1(S = 1/80)	359	第288図	G地区第VI-3・VI-1面平面図2(S = 1/80)	398
第262図	G地区第VI-2面平面図2(S = 1/80)	360	第289図	G地区第VI-3・VI-1面平面図3(S = 1/80)	399
第263図	G地区第VI-2面平面図3(S = 1/80)	361	第290図	G地区第VI-3・VI-1面平面図4(S = 1/80)	400
第264図	G地区第VI-2面平面図4(S = 1/80)	362	第291図	G地区第VI-3・VI-1面平面図5(S = 1/80)	401
第265図	G地区第VI-2面平面図5(S = 1/80)	363	第292図	G地区第VI-3面土層断面図(S = 1/60)	402
第266図	G地区第VI-2面平面図6(S = 1/80)	364	第293図	G地区第VI-3面出土遺物実測図(S = 1/3)	403
第267図	G地区第VI-2面平面図7(S = 1/80)	365	第294図	G地区第VI-1面SK・SD平面図・土層断面図 (S = 1/60)	405
第268図	G地区第VI-2面平面図8(S = 1/80)	366	第295図	G地区第VI-1面円形建物復元案(S = 1/60)	406
第269図	G地区第VI-2面～VII-2面土層断面図1 (S = 1/60)	367	第296図	G地区第VII-1面土層断面図(S = 1/60)	407
第270図	G地区第VI-2面～VII-2面土層断面図2 (S = 1/60)	368	第297図	G地区第VII-1面出土遺物実測図(S = 1/3)	407
第271図	G地区第VI-2面SI651平面図・土層断面図 (S = 1/60)	369	第298図	G地区第VII-2面全体図(S = 1/300)	410
第272図	G地区第VI-2面SI651・SK平面図・ 土層断面図(S = 1/60)	370	第299図	G地区第VII-2面平面図1(S = 1/80)	411
第273図	G地区第VI-2面SI651出土遺物実測図1 (S = 1/3)	372	第300図	G地区第VII-2面平面図2(S = 1/80)	412
第274図	G地区第VI-2面SI651出土遺物実測図2 (S = 1/3)	373	第301図	G地区第VII-2面平面図3(S = 1/80)	413
第275図	G地区第VI-2面SI651・SK出土遺物実測図 (S = 1/2・1/3)	374	第302図	G地区第VII-2面平面図4(S = 1/80)	414
第276図	G地区第VI-2面ピット、SD土層断面図 (S = 1/60)	376	第303図	G地区第VII-2面平面図5(S = 1/80)	415
第277図	G地区第VI-2面SD、SX土層断面図 (S = 1/60)	377	第304図	G地区第VII-2面平面図・土層断面図 (S = 1/60)	416
第278図	G地区第VI-2面SX6502実測図 (S = 1/30・1/60)	379	第305図	G地区第VII-2面出土遺物実測図(S = 1/3)	417
第279図	G地区第VI-2面建物の可能性をもつ 遺構復元案(S = 1/200)	379	第306図	調査区と周辺の遺跡(S = 1/15,000)	419
第280図	G地区第VI-2面出土遺物実測図1 (S = 1/3)	380	第307図	H地区グリッド配置図(S = 1/200)	420
			第308図	H地区西壁土層柱状図(S = 1/60)	421

第309図	H地区第0-I面平面図(S=1/80).....	422	第329図	G地区調査面模式図(S=1/600).....	458
第310図	H地区第0-I面土層断面図(S=1/60)	423	第330図	C・D・F～H地区変遷図1(S=1/800)	459
第311図	H地区第0-I面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6).....	424	第331図	C・D・F～H地区変遷図2(S=1/800)	461
第312図	H地区第Ⅲ-1面平面図(S=1/80).....	426	第332図	C・D・F～H地区変遷図3(S=1/800)	462
第313図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図1 (S=1/3).....	427	第333図	C・D・F～H地区変遷図4(S=1/800)	465
第314図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図2 (S=1/3).....	429	第334図	C・D・F～H地区変遷図5(S=1/800)	467
第315図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図3 (S=1/3).....	430	第335図	C・D・F～H地区変遷図6(S=1/800)	469
第316図	H地区第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図4 (S=1/3).....	431	第336図	旧邑知馮周辺の古代集落遺跡分布図 (S=1/60,000).....	471
第317図	H地区第Ⅳ面平面図(S=1/80).....	435	第337図	旧邑知馮周辺の古代集落遺跡消長模式図1 (S=1/140,000).....	473
第318図	H地区第Ⅳ面SB平面図・土層断面図1 (S=1/60).....	436	第338図	旧邑知馮周辺の古代集落遺跡消長模式図2 (S=1/140,000).....	476
第319図	H地区第Ⅳ面SB平面図・土層断面図2 (S=1/60).....	437	第339図	杉野屋遺跡群の文字共有等関係図 (S=1/16,000).....	486
第320図	H地区第Ⅳ面SB、ビット平面図・土層断面図 (S=1/60).....	438	第340図	杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡出土 墨書土器実測図(S=1/5).....	487
第321図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図1(S=1/3)	439	第341図	杉野屋専光寺遺跡「院」復元案 (S=1/400・1/1,000).....	487
第322図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図2(S=1/6)	440	第342図	旧邑知馮周辺の荘園、公領分布想定図 (S=1/60,000).....	490
第323図	H地区第Ⅳ面出土遺物実測図3(S=1/3)	442	第343図	杉野屋遺跡群の発掘調査地点位置図 (S=1/16,000).....	491
第324図	出土木製品樹種同定分析木材写真1	449	第344図	古代の旧邑知馮周辺の公的景観模式図	492
第325図	出土木製品樹種同定分析木材写真2	450			
第326図	出土木製品樹種同定分析木材写真3	451			
第327図	出土木製品樹種同定分析木材写真4	452			
第328図	F・G地区第Ⅲ・Ⅳ面出土土器実測図(S=1/5)	456			

表 目 次

第1表	各年度の調査概要一覧表	2	第42表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表1	299
第2表	調査体制	3	第43表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表2	300
第3表	整理体制	3	第44表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表3	301
第4表	遺跡周辺の主な発掘調査	8	第45表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表4	302
第5表	周辺の遺跡一覧表	10	第46表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表5	303
第6表	主な調査面の対応関係	13	第47表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表6	304
第7表	G地区調査面の概要一覧表	19	第48表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表	304
第8表	G地区第0-I面SB・SA規模等一覧表	38	第49表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表	304
第9表	G地区第0-I面SE規模等一覧表	69	第50表	G地区第Ⅳ面出土土器類観察表	305
第10表	G地区第0-I面出土土器類観察表1	101	第51表	G地区第Ⅴ面水田区画規模等一覧表	324
第11表	G地区第0-I面出土土器類観察表2	102	第52表	G地区第Ⅴ面出土土器類観察表	329
第12表	G地区第0-I面出土土器類観察表3	103	第53表	G地区第Ⅴ面出土土器類観察表	329
第13表	G地区第0-I面出土土器類観察表4	103	第54表	G地区第Ⅴ面出土土器類観察表	329
第14表	G地区第0-I面出土土器類観察表1	104	第55表	G地区第Ⅵ-1面SD規模等一覧表	341
第15表	G地区第0-I面出土土器類観察表2	105	第56表	G地区第Ⅵ-1面出土土器類観察表1	355
第16表	G地区第0-I面出土土器類観察表	105	第57表	G地区第Ⅵ-1面出土土器類観察表2	356
第17表	G地区第0-I面下確認調査出土土器類観察表	109	第58表	G地区第Ⅵ-1面出土土器類観察表	356
第18表	G地区第0-I面建物等の変遷案	112	第59表	G地区第Ⅵ-2面出土土器類観察表1	383
第19表	G地区第Ⅲ-1面SB規模等一覧表	132	第60表	G地区第Ⅵ-2面出土土器類観察表2	384
第20表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表1	151	第61表	G地区第Ⅵ-2面出土土器類観察表3	385
第21表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表2	152	第62表	G地区第Ⅵ-2面出土土器類観察表	385
第22表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表3	153	第63表	周辺の弥生時代の集落遺跡消長一覧表	389
第23表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表	153	第64表	G地区第Ⅵ-3面出土土器類観察表	403
第24表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表	153	第65表	G地区第Ⅶ-1面出土土器類観察表	408
第25表	G地区第Ⅲ-1面出土土器類観察表	153	第66表	G地区第Ⅶ-2面出土土器類観察表	417
第26表	G地区第Ⅲ-2面SD規模等一覧表	160	第67表	西柳貝塚等の盛衰対比略表	419
第27表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表1	203	第68表	H地区第0-I面、第Ⅲ-2面出土土器類観察表	432
第28表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表2	204	第69表	H地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表	433
第29表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表3	205	第70表	H地区第0-I面、第Ⅲ-2面出土土器類観察表	433
第30表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表4	206	第71表	H地区第Ⅳ面SB規模等一覧表	439
第31表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表5	207	第72表	H地区第Ⅳ面出土土器類観察表	443
第32表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表6	208	第73表	H地区第Ⅳ面出土土器類観察表	444
第33表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表7	209	第74表	出土土器類樹種同定結果一覧表1(平成28年度実施分)	447
第34表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表8	210	第75表	出土土器類樹種同定結果一覧表2(平成17年度実施分)	453
第35表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表9	211	第76表	G-H地区出土土器類樹種同定結果一覧表	453
第36表	G地区第Ⅲ-2面出土土器類観察表	211			
第37表	G地区第Ⅳ面SB・SA規模等一覧表	227			
第38表	G地区第Ⅳ面SD規模等一覧表	271			
第39表	古代集落の時間的位置付け	291			
第40表	G地区出土土器類等一覧表	293			
第41表	G地区出土土器類等一覧表	294			

第77表	加賀・能登の在地形式の編年と歴年代対比表	455	第84表	四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表2	482
第78表	旧邑知潟周辺の古代集落遺跡の消長表	472	第85表	旧邑知潟周辺の出土墨書土器内容一覧表1	483
第79表	県内他地域との消長比較表	477	第86表	旧邑知潟周辺の出土墨書土器内容一覧表2	484
第80表	北陸道の集落遺跡数の推移表	477	第87表	旧邑知潟周辺の特徴的な遺物出土一覧表	484
第81表	県調査D・F地区、羽咋市1～4次調査 出土墨書土器一覧表	479	第88表	記載順の比較	490
第82表	四柳白山下遺跡出土墨書土器集計表	480			
第83表	四柳白山下遺跡出土墨書土器内容別一覧表1	480			

巻頭図版目次

巻頭図版1	上 遺跡遠景(平成9年度撮影、北から)	下 遺跡全景(平成6年度撮影、南西から)
巻頭図版2	上 G地区第0・I面全景	下 G地区第0・I面全景(北東から)
巻頭図版3	上 G地区第Ⅲ-1面北半完掘状況	下 G地区第Ⅲ-1面水田301～303完掘状況(南西から)
巻頭図版4	上 G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)完掘状況(北西から)	
	下 G地区第Ⅲ-1面河跡3001(新)完掘状況(南西から)	
巻頭図版5	上 G地区第Ⅳ面南半完掘状況	下 G地区第Ⅳ面北半完掘状況
巻頭図版6	上 G地区第Ⅴ面全景(南から)	下 G地区第Ⅴ面水田区画完掘状況(東から)
巻頭図版7	上 G地区第Ⅵ-2面全景	下 G地区第Ⅵ-2面SI651完掘状況(北東から)
巻頭図版8	上 G地区第Ⅵ-3・Ⅵ-1面完掘状況(北東から)	下 G地区第Ⅵ-3面完掘状況(西から)

第1章 調査の経過

第1節 調査の経過

一般国道159号改築(鹿島バイパス)工事は、国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所(旧建設省北陸地方建設局金沢工事事務所)が所管する事業である。一般国道159号線は、七尾市を起点とし羽咋市、津幡町などを経て金沢市に至る延長約70kmの主要幹線道路で、金沢市と中能登地域を結ぶ大動脈の役割を担っている。そのうち鹿島バイパスは、昭和48(1973)年度に七尾市八幡町から羽咋市四柳町(延長約13.3km)の慢性的な交通渋滞の解消を目指して事業化されたものであり、昭和48年度の国土交通省(当時、建設省)から石川県教育委員会(以下、県教委)に埋蔵文化財の所在についての照会に始まり、中能登町(当時、鹿島町)地内の10ヶ所の遺跡で、順次発掘調査が実施されてきた。

このような開発事業に際して周知の埋蔵文化財包蔵地が存在する場合、事業者は文化財保護法第94条の規定にもとづき、その保護措置を執ることが求められる。県教委では、埋蔵文化財の保護と開発事業との調整を図るため、各年度に国・県等の関係機関・部局の協力を得て、次年度以降の開発事業計画の早期把握と、必要に応じて分布調査等により埋蔵文化財の有無を確認することで、工事前段階での埋蔵文化財の正確な把握と、新たな埋蔵文化財包蔵地が確認された場合の保護措置に関する事業者と調整を行っている。これは、工事中の埋蔵文化財の不時発見は十分な保護措置が実施できない恐れがあるばかりでなく、それに協力する側も予算措置等の準備を含めた対応に時間を要すること、さらに工事自体の中断に伴う事業進行への影響を避けるための措置である。

本遺跡は、昭和23(1948)年の耕地整理の際に地元住民の手により古代の須恵器などが採集されていたものの、遺跡としては周知されていなかった。遺跡としての認定は、平成元(1989)年度に羽咋市教育委員会が同市四柳地内で鹿島バイパスに伴う個人住宅などの移転計画に対して埋蔵文化財の確認調査を実施、奈良時代を中心とする遺跡の広がりを確認したことに始まる。鹿島バイパス事業地内については、昭和62年10月26日付け建北金二調第864号で建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長(当時)より石川県立埋蔵文化財センター(当時)に分布調査の依頼があった。それを受けて、平成元(1989)年3月8日～11日に石川県立埋蔵文化財センターが、事業区域内延長約800mに対して重機による分布調査を実施し、羽咋市内で大町A遺跡など4遺跡の存在を確認した。うち四柳白山下遺跡については、延長約350mを測る区間で中世および奈良・平安時代の遺物包含層を2層確認し、仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」として約12,000㎡が保護対象となる旨、平成元年3月24日付け埋文第205号で建設省金沢工事事務所長に回答をおこなっている。なお、この仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」は、隣接する既存の集落遺跡名を仮名称として回答したものである。正式の遺跡名称は、羽咋市教育委員会と協議のうえ、周知の埋蔵文化財「四柳やちだ遺跡(現、県遺跡番号0711200)」「四柳宮の越古銭遺跡(同0711800)」とは異なる、調査区周辺の小字名「白山下」を付した新規の集落遺跡「四柳白山下遺跡(同0711700)」としている。

その後、県教委は、建設省金沢工事事務所と協議を行い、埋蔵文化財への影響を軽減する道路線形の変更が困難であることから、これらの事業地内の埋蔵文化財について記録保存措置(発掘調査)を実施することとなった。

現地での発掘調査は、当初、平成6(1994)年度以降の2ヶ年で終了する計画が策定され、平成6年度から県教委の依頼を受けて社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が発掘調査に着手している。しかしな

から、平成7(1995)年度以降の発掘調査により、石動山系から流出する小河川の度重なる氾濫に伴う土砂で埋没した縄文時代～近世に至る集落・耕作地が良好に遺存することが次第に明らかとなり、結果として平成12(2000)年までの足かけ7ヶ年、発掘調査延面積45,900㎡におよぶ長期の調査となった。各調査年度の調査箇所・面積等は、第1表、第1図を参照されたい。

本書に報告する調査地の出土品については、遺失物法第4条第1項の規定にもとづき、平成9年度は石川県埋蔵文化財センターが、平成10年度は(財)石川県埋蔵文化財センターが、それぞれ羽咋警察署に埋蔵物の発見届を提出し、羽咋警察署から発掘届の通知を受けた県教委により文化財認定が行われている。現在、出土品は石川県埋蔵文化財センターで収蔵・保管のうえ公開・活用を図っている。

なお、平成6～9年度に実施したA～F地区の発掘調査の成果については、平成16・17・29年度に県教委・(公財)石川県埋蔵文化財センターが3冊の発掘調査報告書を刊行している。

第1表 各年度の調査概要一覧表

調査回数	調査年度	調査地区・面	調査面積(㎡)	調査主体	主な時代	掲載報告書
第1次	平成6(1994)	A・B地区、 C・D地区第0-I面	5,800	(社)石川県埋蔵文化財保存協会	奈良～平安前期、中世	白山下I
第2次	平成7(1995)	C地区第II～V面、 D地区第II～IV面、E地区	8,400		弥生～古墳、奈良～中世	白山下II
第3次	平成8(1996)	D地区第V～VII面、 F地区第0-I～V面	6,200		平安、中世	白山下III
第4次	平成9(1997)	F地区第VI～VII面 G地区第0-I面、III-1面	2,400 2,800		縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、中世	白山下IV
第5次	平成10(1998)	G地区第III-2～VI-2面、 H地区	7,900	(財)石川県埋蔵文化財センター	縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、中世～近世	本書 (白山下V)
第6次	平成11(1999)	I地区、 J地区第I～VI-1面	7,400		古墳、奈良～平安、中世～近世	白山下VI
第7次	平成12(2000)	J地区第VI-2～4面、 K地区	5,000		古墳、奈良～平安、中世～近世	

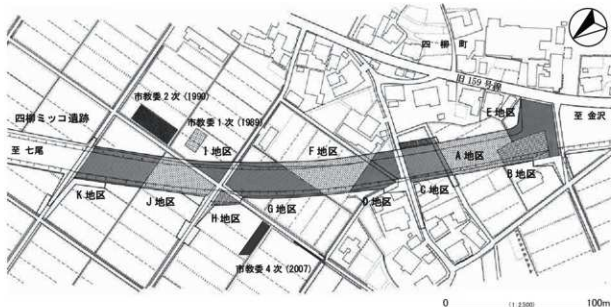
※網掛け、ゴシック文字は、本報告書掲載。

第2節 発掘作業の経過

本書に報告する発掘調査は、県教委の委託事業として、平成9年度に(社)石川県埋蔵文化財保存協会が、平成10年度に(財)石川県埋蔵文化財センターがそれぞれ実施した。各年度の調査体制は第2表のとおりである。

第4次調査G地区第0・I面、第III-1面(平成9年度(1997))

現地調査は、平成9年4月10日～同年12月24日に、F地区第VI～VII面(計2面、各面1,400㎡)、G地区第0・I面、第III-1面(計2面、各面1,400㎡)を対象に実施し、調査面積は5,200㎡を測る。担当は、調査課調査第1係の川畑 誠、白田義彦である。以下、G地区に係る調査日誌抄を記す。なお、F地区の調査日誌抄は『四柳白山下遺跡IV』を参照されたい。また、関係する機関名等は、当時のままとした。



第1図 調査地区割り図(S=1/2,500)

第2表 調査体制

平成9年度(1997) [第4次調査]	
調査期間	平成9年4月10日～同年12月24日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財保存協会 (理事長：濱野賢太郎)
総括	大西外次郎(事務局長)
事務	田嶋明人(次長)
	辻口明広(総務課長)
調査	三浦純夫(調査課長)
	岡本基一(調査第2部長)
担当	川畑 誠(調査第1係主任) 白田義彦(調査第1係主任)

平成10年度(1998) [第5次調査]	
調査期間	平成10年5月12日～同年12月28日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財センター (理事長：西 貞直)
総括	北村義男(専務理事)
事務	前屋好樹(事務局長)
	新屋泰夫(総務課長)
	辻口明広(総務課長)
調査	谷内尾晋司(所長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	中島健一(調査第1課長)
担当	川畑 誠(調査第1課主任主事) 加藤克郎(調査第1課主事)

第3表 整理体制

平成14年度(2002)	
整理期間	平成15年2月4日～同年3月31日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	武田寿夫(専務理事)
事務	松柳 祐(事務局長)
	井田勉久(総務課長)
	藤田吉彦(総務課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	滝尾修平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	澤田まさ子(整理課長)
担当	中島健一(調査第1課長)
作業	松田智恵子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、川畑がり(日々雇用)、 村田実子(日々雇用)、丸山美紀(日々雇用)、松本由美子(日々雇用)、 中尾望穂(日々雇用)、土生久美子(日々雇用)

平成15年度(2003)	
整理期間	平成15年4月1日～同年10月7日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	林 正信(専務理事)
事務	松柳 祐(事務局長)
	井田勉久(総務課長)
	藤田吉彦(総務課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	滝尾修平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	藤田邦雄(整理課長)
担当	中島健一(調査第1課長)
作業	川畑 誠(調査第3課調査専門員) 松田智恵子(主任技術員)、原田裕子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、 大西邦忠(嘱託)、芝山美加代(嘱託)、河崎真帆(嘱託)、 高瀬小百合(日々雇用)、北野美奈(日々雇用)、丸山美紀(日々雇用)、 林かおる(日々雇用)、平田裕子(日々雇用)、宮野眞利(日々雇用)

平成16年度(2004)	
整理期間	平成16年4月1日～17年1月7日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	林 正信(専務理事)
事務	山下淳映(事務局長)
	井田勉久(総務課長)
	藤田吉彦(総務課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	滝尾修平(企画部長)
	小嶋芳孝(調査部長)
	藤田邦雄(整理課長)
担当	中島健一(調査第1課長)
作業	宮川勝次(調査第3課主事) 新谷由子(主任技術員)、馬場正子(主任技術員)、宮本巳恵(嘱託)、 北香織(嘱託)、芝山美加代(嘱託)、朝倉佳子(嘱託)、 村上泰子(日々雇用)、田中裕子(日々雇用)、村田実美(日々雇用)、 北野美奈(日々雇用)、藤瀬悠志(日々雇用)、吉野真子(日々雇用)

平成17年度(2005)	
整理期間	平成17年4月1日～18年3月31日
調査主体	財団法人石川縣歴史文化財センター (理事長：山岸 勇)
総括	藤 日出夫(専務理事)
事務	山下淳映(事務局長)
	佐藤仁芳(総務課長)
	藤谷裕吉(総務課長)
整理	谷内尾晋司(所長)
	中島健一(企画部長)
	滝尾修平(調査部長)
	飯内光次郎(整理課長)
担当	三浦純夫(調査第1課長)
作業	宮川勝次(調査第3課主事) 新谷由子(主任技術員)、北 寿栄(嘱託)、表 裕子(日々雇用)、 村上泰子(日々雇用)、土生久美子(日々雇用)、伊藤純美(日々雇用)

4月10日～5月14日	10日に建設者担当と現地打合せの後、プレハブ設置等の準備作業、重機による排土の移動。
5月15日～9月10日	F地区第Ⅵ面から作業員による包含層掘削、遺構検出、遺構掘り下げ、図面作成等の作業を進める。7月1日に第Ⅵ面、8月29日に第Ⅶ面のラジオコントロールヘリコプター(以下、ラジコン)による空中写真測量を実施する。9月10日までに重機による埋め戻し作業を行い、F地区の調査を完了する。
9月11日～9月18日	9月11日よりG地区第0・I面の調査に着手する。重機による表土除去作業と並行して、調査区周辺の環境整備作業、調査区排水溝掘削作業を実施する。
9月19日～10月2日	人力による包含層掘削、遺構検出作業を進め、遺構密度が高いことから、2日にラジコンによる遺構検出状況写真撮影を行う。
10月3日～11月5日	遺構掘り下げ作業及びE-24～26区の整地土の掘り下げ作業を行う。15日からE-24～26区の遺構検出、掘り下げ作業に着手し、合わせて図面作成、写真撮影作業を行う。
11月6日～11月10日	G地区第0・I面の完掘写真撮影作業を経て、10日にヘリコプターによる空中写真測量を実施。
11月11日～11月21日	第0・I面の石組井戸の実測作業と並行して、重機により第Ⅲ面までの間層除去作業を進める。
11月25日～12月16日	第Ⅲ-1面の遺構検出作業により、耕作に伴う小溝群、河川跡、水田跡を確認する。引き続き、遺構掘り下げ作業と図面作成作業を行う。第0・I面の井戸実測作業は11月28日に完了する。12月15日に第Ⅲ-1面のヘリコプターによる空中写真測量を実施する。
12月17日～12月24日	21日に現地説明会を開催する。図面作成作業と並行して機材撤収準備作業を行う。24日に調査区を引き渡し、現地での作業を終了した。

第5次調査G地区第Ⅲ-2～第Ⅶ-2面(平成10年度(1998))

現地調査は、平成10年5月12日～同年12月28日に、G地区第Ⅲ-2面～Ⅶ-2面(計7面、第Ⅲ-2面・第Ⅵ-1面各800㎡、その他各面1,200㎡)、H地区第0・I面～第Ⅳ面(計3面、各面100㎡)を対象に実施し、調査面積は7,900㎡を測る。担当は、調査部調査第1課の川畑 誠、加藤克郎で、大藤雅夫の協力を得ている。以下、調査日誌抄を記す。

5月7日	7日に建設者担当と現地打合せ後、プレハブ設置等の準備作業、重機による排土の移動。
5月20日～6月12日	機材搬入後、重機によりG地区第Ⅲ-2面の調査に着手する。人力による包含層掘削、遺構検出掘り下げ作業を並行して進める。第Ⅲ-2面は、順次平面図・断面図を作成し、8日に完掘写真を撮影する。6月3日に羽咋市立余喜小学校6年生27名が現場見学を、また6月10日に羽咋市小中学校教諭社会科部会13名が発掘体験を行う。
6月16日～6月29日	G地区河跡の掘削に時間を要する。29日にラジコンによる第1回空中写真測量作業を行う。
6月30日～7月23日	G地区第Ⅳ面の遺構検出掘り下げ作業と図面作成作業を進める。7日に県教委文化財課と現地打合せ、15日に余喜地区老人会15名が現場見学。17日にラジコンによる第2回空中写真測量作業を実施。齋申、鍬柄等が出土したSE4001の図面作成を行う。
7月24日～8月12日	G地区第Ⅳ面SE4001 備板の取り上げ作業と、人力による第Ⅴ面覆土(洪水砂か)の掘削作業に着手する。水田区画を慎重に掘り下げ、12日にラジコンによる第3回空中写真測量作業を行う。
8月18日～9月7日	G地区第Ⅵ-1面の包含層掘削・遺構検出作業に着手する。29日に親と子の発掘体験教室を開催し、18組40名の参加者を得る。4日までに遺構の掘り下げ作業を完了し、7日にラジコンによる第3回空中写真測量作業を行う。

- 9月8日～10月5日 G地区第VI-1面の図面作成作業と並行して、第VI-2面の調査に着手する。調査面が深くなり、台風シーズンでもあり調査区壁の保全、排水溝の維持を慎重に行う。包含層掘削・遺構検出を経て、10月5日から遺構掘り下げ、図面作成作業を進める。また、同日にH地区第0・1面の重機による表土除去作業を実施する。
- 10月6日～10月20日 9日までにG地区第VI-2面、14日までにH地区第0・1面の遺構掘り下げ作業を完了。接近する台風の対策に追われながら、20日にラジコンによる第4回空中写真測量作業を行う。
- 10月21日～11月12日 21・22日にG地区のVI-3面・H地区第0・1面下の遺構面について、人力による状況確認調査を行い、G地区第VI-3面(河川跡)・VII-1面、H地区第III-1面の包含層等掘削作業に着手する。28日までにH地区第III-1面の覆土掘り下げ作業を完了し、職員・調査補助員等による平面図等作成作業を経て、引き続き第III-2面調査を進める。G地区は第VI-3面、第VII-1面の遺構検出・掘り下げ作業、職員・調査補助員による平面図等作成作業を順次行う。11月12日にG地区第VII-1面下について人力による状況確認調査を行い、第VII-2面の存在を確認する。
- 11月13日～12月9日 13日にG地区第VII-2面まで重機による開層除去作業を実施する。14日からH地区第IV面、G地区第VII-2面の包含層掘削・遺構検出作業を進める。11月17日に建設省(当時)担当、県教委と現地打合せを行い、調査状況等について説明を行う。初冬の悪天候に悩まされながら、11月24日から遺構掘り下げ作業を行った。12月9日にG地区第VII-2面、H地区第IV面のラジコンによる第5回空中写真測量作業を行う。併せて、出土した木製品のバック作業を進める。
- 12月10日～12月28日 10日にG地区第VII-3面下の生活面の有無について人力によるトレンチ調査を行い、生活面がないことを確認する。G地区は調査区東壁5ヶ所で土層柱状図作成を行う。H地区は、調査区が狭小であるため、県教委と協議のうえ、第V面以下はトレンチ2ヶ所での土層確認調査にとどめる。調査は約2m掘り下げ、G地区第V面に相当する土層までを確認した。引き続き、図面作成作業を進める。14～24日までにH・G地区の重機による埋戻し作業、機材撤収準備作業を行う。28日に調査区を引き渡し、現地での作業を終了する。

第3節 整理等作業の経過

出土品の整理作業は、平成14(2002)～17(2005)年度、同25(2013)、28(2016)年度に(公財)石川県埋蔵文化財センター(平成24年度以前は(財)石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会の委託事業として実施した。各年度の調査体制は第3表のとおりである。

整理の内容については、平成14年度が第4次調査出土遺物の記名・分類・接合、平成15年度が第4次調査出土金属・木・石製遺物の実測・トレース、土器の復元、遺構内のトレース、平成16年度が第4次調査出土土器及び金属・木・石製遺物の実測・トレース、第5次調査出土遺物の記名・分類・接合、土器の復元、土器の実測・トレース、平成17年度が第4・5次調査出土土器及び金属・木・石製遺物の実測・トレースを、それぞれ実施した。また、出土木製品の樹種同定を平成17年度に(株)パレオラボに、平成28年度に(株)古環境研究所に委託してそれぞれ実施した。平成28～30年度に報告書作成作業を行い、平成30年度に本書を編集・刊行した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

四柳白山下遺跡は、石川県羽咋市四柳町地内に所在する。石川県は、東を富山県、南東を岐阜県、南西を福井県にそれぞれ接し、北および北西は日本海に面する。県土は、平安時代前期までに成立した加賀国・能登国の領域をほぼ踏襲した加賀・能登の2地域に分かれ、うち能登地域は日本海に大きく突出した能登半島が大部分を占め、古くから日本海交流の重要な結節点の一つとなる。羽咋市は、この能登半島の基部西側に位置し、東西約10km、南北約12km、面積約82miを測る。人口は約22万人を数え、産業として農業、繊維産業の他、観光業、鉄鋼・金属業、電子部品産業等が盛んである。遺跡の所在する四柳町は市域北東端に位置し、北側で同市大町および鹿島郡中能登町小金森に接する。

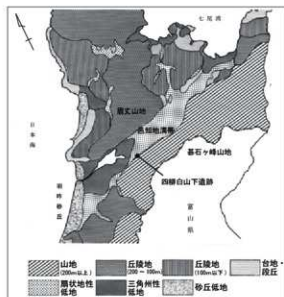
遺跡周辺の地形は、第3図のとおり、東側から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯、眉丈山地(標高50～120m)、羽咋砂丘(幅約1km)が北東—南西方向に連なり、西側で日本海に接する。本遺跡周辺の地形断面をみれば、東側の碁石ヶ峰山地から西側の旧邑知潟に向けて次第に標高を減じ、土地利用は山林、雑木林・畑地、旧内浦街道に沿い発達した街村をなす集落域・畑地、そして水田へと移行する。東側で富山県に接する碁石ヶ峰山地は、石動山地の一角をなし、市域内では標高400m前後(最高点の標高461m)を測る丘陵性低山に分類される。その山腹は急傾斜で、山地を形づくる土質が花崗岩、片麻岩等の粗い粒子の礫岩層(高嵩礫岩層)であることから、県内でも有数の地滑り多発地帯となっており、本遺跡をはじめとして山地前縁に形成された集落・耕作地の盛衰に大きな影響を及ぼしている。邑知地溝帯は、並走する2条の断層帯により切断された土地が沈降してできたとされる低地帯であり、羽咋市—七尾市間を幅約2～4km、延長約30kmにわたり直線的にのびる。能登地域で最大の帯状平野であり、現在では豊かな穀倉地帯を形成している。本遺跡が属する地溝帯南東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流下する二ノ宮川、長曾川、久江川、酒井川、水光寺川等の中小河川が運んだ土砂が堆積した小規模で急峻な合成扇状地が碁石ヶ峰山地山裾に連なり、本遺跡も四柳大谷川水系が形成した扇径約600mを測る小扇状地上のほぼ全域に北東—南西方向約500mの規模で立地する。一方、地溝帯南西部には吉崎川、子浦川等の合成扇状地と、邑知潟に起因する三角州性低地が発達している。邑知潟は、縄文時代前期のいわゆる縄文海進で入り江状に入り込んだ海が、海岸砂丘(羽咋砂丘)の発達により外海から隔絶してできた海跡湖である。かつては周囲約14.5km、水面面積約4.65km²、最深部約1.4mを測ったが、近世末以降の新田開発に加え、昭和23年(1948)～43年(1968)に実施された国営干拓事業により、放水路部分を除いて水田として利用されている。

このような地理的環境にある邑知地溝帯に立地する集落遺跡には、いくつかの共通する特徴がみいだせる。まず、集落遺跡は、碁石ヶ峰山地・眉丈山地の前縁に張り出した微高地と、それより続く合成小扇状地という極めて狭い集落適地に、等高線に沿って帯状に点在する。すなわち、山沿いの各小扇状地上に立地する現在の集落域とほぼ重複する位置に、複数の時代の集落遺跡が継起的に営まれる。



第2図 遺跡の位置

この特徴は、本遺跡や発掘調査が行われた四柳ミッコ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡等で確認でき、おそらく地溝帯の各小扇状地・微高地を一つの単位集団とした継続的な集落形成のあり方が復元可能である。例えば、邑知湯東縁でみれば、現在の中能登町高畠、羽咋市四柳町、同市酒井町、同市本江町の旧集落が立地する各扇状地上で地点を変えながら、各時代の集落域が営まれたと考えられる。これら各時代の集落を支える基盤として、邑知湯が内水面漁業の場を、邑知湯より続く三角州性低地や扇状地が良好な耕作地を、さらに集落域背後の山地が林業資源を提供したと考えられる。二つ目の特徴に、崩壊しやすい山地と山裾に分布する集落域が近接するため、山地からの土砂の流入・堆積、特に断続的に発生した大小さまざまな土石流災害が、集落の



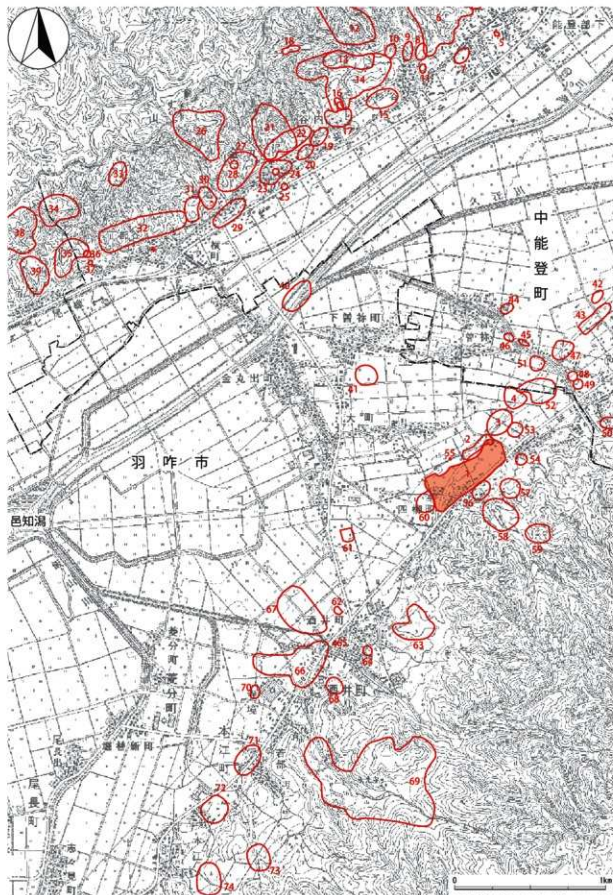
第3図 周辺の地勢(【土地分類17(石川県)】より作成)

の営み及び耕作地の盛衰に大きく影響していることがある。本遺跡の7次にわたる発掘調査では、第4表のとおり、各時代の生活面の間に短期間で流入・堆積した無遺物土層や河川・溝跡を検出している。第4・5次調査G地区では、縄文時代中・後期の生活面から現在の生活面まで厚さは約4mに達する。さらに、集落を支える基盤として、古来より能登地域の中核地域である羽咋と七尾(鹿島)を最短距離で結ぶ陸上交通路や、邑知湯と中小河川を利用した水上交通路も重要な位置を占めている。本遺跡の場合、邑知湯を眼前に控えた水陸交通の結節点として物資・情報の集積も、その一因と考えられる。

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する邑知地溝帯は、県内でも有数の遺跡稠密地帯である(第4図、第4・5表)。ただし、第1節で述べたとおり、各時代の集落域は現集落域と重複し、かつ地中深く埋まっている場合が多く、採集された資料は断片的であり、実態の解明は必ずしも進んでいない。その中で、本遺跡(第4図、第5表No1(以下、同じ))は小扇状地のはほぼ全域に北東—南西方向約500mという規模をもち、かつ北側に隣接する四柳ミッコ遺跡(2)と併せて縄文時代中期～近世までの集落域・耕作域が良好に残ることから、地溝帯における人々の営みの一典型を復元しうる重要な資料を提供している。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、碓石ヶ峰・眉丈山両山地から続く微高地緩斜面上に点在する。前期では杉谷チャノバタケ遺跡(13、前期初頭)、中能登町高畠カンジダ遺跡(前期前葉)や眉丈山南縁の台地周辺等で断片的に資料が確認されている。中期に入ると、碓石ヶ峰山地側で四柳貝塚(56)、四柳中の堂遺跡(58)、本書で報告する本遺跡D・F地区、中能登町藤井A遺跡、小田中寺屋敷遺跡が、また邑知湯を挟んだ眉丈山山地側で同町徳丸遺跡、中大門川遺跡等が確認できる。このうち四柳貝塚、四柳中の堂遺跡、本遺跡D・F地区は、微妙な時期差を示しながら同一微高地上に近接しており、比較的小規模な集落が少しずつ居住域を変えながら営まれたものと考えられる。四柳貝塚は、本遺跡の北側約100mにある舌状台地(標高25～30m)に鎮座する四柳神社境内に立地し、県立羽咋高等学校地歴部の調査により東西約100m、南北約50mの範囲に、最大厚約20cmを測るシジミ層をもつ淡水貝塚であることが判明している。隣接する四柳中の堂遺跡では土器片、磨製石斧、石鏃等が表面採集されており、



第4図 周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

第5表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名称	所在地	種別	時代	備考
1	711700	四郎山山下遺跡	羽州市四郎町	集落・生産遺跡	縄文～古史	1989～90・92・2007年度発掘調査。1994～97年度発掘(埋没)・1998～2000年度発掘(財埋)調査
2	711900	羽生ニッポ遺跡	羽州市羽生町	集落	弥生～古代	1997年度発掘(埋没)・98・99・2001年度発掘(財埋)調査
3	712100	大町ダイシヤウ遺跡	羽州市大町	集落	中～近世	1999・2000年度発掘(財埋)調査。自治体・民間(鳥居)をもち中世集落跡
4	712400	大町エンジヤガリ遺跡	羽州市大町	散布地 集落	古墳・古代	2000年度発掘(財埋)発掘調査
5	1723400	能登郡下仲町遺跡	中能登町能登郡下	生産遺跡	弥生～古代	1997年度発掘(埋没)発掘調査
6	1725200	能登郡能登1～3号墳	中能登町能登郡下	古墳	古墳	円墳2基(径19～27m)
7	1725100	能登郡能登2号墳	中能登町能登郡下	散布地	古墳	手取
8	1725200	能登郡能登2号墳	中能登町能登郡下	散布地	古墳	不詳
9	1724500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳2基
10	1724500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生	杉谷より土器復原
11	1724900	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古墳	不詳
12	1724700	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	前方後方墳1基、円墳8基
13	1724400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	縄文～古史	1956～68年度発掘(埋没)調査。弥生時代の環濠集落を含む。芋・芋状炭化米出土
14	1724000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	1984～88年度発掘(埋没)調査。前方後円墳1基(杉谷ガメ塚古墳。全長60m・直径17m)。円墳1基。方墳2基
15	1724300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生～中世	1989年度発掘(埋没)調査
16	1731800	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落・ その他の基	縄文～中世	2001年度発掘調査。平安時代。中世の墓地を含む
17	1724200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	縄文～古史	1983～89年度発掘(埋没)調査
18	1731900	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・その他の基	弥生	2000年度発掘調査。弥生土器。煮刀出土
19	1724100	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古代	不詳
20	1724000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古代	不詳
21	1722400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	城跡	中世	鎌倉時代
22	1722300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基
23	1722300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	城跡	中世	不詳
24	1722700	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	社寺	中世	不詳
25	1731300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	古代	1988年度発掘調査
26	1722500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基
27	1723200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	社寺	中世	鎌倉時代
28	1722600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基。方墳1基
29	1723200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落	弥生～中世	1960年度石巻。1983年度発掘調査。99・99年度調査。2000年度発掘(財埋)発掘調査
30	1723100	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基・横穴式石室1号墳は新石器遺跡
31	1723000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	中世	土師器出土
32	1722900	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基
33	1722800	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基
34	710600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳
35	710501～4	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	1号墳は前方後円墳(全長26m)。他は円墳
36	1722700	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古代	しみの混入層
37	1722600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	地下式横穴
38	710701～4	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳
39	710601～3	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳1基・方墳1基
40	715400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生～古墳	白鳥塚跡地で見
41	713500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	古代	1991年度発掘(埋没)調査。「大町」遺跡と土器出土
42	1729500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落	弥生～古代	1961年度発掘(埋没)調査
43	1711400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落	弥生～中世	1990・91年度(埋没)・94年度発掘(埋没)調査
44	1729600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	弥生～古墳	1994年度発掘(埋没)調査
45	1710400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生	曹糠弥生土器出土
46	1710300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生	曹糠遺跡(A)を改称
47	1710500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落・ その他の基	縄文～中世	1992年度発掘(埋没)・96年度(埋没)調査。中世の精石墓1基あり
48	1710200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	中世	跡地整理で出土
49	1710300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古墳	曹糠遺跡(B)を改称
50	1710801～3	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳。互角文様埋没。互角。嵌石。遺跡出土
51	1710100	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古墳・中世	1992年度発掘(埋没)調査
52	1710200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・その他の基	縄文・弥生	1992年度発掘(埋没)調査。縄文時代の環濠集落1基確認
53	712200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	不詳	1978年。跡地整理時：長瀬倉庫集落(詳細地点不明)
54	712000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	横穴古墳	古墳	2基以上
55	711800	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	中世	津洲橋の大町に入った36貫の運米跡出土
56	711300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	貝塚	縄文～古代	1971～72年度引揚発掘が調査
57	711600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	横穴古墳	古墳	7基
58	711400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	縄文 古墳	1958年発見
59	711500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	その他の基	中世	板屋。五輪屋。西瓦等
60	711200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古墳	1958年跡地整理時：西瓦等を復原
61	714600	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	弥生・中世	2013年度発掘調査
62	714800	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	弥生	不詳
63	711100	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	2基以上
64	711000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	その他の基	中世	五輪屋。板屋
65	710900	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	古墳	古墳	円墳。横穴式石室
66	714700	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	縄文・古墳～中世	2013年度発掘。15年度(公開)調査。遺跡跡地調査(田圃No.703700)を統合
67	713700	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地・集落	古代・中世	不詳
68	703000	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古墳	工場遺構(坪)に環濠等を含む
69	703500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	社寺	中世	1987・94～96年度(埋没)調査。寺域は長瀬倉庫跡
70	714500	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	集落	中世	不詳
71	703400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	古代・中世	1957年の跡地整理で環濠跡等復原
72	703300	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	縄文・弥生・古墳	本江田遺跡を改称
73	714400	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	その他の基	中世	五輪屋。板屋
74	703200	能登郡能登丸形谷	中能登町能登丸形	散布地	縄文・古墳	本江田遺跡を改称

もつ広域支配者層の奥津城と位置付けられている。この政治的中心域の動向を反映する主要古墳群の築造は、5世紀後半以降に邑知地溝帯両端の羽咋・七尾の臨海地域に分離・移行し、6世紀以降は羽咋の勢力が優位性を保持したと考えられている。この2大勢力は、国造本紀にある「能等国造」能登臣、「羽咋国造」羽咋公に繋がり、さらには律令期の郡司層に引き継がれる。

さて、本遺跡周辺での古墳の築造は、古墳が立地しうる山麓裾部の土砂崩落に伴う確認しづらさを考慮しても、総じて低調である。現在、曾祢1～3号墳(50)、高島経塚古墳(円墳・径10m)、酒井古墳(65)、酒井東古墳群(63)、大町横穴群(54)、四柳横穴群(57)等の後期に属する古墳が点在する程度である。このうち、7世紀前葉の円墳である曾祢1号墳からは金銅製双竜式環頭大刀、耳環等が、7世紀前後に築造された高島経塚古墳からは金銅製主頭大刀、銅鏡等が出土している。

集落遺跡については、本遺跡が中心域を変えながら継起的に営まれる他、前期では高島カタスギモト遺跡(43)、大町ゴンジョリ遺跡(4)、中期では前述2遺跡や四柳ミッコ遺跡、金丸宮地遺跡(29)、後期では大町ゴンジョリ遺跡、7世紀前半の曾祢C遺跡、高島遺跡等が知られている。発掘調査が実施された高島カタスギモト遺跡、大町ゴンジョリ遺跡では竪穴建物群を、四柳ミッコ遺跡では初期須恵器を伴い小鍛冶や祭祀行為を行った10棟の竪穴建物群をそれぞれ検出している。また、曾祢C遺跡では、計画的に配された掘立柱建物群を検出し、曾祢古墳群と深い関連をもつ比較的上位階層の居住域と位置付けられている。さらに、鹿島バイパス工事に伴う一連の発掘調査では、本遺跡F・G地区等で洪水土砂に被覆された水田、大町ゴンジョリ遺跡(後期)で堅果類の水さらし場や祭祀痕跡を検出する等、集落域縁辺での生活の一端も次第に明らかになりつつある。

奈良・平安時代 本遺跡が属する能登国は、養老2年(718)に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡を割いて立国するが、国司の任命がないまま天平13年(741)に越中国に併合、さらに天平勝宝9年(757)に前述の4郡8郷を能登国として再立国させる経緯をたどる。また、古代北陸道から分岐して能登国府(現在の七尾市古府町・国分町周辺)に向かう支道ルートは、10世紀初頭に成立した「和名抄」等に加賀郡横山駅、能登国撰才駅、同越蘇駅(現在の七尾市江曾町周辺)とあることから、邑知地溝帯東側を走ると考えられている。

与木郷、撰才駅については、延喜式内社「余喜比古神社」の同名社が大町に鎮座すること等から、本遺跡～大町周辺に比定する説がある。一方、余喜比古神社が他地から移転していること、古代能登郡与木(与支、与岐)郷を継承したと考えられる与木院(承久3年「能登国四郡公田田数目録案」等記載)が七尾市田鶴浜北部に比定すること、また撰才駅を駅家間距離の検討から羽咋市飯山町周辺とする説も有力であり、本遺跡の位置付けを検討するうえで「与木郷」、「撰才駅」という事象は慎重に扱うことが妥当であろう。いずれにしても、本遺跡に代表される邑知潟東縁に連なる各小扇状地における集落活動の活性化は、県内他地域と同様に古代交通路の整備に象徴される律令制の浸透・定着と軌を一にしたものといえる。

本遺跡は、奈良時代初頭～平安時代前期にかけて、その活動域をもっとも広げる。四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョリ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等の邑知潟東縁(標高20～25m)の各微高地に立地する遺跡も同じ様相を示す。本遺跡は、第4表のとおり調査地区ごとに若干の様相差をみせつつ、四柳ミッコ遺跡よりやや遅れて成立し、奈良時代後半に集落域としてピークを迎える。その規模は北東～南西方向で約300mという広範な範囲であり、その規模や出土遺物の内容等から、四柳ミッコ遺跡と一体となって周辺地域の中核的地位を占めた集落域と考えられる。さらに、四柳貝塚で奈良～平安時代前期の須恵器が採取されており、古代前半の集落域は、扇状地扇頂方向に向けても、かなりの広がりをもつと推定できる。

また、本遺跡の一連の調査では、「寺」墨書、銅鏡片、多種の施設名墨書、木沓、帯金具、木製食膳具の出土や、護岸をもつ河川跡(G地区)、水田遺構の検出(E地区等)等、中核的な集落や耕作地に関する注目すべき新しい知見も多く得ている。これらの集落域は、県内他地域と同様に9世紀中頃以降は再編・縮小

方向に向かい、10世紀中頃までに本遺跡F地区及び羽咋市教委第4次調査区周辺に集約されたと考えられる。F地区では、第4・5次調査で一定量の施釉陶器が出土している。また、邑知湯縁の低地に立地する大町C遺跡(41)からは「大町」前宅」墨書土器が出土している。「大町」墨書は本遺跡からも数点が出土しており、その関係が注目される。集落域の再編・集約後は、主に耕作地として利用されたようだ。この律令制に基盤を置いた集落形態の変容は、平安時代前期に顕在化する郡郷の解体および国衙による院、保といった単位への再編成過程と考えられる。

鎌倉・室町時代 鎌倉時代初期の能登国守護には北条一門の名越氏が任じられる。また鎌倉時代後期の正和元年(1312)に登山羅蓮により曹洞宗永光寺が本遺跡南方約2.5kmの山中に創建される。平安時代後期の国衙領を継承したとされる承久3年(1221)の能登国田数注文には「四柳保」の名がみえる。四柳保は、承久元年の立券であり、もとは5町5段であったが同3年には2町1段に減少する。また、文明5年(1473)の北野社領諸国所々目録に「四柳庄」の記載や、文明8年(1476)に能登国石動山(天平寺)に來遊した京都聖護院門跡道興が「柳のあまた侍りければ立りて、里人の鞠の庭にはしめねともいともなつかしよ柳かな」と詠じている。

鎌倉時代後期～室町時代前期は、邑知地溝帯縁辺の本江・四柳・吉崎等の村々に鎮座する産土神勧請伝承が集中する時期であることから、開発の一つのピークと考えられており、本遺跡C地区や四柳ミッコ遺跡、大町ダイジングウ遺跡(3)、大町ゴンジョリ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡等でも新たな集落・耕作地の形成が始まる。このうち、大町ダイジングウ遺跡では、16世紀代に築かれた「ひょうたん」形の池跡や計画的に配された2つの掘立柱建物群の検出、多数の金属製品と鋳造道具の出土等から、本遺跡等の一般的な農村的集落と異なり、調査区に隣接する余喜比古神社関連施設と考えられている。また、本遺跡、四柳ミッコ遺跡で14-15世紀頃の整然と区画された良好な水田遺構を検出した他、板碑・五輪塔よりなる四柳中世墓群(59)や、宋・明銭36貫を入れた珠洲焼甕の単独出土である四柳宮の腰古銭遺跡(55)等も注目される。

近世 集落域は、街村形態を示す現在の集落とはほぼ重複すると考えられるが、その一部を本遺跡や大町ダイジングウ遺跡等で確認した他、四柳ミッコ遺跡で耕作域を検出している。以下では、主に文献に記載された交通路と産業を記し、周辺地域の様相を考える一助としたい。陸路としては、能登街道がある。能登街道は、河北郡津幡宿で北陸道から分岐し、さらに羽咋郡今濱宿で子浦村・飯山村・酒井村・高島村等の邑知地溝帯東側の村々を経て所口(七尾)に向かう内浦街道と、海岸沿いに能登半島西側を北上する外浦街道に分かれる。また内浦街道は、酒井村で田鶴浜往来に分岐し、四柳村は内浦街道に、大町村は田鶴浜往来に面する村であった。また、水路については、周辺の年貢米を大町村、金丸村に集め、邑知湯・羽咋川を経て鹿濱、さらに金沢市犀川河口の宮腰に海運される。周辺の産業として稲作の他、山地での山菜・タケノコ採取、四柳村・大町村等15村の入会であった邑知湯での鯉・鮒・小エビ等、肥料に用いる湯藻採取が記録に残る。

(引用・参考文献)

- 羽咋市史編さん委員会1973「羽咋市史 原始・古代編」羽咋市役所
 (財)石川県埋蔵文化財センター1999～2002「石川県埋蔵文化財センター情報」第2～7号
 川畑 誠・中島 俊一1994「大町C遺跡 小金森ヘイナイメA・B遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
 岡本恭一・久田正弘1995「曾祇C遺跡発掘調査報告書」(社)石川県埋蔵文化財保存協会
 布尾和史・澤辺利明他2005「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 澤辺利明他2006「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 今井淳一1990「四柳白山下遺跡Ⅰ」羽咋市教育委員会
 今井淳一他1991「四柳白山下遺跡Ⅱ」羽咋市教育委員会
 今井淳一・牧山直樹1994「四柳白山下遺跡Ⅲ」羽咋市教育委員会
 牧山直樹・宮下栄仁2008「四柳白山下遺跡Ⅳ」羽咋市教育委員会
 中野知幸・牧山直樹2015「酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡」羽咋市教育委員会
 株 大智他2015「羽咋市 四柳ミッコ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
 川畑 誠2017「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅲ」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
 白田義彦他2018「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅳ」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

調査区区割り・調査面 発掘調査対象地は、工事により遺跡が損壊を受ける幅約25m、延長約370mにわたる区間に設定され、北側で四柳ミッコ遺跡に接する。平成6年度(1994)の第1次調査時点で、複数年次にわたる調査が計画されたことや、調査区が道路や農道、農業用水路で分断されること等から、調査グリッドと調査地区を併用した区割りとし、この区割りは第1次～第7次調査まで統一している。

まず、調査グリッドは、平成6年度(第1次調査)着手段階に、バイパス路線が直線を保つ部分における道路中心線の延長線を基準ラインに設定した(第5図)。その延長線上にある建設省(当時)が設定した道路中心点(第5図IR12)を起点に、道路中心延長線と直交するラインを配し、調査予定地全体に対して平面直角座標第Ⅶ系を用いながら、10m方眼を単位とする正方形のグリッドを設定した。そしてグリッドを画する基準杭(交点)に、北西方向から南東方向に向けてA～Qまでのアルファベット番号を、また南西方向から北東方向に向けてアラビア数字1～41を付し、その交点は例えば「E-23」基準杭のように両者を組み合わせた呼称をした。結果として、基準ライン(調査区長軸方向)はN41°Eを示し、起点としたIR12地点はE-25基準杭に、その南西方向の延長線上にE-1基準杭を、E-1基準杭の北西方向の延長線上にA-1基準杭をそれぞれ設定したことになる。また、調査区を分割する10mグリッド区の呼称については、その南西方向にある基準杭(交点)名と定めた。さらに、第1次調査開始後、遺物出土量が多いことが判明したため、各グリッド区を5×5mの小区画で四等分し、南西よりアラビア数字1～4の枝番号を加えた。例えば、E-23基準杭、E-23区およびE-23-1～4区的位置関係は、第5図右上のとおりである。主要なグリッド杭の国家座標上の位置は、平面直角座標Ⅶ系でE地区M-3杭：X座標102,814,821・Y座標-27,471,787、B地区K-10杭：X座標102,880,467・Y座標-27,440,312、F地区H-20杭：X座標102,975,194・Y座標-27,396,418、G地区F-23杭：X座標103,010,910・Y座標-27,394,473、J地区D-30杭：X座標103,076,544・Y座標-27,360,003、K地区D-39杭：X座標103,143,895・Y座標-27,300,294となる。

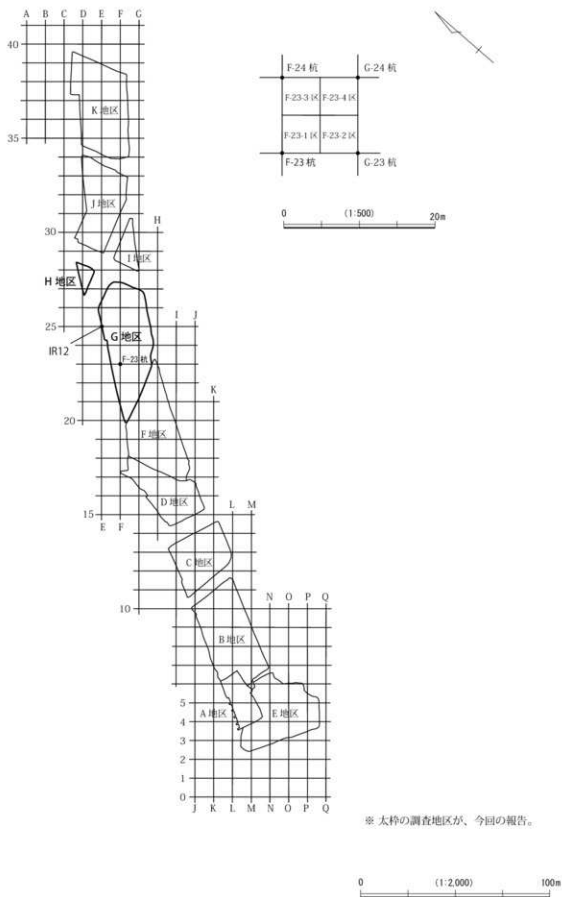
次に調査地区は、調査時も機能を維持する必要があった既存の道路や農道、農業用排水路により区切られる範囲を単位に設定した。第1次調査着手時に南側より順にA～D地区と呼称し、第2次調査以降も北側に向けてF～K地区を順次設定している。また、第1次調査の成果から、A地区南側にも本遺跡が延びることが判明し、A・B地区南側に隣接してE地区を設定している。なお、現地調査時点で供用が続く道路や農道、農業用排水路は、迂回が可能であった一部の農業用排水路を除いて、県教委文化財課と協議のうえ、発掘調査の対象から除外している。

また、第2次調査着手以降、本遺跡の特徴の一つでもある土石流を想起させる大量の土砂に度々埋没しながら、縄文時代中期～近世初頭にいたる集落・耕作地等の生活面が垂直方向に累積する様相が、次第に明らかとなった。そのため、新しい時代(上層)から順次、ローマ数字で第0、I、II～VII面といった調査面(生活面)を順次設定している。さらに各調査面(生活面)で複数の小生活面が検出できた場合は、第

第6表 主な調査面の対応関係

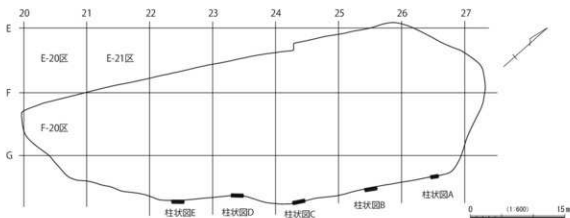
C地区以降調査面	第1次A・B地区	推定する主な存続時期
第0面		近世以降
第I面		中世後半
第II面	上層	14世紀中頃
第III面		平安中期～中世前半
第IV面	中・下層	古墳後期～平安前期
第V面		弥生後期～古墳前期
第VI面		弥生中期
第VII面		縄文中期～晩期

第1節 調査の方法



※ 太枠の調査地区が、今回の報告。

第5図 調査地区グリッド配置図(S=1/500 · 2,000)



第6図 G地区 グリッド配置・土層柱状図位置図(S=1/600)

Ⅲ-1面、Ⅲ-2面のとおり枝番を付して調査を実施した。各調査面(生活面)の主な存続時期と、第1次調査A・B地区で呼称した上・中・下層との対応関係は第6表のとおりである。

結果として、各調査面における遺構の記録及び出土遺物の取上げについては、例えば「E地区第Ⅲ面E-23-3区83溝(SD83)」、「G地区第Ⅴ面E-23-3区包含層」とおり、調査地区・調査面(生活面)・調査グリッド区・遺構番号を組み合わせた呼称を基本としている。なお、調査面(生活面)のうち、第0面と第Ⅰ面は、同一生活面で連続して営まれ、峻別が難しく第0・Ⅰ面として調査する場合が多かった。

調査の方法 表土及び各調査面間に流入・堆積している無遺物層、出土遺物が比較的少ない遺物包含層の一部については、作業の効率化を測るため重機を用いて除去作業を実施した。その後、人力により遺物包含層の掘削作業と、遺構検出面の精査および遺構面の精査・遺構検出作業を行った。遺構番号は、各調査地区で現地調査時に推定した遺構の性格を反映した略記号SE(井戸)、SK(土坑)、SD(溝)、P(ピット)などを、主に遺物が出土した遺構を対象として、検出順に1番から連続する通し番号を付与している。この遺構番号は、各遺構の固有番号として、出土遺物の取り上げ、土層等の記録、遺物整理作業、出土遺物の管理に使用している。また、G地区以北(第4次調査以降)においては、引き続き遺構密度が高いことが予想されたため、各調査面が分かるよう4桁の遺構番号に変更した。具体的には、第0・Ⅰ面ではSE1001、SE1002…、P1001、P1002…、第Ⅲ-1面ではSD3001、SD3002…、第Ⅲ-2面では500番台から始めておりSD3501、SD3502…となる。

検出した各遺構は、調査地区・調査面ごとに遺構概略図(縮尺1/100)を作成し、位置や遺構番号、遺構覆土などに関する所見を記録しながら、その主軸を基準に半載または土層観察用の畝を残して調査作業員による人力での掘り下げ作業を行った。その後、各遺構について土層を観察のうえ、必要に応じて断面・立面図の作成と写真撮影(主に35mmカラーネガ、カラーリバーサル、白黒の各フィルム)で記録作業を実施した。遺構図面は縮尺1/20を基本とし、遺物の出土状況等の微細な表現が必要な場合は縮尺1/10の図化作業を行った。また、各調査面の遺構完掘後、遺構平面図(縮尺1/20)を効率的に作成するため、ヘリコプターまたはラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量図化作業を委託にて実施している。

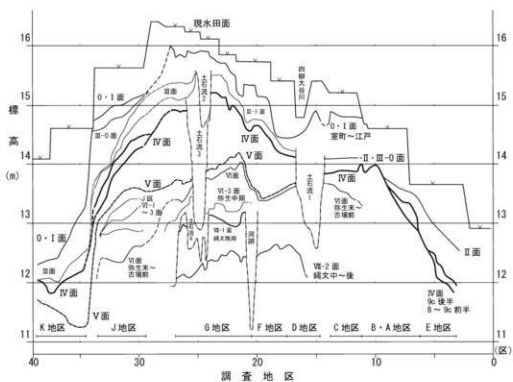
報告書作成に際して、調査時及び整理時の所見を踏まえ、掘立柱建物(SB)、櫛列(SA)については、F地区(第4次調査以降)、調査面ごとに新たに3桁の通し番号を付与している(各柱穴番号は現地調査時の遺構番号のまま記載)。具体的には、第0・Ⅰ面ではSB101、SB102…、第Ⅳ面ではSB401、SB402…となる。本書の記載は、建物跡(SB、SI)、櫛列(SA)、井戸(SE)、土坑(SK)については、基

本的に平面図および断面図を組み合わせて説明するものとし、単独の小穴(P)、溝(SD)等の平面図は遺構全体の分割図(縮尺1/80)および必要に応じて断面図を用いて説明を加えるものとする。また、遺物が多出した遺構については遺物出土状況を示している。

第2節 基本層序

基本層序 本遺跡は、扇径約300m、比高差約20mを測る小扇状地上に立地する。第7図は、第1～7次調査のバイパス路線センター付近における主な遺構検出面の標高の概略を図示したものである。本遺跡においては、標高12m台を測る小扇状地中央付近(D・F・G地区)で形成された縄文時代中・後期の集落域の形成を皮切りに、度重なる小河川の大規模な氾濫で埋没しながらも、調査区外東・西側を含めた小扇状地上において生活中心域を少しずつ変えて、継起的に集落域・耕作域が営まれ続けた状況がわかる。小扇状地を形成した小河川本流が流下したと考えられる扇状地中央ライン(D・F・G地区)を中心に土砂堆積が進んでおり、第5次調査G地区で確認した縄文時代後期の遺構検出面と、調査着手前の水田の標高差は4m以上に達する(写真図版1)。これは、東側に位置する碁石ヶ峰山地(石動山山地)が急峻で崩壊しやすい花崗岩質の土質をもつことに加え、集落域を形成しうる土地が碁石ヶ峰山地前縁に張り出した微高地・小扇状地にほぼ限定されることに起因する。この邑知地溝帯における集落形成のあり方は、四柳ミッコ遺跡、酒井バンドウマエ遺跡や、邑知地溝帯対岸の眉丈山系前縁の微高地で営まれた中能登町金丸杉谷遺跡、徳丸遺跡でも確認されており、旧邑知湯に面した邑知地溝帯南側に通有の集落形成であったと考えられる。

各調査面(生活面)における基本土層層序は、A層：無遺物層で、短期間のうちに河川氾濫等で流入・堆積した淡灰～淡灰黄色を基調とする礫・砂利・粗砂・砂質土・シルトと、B層：遺物包含層(または耕作



第7図 第1～7次調査の主な調査(生活)面の高さ模式図

土層)の垂直方向での累積堆積で構成されている。B層は、A層が生活(または耕作)に伴い土壌化したものであり、黒灰・暗灰～暗灰褐色を呈する粗砂・砂質土・シルトを基調とする。各調査面においては、B層上面が集落域・耕作域の生活面または耕作域の遺構検出面、A層上面(B層下面)が集落域における遺構検出面となり、後世の耕作地造成や河川氾濫による浸食等で削平された箇所も少なからず認められた。また、扇状地中央付近(D・F・G地区)で礫・砂利等の粒径の大きい堆積土砂が主体となるのに対して、扇状地裾付近(E・J・K地区)では砂質土・細砂・シルト等の粒径の小さい堆積土砂が主体となる傾向を示すものの、A層の形成状況(土石流の規模や影響範囲)により、必ずしも一様でない。さらに、地形の傾斜が強い扇状地裾付近(E・J・K地区)は、古墳時代中期以降、主に耕作域としての土地利用が確認されており、一部(E地区)では水田耕作に伴う整地作業も認められる。

G地区基本土層層序 本書で報告するG・H地区の基本土層層序については、G地区東壁の土層層序をもって説明を行う(第7・8図、第7表)。G地区は、小扇状地の扇状部扇端寄りに位置し、調査着手前は水田であった。周辺の地勢は、北側から南側および東側から西側に向けて標高を下げるものの、他地区より緩い傾斜具合を示す。調査着手前の地表面の標高は、調査区北側水田で約16.5m、南側水田で約15.6m、東側水田で約16.5m、西側水田で約16.2mをそれぞれ測る。

基本土層層序は、概ね整合的に堆積し、現在までに短期間で発生した大量の土砂流入・堆積(洪水・土石流等を想定)を7回(洪水堆積土(A)～(キ))と、その間の土壌化(集落域・耕作域に利用)の過程を9回程度繰り返したと推定される。以下、調査区東壁柱状図(第8図)の状況を上層から述べる。

[現水田] 1～3層：調査着手前までの耕作土・床土層で、近・現代施工の耕地整理後の水田覆土。

[第0・I面] 6～8層：中世後半～近世(近代含む)の遺物包含層・遺構覆土で、ベース土が粒状に混ざる濁濁～暗褐色系の砂質土を基本とする。6層上面が生活面(耕地整理での一部削平を想定)、また6層下面が遺構検出面となる。厚さ10～25cmを測る。

[洪水堆積土(A)：土石流災害1] 9～15層：東側から短期間に流入・堆積した粗砂～細砂層で、基本的に無遺物層となる。柱状図B・Cで確認でき、柱状図A・Dは後世の削平のためか存在しない。柱状図C付近に流入経路の一つが存在するようで、堆積土の厚さは約95cmを測る。

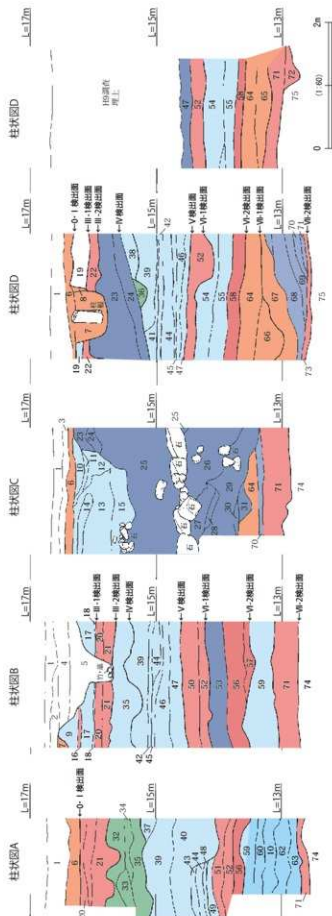
[(生活面)] 16層：柱状図Bのみで確認した生活面で、17層の土壌化層となる。炭粒が多く混ざる濁灰色粗砂を基本とし、C地区第Ⅲ面で検出した中世前半の集落域に対応する可能性が高い。調査時は、耕地整理による造成のため明確に生活面として把握できず、第0・I面と同時に検出・調査を行っている。

[洪水堆積土(イ)：土石流災害2] 17～19層：柱状図B・Dで確認した粗砂～砂利層で、短期間に流入・堆積した無遺物層である。第Ⅲ-1面を被覆する。上下の層位から10世紀後葉～11世紀前葉に形成されたと考えられる。

[第Ⅲ-1・2面] 20～22層：洪水堆積土(イ)に埋没した段階(北側是水田、南側は畠地)を第Ⅲ-1面、遺物包含層20～22層を除去した段階(畠地)を第Ⅲ-2面としている。炭粒が多く混ざる濁暗灰～灰褐色系の砂質土を基本とする。第Ⅲ-1面は比較的短期間のうちに放棄され、一定期間を経たのちに洪水堆積土(イ)に被覆される。第Ⅲ-1面はF地区との連続性から10世紀中葉頃を中心にした時期を想定したい。

[洪水堆積土(ウ)：土石流災害3] 23～31層：調査区中央付近を東西に貫流する土石流痕跡で、その影響は本流南側が目立つ。本流は幅20～25m、深さ2m強を測り、複雑に堆積した1mを超える石・礫が多く混ざる砂利、粗砂を覆土とする。G地区第Ⅳ面の集落・耕作域廃絶後の10世紀初頭に発生する。なお、F地区周辺(羽羽市教委第4次調査区を含む)は、土石流災害の影響は比較的軽微であり、以降10世紀初頭も集落・耕作域が存続する。

[第Ⅳ面] 32～36層：長期にわたり比較的安定した生活面を維持しており、特に8世紀初頭～9世紀



- 1 耕作土 2 赤褐色粗砂 (耕地形成時の造成土)
 3 褐色細砂 (")
 4 褐色砂質土と赤褐色粗砂の混合土 (雨成層)
 5 水理土
 6 褐色細砂 (")
 7 褐色粗砂質土 (粘土分混、重0・1層を含む)
 8 褐色粗砂質土 (粘土分混、重0・1層を含む)
 9 褐色粗砂質土 (粘土分混、重0・1層を含む)
 10 褐色粗砂質土 (粘土分混、重0・1層を含む)
 11 赤褐色粗砂 (")
 12 赤褐色粗砂 (")
 13 赤褐色粗砂 (")
 14 赤褐色粗砂 (")
 15 赤褐色粗砂 (")
 16 赤褐色粗砂 (")
 17 赤褐色粗砂 (")
 18 赤褐色粗砂 (")
 19 赤褐色粗砂 (")
 20 赤褐色粗砂 (")
 21 赤褐色粗砂 (")
 22 赤褐色粗砂 (")
 23 赤褐色粗砂 (")
 24 赤褐色粗砂 (")
 25 赤褐色粗砂 (")
 26 赤褐色粗砂 (")
 27 赤褐色粗砂 (")
 28 赤褐色粗砂 (")
 29 赤褐色粗砂 (")
 30 赤褐色粗砂 (")
 31 赤褐色粗砂 (")
 32 赤褐色粗砂 (")
 33 赤褐色粗砂 (")
 34 赤褐色粗砂 (")
 35 赤褐色粗砂 (")
 36 赤褐色粗砂 (")
 37 赤褐色粗砂 (")
 38 赤褐色粗砂 (")
 39 赤褐色粗砂 (")
 40 赤褐色粗砂 (")
 41 赤褐色粗砂 (")
 42 赤褐色粗砂 (")
 43 赤褐色粗砂 (")
 44 赤褐色粗砂 (")
 45 赤褐色粗砂 (")
 46 赤褐色粗砂 (")
 47 赤褐色粗砂 (")
 48 赤褐色粗砂 (")
 49 赤褐色粗砂 (")
 50 赤褐色粗砂 (")
 51 赤褐色粗砂 (")
 52 赤褐色粗砂 (")
 53 赤褐色粗砂 (")
 54 赤褐色粗砂 (")
 55 赤褐色粗砂 (")
 56 赤褐色粗砂 (")
 57 赤褐色粗砂 (")
 58 赤褐色粗砂 (")
 59 赤褐色粗砂 (")
 60 赤褐色粗砂 (")
 61 赤褐色粗砂 (")
 62 赤褐色粗砂 (")
 63 赤褐色粗砂 (")
 64 赤褐色粗砂 (")
 65 赤褐色粗砂 (")
 66 赤褐色粗砂 (")
 67 赤褐色粗砂 (")
 68 赤褐色粗砂 (")
 69 赤褐色粗砂 (")
 70 赤褐色粗砂 (")
 71 赤褐色粗砂 (")
 72 赤褐色粗砂 (")
 73 赤褐色粗砂 (")
 74 赤褐色粗砂 (")
 75 赤褐色粗砂 (")

第8図 G地区東部柱状図 (S=1/60)

第7表 G地区調査面の概要一覧表

調査面	存続年代	性格	主な遺構	遺構検出面の標高 (m)	遺構番号	備考	
近・現代 [調査面]	-	耕作城 (水田)	-	1567 ~ 1645 m	-	2度の耕地整理痕跡	
第0・1面	中世～近 世前期	16世紀後半～ 17世紀代	集落域	SB16棟、SA6基、SE13基、 SK6基、ピット	1520 ~ 1600 m	1000 香台 (SB、SAは100香台)	C地区第2面被覆土砂に 対応か
		14世紀中頃か、中央付近で大規模な土砂流入・堆積 (ア、土流災害1)					C地区第5面に対応か
	12～13世紀 前半代	集落域	SB5棟	1550 ~ 1575 m	1000 香台 (SBは100香台)		
10世紀後半～11世紀前半：大規模な土砂流入・堆積 (イ、土流災害2；河跡3001 (新)) で第Ⅱ面は廃絶							
第Ⅱ-1面	10世紀中葉頃	南側：耕作城 (高地)	耕作に伴う小溝約25条	1451 ~ 1575 m	3000 香台 (SB、水田は300香台)	F地区に高地が連続	
		北側：耕作城 (水田)	堀防・溝防、水田3枚以上			H地区に水田が連続	
第Ⅱ-2面	10世紀前半頃	南側：集落、耕作城 (高地)	SB2棟、耕作に伴う小溝 約10条	1450 ~ 1561 m	2300 香台 (SBは300香台)		
		北側：耕作城 (高地)	堀防・溝防、耕作に伴う 小溝約60条				
10世紀初葉：大規模な土砂流入・堆積 (ウ、土流災害3；河跡3001 (古)) により第Ⅳ面集落域は廃絶							
第Ⅳ面	7世紀末～9世紀末	耕作城 (高地)	耕作に伴う小溝約60条	1426 ~ 1530 m	4000 香台 4000 香台 (SB、SAは400香台)	SE4001は銀灰井掘削 集落5期に対応	
		集落域	SB26棟、SA7基、SE1基、 耕作に伴う小溝約60条			集落1～4期に対応	
古墳時代中期終りの頃、大規模な土砂流入・堆積 (エ、土流災害4) により第Ⅴ面水田は廃絶 古墳時代後期にも土流あり。							
第Ⅴ面	古墳時代中期末	耕作城 (水田)	水田約27枚、SD3条	1330 ~ 1430 m	5000 香台	D・F・K地区に水田が連続	
調査区北側で小規模な土砂流入・堆積							
第Ⅵ-1面	弥生時代後期後半～ 古墳時代前期前半	南側：集落域	壱伏遺構1基、SK4基、 SD25条	1310 ~ 1410 m	6000 香台	F地区で縦掘り出土	
		北側：本利用					
大規模な土砂流入・堆積 (オ、土流災害5)							
第Ⅵ-2面	弥生中期後葉	北側：集落域	平地建物1棟、SK4基、 SD14条	1285 ~ 1360 m	6500 香台 (SEは600香台)		
弥生時代中期中葉：調査区北側で大規模な土砂流入・堆積 (カ、土流災害6) [第Ⅵ-3面：河跡2条]							
第Ⅵ-1面	縄文時代晩期後半～末	南側：集落域 北側：不明	壱伏遺構1基、SK4基	1252 ~ 1324 m	7000 香台 (SEは700香台)	集落域は調査区外東側か 円形建物を含む可能性あり	
大規模な土砂流入・堆積 (キ) 中期後葉頃、晩葉末頃の2回確認							
第Ⅵ-2面	縄文時代中期～後期前半	集落域縁辺	SK2基	1180 ~ 1268 m	7500 香台	F地区で壱伏建物を検出	

- 末は本遺跡の最盛期となる。遺物包含層・遺構覆土は、北側が濁灰～暗灰色砂質土を基調とするのに対して、南側は洪水堆積土(ウ)による流出で包含層を欠き、遺構覆土は炭粒が多く混ざる淡灰～灰色系砂質土を基本とする。G・F・D地区では、多くの掘立柱建物が発見し、多量の遺物が出土する。
- [洪水堆積土(エ)：土流災害4] 37～48層：第Ⅳ面ベース土で、上面が第Ⅳ面遺構検出面、下面が第Ⅴ面検出面となる。淡灰色～灰緑色を呈した細砂・粗砂・砂利が厚さ60～100cmで水平堆積する無遺物層である。
- [第Ⅴ・Ⅵ-1面] 49～52層：炭粒が混ざる暗灰色砂質土を基調とする。洪水堆積土(エ)に被覆される段階の遺構面を第Ⅴ面、また遺物包含層52層を除去した段階で検出した遺構面を第Ⅵ-1面としている。第Ⅴ面では一定期間放棄された古墳時代中期末の小区画水田域を、また第Ⅵ-1面では弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落域縁辺の様相を検出している。
- [洪水堆積土(オ)：土流災害5] 53～55層：第Ⅵ-1面ベース土で、柱状図Aを除いて、ほぼ水平な堆積を確認している(厚さ30～50cm)。淡灰オリーブ～灰褐色を基調とする粗砂・細砂・シルトで、北側に向かうにつれ、粒子が細くなる傾向を示す。無遺物層。
- [第Ⅵ-2面] 56～58層：本遺跡で初めて確認した弥生時代中期後葉の遺物包含層で、厚さ20～40cm程度がほぼ水平に堆積する。遺構・遺物が偏在する調査区北側では炭粒が混ざる濁淡灰～灰褐色を基調とするシルト・細砂であるのに対して、遺構が希薄な南側は暗灰色砂質土を基本とする。
- [洪水堆積土(カ)＝第Ⅵ-3面] 59～63層：調査区北側(柱状図A・B)で確認した第Ⅵ-2面のベースとなる河川堆積土である。生活面ではないものの、弥生時代中期中葉の土器を包含する層であることから、第Ⅵ-3面として調査を実施した。灰オリーブ～灰褐色を基調とするシルト～粗砂・砂利が堆積し、

北側ほど厚さを増す。

[第Ⅵ-1面]64～67層：縄文時代晩期後半～末の遺物包含層である。柱状図C～Dで確認できるものの、柱状図A・Bでは洪水堆積土(カ)により流出したため検出できない。粘性に富んだ暗灰緑～灰オリーブ色砂質土を基本とし、下層ほど炭粒が多く混ざる。包含層を除去して検出した遺構は比較的希薄である。

[洪水堆積土(キ)]68～70層：柱状図C・Dで確認した無遺物層、第Ⅶ-2面を被覆する。固くしまった暗褐～褐灰色第砂質土を基本とし、F地区の様相から数回にわたり発生する。

[第Ⅶ-2面]71～73層：縄文時代中期～後期前葉を中心とする遺物包含層で、淡灰緑～暗褐灰色砂質土を基調とする。遺物の混ざりは比較的少なく、ベース土となる74・75層上面で検出できた遺構も限られる。調査区外東側・南側(F地区Ⅶ面を含む)に中心をもつ集落縁辺部の様相を示す。

[第Ⅶ-2面ベース土]74～75層：上面は第Ⅶ-2面遺構検出面となる。北側で褐色強粘質土(74層)、南側で灰オリーブ色砂質土(75層)となる。

なお、G地区第Ⅶ-2面の調査終了後に、県教委と協議のうえ、第Ⅶ-2面ベース土(第8図74・75層)以下における遺物包含層の有無を確認する試掘調査を実施した。試掘調査は、G地区内3ヶ所で重機により約1～1.5mの深さまで掘削し、土層観察および記録作業を行った。いずれの試掘坑でも、一時期に堆積した粗砂・砂利層と、土地が比較的安定した際に繁茂した植物が腐植・堆積したビート層がほぼ水平に堆積しており、第Ⅶ-2面より下部に集落・耕作地を形成しうる安定した生活面や遺構の落ち込みは確認できなかった。

第4章 G地区の遺構と遺物

第1節 調査の概要

G地区は、F地区北側に設定した調査区であり、本遺跡で最も標高が高い調査区となる。調査杭グリッドでいえば、D-25・26区、D～G-20～27区にあたる(第6図)。調査対象平面積は約1,400㎡(南西～北東方向最長約75m、南東～北西方向最長約27m)を測り、調査区法面に安定勾配を保ちながら順次下面の調査を進めたことから、下面に向かうほど実調査面積は縮小する。調査対象面積は、第4次調査(1997)が2面(第0-I面、第Ⅲ-1面)で2,800㎡、第5次調査(1998)が第Ⅲ-2面～第Ⅶ-2面の7面(第Ⅲ-2面・第Ⅵ-1面各800㎡、他面が各1,200㎡)で7,600㎡を測り、2ヶ年計10,400㎡となる。

調査の結果、F・G地区より連続する第0-I面、第Ⅲ-2面(F地区第Ⅲ面に対応)、第Ⅳ面、第Ⅴ面、第Ⅵ-1面(F地区第Ⅵ面に対応)、第Ⅶ-2面(F地区第Ⅶ面に対応)の各生活面に加え、新たに第Ⅲ-2面、第Ⅵ-2面、第Ⅶ-1面の3つの生活面と、第Ⅶ-1面・第Ⅶ-2面の間で発生した大規模な土石流災害痕(第Ⅵ-3面：土石流災害7)を確認している。これらの新たな調査面を確認した理由については、本地区中央付近に土石流災害の本流の一つ(南東方向から北西方向に流下、通常は水無川か)が横断すること、F地区とは異なり扇状地形が北側にも傾斜する地形に転ずることに起因し、より土砂の流入・堆積傾度が高かったためと考えられる。なお、土石流災害を引き起こす本・支流は、本地区中央付近の他にC地区とD地区の間(現、四柳大谷川付近)、E地区南側の緩やかな谷地形付近で確認している。

各調査面の存続年代、検出遺構、遺構番号、遺構検出面の標高や、大規模な土石流災害痕跡の概要については、第7表に示したとおりであり、最下面の第Ⅶ-2面(縄文時代中・後期)は、現地表下約4mに存在したこととなる。

第0-I面は、F地区と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面で、耕作や過去の耕地整理等のため、遺存状態はあまりよくない。掘立柱建物16棟、櫓6条を復元した他、石組井戸を主体とした井戸13基、土坑6基等を検出した。遺物は、陶磁器、土師器小皿や、柱根、漆器椀等の木製品、銅銭等の金属製品、砥石等の石製品が少量出土した。これらは、14世紀中頃と想定できる土石流災害1を挟んで、12～13世紀前半に中心をもつ掘立柱建物群と、14世紀後半～17世紀代の掘立柱建物と小型の井戸で構成される一般的な農村集落域に大別できる。また、後者はC・D・F地区第0-I面で検出した集落域(14世紀後半～16世紀前半)が縮小に向かう一方、G地区北側に新たに建物群を形成する。

第Ⅲ-1面は、新たに確認した生活面であり、10世紀末葉～11世紀前葉^①に発生した土石流災害2(河跡3001(新))で一度に埋没する。調査区中央付近の河跡3001(新)(第Ⅲ-2面で右岸に護岸・堤防)の北側で水田(第Ⅲ-2面畠地から転換)を、河跡3001(新)南側で畠地と考えられる小溝群を検出しており、いずれも第Ⅲ-2面との関係から短期間の経営であったと考えられる。また、土石流災害2直前まで耕作を維持した小規模水田は調査区北隅の3枚に限られ、その続きをH地区第Ⅲ-1面で検出している。

第Ⅲ-2面は、右岸(北岸)に多量の自然石を用いて護岸・堤防を築く河跡3001(古)を挟んで、南側の調査区で畠地と考えられる小溝群と小規模な掘立柱建物2棟を、北側の調査区で畠地と考えられる小溝約60条を検出した。河跡3001(古)右岸に築かれた石組の護岸・堤防は、調査区内で延長21m、幅5.6～6mの規模をもつ大がかりなものであり、北側で検出した小溝群と一体をなす。また、河跡3001(古)南側で検出した小溝群は、調査区南隅に偏在し、F地区第Ⅲ面の小溝群と一体的に経営される。第Ⅲ-2面の存続時期は、10世紀前葉頃の比較的短い期間を想定している。

第Ⅳ面は、本遺跡の最盛期であり、集落規模は南西－北東方向で約300mに及び、出土遺物の量・内容を含めて、周辺地域の中で屈指の規模をもつ。さらに本遺跡北側には、四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョリ遺跡、小金森ヘイナイメA遺跡等が展開する。本地区で検出した主な遺構は、掘立柱建物26棟、櫓7条、本遺跡初例となる相欠式横板組(横板蒸籠組)井戸1基、畠地と考えられる小溝群約60条、整地痕跡3ヶ所等であり、多数のピットの存在から建物棟数はさらに多くなると考えられる。これらの遺構は、7世紀末～9世紀末の200年強の間で大きく5期の変遷を復元でき、9世紀中頃まで存続した集落域(集落1～4期)が、9世紀後葉に耕作域(畠地)に転換(集落5期)、10世紀初頭に発生した大規模な土石流災害3(河跡3001(古))で一度に埋没する。遺物は、「乙上」「田地」「酒田」「東」「寺」「罌本口」「榎女」等の墨書土器や、円面硯・転用硯を含む多数の須恵器・土師器、灰釉陶器1点、製塩土器、土鍾、砥石、鉄滓、フイゴの羽口、鉄刀、柱根が、さらに井戸から祭祀に用いた斎串5本、錐柄、横櫓等が出土している。また、第Ⅲ-Ⅰ面で出土した銅製巡方も、本面に属すると考えられる。

第Ⅴ面は、緩斜面を利用した小区画水田で、D・F地区第Ⅴ面で検出した水田と一体的・計画的に造られる。河跡3001(古)北側の調査区で残存した小区画水田は27枚(平均面積約8.1㎡、最大20.3㎡以上、最小約3.1㎡)を数え、水田間を排水用の溝が流下する。畦畔の残存状況から埋没直前の時期には、耕作が放棄されていた可能性が高い。また、河跡3001(古)南側の調査区では、約20m間隔で水田区画の軸と考えられる溝2条(水田区画は未造成)を検出した。いずれも古墳時代中期初め頃に発生した土石流災害4で一度に埋没する。

第Ⅵ-Ⅰ面は、F地区第Ⅵ面より続く生活面であり、河跡3001(古)以南で古墳時代前期を中心とする堅穴状遺構1基、土坑4基、溝25条等を検出した。屈曲する溝の一部は、柱穴を確定できないものの、平地建物の外周溝の可能性を考えている。遺物量は少なく、集落域の中でも縁辺に近い印象を受ける。一方、河跡3001(古)以北は未利用の土地と考えられ、少量の弥生時代後期後半の土器が出土したにとどまる。なお、F地区第Ⅵ面から仿製孔文鏡の破鏡が出土している。

第Ⅵ-Ⅱ面は、本遺跡で初めて確認した弥生時代中期後葉の生活面である。河跡3001(古)以北に偏在して周溝をもつ建物1棟、土坑4基、ピット多数等を検出、建物内で黒色のガラス質安山岩を用いて石器製作を行う。

調査区北半の第Ⅵ-Ⅲ面と、南半の第Ⅶ-Ⅰ面は、同時に検出している。両面の関係は、第Ⅶ-Ⅰ面(縄文時代晩期後半～末の集落域)の北半斜面を、弥生時代中期中葉に3条の土石流痕跡(土石流災害6)が幅約25mにわたり浸食、その3条の土石流痕跡を第Ⅵ-Ⅲ面とした。3条の土石流で流入・堆積した土砂層は、第Ⅵ-Ⅱ面ベース土を形成するとともに、調査区外東側(山側)に集落が存在した可能性が高い。調査区南半の第Ⅶ-Ⅰ面は、堅穴状遺構1基、土坑4基、溝1条、ピット多数を検出し、ピットの一部は円形建物柱穴の可能性をもつ。また、調査区南端で検出した縄文時代晩期末の河跡は、F地区第Ⅶ面2101-02号河跡、D地区河跡と一体性が高いと考えられる。

第Ⅶ-Ⅱ面は、縄文時代中期～後期前葉の生活面で、F地区第Ⅶ面から続く集落域の縁辺部と考えられる。F地区で中期中葉～後葉の堅穴建物2棟を確認したのに対して、G地区は土坑2基等を検出したにとどまる。出土遺物は少ないものの、前期中葉や中期～後期前葉の土器片から、調査区外東側(山側)に立地する四柳貝塚、四柳中の堂遺跡周辺の集落存続時期を考える一助となる。なお、第Ⅶ-Ⅱ面調査完了後、試掘調査を実施し、第Ⅶ-Ⅱ面より下に生活面が存在しないことを確認している。

第2節 第0・I面の遺構と遺物（第9～77図、第8～18表）

第0・I面は、第4次調査(1997)において現耕作土直下で検出した最上層の生活面で、12世紀以降17世紀にかけて、断続的に営まれた集落域となる。遺構・出土遺物の様相から、12世紀～13世紀前半、14世紀後半～16世紀前半、16世紀後半～17世紀代に、それぞれ小規模な建物群が中心域を造って確認できる。いずれも、現代に至るまでの耕作や、明治時代以降の大規模な耕地整理²⁾により、遺構の遺存状況は比較的良好でない。調査の結果、掘立柱建物(SB)21棟、櫓(SA)6条、小型の井戸(SE)13基、土坑(SK)6基、溝(SD)、ピット(P)多数、整地土4ヶ所等を確認し、整地土と大部分の溝は近代以降に属する。

遺物は、食器・調理・貯蔵に用いられた陶磁器、土師器や、建物の柱根、漆器碗、曲物、部材等の木製品、石臼、銅銭、金属製品、石製品その他、古代に属する須恵器、土師器、石製品等が出土しており、遺物量は耕地整理の影響でそれほど多くない。

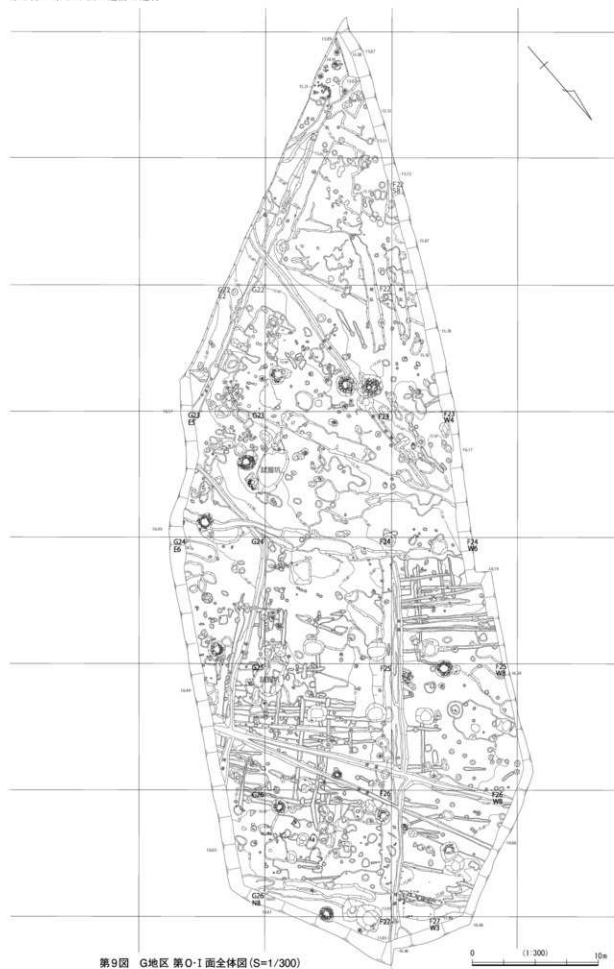
1 掘立柱建物(SB)、櫓(SA) (遺構:第23～46図・第8表、遺物:第47～50・72図・第10・12・14表)

復元した掘立柱建物は、総柱構造の建物5棟、側柱構造の建物16棟(1×1間含む)の計21棟である。総柱構造の建物(F地区SB104、SB101・109・113・114)は、調査区外西側に展開するため、全体規模が判明した建物は、F地区につながるF地区SB104(4×3間、54.3㎡)に限られる。柱穴は、平面不整形形を呈するものが多く、径30～50cmと比較的小振りである。調査区南西隅のF地区SB104は、F地区調査成果から14世紀後半～16世紀前半に位置付けられる他、調査区北西側の整地土103除去後に検出したSB109・113・114等は出土遺物等から12世紀～13世紀前半に建てられた可能性が高い。

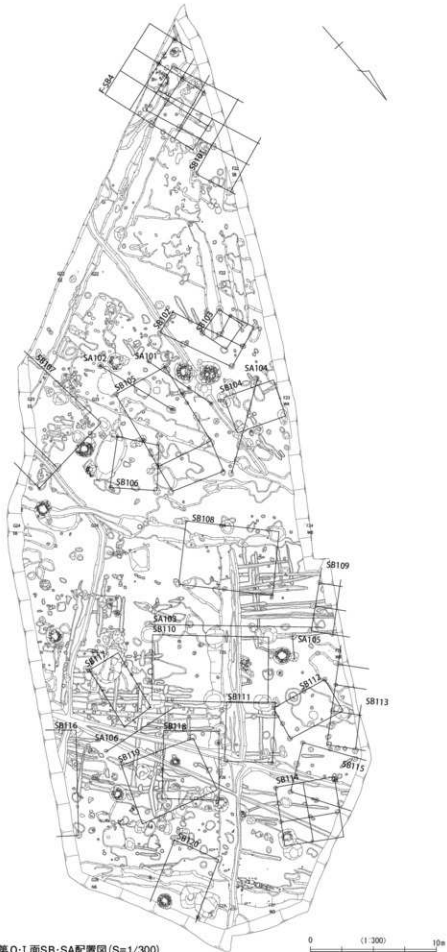
側柱構造の建物は、桁行が1～3間、梁間1または2間で、最大棟のSB110でも平面積48.3㎡と、比較的小規模な建物で構成される。柱穴は比較的大きく、長軸1mを超えるものも存在する。また、出土遺物は、柱根が中心であり、土器類は古代に属する須恵器・土師器を除くと、極めて少量であった。なお、現地調査では耕地整理による基盤土の削平等により明確な平面プランを認識できた建物は限られ、特に側柱建物についてはD・F地区と同様に整理段階で復元した建物が少なからずある。そのため、建物となりうるか不安を残す建物については、各遺構の説明に付記しており、今後の類例の増加を待ちたい。また、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、柱根や柱痕跡の残る柱穴が一定数存在することから、掘立柱建物数はさらに多くなるものと推定している。

F-SB104(遺構:第23図、遺物:第47図)

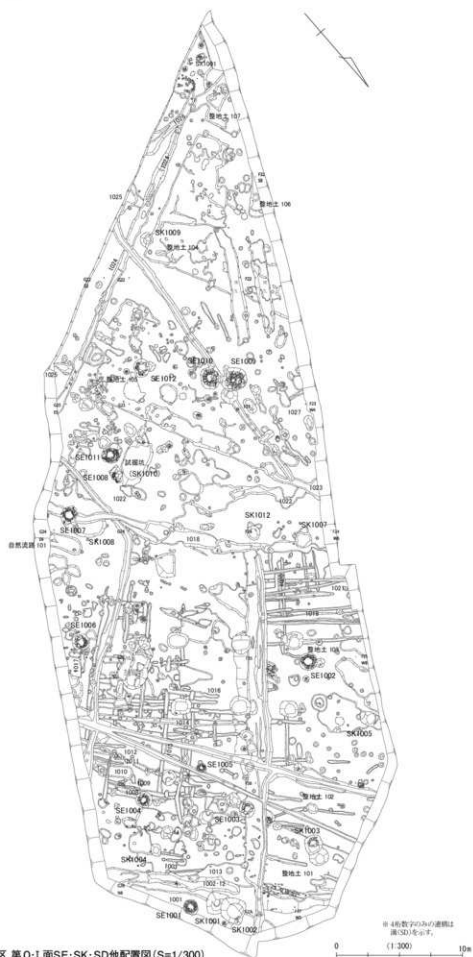
F-19・20区で検出した総柱構造の掘立柱建物で、第3次調査F地区および調査区外西側に延びる。主軸方位はN-16°Wを示し、桁行4間(8.30m)×梁間3間(6.55m)、床面積54.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は北端が1.85m、その他が2.05～2.30m、梁間の柱間寸法は2.10～2.25mとなり、北端桁1間は廂と考えられる。その他の桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められず、柱筋の通りは比較的良好。柱穴の平面形態は不整形形を呈するものが主体で、P1087が長径50cm、短径44cm、深さ27cm、P1136が径約42cm、深さ33cmを測る。柱穴覆土はベース土が粒状に混ざる暗灰褐色砂質土を基本とする。P1087～89に柱根が残り、遺構の切り合い関係はSX1001より新しく、整地土107より古い。P1087～89出土の柱根第47図1～3は芯持ちのマツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)材を用いた丸柱である。残存長30～39cm、径16～20cmを測り、底面は丁寧な加工で平坦に仕上げる。他にP1136からⅢ面以下の非クロ土師器燧石片が出土した。



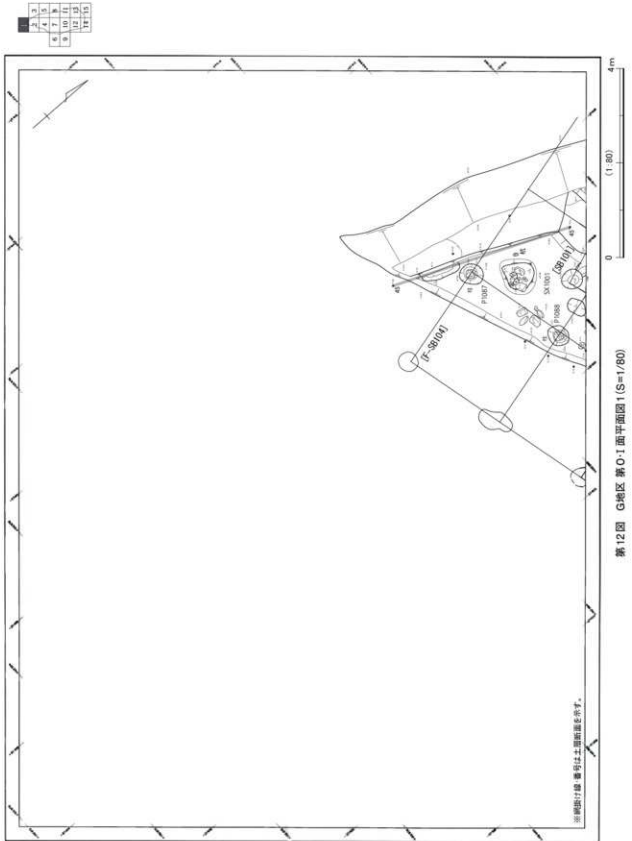
第9図 G地区 第0-1面全体図(S=1/300)

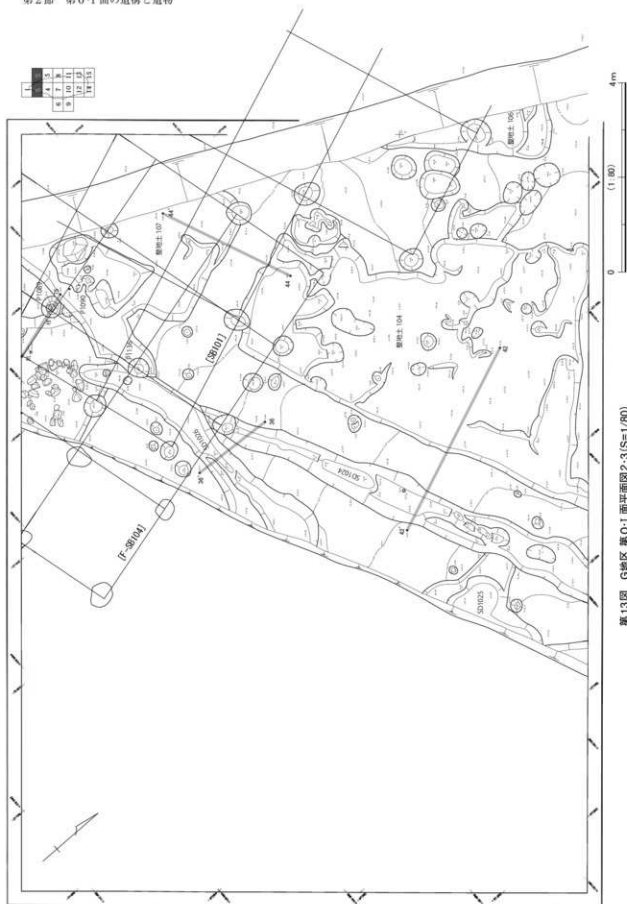


第10図 G地区 第O-I面SB-SA配置図(S=1/300)

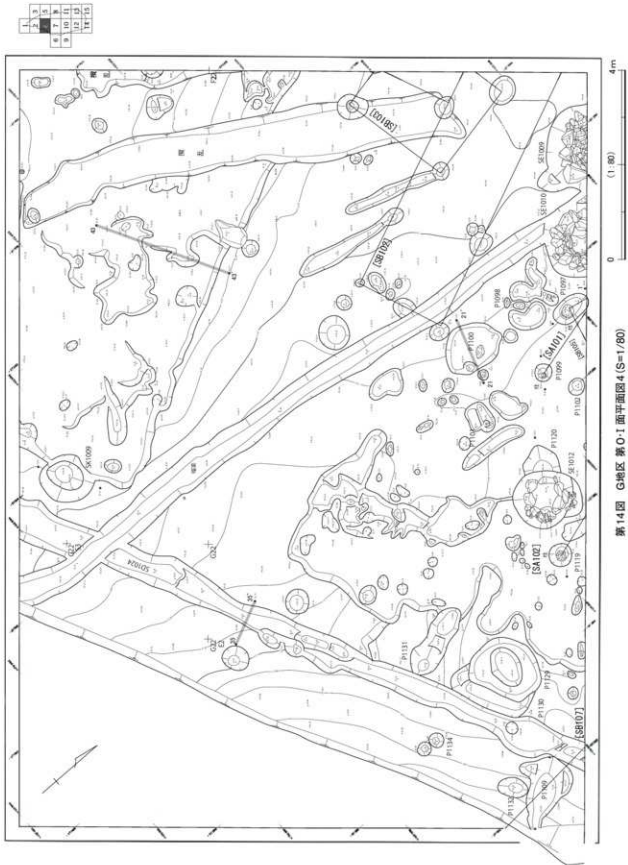


第11図 G地区 第0-I面SE・SK・SD他配置図(S=1/300)

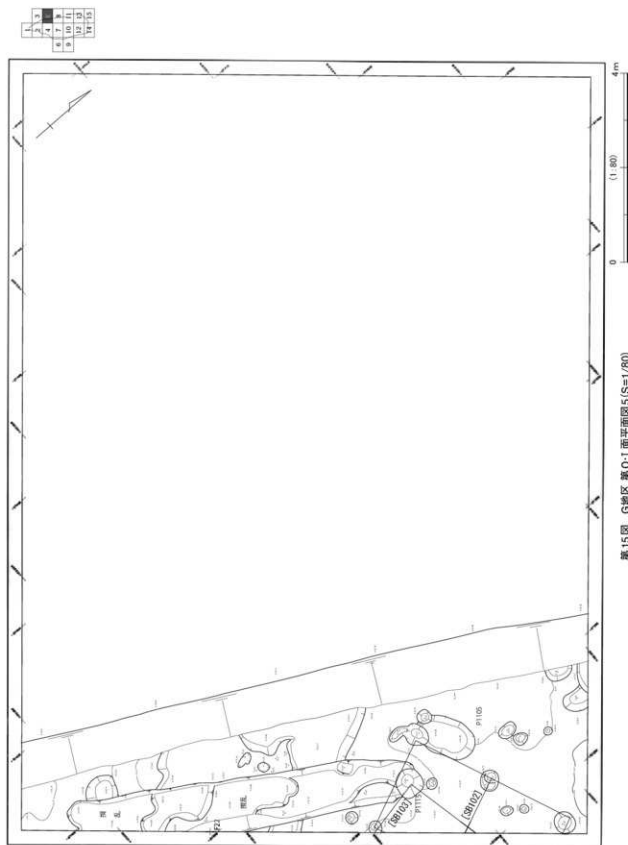




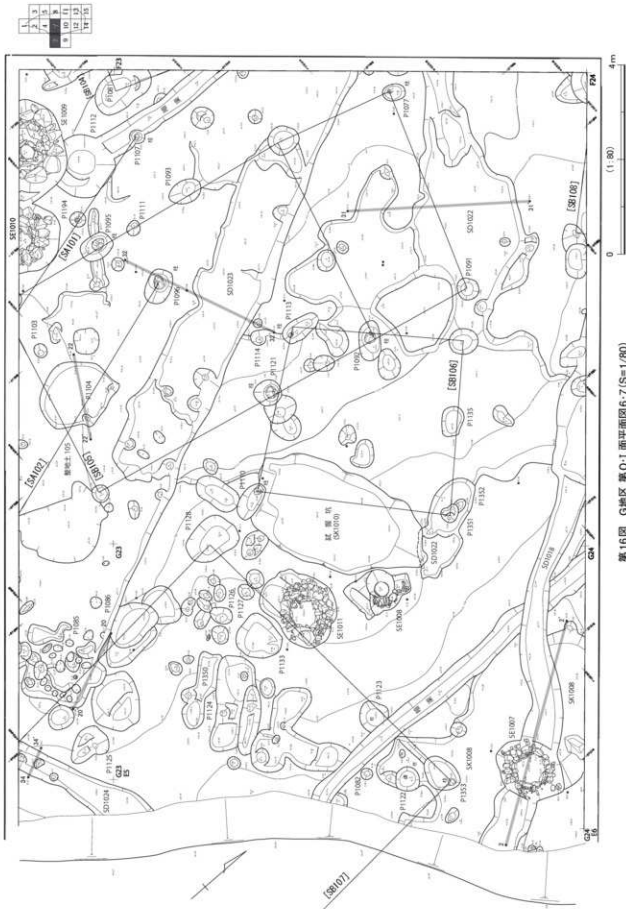
第13図 G地区 第0-1面平面図2-3(S=1/80)



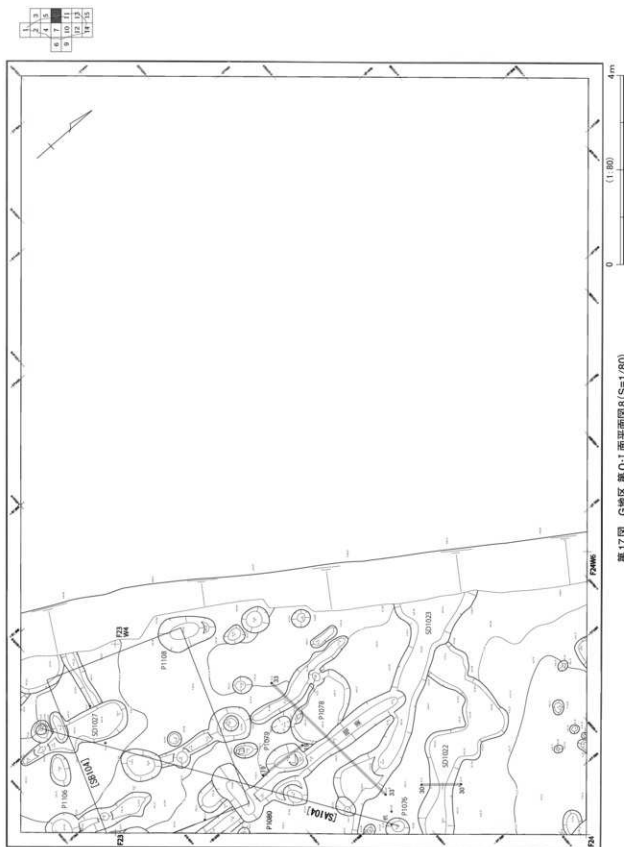
第14図 G地区 第C-I 面平面図4 (S=1/80)



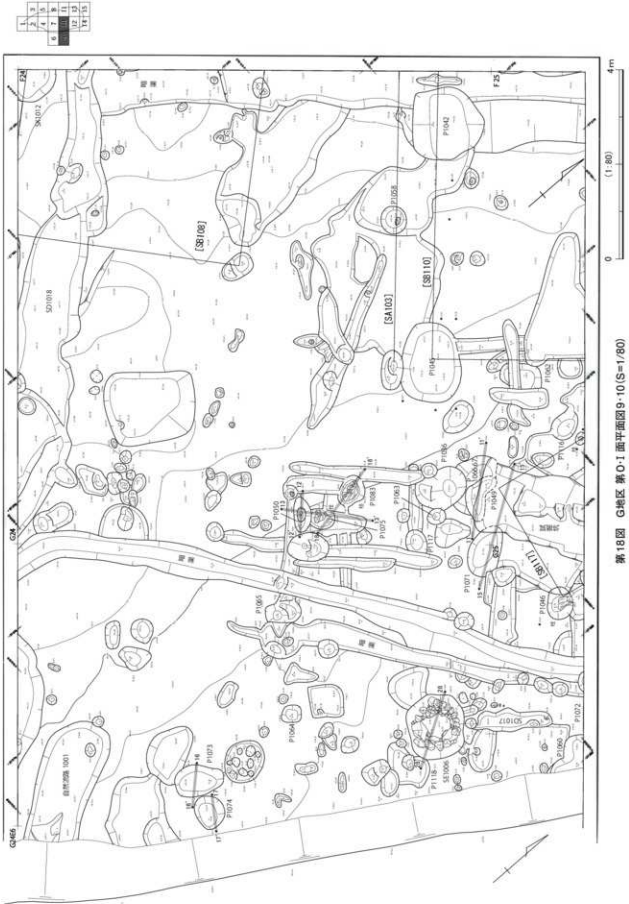
第15図 G地区 第0-1面平面図5(S=1/80)



第16図 G地区 第0-1面平面図6-7(S=1/80)

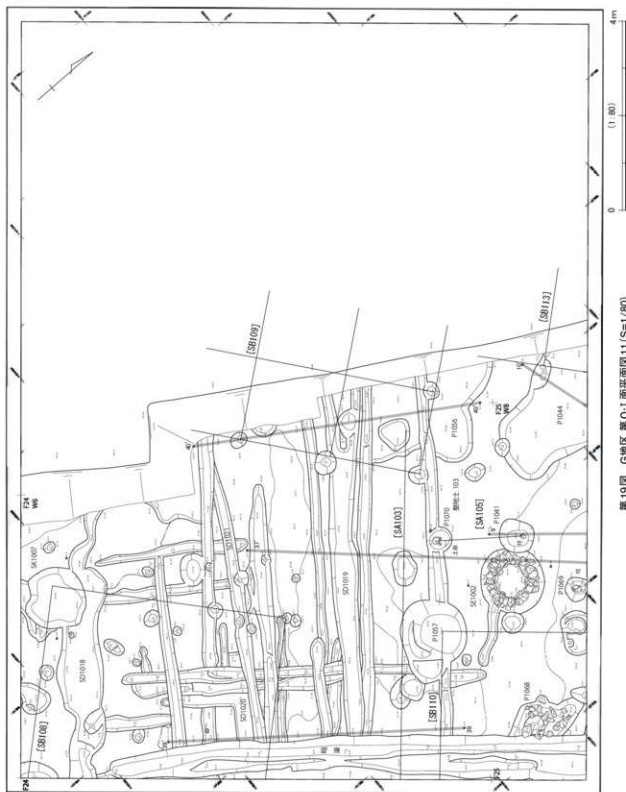


第17図 G地区 第0-1面平面図8(S=1/80)

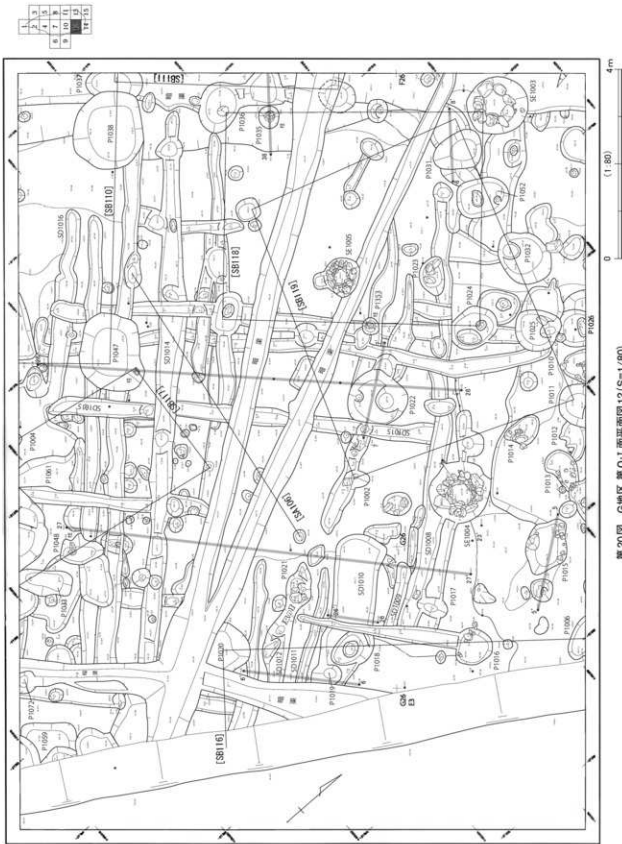


第18図 G地区 第0-1 面平面図9-10(S=1/80)

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15

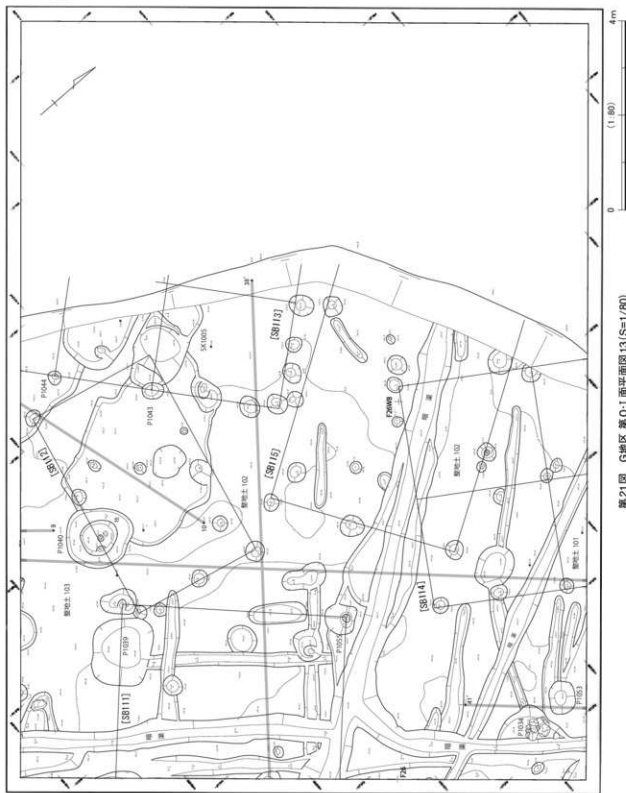


第19図 G地区 第0-1面平面図11(S=1/80)

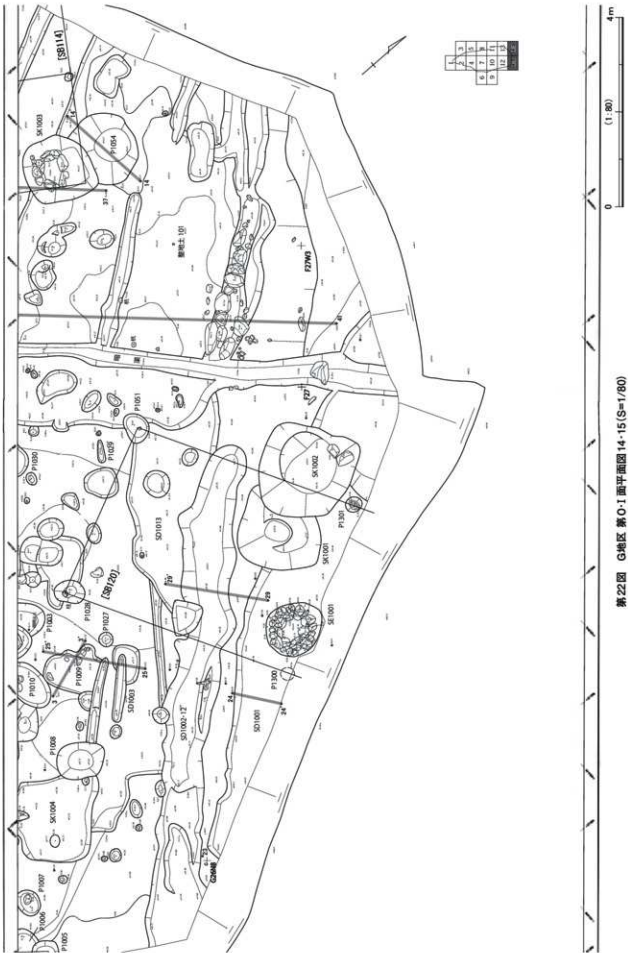


第20図 G地区 第0-1面平面図12 (S=1/80)

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	15



第21図 G地区 第0-1面平面図13(S=1/80)

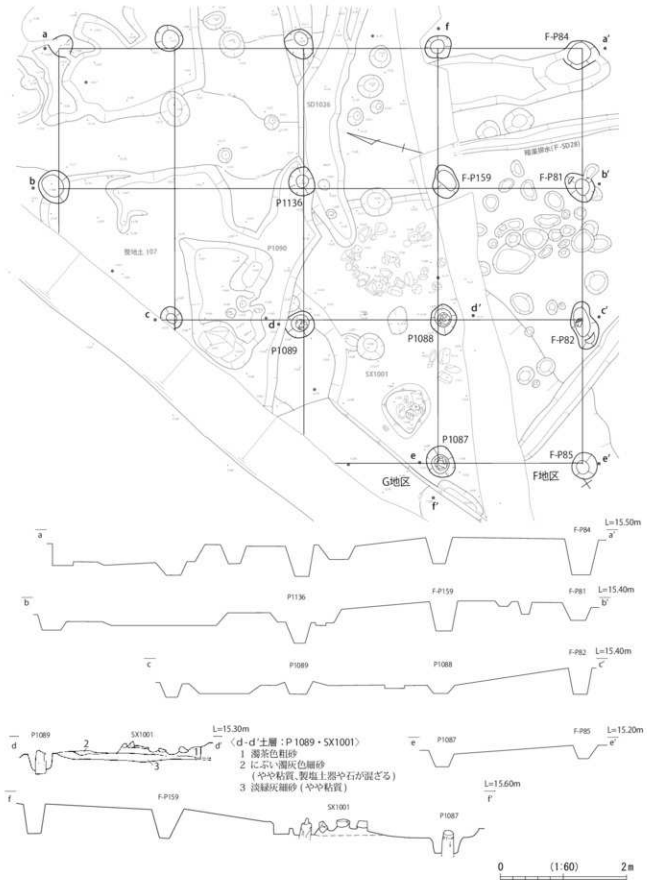


第2節 第0-1面の造構と遺物

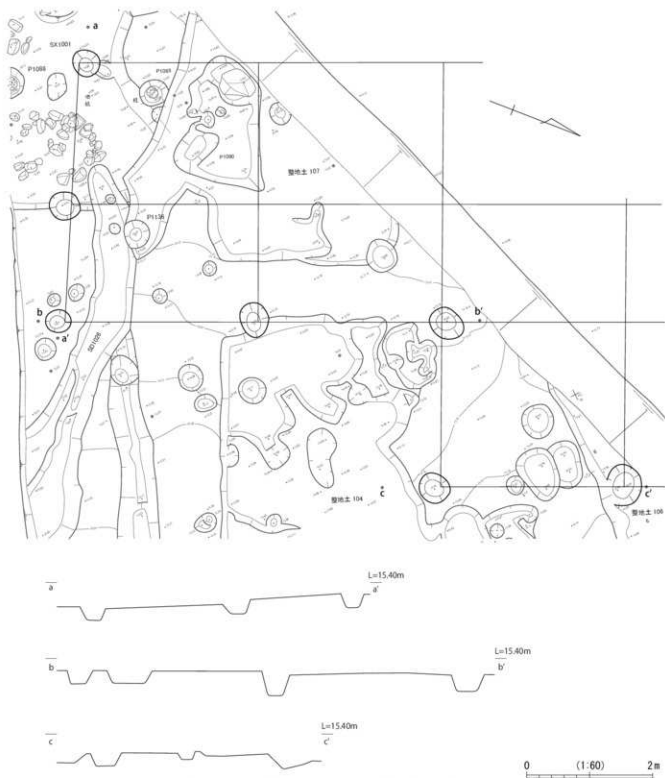
第8表 第0-1面SB-SA規模等一覧表

※ 桁間寸法は北端から南桁間、または東端から西桁間寸法の順に並記。() は新測値。

遺構名	図号	ア・ラ・ド	形構造	柱配置	東西幅 (m)	桁行長 (m)	桁行桁間寸法 (m)	東西長 (m)	東西桁間寸法 (m)	主要方位	柱穴の平面配置	柱間の取数	遺土土層数	備考
F南1 SB104	23	F-19-20	竪柱	1×3間	54.3	8.30	〔東側〕 1.85+2.05+2.10+2.30	6.50	〔南側〕 2.30+2.10+2.25	N-160°西	不整内郭 あり (1区)	土層部	あり (1区)	平高面に及びる。南端は地 階に含む。SB101より新
SB101	21	E-20-21, F-21	竪柱	3×2間	36.2+	6.85+	〔東側〕 +2.90+2.90+1.65	4.16	〔南側〕 1.65+2.25	N-210°西	不整内郭 なし	なし	なし	東側桁行に横 (桁間寸法 2.06m)
SB102	25	E-20-22	竪柱	3×1間	12.3	6.30	〔東側〕 2.10+(2.10)+2.10	1.96	〔南側〕 1.95	N-220°西	不整内郭 なし	なし	なし	柱穴に欠あり。西側桁行 に横 (桁間寸法1.85m)
SB103	26	E-F-22	竪柱	1×1間	5.2	2.40	〔北側〕 2.40	2.15	〔西側〕 2.15	N-150°西	不整内郭 あり (1区)	庭土部、 土層部	あり (1区)	
SB104	27	E-F- 22-23	竪柱	1×1間	12.0	3.95	〔北側〕 3.95	3.05	〔東側〕 3.05	N-60°西	不整 内郭内郭	なし	庭土部、 土層部	PI100は開通か
SB105	28	F-G-23	竪柱	3×1間	31.1	6.75	〔北側〕 2.20+2.20+2.35	6.00	〔東側〕 6.00	N-90°東	不整内郭 不整内郭	あり (1区)	庭土部、 土層部	北側桁行に横。SB106より 新
SB106	29	F-G-23	竪柱	2×2間	13.3	3.70	〔北側〕 2.00+1.70	3.60	〔北西側〕 1.95+1.65	〔東側〕 N-65°西 〔南側〕 N-37.5°西	不整内郭内郭	あり (2区)	コケロ土層 部小室部	平高ブランクはゆがむ。 SB105-PI121.2より古
SB107	30	G-22-23	竪柱	3×4間	50.0+	7.05+	〔北側〕 2.35+(2.35)+(2.35)+	7.10	〔東側〕 2.10+(2.30)+(2.30)	N-55°西	不整内郭 不整内郭	あり (2区)	なし	柱穴を欠る。遺物でない 可能性あり。PI100は開通 される。SB101より古
SB108	31	E-21, F- 25-24	竪柱	2×1間	38.0	7.60	〔北西側〕 3.80+3.80	5.05	〔南東側〕 5.00	N-41°西	不整内郭 不整内郭	なし	土層部	東側桁行間方は小竪柱
SB109	32	E-21	竪柱	2×1-1間	6.3+	3.70+	〔南西側〕 1.90+1.80+	1.75+	〔北西側〕 1.75+	N-50°東 (N-40°東)	地階部 不整内郭	なし	なし	
SB110	33-35	E-F- 24-25	竪柱	2×1間	48.3	9.20	〔南西側〕 4.60+4.60	5.25	〔北西側〕 5.25	N-65°西	不整内郭 不整内郭	なし	庭土部、 土層部	間方が大きい。SB111より 新。敷 敷 (1.6m -1)等 SA102-105は開通施設
SB111	36	E-F-25	竪柱	1×1間	17.9	4.70	〔北西側〕 4.70	3.80	〔南西側〕 4.70	N-47.5°西	不整内郭 不整内郭	なし	庭土部、 土層部	間方が大きい。SB111より 新。敷 敷 (1.6m -1)等 SA102-105は開通施設
SB112	37	E-25	竪柱	3×2.7間	13.2	4.70	〔南側〕 1.40+(1.40)+1.80	2.80	〔東側〕 1.40+1.40	N-77.5°西 (N-23.7°東)	不整内郭 地階部	なし	なし	柱穴に欠あり。
SB113	37	E-25	竪柱	3×1-1間	13.1+	6.40+	〔東側〕 2.70+2.65+1.65+	2.10+	〔北東側〕 2.10+	N-41°西 (N-40°東)	不整内郭 地階部	なし	なし	コケロ土層 部小室 (12 t)
SB114	38	E-26	竪柱	2×2間	22.3	4.75	〔南東側〕 1.95+2.80	4.75	〔南西側〕 2.30+2.40	N-56.5°西	不整内郭 地階部	なし	なし	SK102より古
SB115	39	E-25-26	竪柱	2×2間	17.2+	4.30+	〔西側〕 2.15+2.15+	6.00	〔南東〕 2.20+1.80	N-31.5°西	不整内郭 なし	なし	なし	
SB116	40	G-25-26	竪柱か	3×7間	-	8.35	〔北西側〕 2.80+2.80+2.75	-	-	N-40.0°東	不整内郭 地階部	なし	庭土部、 土層部	遺物ない可能性あり
SB117	41	F-G-25	竪柱	2×1間	11.2	5.25	〔東側〕 3.35+1.90 〔南側〕 3.00+2.80	2.75	〔南側〕 2.70 〔北側〕 2.80	N-160°東	不整内郭 不整内郭	あり (1区)	庭土部、 土層部	平高ブランクはゆがむ
SB118	42	F-25-26	竪柱	2×1間	21.7	5.45	〔北西側〕 2.30+3.25	4.35	〔南西側〕 4.35	N-43.0°東	不整内郭 不整内郭	あり (2区)	庭土部、 土層部	コケロ土層 部小室 (11 t)等
SB119	43	F-25-26	竪柱	2×2間	31.7	6.40	〔北側〕 3.20+3.20 〔東側〕 3.05+3.05	4.90	〔東側〕 2.40+2.50 〔南側〕 1.95+2.80	N-72.5°西 (南側) N-69.0°西	不整内郭 地階部	なし	庭土部、 土層部	平高ブランクはゆがむ
SB120	44	F-26-27	竪柱	2×1間	18.2+	6.00+	〔北側〕 (2.80)+(2.80)+	3.80	〔西側〕 3.80	N-61.5°東	不整内郭 あり (2区)	なし	庭土部、 土層部	遺物ない可能性あり
SA101	45	F-G-23	-	3間	-	6.05	2.15+(1.85)+(1.85)	-	-	N-13.0°西	地階部	あり (3区)	なし	
SA102	45	F-G-23, F-23	-	2間	-	6.80	3.60+(3.40)	-	-	N-17.5°西	地階部 地階部	あり (2区)	庭土部、 土層部	
SA103	46	E-F-24	-	5間	-	13.50	2.57+2.20+2.75+ 2.30+3.80	-	-	N-47.5°西	地階部 不整内郭	なし	庭土部、 土層部	SB110南西側部と新行
SA104	46	E-22-23	-	3間	-	7.75	2.25+2.30+2.30	-	-	N-57.0°東	不整内郭 なし	なし	なし	
SA105	48	E-21-25	-	1間	-	1.85	1.85	-	-	N-36.0°東	不整内郭 地階部	あり (2区)	なし	SB119と118は新行。SB102 より新
SA106	49	F-G-25	-	3間	-	6.50	1.90+2.45+2.50	-	-	N-81.5°西	不整内郭 不整内郭	なし	なし	SB118北側に新行か



第23図 G地区 第0-I面F地区SB104平面図・土層断面図(S=1/60)



第24図 G地区 第0・1面SB101平面図・断面図(S=1/60)

SB101(遺構：第24図)

E・F・20・21区で検出した総柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-21° Wを示し、桁行3間以上(8.85m以上)×梁間2間(4.10m)、床面積36.2㎡以上で、東側桁行に廂が付すと考えられる。柱間寸法は、桁行が2.90～3.05m、梁間が1.85m・2.25m・廂2.60mであり、梁間の柱間寸法と柱筋の通りはやや乱れる。柱穴の平面形態は不整円形を基本とし、南西隅の柱穴が径42～44cm、

深さ25cm、廂南東端の柱穴が径42～46cm、深さ25cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は濁灰褐～暗灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係は、SX1001より新しく、整地土106・107より古い。柱穴から遺物は出土していない。

SB102(遺構：第25図)

E・F22区で検出した小規模な掘立柱建物で、柱穴の一部を欠き、西側桁行北隅に1間分の廂が付す。主軸方位はN-22°Wを示し、桁行3間(6.30m)×梁間1間(1.95m)、床面積12.3㎡を測る。柱間寸法は桁行が210m、梁間が1.95m・廂1.85mで、梁間の柱間寸法が若干狭く、柱筋の通りはやや乱れる。柱穴の平面形態は不整形を呈し、北東隅の柱穴が径44～48cm、深さ15cm、南西隅の柱穴が径16～18cm、深さ7cmを測る。柱根、柱痕跡とも残存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁灰褐～暗灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は、廂北西隅柱穴がP1105より新しい。柱穴から出土遺物はない。

SB103(遺構：第26図、遺物：第62図)

E・F22区で検出した1×1間の小規模な掘立柱建物である。主軸方位はN-15°Wを示し、桁行寸法2.40m、梁間寸法2.15m、床面積5.2㎡を測る。柱穴の平面形態は不整形または略円形を呈し、P1115が径54～58cm、深さ44cm、南東隅の柱穴が径約36cm、深さ36cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁灰褐～暗灰色砂質土を基本とした柱抜取埋土である。P1115から第62図79の粗粒砂岩を用いた磨石が出土した。79は側面を敲打、両面を磨りに使用し、重さ936.9gを測る。他にP1115から第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片10数点が出土した。

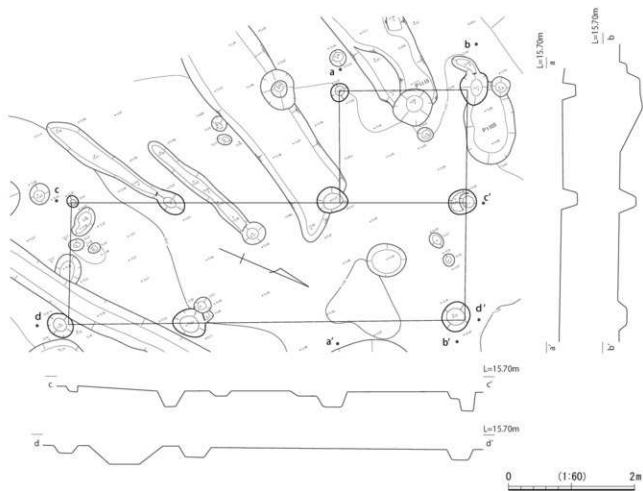
SB104(遺構：第27図)

E・F22・23区において整理時に復元した1×1間の小規模な掘立柱建物で、桁行が調査区外西側に延びる可能性をもつ。主軸方位はN-69°Wを示し、桁行寸法3.95m、梁間寸法3.05m、床面積12.0㎡を測り、柱間寸法はかなり広く、床東が存在した可能性をもつ。柱穴の平面形態は、建物主軸方向を指向した不整形楕円形を呈するものが主体で、P1081が長軸130cm、短軸76cm、深さ53cm、P1108が長軸122cm、短軸74cm、深さ41cmと、SB101・102と比して、かなり大振りな掘方を呈する。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁褐色または青灰色を呈する砂質土で、柱抜取埋土と考えられる。遺物は、P1080・81から第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器細片約30点が出土したにとどまる。なお、建物主軸線上にP1005があり、SB104に関連した柱穴の可能性をもつ。

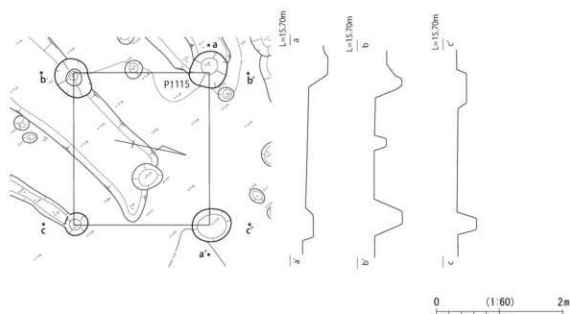
SB105(遺構：第28図、遺物：第47・48・62図)

F22・23区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、北側梁間に廂(桁行寸法220m・260m)が付すと考えられる。主軸方位はN-9°Eを示し、桁行3間(6.75m)×梁間1間(4.40m・4.60m)、床面積31.1㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.20～2.35mと、梁間寸法の約半分となり、梁間に床東が用いた可能性が高い。柱筋の通りは比較的良好のもの、廂部分はいびつである。柱穴の平面形態は不整形楕円形または不整形円形を呈するものが主体で、P1091が径46～50cm、深さ38cmを、P1097が長軸82cm、短軸48cm、深さ36cmを、P1121が径56～60cm、深さ27cmを測る。柱根は、P1097・1195等5本が残存、いずれも径約25cmを測る丸柱で、ベース土に若干沈みこむ。柱穴覆土は濁灰褐～灰褐色砂質土とベース土の混合土を基本とし、遺構の切り合い関係は整地土105・SD1023より古く、SB106より新しい。

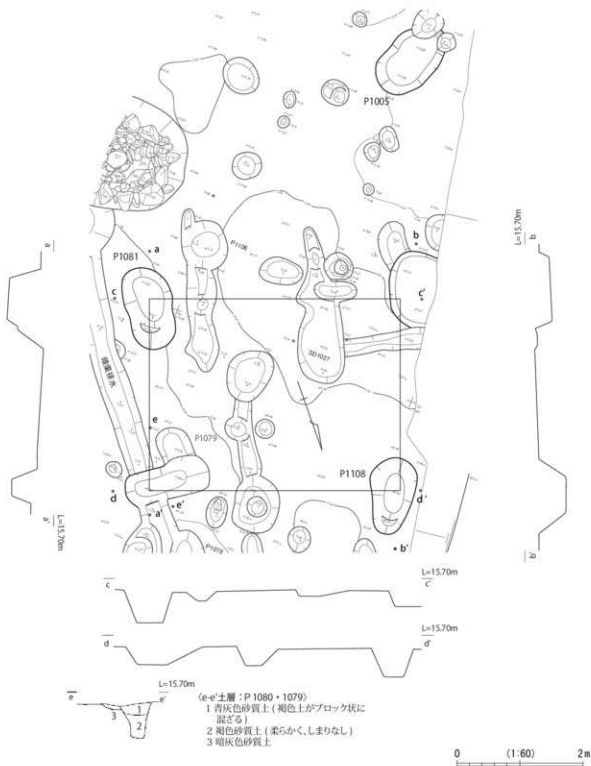
出土遺物のうち、第47図4～第48図9、第62図77を図化した。P1097出土の4は須恵器無台坏細片で、底部外面中央に記された墨書は判読できない。柱根は、腐食が著しいP1077出土の5を除き、残存長36～57cm、径約25cmを測る丸柱である。いずれも底面を平坦に加工しており、P1095出土の6上部には切断痕が認められる。樹種はマツ属複雑維管束亜属(クロマツまたはアカマツ)である。P1091出土の須恵器無台坏第62図77は、底部外面に墨書され、その文字は「文」にみえる。他に各柱穴から古代



第25図 G地区 第0・I面SB102平面図・断面図(S=1/60)



第26図 G地区 第0・I面SB103平面図・断面図(S=1/60)

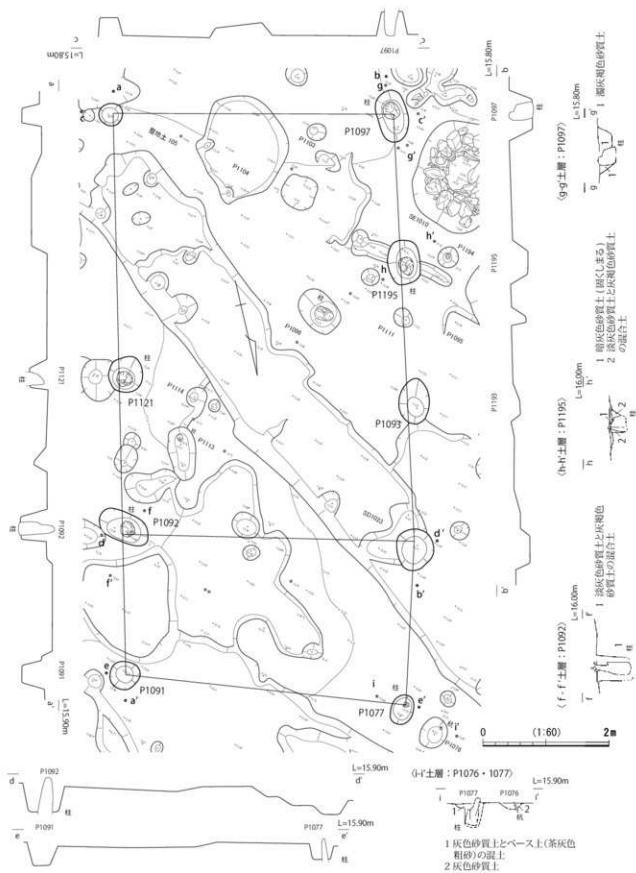


第27図 G地区 第O-1面SB104平面図・土層断面図(S=1/60)

に属する須恵器・土師器細片が少量出土した。

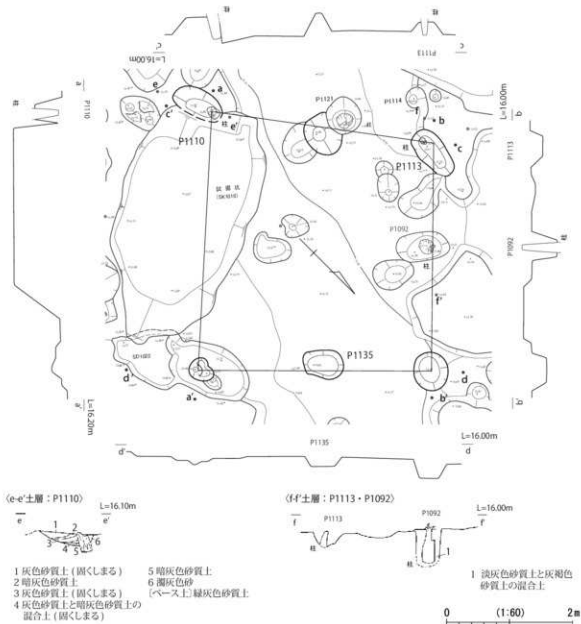
SB106(遺構：第29図、遺物：第48・72図)

F-23区で検出した側柱構造の掘立柱建物である。復元プランがやや歪むため、南隅柱をP1110ではなく、より北東側の試掘坑(SK1010)内に想定する復元案も考えられる。東桁の軸方位はN-45.5° Wを示し、桁行2間(3.70m)×梁間2間(3.60m)、床面積13.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m・2.00m、



第28図 G地区 第0-I面SB105平面図・土層断面図(S=1/60)

梁間の柱間寸法は1.65m・1.95mで、柱間寸法に差異が認められる。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整形を呈し、P1113が長軸84cm、短軸44cm、深さ21cm、P1135が長軸64cm、短軸46cm、深さ14cmを測る。柱根はP1092・1110・1113で残存し、径14～21cmを測る。柱穴覆土は、硬くしまった灰～暗灰色砂質土または灰色砂質土とベース土の混合土を基本とする。遺構の切り合い関係は、南西桁行中間の柱穴がSB105を構成するP1121より古い。遺物は、第48図10・13の柱根と第72図176のロクロ土師器小皿を図化した。P1110出土の芯持ち丸柱10は残存長45.5cm、径21.5cmを測り、底面を平坦に加工する。材は、マツ属複雑管東亜属(クロマツまたはアカマツ)を用いる。P1113出土の13はクリ材を用いた丸柱で、P1110柱根に比して細い。P1110出土の176は口径8.3cm、器高1.9cmを測り、胎土は粉っぽい印象を受ける。他にP1110・35から第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器細片が出土した。



第29図 G地区 第0・I面SB106平面図・土層断面図(S=1/60)

SB107(遺構：第30図、遺物：第72図)

G・22・23区に位置し、整理時に側柱構造の掘立柱建物を復元したが、建物とならない可能性を残す。主軸方位はN-55° Wを示し、桁行3間以上(7.05m～)×梁間3間(7.10m)、床面積14.1㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は2.35m、梁間の柱間寸法は2.10～2.50mで、柱筋は乱れる。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈するものが主体で、P1109は後世の攪乱を受ける。P1086が長軸110cm、短軸80cm、深さ25cmを、P1353が径64～88cm、深さ25cmを測る。また、P1123・1353で柱根の樹皮のみが残存し、その柱径は約15cmに復元できる。柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とし、遺構の切り合い関係はSB107よりSE1011が新しい。出土遺物のうち、P1086出土の第72図177の非ロクロ土師器小皿片を図化した。177は体部中程をヨコナデで屈曲させ、14世紀後半に位置付けられる。他にP1086・1128から古代の須恵器・土師器片約10点が出土した。

SB108(遺構：第31図)

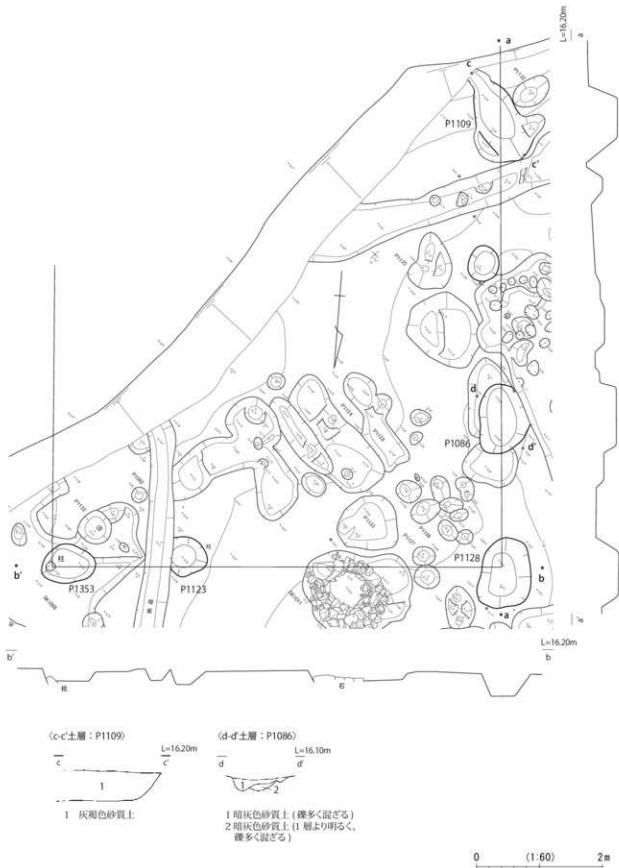
E・F・23・24区で復元した側柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-41° Wを示し、桁行2間(7.60m)×梁間1間(5.00m)、床面積38.0㎡を測る。桁行の柱間寸法は3.80m等間で、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異をもつ。柱穴の平面形態は、不整円形または不整楕円形を呈するものが多く、規模は整地土103の削平を受けた北西側桁行が東側桁行より小振りとなる。SK1012が径105～115cm、深さ40cm、北西側柱穴が径約20cm、深さ15cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土はSK1012が濁茶灰色砂質土と灰色砂質土が層状堆積、その他は暗灰褐～灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は整地土103より古く、遺物はSK1012から古代の非ロクロ土師器片1点が出土したにとどまる。

SB109(遺構：第32図)

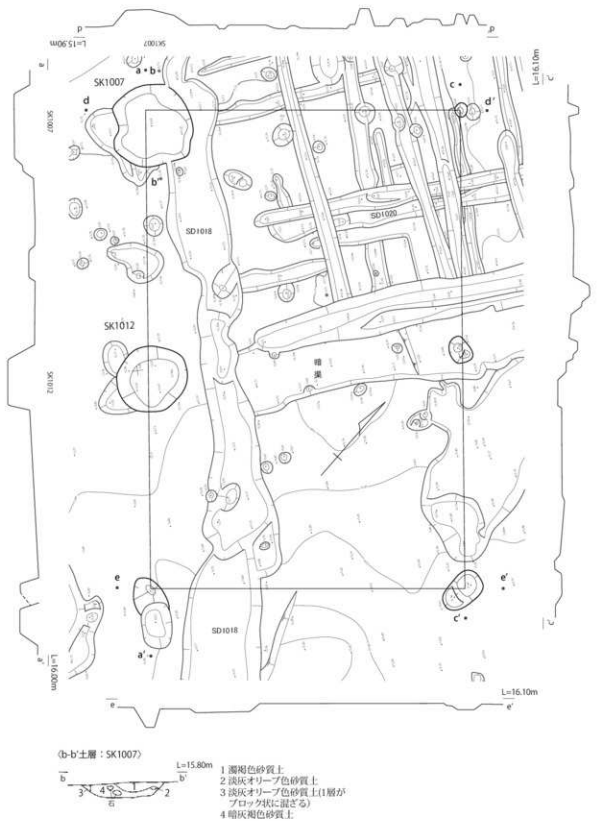
E・24区の整地土103除去後に検出した総柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-50° Eを示し、SB113と近似する。桁行2間以上(3.7m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。桁行の柱間寸法は1.80m、1.90m、梁間の柱間寸法は1.75mで、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められず、柱筋の通りはよいものと考えられる。柱穴の平面形態は略円形または不整円形を呈し、径28～52cm、深さ21～28cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は濁褐～暗灰色砂質土を基本とする。柱穴から遺物は出土していない。

SB110・SA103・105(遺構：第33～35図、遺物：第48・50・72図)

E・F・24・25区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、検出した建物の中で最も規模が大きい。南西側桁行に近接してSA103が、北西側梁間と並行してSA105が位置する。SB110の主軸方位はN-47° Wを示し、桁行2間(9.20m)×梁間1間(5.25m)、床面積48.3㎡を測る。また、桁行の柱間寸法は4.60m等間で、特定はできなかったが梁間を含めて床東が存在した可能性をもつ。柱穴の平面形態は不整円形または不整隅丸方形を呈し、長軸140～170cm、短軸120～150cm、深さ80～90cmを測る。柱根はP1045で柱表皮残欠が出土しており、P1042断面図の柱痕跡(第35図第2層)から径16cm程度の柱が建てられたと推定する。覆土は、柱掘方埋土と柱抜取埋土が観察でき、第34図P1039では第1～5層が柱抜取埋土、第6・7層が柱掘方埋土、P1038では第9・10層が柱抜取埋土、第11層が柱掘方埋土、第35図P1057では第4～8層が柱抜取埋土、第9・10層が柱掘方埋土となる。柱掘方埋土は、濁暗灰色や淡灰色を呈する粗砂・砂質土に径30cm以下の自然石を混ぜることを基本とし、P1042・57のように底面や側面に自然石を配した根固め作業も確認できる。柱抜取埋土は、濁暗灰～灰色または茶褐色を呈する砂質土とベース土に自然石の混合土を基本に、沈降を防ぐ目的で黄色粘土を混ぜた土(P1039第4層、P1038第9層、P1057第8層)を定量化している。遺構の切り合い関係は、SB110を構成するP1038が、SB111を構成するP1037より後出する。



第30図 G地区 第0-I面SB107平面図・土層断面図 (S=1/60)



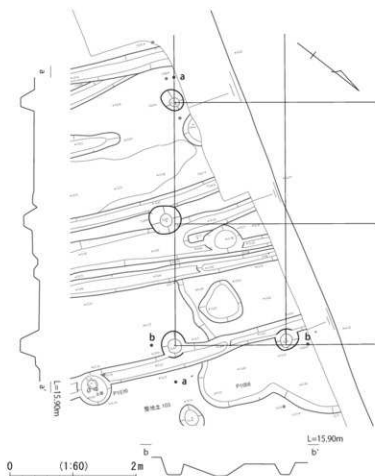
第31図 G地区 第0・1面SB108平面図・土層断面図 (S=1/60)

出土遺物のうち、P1045出土の第Ⅲ面以下に属する須恵器(第48図11・12)と、P1038出土の非ロクロ土師器小皿(第72図178)を図化した。坏蓋11は口径18.5cmを測り、天井部内面は使用に伴い磨耗する。厚手の瓶12の内面には黒色の付着物が認められる。小皿178の体部は内湾しながら立ち上がり、16世紀後半頃に位置付けられよう。また、中世以降の遺物として、P1038から珠洲焼と産地不明のすり鉢片が各1点、P1039から珠洲焼甕胴部片1点、P1042から珠洲焼甕胴部片、16世紀中頃以降の鉄軸陶器瓶片が各1点、P1045から15世紀代の白磁坏片1点が出土しており、いずれも細片のため建物の所属時期を示すか不明である。なお、北西側梁間に近いP1069はSB110に関連をもつ柱穴の可能性をもち、第48図14の柱根を図示した。マツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)を用いた丸柱14は径15.5cmを測り、底面を3方向から尖らせ気味に加工する。

SA103は、SB110南西側桁行に約85cm離れて並行する。5間(13.50m)を復元しており、柱間寸法は2.57～3.00mと不均等である。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、北東隅柱穴が長軸84cm、短軸48cm、深さ20cmを、P1058が径約56cm、深さ23cmを測る。柱根は出土していないが、北東隅柱穴とP1058で径約8cmの柱痕跡が残る。覆土はベース土が混ざる濁褐色砂質土を基本とする。P1058から第Ⅲ面以下の須恵器・土師器片数点が出土した。SA105は、SB110北西側梁間に約2m離れて並行する。柱根が残る1間分(柱間寸法1.85m)を復元したが、P1040も一体をなす可能性を残す。柱穴の平面形態は略円形または不整形を呈し、P1041が径約70cm、深さ23cmを、P1070が径約50cm、深さ20cmを測る。覆土は濁褐～灰色砂質土とベース土の混合土であり、遺構の切り合い関係はSE1002より新しい。柱穴より土器類は出土せず、第50図26・27の柱根を図化した。いずれも径約9cmを測り、底面を2方向から杭状に尖らせる。26はスギ材、27はクリ材である。

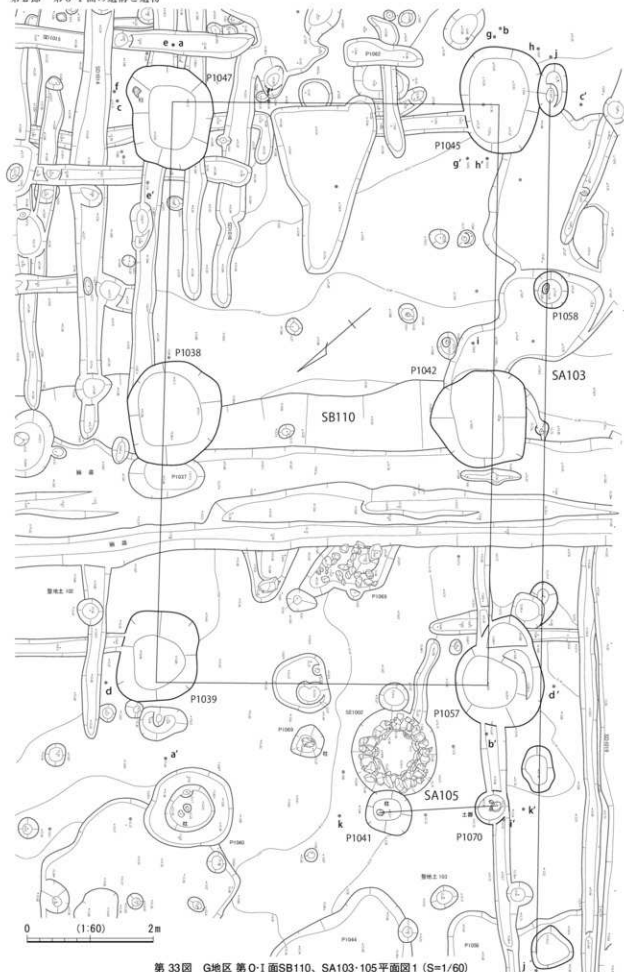
SB111(遺構：第36図)

E・F・25区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、主軸方位はN-47.5°Wを示す。桁行1間(4.70m)×梁間1間(3.80m)、床面積17.9㎡を測り、柱間寸法が長いことから床束を用いたと考えられる。柱穴の平面形態は不整形または不整楕円形を呈し、P1037が長軸122cm、短軸70cm、深さ53cmを、P1055が径約60cm、深さ40cmを測る。柱根は残存しないが、P1055等で径約10cmの柱痕跡が確認できる。柱穴覆土は濁暗灰褐～灰色砂質土とベース土の混合土で、遺構の切り合い関係はSB110より古い。遺物は、P1055から14世紀後半代の珠洲焼すり鉢片1点が出土したが、細片のため建物の所属時期を示すか不明である。

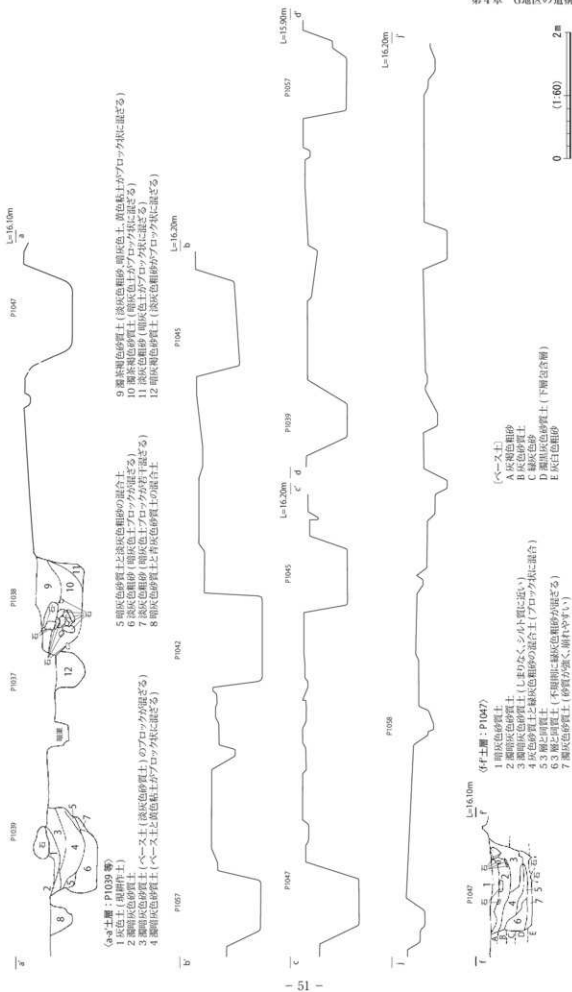


第32図 G地区 第0-I面SB109平面図・断面図(S=1/60)

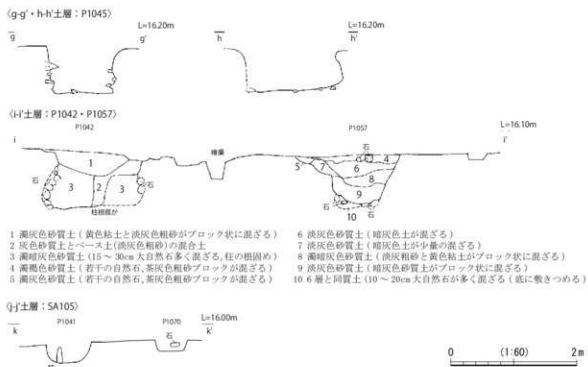
第2節 第0-1面の遺構と遺物



第33図 G地区第0-1面SB110、SA103-105平面図1 (S=1/60)



第34図 G地区 第0:1面SB110、SA103土層断面図1 (S=1/60)



第35図 G地区 第0・1面SB110、SA105土層断面図(S=1/60)

SB112(遺構：第37図)

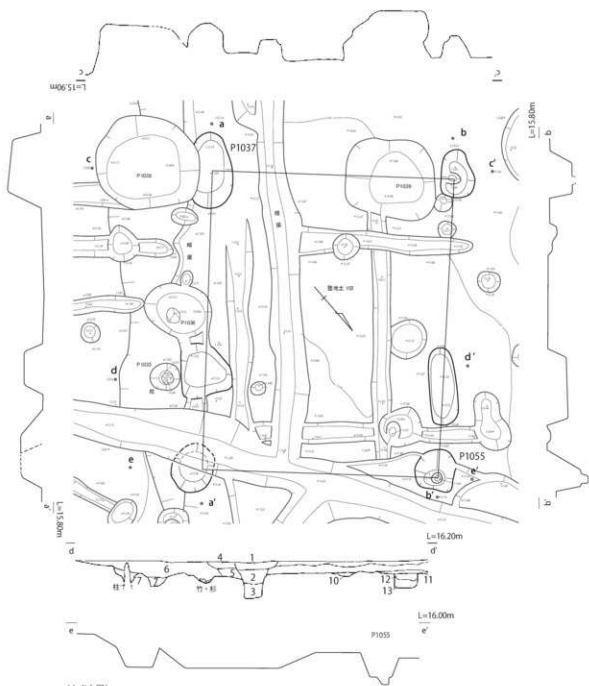
E-25区の整地土103除去後に検出した側柱構造の掘立柱建物で、柱穴に複数の抜けがあるため建物でない可能性を残す。主軸方位はN-77°Wを示し、桁行3間(4.70m)×梁間2間(2.80m)、床面積13.2㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.40～1.80m、梁間が1.40m等間であり、柱筋の通りは若干乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、径16～40cm、深さ10～28cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は暗灰～暗灰褐色砂質土である。SK1005との切り合いは不明で、出土遺物はない。

SB113(遺構：第37図)

E-25区の整地土103除去後に検出した総柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN-41°Wを示し、SB109と近似する。桁行3間以上(6.40m～)×梁間1間以上(2.10m～)、床面積13.4㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は1.65～2.70mと不均等であり、南西端の柱穴が建物を構成しない可能性を残す。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、径28～52cm、深さ28～48cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁暗灰～暗灰褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係では、P1043がSK1005より新しくなる。遺物は、P1043から12世紀代のロクロ土師器皿細片2点が出土した。

SB114(遺構：第38図)

E-26区の整地土101・102除去後に検出した総柱構造の掘立柱建物である。主軸方位はN-56°Wを示し、桁行2間(4.75m)×梁間2間(4.70m)、床面積22.3㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.95m・2.80m、梁間の柱間寸法は2.30m・2.40mで、平面プランは若干乱れる。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、径18～38cm、深さ7～21cmと、耕地整地の削平度合いで差異を示す。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁黒灰色～灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係はSK1003(SE1013)より古く、出土遺物はない。



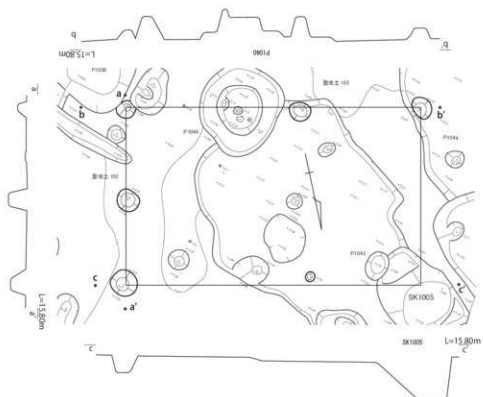
(d-d'土層)

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| 1 濃褐色土 (淡灰色粗砂が混ざる) | 7 暗褐色砂質土と淡灰色粗砂の混合土 |
| 2 淡灰色粗砂 (褐色土がブロック状に混ざる) | 8 淡灰色砂質土と暗褐色砂質土の混合土 |
| 3 暗灰褐色砂質土 (しまりない) | 9 暗灰褐色砂質土 (層状に淡灰色粗砂が混ざる) |
| 4 濃褐色土 | 10 暗灰褐色砂質土 |
| 5 濃灰色砂質土 | 11 青灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土 |
| 6 濃暗褐色色砂質土 (淡灰色粗砂がブロック状に混ざる) | |

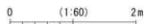
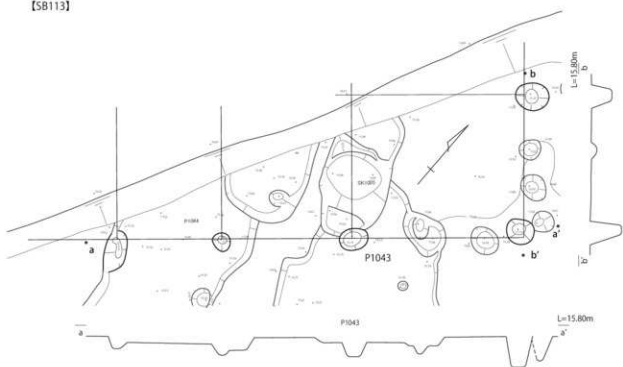
0 (1:60) 2m

第36図 G地区 第0-I面SB111平面図・土層断面図(S=1/60)

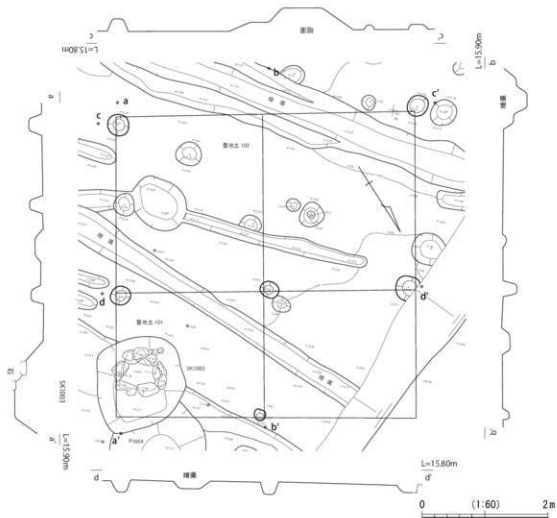
【SB112】



【SB113】



第37図 G地区 第0・I面SB112・113平面図・断面図(S=1/60)



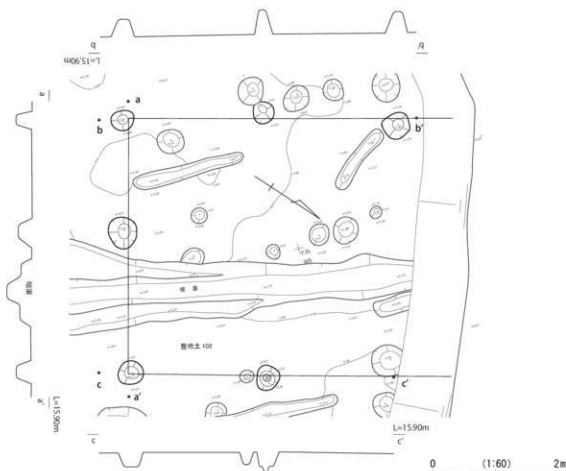
第38図 G地区 第0-I面SB114平面図・断面図(S=1/60)

SB115(遺構：第39図)

E-25・26区で整地土102・103除去後に検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-31°Wを示し、桁行2間以上(4.30m)×梁間2間(4.00m)、床面積17.2㎡以上を測る。柱間寸法は、桁行が2.15m等間、梁間が1.80m・2.20mで、桁行と梁間の柱間寸法に大きな寸法差は認められず、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は不整形形を呈するものが主体で、径32～50cm、深さ22～32cmを測り、柱根は遺存しないものの柱痕跡から径約10cmの円柱が推定できる。柱穴覆土は暗灰色砂質土とベース土の混合土である。他遺構の切り合い関係と出土遺物はない。

SB116(遺構：第40図)

G-25・26区に位置し、調査区外東側に延びる掘立柱建物を想定した。主軸方位はN-31°Wを示し、桁行3間(8.35m)、桁間の柱間寸法2.75～2.80mを測る。柱穴の平面形態は略方形または不整形形を呈し、P1005が一辺48～56cm、深さ34cmを、P1018が径72～88cm、深さ34cmを測る。柱根は遺存しないものの、柱痕跡から径30cm程度の円柱が推定できる。柱穴覆土は、濁暗灰～灰色砂質土を基本とし、P1016は円石が多く混ざる濁茶褐色細砂質土となる。遺構の切り合い関係では、P1018がSD1010より古い。P1005・18・20から第三面以下に属する須恵器・土師器片の他、P1018から珠洲焼堯胴部片1点が出土した。



第39図 G地区 第0・1面SB115平面図・断面図(S=1/60)

SB117・SA106(遺構：第41図、遺物：第49図)

SB117は、F・G-25区で復元した小規模な掘立柱建物で、平面プランは歪みをもつ。主軸方位はN-10° Eを示し、桁行2間(5.25m)×梁間1間(2.70m)、床面積14.2㎡を測る。桁行の柱間寸法は、北側が3.00～3.35m、南側が1.90～2.00mと、柱間寸法に大きな差異をもつ。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整円形を呈し、P1004が径24～28cm、深さ8cmを、P1048が長軸92cm、短軸50cm、深さ32cmを測る。柱根はP1004・46・48で残存した他、P1004から腐朽した柱根の残欠が、SB110を構成するP1047と重複する柱穴から柱残欠と考えられるマツ様の樹皮片がそれぞれ出土した。柱穴覆土は、濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。SB117北西隅柱穴と、SB110を構成するP1047との切り合い関係は不明である。遺物は、第49図15・16の柱根を図化した。隅柱であるP1046出土の15は、クリ材を用いた芯持ち丸柱で径21～25cmを測る。平坦に加工された底面には砂が圧着する。P1048出土の16はコナラ節の芯持ち材を用いた丸柱で、径約13cmと一回り細くなる。他にP1004・43・48から古代の須恵器・土師器片が出土した。

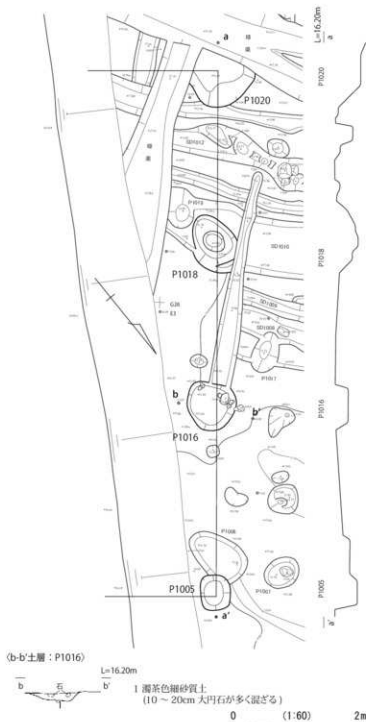
SA106は、SB117の北側梁間の北側80～100cmに位置する。3間(6.50m)を復元しており、柱間寸法は1.50～2.50mと不均等である。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、北西隅柱穴が長軸54cm、短軸34cm、深さ24cmを、北東隅柱が径24～30cm、深さ25cmを測る。柱根、柱痕跡とも遺存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土である。SD1014と並行する溝より古く、出土遺物はない。

SB118(遺構:第42図、遺物:第72図)

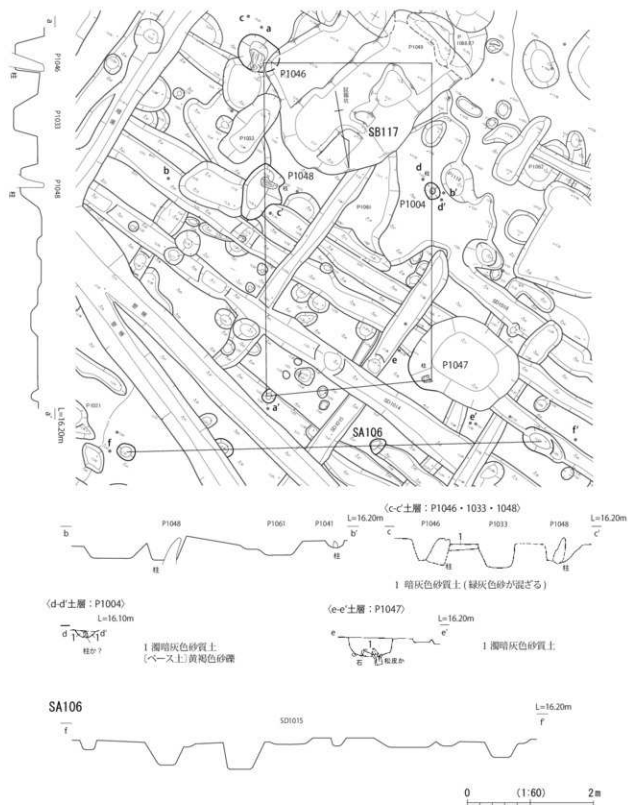
F-22・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、SB119と重複する位置関係にある。主軸方位はN43°Eを示し、桁行2間(5.45m)×梁間1間(4.35m)、床面積23.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.20m・2.35mで、梁間には床束が用いられたと考える。柱穴の平面形態は不整楕円形または不整形を呈し、桁行中間柱穴の掘方は隅柱穴より小さい。P1036で長軸110cm、短軸88cm、深さ43cm、P1353で径約34cm、深さ30cmを測る。柱根は、P1036・53でベース面に沈み込んだ状態で出土した他、残る柱穴にも柱痕跡が確認できる。柱根は、P1036が径約25cm、P1053が径約20cmを測る。柱穴覆土は、ベース土が混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係は、SE1003より古い可能性をもつ。遺物は、P1036出土の非口クロ土師器小皿(第72図179)を図化したのが、細片のため建物の所属時期を示すか不安を残す。179は腰部で屈曲し、14世紀後半代に位置付けられる。他にP1024・36・52から古代の須恵器・土師器片数点が出土した。

SB119(遺構:第43図)

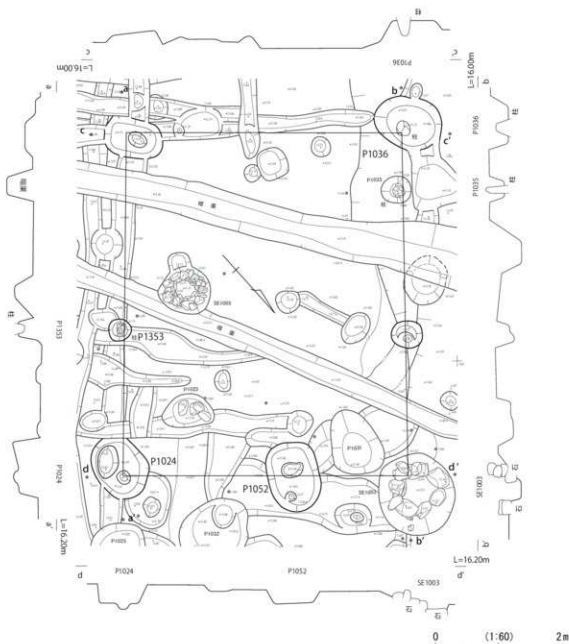
F-25・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、SB118と重複する位置関係にある。主軸方位はN約70°Wを示し、桁行2間(6.40m)×梁間2間(4.95m)、床面積31.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は3.05～3.20m、梁間の柱間寸法は1.95～2.80mと不均等である。柱穴の平面形態は不整形または略方形を呈し、南側桁行に比して北側桁行は小振りである。南西隅の柱穴が一辺46～50cm、深さ33cm、P1011が一辺94～108cm、深さ53cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土はベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする柱抜取埋土となる。遺構の切り合い関係はP1010・31より古く、P1002・11から古代の須恵器・土師器片が出土したにとどまる。



第40図 G地区第0・I面SB118平面図・土層断面図(S=1/60)



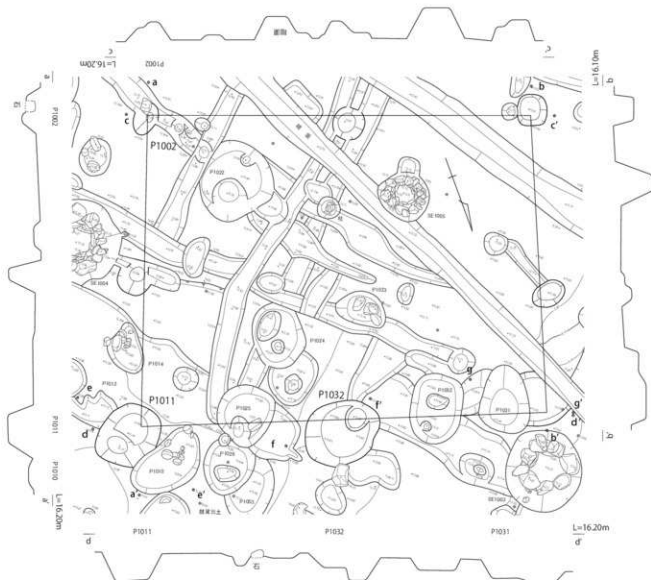
第41図 G地区 第0-I面SB117-SA106平面図・土層断面図(S=1/60)



第42図 G地区 第0-1面SB118平面図・断面図(S=1/60)

SB120(遺構：第44図、遺物：第49図)

F-25・26区に位置し、整理時に復元した側柱構造の掘立柱建物で、柱穴が複数欠落するため建物としない可能性を残す。主軸方位はN-61.5° Eを示し、桁行2間以上(4.80m)×梁間1間(3.80m)を測る。桁行の柱間寸法は、柱穴の削平を前提とすれば約2.40mと考えられる。柱穴の平面形態は不整形を呈するものが主体で、P1028が径46～66cm、深さ24cmを、P1051が径50～62cm、深さ21cmを測る。柱根は、P1028・1051・1301で残存し、径10cm前後を測る。柱穴から土器類は出土せず、第49図17～20の木製品を図化した。P1028出土の17は3ヶ所に切断痕を残すスギ材である。P1051出土の杭18はスギ材を、径約11cmを測る柱根19はクリ材を用いる。P1301出土の柱根20は径約13cmを測るクリ材で、底面を4方向から粗く加工する。



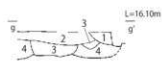
(e-e'土層：P1010～P1012)

- 1 薄灰色砂質土 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 2 暗灰色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 1層と同質土 (やや明るい)
- 4 薄淡灰色粗砂 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 5 薄暗灰色砂質土
- 6 灰色砂質土



(f-f'土層：P1032)

- 1 薄灰茶色砂質土(暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 2 薄淡灰色粗砂
- 3 灰色砂質土(暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 薄暗灰色砂質土
- 5 薄淡灰色粗砂 (淡灰色土がブロック状に混ざる)

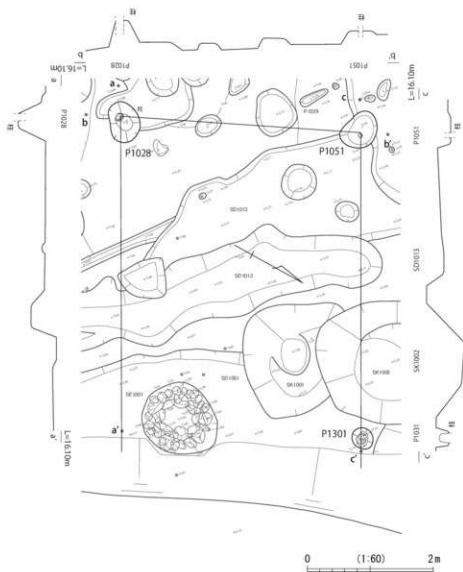


(g-g'土層：P1031)

- 1 整地上 101 覆土
- 2 灰茶色砂質土 (暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 灰色砂質土 (暗灰色土、淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 薄黒灰色砂質土



第43図 G地区 第0・1面SB119平面図・土層断面図(S=1/60)



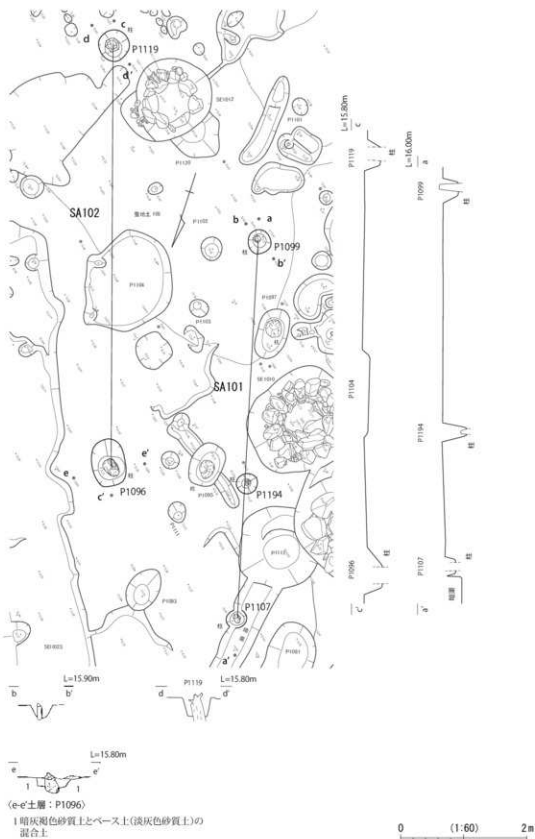
第44図 G地区 第0-1面SB120平面図・断面図(S=1/60)

SA101(遺構：第45図、遺物：第49図)

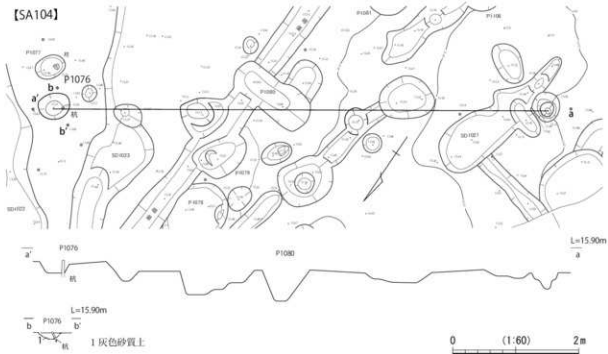
F-22・23区に位置し、一部の柱穴を欠くが3間分(6.05m)の橋を復元した。柱間寸法1.95～2.05m、柱穴は径約35cm、深さ17～35cmを測る。柱穴の平面形態は略円形を呈し、覆土は濁暗灰～灰色砂質土である。柱穴から土器類は出土せず、柱根2点(第49図21・22)を図化した。ともにクリ材を用いており、保存状態は良好である。P1094出土の21は径約9cmを測り、平坦に加工された底面に砂が圧着する。P1107出土の22は径約13cmを測り、底面の加工は粗い印象を受ける。

SA102(遺構：第45図、遺物：第50図)

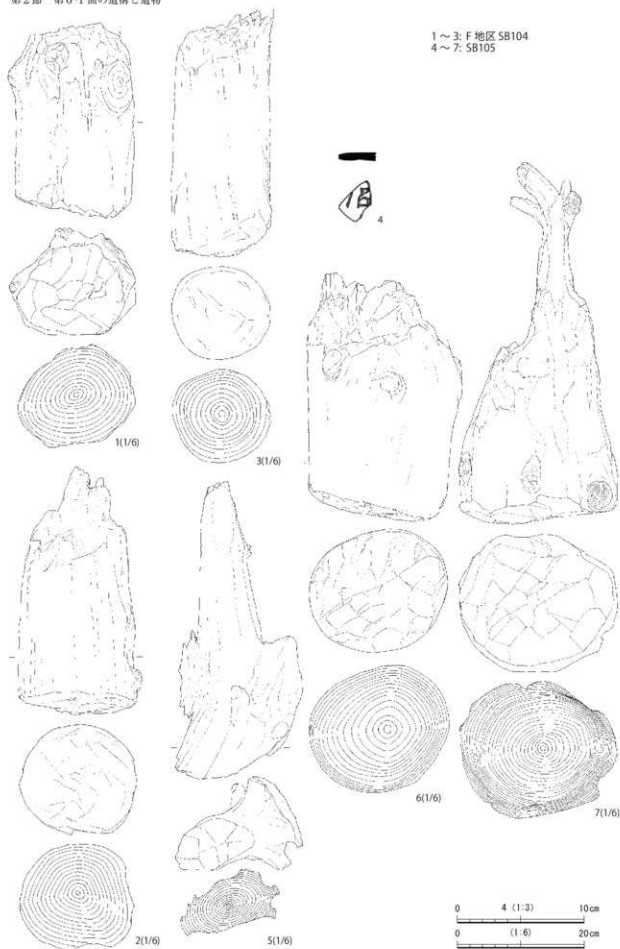
G・F-22・23区で検出し、SA102にはほぼ並行する。中間柱は未検出で、延長6.80mを測る。平面略長方形を呈するP1096が長軸74cm、短軸52cm、深さ24cm、平面略円形を呈するP1096が径約40cm、深さ24cmを測る。覆土はベース土が混ざる濁灰～暗灰褐色砂質土で、遺存した2本の芯持ち丸柱はベース土に沈みこむ。P1119出土の第50図23は径約22cmを、P1096出土の24は径16～18cmを測り、マツ属複雑管束亜属材を用いる。各柱穴から古代の須恵器・土師器片が定量出土した。



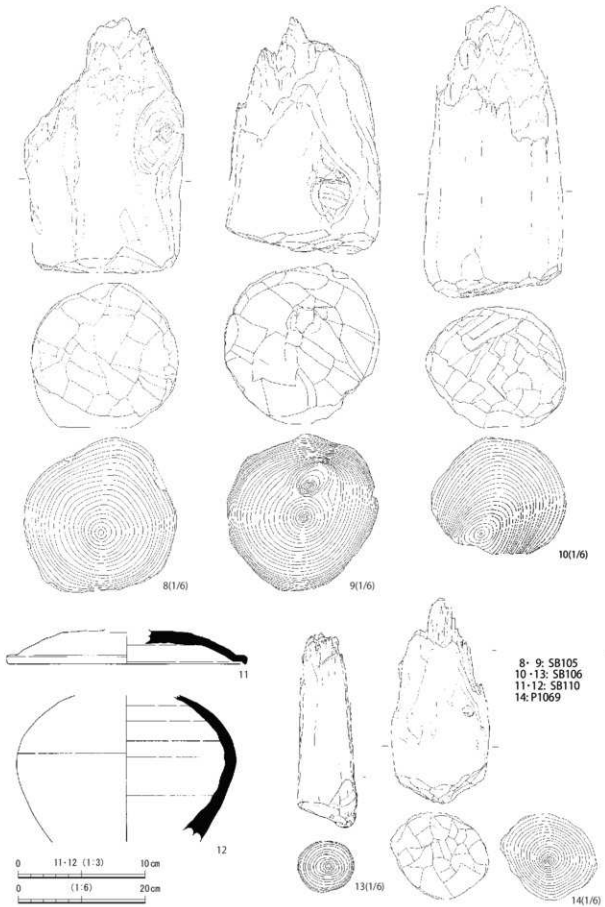
第45図 G地区 第0-1面SA101・102平面図・土層断面図(S=1/60)



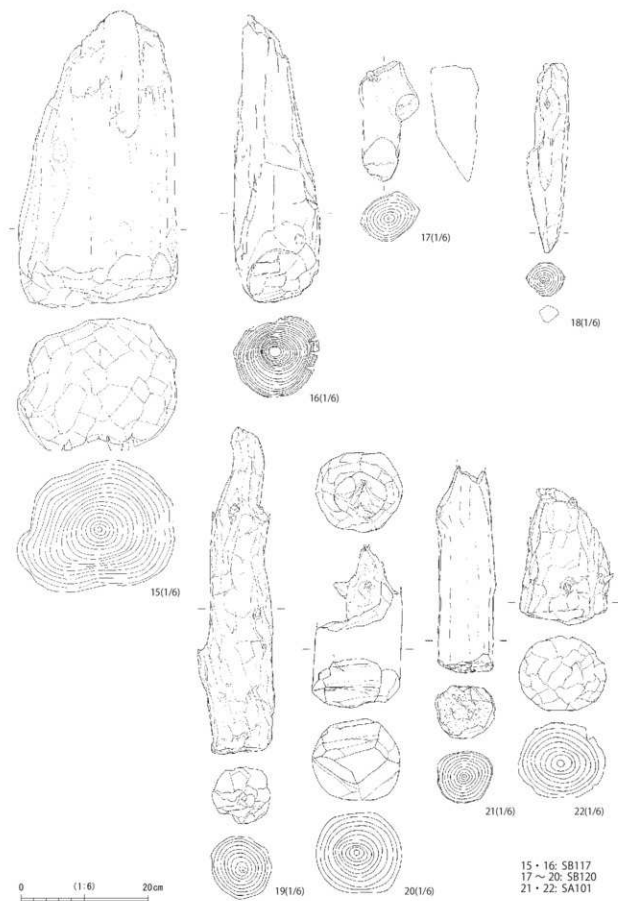
第46図 G地区 第0-I面SA104等平面図・土層断面図(S=1/60・100)



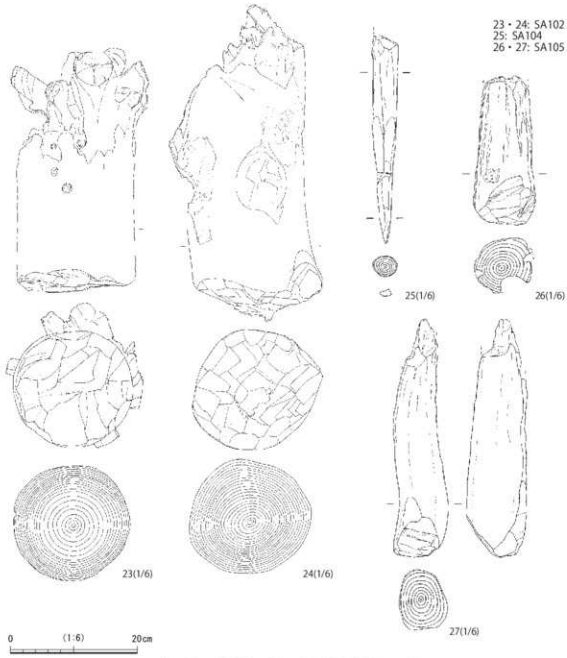
第47図 G地区 第0-1面SB出土遺物実測図1(S=1/3・1/6)



第48図 G地区 第0-I面SB出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



第49図 G地区 第0・1面SB・SA出土遺物実測図(S=1/6)



第50図 G地区 第O-1面SA出土遺物実測図(S=1/6)

SA104(遺構：第46図、遺物：第50図)

F-23区で3間分(7.75m)の櫓を復元した。柱間寸法2.25～2.30m、平面略円形を呈する柱穴は径約45cm、深さ30～42cmを測り、覆土は濁褐灰～灰色砂質土である。柱穴から土器類は出土せず、P1076出土の杭(第50図25)を図化した。25はクリ材を用いて、2方向から先端を鋭く加工する。

基礎様ビット群(遺構：第46・59図、遺物：第61図)

E・F-22区において、遺構検出・掘削作業当初に礎石建ち建物等の根固め石を想起させる浅いビット群を確認した。ビット群は、10～20cm大の自然石が多く混ざる特徴をもち、ほぼ南北方向または南東-北西方向に主軸方向を示すが、礎石建ち建物とする明確な平面プランを提示できなかった。基礎様ビット群として報告し、類例の増加を待ちたい。ビット群は、第46図のとおり不整形円形または不整形な平面プランを呈し、11穴を数える。規模は、長軸60～80cm、短軸50～70cm、深さ15～

20cmを測るものが主体を占め、最も大きいP1009が長軸約110cm、短軸約80cm、深さ11cmを測る。覆土は自然石が混ざる濁茶色砂質土である。遺物は、P1013から第61図64、P1015から同図65・66・68が、P1025から同図69が出土した。64の銅銭は摩滅が著しく、文字は判読できない。ロクロ土師器小甕65は底部外面に静止糸切り痕は残る。ロクロ土師器甕66は口径23.5cmを測り、口縁端部を内屈気味に仕上げる。須恵器無台盤68は口径14.5cm、器高2.5cmを測り、体部は外反気味に立ち上がる。灰軸陶器製の灯明受皿69は口径10.4cm、器高2.0cmを測り、19世紀代に位置付けられる。他にP1009・10・14・15・23・25から古代の須恵器・土師器が、P1015から珠洲焼堯片1点が、P1025から珠洲焼堯片、肥前陶器片各1点がそれぞれ出土した。

3 井 戸(遺構：第51～54図、第9表、遺物：第55・57・58図、第10・14・15表)

現地調査時に土坑(SK)と分類した遺構を含めて13基の井戸を検出した。曲物側板を井戸側材に用いるSE1008以外の井戸は、石組みの井戸である。分布は、F-22区に3基、G-23区に3基、G-24区・E-25区・F-25区・E-25区に各1基、E-26区に3基と偏在傾向を示し、敷地割りを反映した可能性が高いと考える。比較的高い地下水位のため、第9表のとおり上端内径(石組内径)35～80cm、深さ80cm以下を測る小型の井戸が主体を占める。平面形態は、略方形のSE1009以外は円形または略円形を呈し、すり鉢状の掘方をもつ。石組は、井戸内面の仕上がりや強く意識して、調査区内外で採集できる未加工の自然石を5cm以下の裏込め石を用いながら、4～6段積み上げを基本とする。掘方埋土は、ベース土と黒褐色砂質土の混合土が多い。また、SE1006・09には、底面の水溜施設に用いた曲物側板が遺存していた。出土遺物は総じて少ないものの、井戸の存続時期は16世紀後半～17世紀代を中心にするかと推定できる。なお、土坑、ピットの中には、石組みをもたないものの同程度の規模・底面レベルをもち、現地調査時に恒常的な湧水を認めた遺構が存在する。このような素掘り井戸の可能性をもつ遺構については、各遺構の説明で付記している。

SE1001(遺構：第51図)

調査区北端F-26・27区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、石組に近接しており、井戸側の石組は上端内径65～80cm、深さ44cm、底面の標高15.48mを測る。石組は4段が残存し、底から1・2段目が長軸25～40cm大を測る比較的大振りの自然石をしっかりと長手積み、3～4段目が10～25cm大の小振りな石を小口積み風に積み上げる。井戸覆土は、植物遺体が多く混ざった、しまりのない暗灰色シルト質土が堆積した後に、井戸側上部の石組を含むと考えられる10～30cm大の自然石が混ざる土で埋め戻される。他遺構との切り合い関係はSD1001より前出し、出土遺物はない。

SE1002(遺構：第51図、遺物：第55図)

E-24・25区で検出した比較的深度の石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、石組に近接し、井戸側の石組は上端内径75～85cm、深さ76cm、底面は北側で10cm程度深くなり標高14.93mを測る。石組は6段が残存し、底から1段目をやや内側に据えた後、2～6段目を丁寧にほぼ垂直に積み上げる。使用した自然石は、西側の1石(長軸約30cm)を除いて、10～20cm強を測る略円形の自然石が主体をなし、用いる側石の大きさをそろえた印象が強い。裏込め石はほとんど認められない。井戸覆土は、下層から機能時に堆積した淡灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層、埋戻し土である濁灰色弱粘質土(上位に多くの10～30cm大自然石を詰める(写真図版9))となる。また、埋戻しに用いた石で周囲を固めながら、第55図31の径約11cmを測る柱根を据え置くことから、埋戻し直後に構造物を建てた可能性が高い。他遺構の切り合い関係は、整地土103、P1041より前出する。

第9表 G地区 第0-I 面SE規模等一覧表

遺構番号	グリッド	平面形態	掘方上端 径 (cm)	上端内径 (cm)	発出部から の深さ (cm)	井戸底面の 標高 (m)	石組残 存段数	水廻施設	出土土器類	備考
SE1001	F-26・27	略円形	120	65~80	44	15.48	3~4	なし	なし	自然石等で埋戻し
SE1002	E-24・25	略円形	135~140	75~85	76	14.93	6	なし	備前焼すり鉢 (16c末~17c初)	自然石等で埋戻し SA1005より古
SE1003	F-26	略円形	120~130	45~50	49	15.31	1~3	なし	なし	御石は一部抜き取り
SE1004	F-26	略円形	130~140	55~65	77	15.18	5	なし	須恵器、土師 器等	自然石等で埋戻し
SE1005	F-25	略円形	75~82	35~40	50	15.32	4 (あり)	瀬戸・美濃天 目鏡 (16c後)	一部損壊。自然石等で埋 戻し	自然石等で埋戻し
SE1006	G-24	略円形	113~138	65~80	56	15.47	2~5	あり (曲物)	染付碗 (16c)	御石は一部抜き取り。自 然石等で埋戻し
SE1007	G-23	略円形	120~160	80	48	15.48	3~5	なし	須恵器、土師 器	御石は一部抜き取り。裏 込め石あり
SE1008	G-23	円形	60~92	60~67	74	15.09	0	あり (曲物)	瀬戸美濃焼飯 、非ロクロ土師 器小皿等	備材に数段の曲物か
SE1009	F-22	略方形	辺180~200	辺110~130	96	14.65	5~6	あり (曲物)	土師器	裏込め石あり
SE1010	F-22	略円形	155~180	80~90	78	14.80	4~5	なし	須恵器、土師 器	裏込め石あり
SE1011	G-23	略円形	120~155	75~85	82	15.03	6	なし	須恵器	補強の杭あり。裏込め石 5~10cm大。SB107より新
SE1012	F-22	略円形	120~135	70~75	49	15.11	2	なし	肥前系磁器染 付碗	上部は損壊
SK1003 (SK1013)	E-26	不整形 [上半] 140~150 [下半] 90~95		40~60	52	15.13	2	なし	珠洲焼妻等	底面にコモ。上部は損壊

覆土から出土した遺物のうち、第55図28~31を図化した。28は、第2層出土の須恵器有台で底部と体部の境で明瞭に屈曲、体部は大きく外傾する。29は覆土第2層最上面出土の備前焼すり鉢で口径23.5cm、器高10.1cmを測り、器面は赤褐色を呈する。肥厚した口縁部は内傾した面をもち、内面に10条1単位のおろし目を密に施す。16世紀末~17世紀初めに位置付けられる。覆土第1層上面出土の柱根30・31は、30が井戸埋め戻し時の廃棄品、31は井戸廃棄後に据え置かれたものである。30はニレ属の材で樹皮が残る。31は節のある部分を下にした芯持ち丸柱である。他に須恵器・土師器片が各1点出土した。

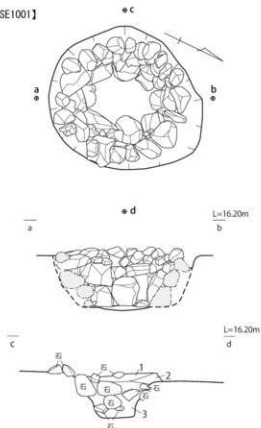
SE1003 (遺構：第51図)

F-26区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は、上部が比較的大きく、井戸側の石組は上端内径45~50cm、深さ49cm、底面の標高15.31mを測る。石組は、底から1段目が完存するが、2・3段目は廃絶以降に抜き取られたため一部が残存するにとどまる。底から1段目は長軸30~40cm大を測る大振りの自然石をしっかりと長手積みし、2・3段目は20~30cm大のやや小振りな石を小口積み風に積みあげる。井戸覆土は、淡灰色粗砂の褐色腐植土が自然に交互堆積した後に、周囲に15~30cm大の自然石を配しながら、40~45cmを測る大きな自然石1石を中心に据え置き、しっかりと塞いで埋め戻す。他遺構との切り合い関係は整地土103より前出し、出土遺物はない。

SE1004 (遺構：第52図)

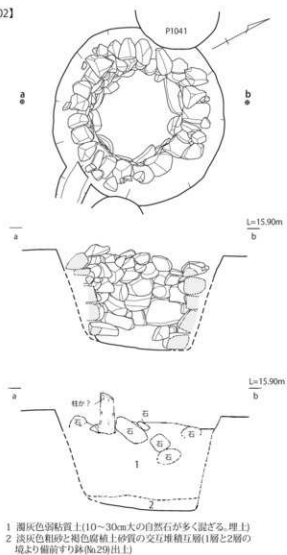
F-26区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、井戸側の石組は上端内径55~65cm、深さ77cm、底面の標高15.18mを測る。石組は5段が残存し、南東側が30~40cm大を測る比較的大きな自然石の長手積みを主体とする一方、北西側が15~20cm大を測る自然

【SE1001】



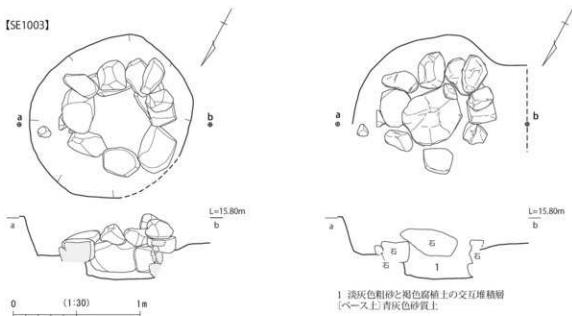
- 1 暗灰色シルト質土 (植物遺物がよく混ざる)
- 2 暗灰色シルト質土 (1層と同質土、やや明るい)
- 3 暗灰色シルト質土 (1層と同質土、やや暗い)

【SE1002】



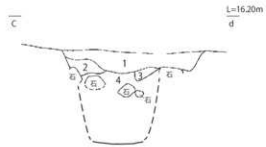
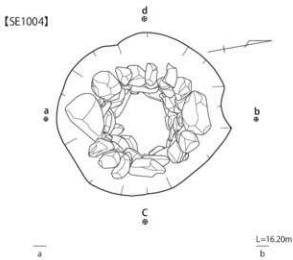
- 1 薄灰色弱粘質土(10~30cm大の自然石が多く混ざる、埋土)
- 2 淡灰色粗砂と褐色腐植土砂質の交互堆積互層(1層と2層の境より植前すり鉢No.29出土)

【SE1003】

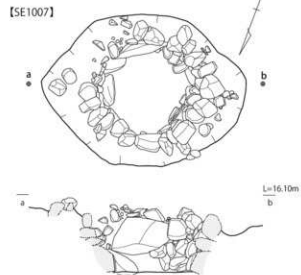
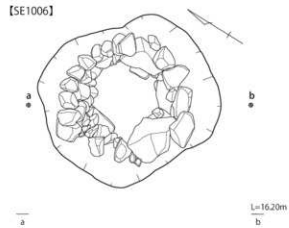
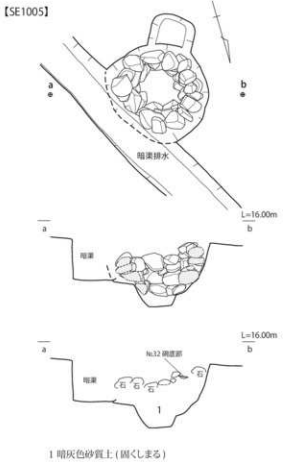


- 1 淡灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層
〔ベース土〕青灰色砂質土

第51図 G地区 第0・1面SE平面図・土層断面図1(S=1/30)



- 1 濁茶灰色砂質土 (淡灰色粗砂が混ざる)
- 2 濁暗灰色砂質土 (炭化物、淡灰色粗砂が混ざる)
- 3 灰色砂質土
- 4 にぶい灰褐色細砂と淡灰色粗砂の交互堆積層 (10～20cm 大自然石が多く混ざる、理上)



第52図 G地区 第0-1面SE平面図・土層断面図2(S=1/30)



石を小口積み風に積み上げる傾向を示す。また、5段目は南北方向2ヶ所に長軸35～40cmの自然石を配し、その間を15～20cm大の自然石を配する。井戸覆土は、下層から10～20cm大の自然石が多く混ざる灰褐色細砂と淡灰色粗砂が交互に自然堆積した後、濁暗灰～灰色を呈する砂質土、ベース土である淡灰色粗砂が混ざる濁暗灰色砂質土(埋土)となる。他遺構との切り合い関係は、SD1008より前出する。古代の須恵器坏類、土師器甕類数点の他、尖底と考えられる製塩土器片1点が出土した。

SE1005(遺構：第52図、遺物：第55図)

F-25区で検出した石組井戸で、東側は近代の暗渠排水で一部損壊する。平面形態は略円形を呈し、検出した井戸の中でも規模が小さい。井戸の掘方は石組に極めて近接しており、井戸側の石組は上端内径35～40cm、深さ50cm、底面の標高15.32mを測る。石組は4段が残存し、10～15cm大を主体(最長22cm)とする平面楕円形の自然石を小口積み風に積み上げる。また、底面は1段深くなり、遺存しないものの曲物等の水溜施設が存在した可能性が高い。底面が湧水のない固くしまった濁青灰色砂質土層内に留まることから、水溜的機能が強いものと考えられる。井戸覆土は、ベース土である淡灰色粗砂と褐色腐植土層が交互に自然堆積後、8～15cm大の自然石と暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻す。井戸覆土第2層(検出面より約10cm下がった自然石の間)から第55図32の瀬戸・美濃の鉄軸天目鏡が出土した。32は暗赤褐色の軸の後に、厚みをもつ黒～黒褐色の軸を施し、16世紀後半に位置付けられる。他に出土遺物はない。

SE1006(遺構：第52図、遺物：第55図)

G-24区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整長方形を呈する。井戸側の石組は、上端内径65～80cm、深さ56cm、底面の標高15.47mを測る。井戸側の石組は最大で5段、西側は崩落等により2段のみが残る。石組は、南～東側は面を意識しながら20～40cm大の自然石を比較的粗く積み上げる一方、北～西側は10～20cm大の小振りの自然石を密に積み上げる。井戸底から曲物銅板残片が出土しており、水溜施設が存在したと考えられる。廃絶時には、10～20cm大の自然石と濁暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻される。他遺構との切り合い関係は、東側のP1118より新しい。遺物は、覆土から16世紀代の中国製染付碗細片(第55図33)が出土したにとどまる。

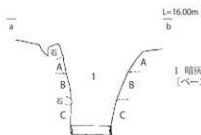
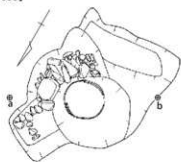
SE1007(遺構：第52図、遺物：第55図)

G-23区で検出した石組井戸である。平面形態は略円形を呈し、石組西側はSD1018掘削時に一部が抜き取られ、損壊する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整楕円形を呈する。井戸側の石組は、上端内径約80cm、深さ48cm、底面の標高15.48mを測る。石組は5段が残存し、内面の仕上がりを意識した南東側の1石(長さ約45cm、高さ約30cm)を除いて、10cm強～25cm程度の自然石を下段は長手積み、上段は小口積み風に積み上げる。また、上段の石組には4cm程度の大きさをもつ裏込め石が一部で確認できる。廃絶時に10～30cm大の自然石と濁暗灰色砂質土でしっかりと埋め戻す。他遺構との切り合い関係では、SD1018、SK1008より前出する。井戸の掘方から須恵器・土師器数点が出土しており、第55図34の須恵器坏蓋を図化した。扁平な34は口径13.7cmを測り、ナデ調整を加えた天井部は広い印象を受ける。

SE1008(遺構：第53図)

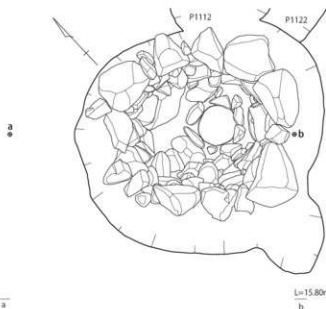
G-23区で検出した小型井戸で、井戸側材に曲物銅板を用いる。平面形態は円形を呈し、西側を除いて張り出しが存在する。井戸の掘方は、下方ほど垂直に近く、上端径60～67cm、下端径33cm、深さ74cm、底面の標高15.09mを測る。井戸底に径33cm、高さ7cmの曲物銅板が残存した他、掘り下げ作業中に高さ30cm程度の曲物銅板を確認したこと(井戸側の崩落により断片のみ取上げ)や、掘方の形状から、井

【SE1008】

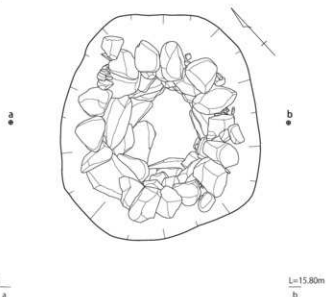


1 暗灰色シルト質土と緑灰色砂の混合土
 【ベース】 A 明灰色砂質土
 B 暗灰色シルト質土
 C 灰白色粗砂（礫多く混ざる。崩れやすい）

【SE1009】



【SE1010】



【SE1009-1010】(第14・16図)



- 1 灰色砂質土
- 2 暗灰色弱粘質土（柔らかい）
- 3 濃茶灰色粗砂と灰色砂質土の混合土
- 4 濃灰色砂質土
- 5 濃青灰色砂質土
- 6 灰色弱粘質土(30～40cm大の自然礫混ざる。埋土)

0 (1:30) 1m

第53図 G地区 第0-1面SE平面図・土層断面図3(S=1/30)

戸側材として数段の曲物側板を用いたと考える。また、東側の張り出しは、5cm大及び10～15cmの自然石を用いて、幅約25cmにわたり井戸縁を補強しており、北側張り出し(深さ約15cm)には5～10cm大の自然石を敷き詰めた可能性が高い。廃絶時に暗灰色シルト質土と淡灰緑色砂で埋めるが、他の井戸とは異なり、自然石はほとんど混ざらない。他遺構との切り合い関係はなく、古代の須恵器坏蓋・非ロクロ土師器甕片や、中世の瀬戸美濃焼瓶頸部片、被熱した非ロクロ土師器皿底部片が出土した。

SE1009(遺構：第53図、遺物：第55図)

F-22区で検出した最も大きな石組井戸で、平面形態は胴の張った略方形を呈する。井戸の掘方は石組に近接しており、上端辺180～200cmを測る。井戸側の石組は、上端内辺110～120cm、深さ96cm、底面の標高14.65mを測る。石組は、40～50cm大の自然石の間に10～30cm大の自然石を配しながら、比較的粗く5～6段積み上げ、最上段のみは仕上がり面を意識して30～50cm大の自然石を長手積みする。また、底面中央を1段掘り下げ、水溜施設として曲物側板(径30cm、残存高14cm)を据え置き、その外縁を10～20cm大の自然石を丁寧に配しながら、しっかりと固定する。廃絶時は、30～40cm大の自然石が混ざる灰色弱粘質土で埋めた後に、暗灰色弱粘質土、灰色砂質土が自然堆積する。東側でSE1010と隣接し、他遺構との切り合い関係は暗渠排水、整地土105より古く、17世紀中葉の肥前系陶器天目碗(第72図181)が出土したP1112より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、井戸底付近から出土した曲物底板(第55図35)、井戸側材に用いた曲物側板片(同図36)を図化した。35は径13.8cm、厚さ1.0cmを測る。側面13ヶ所に木釘痕(うち6ヶ所に木釘残存)があり、破損等により側板を取替えた痕跡と考えられる。36は高さ6.7cmを測り、内面には密にケビキを入れる。ともにスギ材を用いる。他に古代の土師器甕片数点が出土した。

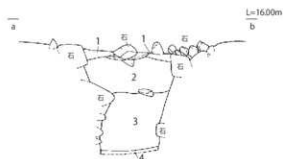
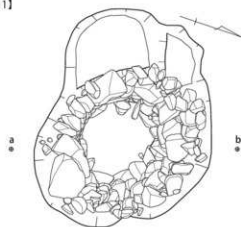
SE1010(遺構：第53図)

F-22区で検出した石組井戸で、平面形態は略円形を呈する。井戸の掘方は石組に近接し、平面不整形円形を呈する。井戸側の石組は、上端内径80～90cm、深さ78cm、底面の標高14.80mを測る。石組は5段が残存し、30～40cm大の自然石を長手積みと小口積みを織り交ぜながら、仕上がり面を意識して丁寧に時計回りで積み上げる。また、上段の石組には4cm程度の大きさの裏込め石が確認できる。廃絶時に、下層から30～40cm大の自然石が混ざる灰色弱粘質土、濁灰色砂質土、濁茶灰色粗砂と灰色砂質土の混合土でしっかりと埋め戻す。他遺構との切り合い関係は暗渠排水、整地土105に前出し、古代の須恵器坏片、土師器甕細片が出土した。

SE1011(遺構：第54図、遺物：第55図)

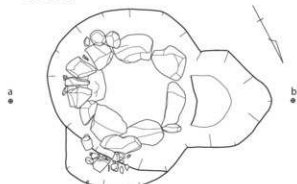
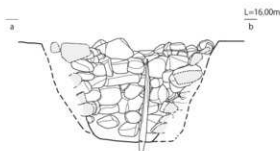
G-23区で検出した石組井戸で、西側に張り出しが存在する。井戸の掘方は石組に近接し、不整形円形を呈する。井戸側の石組は、すり鉢状に緩く、上端内径75～85cm、深さ82cm、底面の標高15.03mを測る。石組は6段が残存し、仕上がり面を意識しながら下から5段目までは15～30cm大の自然石の長手積みを基本に積み上げた後、6段目のみ長軸20～40cm大の自然石をしっかりと小口積みする。上段の石組には5～10cm程度の大きさの裏込め石が確認できる。また、石組に内接して2本の杭が打込まれており、失われたものの板等を用いた方形の井戸側材の設置が想定できる。井戸覆土は、下層から緑灰色粗砂、暗緑灰色粗砂～砂質土が堆積した後に、10cm大の石が多く混ざる明灰色砂質土、10～30cm大の石が混ざる灰褐色砂質土で埋め戻す。他遺構との切り合い関係はなく、井戸側に添った杭(第55図37・38)を図化した。37は残存長80.7cm、径約6cmを測る芯持ちのクリ材、38はコナラ節の材を用いた芯去りの分割材である。他に古代の須恵器坏蓋1点が出土した。

【SE1011】

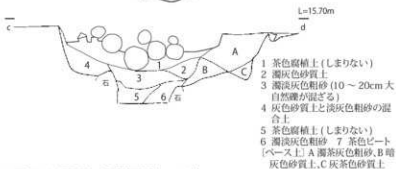
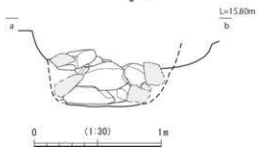
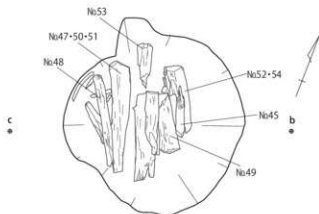
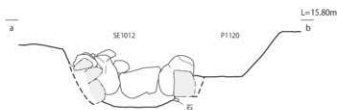
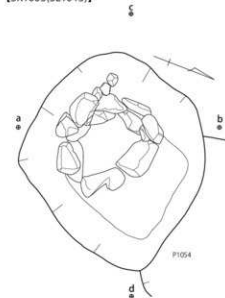


- 1 灰褐色砂質土 (10～30cm大の自然石が混ざる, 10cm程度が多い)
 2 明灰色細砂質土 (やや粘性あり, 10cm程度の石が多く混ざる)
 3 暗緑灰色砂質土 (粗砂混, 5cm以下の小石が多く混ざる)
 4 緑灰色粗砂

【SE1012】

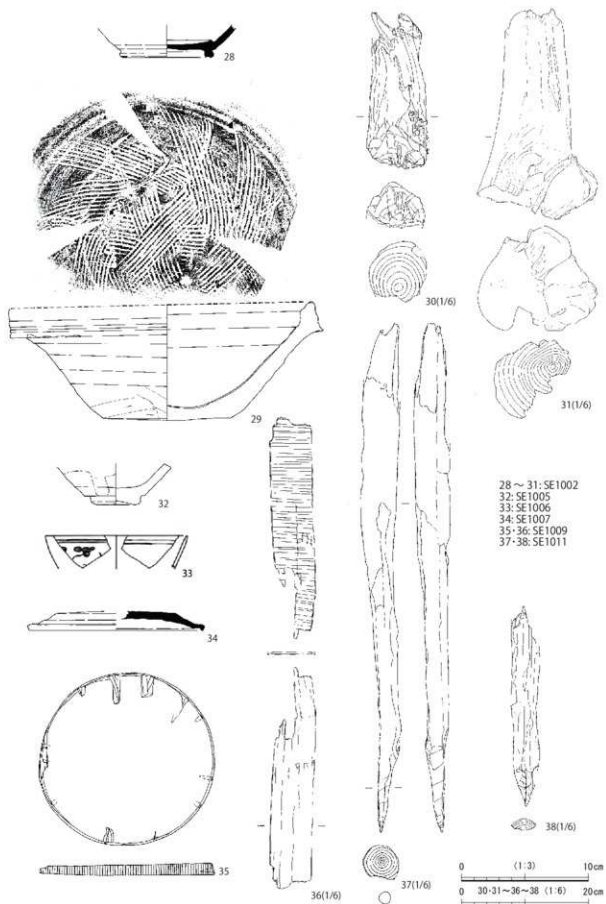


【SK1003(SE1013)】



- 1 茶色腐植土 (しまりない)
 2 濁灰色砂質土
 3 濁淡灰色粗砂 (10～20cm大
 自然礫が混ざる)
 4 灰色砂質土と淡灰色粗砂の混
 合土
 5 茶色腐植土 (しまりない)
 6 濁淡灰色粗砂 7 茶色ビート
 [ベース] A 濁茶灰色粗砂, B 暗
 灰色砂質土, C 灰茶色砂質土

第54図 G地区 第0-I面SE・SK平面図・土層断面図(S=1/30)



第55図 第0・1面SE出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

SE1012(遺構：第54図)

F-22区で検出した平面略円形を呈する石組井戸で、整地土105の造成により上部を損壊する。井戸の掘方は石組に近接し、井戸側の石組は上端内径70～75cm、深さ49cm、底面の標高15.11mを測る。石組は2段が残存し、1段目は長軸30～40cm大の自然石を長手積みで据え置き、2段目に20cm大の自然石を小口積みする。裏込め石はほとんど存在しない。覆土は濁暗灰色砂質土の単層である。他遺構との切り合い関係は、P1120より新しく、暗渠排水、整地土105より古い。遺物は、重複する整地土105覆土出土の可能性を残す近世肥前系磁器の染付碗細片(未図化)の他、古代の須恵器・土師器片が出土した。

SK1003(SE1013)(遺構：第54図、遺物：第57・58図)

E-26区で検出した。平面略円形を呈する石組井戸と、整地土101造成に伴う平面略方形の廃棄坑が重複しており、井戸上部は損壊する。井戸の掘方は井戸組石に近接して平面略円形を呈する。井戸側の石組は平面略五角形を呈し、上端内径40～60cm、深さ52cm、底面の標高15.13mを測る。仕上がり面を強く意識した石組は2段が残存し、長軸20～40cmを測る大振りの自然石を長手積みで据え置き、裏込め石は確認できない。また、腐食と湧水が著しく取上げできなかったが、底面にワラで編んだコモ片を確認している(写真図版11)。井戸覆土は、下層から濁淡灰色粗砂、しまりのない茶色腐植土が自然堆積した後、10～20cm大の自然石が混ざる濁淡灰色粗砂～砂質土で埋める。その後、水田造成の際に石組み上部を外して、沈降防止や廃棄を目的に長さ16～70cm台を測る12本以上の柱根等を同一方向に整然と掘えきながら、しまりのない茶色腐植土とともに埋める。これらの柱根等は、水田造成時に周辺の遺構から抜き取られ、きれいに並べて一括廃棄されたものと考えられる。他遺構との切り合い関係はP1054より新しく、井戸本体は整地土101より古い。

第1層から出土した一括廃棄の木製品12点(第57図45～第58図56)を図化した。木製品は、径5cm前後の杭・部材等(45、46、54)、径7cm前後を測る欄等に用いたと考えられる柱根(48、55、56)、径11～20cmを測る柱根(47、49～53)、角材と考えられる54に大別でき、前2者は底面を斜め方向に加工する。また、54(スギ材)以外は、芯持ち材(45：コナラ節、46・55：スギ、47：ニレ属、48～52：マツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)、53：クリ、56：ケヤキ)を用いる。他に古代の須恵器・土師器片数点と、摩滅した珠洲焼甕胴部片1点が出土した。

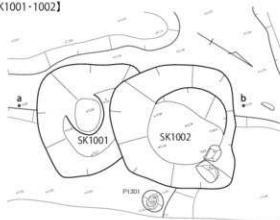
4 土 坑(遺構：第56図、遺物：第57・58図、第10・12表)

土坑(SK)は6基を確認している(SK1003・06・07は井戸に種別変更したため欠番)。平面形態から、楕円形～略方形を呈して素掘り井戸や廃棄坑の可能性をもつもの(SK1001・02・05・09)と、不整形な落ち込み(SK1004・1008)に大別できる。また、SK1005は12世紀代に、SK1001・02は近代以降に、それぞれ属する。

SK1001(遺構：第56図、遺物：第57・72図)

F-263区・F-27-1区で検出した平面不整形を呈する近代以降の土坑である。長辺178cm、短辺172cm、深さ65cmを測り、中央部は一段深くなる。底面に暗灰色砂質土が堆積した後、一度に埋められる。遺構の切り合い関係では、SK1002より古く、SD1001より新しい。覆土から出土した遺物のうち、第57図39の須恵器有台坏、第72図180の肥前系磁器染付碗を図化した。39は厚手で、外展する体部に扁平な台部を貼り付ける。180は淡い色調の呉須で梅・唐草文を描き、18世紀代に位置付けられる。他に須恵器・土師器片、15世紀後半のすり鉢を含む珠洲焼片数点、越前焼甕・すり鉢片各1点、古瀬戸皿片1点等が出土した。

【SK1001-1002】



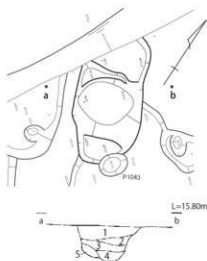
- 1 灰色砂質土 (黒色土がブロック状に混ざる)
- 2 1層と同質土 (1層より暗い)
- 3 灰色砂質土と黒色砂質土の混合土
- 4 にぶい灰色砂質土 (しまりない)
- 5 濃淡灰色砂質土 (灰色土がブロック状に混ざる)
- 6 濃灰褐色砂質土 (自然石が混ざる)
- 7 3層と同質土
- 8 灰色砂質土
- 9 にぶい暗灰色砂質土 (しまりない)

【SK1004】



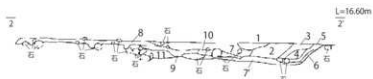
- 1 濃淡茶灰色粗砂と砂利の混合土

【SK1005】



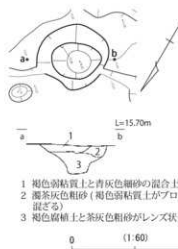
- 1 濃灰色砂質土、淡灰色砂質土、砂利の混合土 (固くしめる)
- 2 暗灰色砂質土と淡灰色砂質土の混合土 (粒子細かい)
- 3 暗灰色砂質土 (淡灰色砂質土ブロックが混ざる)
- 4 3層と同質土 (3層より暗い)
- 5 濃茶灰色砂質土 (砂利が混ざる。ベース上の崩落)

【SK1008】(第16図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 1層と同質土 (1層より明るい)
- 3 1層と同質土 (2層より明るい)
- 4 暗灰色砂質土 (褐色粗砂が混ざる)
- 5 灰色砂質土
- 6 暗灰色細砂
- 7 濃暗灰色シルト質土 (砂質が強い)
- 7 濃暗灰色シルト質土 (腐植植物が多く混ざる)
- 8 灰褐色砂質土
- 9 暗灰色砂質土
- 10 暗灰色砂質土 (灰白色砂が混ざる)
- 11 暗灰色砂質土 (暗緑灰色砂が混ざる)

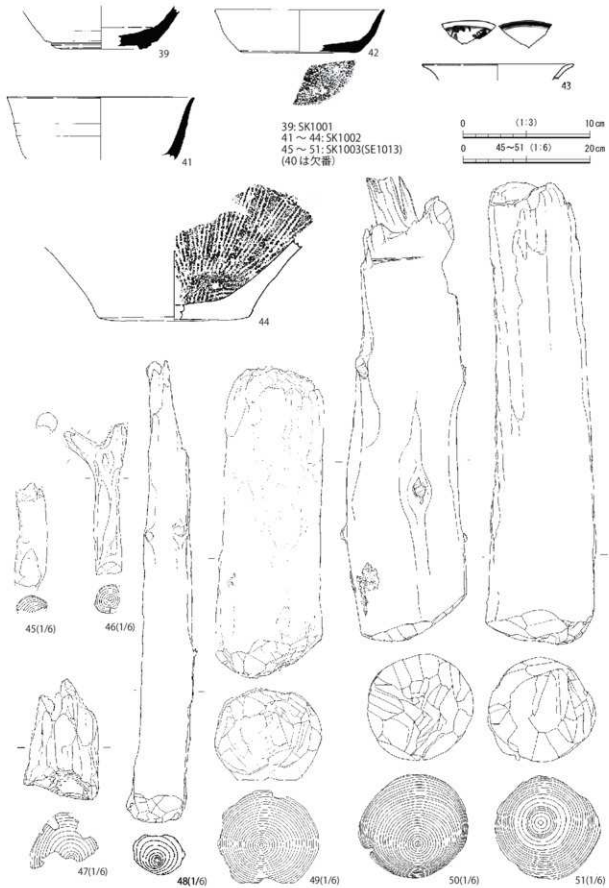
【SK1009】



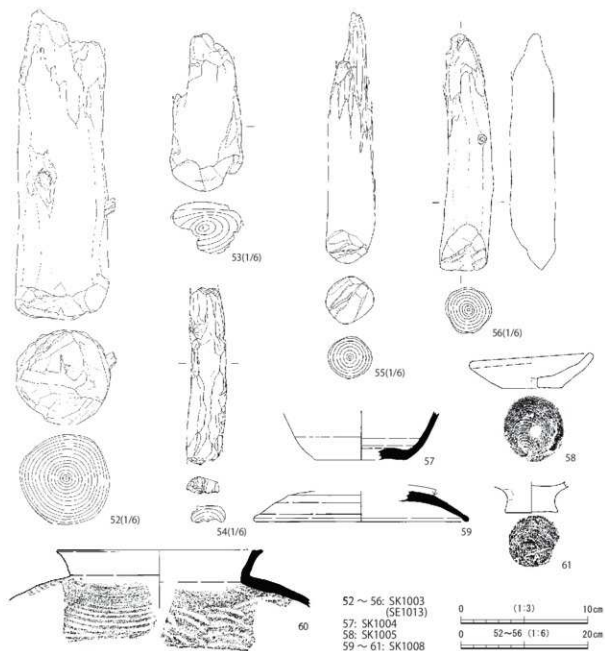
- 1 褐色弱粘質土と青灰色細砂の混合土
- 2 濃茶灰色粗砂 (褐色弱粘質土がブロック状に混ざる)
- 3 褐色腐植土と茶灰色粗砂がレンズ状に堆積

0 (1:60) 2m

第56図 G地区 第0-1面SK平面図・土層断面図 (S=1/60)



第57図 G地区 第O-1面SK出土遺物実測図1(S=1/3-1/6)



第58図 G地区 第0・1面SK出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

SK1002(遺構:第56図、遺物:第57図)

F-26.3区・F-27.1区で検出した平面不整形方を呈する近代以降の土坑である。長辺206cm、短辺196cm、深さ約70cmを測り、底面は起伏をもつ。底面に灰色砂質土が堆積した後、埋められる。遺構の切り合い関係はSK1001、SD1001より新しい。覆土から比較的多くの遺物が出土、第57図41~44を図化した。須恵器有台坏41は口径14.6cmを測る。還元の弱い須恵器無台坏42は口径13.3cm、器高3.4cmを測り、底部外面は使用に伴い磨耗する。中国製の染付碗43は、口縁部は端反りする。内面に被熱痕を残し、15世紀後半~16世紀代に位置付けられる。越前焼すり鉢44は、内外面に赤褐色のサビ釉を施し、使用に伴う磨耗が著しい。また、煮沸容器に転用されたため、水平方向に煤が付着する。16~17世紀代に位置付けられる。他に須恵器・土師器、珠洲焼、越前焼、明治時代以降を含む陶磁器片多数が出土した。

SK1004(遺構：第56図、遺物：第58図)

F-26-2区で検出した不整形な浅い落ち込みである。長軸約195cm、短軸約185cm、深さ17cmを測り、底面は平坦である。濁淡茶灰色粗砂と砂利で埋められ、他遺構の切り合い関係はP1008より古い。覆土から古代の須恵器・土師器片約40点が出土、うち第58図57の深身の須恵器坏類57を図化した。

SK1005(遺構：第56図、遺物：第58図)

E-25-1-3区で検出した平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸200cm以上、短軸約95cm、深さ約65cmを測り、平面略円形を呈する中央部が一段深くなる。覆土は埋土を基本とし、他遺構との切り合い関係は整地土101、SB113より古い。覆土から完形のロクロ土師器小皿第58図58が出土し、祭祀的行為として埋納した可能性が高い。口径9.3cm、器高2.8cmを測り、焼成前に底部穿孔を行う。12世紀前半に位置付けられる。他に古代の土師器甕片が出土した。

SK1008(遺構：第16・18・56図、遺物：第58図)

G-23-3-4区で検出した平面不整形を呈する落ち込みである。長軸420cm以上、短軸約160cm、深さ約30cmを測り、底面は比較的平坦である。覆土は、暗灰～灰褐色系の砂質土とシルト質土が複雑に堆積する。遺構の切り合い関係はSD1018より古く、SE1007より新しい。出土遺物のうち、第58図59～61を図化した。須恵器灯蓋59は口径16.5cmを測り、口縁端部を丸くおさめる。須恵器甕60は口縁部内端に使用に伴って著しく磨耗する。底部柱状を呈するロクロ土師器皿61は、二次被熱で煤が付着する。他に須恵器・土師器約40点、珠洲焼甕片4点、在地系と考えられる土師器すり鉢片1点が出土した。

SK1009(遺構：第56図)

F-21-4区で検出した平面不整形形を呈する土坑で、素掘り井戸の可能性をもつ。径100～104cm、深さ44cm、底面の標高14.91mを測る。上部はすり鉢状の掘方を持ち、井戸とした場合は底面に曲物側板等の水溜施設が想定できる。褐色腐植土と茶灰色粗砂が自然堆積した後埋められており、遺構の切り合い関係では整地土104より古い。古代の須恵器・土師器片が出土した。

5 ビ ッ ト

調査区全体で多数のピットを検出しており、復元できなかった建物等構造物の柱穴や素掘り井戸を含むものと考えられる。現地で作成した断面図は第59・60図に載せてある。以下では、主に遺物を実測した特徴的なピットについて記す。

P1003(遺構：第22図、遺物：第61図)

F-26-1区で検出し、平面略円形を呈する。長径110cm、短径約70cm、深さ約42cmを測り、覆土はベース土が混ざる暗灰色砂質土である。遺構の切り合い関係はP1025・26より古い。覆土上層南東寄り(標高15.84m)で裏面を上方に向けた銅銭2点が重ねて埋められる。第61図62は摩滅が著しいが、北宋銭で真書体の天聖元寶と考えられる。63は背宣・上月の開元通寶である。他に須恵器・土師器片約10点が出土した。

P1019(遺構：第20・59図)

G25-4区で検出し、平面略円形を呈する。径45～60cm、深さ27cmを測り、ベース土が混ざる濁灰色砂質土で埋められる。SD1010より古い柱穴で、出土遺物はない。

P1022(遺構：第20・59図)

F25-3区で検出し、平面略円形を呈する。径120～130cm、深さ75cmを測り、中央部は1段深くなる。断面形状からSE1008と類似した曲物側板を用いた井戸の可能性をもち、遺構の切り合い関係は耕作に伴う小溝群より古い。遺物は第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片約20点、13世紀代の非ロクロ土師

【F26区-2 P1009】(第22図)



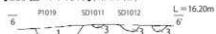
- 1 濃茶色砂質土(10～20cm大の自然石が多く混ざる)

【G26区-1 P1015】(第20図)



- 1 濃茶色砂質土(10～20cm大の自然石が多く混ざる)
- 2 灰色砂質土と淡灰色粗砂(ベース)の混土(10cm大自然石が混ざる)

【G25区-4 P1019】(第20図)



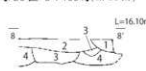
- 1 濃茶色砂質土(ベース上(淡青灰色砂質土)がブロック状に混ざる)
- 2 濃青灰色砂質土(灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 濃茶色砂質土(淡灰色粗砂層状に入る)

【F25区-3 P1022】(第20図)



- 1 灰茶色砂質土
- 2 灰茶色砂質土(やや暗い)
- 3 灰色砂質土と淡灰色粗砂の混合土
- 4 暗灰色砂質土(淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 5 灰色粗砂(暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 6 濃暗灰色砂質土(やや汚れる)
- 7 6層と淡灰色粗砂の混合土

【F26区-3 P1031】(第20図)



- 1 敷地上101覆土
- 2 灰茶色砂質土(暗灰色土がブロック状に混ざる)
- 3 灰色砂質土(暗灰色土・淡灰色粗砂がブロック状に混ざる)
- 4 濃黒灰色砂質土

【E25区-3 P1040】(第19・21図)

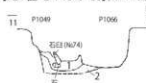


【E25区-3 P1044】(第19・21図)



- 1 濃灰褐色砂質土(ベース上(緑灰色砂質土)が混ざる)
- 2 暗灰色砂質土と緑灰色砂質土の混合土
- 3 濃褐色砂質土(10～20cm大の自然石が多く混ざる)

【F24区-2 P1049・66】(第18図)



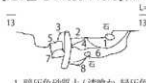
- 1 暗灰色粗砂
- 2 灰白色粗砂

【F24区-2 P1050】(第18図)



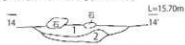
- 1 暗灰色砂質土(少量の緑灰色粗砂が不規則に混ざる)

【F24区-2 P1050・P1075】(第18図)



- 1 暗灰色砂質土(濃橙か、緑灰色細砂が不規則に混ざる)
- 2 緑灰色砂(暗灰色土が不規則に混ざる)
- 3 暗灰色砂質土(固くしまる)
- 4 2層と同質土(2層より明るく、暗灰色砂が少量混ざる)
- 5 2層と同質土
- 6 1層と同質土(1層より明るく、緑灰色砂が少量混ざる)
- 7 灰白色粗砂(緑灰色砂が少量混ざる)
- 8 濃暗灰色砂質土

【E26区-4 P1054】(第22図)



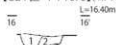
- 1 濃灰褐色砂質土(ベース上(淡灰色粗砂)がブロック状に混ざる。しまりなし)
- 2 淡灰色粗砂(灰褐色土がブロック状に混ざる)

【G24区-4 P1071・試験坑】(第18図)



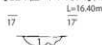
- 1 暗灰色砂質土
- 2 濃暗灰色砂質土(不規則に緑灰色砂が混ざる)

【G24区-1 P1073】(第18図)



- 1 暗灰色砂質土(不規則に緑灰色砂が混ざる)
- 2 1層と同質土(やや明るい、不規則に緑灰色砂混ざる)
- 3 灰白色粗砂(暗灰色砂質土が混ざる)

【G24区-1 P1074】(第18図)



- 1 暗灰色砂質土



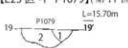
第59図 G地区 第0-1面ビット土層断面図(S=1/60)

【F24区-4 P1075-1083】(第18図)



- 1 淡黄褐色砂質土
- 2 濃緑灰色砂質土
- 3 暗灰色砂質土

【E23区-1 P1079】(第17図)



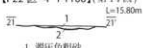
- 1 濃茶灰色粗砂～砂利
- 2 濃灰褐色砂質土(ベース土(淡灰色砂質土)が混ざる)

【G22区-4 P1085】(第16図)



- 1 明灰褐色砂
- 2 1層と同質土(1層より明るい)
- 3 暗灰色砂質土(しまりあり)

【F22区-4 P1100】(第14図)



- 1 濃灰色粗砂
- 2 黒色灰層

【F22区-4 P1104】(第16図)



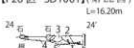
- 1 暗灰色砂質土(固くしまる)
- 2 青灰色砂質土と暗灰褐色砂質土の混合土
- 3 濃淡灰オリーブ色細砂

【F26区 SD1002-1006】(第20-22図)



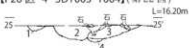
- 1 暗灰色砂質土
- 2 濃暗灰色砂質土
- 3 暗褐色砂質土
- 4 3層と同質土(やや明るい)

【F26区 SD1001】(第22図)



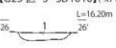
- 1 濃暗灰色シルト質土(湿地状の堆積)
- 2 明褐色砂質土
- 3 2層と同質土(やや明るい)
- 4 暗灰色砂質土

【F26区-4 SD1003-1004】(第22図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 暗灰色砂質土(灰白色砂がまだらに混ざる)
- 3 暗灰色砂質土
- 4 2層と同質土

【G25区-3 SD1010】(第20図)



- 1 灰色砂質土(やや青味がかる)

【F25区 SD1008-1010-1014】(第20図)

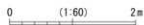


- | | | |
|------------------|-------------------|-----------------|
| 1 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 8 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 15 暗灰色砂質土 |
| 2 灰白色砂 | 9 灰色砂 | 16 暗灰色砂質土 |
| 3 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 10 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 17 暗灰色砂質土 |
| 4 暗灰褐色砂質土(固くしまる) | 11 灰色砂質土 | 18 緑灰色砂(川砂か) |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりなし) | 12 暗灰色砂質土 | 19 暗灰色砂質土(やや暗い) |
| 6 灰白色砂 | 13 暗灰色砂質土 | |
| 7 灰色細砂 | 14 13と同質土(粒子粗い) | |

【F-25区 SD1008-1014】(第20図)



- | | | |
|-----------------|-----------------------|----------------------|
| 1 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 7 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 13 暗灰色砂質土(耕作土) |
| 2 灰白色砂 | 8 緑灰色砂 | 14 暗灰色砂質土(やや暗い, 耕作土) |
| 3 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 9 暗灰褐色砂質土(11層よりやや明るい) | 15 暗灰色砂質土(耕作土) |
| 4 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | 10 緑灰色砂 | 16 暗灰色砂質土 |
| 5 灰白色砂 | 11 暗灰褐色砂質土(耕作土か) | |
| 6 濃暗灰色砂質土 | 12 灰白色砂 | |



第60図 G地区 第0-1面ビット・SD土層断面図(S=1/60)

器皿片1点や、肥前系磁器染付碗片1点が出土し、近世に属する遺構となる。

P1034(遺構：第21図、遺物：第61図)

E-26-3区で検出し、暗渠排水で東側が半壊する。覆土は10～20cm大の自然石が混ざるベース土と濁茶灰色砂質土の単層で、整地土101より古い。第61図71の木製品が出土した。高さ4.3cm、残存長28.7cmを測り、スギ材を用いる。折り曲げるための2～3ヶ所1単位のケビキや、底板と結合するための小穴(一部榫皮残存)から折敷銅板の可能性が高い。土器類は出土していない。

P1035(遺構：第20・66図、遺物：第61図)

F-25-3区で検出し、平面略円形を呈する柱穴である。径44～50cm、深さ26cm、覆土は整地土101と同質の濁暗茶褐色砂質土である(第66図)。第61図72は、サイカチ材を用いた柱根である。径約18cmを測り、底面を3方向から尖らすように加工する。土器類は出土していない。

P1049(遺構：第18・59図、遺物：第61図)

F-24-4区で検出し、県教委の分布調査に伴う試掘坑により半壊する。深さ約70cmを測り、灰白～暗灰色粗砂で埋められる。第61図70の肥前系陶器、74の石臼が出土した。皿70は口径11.2cmを測り、内面は軸がかからず素地がみえる部分もある。16世紀末～17世紀初頭に位置付けられる。下白74は軽石細粒が混ざる灰白色粗粒凝灰岩でつくられ、使用による片減りが著しいため7条1単位の乱れたおろし目はほとんどみえない。他に須恵器・土師器片、珠洲焼甕片、近世陶磁器細片が出土した。

P1050(遺構：第18・59図、遺物：第61図)

F-24-4区で検出し、平面長楕円形を呈する。長径74cm、短径25cm、深さ22cmを測り、覆土は漆喰状の緑灰色細砂が混ざる暗灰色砂質土である。切り合い関係はP1075より新しい。第61図67の漆器椀が中央底に倒れて埋納されていた。67は口径12.5cm、器高4.6cmを測り、ケヤキ材を横木取りする。内面は黒漆地に赤漆で草木様の文様を描く。土器類は出土していない。

P1054(遺構：第22・59図)

E-26-4区で検出し、平面略円形を呈する。径約150cm、深さ22cm(標高15.27m)を測り、淡灰色粗砂、自然石が混ざる濁灰褐色砂質土で埋められる。切り合い関係からSK1003(SE1013)、整地土101より古く、規模等から井戸の可能性をもつ。出土遺物はない。

P1065(遺構：第18図、遺物：第62図)

G-24-2・4区で検出し、柱穴の可能性をもつ。長軸76cm、短軸40cm、深さ35cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。第62図75の肥前系陶器甕片1点が出土した。薄手の75は、内面に同心円叩き痕が残り、胴部外面～底部外面外縁に鉄軸を施す。17世紀前半に位置付けられる。

P1075(遺構：第18・60図、遺物：第61図)

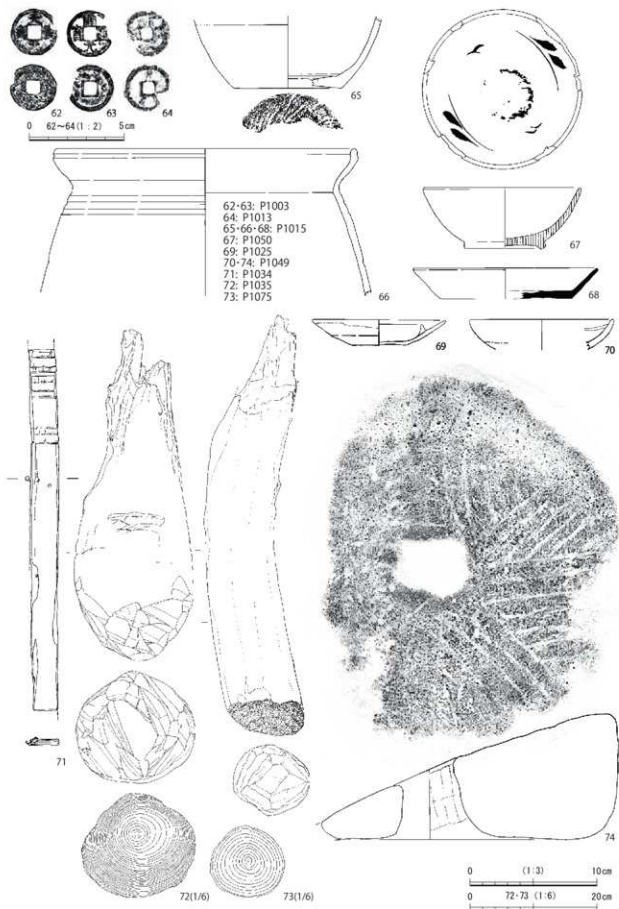
F-24-4区で検出した柱穴で、平面長楕円形を呈する。長軸約150cm、短軸46cm、深さ60cmを測り、切り合い関係はP1050より古い。第61図73はベース土に沈降して状態で検出した屈曲気味の柱根で、底面は被熱する。材はクリである。他に須恵器・土師器片、珠洲焼甕胴部片各1点が出土した。

P1079(遺構：第17・60図)

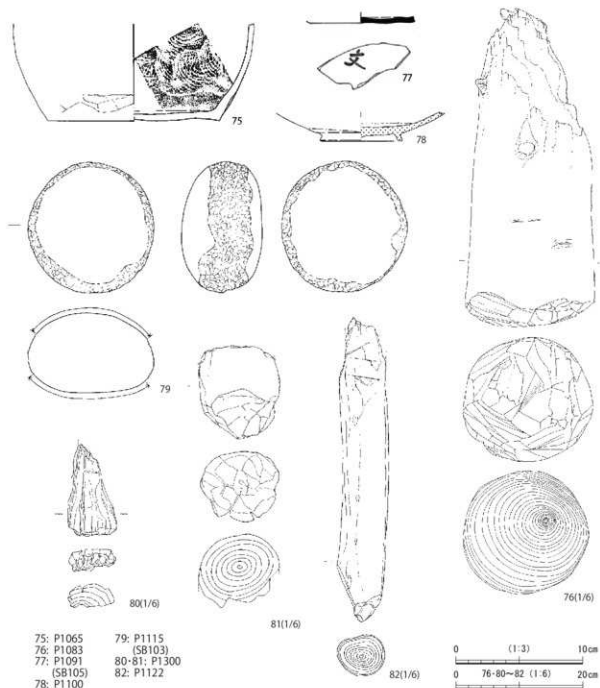
E-23-1区で検出し、平面不整楕円形を呈する。長軸約90cm、短軸約60cm、深さ28cmを測り、柱穴の可能性をもつ。出土遺物はない。

P1083(遺構：第18・60図、遺物：第62図)

F-24-2区で検出した柱穴で、平面不整円形を呈する。径54～78cm、深さ35cmを測り、第62図76の柱根が傾いて遺存した。76は径約20cmを測り、底面を他方向から丁寧に加工する。材は、マツ属複雑管束亜属(クロマツまたはアカマツ)である。他に須恵器、珠洲焼、越中瀬戸の細片や明治時代以降



第61図 G地区 第O-1面ビット出土遺物実測図1(S=1/2・1/3・1/6)



第62図 G地区 第0・1面ビット出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

の磁器片が出土した。

P1085(遺構：第16・60図)

G-224区で検出した不整形な小穴で、整地土105造成過程の一痕跡である。

P1100(遺構：第14・60図、遺物：第62図)

F-224区で検出した浅い落ち込みである。平面不整形円形を呈し、径104～110cm、深さ5cmを測る。底面は比較的平坦で、覆土は下層から厚さ1～2cmの黒色灰層、濁灰色粗砂となる。第62図78のK-90段階の猿投産灰軸陶器皿が出土、底部内面は使用に伴う磨耗が著しい。他に須恵器・土師器片各1点が出土した。なお、F地区第Ⅲ面では、比較的多くの緑・灰軸陶器が出土した。

P1104(遺構：第16・60図)

F-22-4区で検出した浅い落ち込みで、2つの遺構が重複する。平面不整形円形を呈し、径140～160cm、深さ14cmを測る。出土遺物はない。

P1112(遺構：第16図、遺物：第72図)

F-22-3区で検出し、素掘り井戸の可能性をもつ。平面隅丸方形を呈し、一辺124～130cm、深さ68cm(標高14.82m)を測る。覆土は褐色弱粘質土で、切り合い関係ではSE1009より古い。第72図181の肥前系陶器鉄軸天目碗が出土、各部の面取りは鋭く、17世紀中葉に位置付けられる。他に須恵器・土師器片、珠洲焼壺片、越前焼すり鉢片が出土した。

P1122(遺構：第16図、遺物：第62図)

G-23-4区で検出し、平面不整形円形を呈する。径約50cm、深さ13cmを測り、覆土は濁暗灰色砂質土である。遺構の切り合い関係はSK1008より古く、第62図81のクリ材を用いた杭が遺存した。81は径約7cmを測り、両端に加工痕が残る。他に須恵器壺片が出土した。

P1300(遺構：第22図、遺物：第62図)

F-26-1区で検出した。重複した2つの柱穴で、第62図80・81の柱根が遺存した。ともにクリ材を用いる。土器類の出土はない。

4 溝(遺構：第60・63図、遺物：第64図、第10・11・13表)

調査区のはほぼ全域で、多数の溝を検出した。掘立柱建物に付属する区画溝は明確に抽出できず、SD1001～12・14～18・22～24・26が近代以降に位置付けられるとおり、ほとんどが近代以降の水田造成・耕作に伴う痕跡と考えられる。大きくは、用排水(SD1001・02・24等)、耕作に伴う小溝群(SD1008～12・14～17・19～21・27等)、暗渠排水に分けられる。

SD1001(遺構：第22・60図、遺物：第64図)

F-26・27区で検出した近代の溝で、調査区外北東側の現農道下に延びる。溝主軸方位はN-約35°Wを示す。幅1.70cm以上、深さ10～14cmを測り、溝側は起伏をもつ。覆土は砂質土、腐植物が多く混ざるシルト質土、自然石が水の流れて複雑に堆積する。遺構の切り合い関係から、SK1001・02より古く、SE1001より新しい溝となる。比較的多くの遺物が出土しており、うち第64図83～87を図化した。土師器壺類83は全体が磨耗し、外面は被熱による煤が付着する。時期不明。珠洲焼すり鉢片84は、内傾する口縁端部に乱れた波状文を施す。珠洲VI期に位置付けられる。土師器すり鉢85は、口径約31cmを測る。越前焼を模した在地産と考えられ、16世紀後半に位置付けられる。類似の個体として第69図139がある。肥前系陶器のすり鉢86は口径32.1cmを測る。内側に引き伸ばした口縁端部に茶褐色の鉄軸を施す。17世紀前半に位置付けられる。越中瀬戸焼すり鉢87は口径26.5cm、器高12.4cmを測り、全面にサビ軸を施す。底部は内外面とも使用による摩滅が著しく、17世紀代に位置付けられる。同個体の破片はSD1006からも出土した。他に須恵器・土師器、珠洲焼、近世陶磁器や明治以降の染付瓶1点が出土した。

SD1002・12(遺構：第22・60・63図、遺物：第64図)

F・G-25・26区で検出した近代の溝で、SD1001にはほぼ並行する。SD1003～07と同時に検出した溝状落ち込みをSD1002とし、SD1002～07除去後に検出した溝をSD1012の番号を付した。溝主軸方位は現水田主軸より若干西側寄りのN-約40°Wを示す。肩部はしっかりとせず、底面は水の流れて起伏に富む。幅80～115cm、深さ13～33cmを測り、覆土は、腐植物混ざりの暗灰色砂質土、灰白～灰色砂礫・粗砂・砂が流水により複雑に堆積する。遺構の切り合い関係は、SD1012がP1002(SB119柱穴)よ

【F26区-3 SD1012】(第22図)



- 1 灰白色砂礫
- 2 灰白色砂礫 (腐植物が混ざる)
- 3 暗灰白色砂
- 4 暗灰色砂質土 (粒子細かく、腐植物が混ざる)
- 5 4層と同質土 (4層より粒子が粗く明るい、腐植物が混ざる)
- 6 灰色砂質土
- 7 暗灰白色粗砂 (3cm大の礫混ざる)
- 8 灰白色粗砂
- 9 灰色砂 (粒子細かい)
- 10 淡黒色砂質土 (第Ⅲ面(包含層)と同質土)

【E-F23区 SD1022】(第16・17図)



- 1 灰褐色砂質土(やや粘質)
- 2 1層と同質土(砂利が混ざる)
- 3 1層と同質土(ベース上(明茶灰色砂質土)、砂利が混ざる)

【E-F23区 SD1023】(第16・17図)



- 1 暗灰色砂質土(固くしまる)
- 2 1層と同質土(ベース上(茶灰色粗砂)がブロック状に混ざる)
- 3 灰褐色砂質土
- 4 淡灰色砂質土と3層の混合土

- 1 灰褐色砂質土(砂利が混ざる)
- 2 暗灰色砂質土

【F-G20～22区 SD1024】(第14・16図)



- 1 暗灰色砂質土(灰白色砂が混ざる)
- 2 暗灰褐色砂
- 3 暗緑灰色砂

- 1 明灰褐色砂質土
- 2 オリーブ褐色砂(暗灰色砂が混ざる)

【F20区 SD1026】(第13図)



- 1 濡灰色粗砂
- 2 濡褐色弱粘質土(しまりなし)
- 3 茶灰色粗砂
- 4 1層と同質土

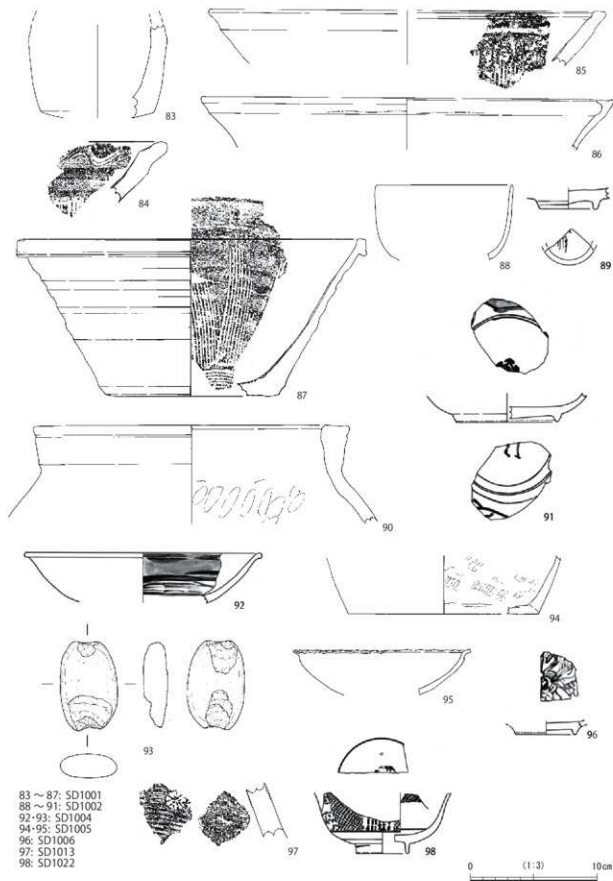
0 (1:60) 2m

第63図 G地区 第0-1面SD土層断面図(S=1/60)

り新しい。遺物は、第64図88～91を図化した。肥前系陶器の碗88は口径10.7cmを測り、軸は明黄褐色を呈する。17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。89は初期伊万里の染付碗で、高台内に銘款「大明」を記す。越前焼甕90は口縁端部を外側に肥厚させながら平坦に仕上げる。軸は外面が赤褐色、内面が透明なオリーブ灰色を呈する。同個体の破片はSD1006、整地土101からも出土し、16世紀末頃に位置付けられる。91は、18世紀代の肥前系磁器の染付碗で、内面に五弁花を描く。他に古代の須恵器・土師器片10数点、珠洲焼片6点、明治時代の型紙摺りの白磁碗を含む陶磁器片10数点が出土した。

SD1003～1007(遺構：第20・22・60図、遺物：第64図)

F・G-26区で検出した。遺構検出時はSD1001・02と並行する溝群と認識し、SD1003～07の番号を付して調査を進めた(写真図版2)。結果からいえば、近代以降の耕地整理における暗灰色砂質土を基調とする盛土層の起伏であり、平面図は作成していない。参考として第60図に断面図を載せた。なお、F・G-26で検出した遺構は、この盛土を除去後に検出したものである。遺物は、SD1004出土の第64図92-93、SD1005出土の94-95、SD1006出土の96を図化した。刷毛目唐津の皿92は口径18.5cmを測り、内面に白化粧土を塗る。17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。石鍾93は残存重量92.1gを測る。94は肥前系陶器壺類と考えられ、外面に不透明なオリーブ黄色を呈する灰軸を施す。胴部内面に格子



第64図 G地区 第O-1面SD出土遺物実測図(S=1/3)

状タタキ痕が残り、17世紀後半に位置付けられる。95は越中瀬戸焼の鉄釉ひだ皿で、口径14.0cmを測る。釉は褐～黒褐色を呈し、17世紀前半に位置付けられる。96は中国製染付碗底部で、焼成はあまりよくない。内面に繊細な花文が描かれ、15世紀後半～16世紀代に位置付けられる。他に古代の須恵器・土師器や、珠洲焼、越前焼、非ロクロ土師器小皿、近世・近代の陶磁器が出土した。

SD1008～11(遺構：第20・59・60図)

F・G-25・26区で検出した。周辺の南西～北東方向約18m、北西～南東方向約12mの範囲に分布するSD1014～16等の同規模の溝を含めて、近代の耕作に伴う小溝群となる。溝主軸方位は、現水田主軸より西側寄りのN-40～47°Wを示し、やや南側に湾曲しながら掘られる。溝幅は、SD1010が80～94cm、その他の溝は幅20～40cmを測る。深さは5～15cm程度で、覆土は小石が混ざる濁茶色や灰～暗灰色を呈する砂質土である。遺物は、SD1008から19世紀以降の肥前磁器白磁紅皿等陶磁器片5点、SD1011から須恵器甕片1点が出土した。

SD1013(遺構：第22図、遺物：第64図)

F-26区で検出した近世の浅い溝状の落ち込みで、検出長約4m、幅150～180cm、深さ6～34cmを測る。底面は平坦で、覆土は濁暗灰色砂質土の単層である。遺構の切り合い関係は、SB120柱穴のP1051より前出する。遺物のうち、第64図97の珠洲焼甕は印花文を刻印する。他に古代の須恵器・土師器片10数点、珠洲焼甕片4点、17世紀代の肥前や越中瀬戸等の陶磁器片7点が出土した。

SD1014～17(遺構：第18・20・60図)

F・G-25区で検出し、SD1008～12等と一体をなす近代以降の耕作に伴う小溝群である。小溝群は、南西～北東方向約18m、北西～南東方向約12mの範囲に周辺に分布する。溝主軸方位はN-40～46°W、それと直交するN-約40°Eを示し、後者はほぼ2m等間隔に配される。検出長8～11m、溝幅25～80cm、深さ5～15cmを測り、しっかりと断面逆台形に掘り込まれる。覆土は暗灰褐～灰色を基調とする砂質土で、灰白～灰色砂を層状に挟む溝も存在する。遺構の切り合い関係から、SB110・117・118、SA106より新しい小溝群となる。遺物は、SD1014から胎土目を残す肥前系陶器碗片1点、SD1015・16から須恵器・土師器片、SD1017から須恵器坯蓋片1点が出土した。

SD1018(遺構：第16・18・19図)

F・G-23区、E・F-24区で検出した。バイパス用地を横断する農業用排水管を埋設した溝である。

SD1019～21(遺構：第19・66図)

E-24区において整地土103除去後に検出した耕作に伴う小溝群である。北東～南西方向約9m、北西～南東方向約7m以上の範囲に分布し、他の直線的な小溝群と一体をなす。溝主軸方位はN-53～58°W、または直交する位置関係にあるN-約40°Eを示す。検出長1.4～7.6m以上、幅20～60cm、深さ5～10cmを測り、溝底は平坦である。覆土は、整地土103の基調をなす覆土とは異なり、濁茶褐～灰褐色砂質土または淡灰色粗砂を基本とする。整地土103造成前に存在した耕作地の耕作痕が、整地土103造成時における1工程かの判断できないものの、整地土101～103全面で小溝群が検出できないことから、前者の可能性が高いように思われる。遺構の切り合い関係では、SB108～110、SA103・105を構成する柱穴より新しい。遺物は、SD1019・21から古代の土師器片数点、SD1020から14世紀後半の珠洲焼すり鉢片1点が出土したにとどまる。なお、整地土101・102除去後に検出した、近似した主軸方位・規模をもつ小溝群も同様な位置付けができる。

SD1022(遺構：第16・17・63図、遺物：第64図)

E～G-23区で検出した不整形な溝状の落ち込みで、屈曲しながら北西方向にのびる。幅40～460cm、深さ9～21cmを測り、覆土は灰褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係から、

SB105・106を構成する柱穴より新しい。遺物のうち、第64図98は明治以降の型紙摺りの磁器碗で、体部は外反する。他に古代の須恵器・土師器片が出土した。

SD1023(遺構：第17・63図)

E-23区で検出した溝状の落ち込みで、整地土105造成に伴う作業の一部をなす。古代の須恵器・土師器片約70点、中世の白磁碗1点、近世の磁器碗片3点、近代の黒瓦片2点が出土した。

SD1024(遺構：第13・14・16・63図)

F-20・21区、G-21・22区で検出した現況水田の排水溝である。溝主軸方位はN-約65°Eを示し、南西方向に流下する。遺物は、古代の須恵器・土師器片40数点、珠洲焼甕甗部片2点、18世紀代の肥前陶器鉄軸鉢(未図化)等が出土した。

SD1025(遺構：第13図)

G-21区で検出した不整形な溝状の落ち込みで、F地区第0-I面には続かない。深さ23cm、覆土は濁暗灰色砂質土となる。遺物は、古代の須恵器・土師器片約10点、近世以降の白磁小坏(未図化)等が出土した。

SD1026(遺構：第13・63図)

F-20区で検出した溝状の遺構で、現況水路SD2024より新しい。粗砂、弱粘質土が流水で堆積、古代の土師器細片が出土した。

SD1027(遺構：第17図)

E-22区で検出した耕作に伴う溝である。溝主軸方位N-約10°E、検出長約2.5m、幅22～72cm、深さ約10cmを測り、覆土は暗灰褐色弱粘質土の単層である。遺物は出土していない。E・F-22区、E-23区には、主軸方位・規模の類似した小溝が点在し、これらと同時期と考えられる。

自然流路(NR)1001(遺構：第18図)

G-24区で検出した溝状遺構で、調査区外南東側に延びる。幅100～120cm、深さ約10cmを測り、覆土は腐植物が多く混ざる灰褐色砂質土である。SD1003～07と同じ性格と考えられる。図化遺物はない。

暗渠排水(遺構：第65図)

第65図のとおり整地作業後に敷設した6条の暗渠排水を確認した。ほぼ等高線に沿って敷設されており、流水機能維持に竹・杉枝を用いる。図化した遺物は、包含層に含めて記述してある。

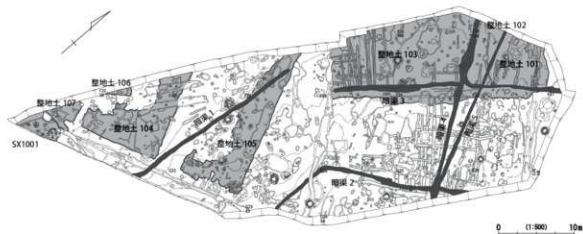
5 その他の遺構(遺構：第65～67図、遺物：第68図、第11・13・15・16表)

水田造成に伴う整地行為を大きく4ヶ所で確認した。これらは、昭和40年前後に行われたと考えられる耕地整理に伴う新しい造成であるが、比較的多くの遺物が出土したため、その概要を記したい。

整地土101～103(遺構：第65～67図、遺物：第68図)

E-24～26区で検出した整地作業痕跡である。同一施工の整地作業であり、現地調査時は便宜的に暗渠排水で区分けして遺構番号を付した。主軸方位はN-約40°E(N-約50°W)を示す。整地の規模は、南北方向約27m、東西方向10m以上、盛土厚25～40cmを測る。現水田区画とは主軸方位が異なり、旧水田区画を反映したものと考えられる。造成作業は、まず旧耕作土の除去・基盤の整地(主に削平)を行い、整地土101南西端で暗渠排水5に沿って上幅約90cmの土手(第67図第9層：灰褐色砂質土、写真図版15)を築いた後に盛土作業を行い、最後に暗渠排水を入れる。

整地土101出土遺物のうち第68図99～109を図化した。珠洲焼甕片99の口縁部は肥厚する。肥前系陶器の碗100は口径9.4cm、器高7.1cmを測り、高台接地面以外にふい黄色の釉を施す。17世紀後



第65図 G地区 第0・I面整地土・暗渠排水位置図(S=1/500)

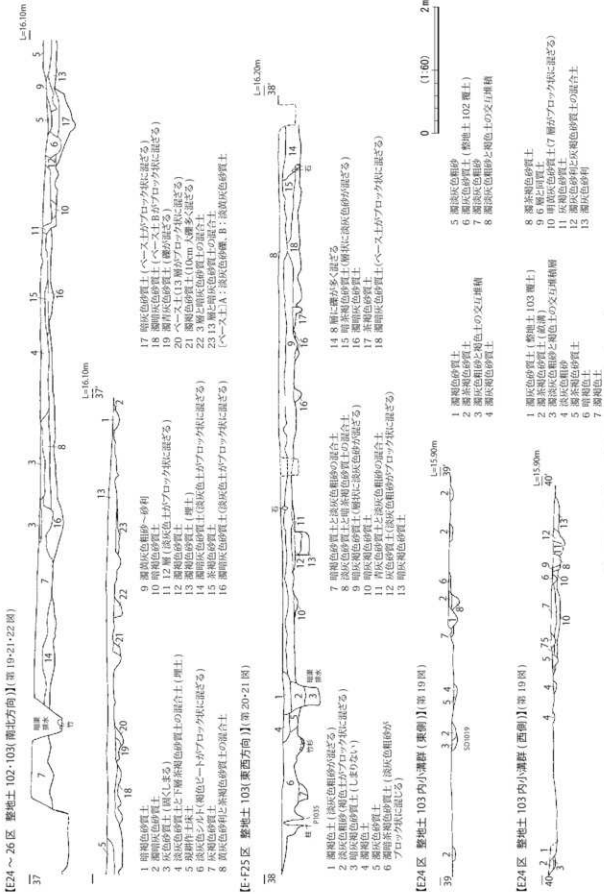
半～18世紀前半に位置付けられる。101は型紙摺りて文様を施した磁器碗で、明治以降のものである。産地は不明。肥前系陶器の皿102は蛇の目軸割ぎで、内面に透明軸、外面に銅緑軸を施す。18世紀前半の嬉野窯産と考えられる。志野焼の皿片103は口径11.9cmを測り、口縁部は大きく外反する。16世紀末～17世紀初めに位置付けられる。104は越中瀬戸焼の鉄軸向付で、口径10.2cm、器高3.1cmを測る。軸を施さない底部内面に径4.3cmの重ね焼き痕が残る。17世紀前半に位置付けられる。19世紀代と考えられる陶製片口鉢105は、平坦に仕上げた口縁端部に銅緑軸を施す。古瀬戸の折縁皿106は口径19.5cmを測る。口縁端部を上方に小さくつまみ上げ、14世紀代に位置付けられる。107は須佐唐津のすり鉢である。口縁部外面は鋭利な面取りを行い、17世紀前半に位置付けられる。中砥108は、幅7.3cmの平坦な砥ぎ面をもつ置き砥石である。緑色細粒や気泡が混ざる流紋岩で、近世以降の天草砥と考えられる。円形板109は腐食が著しい。他に第Ⅲ面以下に属する須恵器・土師器片、中・近世の陶磁器片多数や、明治時代の型紙摺り磁器碗片が出土した。整地土103出土遺物は、第68図110～113を図化した。内面黒色処理を施したロクロ土師器有台塊110は、台部は目立たず、底部中央を焼成前に穿孔する。ロクロ土師器皿111は薄手で完形に近い。鉄釘112は重さ18.1gを測り、先端は使用のため湾曲する。肥前系磁器染付皿113は内面に五弁花と雲や花の文様を描き、18世紀前半に位置付けられる。他に第Ⅲ面以下に属する土師器、珠洲焼、近世陶磁器、明治時代の瓦の破片が出土した。

整地土104～107(遺構：第65・67図、遺物：第68図)

E～G-20～23区で検出した整地作業痕跡である。西側の農道を挟んだ現水田区画と主軸方位・施工プランが完全に一致する昭和40年前後の耕地整理痕跡である。また、SD1023と番号を付した溝状の落ち込みは、整地土105の整地作業の一部をなす。整地土101～103で検出した耕作に伴う直線的な小溝群(SD1019～21等)は検出できない。遺物は、第68図114～117を図化した。整地土104出土の114は、銅製飾り金具であり、一對の花文を打ち出し、3ヶ所に鋸留孔が残る。整地土105出土の115・116は須恵器である。瓶類底部115は小振りな台部がしっかりと外展する。甕116は口径20.0cmを測り、口縁端部を折り曲げて肥厚させる。整地土106出土の117は白磁碗V類³⁾で口径約17cmを測り、口縁端部は外側にのびる。他に、整地土104から古代の須恵器・土師器片、珠洲焼片、近世陶磁器片が出土した。

SX1001(遺構：第13・67図、遺物：第68図)

F-20区で検出した不整形な落ち込みで、調査区外西側に延びる。幅5m以上、深さ約20cmを測り、



【E26区 整理土101】(第21・22図)



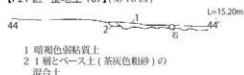
【F21区 整地土104(東西方向)】(第13図)



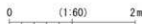
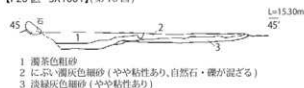
【F21区 整地土104(南北方向)】(第14図)



【F21区 整地土107】(第13図)



【F20区 SX1001】(第13図)



第67図 G地区 第0・1面整地土土層断面図2(S=1/60)

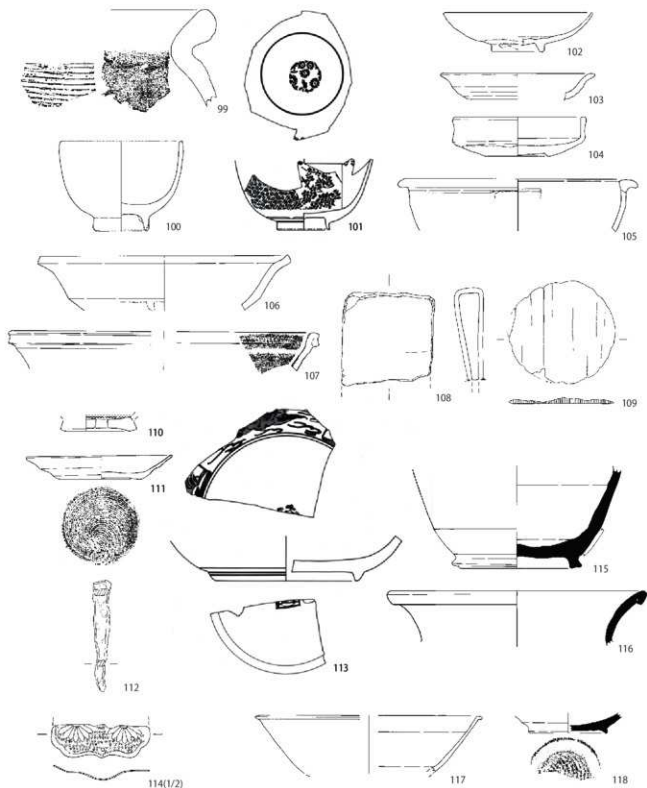
西側に向かうにつれ深くなる。覆土は、上層から濁茶色粗砂、礫・自然石混じりの濁灰色細砂、淡緑灰色細砂が斜方向に堆積しており、遺構の切り合い関係はF地区SB104より古い。出土遺物のうち第68図118の須恵器有台塊を図化した。118は台部断面三角形を呈し、底部内面にタール状の付着物が残る。他に同時期の須恵器・土師器片約30点に加え、平底タイプの製塩土器2個体分と考えられる細片約60点が出土した。

6 包含層等出土遺物(第69～72図、第11～13・15・16表)

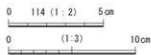
第69～72図は、包含層から出土した遺物の他、調査時に設置した排水溝、暗渠排水や、調査区周辺で表面採取した遺物である。遺物は、後述する第VI-2面(弥生時代中期後葉)、第Ⅲ・Ⅳ面(古代)や12～18世紀代、近代以降に大別でき、第Ⅲ・Ⅳ面に属する須恵器・土師器、16世紀後半～18世紀代の肥前系を主体とした陶磁器が多い。

第69図119～121は弥生時代中期後葉の土器であり、第VI-2面に属する集落城が調査区東側にも展開していたことを示唆する資料となる。甕119は、口径約15.5cmを測り、口縁部内面に円形浮文1ヶ所と斜行短線文が認められる。120は外面を櫛描文で加飾する。121は、甕胴部片を転用した紡錘車で、径4.8cm、厚さ0.6cm、重さ12.1gを測り、一部が摩滅する。

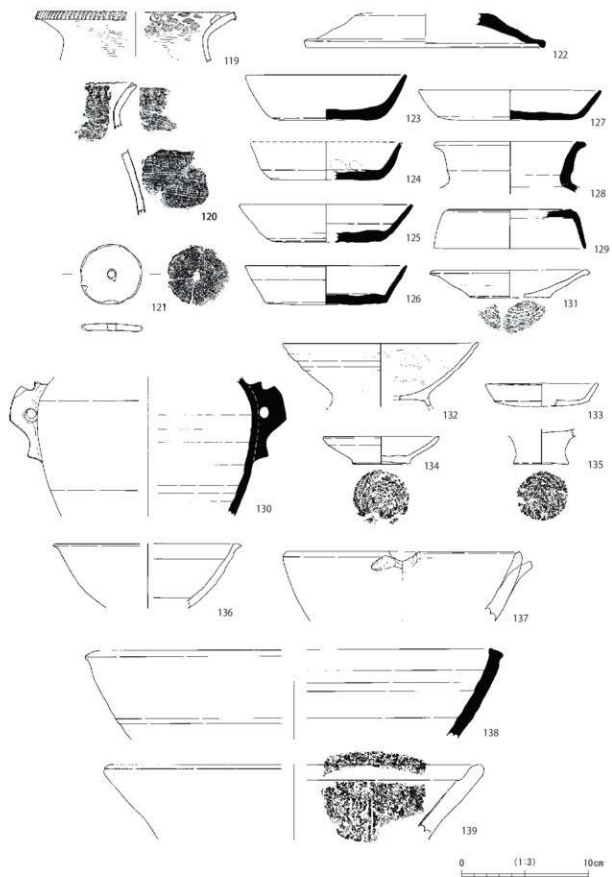
第69図122～130は、本来第Ⅲ・Ⅳ面に属する須恵器である。坏蓋122は口径18.5cmを測り、天井部は両面とも使用に伴い磨耗する。123～126は無台坏である。厚手の123は煮沸容器に転用される。124の体部は短くのびる。125・126は円盤状の底部から体部が外傾しながら直線的にのびる。125が口径13.5cm、器高3.0cm、126が口径12.7cm、器高3.1cmを測る。無台盤127は、使用に伴い底部内



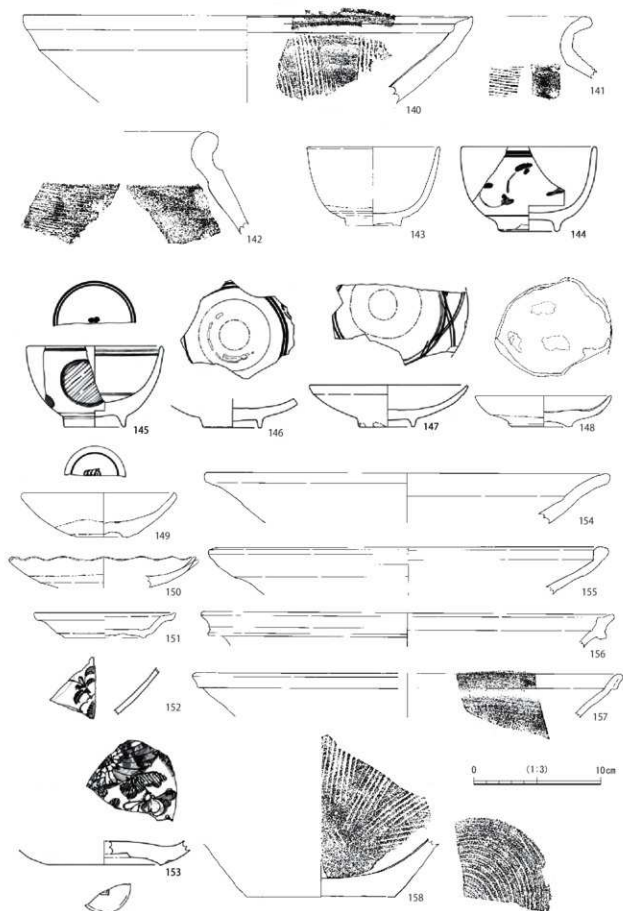
99 ~ 109: 整地土 101
 110 ~ 113: 整地土 103
 114: 整地土 104
 115~116: 整地土 105
 117: 整地土 106
 118: SX1001



第68図 G地区 第O-I面整地土等出土遺物実測図(S=1/2・1/3)



第69図 G地区 第0・1面包含層等出土遺物実測図1(S=1/3)



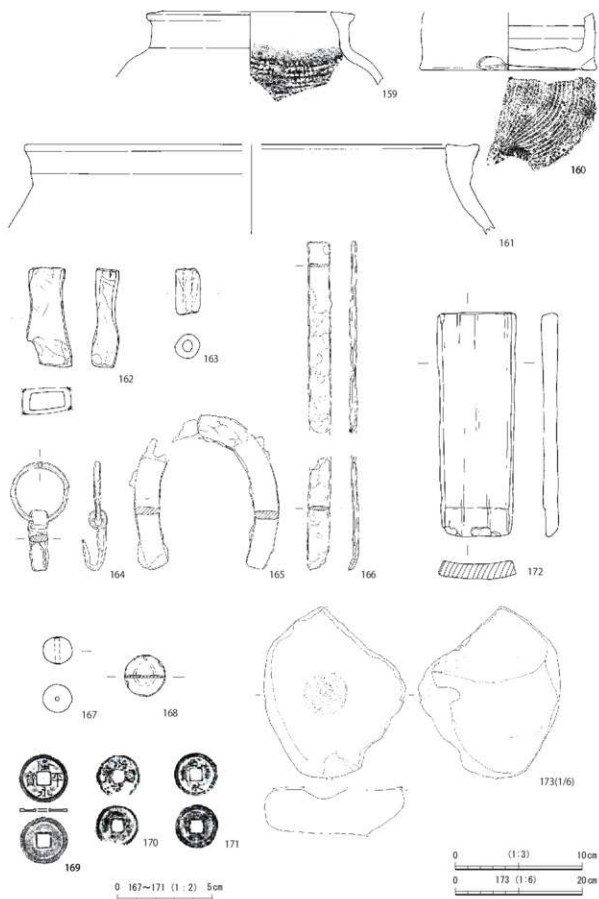
第70図 G地区 第0-I面包含層等出土遺物実測図2(S=1/3)

面が磨耗する。横瓶128は口径10.4cmを測り、口縁端部は外側に肥厚する。瓶蓋蓋129は口径11.9cmを測り、天井部中程には稜が巡ると考えられる。双耳瓶130は耳部をしっかりとつくる。第69図131・132・134・135は、底部外面に回転系切り痕を残すロクロ土師器である。皿131は口径11.3cm、器高1.9cmを測り、口縁端部が小さく外反する。有台壙132は内面に粗いミガキ調整が認められる。ほぼ完形の小皿134は口径9.0cm、器高2.2cmを測り、底部は台状を呈する。小皿135の高台は柱状を呈する。

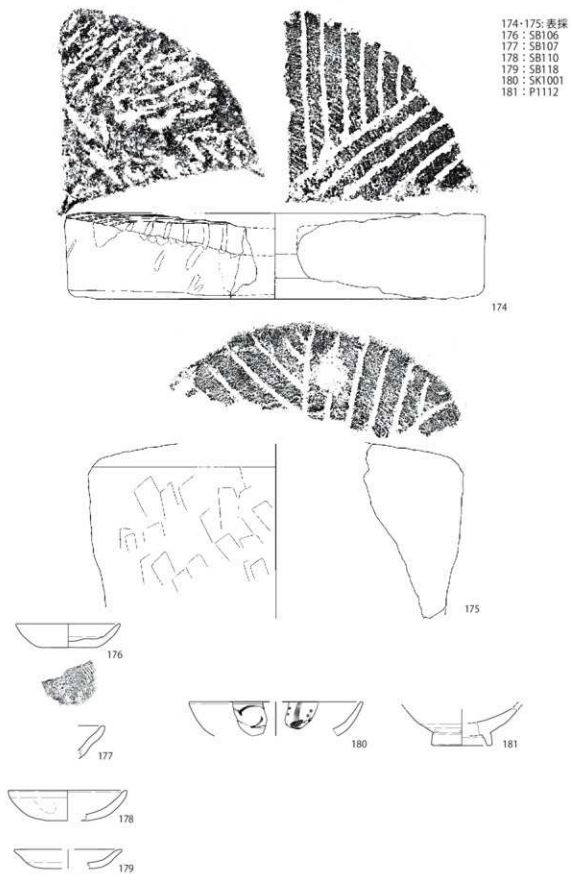
第69図133は非ロクロの土師器小皿であり、口径8.7cm、器高1.8cmを測る。13～14世紀代に位置付けられる。白磁碗136の特徴は、第68図117と近似する。12～13世紀代に位置付けられる。137は珠洲焼片口鉢で、小片のため口径に不安を残す。珠洲焼鉢138は口径約31cmを測り、口縁端部を肥厚させる。ともに13世紀代に位置付けられる。土師器すり鉢139は口径約29cmを測り、第64図85と同様に越前焼を模した16世紀後半の在産と考えられる。第70図140は越前焼すり鉢で、口縁端部は使用に伴い磨耗する。16世紀後半に位置付けられる。141・142は珠洲焼である。壺141は口縁端部を丸くおさめる。甕142は外面に降灰が認められる。

第70図143は、越中瀬戸焼の鉄軸碗で軸は褐色を呈する。肥前系の陶胎染付碗144は鉄軸の上に釉を施す。肥前系磁器の染付碗145は外面に丸文を描く。143は17世紀代、144は18世紀代、145は18世紀後半に位置付けられる。146・147は肥前系磁器の染付皿である。底部内面に蛇の目軸刺ぎを行い、17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。148・149は肥前系陶器の皿で、148が口径10.5cm、器高2.4cm、149が口径12.0cm、器高3.5cmを測る。底部内面に148は砂目痕、149は胎土目がそれぞれ3ヶ所残る。148が17世紀前半、149が17世紀初頭に位置付けられる。150は17世紀前半の肥前系陶器のひだ皿である。瀬戸・美濃の折縁皿151は底部内面を除いてハケ塗りを施し、16世紀末に位置付けられる。152は中国製の染付碗片である。青磁染付皿153は内面に菊花文を描く。蛇の目凹形高台であり、18世紀以降と考えられる。産地は不明。154・155は口径約30cmを測る灰軸大皿である。154は肥前系陶器で17世紀代に位置付けられる。肥前系陶器すり鉢156は、肥厚した口縁部に鉄軸を施す。須佐唐津すり鉢157とともに17世紀代に位置付けられる。肥前系陶器すり鉢158の内面は、使用に伴う磨耗が著しい。第71図159は肥前系陶器壺で、内面に粗い格子叩き痕が残る。160は鉄軸を施し、建水の可能性が高い。越前焼甕161は、ほぼ水平な口縁端部であり、16世紀後半～17世紀代に位置付けられる。

第71図162は、全面を砥ぎに用いた仕上砥である。土鍾163は重さ12.8gを測る。164は鉄製甕、165は近代以降の踏鉄(鉋孔は鋳等で未確認)、166は長さ24cm以上の2つに折れた板状鉄製品である。半透明の水晶製の167は径1.5cmを測り、数珠または根付留玉と考えられる。168は鉄製金具と考えられる。169～171は銅銭である。延暦5年(796)初鑄の隆平永寶169は、径2.5cm、厚さ1.4mmを測る。鑄上がりはよく、摩滅・腐食がほとんどないものの、土圧で若干変形する。なお、隆平永寶はF地区第Ⅲ面SD201からも1点出土している⁴⁾。170は摩滅・腐食のため文字は判読できず、170は寛永通宝である。桶銅板172は高さ17.8cmを測り、スギ材を用いる。安山岩製の173は、上面1ヶ所に径6.5cm、深さ1.3cmの凹部が認められ、下面は起伏のある自然面をそのまま残す。凹石または礎石の可能性をもつ。第72図174は第61図74と同質の凝灰岩製、175は粗粒砂岩製の白で、いずれも白面を8分割する。



第71図 G地区 第O・I面包含層等出土遺物実測図3(S=1/2・1/3・1/6)



第72図 G地区 第0-I面包含層等出土遺物実測図4(S=1/2・1/3・1/6)

第12表 G地区 第O-I 面出土土器類観察表3

調査 番号	プラン号	出土遺構	種 類	形 様	口径 (mm)	底径 (mm)	高 度 (mm)	内径口径	内径底径	胎 土	底 底	内 面 装 飾	外 面 装 飾	透 透 透	備 考	実測 番号	
70	143	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	10.2	4.3	4.7	横	褐色	褐色	褐色	褐色	黒	6/12	断面、口	910049
70	144	F-04-1	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	11.4	4.6	4.7	横	オリーブ褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面の縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910050
70	145	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	10.5	4.6	4.4	横	中分厚がらみ平透り褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、口	910048
70	146	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	-	4.4	12.6	横	厚手赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	-	断面の縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	147	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	12.3	4.3	3.7	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面縁部	断面の縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910048
70	148	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	10.8	4.9	2.4	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面縁部	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	149	F-06-2	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	12.0	4.1	3.7	横	中分厚がらみ平透り褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面縁部	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	150	F-06-4	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	14.8	-	12.4	横	平透り褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	151	F-06	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	11.0	6.3	2.8	横	オリーブ褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	152	F-07-1	瓦器類(横土器下)	中厚製平丸蓋	横	-	-	14.8	横	厚手赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	153	F-06-4	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	-	9.0	11.8	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	154	F-06-4	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	11.4	-	18.0	横	褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	155	F-05	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	10.8	-	12.6	横	厚手赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	156	F-07-2	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	12.2	-	12.3	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	157	F-06	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	12.0	-	12.6	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	158	F-06-4	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	-	11.4	18.7	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面縁部	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	159	F-06	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	14.0	-	12.6	横	赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	-	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	160	F-06	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	-	14.0	18.5	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面縁部	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	161	F-05	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	12.0	-	12.1	横	厚手赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	162	F-07-1	瓦器類(横土器下)	透土製平丸蓋	横	1.4	12.0	-	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	176	F-07-2	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	8.5	4.4	1.8	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	177	F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	-	-	12.6	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	178	F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	8.4	103.4	2.4	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	179	F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	8.6	8.6	1.3	横	濃い透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	180	F-07-1-3 F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	横	-	-	12.7	横	透褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049
70	181	F-07-3	F-07-2	透土製平丸蓋	横	-	4.6	12.4	横	赤褐色	褐色	褐色	褐色	黒	断面口	断面、断面縁部、断面の上縁部、断面の裏面、口	910049

第13表 G地区 第O-I 面出土石製品観察表

調査 番号	番号	プラン号	出土遺構	種 類	形 様	口径 (mm)	底径 (mm)	高 度 (mm)	厚 度 (mm)	備 考	実測 番号
81	74	F-04-4	F1081	下石	透褐色	透褐色	透褐色	-	8.5	(透褐色)	910049
82	76	F-07-1	F1115	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
84	81	F-06-3	10108	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
86	158	F-06	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
70	162	F-07-4	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
70	167	F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
70	173	F-07-1	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
70	174	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049
70	175	透土製平丸蓋	透土製平丸蓋	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	透褐色	910049

第14表 G地区 第0-1面出土木製品観察表1

注：1) 図例は任意です。

図例番号	番号	グリップ名	出土遺構	種 類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	材質	備 考	実測番号
	47	F-29-1	F-29(9)F(29)	杖類	22.0	13.9	16.9	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部磨削	015K-16
	47	F-29-2	F-29(9)F(29)	杖類	24.0	14.6	17.4	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-17
	47	F-29-3	F-29(9)F(29)	杖類	22.0	14.6	14.7	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木	015K-25
	47	F-29-4	第29号F27)	杖類	19.0	11.2	(12.7)	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部磨削	015K-21
	47	F-29-5	第29号F28)	杖類	27.2	24.4	23.9	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、上部に凹溝状	015K-27
	47	F-29-6	第29号F29)	杖類	33.1	25.0	21.7	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-19
	48	F-29-7	第29号F30)	杖類	140.0	25.1	21.8	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-20
	48	F-29-8	第29号F31)	杖類	204.0	34.4	21.8	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工・母口付着	015K-22
	48	9-29-1	第29号F32)	杖類	145.0	31.5	18.9	マツ属樹皮製木製品	丸柱・芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-23
	48	F-29-9	第29号F33)	杖類	224.0	4.5	6.2	タリ	丸柱・芯持ち丸木(一部剥皮残存)、端部を2方向から加工	015K-110
	48	F-29-10	第29号F34)	杖類	122.0	14.5	11.8	マツ属樹皮製木製品	丸柱・芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-24
	48	F-29-11	第29号F35)	杖類	140.0	23.0	20.0	タリ	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、磨削(母口付着)	015K-26
	48	F-29-12	第29号F36)	杖類	140.0	13.7	12.0	コナラ類	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部加工	015K-107
	48	F-29	第29号F37)	加工材	28.0	4.2	7.3	スギ	芯持ち丸木、3ヶ所に凹溝状	015K-108
	48	F-29-13	第29号F38)	杖	29.0	4.2	3.4	スギ	芯持ち丸木、先端は尖形	015K-94
	48	F-29-14	第29号F39)	杖類	21.0	11.6	10.7	タリ	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部加工	015K-106
	48	F-29-15	第29号F40)	杖類	25.0	12.9	12.8	タリ	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部加工	015K-105
	48	F-29-16	第29号F41)	杖類	22.0	9.0	8.3	タリ	丸柱・芯持ち丸木、端部1面に凹溝(溝幅2-5mm)	015K-71
	48	F-29-17	第29号F42)	杖類	21.0	11.9	12.7	タリ	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部加工	015K-112
	50	9-29-2	第29号F43)	杖類	27.0	21.7	22.8	マツ属樹皮製木製品	丸柱・芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部磨削	015K-28
	50	F-29-18	第29号F44)	杖類	140.0	20.9	19.3	マツ属樹皮製木製品	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-98
	50	F-29-19	第29号F45)	杖	22.0	4.3	3.2	タリ	芯持ち丸木、2方向から加工	015K-102
	50	E-29-1	第29号F46)	杖類	22.0	9.0	8.3	スギ	丸柱・芯持ち丸木(一部剥皮残存)、端部を2方向から加工	015K-65
	50	E-29-2	第29号F47)	杖類	22.0	9.5	7.9	タリ	丸柱、芯持ち丸木、端部を2方向から加工、端部加工	015K-72
	50	E-29-3	第29号F48)	杖類か	24.0	9.0	9.0	ヒシ属	丸柱・芯持ち丸木(一部剥皮残存)、端部を2方向から加工	015K-118
	50	E-29-4	第29号F49)	杖類	22.0	10.9	14.5	-	丸柱、芯持ち丸木	015K-29
	50	F-29-20	第29号	植物繊維	24.4	-	1.0	スギ	縦長、大断面(21×11)5ヶ所木釘残存)	015K-109
	50	F-29-21	第29号	植物繊維	28.0	4.7	6.4	スギ	縦長、内面17ヶ所木釘、縦長断面に合わせた形状	015K-124
	50	F-29-22	第29号	杖	30.0	9.5	5.4	タリ	芯持ち丸木、断面磨削、先端を2方向から加工	015K-27
	50	9-29-3	第29号	杖	29.0	4.3	1.8	コナラ類	断面が(断面1)	015K-122
	57	E-29-1-1	第3000(第29号)第29号F50)	杖	216.0	3.0	2.7	コナラ類	断面が(断面1)か、断面磨削	015K-104
	57	E-29-1-2	第3000(第29号)第29号	断面	22.0	28.8	4.5	スギ	芯持ち丸木、端部に加工溝、一部剥皮残存	015K-105
	57	E-29-1-3	第3000(第29号)第29号F51)	杖類	218.0	11.4	8.9	ヒシ属	断面が(断面1)か、端部を2方向から加工	015K-115
	57	E-29-1-4	第3000(第29号)第29号F52)	杖類か	22.0	9.5	6.7	マツ属樹皮製木製品	丸柱・芯持ち丸木、端部を2方向から加工	015K-123

第15表 G地区 第O-I 面出土木製品観察表2

注：1は照片撮影済みです。

採出 番号	番号	グリップ名	出土遺物	種 類	量 数	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	材質	備 考	実測 番号
37	40	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	149.5	14.8	14.5	ツツ属植物管葉類	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工、上部無縁	30300-22
37	30	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	171.4	20.1	16.9	ツツ属植物管葉類	丸紐・近所丸木(1)形跡見出し、楕圓多面方向から加工	30300-21
37	31	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	171.5	21.1	16.9	ツツ属植物管葉類	丸紐・近所丸木	30300-23
38	32	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	149.5	15.2	14.9	ツツ属植物管葉類	丸紐・近所丸木(1)形跡見出し、楕圓多面方向から加工	30300-24
38	33	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	175.0	11.5	13.2	ウリ	丸紐・近所丸木(1)形跡見出し、楕圓多面方向から加工	30300-112
38	34	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	127.4	9.0	2.7	木片	筒状、分節材(忌谷?)、1側面に線状彫痕	30300-128
38	35	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	138.5	7.4	7.4	木片	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工	30300-119
38	36	F-29-1-4	30300(2F10) 葉(葉取上げ 品)	杖履	1	137.0	7.4	7.2	ヤナギ	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工	30300-121
41	47	F-29-4	F100	漆器類	1	127.5	100.4	10.4	ヤナギ	短柱、横断面、両面に漆塗(木片)	30300-125
41	31	F-29-3	F104	加工品(形跡 不明)	1	126.5	4.2	6.4	木片	縦向き、縦向き、横方向のヤナギ	30300-124
41	32	F-29-3	F105	杖履	1	122.5	14.8	17.4	ヤナギ	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工	30300-26
41	33	F-29-4	F105	杖履	1	146.0	11.0	11.2	ウリ	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工、無縁	30300-22
42	38	F-29-2	F102	杖履	1	130.2	20.4	14.4	ツツ属植物管葉類	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工	30300-25
42	40	F-29-1	F100	杖履	1	124.4	7.7	2.7	ウリ	筒状、分節材(忌谷?)	30300-126
42	41	F-29-1	F100	杖履	1	124.4	12.4	11.3	ウリ	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工	30300-127
42	42	G-29-2	F102	杖履	1	147.0	7.5	4.3	ウリ	丸紐・近所丸木、楕圓多面方向から加工、上部に線状彫痕	30300-117
46	103	F-29	加工品(樹皮類)	円筒状	1	104.4	-	6.5	-	短柱、無縁部	30300-118
71	172	F-29-3	加工品(樹皮類)	筒	1	16.1	107.4	7.2	木片	短柱、口縁部を内側より掘削	30300-41

第16表 G地区 第O-I 面出土金属製品観察表

注：1は照片撮影済みです。

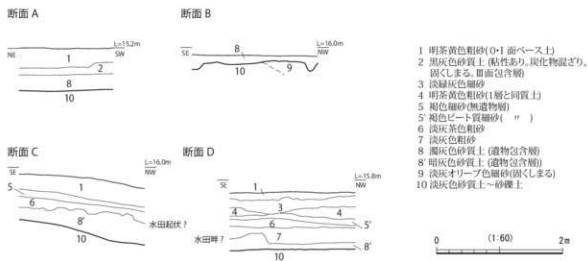
採出 番号	番号	グリップ名	出土遺物	種 類	量 数	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備 考	実測 番号
41	43	F-29-1	F101	銅線	1	102.5	-	0.15	7.0	大型土器(遺物)	30300(1)
41	43	F-29-1	F101	銅線	1	102.5	-	0.14	7.5	大型土器(遺物・土片)	30300(1)
41	44	G-29-1	F101	銅線	1	102.4	-	0.14	7.2	遺物・土器	遺10270
46	112	G-29-2	製物土器(土器(遺物・遺物))	銅製品	1	9.4	1.3	0.4	16.1		30300(2)
46	114	F-29-4	製物土器	銅製品	1	11.2	0.2	0.1	1.7	製物土器(遺物)、多面加工品	30300(1)
71	104	F-29	加工品(樹皮類)	銅製品	1	9.7	4.7	1.4	30		30300(4)
71	105	F-29	加工品(樹皮類)	銅製品	1	102.2	(11.5)	0.7	144	土器(遺物)	30300(1)
71	106	F-29-2	加工品(樹皮類)	銅製品	1	24~	1.9	0.8	(11)	F-29に付属品	30300(1)
71	108	調査区外	遺物	銅製品	1	102.2	-	0.7	1.8		30300(2)
71	109	G-29-3	加工品	銅線	1	102.5	-	1.4mm	2.1	製物土器、多面加工	H10(1)
71	110	F-29-1	加工品(樹皮類)	銅線	1	102.3	-	0.3mm	1.3	製物土器(遺物)	30300(1)
71	111	調査区外	遺物	銅線	1	102.3	-	1.3mm	2.1	製物土器	30300(1)

7 第0・I面下確認調査(第73～76図、第17表)

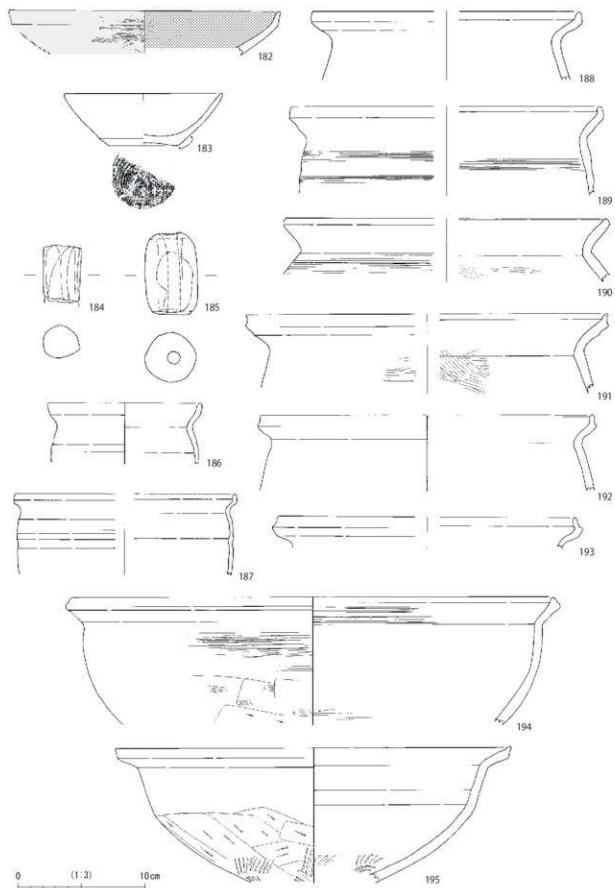
第0・I面遺構掘削時に下面の包含層の現れ方が一様でなかったことから、第0・I面調査完了後、第0・I面ベース土除去作業に先立って、下面の状況確認調査を実施した。確認調査は、第73図のとおり調査区に3本のトレンチ(トレンチ1～3、幅約2m)を設定し、人力にて掘り下げ、断面観察および出土遺物の検討、代表的箇所の上層断面図作成、写真撮影等の記録作業を行っている。確認調査の結果、トレンチ2以南の上層堆積は、おおむね第4次調査F地区と類似する状況であった。一方、調査区中央付近(トレンチ1中央・2)では、東西方向に第Ⅲ・Ⅳ面包含層が存在せず、かわりに明茶黄～淡灰色を呈する粗砂～砂礫が厚く堆積する河跡の存在を確認した。さらに河跡は、幅10m以上・深さ2m以上を測ること、北側肩部に護岸状の石積が存在すること、河跡は土石流を想像させる一時期に流入・堆積したものであること等が予想された。第73図断面Eは深さ約1.70m(標高14.00～15.70m)まで砂礫層の堆積することを確認したが、安全面の観点から土層断面図は未作成である。また、河跡以北(トレンチ1北側・3)では、灰～淡灰茶色粗砂の被覆土と包含層上面の起伏(断面Dは畔状の起伏)を検出した。この状況は、C・D・F地区水田と類似するものと判断した。以上の結果を踏まえて、重機を用いた第0・I面ベース土の除去作業を実施している。以下、トレンチ出土遺物について記す。



第73図 G地区 第0・I面下確認調査概略図(S=1/500)

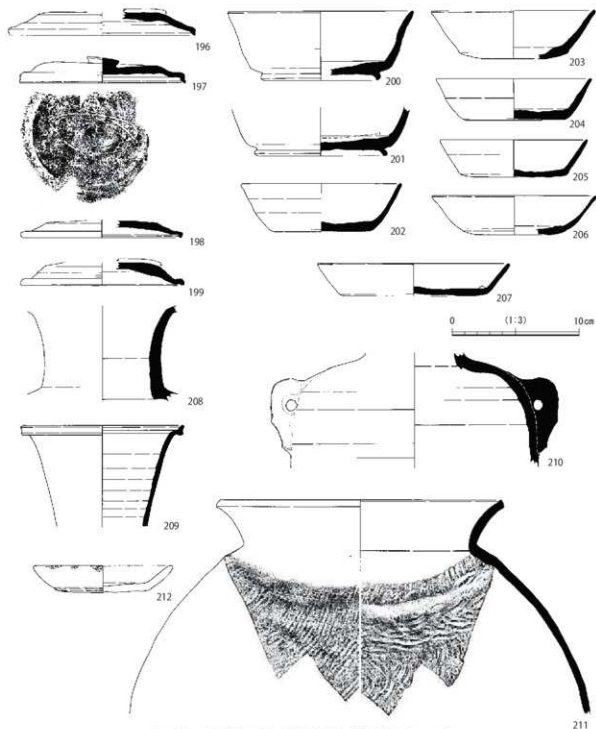


第74図 G地区 第0・I面下確認調査土層断面図(S=1/60)



第75図 G地区 第O-1面下確認調査出土遺物実測図1 (S=1/3)

出土遺物は、大半が下面包含層から出土した奈良～平安時代前期に属する須恵器、土師器である。第75図182は、外面赤彩・内面黒色の非ロクロ土師器高坏で、口縁端部で屈曲する。ロクロ土師器無台碗183の体部は直線的にのびる。体部外面下端にケズリを加え、磨耗が著しい。土師質の184は断面多角形を呈し、三足羽釜等の脚部と考えられる。土錘185は重さ115gを測る。186～193はロクロ土師器甕類である。小甕186は口径12.0cmを測る。薄手の187は口縁部を内傾気味に屈曲させる。188・189の口縁端部は上方にのびる。191は各部の面取りはしっかりとしており、小さくつまみあげた口縁端部は外反する。192・193は稜状を呈する口縁部下端から端部を内傾気味に長く引きのばす。



第76図 G地区 第0・1面下確認調査出土遺物実測図2(S=1/3)

8 小 結

以下では、第0-I面の検出遺構、出土遺物について整理した後、既往の調査成果と対比して、その変遷や性格について述べる。今回、不足・修正する部分については、隣接するI～K地区の報告を待つて補いたい。

検出遺構 検出した主な遺構は、掘立柱建物21棟、柵6条、小型の井戸13基、土坑6基、整地土4ヶ所、溝、ピット多数である。うち、整地土101～107と大部分の溝は近代以降の耕地整理等の所産であるため、掘立柱建物と井戸を中心に整理する。

復元した掘立柱建物21棟には検討を要する建物もあるが、その構造から総柱構造の建物5棟(F地区SB104、SB101・109・113・114)と、側柱構造の建物(1×1間を含む)16棟に分かれる。総柱構造の建物は、径50cm未満の略円形または不整形を呈する比較的小振りの柱穴を基本とする。規模の判明したF地区SB104が面積54.3㎡(4×3間)、SB114が同22.3㎡(2×2間)を測り、F地区SB104が主屋、SB114が倉庫・雑倉的規模といえる。建物主軸方位・配置から、E-24・25区に位置するa-1群(N-約40° W: SB109・113)、E～G-20・21区に位置するa-2群(N-16～21° W: F地区SB104、SB101)、E-26区に位置するa-3群(N-56° W: SB114)に細分でき、E-24～26区に集中するa-1・3群は近代以降の整地土層(厚さ25～40cm)を除去した後に検出している。建物の存続時期を推定できる出土遺物は限られ、a-1群SB113柱穴P1043から12世紀代のロクロ土師器小皿小片2点が出土した他、SB113柱穴P1043に前出するSK1005から底部を穿孔した完形のロクロ土師器小皿(第58図58)が出土した。

側柱構造の建物は、a群と類似した小振りの柱穴掘方で柱間寸法2.20m以下を測るb群3棟(SB102・112・115)と、広い梁間柱間寸法と長軸50～170cmの比較的大型の柱穴掘方を特徴とするc群12棟(SB103～108・110・111・116～120)に大別できる。

b群の建物規模は、SB102が面積12.3㎡(3×1間)、SB112が同13.2㎡、SB115が同17.2㎡以上(2×2間)となり、面積20㎡未満を測る小規模建物であることから倉庫・雑倉的要素が強いと考えられる。建物主軸方位は、SB102がa-2群と近いN-22° W、SB112がN-77° W、SB115がN-31° Wをそれぞれ示す。いずれの柱穴からも建物の存続時期を示す遺物は出土していない。

c群の建物規模は、面積10㎡未満1棟(SB103)、同10～20㎡未満4棟(SB104・106・111・117)、同23.7㎡1棟(SB118)、同約31㎡2棟(SB105・119)、同約38㎡1棟(SB108)、同48.3㎡1棟(SB110)となり、大型の掘方に柱をしっかりと固定するSB110については特別な用途をもつ倉庫的な性格付けが可能であろう。また、平面プランでは、梁間2間建物(SB106・119)が梁間柱間寸法1.95～2.50mを測るのに対して、梁間1間建物の梁間柱間寸法は、小規模なSB103・117(柱間寸法2.15～2.60m)以外、柱間寸法3.05～5.05mと、かなり長い梁間を特徴とする。このうち、SB105(柱間寸法4.60m)、SB108(同5.00m)、SB110(同5.05m)、SB111(同4.70m)、SB118(同4.35m)については、床東が存在した加工性をもつ。c群建物は、主軸方位からみた場合、c-1群(N-41～50° W: SB106・108・110・111・116・118)と、c-2群(N-69～80° W: SB104・105・117・119)、c-3群(N-5～15° W: SB103・107)に分けられる。c群の存続時期を推定する事項として、c-1群SB106柱穴がc-2群SB105柱穴に切られること(c-1群→c-2群)、c-1群SB110柱穴P1038から16世紀後半と考えられる非ロクロ土師器小皿片(第72図178)の出土があげられる。なお、c-2・3群建物からは、存続時期を検討可能な遺物の出土はない。

次に、小扇状地上に立地する本遺跡の特質及び数回の耕地整理を経たG地区の特性から、ベース面と既往調査の状況を整理する。G地区第0-I面のベース土層は、C・D・F地区第I面から連続する洪水堆積層(第3章第2節の洪水堆積層(A)土石流災害1:粗砂・砂質土・砂利の無遺物層)であり、C・D地区

の成果から洪水堆積層(A)が14世紀中頃に形成されたことが明らかとなっている。C・D・F地区では、このベース土層上に14世紀後半以降に成立し、16世紀前半に衰退する集落域(14世紀後半～15世紀代主体)が確認できる。G地区第0・I面の建物のうち、a-2群2棟(F地区SB104、SB101)、b群SB102、c-1～3群12棟の15棟を、C・D・F地区と同じベース土層上で検出している。C・D地区で検出した24棟の掘立柱建物は、建物主軸方位が安定しないこと、柱穴が長径50～120cmを測る大型の掘方であること、梁間柱間寸法を長くとること等を特徴とし、G地区第0・I面のc群建物と共通する要素が多い。また、F地区北辺では、F地区SB104と建物主軸方位を同じくする建物3棟程度(柱穴径20～30cm)と石組井戸、土坑等で構成される建物群を検出、前述のC・D地区掘立柱建物群に先行すると考えられる。

調査区北西側に偏在するa-1群2棟(SB109・113)、a-3群1棟(SB114)、b群2棟(SB112・115)は、近世以降の整地土101～103(厚さ25～40cm)を除去した後に検出した建物であり、他の建物柱穴の深さとの対比から、c群建物等と同一の生活面から掘られた柱穴と判断するには難しい側面を残す。そのため、5棟の建物のベース土層については、第6項で述べた第0・I面下の確認調査では明確に生活面を把握できなかったものの、洪水堆積層(I)(第8図16層)をベース土とする遺構群の可能性が高いと判断した。この洪水堆積層(I)は、C地区第Ⅲ面度で13世紀～14世紀前半に営まれた建物群(6×3間の総柱建物(109m)、2×1間建物(15m)各1棟)のベース土となる。また、G地区の北側約20mで行われた羽咋市教委第4次調査第Ⅱ地区において、現水田下40～80cmの深さで13世紀代の生活面を確認した結果も、判断を補強する材料となる。

建物に付随する井戸の存続年代については、SE1002から16世紀末～17世紀初めの備前焼すり鉢(第55図29)が、SE1005から16世紀後半の瀬戸・美濃天目碗(同図32)が、SE1006から16世紀代の中国製染付碗(同図33)がそれぞれ出土したことや、SE1009がP1112(17世紀中葉の肥前系天目碗(第72図181))より新しいことや、建物に付随する遺構の性格等から、おおむね16世紀後半～17世紀代を中心にすると考えられる。なお、C・D地区第Ⅰ面、F地区第0・I面では、14世紀後半～16世紀前半の石組井戸を検出している。

出土遺物 第0・I面の出土遺物は、古代の須恵器・土師器が大部分を占め、耕地整理の削平等もあり、中世以降の遺物はそれほど多くない。

12世紀～14世紀前半の遺物は、在地のロクロ土師器小皿(第58図58・61、第69図134・135等)、非ロクロ土師器小皿(第69図133)、貿易陶磁(白磁碗：第68図117、第69図136)、古瀬戸の折縁皿(第68図106)、珠洲焼の甕・壺・鉢(第70図141・142等)があり、限られた点数の中ではあるが12～13世紀代が目立つ傾向を示す。

14世紀後半～16世紀前半の遺物は、非ロクロ土師器小皿(第72図179)、珠洲焼すり鉢(第64図84)、中国製の染付碗皿(第55図33、第57図43、第64図96等)と極めて限定的であり、未実測の摩滅した珠洲焼甕胴部片を含めても点数は少なく、組成も貧弱である。集落が営まれたC・D地区では、14世紀後半～15世紀代を主体とした青磁碗・白磁坏等の貿易陶磁、瀬戸・美濃や珠洲焼、越前焼、また非ロクロ土師器小皿、瓦質土器等が約800点出土する状況と好対照を呈する。

G地区で遺構出土品を含めて遺物量が相対的に急増するのは、16世紀後半以降であり、その状況は17世紀代を通して継続する。組成は、碗・皿類、鉢・すり鉢、壺・甕類と比較的多様である。限られた資料からの推測となるが、16世紀後半～末にみられる瀬戸・美濃産の碗・皿(第55図32、第70図151)、在地や越前焼のすり鉢(第64図85、第70図140)、越前焼の甕(第64図90等)という組成が、17世紀を相前後する時期以降、肥前系陶器碗・皿類(第61図70、第72図181等)と越中瀬戸碗・皿類(第64図95、第68図104、第70図143)、肥前系陶器鉢類(第64図86等)、越中瀬戸や須佐唐津のすり鉢(第64図87、

第18表 G地区 第0・1面建物等の変遷案

地区・建物等		12c	13c	14c	15c	16c	17c	18c～
G地区 第0・1面	総柱 建物	a-1群	SB109・113					
		a-2群	F地区SB104 SB101					
		a-3群	SB114					
	側柱 建物	b群	SB115 (SB112?) SB102					
		c-1群	SB106・108・110・ 111・116・118					
		c-2群	SB104・105・117・ 119					
		c-3群	SB103・107					
	井戸							
	C・D地区第0・1面						→ ?	

第70図157等)、肥前系陶器の壺・甕類(第64図94、第62図75等)の組成に転換するようだ。また、初期伊万里皿(第64図89)や志野焼皿(第68図103)も各1点出土している。なお、非ロクロ土師器小皿は、京都系の特徴を示す個体は確認できず、16世紀後半と考えられる在地系の個体(第72図178)が少量出土したにとどまる。

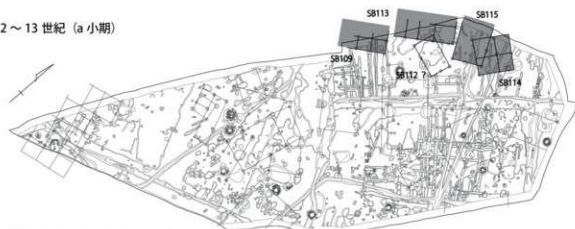
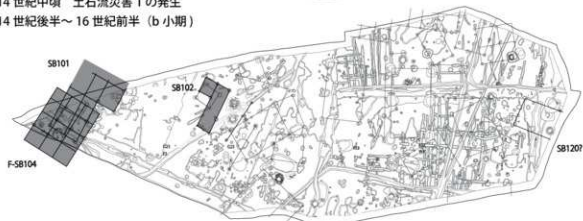
18世紀以降は、主に整地土や遺物包含層から肥前系陶磁器の染付碗・皿類が出土する一方、調理具・貯蔵具は確認できない。この単調な組成については、当地区が18世紀代に集落域から耕作域への転換を果たし、現代の耕地整理の際に19世紀以降の遺物とともに隣接地から二次的に移動してきた結果と考える。

第0・1面の変遷案 G地区は、遺構出土遺物が少なく、耕地整理による遺構の削平・損壊もあるため、一部推測を含めて、第18表、第77図のa小期(C地区第Ⅲ面並行)、b小期(C地区第Ⅰ面並行)、c・d小期(C地区第0面)の4期の変遷案を考えた。ただし、総柱構造の建物で構成されるb小期については、C・D地区～F地区南半に分布する側柱建物群と並存し、建物構造の差は居住者の階層や建物用途等の差を反映した可能性を多分に残す。2つの建物平面積には大きな差は認められない。

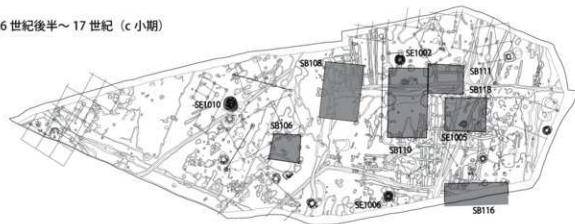
a小期(12世紀～13世紀前半(主体は12世紀代か))は、調査区北西端～調査区外西側(羽中市教委第4次調査第Ⅱ地区)に集落域が展開し、建物主軸方位N-約40°Wを中心をもつSB109、SB113～115、(SB112?)が営まれる。建物規模等不明な部分が多く、遺構の重複関係から数回の建て替えを行う。14世紀中頃にC・D地区第Ⅱ面水田を被覆する土石流災害1が発生する。G地区でも第0・1面ベース土として土石流堆積層を確認しており、扇状地全体の営みに多大な影響を与えた大規模災害であった。

b小期(14世紀後半～16世紀前半)は、G地区第Ⅰ面では、出土遺物が限られるものの、G地区南半(～F地区第0・1面北辺)で、建物主軸方位N-16～21°Wを示す建物群(F地区SB104、SB101・102、(SB120?))が営まれる。F地区SB104は、中世的な総柱構造の建物(約54m²)で、径50cmに満たない小型の円形掘方の柱穴を特徴とする。これらの建物は、C・D地区第Ⅰ面で検出した、大形の柱穴掘方(長径50～120cm)をもち、梁間柱間寸法を長く取る側柱構造の建物とは大きく異なり、前出的な建物構造である。また、C・D地区第Ⅰ面の掘立柱建物が、主軸方位に強い規制をみいだせない点も異なる要素といえる。前述のとおり、ここでは保留部分を残すものの、G地区南半～F地区北辺のF地区SB104、G地区SB101を主屋とする建物群の廃絶後に、C・D地区第Ⅰ面の梁間寸法が長い側柱構造の建物群が成立したと整理しておきたい。なお、b小期の総柱構造の建物と、c・d小期の側柱構造の建物とも、側面を加工しな

12～13世紀 (a小期)

14世紀中頃 土石流災害1の発生
14世紀後半～16世紀前半 (b小期)

16世紀後半～17世紀 (c小期)



16世紀後半～17世紀 (d小期)



第77図 G地区 第O-1面建物等変遷案 (S=1/500)

い芯持ち材を支柱に用いる点や、小型の石組井戸を集落の構成要素とする点で共通する。

G地区で小型井戸を伴って建物群が再展開は、出土遺物の様相から16世紀後半以降となる(c・d小期)。C・D地区第1面の集落域が16世紀第1四半期頃を下限とする状況や、G地区でも梁間寸法の長い側柱構造の建物が主体であることから、16世紀中葉頃に自然災害あるいは政治的・経済的な要因により、C・D地区と一部重複しつつ、集落域が新たに成立したと考えられる。G地区で16世紀後半に成立した集落域(第0面)は17世紀代まで継続し、建物群の主軸方位等から、c小期(N41～50° Wの建物群SB106・108・110・111・116・118)、d小期(N69～80° Wの建物群: SB104・105・117・119、N5～15° Wの建物群: SB103、(SB・107?))の順に整理した⁽⁵⁾。c小期は、建物柱穴の重複からSB111→SB110の順と推移し、面積46.5㎡を測るSB110は居住以外の特別な用途をもった建物と考えられる⁽⁶⁾。d小期には、SB105・109(約31㎡)を主屋とし、それぞれに雑舎と石組井戸が伴う2つの建物群が展開する。井戸については、SE1002・05・06が16世紀後半以降の廃絶・埋戻しを確認できる程度で、時期比定が難しい。これらの建物群は、出土遺物の様相から一般的な農村集落で、遅くとも19世紀代(おそらく18世紀代)には耕作地に転じたものと考えられる。第4図のとおり現四柳町集落が、西往来(旧国道159号)と、それから西側の邑知溝に向けて分岐する2条の小路(A・E地区間、G・H地区間の道路)に面した街村の景観を呈する。第0面で確認した集落域もほぼ同様な景観をもつと考えたい。

【註】

- (1) 古代～中世初めの土器については、田嶋明人氏が提示した土器編年軸で時期を示す(北陸古代土器研究会・石川考古学研究会1988「シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題」、田嶋明人2013「平安期土器の暦年代と横江遺跡の編年」[加賀 横江遺跡]白山市・白山市教育委員会)。暦年代観は、概ねI期を6世紀末～中葉、II期を7世紀3/4四半期～8世紀初頭、III期を8世紀前葉、IV₁期を8世紀中頃、IV₂期を8世紀後葉～9世紀初頭、V₁期を9世紀前葉、V₂期を9世紀中頃、VI₁期を9世紀後葉、VI₂期を9世紀末～10世紀初頭、VI₃期を10世紀前葉、VII期を10世紀中葉～11世紀前葉、中世I-1期を11世紀中葉～後半、中世I-II期を11世紀末～12世紀中頃とする。また、須恵器出現期以降の土師器については、成形時におけるロクロ台の使用の有無から「ロクロ土師器」と「非ロクロ土師器」に、両者を指す場合には「土師器」と記載している。
- (2) 国土地理院が所有する昭和29年(1954)米軍撮影の航空写真では、調査区周辺は自然地形に沿った弓状の棚田が複雑に連なる景観がみとれる。この景観は、国土地理院の昭和38年(1963)撮影の航空写真でも同様である。一方、昭和43年(1968)撮影の航空写真では長方形を基本とする整然とした棚田景観に変わっており、後述する整地土101～107を昭和40年前後に施工された耕地整理の痕跡と推定した。なお、現地調査時に、地元現場作業員の方から明治時代に耕地整理が行われたとの話を聞いた他、羽咋市教育委員会刊行の「四柳白山下遺跡Ⅲ」に余喜地区周辺で昭和20年代に耕地整理が行われたとの記載があり、これらは水田区画を大きく変えるような規模の耕地整理ではなかったようだ。また、周辺地域は平成16～20年度に県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区が実施され、さらに水田の大区画化が進んでいる。
- (3) 山本信夫2000「大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」太宰府市教育委員会
- (4) 加藤克郎2001「羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨」[石川県埋蔵文化財情報第5号](財)石川県埋蔵文化財センター
- (5) c小期からd小期の変遷期は、SB106柱穴とSB105柱穴の切り合い関係を根拠とした。18世紀以降の土地利用の在り方(整地土101～103にみられる基軸方位)を加味すれば、逆の変遷期も十分想定可能である。
- (6) 大型で長方形を基調とする柱穴掘方、長い柱間寸法を特徴とする類似の側柱構造の建物は、宝達志水町末森城跡若宮丸調査区、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡で確認できる(末森城跡調査団・押水町教育委員会1989「末森城跡」)。末森城跡の16世紀後半の建物は、桁柱間寸法4.5～6m、梁間柱間寸法3.35mを、14世紀後半の谷内ブンガヤチ遺跡SB2は、同約9m、同6m弱を測る。
- (7) 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所2002「銚子めぐり諸問題」

第3節 第三Ⅰ面の遺構と遺物（第78～108図、第19～25表）

G地区第三Ⅰ面は、第4次調査(1997)において厚さ10～90cmを測る第0・I面ベース土(第8図土層9・17・19等の流入・堆積土)を重機で除去した段階で検出した生活面である。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南西端(SD3017脇)で14.54m(第0・I面ベース面より-49cm)、G-23区杭脇で15.65m(同-15cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で15.75m(同-35cm)、北端(F-26区杭西8m)の水田畔上で14.95m(同-65cm)、北東端(F-27区杭脇)で15.20m(同-75cm)を測る。検出面の比高差は、Gライン(北東-南西方向)で約1.2mを、26ライン(南東-北西方向)で約0.8mを測り、南西側および北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。

遺物包含層は、標高が下がるF～G-22区以南にのみ存在し、上下2層(上層包含層:濁黒灰色砂質土、下層包含層:濁灰緑色砂質土、現地調査時は下層落ち込みと呼称)に分かれる。ベース土は、河跡3001以南が明黄茶～明灰色粗砂・砂利(第8図土層23等)または固くしまった第Ⅳ面包含層(同図土層32～35:濁灰～暗灰色砂質土)であり、河跡3001以北がしまりのない耕作土(第100図)である。

調査の結果、調査区南半で掘立柱建物(SB)2棟、F地区第三Ⅲ面から連続する耕作に伴う小溝(SD)約40条、ピット等を、中央部で河跡1ヶ所、北側で水田(SN)3枚を含む耕作域を確認した(第78図)。第三Ⅱ面を含めた大まかな変遷は、①10世紀初頭(V₂期)に発生した第Ⅳ面を廃絶させた極めて短期間の土砂流入・堆積(河跡3001(古))、②10世紀前葉頃に再開した集落・耕作域(第三Ⅰ面調査区南端下層小溝群・SB2棟+右岸に護岸を施した河跡3001(新)+第三Ⅱ面小溝群)、③10世紀中葉頃の水田域への転換(第三Ⅰ面調査区南側上層小溝群+右岸に護岸を施した河跡3001(新)+第三Ⅰ面水田301～303と耕作放棄地)、④10世紀後葉以降11世紀前葉頃の極めて短期間に流入した大量の土砂の再堆積による耕作域の放棄の4小期に整理でき、第4節で整理する。

遺物は、多数の須恵器、土師器の他、帯金具(銅製巡方)、石鏃各1点が出土した。なお、第4次調査は、調査期間の関係で河跡3001(新)、水田301～303の流入・堆積土砂を除去した段階で現地調査を終了し、第5次調査(1998)で第三Ⅱ面と一体的に補足調査を行った。

1 掘立柱建物(遺構:第92図・第19表、遺物:第93図・第20表)

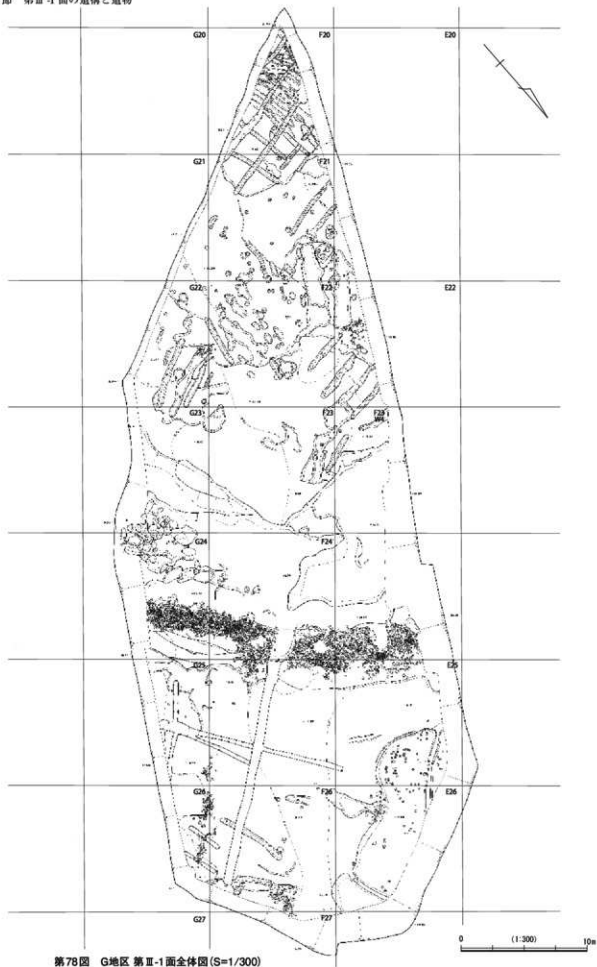
掘立柱建物(SB)は、上層包含層を掘り下げて検出、本来は第三Ⅱ面に属する。小規模な総柱構造の建物、側柱構造の建物各1棟があり、柱穴から少量の須恵器、土師器が出土した。

SB301(遺構:第92図)

F・G-21・22区で検出した総柱構造の掘立柱建物である。平面プランはゆがみ、柱穴は総じて浅いため一部を欠落する。主軸方位はN-0°3'Wを示し、桁行3間(6.95m)×梁間2間(3.95m)、床面積27.4㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.10～2.55m、梁間の柱間寸法は1.75～2.30mと、柱間寸法は不平等で、柱筋の通りはよくない。柱穴の平面形態は不整形または略円形を呈するものが主体で、P3001が径26～34cm、深さ10cmを、P3004が径50cm弱、深さ17cmを測る。柱穴覆土は、粒状の緑灰色砂質土や炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土を基本とする。柱根、柱痕跡とも遺存せず、遺構の切り合い関係は柱穴P3004がSB302を構成する柱穴P3005より新しい。P3001から非ロクロ土師器壺、P3002から土師器壺、P3004からV₂期の須恵器無台坏、ロクロ土師器壺、非ロクロ土師器壺の細片が出土した。

SB302(遺構:第92図、遺物:第93図)

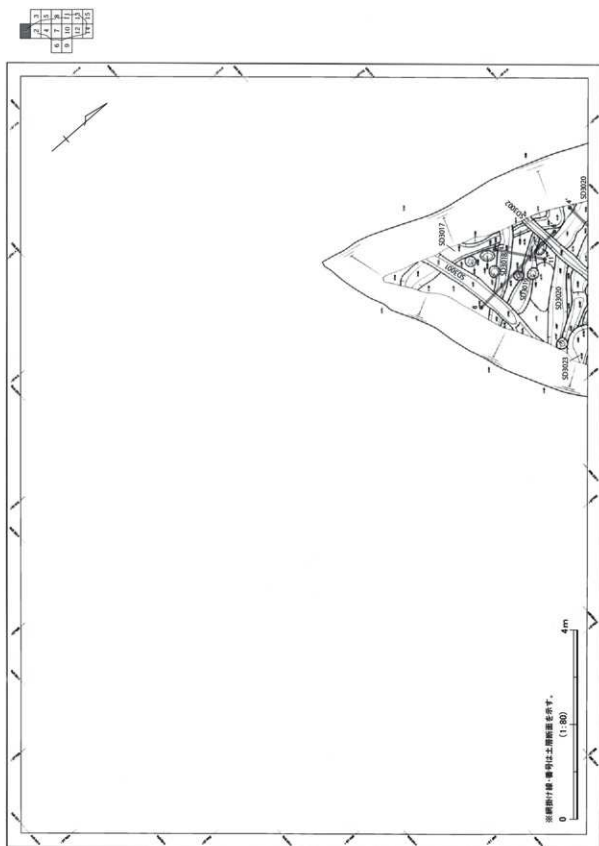
F-21区で検出した側柱構造の掘立柱建物であり、平面プランはややゆがむ。主軸方位はN-82°W

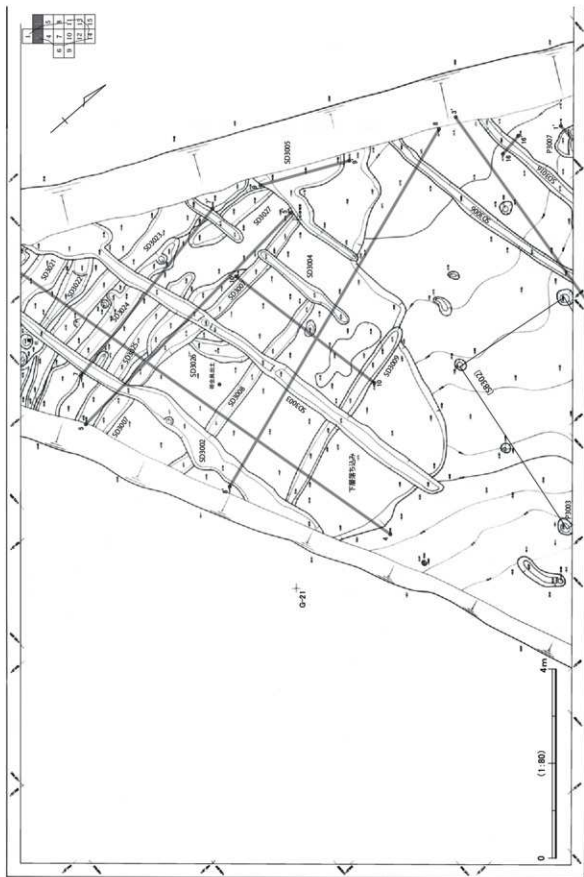


第78図 G地区 第Ⅲ-1面全体図 (S=1/300)

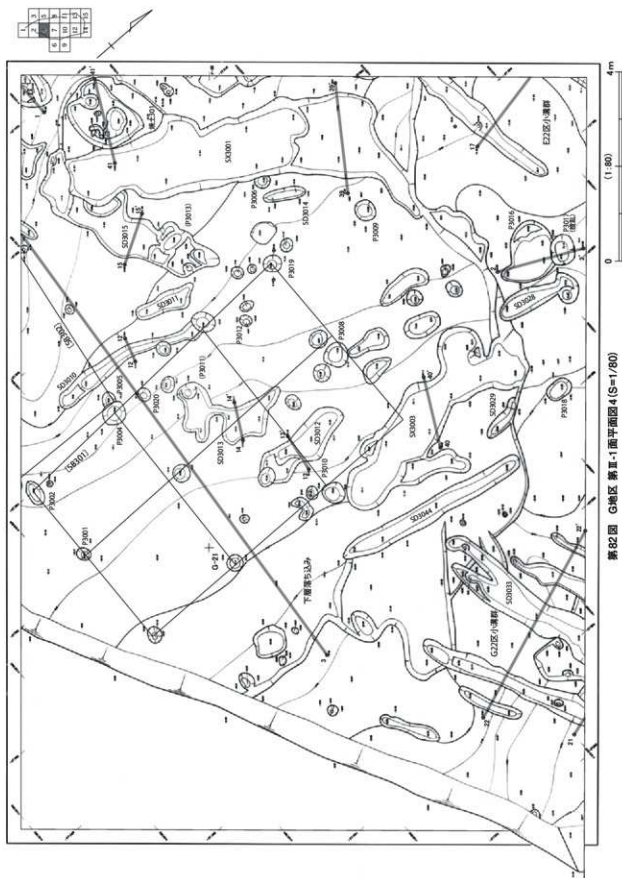


第79図 G地区 第Ⅱ-1面主要遺構配置図(S=1/300)

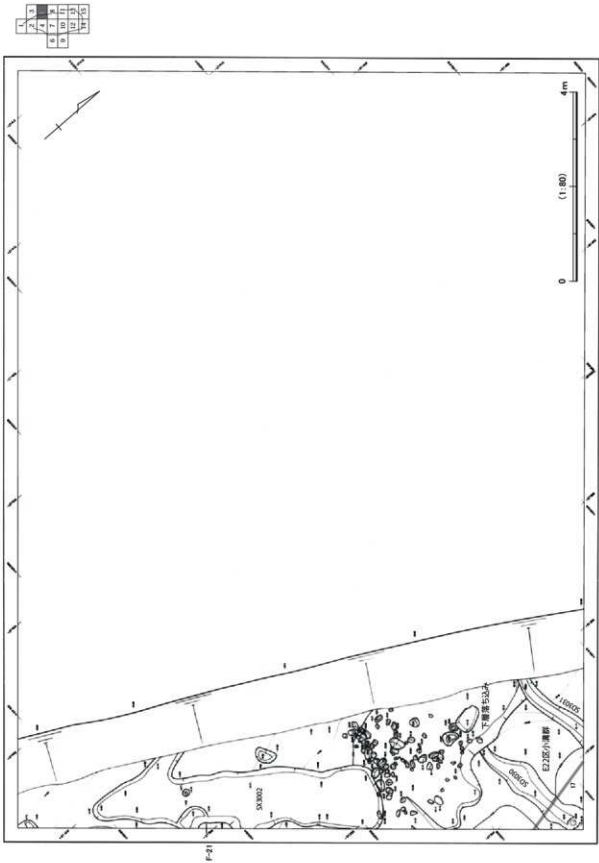




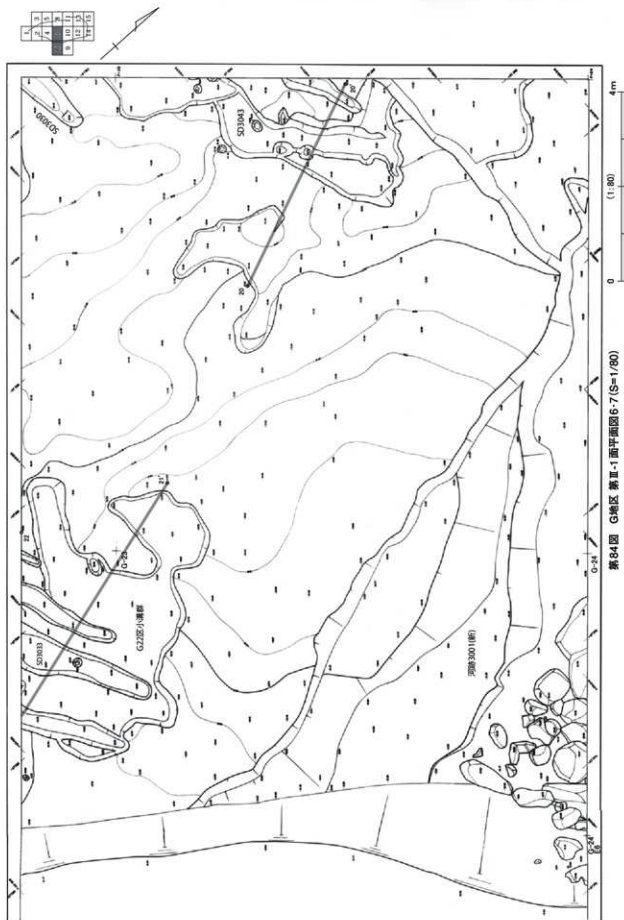
新81図 G地区 第三-1面平面図2.3 (S=1/80)

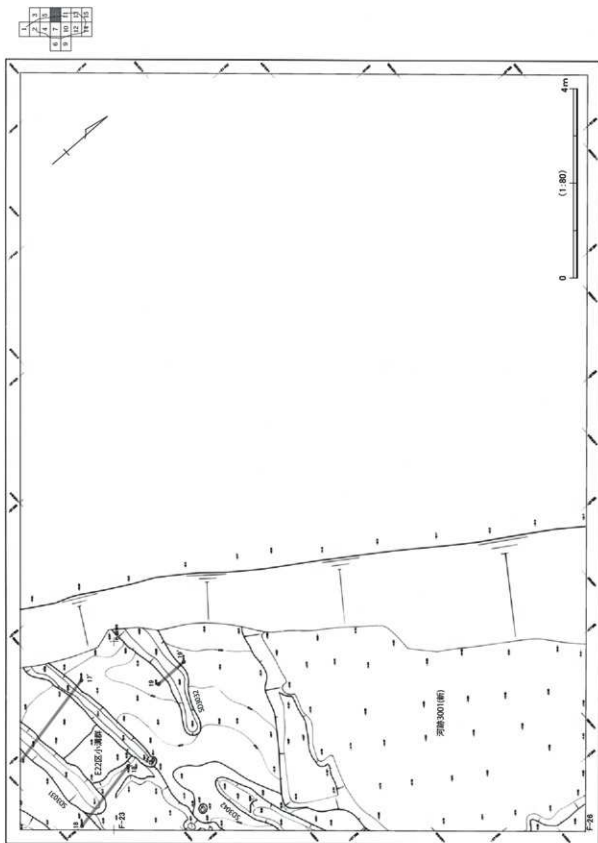


第82図 G地区 第三-1面平面図4(S=1/80)

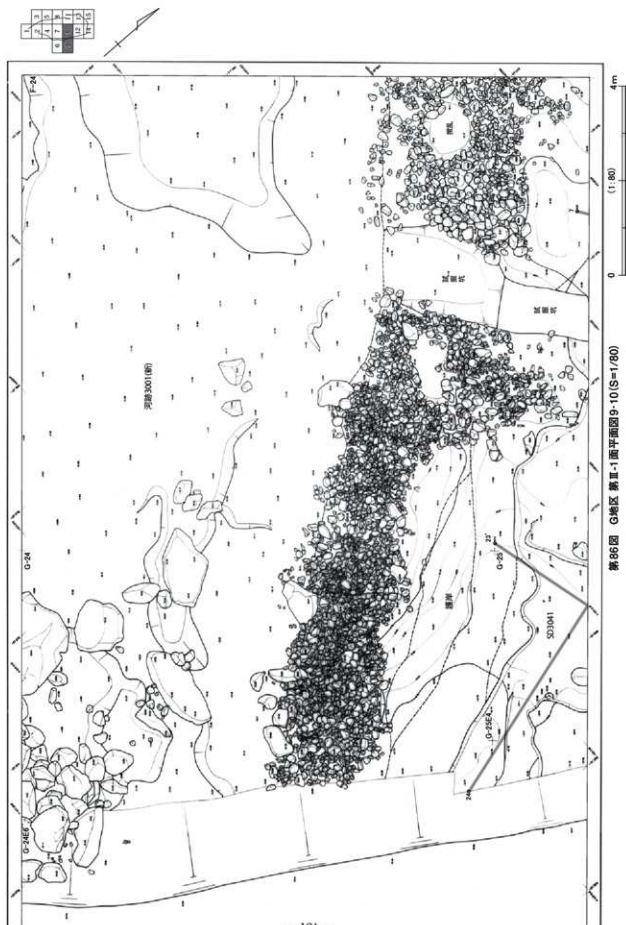


第83図 G地区 第五-1面平面図5(S=1/80)



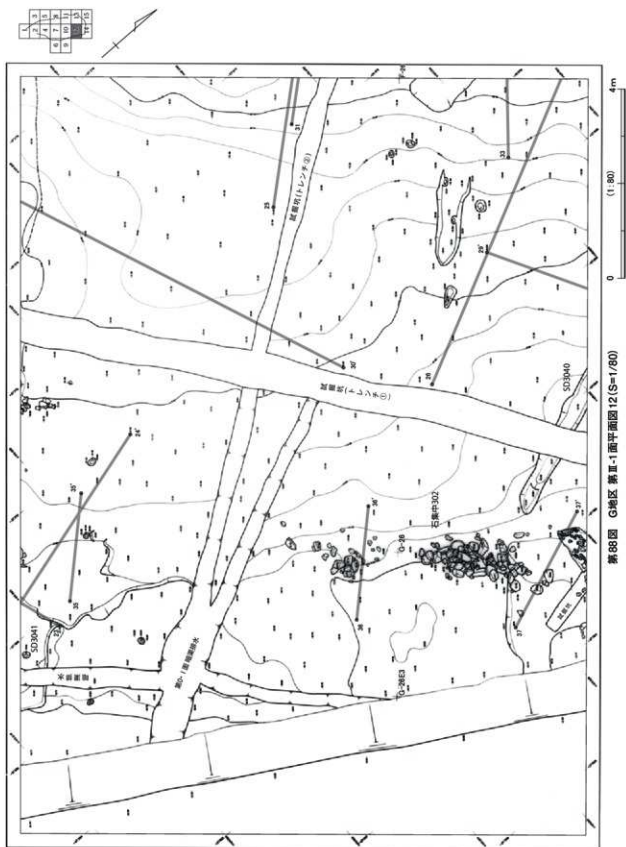


第85図 G地区 第三-1面平面図8(S=1/80)

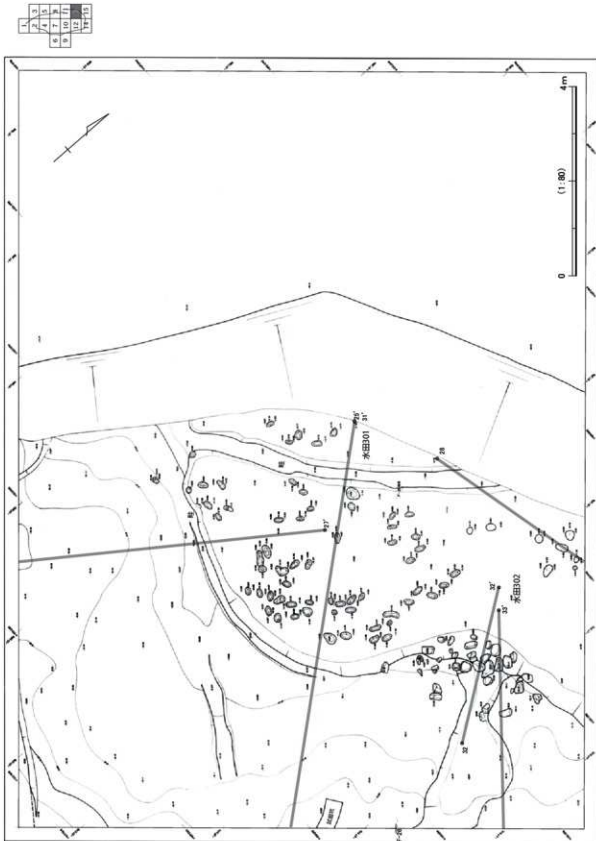




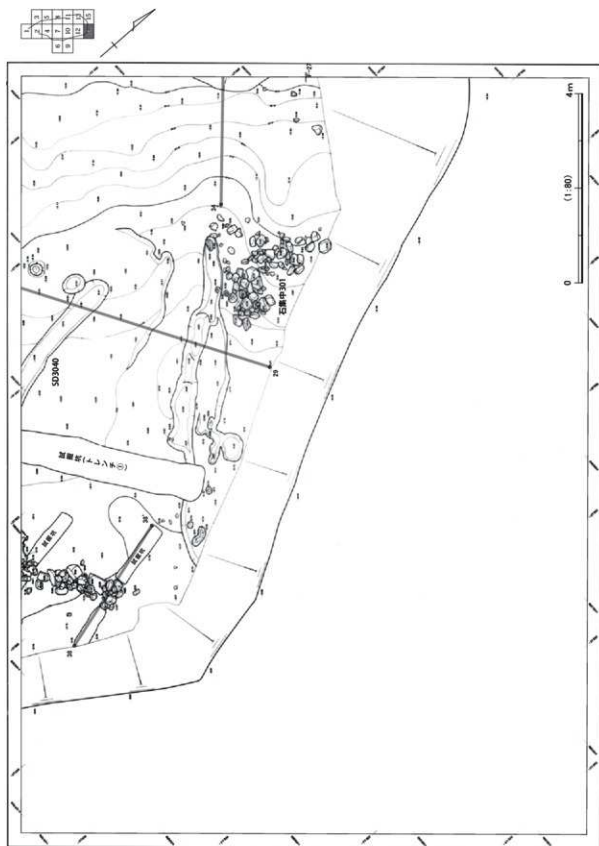
第87図 G地区 第五-1面平面図11(S=1/80)



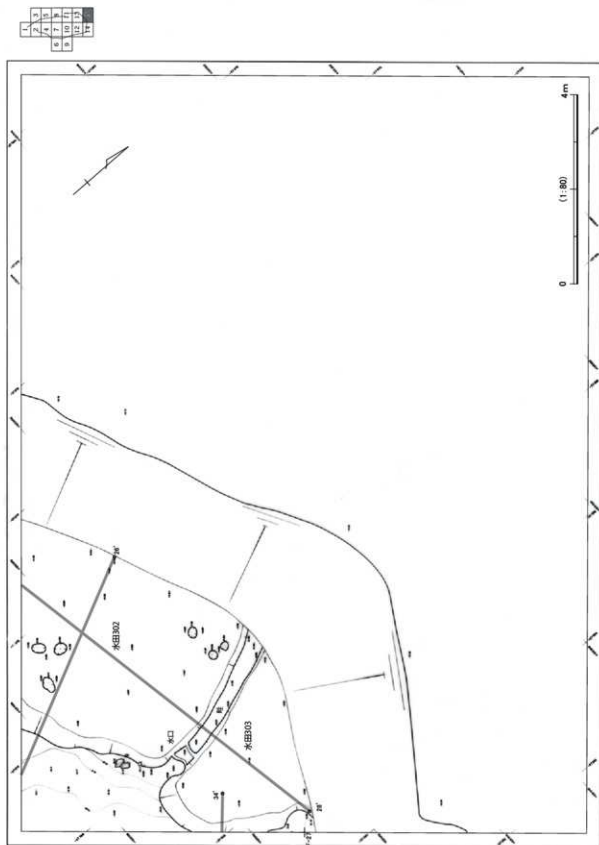
第88図 G地区 第三-1面平面図12(S=1/80)



第89図 G地区 第Ⅲ-1 面平面図13 (S=1/80)



第90図 G地区 第Ⅲ-1面平面図14(S=1/80)



第91図 G地区 第Ⅱ-1面平面図15 (S=1/80)

を示し、SB301とはほぼ直交する位置関係にある。桁行中央柱穴は、柱筋より20～30cm外側に張り出し、2間(4.15m)×梁間1間(2.70m)、床面積11.2㎡となる。桁行の柱間寸法は1.75m・2.15mを測り、柱間寸法と柱筋の通りは乱れる。柱穴の平面形態は不整形または略円形を基本とし、P3003が径34～40cm、深さ9cmを、北西隅の柱穴が径約35cm、深さ20cmを測る。柱穴覆土は緑灰色砂質土が粒状に混ざる濁黒灰色砂質土を基本とする。柱根、柱痕跡とも遺存せず、遺構の切り合い関係は、柱穴P3005がSB301を構成する柱穴P3004より古い。遺物のうち、P3003出土の第93図212を図化した。須恵器坏蓋212は口縁端部をしっかりと面取りしており、Ⅳ₂期に位置付けられる。他にP3003から土師器甕片9点、P3005からロクロ土師器埴片数点がそれぞれ出土した。

2 ビ ッ ト (遺構：第92図、遺物：第93図・第20表)

調査区南半のE～G-21・22区を中心に小規模なビット約30基を検出した。ビットの覆土は、炭粒や緑灰色砂質土粒が混ざる濁黒灰～灰色砂質土を基本とする。以下では、断面図を作成または出土遺物を実測したビットについて記す。なお、P3014・15・17・19は欠番である。

P3007 (遺構：第81・82・92図)

F-21-3区で検出した平面不整形を呈する柱穴である。長軸約100cm、短軸約80cm、深さ28cmを測り、覆土は小石や炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺構の切り合い関係および出土遺物はない。

P3011 (遺構：第82図、遺物：第93図)

F-21-4区で検出し、平面略円形を呈する。深さ15cmを測り、覆土は炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺物のうち第93図213須恵器瓶を図化した。薄手の213は、球形の体部から緩やかに口縁部が開く。他にⅥ期に位置付けられる内黒ロクロ土師器無台埴片、甕片各1点が出土した。

P3013 (遺構：第82図、遺物：第93図)

F-21-3区で検出し、平面略楕円形を呈する。深さ19cmを測り、覆土は炭粒が混ざる濁黒灰色砂質土である。遺物のうち第93図214のロクロ土師器甕片を図化した。214は口径約24cmを測り、肥厚した口縁端部を平坦に仕上げる。他に須恵器無台坏、土師器甕の細片が出土した。

P3016 (遺構：第82図)

F-22-3区で検出した、平面不整形を呈する浅い窪みである。底面は起伏が認められ、覆土はオリープ黄褐色砂質土の単層である。遺物は須恵器無台坏、甕、土師器甕の細片が出土した。

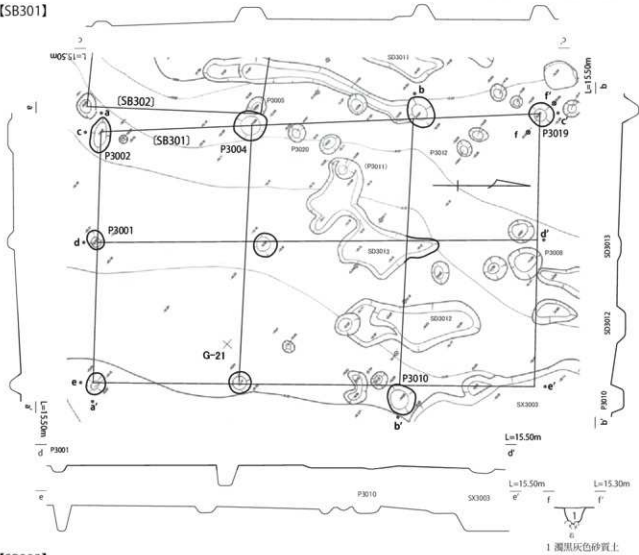
3 溝 (遺構：第94～96図、遺物：第97図、第20表)

約40条の溝(SD)を検出しており、調査区南半に分布する溝の大部分は耕作に伴う小溝(畝地)と考えられる。また、調査区北半のSD3041が第Ⅲ-1面を被覆した土石流の流入痕跡、SD3040は第Ⅲ-1面が土砂で埋没した以降に単独に掘られた溝となる。調査区南半の溝は、切り合い関係・覆土の状況等から3小期に細別可能で、①F-20・21区SD3017～27等→②F-20・21区SD3007～09→③F-20・21区SD3001～06・16+E-22区小溝群+G-22区小溝群の順に変遷する。このうち、3ヶ所に分布する③は、第Ⅲ-1面最終段階(土砂埋没段階)での耕作単位を反映したものと考えられる。なお、現地調査でSDSD3001～33まで遺構番号を付与、報告書作成時に新たにSD3040～44を付した(SD3034～39は欠番)。

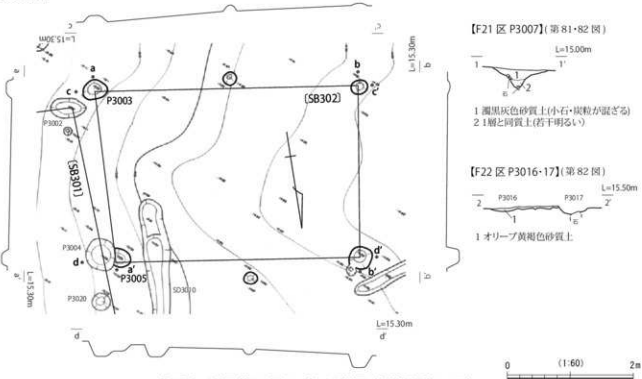
SD3001～09・16 (遺構：第80～82・94～96図、遺物：第97図・第20表)

F-20区、E・F-21区で検出した耕作に伴う小溝群で、F地区第Ⅲ面北側で検出した小溝群と一体をなす。上層包含層(濁黒灰色砂質土)を掘り下げた段階で、下層包含層(濁灰緑～緑灰色砂質土)を遺構検出面とする小溝群である。

[SB301]



[SB302]

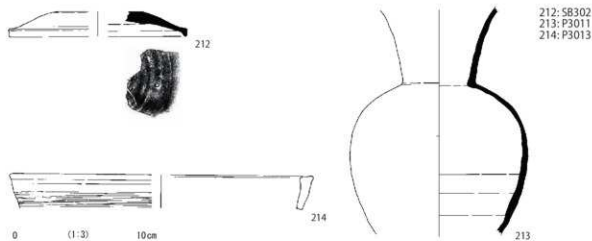


第92図 G地区 第三-1面SB・ビット平面図・土層断面図(S=1/60)

G地区 第19表 第Ⅲ-1面SB規模等一覧表

※ 単位寸法は北端から南端まで、または東端から西端までの間に計測。

遺構名	図号	グリッド名	柱構造	柱配置	柱間幅 (m)	柱行長 (m)	柱行間寸法 (m)	柱行長 (m)	柱間幅寸法 (m)	主軸方位	柱式の平面形状	柱型の有無	備考
SB001	図	F-G 21-22	楕柱	3×2間	27.4	4.95	〔東側〕 2.50+2.50+2.30 〔南側〕 2.90+2.50+2.40	3.95	〔南側〕 2.20+1.75	〔東側〕 N-75° 〔西側〕 N-30° 西	楕円形 不整形内角	なし	柱間に巾がみあり
SB002	図	F-21	楕柱	2×1間	11.2	4.15	〔北側〕 2.30 + (1.75) 〔南側〕 (2.15) + (2.00)	2.20	2.20	N-80° 西	楕円形 不整形内角	なし	*



第93図 G地区 第Ⅲ-1面SB・ピット出土遺物実測図(S=1/3)

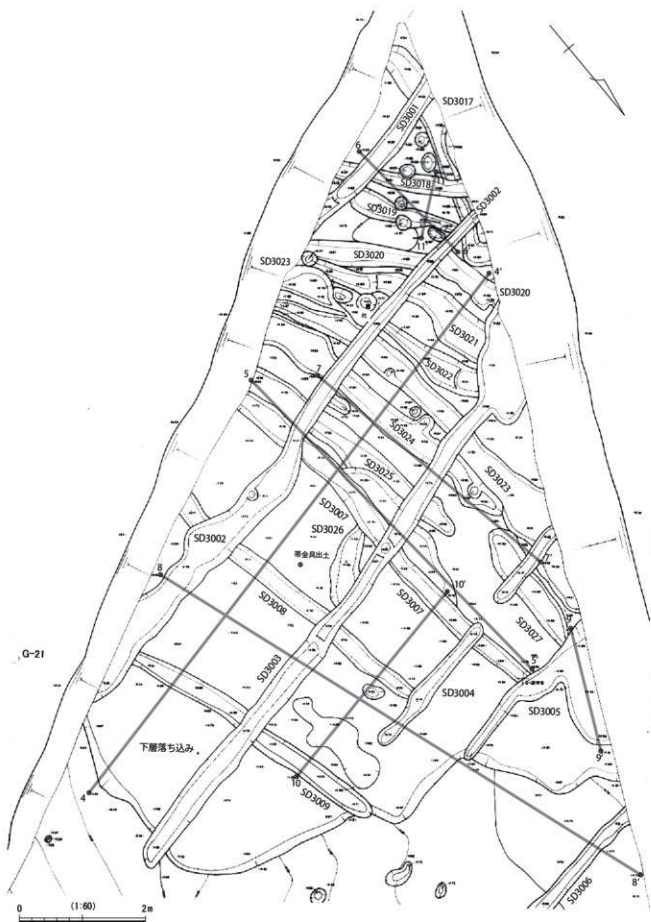
SD3001～06・16は、溝主軸方位N-75～80°Eを示し、ほぼ地勢に直交しながら直線的に延びる。溝の長さはSD3002・03で10m以上、溝間距離はSD3001～02間が約1.7m、SD3002～03間が約2.2m、SD3003～04間が約1.8m、SD3004～05間が約1.2m、SD3005～06間が約2.5m、SD3006～16間が約1.6mを測り、必ずしも等間隔ではない。各溝は幅20～40cm、深さ10cm前後を測り、しまりのない濁黒灰～黒灰色砂質土を覆土とする。また、SD3002・05では第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第95図断面8土層1:明茶黄色粗砂)の堆積が確認できる(写真図版27)。SD3006以外から遺物が出土、SD3002・03出土のロクロ土師器赤彩無台碗(第97図215)、SD3003出土の須恵器(同図216・217)を図化した。215は、底部外面を含めて全面を赤彩する。回転糸切り痕を残す底部外面外縁に1条の沈線が施されており、台部接合を意図した可能性をもつ。坏蓋216は口径14.9cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑となる。無台盤217は口径約14cmを測り、V₂～VI₁期に位置付けられる。SD3001～06・16からは、他に須恵器無台坏・坏蓋・有台坏・瓶・甕、ロクロ土師器碗類・鉢・甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

SD3007～09は、溝主軸方位N-6～13°Wを示し、SD3001～06にはほぼ直交、北を指向しながら地勢に沿って掘られる。溝の長さはSD3007で6.2m以上、溝間距離はSD3007～08間が1.5～2.0m、SD3008～09間が2.0～2.2mを測る。各溝は幅25～45cm、深さ5～10cmを測り、濁黒灰色砂質土を覆土とする。SD3007から須恵器坏類、VI₂期のロクロ土師器碗類、非ロクロ土師器甕の細片が、SD3008から須恵器坏類、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

遺構の切り合い関係からSD3007～09→SD3001～06・16と変遷し、後者の小溝群についてはSD3002・05覆土の様相から第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)に位置付けられる。

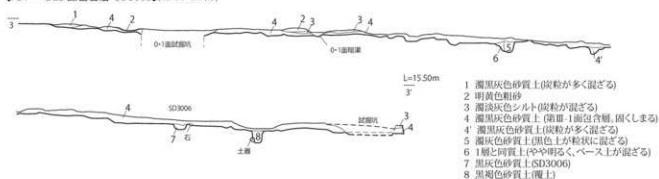
SD3017～27(遺構:第94～96図、遺物:第97図・第20表)

F-20区で検出した耕作に伴う小溝群である。下層包含層(濁灰緑～緑灰色砂質土)を掘り下げた段階で検出しており、明灰～茶色を基調とする粗砂をベース土とする。溝主軸方位はSD3007～09と近

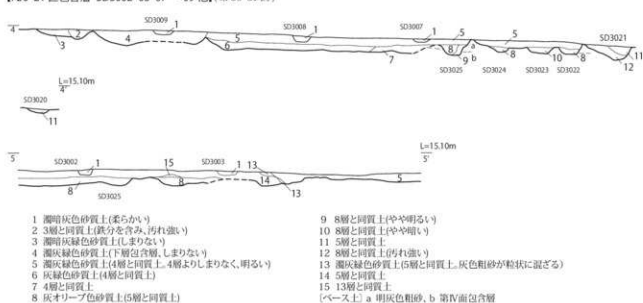


第94図 G地区 第Ⅱ-1面F20-21区SD平面図(S=1/60)

【F21～G22区包含層・SD3006】(第81・82図)



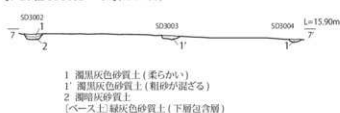
【F20-21区包含層・SD3002-03-07～09他】(第80・81図)



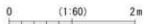
【F20区 SD3001-02-18】(第80図)



【F20区 SD3002～04】(第81図)



【F20区 SD3002-03-03-16】(第81図)



第95図 G地区 第Ⅲ-1面SD土層断面図1(S=1/60)

【F21区 SD3005】(第81図)



- 1 濁黒灰色砂質土(SD3005覆土)
- 2 濁黒灰色砂質土(汚れ強い)
- 3 濁緑灰色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 4 2層と同質土
- 〔ベース上〕下層包含層(緑灰色砂質土)

【F20・21区 SD3007～09】(第81図)



- 1 濁黒灰色砂質土
- 2 1層と同質土(色調やや淡い)
- 〔ベース上〕下層包含層(緑灰色砂質土)

【F20区 SD3018・19】(第80図)



- 1 濁黒緑灰色砂質土

〔ベース上〕茶色粗砂

【F21区 SD3010】(第82図)



- 1 灰褐色砂質土

【F22区 SD3012】(第82図)



- 1 濁黒色砂質土

【F22区 SD3013】(第82図)



- 1 濁暗灰色砂質土
- 2 灰褐色砂質土

【F21区 SD3015】(第82図)



- 1 濁黒色砂質土
- 2 濁黒色砂質土(1層より淡い)

【F21区 SD3016】(第81図)



- 1 濁黒色砂質土

【E・F22区 SD3030・31】(第82・85図)



- 1 淡灰茶色砂
- 2 にぶい茶褐色細砂(淡灰オリブ色土が粒状に混ざる)
- 4 淡灰オリブ色細砂

【E22区 SD3031】(第85図)



- 1 淡灰茶色砂
- 2 濁灰オリブ色細砂
- 3 濁色土が粒状に混ざる
- 〔ベース上〕茶褐色細砂

【E-23-2区 SD3032】(第85図)



- 1 明茶色砂利
- 2 淡灰オリブ色細砂
- 〔ベース上〕濁灰色砂質土

【F23区 SD3042・43】(第84図)



- 1 濁褐色砂質土(粗砂が多く混ざる)
- 2 淡灰オリブ色砂質土(濁色砂質土粒が混ざる)
- 〔ベース上〕濁灰色砂質土

【G22・23区 SD3033】(第82・84図)



- 1 茶灰色砂
- 2 濁灰オリブ色細砂(濁色土が混ざる)
- 3 濁褐色細砂(淡灰オリブ色土が粒状に混ざる)
- 4 濁褐色細砂と淡灰粗砂の混合土
- 〔ベース上〕IV面包含層(濁灰色砂質土)



【F・G-25区 SD3041】(第86・88図)



- 1 淡茶灰色粗砂(2層と同時期に堆積)
- 2 濁緑灰色細砂(シルトに近い)
- 2' 暗灰褐色砂質土(2層が粒状に多く混ざる)
- 3 暗褐色粘質土(2層と同時期に堆積)
- 〔ベース上〕a IV面包含層(濁灰色砂質土)
- b 淡灰色砂質土(堤防盛土、粗砂・砂利が混ざる)



0 (1:60) 2m

第96図 G地区 第三-1面SD土層断面図2(S=1/60)

似しており、地勢に沿って屈曲しながら南北方向に延びる。重複が著しいものの、F地区第Ⅲ面小溝群の様相から約1.5～2mの間隔で掘られたと考えられる。各溝は幅40～75cm、深さ6～25cmを測り、覆土は炭粒が多く混ざる濁灰緑～灰オリーブ色砂質土である。出土遺物のうち第97図221～223を図化した。SD3017出土の須恵器無台坏221は口径12.3cm、器高3.3cmを測り、底部は台状を呈する。使用に伴う摩耗が目立ち、Ⅵ期に位置付けられる。SD3024出土の非ロクロ土師器甕222は底径15.4cmを測り、内面は摩耗が著しい。非ロクロ土師器甕223は復元に不安を残す。他にSD3017・21～27からⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・甕、非ロクロ土師器埴類・甕の細片が出土した。

SD3010～15・28・29・44(遺構：第82・96図、遺物：第97図・第20表)

E・F・21・22区で上層包含層(濁黒灰色砂質土)を掘り下げた段階で検出した小溝群である。北を指向しながら直線に延びるSD3010・12・28・44は耕作に伴う小溝、その他は包含層の浅い落ち込みと考えられる。覆土は濁黒～暗灰色砂質土を基調とする。SD3044以外から遺物が出土しており、第97図218～220を図化した。SD3012出土のロクロ土師器有台埴218は細長い台部を外展気味に貼り付ける。SD3014出土の須恵器無台坏219は薄手で、体部下半に丸味をもつ。SD3015出土の須恵器有台坏220の体部は直立気味に立ち上がり、口縁部で小さく外反する。他にⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器埴類・甕、非ロクロ土師器埴類・甕の細片が出土した。

SD3030～32・42(遺構：第82～86・96図)

E・F・22・23区で検出した小溝群で、現地調査時はE-22区畝溝群と呼称した。東西・南北方向とも約10mの範囲に分布し、調査区外西側に延びる。溝主軸方位は西を指向しながら地勢に直交して掘られ、溝の長さはSD3042が約3.4m、その他が約5mを測る。溝間距離は1.4～2.6mを測り、等間隔でない。各溝は幅25～60cm、深さ10～25cmを測り、茶褐色～淡灰オリーブ色を基調とする細砂を覆土とする。また、第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第96図断面17～19各土層1：淡灰茶色砂～明茶色砂利)の堆積が確認できる。遺構の切り合い関係から上層包含層より新しく、SD3001～06・16と同様に第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)での耕作痕と考えられる。SD3042以外からⅥ期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

SD3033(遺構：第82・84・96図)

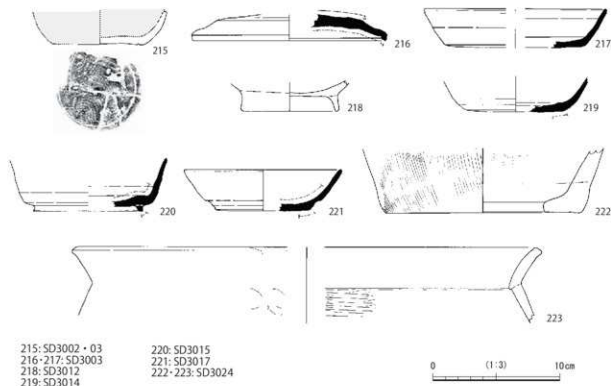
F・G・22・23区で検出した耕作に伴う小溝群で、現地調査時は東西方向約8m、南北方向約7mの範囲に分布する周辺の小溝5条を含めてG-22区畝溝群と呼称した。溝主軸方位はN-60～67°Eを示し、地勢にはほぼ直交気味に掘られる。溝の規模から長さ1.2～1.4m、幅15～25cm、深さ5～10cmの群と、長さ4～6m、幅30～75cm、深さ5～20cmの群に細分可能である。覆土は濁淡灰オリーブ色または濁褐色を呈する細砂を基本とし、第Ⅲ-2面を被覆した流入土砂(第96図断面21土層1：茶灰色粗砂)の堆積が確認できる。遺構の切り合い関係から上層包含層より新しく、SD3001～06・16と同様に第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)での耕作痕と考えられる。Ⅵ期以前の須恵器坏類、ロクロ土師器甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

SD3040(遺構：第88・90・99図)

河跡3001(新)の北側に位置するF-26区で検出した単独に立地する小溝で、溝主軸方位N-約18°Wを示す。長さ約5.7m、幅40～55cm、深さ6～22cmを測り、上層から淡茶色粗砂、濁灰色砂質土が堆積する。遺構の切り合い関係から第Ⅲ-2面埋没後に掘られた溝で、出土遺物はない。

SD3041(遺構：第86・88・96図)

河跡3001(新)の北側に位置するF・G-25区で検出した溝状遺構で、第Ⅲ-2面を短期間のうちに被覆した土砂の流入痕跡である。覆土は淡茶灰色粗砂、淡緑灰色細砂を基調とする。出土遺物はない。



第97図 G地区 Ⅱ-1面SD出土遺物実測図(S=1/3)

SD3043 (遺構：第84・85・96図)

E・F・23区で検出した溝状遺構で、下層包含層の落ち込みの一部と考えられる。出土遺物はない。

4 水田区画 (遺構：第79・98～100図)

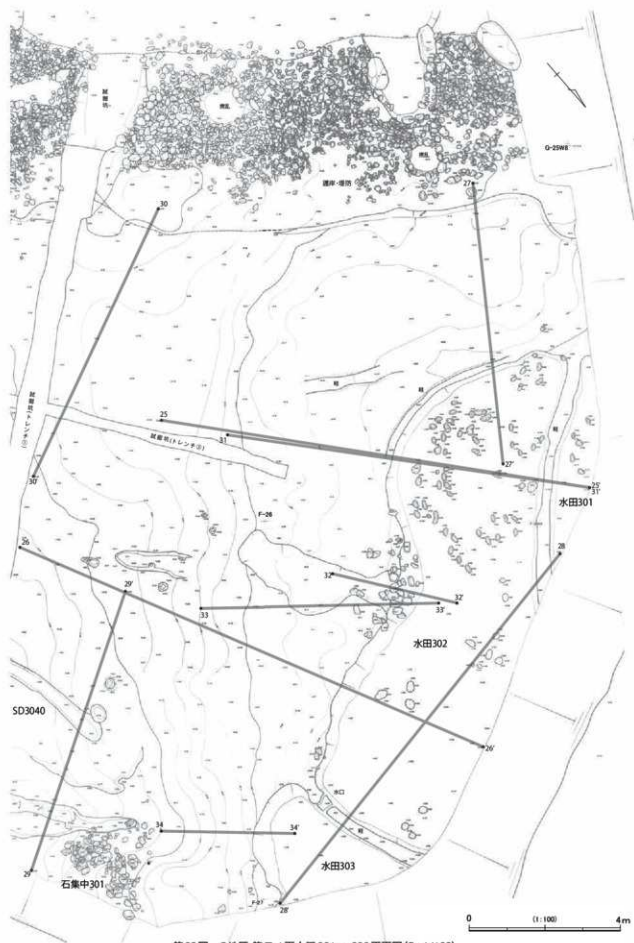
E～G・25・26区で検出した耕作域である。第4次調査で河跡3001(新)北側の護岸・堤防で護られた水田(SN)3枚と、放棄された水田区画を反映した自然石の集積地点2ヶ所(石集中301・302)を検出し、前述のとおり第Ⅲ-2面最終段階(土砂埋没段階)の土地利用を示す。以下では、補足調査を実施した第5次調査の結果を含めて記す。なお、石集中301・302は報告書作成段階で新たに付した遺構番号である。

水田301～303

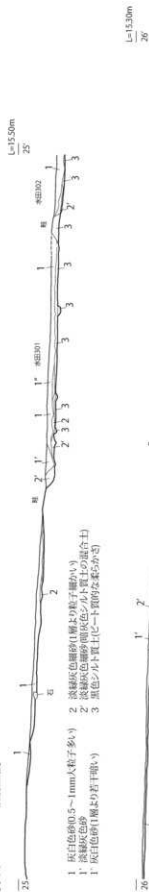
E・25・26区で検出した小規模な水田で、調査区外北西側に延びる。地形の傾斜(標高約15m)に沿って畦畔を挟んで一体的に造成される。

平面形態は崩れた略短冊形を呈するものと考えられ、水田301が北西-南東方向で1.1m以上、北東-南西方向で5.8m以上を、水田302が北西-南東方向で4.1m以上、北東-南西方向で13.6mを、水田303が北西-南東方向で3.7m以上、北東-南西方向で2.8m以上の規模を測る。水田302南東辺で確認した自然石(長軸10～20cm主体)の集積は、水田肩部を保全する目的の土留め工痕跡と考えられる。耕作面の標高は、水田301が南西端で14.81m、北東端で14.80m、水田302が南西角で14.94m、北東端で14.90m、水田303が南角で14.93m、北西端で14.91mと、各水田とも数cmの比高差におさまる。

水田間の畦畔は、上幅24～40cm、下幅44～58cm、高さ10～12cmを測る小振りな造りで、肩部の傾斜は比較的緩やかである。耕作面造成後に黒～黒灰色を呈するシルト質～砂質土を用いて作られる(第99図断面25・28土層3、第100図断面31土層5等)。また、水田302南辺に沿った延長約4m、上幅14～24cm、高さ約2cmを測る畦畔や、水田302の南東側約1.2～2.5mにおいて、延長2.7m、上幅24～



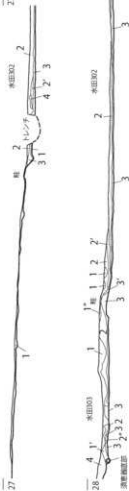
【水田 301 ~ 303 被覆土層】



- 1 灰白色粗砂
2 灰褐色粗砂
3 淡緑灰色細砂(1層より粒子細かい)
- 1' (2層よりやや細かい)
- 2' 黒色シルト質土(1層との境に0.5~1cm厚のヒート層が部分的にあり)

0 (1:60) 2m

L=15.40m
27



- 1 淡緑灰色細砂(粒子細かい)
- 2 灰白色粗砂
- 2' (2層よりやや細かい)
- 3 暗茶褐色腐植土
- 4 2層と3層の混合土

【F-25-26 区水田東側】



- 1 淡茶褐色粗砂
- 2 暗灰色砂質土
- 3 2層と4層(4層が粒状に混ざる)
- 4 淡緑灰色粗砂(シルトに近い)
- 5 暗褐色粘質土(4層と同時期に堆積)
- 6 暗灰色粘質土(4層が粒状に多く混ざる)
- 7 1層と5層の混合土
- 8 灰褐色砂質土
- 9 淡茶灰色粗砂~砂利
- 10 暗灰色砂質土
- 11 茶色粗砂

第99図 G地区 第三-1面水田等土層断面図1 (S=1/60)

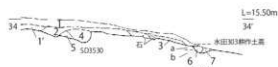
【水田301～303耕作土層】



- 1 茶褐色砂質土(ビートが混ざり、しまりない)
- 2 濁灰色砂質土(炭粒・砂粒が混ざる、耕作土)
- 3 濁灰色砂質土(層2面SD覆土)
- 4 淡灰色砂質土と6層の混合土
- 5 6層と淡灰緑色砂質土の混合土
- 6 黒灰色砂質土とベース土混合土(しまりない)
- 7 明茶色粗砂と淡灰緑色砂質土の混合土
(茶褐色ビートが混ざる)
- 8 7層と同質土(ビート混ざらない)
- 9 暗灰色砂質土と明茶色粗砂の混合土
[ベース土]淡灰～明茶色粗砂



- 1 濁灰褐色砂質土(耕作土、炭粒が混ざる)
- 2 濁灰褐色砂質土とベース土の混合土
- 3 1層と2層の混合土(ビートが混ざる)
[ベース土]IV面包含層(灰緑色砂質土)



- 1 濁灰褐色砂質土(炭粒・砂粒が混ざる、耕作土)
- 1' 1層と同質土(やや粘質、整地上または耕作土)
- 2 濁暗灰色砂質土(ビートが混ざり柔らかい、整地上か)
- 3 ベース土aと灰緑色砂質土の混合土
- 4 茶黄色粗砂と灰緑色砂質土の混合土(SD3530覆土)
- 5 2層と同質土(やや暗い、SD3530覆土)
- 6 ベース土bと灰緑色砂質土の混合土(SD3532覆土)
- 7 暗灰褐色粘質土(SD3532覆土)
[ベース土]a:IV面包含層(灰緑色砂質土)、b:茶灰色粗砂



- 1 濁灰褐色砂質土(炭粒・砂粒が混ざる、耕作土)
- 2 濁暗灰色砂質土(ビートが混ざり、柔らかい)
- 3 濁暗灰色砂質土と1層の混合土(炭粒混ざる、整地上または耕作土)
- 4 ベース土a(1層が粒状に混ざる)
- 5 濁淡灰緑色砂質土
- 6 濁黒灰色土(炭化物が多く混ざる)
- 7 3層と同質土
- 8 濁暗灰褐色砂質土(ビートが混ざる)
- 9 ベース土bと1層の混合土
[ベース土]a:IV面包含層(灰緑色砂質土)、b:茶灰色粗砂

【石集中302】(第88・89図)



- 1 暗灰色砂質土(黄茶色粗砂が粒状に混ざる)
- 2 灰色砂質土(1・6層が粒状に混ざる)
- 3 灰色砂質土(炭粒・鉄分が若干混ざる、耕作土)
- 3' 3層と同質土(鉄分が多く沈着)
- 4 灰色砂質土(6層が粒状に混ざる)
- 5 灰色砂質土(1～4cm大の礫が若干混ざる。
3層より粘性弱い、耕作土上か)
- 6 濁灰オリブ色粘質土(IV面遺物包含層、しまりあり)
- 7 灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 8 6層と7層の漸移層
- 9 によく濁オリブ灰色砂質土
- 10 濁明茶色粗砂(6層が粒状に混ざる)
- 11 6層と同質土

0 (1:60) 2m

第100図 G地区 Ⅲ-1面水田等土層断面図2(S=1/60)

32cm、高さ約4cmを測る畦畔残欠を確認している。水田301～303に付属する用排水施設は確認できず、水田302・303間の畦畔南側において半開放状態の水口を検出、上方の水田から順次水を流下させたと想定できる。水口の規模は、上幅32～40cm、深さ5cm前後、水田302との比高差約7cm、水田303との比高差約5cmを測る。水田301・302間の水口は調査区外北西側の畦畔に存在するようだ。

耕作面で確認できた長楕円形を主体とした窪みは、一定の方向性を示すものを含むことから足跡痕跡の可能性が高いと考えられる。窪みは、長軸約10～36cm、深さ3cm前後を測り、覆土は耕作土上層(しまりのない黒色シルト質土)を基本とする。また耕作土は、上層から厚さ2～4cmを測る黒～暗茶褐色シルト質土(第99図断面25～28土層3、湛水時堆積土)、厚さ10～15cmを測る茶褐色腐植土が混ざる柔い茶褐～灰褐色砂質土(第100図断面31土層4・7、同図断面35土層3・5等)を基本とし、部分的耕作面造成土と考えられる混合土(同図断面31土層4、同図断面33土層3～8等)が存在する。その後、水田301～303は、短期間で流入した灰白～淡灰緑色を呈する細砂・砂・粗砂で埋没しており、その流入・堆積土から出土した遺物はない。

石集中301・302。(遺構：第79・88・90・100図)

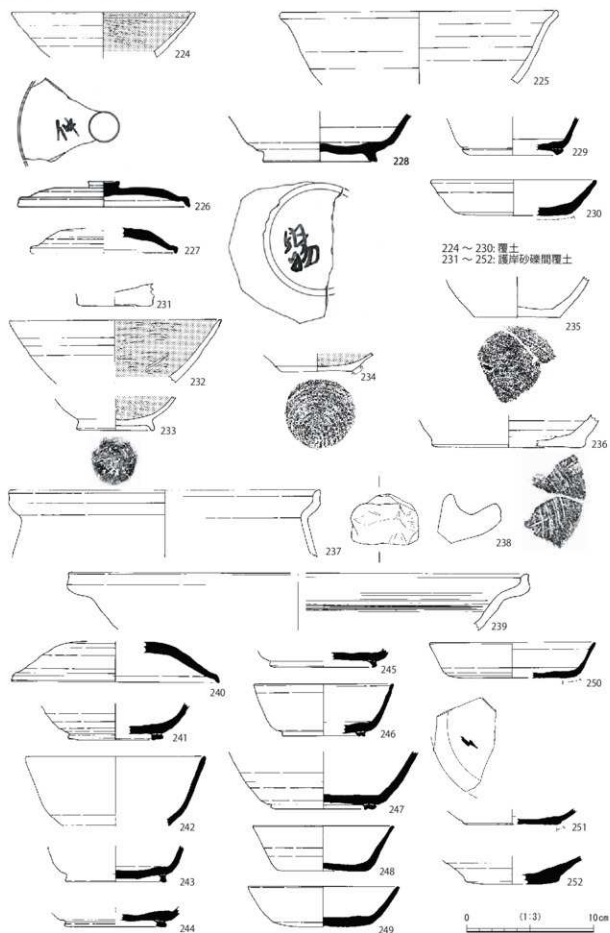
G-25区、F・G-26区で検出した石集積箇所(SS)で、いずれも下部構造を伴わない。第Ⅲ-2面の調査成果を加味すれば、水田区画を示す畦畔の一部と考えられ、出土遺物はない。

G-25区の石集中301は、南北方向約2.5m、東西方向約2mの範囲に長軸10～30cmを測る自然石が集積する。水田302南東辺で確認した自然石の集積と同様に水田肩部を保全した土留め跡と考えられる。石集中302は、列状に長軸10～30cmを測る自然石を据え置いたものであり、延長約8.7m、幅約50～90cmの規模をもつ。自然石は、水田耕作土(第100図断面35～38土層3)を造成した後に配されており、本来は水田畦畔を構成した石列で、第Ⅲ-2面検出時には耕作は放棄されたものと考えられる。

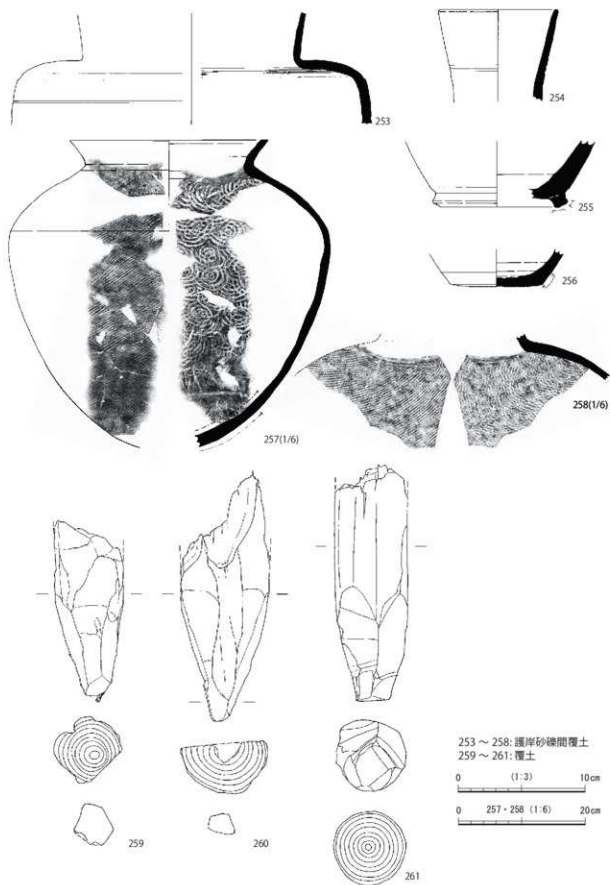
5 河跡3001(新)(遺構：第84～87図、遺物：第101～102図、第20・24表)

E～G-23～25区で検出した灰～黄茶色細砂・砂利・石を基本覆土とする洪水痕跡で、南東方向から北西方向に流下する。第Ⅲ-1面調査では、右岸(北側肩部)に自然石を据え置いた護岸・堤防に伴う最終(土砂埋没)段階の様相を確認しており、以下では河跡3001(新)と呼称する。河跡3001(新)は10世紀後葉～11世紀前葉に発生した大規模な自然災害(土砂流入)により、他の第Ⅲ-1面遺構とともに短期間に埋没する。また、第5次第Ⅳ面調査で、河跡3001(新)と重複した位置で、10世紀初頭に発生したと考えられる集落域を寸断・廃絶させた大規模な土砂流入・堆積痕跡を確認しており、この自然災害発生～護岸・堤防機能時を河跡3001(古)と呼称する。その詳細は、第4節で述べることとし、以下では、第4次調査で取り上げた第Ⅲ-1面を廃絶させた河跡3001(新)の覆土(流入土砂)から出土した遺物について記す。

第101図224～230、第102図259～261は、灰～黄茶色細砂・砂利を基調とする覆土(流入・堆積土砂)から出土した。224・225はロクロ土師器、226～230は須恵器である。内黒有台塊224は口径14.1cmを測り、丁寧なミガキ調整を施す。薄手の鉢225は口径21.6cmを測り、口縁端部を小さく上方につまみだす。胎土中に多くの海綿骨針が混ざる。坏蓋226は口径13.6cm、器高2.0cmを測り、丁寧なつくりの鈕をつける。天井部外面に「仲」と墨書する他、内面中央付近に墨痕が残る。Ⅳ₂期に位置付けられる。坏蓋227は口径11.3cmを測り、Ⅱa類重ね焼き痕を残す。有台坏228・229の台部は断面方形を呈し、しっかりと外展する。体部が内湾しながら立ち上がる228は、底部外面に「□物」と墨書され、1文字目のつくりは「貝」に見える。肉厚な無台坏230は口径12.8cm、器高2.8cmを測り、体部は直線的に外傾する。第102図259～261は芯持ちの杭であり、先端を多方向から加工して尖らせる。樹種は、259がクリ、260がコナラ節、261がオニグルミである。



第101図 G地区 第Ⅲ-1面河跡3001(新)出土遺物実測図1(S=1/3)



第102図 G地区 第三-1面河跡3001(新)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)

第101図231～第102図258は、右岸(北肩部)の護岸石の状況を精査する作業で覆土から出土した遺物である。231・238は非ロクロ土師器、232～237・239はロクロ土師器、240～258は須恵器であり、最も新しい233・234はⅦ₁期に位置付けられる。231は古墳時代以前の壺類底部と考えられ、磨減が著しい。232・233は丁寧なミガキ調整を施した内黒有台碗である。232は口径16.6cmを測り、体部は直線的にのびる。233の体部は内湾気味に立ち上がり、肉厚の底部外面は回転糸切り後に不整方向のケズリを加える。内黒無台碗234は体部下端に横方向のケズリ整形を施す。235～237は甕である。235の内面上半に煮炊きに伴うヨゴレが付着する。236は底径12.1cmを測り、底部外面に静止糸切り痕を残す。237は口径24.4cmを測り、内外面とも煮炊き痕が明瞭に認められる。瓶類把手238は磨減が著しい。埴239は小片のため復元に不安を残す。破片化後に被熱する。

須恵器坏蓋240は口径16.1cmを測り、口縁端部をゆるやかに折り曲げる。241～247は有台碗である。241は狭い底部から内湾気味の体部が立ち上がる。深身の242は焼きゆがみのため復元に不安を残す。243は腰部でしっかりと屈曲する。244は低い台部を貼り付け、外面に二次被熱痕を残す。245は小振りの台部を底部外縁に貼り付ける。246は口径10.8cm、器高4.1cmを測り、薄手の体部が直線的に立ち上がる。247は狭い底部から外傾して体部が立ち上がる。体部外面はロクロひだが目立つ。248・249・251・252は無台碗である。248は口径11.0cm、器高3.6cmを測り、体部は直線的に外傾する。249は口径113.7cm、器高3.2cmを測る。薄手の251は底部台状を呈し、全体が磨減する。252は底部肉厚で、皿形に近い。無台盤250は口径12.9cm、器高2.8cmを測り、底部外面にかすかに墨痕が残る。

第102図253～256は須恵器壺・瓶類である。肩衝壺253は肩部を2条の沈線で加飾し、正位無蓋で焼成される。瓶254は口径9.1cmを測る。255の台部接地面は、使用に伴う摩耗が著しい。256は回転ヘラ切りで底部を切り離した後、体部下端にケズリ調整を加える。257・258は大型の甕である。257で口径31.7cm、器高約50cmを測り、底部は使用に伴い摩耗する。258の焼成は堅緻である。河跡3001(新)からは、他にⅦ₁期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器碗類・甕、非ロクロ土師器甕の細片約300点が出土した。

6 その他の遺構

SX3001～03(遺構：第82・83・103図、遺物：第104図、第20表)

E・F-21・22区で検出した溝状の落ち込みで、SX3001-02は第0-I面攪乱の残欠と考えられる。SX3003は、長軸約6.6m、幅0.8～1.8m、深さ約5cmを測り、覆土は淡灰色シルト質土である。SX3001から第104図262～264が出土した。須恵器有台碗262は、台部幅が不均等であり、接地面が著しく摩耗する。須恵器無台碗263は還元が弱く、底部内面は使用に伴い摩耗する。土師質の土鍾264は重さ38gを測る。SX3002から出土した土師質の土鍾265は、ほぼ完形で残存重量59gを測る。SX3003出土の須恵器坏蓋266は小振りで丁寧なつくりの鈕を付す。SX3001～03からは、他にⅦ₁期以前の須恵器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器碗類・甕、非ロクロ土師器甕の細片が出土した。

焼土301(遺構：第82・99・103図、遺物：第104図、第20表)

F-21区で検出した浅く落ち込む焼土痕跡(SL)である。焼土範囲は崩れた隅丸長方形を呈し、長辺157cm、短辺104cmを測り、底面は若干の起伏が認められる。中央部は黒色炭化物や焼土粒が多く混ざる濁黒色土であり、南東隅で焼けた自然石、ロクロ土師器片が出土した。焼けた自然石は約25cmの範囲に据え置かれており、煮炊き具を据え置く役割をもつと考えられる。出土遺物のうち、第104図267～269のロクロ土師器を図化した。有台碗の台部は、断面方形を呈する267がしっかりと外展するのに対して、足高の268は直立気味となる。無台碗269は底径6.0cmを測り、底部器内は薄い。他に須恵

【F22区 SX3001】(第82図)



1 濁黒色砂質土(炭粒が混ざる)

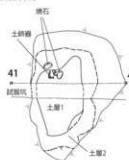
【F22区 SX3003】(第82図)



1 淡灰色シルト質土

【F21区 焼土 301】

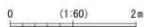
検出状況



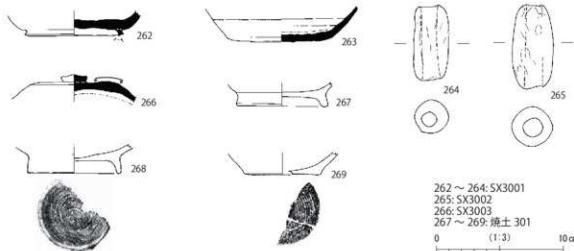
完整状況



- 1 濁黒色砂質土(黒色炭化物と赤色焼土粒が多く混ざる)
 - 2 濁暗灰色砂質土(//)
 - 3 赤色焼土粒(1層が混ざる)
- [ベース上] III-1面包含層(灰緑色砂質土)



第103図 G地区 第Ⅲ-1面SX他平面図・土層断面図(S=1/60)



- 262 ~ 264: SX3001
265: SX3002
266: SX3003
267 ~ 269: 焼土 301



第104図 G地区 第Ⅲ-1面SX他出土遺物実測図(S=1/3)

器坏類・瓶・甕、ロクロ土師器壺類・甕、非ロクロ土師器甕の細片約80点が出土した。

7 包含層等出土遺物(第105～108図、第21・22・24・25表)

包含層出土遺物は、大きく上層から包含層上面土(第Ⅲ-2面流入・堆積土砂)、上層包含層(濁黒灰色砂質土)、下層包含層(下層落ち込み、濁灰緑色砂質土)に分かれ、Ⅶ1期以前の土師器や須恵器が多く出土した。上層包含層分布の北限はE～G-22区に、下層包含層の分布の北限にE～G-21(一部E-22区・G-22区小溝群付近)に存在する。

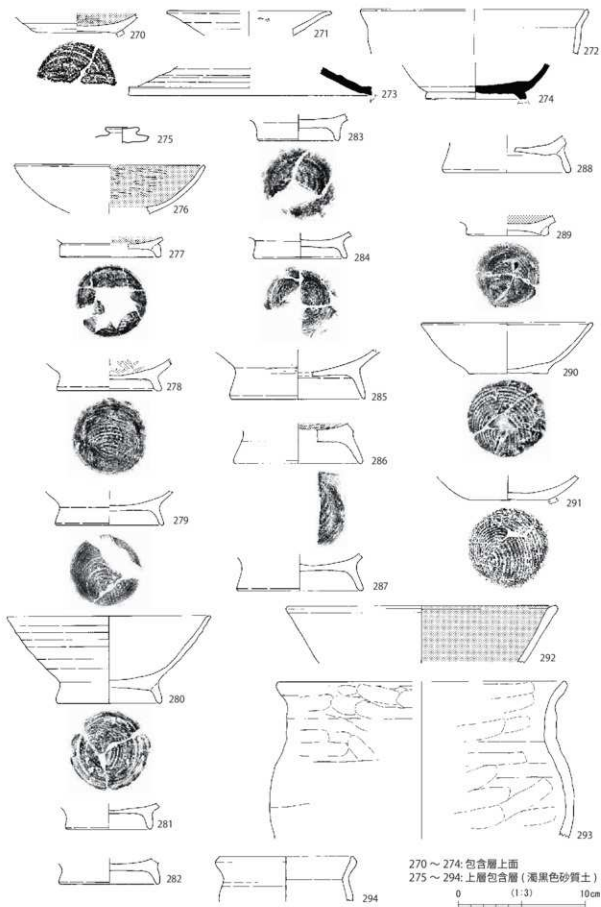
第105図270～274は、包含層上面の流入・堆積土砂層から出土した。270・271はロクロ土師器である。内黒の無台埴270は体部下端にケズリ調整を施し、内面のミガキは比較的密である。皿271は口径約12.5cmを測る。ロクロ土師器甕272は口径約18cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。273・274は須恵器である。大型の坏蓋273は口径19.9cmを測り、口縁端部をしっかりと面取りする。有台坏274は

塊形を指向し、底部内面は使用に伴い平滑となる。

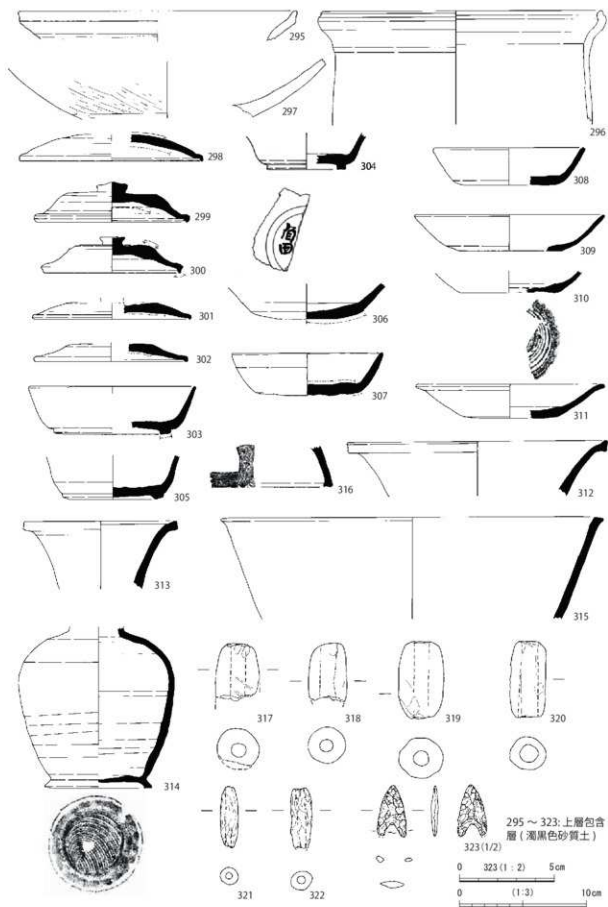
第105図275～第106図323は、上層包含層から出土し、坏・坩堝類は二次被熱痕を残す個体が多い。275～292、294～297はロクロ土師器である。坏類蓋の鈕275は扁平で、磨滅のため判然としながい外面は赤彩と考えられる。276～289はⅦ₁期以降の有台塊で、277・278以外は端部面取りがあまり足高の台部を外展して貼り付ける。また、276・277・286・289の内面はミガキ調整と黒色処理を施す。身の浅い276は口径14.8cmを測り、体部は内湾しながら立ち上がる。277は断面方形の台部を付し、内面のミガキ調整は丁寧である。279は台部内側に煤が付着し、倒位で燈明容器に転用した可能性が高い。280は口径15.9cm、器高6.9cmを測り、体部は内湾気味に外傾する。図化できなかったが、内面はミガキ調整を施した可能性が高い。281は破片化後に被熱し、煤が付着する。282は回転ネ切り後に丁寧な回転ナデを加える。283は、先細る台部を直立気味につける。284は磨滅が著しい。285～288は、台径10cm強を測る大型品である。285は台高1.7cmを測り、内面に煤が付着する。286は底部肉厚で、内面のミガキ調整は丁寧である。287は外面が二次被熱する。289は底部外縁に低い台部を外展して貼り付ける。内面のミガキ調整は比較的粗い。290・291は無台塊である。290は口径13.4cm、器高4.1cmを測り、二次被熱のため全面に煤が付着する。291は体部下端に不整方向のケズリ調整を施し、正位で燈明容器に転用される。内黒の鉢292は口径21.1cmを測り、肥厚する口縁端部は内傾した面をもつ。非ロクロ土師器甕293は口径約22cmを測り、横方向の指ナデ痕が目立つ。ロクロ土師器小甕294は口径10.5cmを測り、口縁端部を嚙状につまみだす。第106図295は甕小片で、口縁端部は長くのびる。297は有台の鉢と考えられ、外面にはケズリ整形後の台部貼り付け痕が認められる。薄手の甕296は口径21.0cmを測り、胴部の張りはほとんどない。

第106図298～316は須恵器で、298～302が坏蓋、303～305が有台坏、306～310が無台坏となる。298は口径14.3cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑である。299・300は山笠形を呈し、299が口径12.0cm、器高3.3cmを、300が口径10.7cm、器高2.8cmを測る。扁平な301・302は、口縁端部を丸くおさめる。いずれも天井部内面に使用に伴う摩耗が認められる。有台坏303は口径12.9cm、器高3.8cmを測り、扁平な台部を外展気味に貼り付ける。305の腰部はふくらみを有する。Ⅵ₁期に位置付けられる304は、底部外面左寄りに「酒田」と墨書する。無台坏306の体部は大きく外傾し、底部外面は使用に伴い摩耗する。307は口径11.8cm、器高3.3cmを測り、底部内面は使用に伴い平滑となる。308は還元が弱く、浅黄橙色を呈する。薄手の309は皿形に近く、口径14.8cm、器高2.9cmを測る。310はゆっくりと回転ヘラ切りを行ったため、各切り幅の狭い回転ヘラ切り痕跡が明瞭に残る。無台皿311は口径14.4cm、器高2.7cmを測り、坏蓋の可能性をもつ。口縁端部は若干肥厚する。312～314は瓶類である。312は口径20.4cmを測り、口縁端部は嚙状にのびる。313は口径11.9cmを測り、口縁端部は断面方形に近い。薄手の314は台径8.5cmを測り、焼成は堅緻である。鉢類315は口径28.8cmを測り、口縁端部を横方向に肥厚させる。316は圈足円面視脚部片で、外面に透かしと斜方向の格子状線刻を施す。第Ⅳ面出土の第215図1093と同形態であり、同一個体の可能性が高い。317～322は土師質の土鍾で、重さから3つに分けられる。317～320は胎土中に多くの砂礫が混ざり、319が重さ66g、細身の320が44gを測る。321・322は重さ10g前後を測り、胎土にほとんど砂粒が混ざらず、硬質に焼成される。石窯323はガラス質安山岩でつくられ、残存重量1.01gを測る。

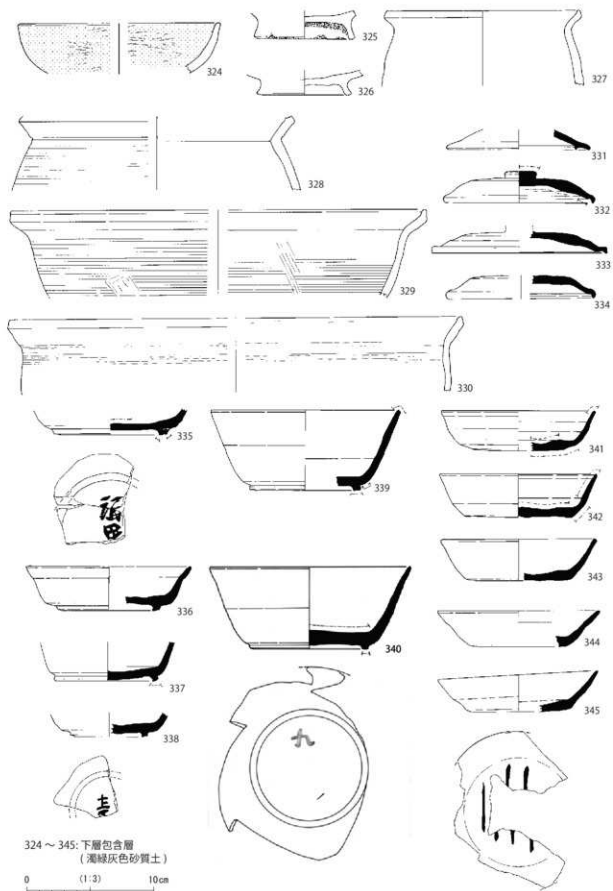
下層包含層出土遺物は、第107図324～第108図349を図化した。324～330はロクロ土師器である。肉厚の無台塊324は口径約15.5cmを測り、内外面ともミガキ調整の後に赤彩を施す。325・326はⅥ期の有台塊である。325は破損後、底部片を倒位で燈明容器に転用するため底部内面に煤が付着する。326は底部を回転ヘラ切りで切り離す。小甕327は口径15.1cmを測り、頸部より上方に黒褐色の炭化物が



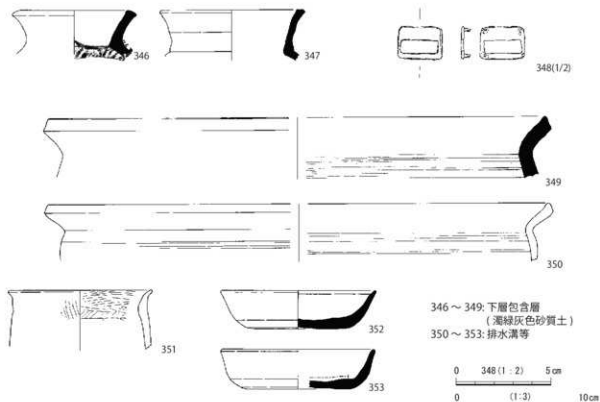
第105図 G地区 第Ⅱ-1面包含層出土遺物実測図1(S=1/3)



第106図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物実測図2 (S=1/2・1/3)



第107図 G地区 第Ⅱ-1面包含層出土遺物実測図3(S=1/3)



第108図 G地区 第Ⅲ-1面包含層出土遺物4(S=1/2・1/3)

付着する。寛328の胴部は張りをもつ。埴330は小片のため復元に不安を残す。

第107図331～第108図347は須恵器で、331～334が坏蓋、335～340が有台坏、341～345が無台坏となる。坏蓋331は胎土中に小さい発泡が目立つ。332は口径11.7cm、器高2.5cmを測り、ボタン状の鈕をつける。天井部内面に残る摩耗と墨痕から、転用硯と考えられる。333は口径13.5cmを測り、口縁基礎部を平坦に仕上げる。334は口径約11.5cmを測り、口縁部が焼きゆがむ。335は底部外面中央に「酒田」と墨書し、Ⅳ₂期に位置付けられる。336は口径12.8cm、器高3.5cmを測り、口縁部の一部は焼きゆがみのため外傾する。深身の337は腰部で明瞭に屈曲しており、外面に煤が付着する。338は底部外面に「土口(万カ)」と判読できる2文字の墨書が残り、本遺跡他事例から「土万呂」の可能性が高い。また、底部内面の薄い墨痕から墨溜め容器に転用したと考えられる。Ⅴ₂～Ⅵ₁期に位置付けられる。339は口径14.7cm、器高6.4cmを、340は口径15.7cm、器高6.5cmを測り、焼成があまりいため使用痕が明瞭に残る。Ⅴ₂期に位置付けられる340の底部外面に1文字の墨書が残るが判読できない。無台坏341～345は口径12cm強、器高3cm前後を測る。341・342は腰部が張りをもち、底部内面は使用に伴い摩耗する。343～345の体部は大きく外傾する。344は煮炊容器に転用した可能性をもつ。345の底部は台状を呈し、外面に「//」と記号様の墨書を行う。Ⅵ₁期に位置付けられる。第108図346・347は横瓶口縁部で、口縁端部を外側に肥厚させる。346で口径8.4cm、347で口径11.0cmを測る。須恵器鉢類349は口径約38cmを測り、胴部内面にカキメ調整を施す。348は銅製帯金具巡方表金具である⁷⁾。長軸2.3cm、短軸1.8cm、厚さ1.5mm、垂孔(透かし穴)幅2.0cm、同高さ0.7cm、脚鉤長約3mm、重さ2.2gを測る。第107図350～353は、排水溝等から出土した。ロクロ土師器埴350は口径約39cmを測り、全面が磨滅する。非ロクロ土師器小甕351は口径11.5cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。内面に煮炊きに伴う煤が付着する。須恵器無台坏352は口径11.9cm、器高3.1cm、353は口径11.9cm、器高3.2cmを測る。厚手の352内面には炭化物が付着する。

第22表 G地区 Ⅲ-1面出土土器類観察表3

調査 番号	グリッド名	出土遺物	種 類	規 格	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径口径	外径口径	胎 土	焼 色	内面装飾	外面装飾	産 地	実測 番号
107	333	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	無	-	-	5.6	5.6	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	333	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	無	約22	-	17.0	17.0	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	333	F-11-22	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	無	約20	-	15.9	15.9	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	333	F-11-21	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	11.9	高さ 8.0	11.6	無底	灰白	灰白	×	無	山形県山形市	山形県
107	333	F-11	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	11.7	約10.0	2.1	底	灰	灰	×	無	山形県山形市	山形県
107	333	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	10.5	-	11.7	底	灰	灰	×	無	山形県山形市	山形県
107	334	F-10	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	約11.5	-	12.0	無底	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	334	F-13-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	-	8.0	10.1	底	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	334	F-11	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	10.8	7.0	1.0	無底	黄褐色	黄褐色	×	無	山形県山形市	山形県
107	337	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	-	8.2	10.0	底	灰	灰	×	無	山形県山形市	山形県
107	338	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	-	8.1	10.0	底	灰	灰	×	無	山形県山形市	山形県
107	338	F-11-1	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	8.7	8.7	8.4	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	340	F-11	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	15.7	9.2	4.5	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	341	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	12.0	7.4	1.7	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	342	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	12.2	8.4	1.4	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	342	F-11-1	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	12.3	8.2	3.2	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	344	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	12.4	7.4	2.0	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	345	F-11-22	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	12.3	8.2	1.2	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	344	F-11-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	8.4	-	10.5	無底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
107	347	F-11-1	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	有底片	11.9	-	10.0	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	349	F-12-2	下層出土遺物 (縄文時代後葉)	土器類	無	約20	-	10.0	無底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	350	-	埴土	山形県山形市	無	約20	-	14.4	黄褐色	黄褐色	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	351	F-12-22	埴土	山形県山形市	無	11.9	-	10.7	黄褐色	黄褐色	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	352	-	埴土	山形県山形市	無	11.9	8.2	3.1	黄褐色	黄褐色	×	×	×	山形県山形市	山形県
106	353	F-12-22	埴土	山形県山形市	無	11.9	9.0	1.2	底	×	×	×	×	山形県山形市	山形県

第23表 G地区 Ⅲ-1面出土土器製品観察表

調査 番号	グリッド名	出土遺物	種 類	材 質	色 調	最大径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 (cm)	特徴	備 考	実測 番号
106	353	F-12-2	土器類 (黄褐色土)	石製	赤下大層出土品	黒	2.8	1.8	4.0	1.0		山形県

第24表 G地区 Ⅲ-1面出土土器製品観察表

調査 番号	グリッド名	出土遺物	種 類	最大径 (cm)	最大径 (cm)	最大径 (cm)	特徴	備 考	実測 番号	
107	339	F-12	河原3001(赤)黄褐色片断	片断	(10.8)	2.9	2.2	ナリ	志村町志村、調査区南側に出土	山形県-119-2
107	340	F-12	河原3001(赤)黄褐色片断	片断	(10.8)	3.0	4.0	ナリナリ	志村町志村、調査区南側に出土	山形県-119-1
107	350	F-12	河原3001(赤)黄褐色片断	片断	(10.8)	5.7	5.9	ナリナリ	志村町志村、調査区南側に出土、先端が欠ける	山形県-120

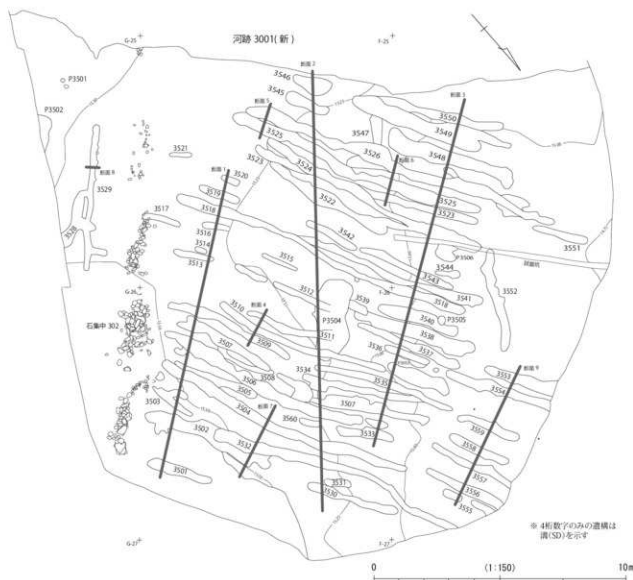
第25表 G地区 Ⅲ-1面出土金属製品観察表

調査 番号	グリッド名	出土遺物	種 類	最大径 (mm)	最大径 (mm)	重量 (g)	備 考	実測 番号			
106	348	F-12-2	下層出土(黄褐色土)中黄褐色ピロピロ	銅製金属	底片	2.3	1.8	0.10	2.2	最大径が1.0×0.7mm、縦線長約3mm	山形県

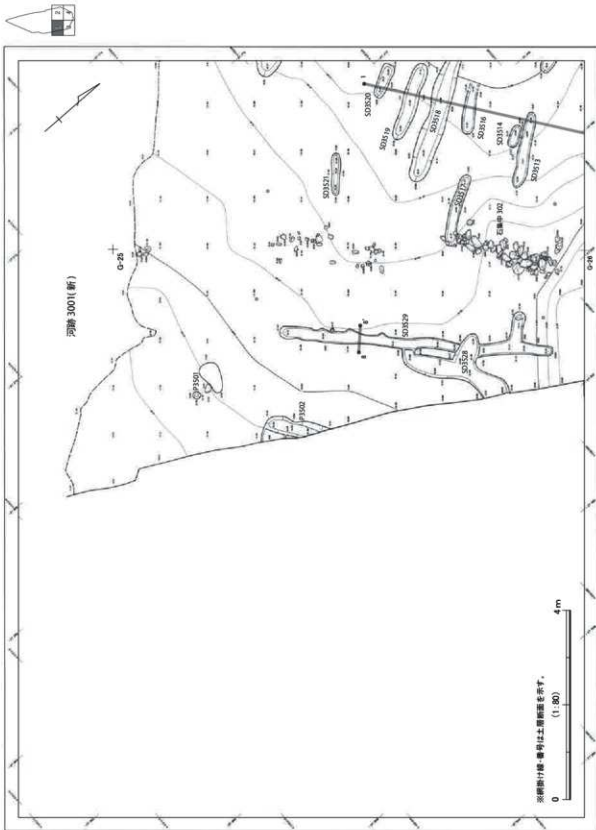
第4節 第Ⅲ-2面の遺構と遺物 (第109～149図、第26～36表)

G地区第Ⅲ-2面以下の生活面の調査は、第5次調査(1998)で実施した。第Ⅲ-2面は、河跡3001(新)の護岸・堤防の北側(E～G-25・26区)において、第Ⅲ-1面耕作域の耕作土(厚さ5～15cm)を人力で掘り下げた段階で検出した生活面であり、土層観察からも第Ⅲ-1面に前出する。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南東端(G-25区杭南西4m)で15.61m(第Ⅲ-1面ベース面より-13cm)、南西端(E-25区北東2m・南東2m)で15.09m(同-6cm)、北東端(G-27区杭南西3m)で15.64m(同-13cm)、北西端(F-27区南西1m・南西4m)で14.87m(同-13cm)を測る。ベース面の比高差は、Gライン(北東-南西方向)がほとんどなく、26ライン(南東-北西方向)が約0.9mを測り、北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。遺物包含層は第Ⅲ-1面耕作土・耕作面造成土(第100図)、ベース面(検出面)は固くしまった第Ⅳ面包含層(第8図32～35:濁灰～暗灰色砂質土)で、識別は比較的容易であった。

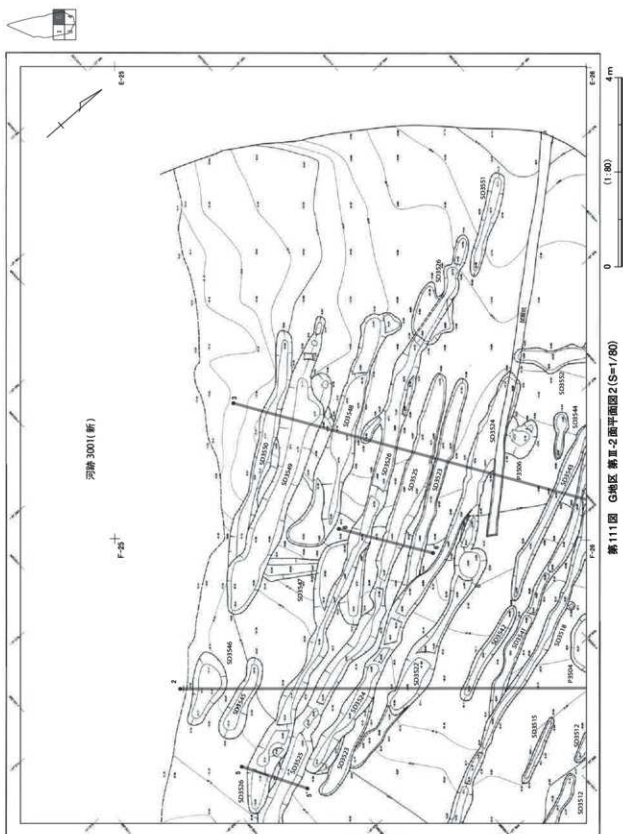
調査の結果、耕作に伴う小溝(SD)約60条、ピット等を確認した。これらの遺構は、河跡3001(新)



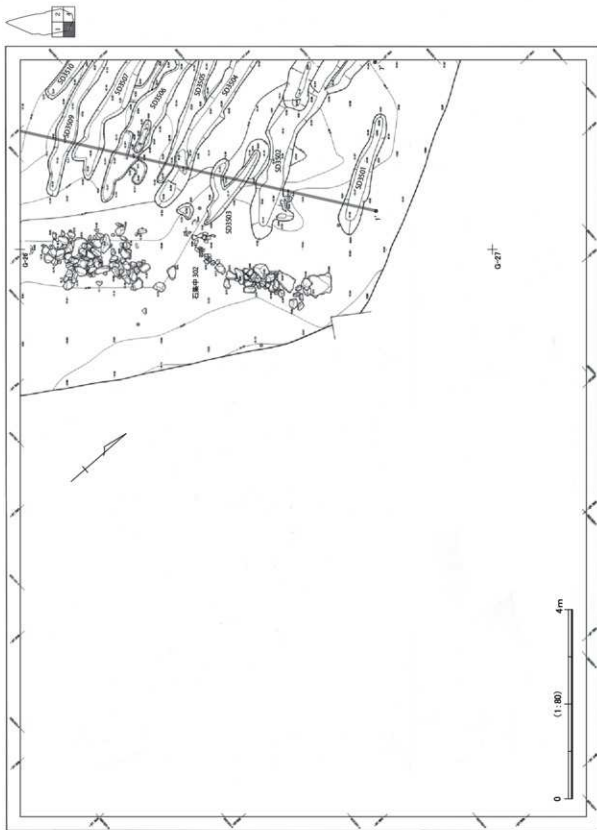
第109図 G地区第Ⅲ-2面遺構配置図(S=1/150)



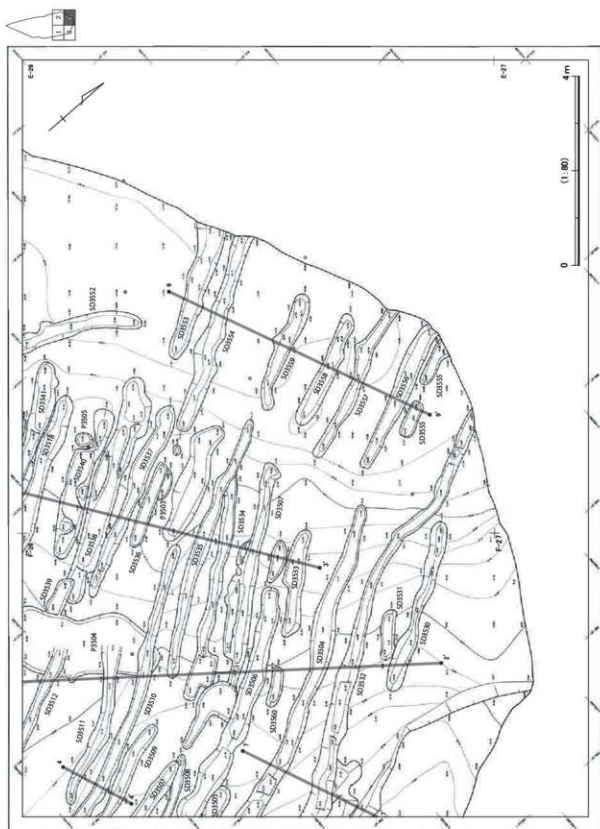
第110図 G地区 第三-2面平面図1 (S=1/80)



新111図 G地区 第三-2面平面図2 (S=1/80)



第112図 G地区 新井-2跡平面図3(S=1/80)



第113図 G地区 第三之面平面図4(S=1/80)

右岸(北肩部)の護岸・堤防と重複しない位置関係から、同時期に併存したと考えられる。また、第4次調査で検出した河跡3001(古)について、第IV面調査で多くの記録措置を実施しているが、第Ⅲ-1・2面と密接に関連するため、第Ⅲ-1面で検出した河跡3001(新)を含めて本節で述べることにしたい。遺物は、多数の須恵器、土師器の他、少量の木製品、石製品が出土した。

1 ビット(遺構：第109～113・115図、遺物：第117・121図、第27表)

小規模なビット約10基を検出し、うち須恵器、土師器小片が出土した6基に番号を付した。ビットの覆土は、炭粒が混ざる暗灰～灰褐色砂質土を基本とし、建物等を構成するような柱穴は存在しない。G-25区P3501は径16cm、深さ7cmを測る。G25区P3502は、北西約2mに位置するSD3529と並行した耕作に伴う小溝と考えられる。長さ120cm以上、幅50cm以上、深さ13cmを測る。F26区P3503は深さ約6cmを測る浅い窪みで、SD3536に前出する。第121図400の須恵器短頸壺片が出土している。F-26区P3504は長軸約320cm、短軸約120cm、深さ5cm以下の浅い窪みで、茶灰色粗砂が混ざる淡灰オリープ色砂質土を覆土とする。遺構の切り合い関係からSD3510～12に前出する。図化した第117図354の須恵器坏蓋は、成形時に口縁端部を大きく折り曲げ過ぎたため、折り曲げ部分内面が密着する。VI₁期に位置付けられる。E-26区P3505は径30～35cm、深さ12cmを測り、SD3540より新しい。E25区P3506は、平面略楕円形を呈する。長軸78cm、短軸約80cm、深さ20cmを測る。

2 溝(SD)(遺構：第114～116図・第26表、遺物：第117～121図・第27表)

河跡3001(新)の護岸・堤防の北側で耕作に伴う小溝約60条を検出した。大部分の小溝群は、緩やかに湾曲しながら地形の勾配に対してほぼ垂直方向に掘られ、主軸方位はN-29～33°Wを示す。また、SD3529は地形の勾配に対して水平方向に、SD3552は第Ⅲ-1面水田302の東側肩部に沿うようにそれぞれ掘られる。耕作単位は、第Ⅲ-1面の水田301～303、石集中301・302の様相を加味すれば、第114図とおり大きくa～dの4つの耕作単位を復元可能である。各小溝の規模・覆土等は第26表に示したとおりで、肩部は垂直に近い立ち上りのものが多い。また、覆土は濁灰褐色または濁黒灰～暗灰～灰色を呈する砂質土を基調としており、底付近では不規則にベース土粒が混ざる。



第114図 G地区 Ⅲ-2面耕作単位復元図(S=1/300)

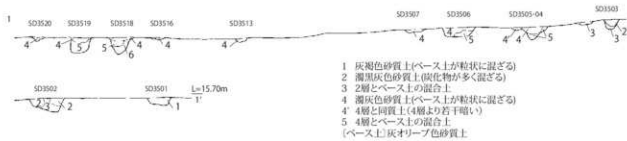
SD3501～26・30～50・60(耕作地b)

E・F-25・26区で検出した小溝群である。分布範囲は、南西側を河跡3001(新)、南東側を石集中302、北東側を未分布域及び石集中301で画され、北東～南西方向で約18m、北西～南東方向で約12～15m(最南側は19m以上)を測る。小溝の分布・規模等から、耕作地b-1～b3(第114図)に細分可能であり、そ

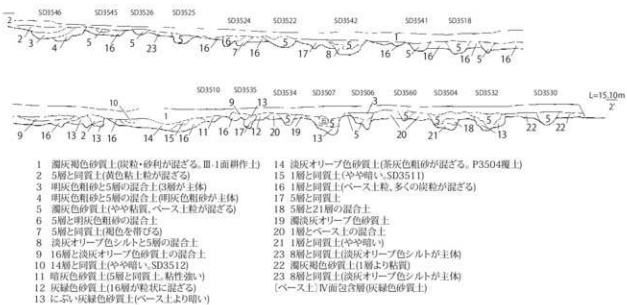
第26表 G地区 第Ⅲ-2面SD規模等一覧表

耕作単位	遺構番号	グリッド名	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	備 考
耕作地 a	SD3327	G-25-3	約 100	約 20	2 前後	深灰色粘板質土	未同化
	SD3328	G-25-3	240 ~	35 ~ 55	5 ~ 7	深灰色粘板質土	SD3329 より古
	SD3329	G-25-1・3	300	20 ~ 32	2 ~ 8	■ 115 同断面 8	SD3328 より新
耕作地 b-1	SD3322	F-25-3	630	24 ~ 60	10 ~ 30	■ 114 同断面 2	SD3323・24 より古
	SD3323	F-25-4	900	26 ~ 34	5 ~ 12	■ 114 同断面 3-6	SD3322・24 より新, SD3335 より古
	SD3324	F-25-1・3	960	20 ~ 60	2 ~ 18	■ 114 同断面 2-3	SD3323 より新
	SD3325	F-25-1, F-25-4	1050	26 ~ 58	7 ~ 18	■ 114 同断面 2-3-5-6	SD3323 より新, SD3326 より古
	SD3326	F-25-1, F-25-3・4	1300	24 ~ 60	10 ~ 19	*	SD3325 より新
	SD3343	F-25-1	180	26 ~ 32	約 12	■ 114 同断面 2	SD3346 より古
	SD3346	F-25-1	155	26 ~ 70	13 ~ 23	*	SD3345 より新
	SD3347	F-25-1	約 130	32 ~ 52	6 ~ 10	深褐色粘板質土	SD3326・27 より古
	SD3348	F-25-2, F-25-1	510	28 ~ 26	6 ~ 15	■ 114 同断面 3	切り合いなし
	SD3349	F-25-2, F-25-1	655	30 ~ 82	10 ~ 24	*	SD3347・50 より新
	SD3350	F-25-2, F-25-1	490 ~	22 ~ 44	5 ~ 19	*	SD3349 より古
耕作地 b-2	SD3351	F-25-3	225	20 ~ 24	4 ~ 7	深灰色砂質土	切り合いなし
	SD3351	F-26-4	265	28 ~ 44	4 ~ 11	■ 114 同断面 1	切り合いなし
	SD3352	F-26-2・4	540	48 ~ 68	6 ~ 18	■ 114 同断面 1, ■ 115 同断面 7	SD3352 より古
	SD3353	F-26-2	195	18 ~ 34	9 ~ 17	■ 114 同断面 1	切り合いなし
	SD3355	F-26-2	350	28 ~ 40	5 ~ 11	■ 114 同断面 1	SD3304・06 より古
	SD3358	F-26-2	245	14 ~ 32	4 ~ 13	深灰色砂質土	SD3306・07 より古
	SD3359	F-26-1・2	320	22 ~ 46	6 ~ 16	■ 114 同断面 4	切り合いなし
	SD3361	F-26-1・2	350 ~	18 ~ 38	10 前後	■ 114 同断面 2-4	P3304 より新
	SD3314	F-25-4	50	18 ~ 22	8	深灰色砂質土	切り合いなし
	SD3315	F-25-3	155	15 前後	10 ~ 13	深灰色リゾ色砂質土 (黒灰色粗砂粒が混ざる)	切り合いなし
	SD3316	F-25-4	約 110	20 ~ 28	5 ~ 7	■ 114 同断面 1	切り合いなし
	SD3317	F-25-4	160	22 ~ 24	3 ~ 6	深灰色砂質土	石籠中 302 より古
	SD3319	F-25-4	170	20 ~ 32	6 ~ 25	■ 114 同断面 1	切り合いなし
	SD3320	F-25-4	75	22 ~ 26	2 ~ 8	*	切り合いなし
	SD3321	F-25-2	90	15 前後	7 ~ 9	深灰色粘板質土 (しまりない)	切り合いなし
	SD3342	F-25-3	230	24 ~ 30	8 ~ 15	深褐色粘板質土	SD3343 と一体化
	耕作地 b-2・3	SD3364	F-26-1 ~ 3	1055	26 ~ 32	6 ~ 30	■ 114 同断面 1 ~ 3, ■ 115 同断面 7
SD3366		F-26-1・2	960	20 ~ 66	10 ~ 20	■ 114 同断面 1-2	SD3305・08 より古
SD3310		F-26-1・2	710	20 ~ 32	10 ~ 18	■ 114 同断面 2-4	P3304 より新
SD3312		F-26-1	410	18 ~ 30	10 ~ 17	■ 114 同断面 2	P3304 より新
SD3313		F-25-4	165	20 ~ 26	8 ~ 11	■ 114 同断面 1	切り合いなし
SD3318		F-26-4, F-25-3・4	1280	18 ~ 46	4 ~ 30	■ 114 同断面 1 ~ 3	SD3341 より新
SD3332		F-26-4, F-26-3・4	1040 ~	18 ~ 52	8 ~ 30	■ 114 同断面 2, ■ 115 同断面 7	SD3307・04 より新
SD3337		F-26-2, F-26-1	440	26 ~ 40	8 ~ 13	*	SD3338 より新
SD3341		F-25-4, F-25-3, F-26-2	730 ~	22 ~ 46	4 ~ 22	■ 114 同断面 2-3	SD3318 より古
耕作地 b-3		SD3307	F-26-2, F-26-1	1070	24 ~ 52	7 ~ 22	■ 114 同断面 2-3
	SD3330	F-26-3	370	16 ~ 28	13 ~ 18	■ 114 同断面 2	切り合いなし
	SD3331	F-26-3	105	約 28	10 ~ 14	深灰色砂質土 (ベース土粒が混ざる)	切り合いなし
	SD3333	F-26-3	230	28 ~ 46	9 ~ 12	■ 114 同断面 3	切り合いなし
	SD3334	F-26-2, F-26-1	280 ~	20 ~ 30	9 ~ 16	■ 114 同断面 2-3	SD3335 より古
	SD3335	F-26-2, F-26-1	570	20 ~ 34	6 ~ 18	*	SD3323・34 より新
	SD3336	F-26-2, F-26-1	190	24 ~ 28	約 5	■ 114 同断面 3	P3303 より新
	SD3338	F-26-2, F-26-1	500	34 ~ 64	14 ~ 22	*	SD3340 より新, SD3337・39 より古
	SD3339	F-26-1	80	約 35	7 ~ 10	深褐色粘板質土	SD3338 より新, P3304 より古
	SD3340	F-26-2, F-26-1	330	44 ~ 50	8 ~ 14	■ 114 同断面 3	P3305・SD3338 より古
耕作地 d	SD3343	F-25-4, F-25-3	400	24 ~ 36	5 ~ 10	■ 114 同断面 3	SD3342 と一体化
	SD3344	F-25-4	100	18 ~ 30	約 6	深褐色粘板質土	切り合いなし
	SD3360	F-26-1	85	20 前後	8 ~ 14	深褐色粘板質土	切り合いなし
	SD3352	F-25-4, F-26-2	410	28 ~ 50	4 ~ 8	■ 100 同断面 32	方位異なる
	SD3353	F-26-1・2	290 ~	26 ~ 56	3 ~ 11	■ 115 同断面 9	切り合いなし
	SD3354	F-26-1・2	430 ~	28 ~ 44	9 ~ 14	*	切り合いなし
	SD3355	F-26-4	220 ~	26 ~ 30	2 ~ 13	*	切り合いなし
	SD3356	F-26-4	330 ~	24 ~ 42	2 ~ 12	*	切り合いなし
	SD3357	F-26-4	330	20 ~ 42	6 ~ 10	*	切り合いなし
	SD3358	F-26-4	260	28 ~ 40	6 ~ 8	*	切り合いなし
SD3359	F-26-2	260	24 ~ 36	8 ~ 12	*	切り合いなし	

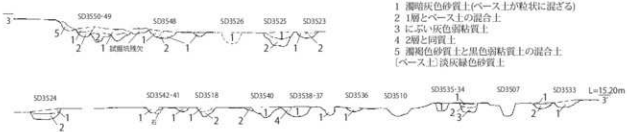
【F25-26区 SD3501～05-19-20等】(第110-112図)



【F25-26区 SD3010～12-24～26-30～32等】(第111-113図)



【E25-26区 SD3523～26-33～38等】(第111-113図)



【F26区 SD3509～11】(第113図)



【F25区 SD3525-26】(第111図)



【E25区 SD3513-26-35】(第111図)



0 (1:60) 2m

第115図 G地区Ⅲ-2面SD土層断面図1(S=1/60)

それぞれ遺構の切り合い関係から3回程度の小溝の掘削が認められ、最も新しい段階には耕作地b-2・3は一体的に使用される。

耕作地b-1は、河跡3001(新)に沿って短冊状にのびる。北東-南西方向で約6m、北西-南東方向で19m以上を占め、SD3522～26・45～51が属する。小溝の長さは、2m未満、5～6m前後、9～13mに分布し、最も長いSD3526で約13mを測る。SD3522～24の切り合い関係から、3回の掘削が想定できる。耕作地b-2は、北東-南西方向で約12.5m、北西-南東方向で6～10m、面積約100㎡を占め、SD3501～03・05・08・09・11・14～17・19～21・42が属する。小溝の長さは、SD3502・09が5.2m・5.4m、それ以外は2.5m以下を測る。耕作地b-3は、北東-南西方向で約12.5m、北西-南東方向で約6m、面積約75㎡を占め、SD3507・30・31・33～36・38～40・43・44・60が属する。小溝の規模は、耕作地b-2と同様であり方を示す。また、耕作地b-2・3を占める小溝として、SD3504・06・10・12・13・18・32・37・41があり、SD3532は耕作地dの範囲まで掘られる。小溝の長さは7m強、9.6～10.5m、12.8mに分布し、SD3518～SD3512・13・37間、SD3512・13・37～SD3510間、SD3510～3506間の距離は約2m、SD3506～SD3504間の距離は約12mを測る。遺構の切り合い関係から小溝群の中で最も新しい時期に位置付けられる。

各小溝覆土からは、主にⅤ₂期を下限に第Ⅳ面に属する多くの須恵器、土師器片が出土し、うち第117図355～第120図390、同図393～第121図403を図化した。第117図355～第118図367は、SD3502出土遺物であり、355・356が土師器、357～367が須恵器となる。厚手のロクロ土師器壺355は、ケズリ調整を施した外面に煤が付着する。ロクロ成形と考えられる甎356は胴部片を欠落する。口径36.8cm、底径22.0cm、底部孔径12.8cm、推定高約35cmを測り、直立する口縁部は外面で肥厚する。胴部は平行叩き成形の後、カキメ、ハケを施す。坏蓋357は口径16.4cmを測り、肩部はロクロひだが目立つ。有台坏358は扁平で幅広の台部を貼り付ける。Ⅲ期の有台坏359は、底部外面に2文字の墨書が残るものの文字は判読できない。無台坏360は口径12.4cm、器高3.5cmを測り、体部は内湾気味に大きく外傾する。無台盤361～363は口径13cm前後を測り、体部は外傾する。361は使用に伴う摩耗が著しい。363は器肉が薄く、底部外面にヘラ記号が残る。第118図364は小型の短頸甕で口径8.0cmを測る。降灰の状況から正位有蓋焼成と考えられる。長頸甎365は口径12.0cmを測り、口縁部下端に稜をつくる。短頸甕と考えられる366は、しっかりと踏ん張る台部が外展する。甕367は自然軸が厚く溶着する。354・357・360～362はⅤ₂～Ⅴ₁期に、363はⅤ₂期に位置付けられる。

SD3503出土遺物のうち、第118図368～第119図372を図化した。有台坏368は口径15.6cm、器高5.7cmを測り、使用に伴い底部内面は平滑となる。無台盤369の底部は台状を呈し、Ⅴ₁期に位置付けられる。甕類底部と考えられる370外面は、回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。371・372は甕である。371は口径22.8cmを測り、口縁端部の面取りが鋭い。胴部を外面に平行叩き具、内面に無文当て具を用いて成形する。砲弾形の372は胴部径約40cmを測り、胴部内面上半に無文当て具痕、下半に平行当て具痕が残る。SD3504・06出土の須恵器坏蓋373は、口縁端部は下方に長くのびる。

SD3504出土遺物のうち、須恵器第119図374～377を図化した。有台坏374の底部外面には、「□(土カ)万呂」と判読できる墨書が残り、Ⅳ_{2(南)}期と考えられる。無台坏375は厚手で、体下部は丸味をもつ。Ⅴ₁期の無台盤376は、使用に伴い摩耗した底部外面に墨書が残り、右側の文字は「火」と判読できる。球胴を呈する甕377は口径21.2cm、器高約41cm、胴径約46cmを測る。胴部外面の成形には、木目がしっかりと浮き出るため、格子状に見える平行叩き具を用いる。他にⅤ₂期に位置付けられる無台坏底部片等が出土した。

SD3506出土遺物は378、379を図化した。非ロクロ土師器甕378は器肉が厚く、内外面でハケ調整の原体が異なる。須恵器有台坏379は口径15.2cmを測り、焼きゆがみが目立つ。SD3507からは、380、

【F26区 SD3502・04】(第112・113図)



- 1 濁灰色砂質土(鉄分が沈着)
- 2 濁灰オリーブ色砂質土と1層の混合土
- 3 1層とベース土の混合土
〔ベース土〕 灰オリーブ色砂質土 (IV面包含層)

【G25区 SD3529】(第110図)



- 1 にぶい灰褐色弱粘質土(炭粒、ベース土粒が混ざる)
〔ベース土〕 灰オリーブ色砂質土 (IV面包含層)

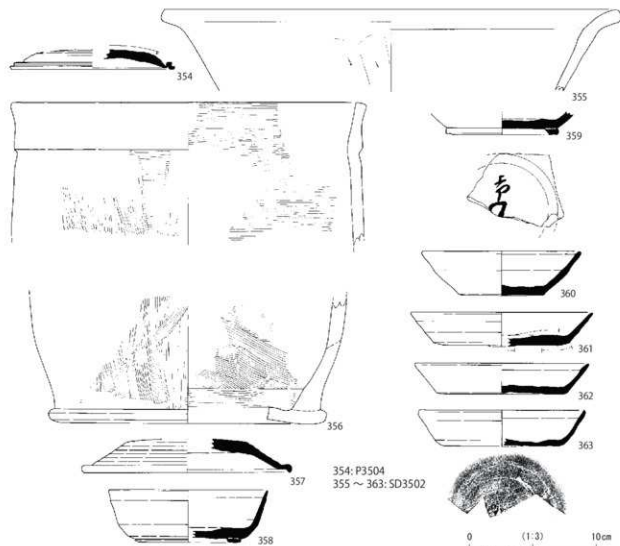
【E26区 SD3553～59】(第113図)



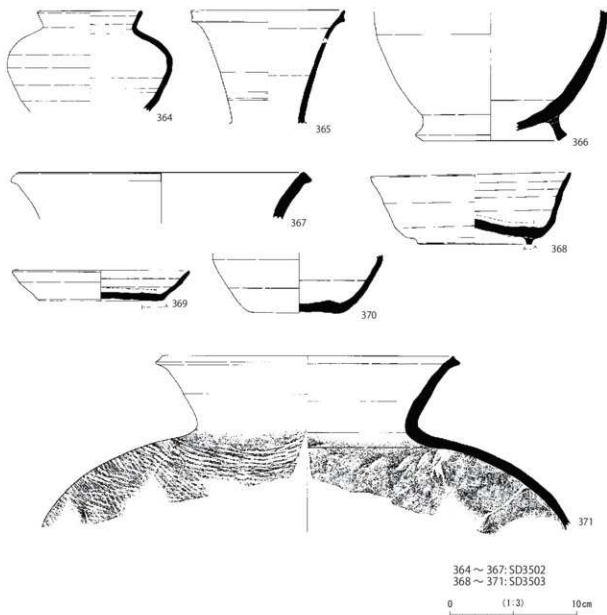
- 1 濁暗灰色砂質土(ベース土が少量粒状に混ざる)
- 2 1層と灰緑色砂質土の混合土
- 3 濁灰緑色砂質土(1層が粒状に混ざる)
〔ベース土〕 明灰色粗砂



第116図 G地区 第三-2面SD土層断面図2(S=1/60)



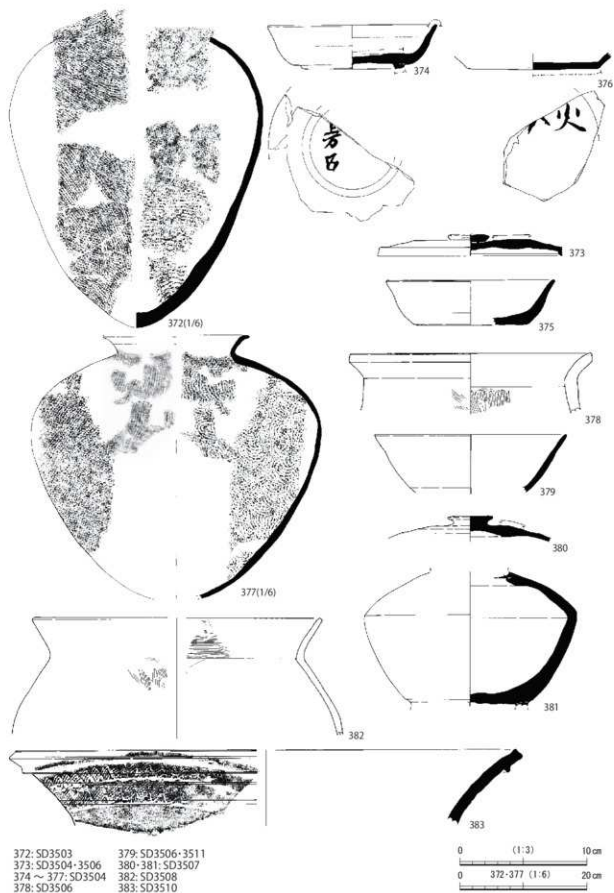
第117図 G地区 第三-2面SD等出土遺物実測図(S=1/3)



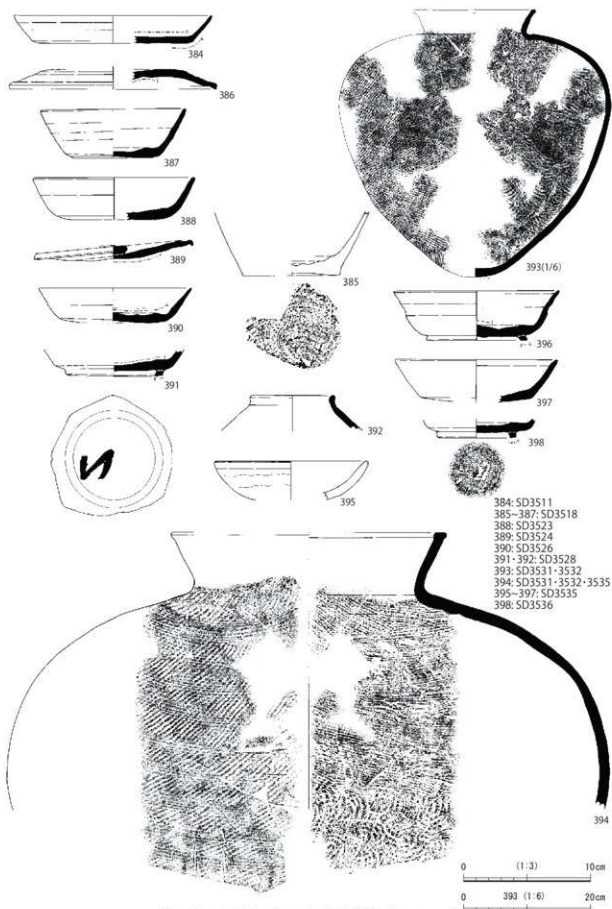
第118図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図1 (S=1/3)

381の須恵器が出土した。坏蓋380は、径3.6cmを測る大型・扁平な鈕をつける。長頸瓶381は肩部でしっかりと屈曲し、正位で焼成される。SD3508出土の非ロクロ土師器甕382は器内が薄く、硬質に焼きあがる。SD3510出土の須恵器甕383は口径約39cmに復元できる大型品で、外面を稜と沈線、波状文で丁寧に加飾する。

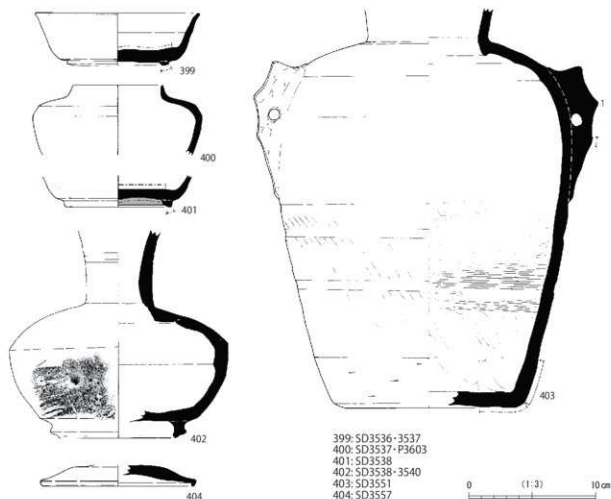
SD3511出土の第120図384は須恵器無台盤で、底部外面に回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を加える。385～387は、SD3518出土遺物である。ロクロ土師器甕底部385は、煮炊きに伴い外面が一部剥離する。須恵器坏蓋386は口径16.2cmを測り、倒位での使用に伴い天井部内面が摩耗する。須恵器無台坏387は焼成時の小さな焼きぶくれが目立ち、外面に降灰・自然釉が着着する。Ⅱ₂期に位置付けられる。SD3523出土の須恵器無台坏388は口径12.6cm、器高3.3cmを測り、体部はゆるやかに外傾する。SD3524出土の須恵器坏蓋389は、上部に径約7cmの別個体を重ねて正位焼成され、焼きゆがむ。SD3526出土の須恵器無台坏390は焼成時の黒色の吹き出しが目立ち、体部は直線的に外傾する。



第119図 G地区 第Ⅱ-2面SD出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



第120図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図3(S=1/3・1/6)



第121図 G地区 第Ⅲ-2面SD出土遺物実測図4(S=1/3)

SD3531・32出土の須恵器甕393は、口径19.4cm、器高42.1cm、胴径約43cmを測る。使用に伴い底部外面が摩耗する他、口縁端部に小さい欠けが連続する。須恵器甕394の破片は、SD3531・32・35から出土した。394は口径21.2cmを測り、胴部内面上半にハケ調整を加えて器形を整える。395～397はSD3535から出土した。非ロクロ土師器埴395は磨滅し、外面の粘土紐痕を残す。須恵器有台坏396は口径13.0cm、器高3.9cmを測り、体部中程から外傾する。須恵器無台坏397の体部は直線的に外傾する。破損した後に被熱し、断面に煤が付着する。SD3536出土の須恵器有台坏398は、底部外面中央に茶褐色の漆が付着する(写真図版48)。SD3536・37出土の須恵器有台坏399は、底部内面が使用に伴い平滑となる。SD3537出土の須恵器短頸壺400は口径7.0cmを測る小形品で、降灰状況から有蓋器種となる。401・402はSD3538出土の須恵器である。有台坏401は、底部外面の墨痕と摩耗から転用硯と考えられる。長頸瓶402は胴部下半を平行叩きの後に回転ナデ調整を加えて整形する。外面には厚く自然釉が溶着する。

SD3027～29〔耕作地a〕

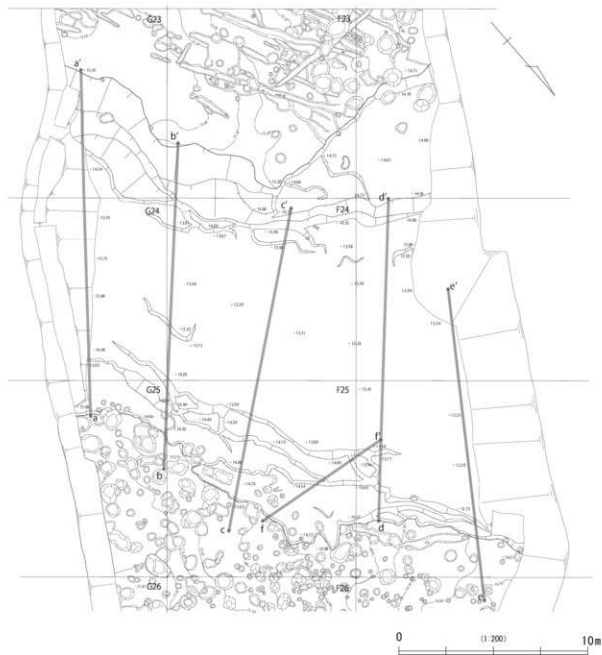
G-25・26区で検出した小溝群で、SD3527～29が属する。分布範囲は、西側を石集中302で画され、北東-南西方向で14m以上、北西-南東方向で5m以上を測る。SD3527は、SD3529北端約1mの位置で直交する長さ約1m、深さ2cm前後の小溝である。屈曲するSD3528は、SD3529に前出する。SD3529は長さ約5.9mを測り、直線的に延びる。石集中302とほぼ平行し、主軸方位はN-45°Eを示す。覆土から須恵器、土師器片が出土しており、SD3528出土遺物の第120図391・392の須恵器を図化した。有台坏391の台部は内屈し、記号様の墨書を行う。V₂期に位置付けられる。小型壺392は口径6.4cmを測り、

焼成は良好である。

SD3552～59〔耕作地d〕

F-25区で検出した小溝群で、SD3552～59が属する。分布範囲は、第Ⅲ-1面水田301～303とほぼ重複しており、耕作単位は第Ⅲ-2面最終(埋没)段階まで基本的に継続したと考えられる。耕作域は、北東-南西方向で12m以上、北西-南東方向で4m以上を測る。屈曲するSD3552は、第Ⅲ-1面水田302の東側肩部に沿うような位置関係にあり、覆土はビートが混ざる濁灰褐色砂質土と灰緑色砂質土の混合土である(第100図断面32)。ほぼ平行するSD3553～59は、長さ約2.6m、3m以上を測り、覆土はベース土粒が混ざる濁暗灰～灰緑色砂質土を基調とする。

覆土から須恵器、土師器が出土しており、第121図403・404の須恵器を図化した。SD3551出土の双耳瓶403の胴部下半は、外面を平行叩きとケズリ調整で、内面をカキメ調整と指ナデで成形する。底

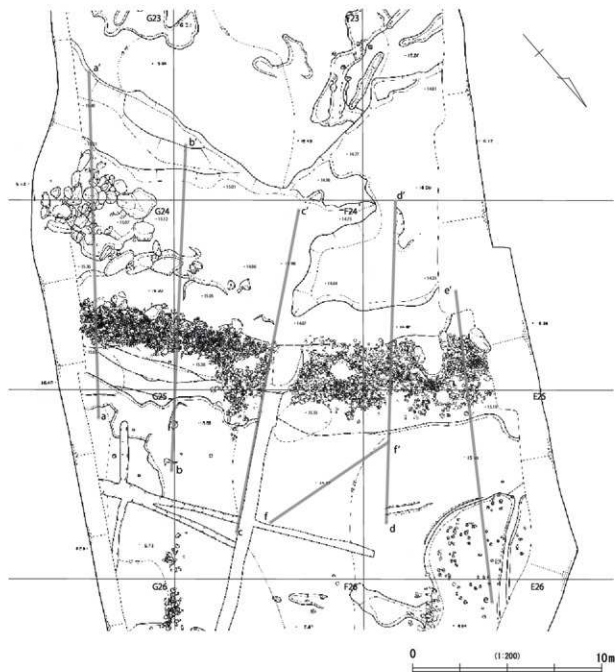


第122図 G地区 第Ⅲ-1-2面河跡3001(古)完掘状況平面図(S=1/200)

部外縁は使用に伴い平滑となる。SD3557出土の坏蓋404は口径12.0cmを測り、天井部外面に丁寧なナデ調整を加える。

3 河跡3001(遺構：第122～126図、遺物：第127～140図・第27～32・36表)

E～G-23～25区で検出した河跡で、地勢に沿って南東方向から北西方向に流下する。前述のとおり、第IV面集落・耕作域を寸断・埋没した大規模な土砂流入・堆積および堤防・護岸の構築、第III-2面埋没直前までの状況(第IV面埋没直後～第III-1面(堤防・護岸の構築、高地)～第III-1面埋没直前)を河跡3001(古)と、第4次第III-1面を埋没した大規模な土砂流入・堆積を河跡3001(新)と、それぞれ呼称する。出土遺物および第IV面の状況から、おおむね第IV面集落を襲った土砂災害が10世紀初頭(VI₂期)、ほどなく行われた第III-2面の造成及び第III-1面への転換が10世紀前葉～中葉頃(VI₃期～VII₁期)、第III-1



第123図 G地区 第III-1-2面河跡3001(新)完掘状況平面図(S=1/200)

面を再び襲った大規模な土砂流入・埋没を遺物から10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ2期が上限)と想定している。

河跡3001(古)

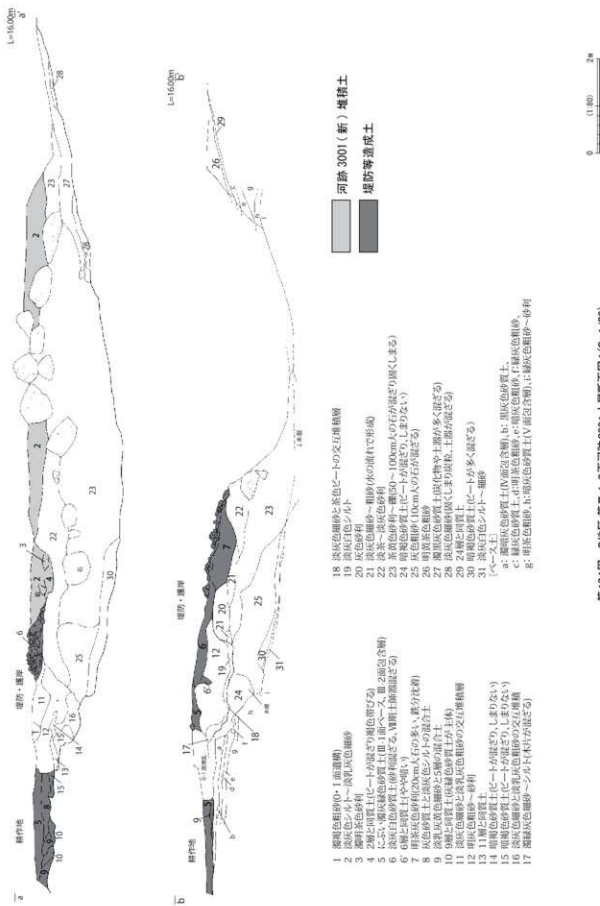
第Ⅳ面を廃絶させた河跡の規模は、調査区南東壁(第122～124図断面a-a')で上幅約20m、下幅約10.7m、深さ約2.2m(最深部の標高13.73m)を、調査区中央付近(第122・123・125図断面c-c')で上幅約20m、下幅約9m、深さ2.2m(同13.31m)を、調査区北西壁(第122・123・126図断面e-e')で上幅約25m、下幅約15m、深さ2m以上(同13.25m以下)を測り、右岸(北肩部)に比して左岸(南肩部)は比較的緩やかな勾配である。

短期間に流入・堆積した土砂の基本的な層位は、下層から、第1層：右岸(北肩部)底付近のピートが多く混ざる暗褐色砂質土(第125図断面a-a'・b-b'土層30・31、第125図断面c-c'土層19・19'、同図断面d-d'土層14)、第2層：淡灰茶～灰色粗砂、第3層：左岸(南肩部)の固くしまった濁黒灰～灰色砂質土(厚さ20～40cm、第124図断面a-a'土層27、第125図断面c-c'土層15・16、同図断面d-d'土層18～20)、第4層：淡灰～灰・茶黄色を呈するシルト・粗砂・砂利・自然石(厚さ1.6～2m、自然石は最大1m以上)となる。左岸(南肩部)のみで確認できた第3層からは、時期的にまとまりをもつ多数の須恵器、土師器が出土しており、上流側に存在した集落域から土砂とともに運ばれた土器群と考えられる。また、第125図断面a-a'・b-b'からは、短期間に大量の土砂が流入・堆積した直後に、右岸(北肩部)に寄って上幅2.2～2.3m、深さ0.8～1mを測る河川が形成されたことが分かる(断面a-a'土層11～16、断面b-b'土層12・17～19)。

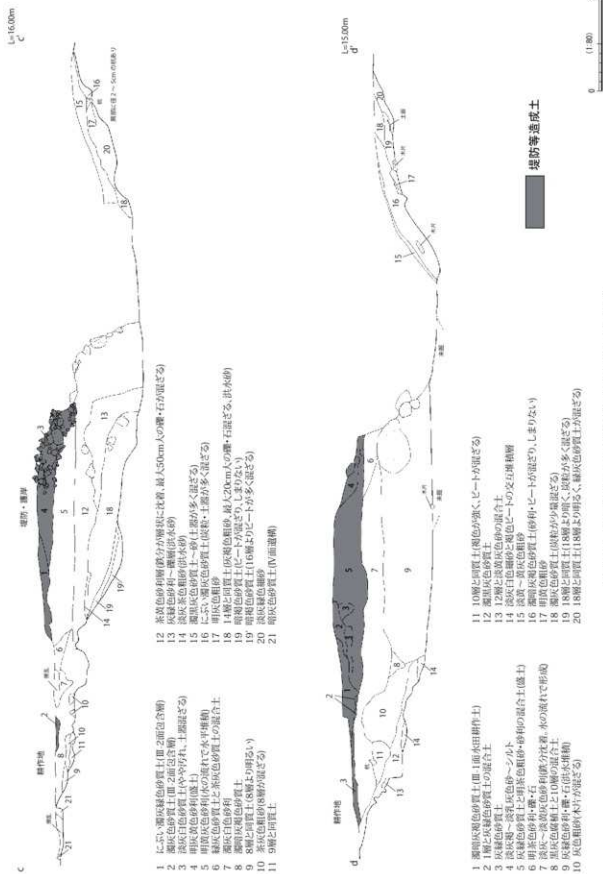
その後、標高が相対的に低く、急勾配の右岸(北肩部)に、堤防・護岸・耕作地(畠地)が一体的に造成される(第Ⅲ-1面、堤防・護岸の造成範囲は第124～126図濃い網掛け範囲)。南東～北西方向で検出した堤防の規模は延長約21mであり、第124図断面b-b'で上幅約2.8m、下幅約6m、高さ約0.4mを、第125図断面c-c'で上幅3.6m、下幅約5.2m、高さ約0.4mを、同図断面d-d'で上幅約2.4m、下幅約5.6m、高さ約0.4mをそれぞれ測る。堤防斜面内側(河側)に築かれた護岸は、周辺に存在する自然石を砂質土で押さえながら乱雑に積み上げたものであり、幅2～3.5m、厚さ30～50cmを測る。上流側約1/3が長軸10～20cm程度の小振りな自然石を緩やかな勾配で積上げるのに対して、下流側約2/3は長軸40cmを超える大振りな自然石を混ぜながら急勾配で堅固に積み上げる傾向を示す。一方、左岸側(南側)は標高が相対的に高く、浸食作用が弱かったと考えられ、堤防は認められず、肩部中程に不規則に径2～5cmの杭が不規則に散見できる程度である。

遺物は、①洪水の流入・堆積土砂層(第3・4層)、②右岸(北肩部)の堤防・護岸造成土層から出土し、層位では第3層→第4層→堤防・護岸造成土層の順に新しくなる。

右岸(北肩部)の護岸・堤防造成土層から出土した遺物のうち、第127図405～第128図430を図化した。中では、Ⅶ1期に位置付けられる416・420・423等が最も新しく位置付けられる。弥生土器甕405は、本来第Ⅶ-2面に属する。口径16.4cmを測り、口縁部を不規則な刻みで加飾する。407・409・411・415は8世紀代の非ロクロ土師器、406・408・410・412～414は9世紀前半代のロクロ土師器で、うち406～410は甕となる。406は口径20.3cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。407は口径32.7cmを測り、硬質な焼きあがりて器面には煮沸痕が明瞭に残る。408の口縁端部は内傾する。小甕409は口径12.0cmを測り、外面が一部剥離する等、煮沸痕が明瞭に残る。小甕410は底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。黒色処理と赤彩を施す埴411は口径14.8cm、器高3.6cmを測り、外面は口縁部直下まで粗い不整方向のケズリ調整を施す。412～414は内面に丁寧なミガキ調整と黒色処理を施す。薄手の埴412は口径10.5cmを測る小型品である。無台埴413は口径15.7cm、器高5.6cmを測り、外面体部下端に横方向のケズリ



第124図 G地区 第Ⅲ-1-2面河跡3001土層断面図1(S=1/80)



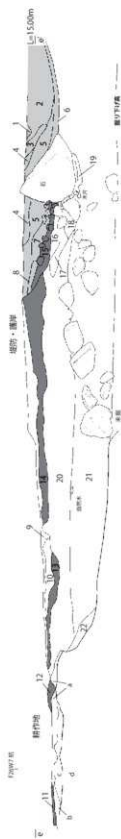
12 茶褐色の細砂層が層状に分布、最大50cmの礫・石が混ざる

- 13 暗緑色砂土(黒褐色の赤土)
- 14 淡灰茶色粗砂の混土(赤土)
- 15 濃緑灰色砂質土→砂土(土層が多量に混ざる)
- 16 淡灰茶色粗砂土(炭酸・土層が多量に混ざる)
- 17 明灰色粗砂
- 18 14層と同質土(灰褐色粗砂、最大20cmの礫・石混ざる、赤土砂)
- 19 暗緑色砂質土(ピートが混ざり、しまりない)
- 19 暗緑色砂質土(16層よりピートが多量に混ざる)
- 20 淡灰茶色粗砂
- 21 暗灰色砂質土(IV面遺構)

- 1 濃い濃緑灰色砂質土(II面包含層)
- 2 濃緑灰色砂質土(II面包含層)
- 3 淡灰茶色粗砂土(砂質土、土層混ざる)
- 4 明灰色粗砂(盛土)
- 5 明灰色砂利(水の流れて水平堆積)
- 6 緑灰色砂質土と暗灰色砂質土の混土
- 7 濃灰白色砂利
- 8 濃緑灰色砂質土
- 9 8層と同質土(8層より明るい)
- 10 茶褐色粗砂(8層が混ざる)
- 11 9層と同質土

- 11 10層と同質土(褐色が強く、ピートが混ざる)
- 12 濃緑灰色砂質土
- 13 12層と淡灰茶色粗砂の混土
- 14 淡灰白色粗砂と褐色ピートの交互堆積層
- 15 淡灰・暗灰色粗砂
- 17 暗灰色砂質土(赤土・ピートが混ざり、しまりない)
- 18 濃緑灰色砂質土(炭酸が少量混ざり)
- 19 18層と同質土(18層より明るく、炭酸が多量に混ざる)
- 20 18層と同質土(18層より明るく、暗灰色砂質土が混ざる)

- 1 濃緑灰色粗砂質土(II面水田耕作土)
- 2 1層と灰緑色砂質土の混土
- 3 灰緑色砂質土
- 4 灰茶色→濃緑灰色砂→シルト
- 5 灰緑色砂質土と明茶色粗砂→砂利の混土(盛土)
- 6 灰緑色砂質土と明茶色粗砂→砂利の混土(盛土)
- 7 灰緑色粗砂と10層の混土
- 8 灰緑色粗砂と10層の混土(水の流れて形成)
- 9 灰緑色粗砂・礫・石(水田堆積)
- 10 灰色粗砂(木片が混ざる)



河跡3001(新)堆積土
堤防等造成土

- 13 オリーブ灰色細砂と乳灰色粗砂の混合土
14 10層と13層の混合土(四防盛土)
15 淡灰オリーブ色砂質土(四防盛土)
16 明茶黄色砂利
17 乳灰色粗砂
18 黒褐色砂利(自然木片が混ざる)
19 灰白色粗砂と堆積の空(土層)層
20 灰白色粗砂・層・石層(分注溝)
21 灰褐色粗砂
22 21層と同質土(灰褐色土がブロック状に混ざる)

(ベース上): a: 黒灰色粗砂, b: 淡灰色砂質土, c: 緑灰色砂質土, d: 灰褐色粗砂

- 1 淡灰白色粗砂
2 黄褐色砂利
3 1層と褐色ビートの混合土
4 2層と同質土
5 1層と同質土
6 褐色ビートと淡灰色シルトの混合土
7 褐色ビート
8 褐色粗砂
9 褐色粗砂
10 淡灰褐色粗砂と灰色砂質土(粗砂に近い)
11 濁泥状灰色粗砂と灰色砂質土の混合土
12 濁灰色砂質土とベース上の混合土



- 6 濁灰色砂質土(粗砂が多量に混ざる)
7 6層と淡灰色粗砂の混合土
8 明灰色砂質土(粗砂、土層が混ざる)
9 明灰色砂質土
10 5層と同質土

- 1 淡灰褐色砂利(自然砂)
2 淡灰褐色粗砂(粗砂)
3 淡灰褐色粗砂(粗砂)
4 濁泥状灰色粗砂(粗砂が混ざる)
5 4層と淡灰褐色粗砂の混合土

第126図 G地区 断面1-1・2面河跡3001土層断面図3(S=1/80)

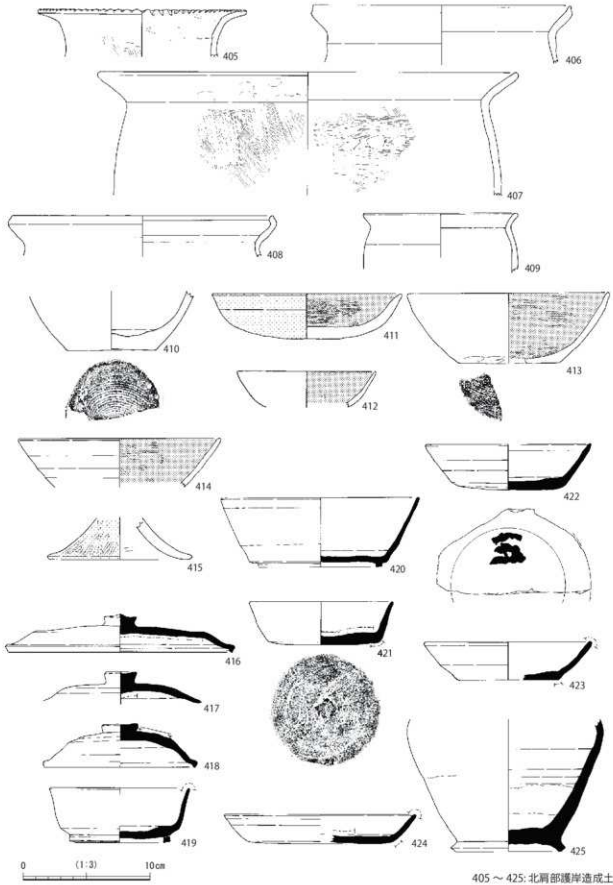
調整を加える。414は口径15.9cmを測る。高坏脚部415は縦方向のミガキ調整の後に赤彩を施す。

第127図416～第128図430は須恵器で、416～418が坏蓋、419・420が有台坏、421～423が無台坏、424が無台盤となる。天井部が広い416は、内面が摩耗し、墨痕が残ることから、転用碗と考えられる。417も天井部内面が使用に伴い平滑となる。418は口径12.0cm、器高3.4cmを測り、ロクロ成形時に粘土が切れた箇所を補修のため粘土塊を貼り付ける。体部が直立する419は、底部外面中央の墨痕から墨留め容器に転用したと考えられる。Ⅳ₂期に位置付けられる。薄手の有台坏420は口径15.5cm、器高5.5cmを測り、体部が直線的に外傾する。421は使用に伴う摩耗が著しく、破損後に二次被熱する。422は口径12.9cm、器高3.7cmを測る。底部外面の墨書は「五」に近い筆跡をもち、Ⅴ₂期に位置付けられる。423の底部は台状を呈し、内外面とも被熱し、煤が付着する。無台盤424は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。425～428は瓶類である。425の胴部外面下半には板状工具によるケズリ様の整形痕が残る。小型・有台の426は器肉が厚く、頸部をつくりだす際の粘土のシボリ痕が明瞭に残る。427は口径12.0cmを測り、口縁端部は使用に伴う細かい欠損が連続する。428は堅緻に焼成され、口縁部に焼きゆがみが認められる。429・430は甕であり、口径は429が20.1cm、430が28.0cmを測る。ともに胴部成形に内面は同心円当て具、外面に平行叩き具を用いる。

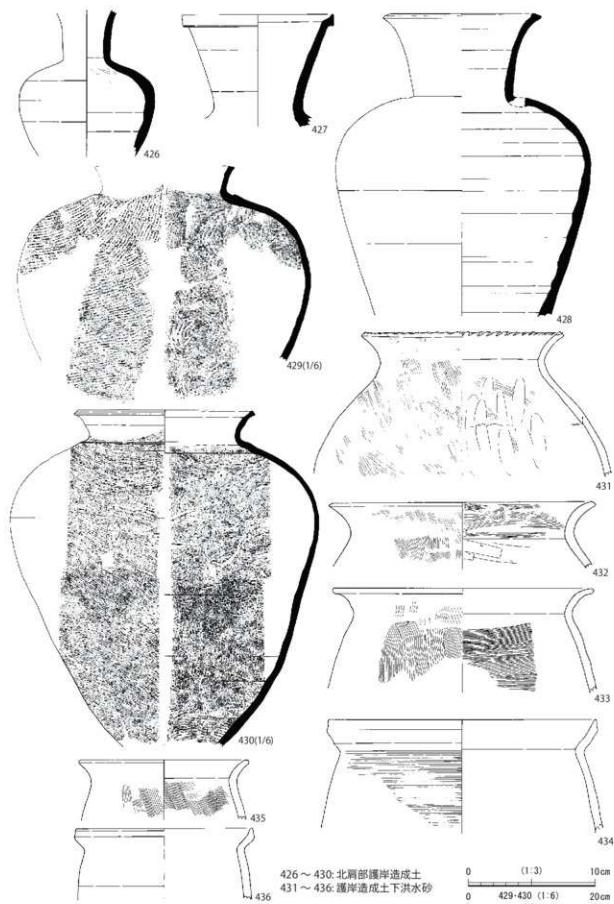
第4層(洪水流入・堆積土砂)出土遺物のうち、第128図431～第130図455を図化し、431・440・448・452・453は河底に近い層位からの出土遺物である。球胴の弥生土器壺と考えられる431は口径16.0cmを測り、口縁端部を刻みで加飾する。内面に煮炊きに伴う黒褐色のヨゴレが付着する。432・433・435・437は非ロクロ土器器甕、434・436・438はロクロ土器器甕である。432・433は硬質の焼き上がりで、口縁部はゆるやかに外反する。433は内外面でもハケ調整の原体が異なる。434は面取りがしっかりとした口縁端部を上方にひきのばし、胴部内面全体に黒褐色の炭化物が付着する。小甕435は口径13.0cmを測り、口縁部は短く外反する。436・438は煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に残る。437は頸部で明瞭に屈曲し、胴部内面上半に煮炊きに伴う暗褐色のヨゴレが付着する。ロクロ土器器場439は破損後に被熱し、光沢のあるタール状の煤が付着する。

第129図440～第130図455は須恵器で、坏蓋443・無台坏454はⅤ期以降に位置付けられる。坏G蓋は口径9.5cm、器高2.3cmを測り、内面の返しを丁寧に仕上げる。441～443は坏蓋である。441は口径16.5cmを測り、口縁端部を直下に折り曲げる。442の口縁端部は比較的大振りである。扁平な443はボタン状の鈕を貼り付け、天井部内面は使用に伴い平滑となる。444～447は有台坏である。焼成堅緻な444は口径14.1cm、器高5.6cmを測り、体部はゆるやかに外反する。445は肉厚の底部が突出し、Ⅱ₃期に位置付けられる。底部外面中央に墨痕が残るものの文字は判読できない。扁平な446は焼成堅緻で、小振りの台部を外展気味につける。深身・肉厚の447は口径14.3cm、器高6.2cmを測る。448～454は無台坏である。448は焼きゆがみのため、底部が突出する。449は底部外面に墨書が残り、つくりは「ム」に見える。450の内面は底部から体部になだらかに移行し、底部外面に薄く墨書が残るが判読できない。やや厚手の451は、口径12.6cm、器高3.3cmを測る。452の底部外面に記された墨書は、墨が薄く判読できない。453の墨書は「乙□(上カ)」、454の墨書は「梗女」と判読できる。451はⅢ期、448はⅣ₁期、449・452・453はⅣ₂(新)期、450がⅤ期、454がⅤ₂期に位置付けられる。第130図455は胴径約47cmを測る甕で、外面は平行叩きで整形するが、木目が浮き出すため格子状の叩きに見える。

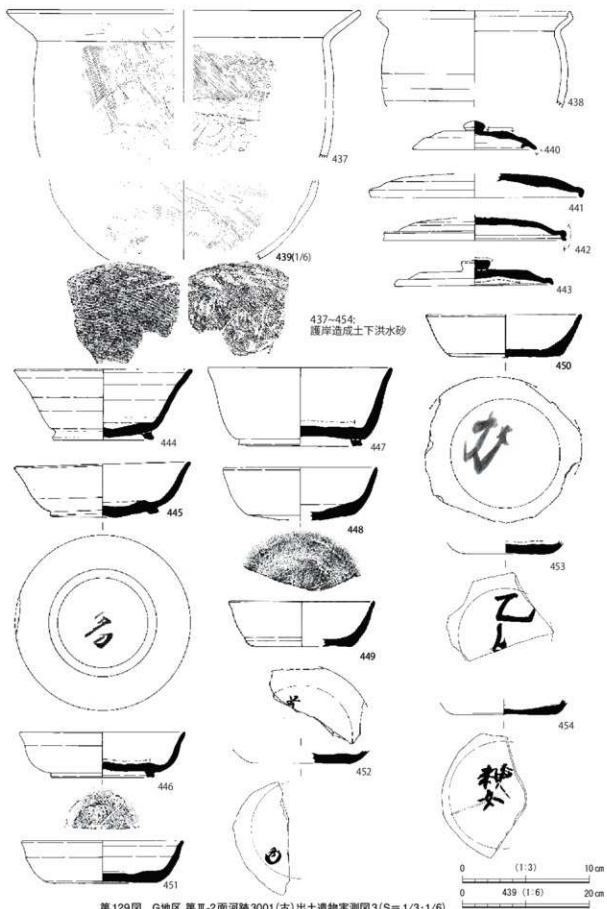
第3層(左岸(南肩部)濁黒灰～灰色砂質土)からは、Ⅱ₂～Ⅳ₁期を主体とする遺物が比較的まとまって出土した。第130図456は縄文土器深鉢で、口径約25cmを測る。458は弥生時代末の赤彩台付鉢、457は古墳時代前期の器台と考えられる。459～484は多様な形態・技法をもつ土器器埴類で、467～473・475・477・478はロクロ土器器である。459は口径約16cm、器高5.5cmを測る。内外面に丁寧なミガ



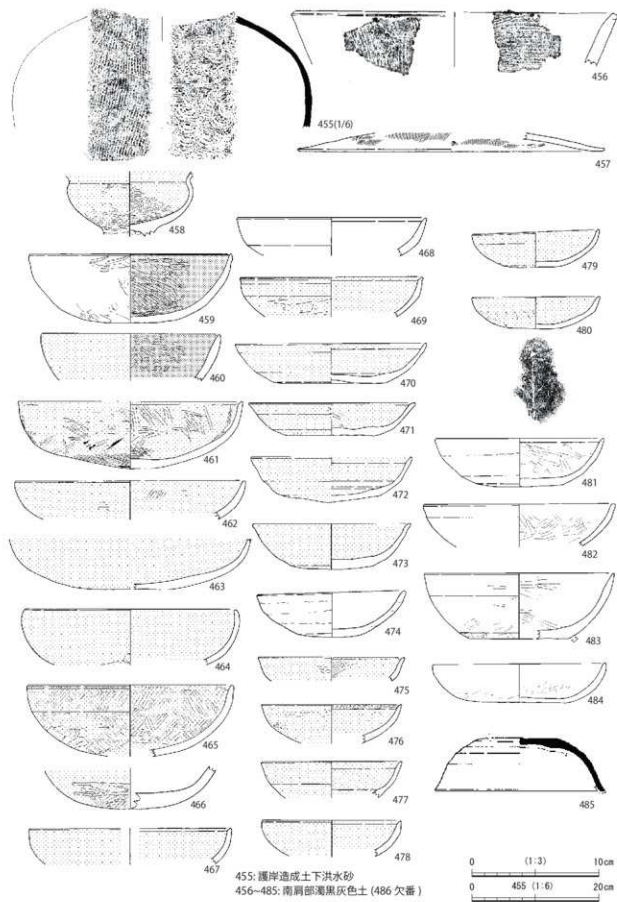
第127図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図1(S=1/3)



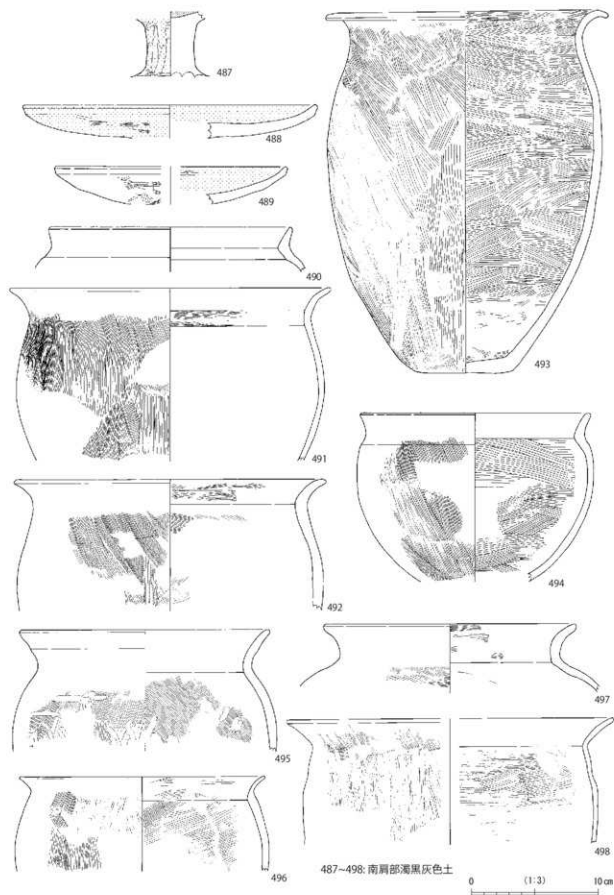
第126図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



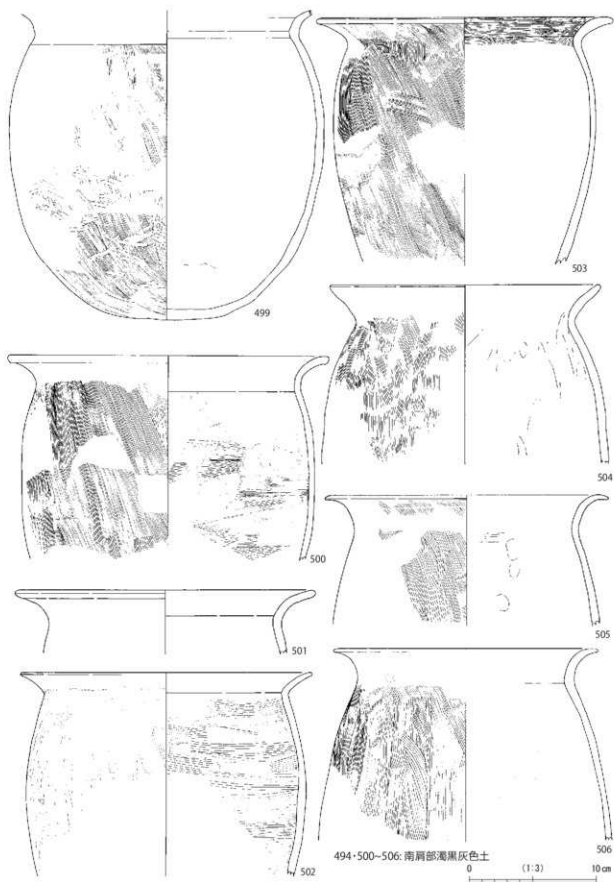
第129図 G地区 第Ⅱ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図3(S=1/3・1/6)



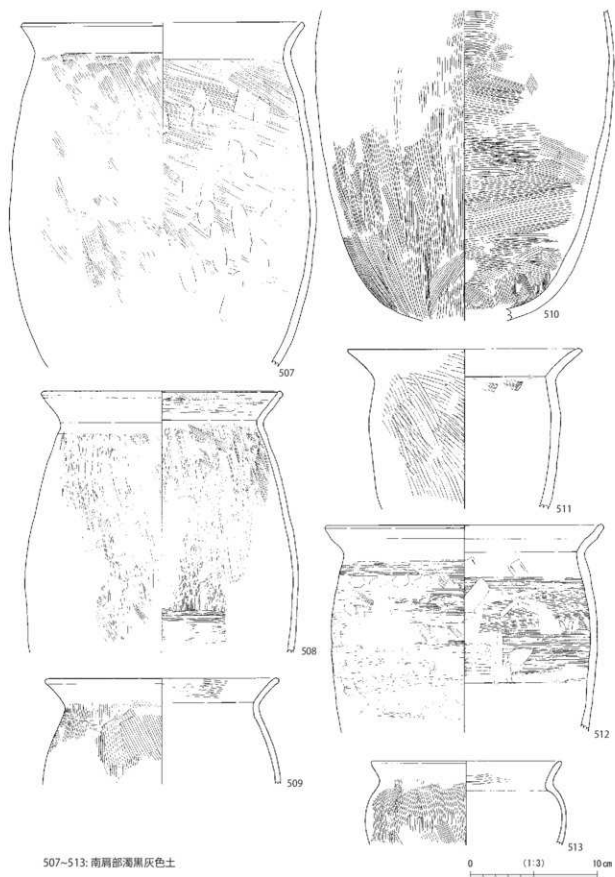
第126図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図2(S=1/3・1/6)



第131図 G地区 第Ⅱ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図5(S=1/3)

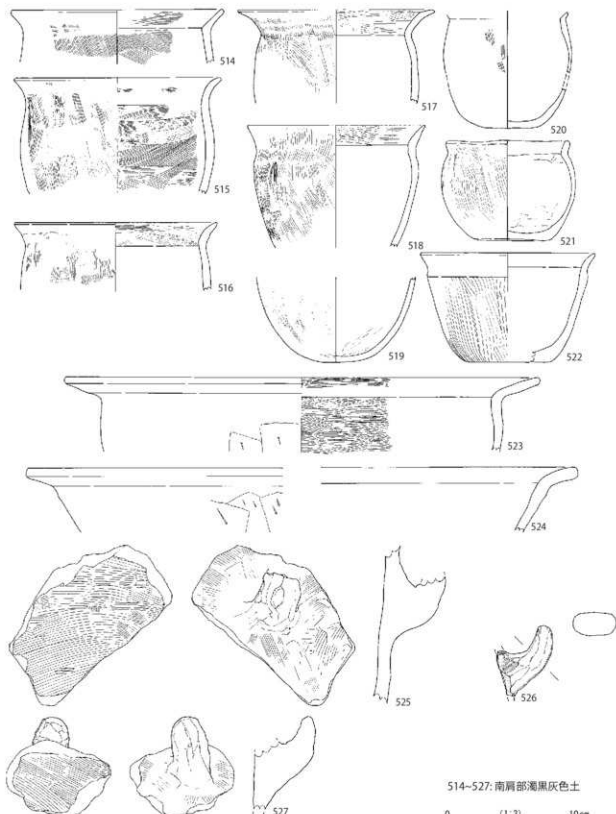


第132図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図6(S=1/3)



507-513: 南肩部濁黒灰色土

第133図 G地区 Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図7(S=1/3)

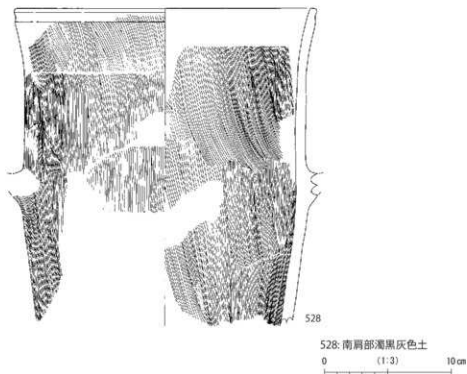


第134図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図8(S=1/3)

キ調整を施した後、内面に黒色処理を施す。厚手の460は内面に黒色処理、外面に赤彩を行う。461～465は、非ロクロ成形の両面赤彩埴類で、口径16～20cmを測る。461は口径17.6cm、器高5.3cmを測り、口縁端部は内傾した面をもつ。体部外面数ヶ所にかすかに黒痕が残る。463は口径20cm前後に復

元でできる大型品である。464の口縁部は内湾する。465は口径16.1cm、器高5.7cmを測り、口縁端部で小さく外反する。厚手の466は、磨減が著しいが内面も赤彩と考えられる。ロクロ土師器467～469は内外面とも赤彩し、口縁端部に内傾した面をもつ。468は内外面とも二次被熱し、煤が付着する。両面赤彩のロクロ土師器壺470～473は、体部は大きく外傾するため皿形に近い印象を受ける。底部外面を回転ヘラ切り痕が残る。470が口径15.0cm、器高3.1cmを、471が口径13.0cm、器高2.6cmを、473が口径12.3cm、器高3.6cmを測る。非ロクロ成形の474は粘土紐の積上り痕をほぼ残し、内外面とも赤彩を施した可能性が高い。両面赤彩の475～478は口径11cm前後を測り、非ロクロ成形の476のみミガキ調整後、内傾する口縁端部にハケ調整を加える。非ロクロ成形の479・480は口径約10cmを測り、体部中程で屈曲する。両面ともヨコナデ後に赤彩を施す。また、480の底部外面には、成形時に敷いた葉の葉脈痕が明瞭に残る。非ロクロ成形・未赤彩の壺481～484は、ミガキ調整と手持ちケズリ調整を行う点で共通する。481が口径13.3cm、器高3.8cmを、深身・平底の483が口径14.8cm、器高5.2cmを、皿形に近い484が口径13.4cm、器高3.1cmを測る。485は須恵器坏H蓋と考えられる。第131図487～489は、非ロクロ成形の高坏である。487が内面に黒色処理、外面に赤彩を施すのに対して、赤彩を施す488・489は外面にハケ調整が残る。

第131図490～第134図522は、非ロクロ土師器甕類で、硬質の質感をもち、口縁部が外反しながら比較的長くのびる個体(491、492、502～507、515等)が目立ち、近江系甕の影響を受けた器形の可能性をもつ⁶⁾。短頸で壺形に近い490は口径18.9cmを測り、煮炊きに伴い内面にヨゴレ、外面に煤が付着する。球胴形を呈する491は、頸部内面の整形にハケを用いる。492は口径24.0cmを測る。平底の493は口径22.3cm、器高28.6cmを測り、底部外面を指ナデで整形する。小型・球胴形の494は口径17.8cmを測り、内外面でハケ原体が異なる。496の口縁部は薄手で、短く外反する。497は球胴形を呈する。薄手の498は頸部で明瞭に屈曲し、内外面に同じ原体を用いてハケ調整を施す。第132図499は内面をナデで整形する。500は口径25.2cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に残る。502～507は硬質



第135図 G地区 Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図9(S=1/3)

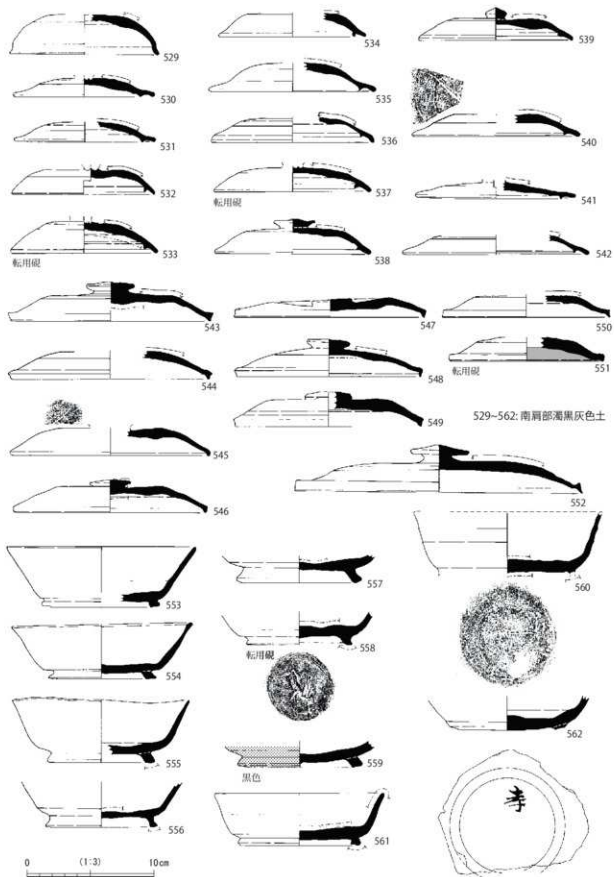
の質感をもつ。502・503が胴部上位に胴部最大径をもつものに対して、504～507はナデ肩気味で口縁部内面にハケ調整を施す。丸底の510は内外面でハケ調整の原体が異なる。厚手の511は口径18.2cmを測り、張りのない胴部外面に粗いハケ調整を施す。512は口径21.6cmを測り、口縁部は有段状に屈曲する。胴部上半には縦方向のハケ調整の後にカキメ状を呈する横方向のハケ調整を加える。

第133図513～第134図520は、口径約14～16cmを測る小甕である。球形を呈する513は口径15.0cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に付着する。第134図514は頸部で明瞭に屈曲し、細かい単位のハケ調整を施す。515は硬質の質感をもち、516とともに頸部の屈曲が弱い。517はハケを用いて、口縁部を大きく外反させる。518は口径13.8cmを測り、内面全体に黒褐色炭化物が付着する。519は破損後に二次被熱に伴う煤が付着する。521は口径9.5cm、器高7.9cmを測り、短い口縁部をつける。底部内面の整形に板状工具を用いる。平鉢形を呈する522は口径13.8cm、器高8.6cmを測る。外面に粗いハケ調整を施し、胎土にシャモットが多く混ざる。

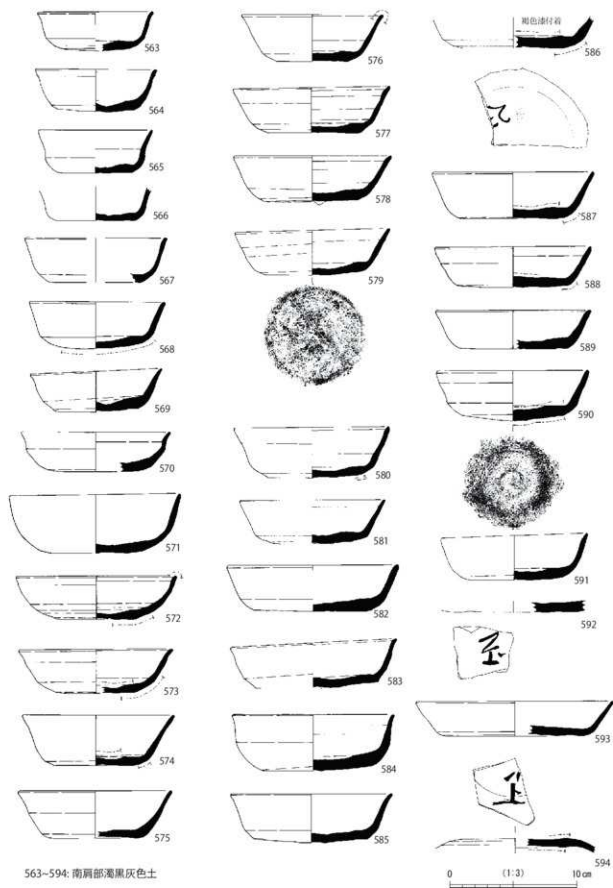
第134図523は非ロクロ成形の場で、口縁部を大きく折り曲げる。524はロクロ成形の場で、口径約43cmに復元できる。525～527は甌類の把手片で、整形は丁寧である。第135図528は寸胴形を呈する甌で、口径23.4cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げ、欠損する把手は幅約7cmを測る。

第136図529～第139図602は須恵器であり、Ⅱ₂～Ⅳ₁期の比較的時期にまとまりをもつ土器群の他、Ⅴ₂～Ⅵ₁期に位置付けられる坏蓋551、無台盤593が出土している。坏H蓋529は口径11.4cm、器高3.2cmを測り、焼成があまりため外面は黒化する。第130図485等とともに、調査区周辺地における集落域の展開を示唆するものといえる。530～542は坏G蓋で口径は10.8～11.4cm、12.0～13.0cm、14.4cmに分かれ、前二者が主体をなす。全形のわかる538が口径12.1cm、器高2.8cmを、539が口径12.0cm、器高2.6cmを測る。内面の返しは断面三角形形状に退化した個体が多く、返し径は9～11cm代に中心をもつ。また、533・537が天井部内面を視面に転用しており(写真図版52)、第145図689を含めて、県内でも古い段階の転用視の事例となる。543～551は口縁端部を折り返す坏蓋である。543・544は口径15.5cmを測り、面取りの鋭い口縁端部に仕上げる。543は径3.9cmを測る大振り鈕を貼り付ける。545～547は口径約15cmを測り、口縁端部を下方に小さく折り曲げる。545の肩部外面に焼成前のヘラ記号が残る。薄手の548は口縁端部をしっかりと下方にのぼし、天井部内面には摩耗が認められる。厚手の549は口径14.7cm、器高2.8cmを測り、天井部外面は回転ヘラ切り後に粗いナデ調整を施す。550は口径13.1cmを測り、口縁端部をしっかりと面取りする。厚手の551は口径11.9cmを測る。天井部内面の摩耗と墨痕から転用視となる。有台盤の蓋552は口径22.8cm、器高3.7cm、鈕径4.6cmを測る精製品で、天井部内面にカキメ調整を加える。鈕の形状は543と類似する。553～562は有台坏である。553～558は口径13.8～14.8cm、器高4.5～5.0cmを測り、大きく外傾する体部と、背の高い台部が強く外展する点で共通する。554・555・558は同胎土で、焼成時に小さな焼きぶくれが多出する。また、558は底部両面に墨痕が残る、摩耗する内面は視面に、摩耗のない外面を墨溜めに転用したと考えられる。559は第213図1026とともに還元焼成後に、外面全体を黒色処理する特殊品である。断面方形を呈する台部はしっかりと外側に踏ん張る。深身の560は、台部欠損後も使用した磨耗痕を残す。扁平な561は口径13.3cm、器高4.1cmを測り、使用に伴う摩耗が顕著である。562は低い台部を外寄りに貼り付け、還元は弱い。底部外面上方に「寺」と墨書しており、Ⅳ₁期に位置付けられる。

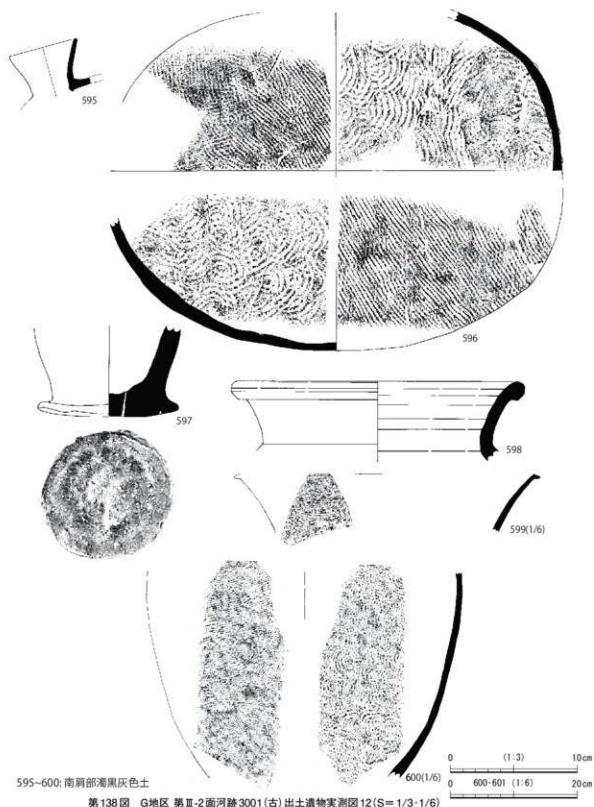
第137図563～569は坏G身で、568を除き有蓋焼成である。563が口径9.0cm、器高3.1cm、568が口径10.6cm、器高3.7cm、570が口径11.7cm、器高3.2cmを測る。566は器面に黒色を呈する小さな吹き出しが目立つ。567は焼きゆがみ、569は554等と同様に小さな焼きぶくれが多出する。坏570は口径11.7cm、器高3.2cmを測り、体部中程で屈曲する。無蓋の坏571は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。胎



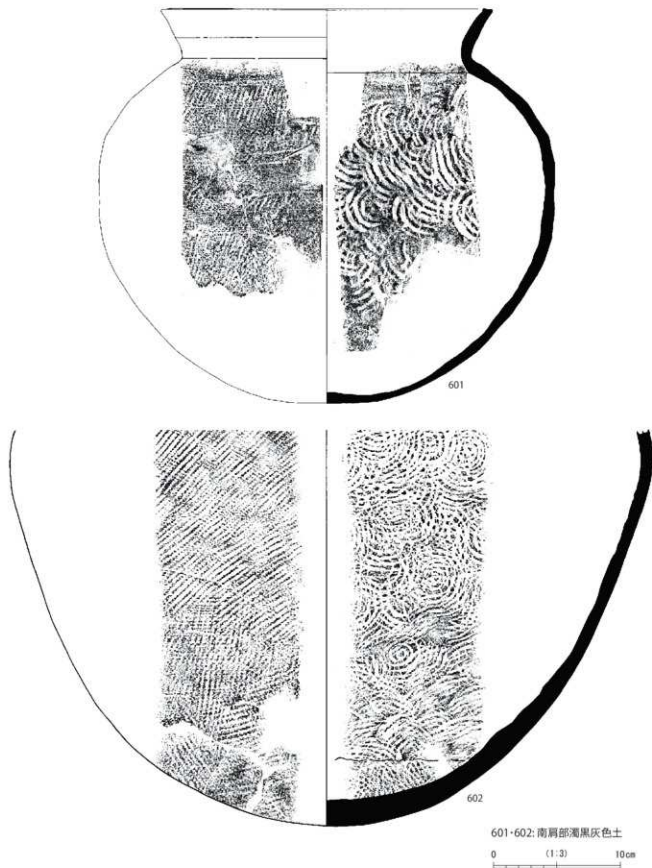
第136図 G地区 第Ⅱ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図10(S=1/3)



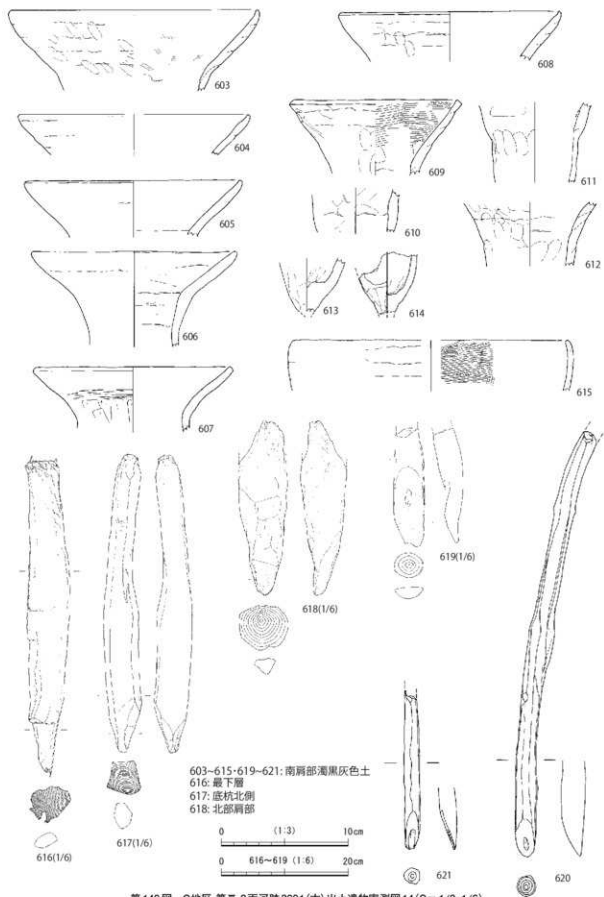
第137図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図11(S=1/3)



土は精良で底部外面に丁寧なナデ調整を加える。572は使用痕跡から身としたが、坏H蓋の可能性が高い。573～592は無台坏である。573は壙形に近く、体部はなだらかに外傾する。574～576は口径11～12cm台を測り、比較的小さい底部から外傾しながら体部がたちあがる。574・576は、554等と同様に焼成時の小さな焼きぶくれが多出する。577～579は口径12cm強、器高約3.6cmを測り、完形の578は底部内面に淡茶色を呈する漆が付着する(写真図版53)。やや身の深い580は、底部外面に火だすき



第139図 G地区 第Ⅲ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図13(S=1/3)



第140図 G地区 第Ⅱ-2面河跡3001(古)出土遺物実測図14(S=1/3・1/6)

痕が明瞭に残る。581は底部内面外寄りに焼成前にヘラ記号「×」を刻む。582・583は口径13cm強を測る。582は被熱のため、外面が軟質となる。583は焼成時に小さな焼きぶくれが多出する。厚手の584は口径12.8cm、器高4.4cmを測り、体部は直立に近い。586は底部外面に墨書「乙□(上ッ)」と褐色の漆が残る他、底部内面が使用に伴い平滑となる。Ⅳ₁期と考えられる。587は内外面とも煤が付着し、煮沸容器への転用が想定できる。588・589は口径約12cm、器高3cm強を測る。やや深身の590は使用に伴い底部が平滑となる。591は底部内面に「×」と焼成前に刻む。592は底部外面に「乙上」と墨書し、Ⅳ₁期と考えられる。無台盤593は口径15.4cm、器高2.7cmを測り、体部は直線的に外傾する。坏蓋594は肩部に「□上」と墨書し、1文字目は筆跡から「乙」以外の文字の可能性をもつ。

第138図595は平瓶口縁部で、胴部との接合部に閉塞円盤が残る。横瓶596は1ヶ所に残る閉塞円盤の段差を叩きによりなめらかに仕上げ上げる。厚底鉢597は、底部外面からの刺突が深く、2ヶ所の刺突は内面に達する。内面の焼きぶくれのためか、使用に伴う摩耗はほとんど確認でない。598～602は甕である。厚手の598は口径22.0cmを測り、口縁端部を丸く仕上げ上げる。胎土に非常に多くの粗砂が混ざる。599は口径約47cmを測る大型品で、外面をカキメと波状文で加飾する。600は胴径約50cmを測る。第139図601は球胴を呈する軟質の甕で、口径26.0cm、器高31.0cmを測る。焼成は甘く、色調は内面が暗灰～黒色を、外面が黄灰～灰色を呈する。底部外面は使用に伴い平滑となる。

第140図603～614は尖底の製塩土器で、比較的硬質の質感をもつ。口径は、603～608が15～19cm台、609が12.8cmを測る。603は、上から1～4段目と5段目以下で胎土が異なり、後者には赤色粒が多く混ざる。607は胴部内面を縦方向にナデつけた際の板状工具痕のあたりが明瞭に残る。607・608は胎土に海綿骨針が混ざらない。609は口縁端部を平坦に仕上げ、内面にハケ調整を施す。613は軽い比重をもち、614とともに内面にシボリ痕が明瞭に認められる。615は口径約22cmの平底の製塩土器に復元したが、小片のため不安を残す。内面にハケ調整を施し、胎土に粗砂が多く混ざる。616～621は杭で、うち619～621は南肩部に打ち込まれた状態で出土した。樹種は、616・617がクリ、618がマツ属複雑管束亜属である。

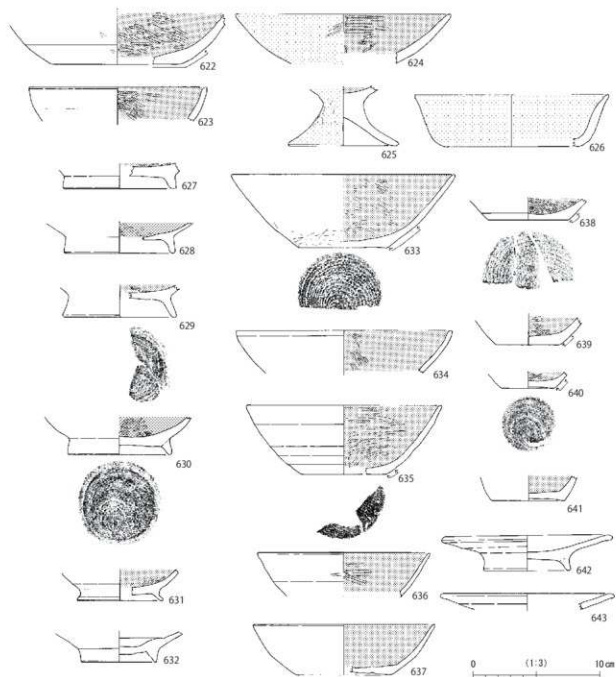
河跡3001(新)

第Ⅲ-2面で堤防・護岸・耕作地が造成された後、耕作地は一部(第114図耕作地a～c)が放棄、一部が水田(同図耕作地d：第Ⅲ-1面水田301～303)に転換する。護岸・堤防を維持した第Ⅲ-1面が土砂で埋没する段階での河跡の規模は、調査区南東壁(第124図断面a-a')で上幅約14m、下幅約9m、深さ約0.4m(最深部標高15.07m)、調査区中央付近(第125図断面c-c')で上幅約11m、下幅約6.6m、深さ0.7m(同14.80m)、調査区北西壁(第126図断面e-e')で上幅約18m、下幅約13.5m、深さ0.8m(同14.35m)を測り、下流側では左岸の浸食がより著しい。流入・堆積した土砂は、灰灰～灰白色または明茶色を呈するシルト・細砂・粗砂・砂利(第124図断面a-a'土層2～4、第125図断面e-e'土層1～8)を基本とし、河跡3001(古)のような大きな自然石は混ざらない。出土遺物は、第3節に記したとおりであり、土砂が流入・堆積した時期を直接的に示すものはない。

4 包含層等出土遺物(第141～148図、第32～35表)

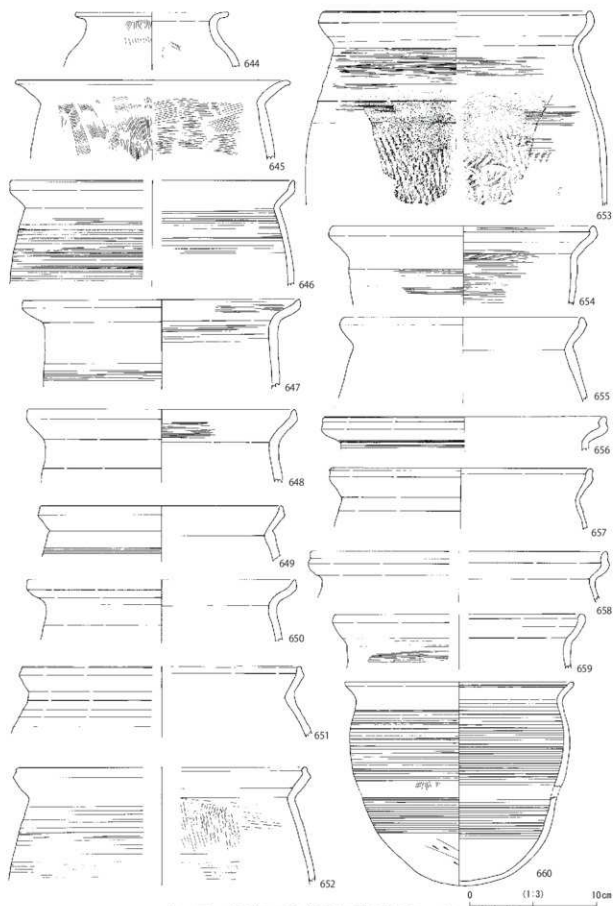
河跡3001以北で確認した第Ⅲ-2面包含層は、第Ⅲ-1面の水田耕作土でもあり、比較的多くの須恵器、土師器が出土している。第141図631・632の内面黒色有台塼が最も新しく位置付けられ、第Ⅲ-1面が土砂で埋没した時期の上限を示す。

第141図622～第144図688は土師器で、うち622～625は8世紀前半代に位置付けられる非ロクロ

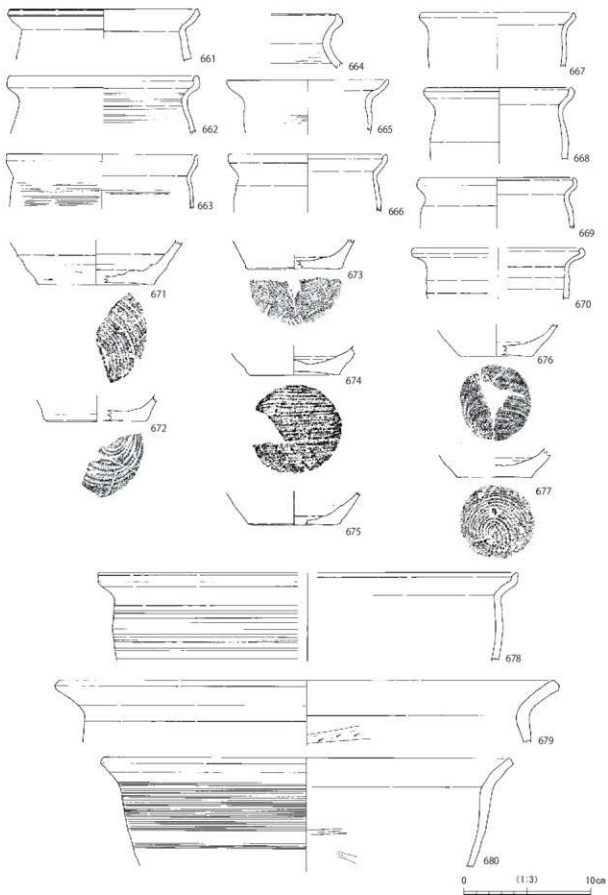


第141図 G地区 第Ⅱ-2面包含層出土遺物実測図1(S=1/3)

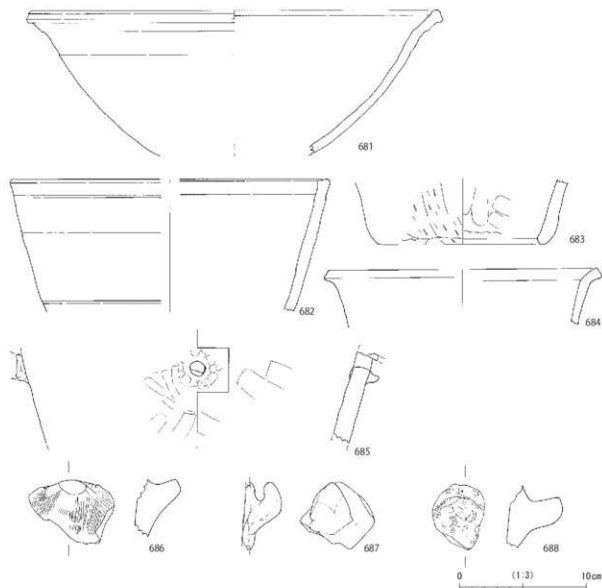
土師器である。622・623は内面黒色処理を施した埴で、内面に丁寧なミガキ調整を施す。622は底部周辺にケズリ調整を加える。高坏624・625は外面に赤彩、内面に内黒処理を施す。赤彩のロクロ土師器坏626は口径15.2cm、器高4.1cmを測り、先細り口縁端部は小さく外反する。ロクロ土師器627～643は、Ⅵ期以降に位置付けられる。627～632は有台埴で、632以外は内面に黒色処理を施す。627の台部は断面方形を呈するのに対し、628～630は端部を丸く仕上げた台部が比較的長く外展する。627はⅥ₂期、628～630はⅥ₃期に位置付けられる。631の台部は細長く外展する。632は底部に回転ヘラ切り痕をそのまま残す特殊品で台部は断面三角形を呈する。631・632はⅦ₂期(10世紀後葉～11世紀前葉)に位置付けられる。633～640は内面黒色処理を施した無台埴である。633は口径17.4cm、器高5.8cm



第142図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図2(S=1/3)



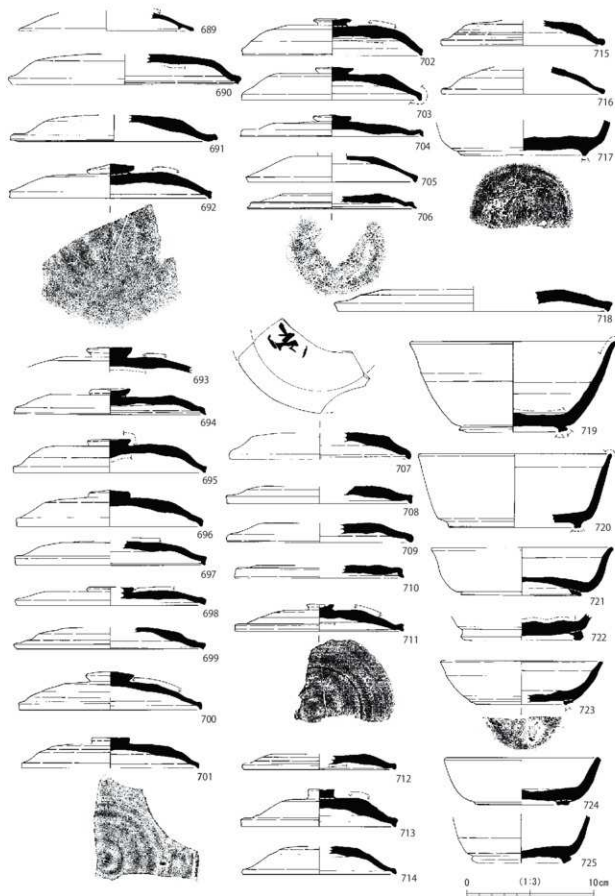
第143図 G地区 第Ⅱ-2面包含層出土遺物実測図3(S=1/3)



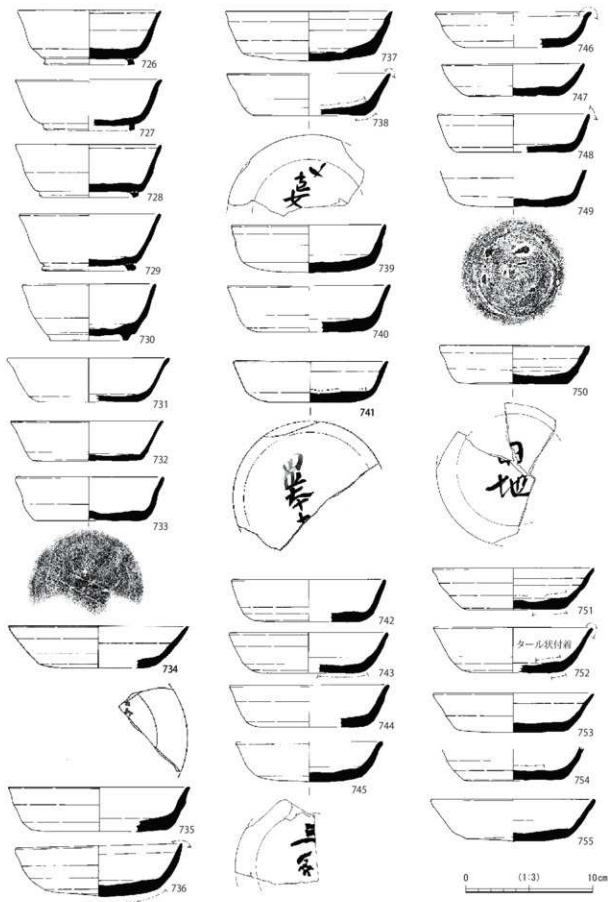
第144図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図4(S=1/3)

を測り、体部下半に横方向の丁寧なケズリ調整を加える。634の口縁部は内湾気味となる。635は口径15.1cm、器高5.4cmを測り、外面は橙色に発色する。薄手の636は口径13.5cmを測る。637は口径12.3cm、器高7.4cmを測り、黒色処理が不十分で口縁部付近は橙色を呈する。また、632と同様に底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。638～640は内面に丁寧なミガキ調整、外面に横方向のケズリ調整を行う。641は体部の外傾具合が弱いことから小坏と考えられる。底部外面に丁寧なケズリ調整を施す。642・643は有台皿で、642が口径12.8cm、器高2.8cmを測る。642はⅥ₃期に位置付けられる。

第142図644～677は土師器器類で、煮炊き痕をそのまま残す個体が多い。644・645は非ロクロ成形である。小甕644は口径12.0cmを測り、胴部は球形を呈する。645は硬質な質感をもち、頸部に明瞭に屈曲する。646～659は口径19～22cm前後を測るロクロ成形の長甕で、646～651・655の口縁端部が断面三角形形状を呈するのに対して、薄手の652～654の口縁端部は内屈、656～658の口縁部は屈曲しながら立ち上がる。また、653は内面に扇形当て具、外面に平行叩き具を用いて整形する。659は口縁端部を丸く仕上げる。660は口径17.0cm、器高約16cmに復元でき、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが明瞭に付着する。第143図661～663は口径15cm前後を測り、薄手の663は口縁部が直立する。664は小片の



第145図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図5(S=1/3)



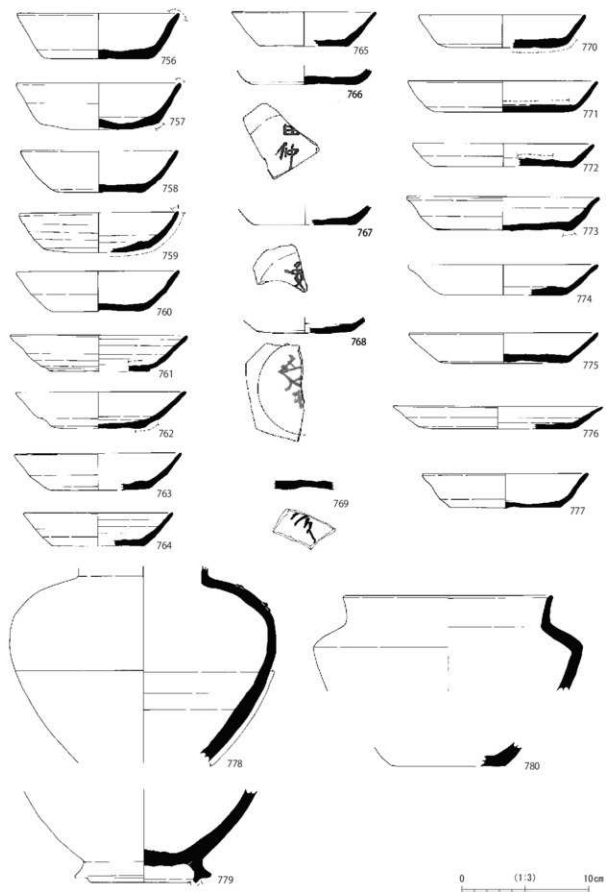
第146図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図6(S=1/3)

ため傾きに不安を残す。665～670は口径12cm前後を測り、口縁部は丸く仕上げるもの(665・666)、断面三角形を呈するもの(667)、内屈気味のもの(668～670)が認められる。671～677は底部片で、671は胴部外面下端に横方向のケズリ調整を加える。また、674・676は静止糸切り痕をそのまま残す。第143図678～第144図681はロクロ成形の埴である。678は口径約33cmに復元できる。679は口縁端部を平坦に面取りし、内面に炭化物が付着する。681は口縁端部を丸く仕上げる。瓶682は口径約25cmを、683は底径12.4cmを測る。684は瓶類口縁部と考えられる。非ロクロ土師器685は器肉が厚く、用途不明の孔径約1.2cmを測る注口を穿つ。686～688は瓶類把手で、686・688は端部を平坦に面取りする。

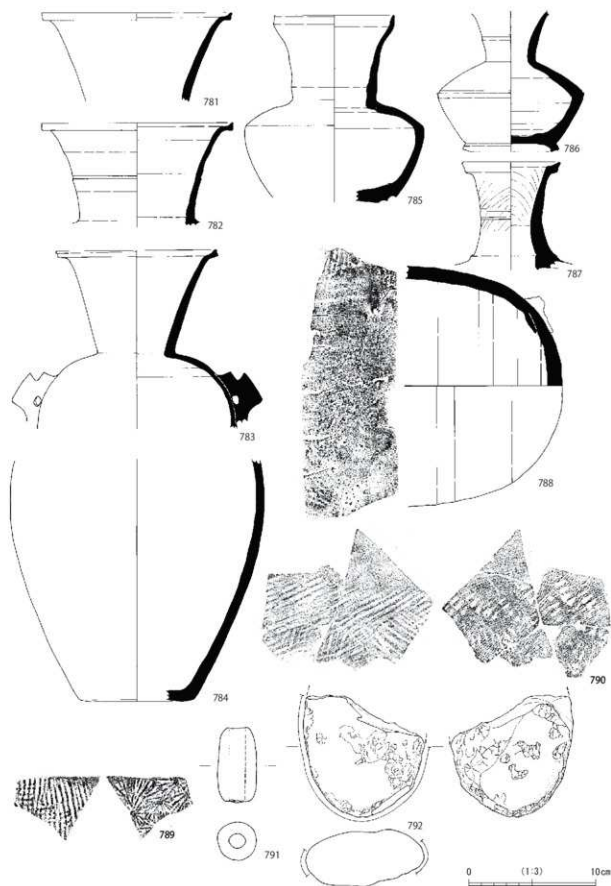
第145図689～第148図788は須恵器である。薄手の坏G蓋689は口径13.8cmを測り、天井部内面全体に墨緑の黒色付着物が残る。690～716・718は坏蓋で、Ⅳ期に属する個体が主体を占める。690は口径17.8cmを測り、断面三角形を呈する口縁端部は面取りが鋭い。倒位で二次被熱し、外面には煤が付着する。691は口径16.2cmを測り、口縁端部を丸く仕上げる。692～695は口径15cm強を測り、径3cmを超える大型で扁平な鈕を付ける。696～699は口径15cm弱を測り、696・698は扁平でボタン状を呈する鈕を付ける。700～704は口径約14cmを測る。薄手の700は径3.8cmの大型鈕を付す。701の天井部は平坦面が広い。702の口縁端部はほとんど目立たず、天井部内面が使用に伴い摩擦する。703は縦紋に焼成される。704の胎土は粘質な質感をもち、焼成で扁平に変形する。薄手の705は口径13.2cmを測り、外面は降灰・自然釉の溶着が著しい。706は口径13.3cmを測り、焼成で扁平となる。厚手の707は広い天井部外面に判読不能の墨書が記され、Ⅵ₂期に位置付けられる。708・709は口径14.4cmを測り、口縁端部は目立たない。710は大振り面で面取りのしっかりとした口縁端部をつける。711は口径12.9cm、器高2.1cmを測り、天井部内面は使用に伴い平滑となる。712は口縁端部を小さく折り曲げる。713はボタン状の鈕を付け、口縁端部は欠けが目立つ。714～716は口径12cm台を測り、Ⅵ期に位置付けられる。714の天井部は円盤状を呈する。715・716は口縁端部を丸く仕上げる。厚手の718は口径21.2cmを測り、口縁端部は断面三角形を呈する。

第145図717・719～第146図730は有台坏である。深身の719は口径15.9cm、器高7.2cmを測り、小さい台部が外展する。底部内面は使用に伴う摩擦が著しい。720の体部は直線的に立ち上がる。721は口径14.0cm、器高3.8cmを測り、体下部にふくらみを有する。722は使用に伴う摩擦痕と二次被熱痕が明瞭に残る。723は口径12.5cm、器高3.5cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。厚手の724は、扁平な台部を中心寄りに貼り付ける。725～729は口径11cm強、器高4cm強を測り、体部は直線的のびる。うち、725は内面全体に煤が付着する。730は口径10.4cm、器高4.5cmを測り、台部を中心からずれて貼り付ける。

第146図731～第147図769は無台坏である。731・732の器肉は薄く、733は箱形を呈する。734は口径14.2cmを測り、体部は大きく外傾する。底部外面に判読できない墨書が記され、Ⅵ₁期に位置付けられる。肉厚の735は口径14.2cm、器高3.5cmを測り、Ⅲ期に属すると思われる。736の底部外面には摩擦と煤付着が認められる。737は煮沸容器に転用され、内外面に煤が付着する。738は底部外面に墨書が記され、一番下の文字は「女」と判読できる。Ⅳ₁期と考えられる。深身の739・740は口径12cm台、器高3.5cm強を測る。741は底部内面が使用に伴い平滑となる他、底部外面に「正本□(寺カ)」と墨書される。Ⅳ₂(新)期に位置付けられ、「正本」と記した墨書は宝達志水町杉野屋専光寺遺跡に類例をもつ⁹⁾。742～744は口径12cm強、器高3.3cm前後を測り、743は使用に伴う摩擦が著しい。745は口径11.3cm、器高3.2cmを測り、口縁端部で小さく外反する。底部外面に崩れた字体で3文字の墨書が記され、「土万呂」の可能性をもつ。Ⅳ₂(新)期に位置付けられる。746～748は扁平な印象を受け、749は外面に煤が付着する。750は煮沸容器に転用後、底部外面中央に「田地」と記す。Ⅳ₂(新)期に位置付けられる。



第147図 G地区 第Ⅲ-2面包含層出土遺物実測図7(S=1/3)



第148図 G地区 第Ⅱ-2面包含層出土遺物実測図8(S=1/3)

751～758の体部は、外傾しながら立ち上がり、V期の特徴を示す。752は口縁部内面にタール状付着物が残り、灯明容器に用いたと考えられる。755は焼成時の黒色吹き出しが目立つ。759～768はⅥ期に属する。759は生焼けて摩耗が著しく、760は焼成時の還元が弱い。薄手の761・762の底部は台状を呈する。762は煤の付着状況から灯明容器に転用された可能性が高い。764・765の体部は直線的に大きく開く。766～768は底部外面に墨書が残り、うち766は「□(田カ)仲」と判読できる。時期不明の769は底部外面に「□万呂」と墨書される。770～777は無台盤である。770は口径13.0cm、器高2.6cmを測り、底部外面が摩耗する。771・772の底部内面は、使用に伴い平滑となる。773～776の体部は大きく外傾し、776は口縁部に煤が付着する。薄手の777は口径12.9cm、器高2.7cmを測り、内面に火をくべた痕跡が残る。

第147図778～第148図788は壺・瓶類である。778は厚く溶着した自然釉の状況から正位無蓋での焼成が復元できる。779は内面にカキメ状の調整を施し、台端部は使用に伴い摩耗する。短頸壺780は口径16.2cmを測り、底部片も出土している。降灰の状況から無蓋器種となる。第148図781・782は口径約15cmを測り、782は沈線で加飾を行う。双耳瓶783は口径12.4cmを測り、幅約4mmの薄く丁寧な面取りした耳をつける。784は正位で堅緻に焼成される。有台の785は口縁端部を直立気味に仕上げられる。また、胴部を風船技法で成形しており、頸部に閉塞円盤の一部が残存する。小形瓶786は肩部と口縁部を沈線で加飾する。正位で焼成され、肩部に淡緑色の自然釉が溶着する。瓶787は成形時の回転で生じたシボリ痕が明瞭に残る。また、口縁端部には使用に伴う小さな欠けが連続する。横瓶788は横位で焼成しており、側面に焼き片が溶着する。ロクロ土師器甕789の内面に放射状当て具痕が、埴790の内面に扇形当て具痕がそれぞれ確認できる。土師質の土鍾791は残存重量51.7gを測る。792は凝灰岩を用いた敲石と考えられ、側面に敲打痕が連続する。

4 小 結

第Ⅲ-1・Ⅲ-2面で検出した遺構群の盛衰は、いずれも南東側丘陵斜面で発生したと考えられる大規模な土石流災害の影響を受けている。以下では、検出した大規模な土石流痕跡を、上層から土石流災害1(第0-I面と第Ⅲ-1面の間に堆積、14世紀中頃に発生)、土石流災害2(第Ⅲ-1面上層に堆積、10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ₂期頃)に発生)、土石流災害3(第Ⅳ面を廃絶、10世紀初頭(Ⅶ₁期)に発生)と、それぞれ呼称し、次の4小期に整理した(第149図)。

土石流災害3 第Ⅳ面最終小期(10世紀初頭(Ⅶ₁期)に発生した土石流痕跡で、E～G-23～25区を南東方向から北西方向に一気に流れ下る。本流(河跡3001(古))の規模は、上幅約20～25m、下幅9～15m、深さ2.2m以上を測り、最も大きな自然石は1mを超える。流入した土石流は、右(北)岸側地表面を深く削り取る一方、左(南)岸側の開析作用は相対的に弱く、調査区に流入した土砂の一部が第Ⅳ面の緩斜面上に堆積する。なお、ほぼ同時期に発生したと考えられる土石流痕跡をA地区南端～E地区で確認している。

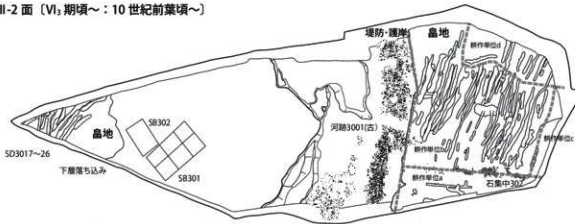
第Ⅲ-2面 災害に伴いG地区第Ⅳ面の集落域は放棄され、10世紀前葉(Ⅶ₃期頃)に河川整備を伴った耕作地としての利用が始まる。河跡3001(古)右(北)岸では、護岸をもつ堤防と、堤防外(北)側に耕作地(畠地)が一体的に造成される。一方、河跡3001(古)左(南)岸は明確な河川整備痕跡は残存せず、細い杭が遺存する程度である。川岸より10m以上離れて小規模建物(SB301・302)が建ち、さらに南側緩斜面にF地区に連続する耕作地(畠地：SD3017～26等)が展開する。

検出した堤防の規模は、延長約21m、上幅2.4～3.6m、下幅5.6～6m、高さ(北側の耕作地との標高差)約0.4mを測る。河跡肩部の護岸は、調査区周辺に存在する自然石を砂質土で押さえながら乱雑に積み上げたものであり、規模は幅2～3.5m、厚さ30～50cmを測る。石積みは、上流側約1/3が長軸10～

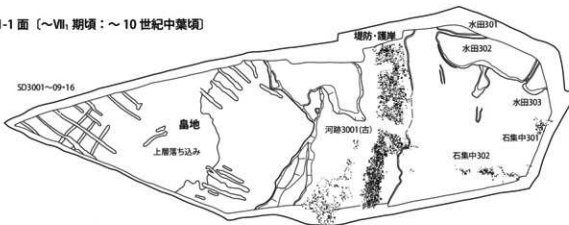
第IV面最終小期 (VI₂期：10世紀初頭)



第III-2面 (VI₃期頃～：10世紀前葉頃～)



第III-1面 (～VII₁期頃：～10世紀中葉頃)



土石流災害2の発生(第III-1面の埋没) [VII₁期頃：10世紀後葉～11世紀前葉]

第149図 G地区 第三面変遷案(S=1/500)

20cm程度の小振りな自然石を緩やかな勾配で積上げるのに対して、下流側約2/3は長軸40cmを超える大振りな自然石を混ぜながら急勾配で堅固に積み上げる傾向を示す。堤防北側の畠地は、一部に造成を伴いながら南南東方向から北北西方向に向かう緩斜面に展開する。耕作に伴う小溝群約60条は、地形の勾配に平行または直交して掘られ、小溝や石集中302等の配置から耕作単位は大きく4つに復元可能である(耕作単位a～d)。

河跡3001(古)左岸の建物は、総柱構造のSB301が3×2間(平面積27.7㎡)、側柱構造のSB302(同11.2㎡)と小規模であり、短期間のうちにSB302からSB301に建て替えられる。F地区第Ⅲ面で検出した施軸陶器を伴出する建物域の北端に位置するものの、やや離れることから短期的に単独して建てられた雑舎的用途をもった建物と考えるのが妥当であろう。F地区第Ⅲ面に連続する耕作に伴う小溝群(SD3017～26等)は、複数回の切り合い関係をもつ。

第Ⅲ-1面 第Ⅲ-2面で成立した耕作域は、10世紀中葉頃(Ⅶ₁期頃が下限か)に河跡3001(古)北岸の畠地の一部が水田(水田301～303)に転化する一方、南岸の緩斜面は畠地としての利用を継続する。また、中央を流れる河跡3001(古)は、護岸を伴う堤防を維持する。水田は、第Ⅲ-2面の耕作単位dを継承する範囲に小規模区画3枚が占地する。水田301～303は、標高約15mの緩やかに屈曲する等高線に沿って配され、水田302で長さ約13.6m、幅4.1m以上(耕作面積約55㎡以上)を測る。用・排水施設は確認できず、主に地表に湧き出る水を低い畦畔を介して水田間を掛け流したと推測できる他、水田302の山側(南側)土手に土留めと考えられる自然石の集積を検出している。また、耕作土が10cm前後と比較的薄いこと等から、水田の造成～土石流災害2発生までの期間は比較的小さい可能性が高い。水田301～303南側(第Ⅲ-2面耕作単位a～c)では、石集中302を含む畦畔の名残を部分的に確認しているが、耕作自体は放棄されたものと考えられる。

土石流災害2 10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ₂期頃)に発生した土石流災害2の発生に伴い、G地区の利用は一時的に放棄される。G地区で集落域が再展開するのは、第0・I面a小期として第2節で報告したとおり12世紀以降となる。土石流災害2の本流(河跡3001(新))の規模は検出面で上幅11～18m、下幅6.6～13.5m、深さ0.4～0.8mを測る他、G地区全体を15～75cmの厚さで被覆する大規模なものであったと考えられる。なお、12世紀以降に再展開した集落域は13世紀代に廃絶、調査区は14世紀中頃に発生した土石流災害1で埋没する。

【註】

- (8) 望月精司2007『北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落』『日本考古学』第23号 有限責任中間法人日本考古学協会
 (9) 上野 敬他1998『杉野屋専光寺遺跡』志摩町教育委員会

第27表 G地区 Ⅱ-2出土土器類観察表1

調査年度	発掘位置	遺物番号	フリット径	出土層様	種類	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	体積 (cc)	内径形状	内径孔径	口ノ	用途	内装目録	外装目録	備考		
																備考	備考	
197	364	F-15-3 F-16-1	00040	包合層	鉄製器	片断	12.1	—	11.6	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 3枚包合層付	CG206	植物繊維類が埋り込んでいる。重層構造	88008	
197	365	F-15-1 F-16-2	00041	包合層	鉄製器	片断	36.9	—	18.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、ヤスヒ	CG207	内装目録	88009	
197	366	F-15-28 F-16-3	00042	包合層	鉄製器	片断	38.6	23.0	1000	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	CG208	平リソ、クマ、ハツ	88010	
197	367	F-16-2	00043	包合層	鉄製器	片断	16.4	—	12.6	圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 1枚包合層付	CG209	器内底部にクマ	88011	
197	368	F-16	00044	包合層	鉄製器	片断	12.9	6.4	4.2	楕圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ、ナフ 器内へ付着して	CG210	内装目録	88012	
197	369	F-16-2	00045	包合層	鉄製器	片断	—	9.0	0.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG211	内装目録	88013	
197	369	F-15-21 F-16-3	00046	包合層	鉄製器	片断	17.4	8.0	3.9	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG212	内装目録	88014	
197	369	F-16-4 F-16-2	00047	包合層	鉄製器	片断	14.3	16.4	2.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG213	内装目録	88015	
197	369	F-16-3	00048	包合層	鉄製器	片断	13.9	11.4	2.4	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG214	内装目録	88016	
197	363	F-16-3	00049	包合層	鉄製器	片断	13.9	9.4	2.9	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG215	内装目録	88017	
198	369	F-16-4	00050	包合層	鉄製器	片断	9.0	—	0.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、ナフ	CG216	内装目録 (器内無目録)	88018	
198	369	F-16-4	00051	包合層	鉄製器	片断	8.2	—	0.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG217	内装目録、外装目録	88019	
198	369	F-16-3	00052	包合層	鉄製器	片断	—	10.7	106.4	楕圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ、ナフ	CG218	自然発火、炭質(無目録)	88020	
198	369	F-16-2	00053	包合層	鉄製器	片断	622.5	—	37.7	圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ	CG219	自然発火、炭質(器内付着)	88021	
198	369	F-16-4	00054	包合層	鉄製器	片断	15.8	9.1	3.7	楕圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG220	内装目録、外装目録、器内底部にクマ	88022	
198	369	F-16-4	00055	包合層	鉄製器	片断	15.8	10.0	3.4	楕圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG221	内装目録	88023	
198	370	F-16-2	00056	包合層	鉄製器	片断	—	7.6	16.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG222	内装目録	88024	
198	371	F-16-16 包合	00057	包合層	鉄製器	片断	23.8	—	10.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	CG223	平リソ、クマ	88025	
198	371	F-16-3	00058	包合層	鉄製器	片断	—	—	106.3	圆形	片	裏	ハツ、平リ 目、クマ、ハツ	平リソ、クマ、ハツ	—	内装目録、外装目録付	88026	
198	371	F-16-4	00059	包合層	鉄製器	片断	18.1	9.6	1.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG224	内装目録、器内付着目録	88027	
198	374	F-16-3	00060	包合層	鉄製器	片断	12.1	8.1	1.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、ナフ 器内へ付着して	CG225	内装目録	88028	
198	374	F-16-3	00061	包合層	鉄製器	片断	13.2	8.1	1.6	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、ナフ 器内へ付着して	CG226	内装目録	88029	
198	375	F-16-3	00062	包合層	鉄製器	片断	—	10.4	11.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG227	内装目録(器内付着目録、付着目録)	88030	
198	377	F-16	00063	包合層	鉄製器	片断	21.1	—	60.1	圆形	片	表	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	—	内装目録、外装目録	88031		
198	378	F-16-1	00064	包合層	鉄製器	片断	16.9	—	18.9	楕圆形	片	表	コウロケテ、ハ ツ、クマ	CG228	内装目録	88032		
198	379	F-16-2	00065	包合層	鉄製器	片断	15.3	—	18.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG229	器内底部にクマ、器内付着目録	88033	
198	380	F-16-1	00066	包合層	鉄製器	片断	—	9.6	12.1	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG230	—	88034	
198	381	F-16-2	00067	包合層	鉄製器	片断	—	—	116.5	圆形	片	裏	コウロケテ、ナフ	—	—	器内付着目録(器内付着目録)	88035	
198	382	F-16-2	00068	包合層	鉄製器	片断	622.5	—	19.2	楕圆形	片	表	コウロケテ、ハ ツ、クマ	CG231	ハツ、炭質	88036		
198	382	F-16-1	00069	包合層	鉄製器	片断	622.5	—	16.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG232	外装目録	88037	
198	384	F-16-1	00070	包合層	鉄製器	片断	15.4	11.0	1.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG233	内装目録(器内付着目録、器内付着目録)	88038	
198	385	F-16-4	00071	包合層	鉄製器	片断	—	3.7	15.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG234	内装目録	88039	
198	386	F-16-4	00072	包合層	鉄製器	片断	96.7	—	11.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG235	器内底部にクマ、外装目録	88040	
198	387	F-15-4	00073	包合層	鉄製器	片断	11.1	8.0	1.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG236	内装目録	88041	
198	388	F-16-2	00074	包合層	鉄製器	片断	12.9	7.7	1.2	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG237	器内付着目録	88042	
198	389	F-16-2	00075	包合層	鉄製器	片断	622.5	2.2	—	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG238	器内付着目録、器内付着目録(器内付着目録)	88043	
198	390	F-15-1-2	00076	包合層	鉄製器	片断	15.0	8.0	2.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG239	内装目録	88044	
198	391	F-15-3	00077	包合層	鉄製器	片断	—	7.4	12.2	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG240	内装目録	88045	
198	392	F-15-3	00078	包合層	鉄製器	片断	8.4	—	12.7	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG241	—	88046	
198	393	F-15-26 包合	00079	包合層	鉄製器	片断	19.4	—	42.7	楕圆形	片	表	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	CG242	平リソ、クマ、炭質(器内付着目録)	88047		
198	394	F-16	00080	包合層	鉄製器	片断	21.1	—	171.8	楕圆形	片	裏	コウロケテ	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	CG243	内装目録(器内付着目録、器内付着目録)	88048	
198	395	F-16-1	00081	包合層	鉄製器	片断	12.0	—	12.1	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG244	器内付着目録	88049	
198	396	F-16-1	00082	包合層	鉄製器	片断	15.0	8.0	3.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG245	内装目録	88050	
198	397	F-16-1	00083	包合層	鉄製器	片断	12.7	8.0	4.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG246	器内付着目録	88051	
198	398	F-16-2	00084	包合層	鉄製器	片断	—	8.2	15.5	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG247	器内付着目録	88052	
198	399	F-15-3	00085	包合層	鉄製器	片断	12.8	8.0	4.2	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG248	内装目録	88053	
198	400	F-15-3 F-16-1	00086	包合層	鉄製器	片断	7.8	—	13.5	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG249	内装目録	88054	
198	401	F-16-1	00087	包合層	鉄製器	片断	—	8.2	13.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、器内へ 付着して	CG250	器内付着目録、器内付着目録(器内付着目録)	88055	
198	402	F-15-26 包合	00088	包合層	鉄製器	片断	—	16.0	114.4	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG251	器内付着目録、器内付着目録(器内付着目録)	88056	
198	403	F-15-2 包合	00089	包合層	鉄製器	片断	—	11.0	11.4	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ、平リソ 目、クマ、ハツ	CG252	—	内装目録(器内付着目録、器内付着目録)	88057
198	404	F-16-4	00090	包合層	鉄製器	片断	12.0	—	11.0	楕圆形	片	表	コウロケテ	コウロケテ	CG253	器内付着目録	88058	
198	405	F-15 包合	00091	包合層	鉄製器	片断	16.4	—	13.0	楕圆形	片	表	ハツ、平リ 目、クマ、ハツ	CG254	器内付着目録、器内付着目録(器内付着目録)	88059		

第31表 G地区 Ⅲ-2面出土土器類観察表5

調査年度	番号	グランド	出土層	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	内径外径	取手	底径	内径外径	取手	内径外径	取手	注	図号 (寸法)	写真番号
198	302	F-24	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	35.1	-	33.7	アープ	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	237	青褐色土層	青1302	
198	303	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	21.9	-	19.9	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	210	青褐色土層、及び赤褐色土層(赤褐色土)	青1303		
198	302	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.8	26.6	3.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ、赤土	214	黒褐色土層	青1302		
198	303	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	18.3	5.6	4.6	底	7	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	202	赤褐色土	青1303		
198	304	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	18.5	5.4	4.5	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	210	赤褐色土層、赤褐色土	青1304		
198	305	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.8	5.1	5.6	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層、赤土	青1305		
198	306	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	7.6	0.6	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1306		
198	307	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	5.6	0.2	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1307		
198	308	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	8.4	0.6	底	7	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1308		
198	309	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	9.4	0.9	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	202	赤褐色土層	青1309		
198	300	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	40.4	40.1	0.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層、赤褐色土層・黒土層	青1300		
198	301	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.3	9.7	4.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1301		
198	302	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	8.1	0.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1302		
198	303	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	8.1	0.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1303		
198	304	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	30.5	8.4	3.1	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1304		
198	305	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.7	5.2	4.6	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1305		
198	306	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	39.1	40.1	0.9	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1306		
198	307	F-24-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.6	9.7	4.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1307		
198	308	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	8.1	0.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1308		
198	309	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	30.7	8.3	3.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1309		
198	310	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.3	7.4	3.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1310		
198	311	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.1	7.2	4.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1311		
198	312	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.1	7.2	4.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1312		
198	313	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	30.5	8.0	3.8	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1313		
198	314	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.6	8.6	4.0	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1314		
198	315	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.8	7.4	3.6	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1315		
198	316	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.6	5.4	3.7	底	7	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	218	赤褐色土層、赤褐色土層	青1316		
198	317	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.3	7.2	3.8	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1317		
198	318	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.3	7.4	3.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1318		
198	319	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.7	8.4	3.7	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1319		
198	320	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.1	7.0	4.3	底	6	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	218	赤褐色土層	青1320		
198	321	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.3	8.7	3.8	底	7	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	218	赤褐色土層、赤褐色土層	青1321		
198	322	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.3	8.4	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1322		
198	323	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.6	9.4	3.9	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1323		
198	324	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.8	8.2	4.4	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1324		
198	325	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.8	8.0	3.8	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1325		
198	326	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	9.4	0.5	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1326		
198	327	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.8	8.4	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1327		
198	328	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.3	8.6	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1328		
198	329	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.6	8.4	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1329		
198	330	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	32.6	8.4	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1330		
198	331	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.8	8.1	4.0	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1331		
198	332	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	31.4	8.4	3.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1332		
198	333	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	-	0.8	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	-	赤褐色土層(F上)	青1333		
198	334	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	38.4	11.6	2.7	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1334		
198	335	F-26-2	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	-	13.1	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	-	赤褐色土層(F上)	青1335		
198	336	F-26-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	33.5	-	14.1	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	203	赤褐色土層	青1336		
198	337	F-24-1	灰層(Ⅰ)(青・黒炭層・赤褐色土)	片流器	片流	-	-	10.5	底	底	底	コシロナタ	コシロナタ、器紐へつり器紐付ナタ	-	赤褐色土層	青1337		

第32表 G地区 第三Ⅱ-面出土土器類観形表6

注：1. | 以降の数量は推定値。

観形番号	器名	フニツト	出土遺構	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	内容物	内面装飾	取手	底底	内面形状	外面形状	内面図	底面図	遺跡名	層位	数量	備考	
138	507	7-23	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	22.0	-	17.2	銅線	黒色	有	底	コウロコフ	コウロコフ、ナデ	無	無	無	無	無	内環状土器、内面環状文、外環状文、口縁部有底文、取手付(赤土)	507046
138	508	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	22.0	-	18.2	銅線	黒色	有	底	コウロコフ	コウロコフ、赤土	無	無	無	無	無	口縁部有底文	507048
138	509	7-24-3	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	22.0	-	19.3	銅線	黒色	有	底	コウロコフ	コウロコフ	無	無	無	無	無	内環状土器、深灰色土、内面環状文	507050
138	510	7-24-4、7-25	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	20.0	-	19.7	銅線	黒色	有	底	有	両内側	有	有	有	有	有	両内側有底文、取手付(赤土)	507052
138	511	7-24-5	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	26.5	-	21.0	銅線	黒色	有	底	有	両内側	有	有	有	有	有	両内側有底文、取手付(赤土)	507054
138	512	7-24-1	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	20.0	-	19.6	銅線	黒色	有	底	有	両内側	有	有	有	有	有	両内側有底文、取手付(赤土)	507056
140	513	7-21-24	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	19.3	-	18.1	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ、有底	無	無	有	有	ナデ土器、有底	513048
140	514	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	19.8	-	19.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	514048
140	515	7-24-3	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	19.8	-	18.1	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	515047
140	516	7-24-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	18.8	-	17.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	516047
140	517	7-24-5	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	18.8	-	17.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	517047
140	518	7-24-1	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	15.3	-	15.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	518046
140	519	7-25-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.7	-	16.0	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ、有底	無	無	有	有	ナデ土器、有底	519045
140	520	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	16.0	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	520045
140	521	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	521045
140	522	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	522045
140	523	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	523045
140	524	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	524045
140	525	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	525045
140	526	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	526045
140	527	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	527045
140	528	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	528045
140	529	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	529045
140	530	7-24-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	530045
140	531	7-26	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.7	-	15.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	531045
140	532	7-26-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.7	-	16.4	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	532045
140	533	7-25-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	17.4	8.5	13.6	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	533045
140	534	7-25-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	17.7	-	13.4	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	534045
140	535	7-26	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	15.1	8.6	11.4	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	535045
140	536	7-26-1	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	15.3	-	14.5	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	536045
140	537	7-22	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	15.3	7.4	11.9	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	537045
140	538	7-26-1-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	15.7	-	13.7	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	538045
140	539	7-25-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.2	-	12.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	539045
140	540	7-26-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.2	-	11.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	540045
140	541	7-25-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	16.6	-	11.1	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	541045
140	542	7-24	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	17.8	8.6	13.8	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	542045
140	543	7-25-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	17.8	-	13.5	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	543045
140	544	7-25-3	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	12.0	-	11.3	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	544045
140	545	7-25	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	21.2	-	18.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	545045
140	546	7-25-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	21.2	-	18.2	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	546045
140	547	7-25-3	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	21.8	-	18.3	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	547045
140	548	7-15-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	21.8	-	15.6	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	548045
140	549	7-26-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	21.9	-	18.4	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	549045
140	550	7-25-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	18.9	-	15.0	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	550045
140	551	7-26-4	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	19.14	-	15.6	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	551045
140	552	7-25-2	縄文期(Ⅲ)内環状土器(黒色土)	縄文期	瓶	19.2	-	14.3	銅線	黒色	有	底	有	ナデ	ナデ	無	無	有	有	ナデ土器	552045

第33表 G地区 Ⅱ-2面出土土器類観察表7

注：1) 注目の番号を示す。

器名	番号	フリット状	土質	器種	用途	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内底片数	内底片形	胎土	外底片数	外底片形	透射色	備考	調査 年度
161	603	F-03-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	21.9	-	15.4	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明、厚み3mm	08010
162	604	F-03-5	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	25.4	-	20.1	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08020
163	605	F-03-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	18.9	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08030
164	606	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	22.9	-	22.8	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08040
165	607	F-04	粘赤帯+1層 パーズェエ	白砂土質 縁部	甕	25.3	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08050
166	608	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	22.9	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08070
167	609	F-03-1	粘赤帯+1層 パーズェエ	白砂土質 縁部	甕	20.9	-	18.2	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08080
168	610	F-01-1-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	17.0	-	16.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08090
169	611	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	18.1	-	18.2	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08100
170	612	F-03-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	18.0	-	18.7	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08110
171	613	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	15.8	-	18.2	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08120
172	614	F-02-4 F-02-2	粘赤帯+1層 パーズェエ	黒砂土質 縁部	甕	17.1	-	18.1	縦割	ナ	黒	0	0	0	黒砂土質	08130
173	615	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	12.8	-	18.2	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08140
174	616	F-03-5	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	12.8	-	18.8	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08150
175	617	F-03-5	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	12.0	-	18.2	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08160
176	618	F-03-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	11.4	-	18.7	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08170
177	619	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	12.7	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08180
178	620	F-03-1	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	10.1	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08190
179	621	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	8.2	13.5	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08200
180	622	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	8.0	13.1	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08210
181	623	F-03-1	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	5.8	12.4	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08220
182	624	F-03-4	粘赤帯+1層 パーズェエ	白砂土質 縁部	甕	-	5.1	12.2	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08230
183	625	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	7.4	12.7	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08240
184	626	F-03-2	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	5.8	13.5	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08250
185	627	F-03-5	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	6.0	13.3	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08260
186	628	F-03-4	粘赤帯+1層 パーズェエ	白砂土質 縁部	甕	20.2	-	13.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08270
187	629	F-03-1-3 ナ	粘赤帯(赤帯層ナシ)	白砂土質 縁部	甕	28.8	-	18.0	縦割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08280
188	630	F-03-1	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	22.8	-	18.6	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08290
189	631	F-03-1-3	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	22.9	-	17.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08300
190	632	F-03-1-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	22.0	-	18.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08310
191	633	F-03-4	粘赤帯	白砂土質 縁部	甕	-	13.4	13.1	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08320
192	634	F-03-2	粘赤帯+1層 パーズェエ	黒砂土質 縁部	甕	20.2	-	18.5	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08330
193	635	F-03-2 F-03-3	粘赤帯	黒砂土質 縁部	甕	-	12.9	胎割	ナ	黒	ナ	ナ	ナ	ナ	赤帯不明	08340
194	636	F-03-2	粘赤帯+中灰土質	黒砂土質 縁部	甕	-	13.0	胎割	ナ	黒	ハク	ハク	ハク	ハク	赤帯不明	08350
195	637	F-03-2	粘赤帯	黒砂土質 縁部	甕	-	13.2	胎割	ナ	黒	ナ	ナ	ナ	ナ	赤帯不明	08360
196	638	F-03	赤・褐色(赤褐色土質)	黒砂土質 縁部	甕	-	14.9	胎割	ナ	黒	ハク	ナ	ハク	ハク	赤帯不明	08370
197	639	F-03-1-4	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	17.8	底径 13.6	12.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08380
198	640	F-03-1	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	11.8	-	14.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08390
199	641	F-03-1-2	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	16.2	-	13.1	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08400
200	642	F-03-1-3	粘赤帯+中灰土質	赤帯層ナシ	中層	18.8	底径 13.5	12.7	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08410
201	643	F-03-5	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.2	-	12.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08420
202	644	F-03-2	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	16.1	底径 10.2	12.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08430
203	645	F-03-1-3	粘赤帯(赤帯層ナシ)	赤帯層ナシ	中層	18.2	底径 11.4	12.7	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08440
204	646	F-03-1-4	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.4	底径 12.1	12.6	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08450
205	647	F-03	赤・褐色(赤褐色土質)	赤帯層ナシ	中層	18.8	-	14.9	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08460
206	648	F-03-4 F-03-2	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.6	-	1.5	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08470
207	649	F-03-1	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.4	-	13.7	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08480
208	650	F-04-3-0-0	緑・褐色(赤褐色土質)	赤帯層ナシ	中層	14.2	底径 9.5	11.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08490
209	651	F-03-1	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.8	底径 9.9	11.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08500
210	652	F-03-1-3	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.6	底径 11.0	11.6	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08510
211	653	F-03-1-3	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	14.2	底径 9.6	11.4	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08520
212	654	F-03-2	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.4	底径 9.1	12.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08530
213	655	F-03-2	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	15.2	底径 9.1	11.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08540
214	656	F-03-2 F-03-3	粘赤帯	赤帯層ナシ	中層	18.4	-	11.0	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08550
215	657	F-03-1-2	粘赤帯+中灰土質	赤帯層ナシ	中層	22.8	-	13.2	胎割	ナ	黒	0	0	0	白砂土質、胎土不明	08560

第35表 G地区 Ⅱ-2面出土土器類観察表9

調査 番号	グリッドNo.	出土遺構	種 類	器 種	口徑 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径 (cm)	外径 (cm)	取 手	内 蓋	外 蓋	図柄	備 考	所 出		
															層 位	層 別	
147	303	F-19	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約24	7.0	7.0	約6	約8	取	取	取	取	取	取	取	取
147	302	F-19-2	弥生前期	弥生前期	約21	7.0	7.0	約6	約8	取	取	取	取	取	取	取	取
147	301	F-15-1	弥生前期	弥生前期	約22	7.4	7.4	約6	約8	取	取	取	取	取	取	取	取
147	304	F-16	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約14	7.4	7.4	約6	約8	取	取	取	取	取	取	取	取
147	303	F-19-2	弥生前期	弥生前期	約13	7.0	7.0	約6	約8	取	取	取	取	取	取	取	取
147	306	F-16-4	弥生前期	弥生前期	-	8.0	13.0	約8	約10	取	取	取	取	取	取	取	取
147	307	F-16-3	弥生前期	弥生前期	-	8.0	13.0	約8	約10	取	取	取	取	取	取	取	取
147	305	F-15-2	弥生前期	弥生前期	-	7.4	13.0	約8	約10	取	取	取	取	取	取	取	取
147	309	F-19-1	弥生前期	弥生前期	-	-	-	-	-	取	取	取	取	取	取	取	取
147	710	F-11-1	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約28	約11	約11	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	711	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約24	約10	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	712	F-15-19	弥生前期	弥生前期	約21	約11	約11	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	713	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約18	約10	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	714	F-19-4	弥生前期	弥生前期	約18	約9	約9	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	715	F-19-5	弥生前期	弥生前期	約18	約9	約9	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	716	F-15-1	弥生前期	弥生前期	約18	約10	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	717	F-19-4-1	弥生前期	弥生前期	約12	約8	約8	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	718	F-16、F-18	弥生前期	弥生前期	-	-	-	-	-	取	取	取	取	取	取	取	取
147	719	F-19-2	弥生前期	弥生前期	-	約10	約13	約8	約10	取	取	取	取	取	取	取	取
147	300	F-19-1、F-19-2	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約22	約10	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	308	F-19-1	弥生前期、弥生前期	弥生前期	約20	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	307	F-19-2	弥生前期	弥生前期	約19	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	302	F-19-1	弥生前期	弥生前期	約18	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	304	F-15-19	弥生前期、弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	-	約10	約13	約8	約10	取	取	取	取	取	取	取	取
147	305	F-19-2	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	303	F-19-1	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	301	F-15-19	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	306	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	309	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	300	F-19-1	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	302	F-19-1	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	307	F-15-19	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	308	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取
147	309	F-15-2	弥生前期	弥生前期	約12	-	約10	約7	約9	取	取	取	取	取	取	取	取

第36表 G地区 Ⅱ-2面出土土器製品観察表

調査 番号	グリッドNo.	出土遺構	種 類	器 種	最大径 (cm)	最小径 (cm)	底径 (cm)	取手 (cm)	備 考	備 考	調査 番号
140	818	F-1-28	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約21	約8	約8	-	取	取	取
140	817	F-15	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約20	約8	約8	-	取	取	取
140	818	-	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約20	約8	約8	-	取	取	取
140	819	F-24-1	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約20	約8	約8	-	取	取	取
140	820	F-15	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約20	約8	約8	-	取	取	取
140	821	F-15	弥生前期(Ⅰ)環(ハース土)	弥生前期	約20	約8	約8	-	取	取	取

第5節 第Ⅳ面の遺構と遺物（第150～218図、第37～50表）

1 概 要(第150-151図)

G地区第Ⅳ面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。河跡3001(古)北側(E～G-25～27区)では第Ⅳ面遺物包含層を第Ⅲ-2面直下で確認したのに対して、河跡3001(古)南側(E～G-20～23区)については第Ⅳ面包含層の上層に土砂堆積層(土石流災害3)が存在した。ベース面(遺構検出面)の標高は、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で14.26m(第Ⅲ-1面ベース面より-28cm)、G-23区杭脇で15.35m(同-30cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で15.30m(同-45cm、第Ⅲ-2面ベース面より-20cm)、北端(F-26区杭西8m)で14.50m(同-45cm・-25cm)、北東端(F-27区杭脇)で14.90m(同-30cm・-20cm)を測る。調査区のベース面の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.4m、26ライン(南東-北西方向)が約0.8mを測り、第Ⅲ-1面と同様に南西及び北西側に向けて緩やかに傾斜する地形となる。

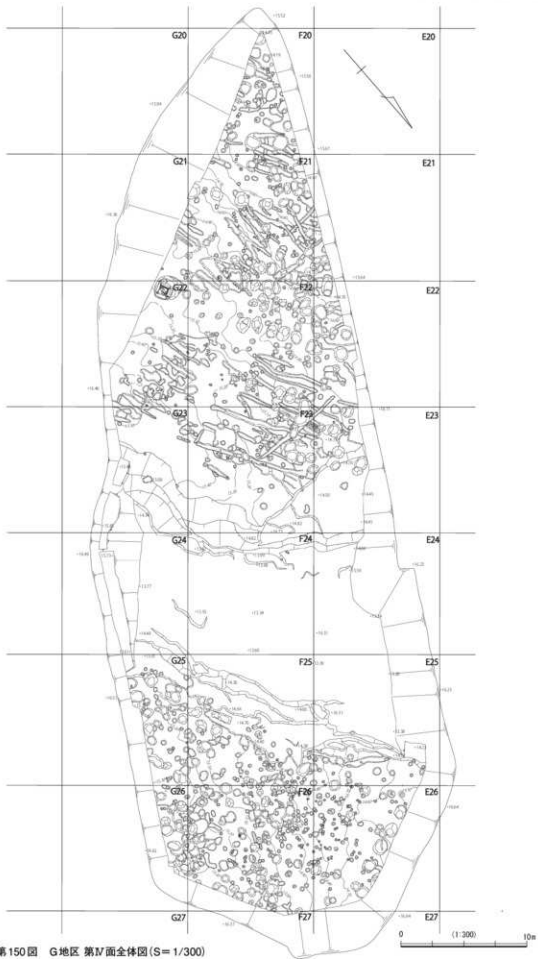
調査の結果、7世紀末～平安時代前期に属する掘立柱建物(SB)26棟、柵列(SA)7基、井戸(SE)1基、耕作に伴う小溝(SD)約60条、多数のピットの他、貼床をもつ遺構1基(SX4001)、整地作業の痕跡3ヶ所(SX4002～04)等を確認しており、相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸は本遺跡の一連の調査で初めての事例となる。本地区の遺構密度は、A～D・F地区から連続して高い状況を維持しており、本遺跡の最盛期の集落規模は北東-南西方向で約300mに及び、さらに、周辺地では四柳ミッコ遺跡、大町ゴンジョリ遺跡等で集落が営まれる。なお、本地区の集落・耕作域は、第4節で述べたとおり、10世紀初頭(VI期)に発生した河跡3001(古)を本流とする土石流災害で大部分が被覆される。遺物は、墨書土器や円面硯・転用硯を含む多数の須恵器・土師器の他、製塩土器、土釜、砥石、鉄滓、フイゴの羽口、鉄刀、柱根や、井戸からの杵材に加えて祭祀的要素をみいだせる斎串、錘柄、横櫓等が出土した。

2 掘立柱建物(SB)・柵列(SA)(遺構:第163～190図、第37表、遺物:第191～193・196図)

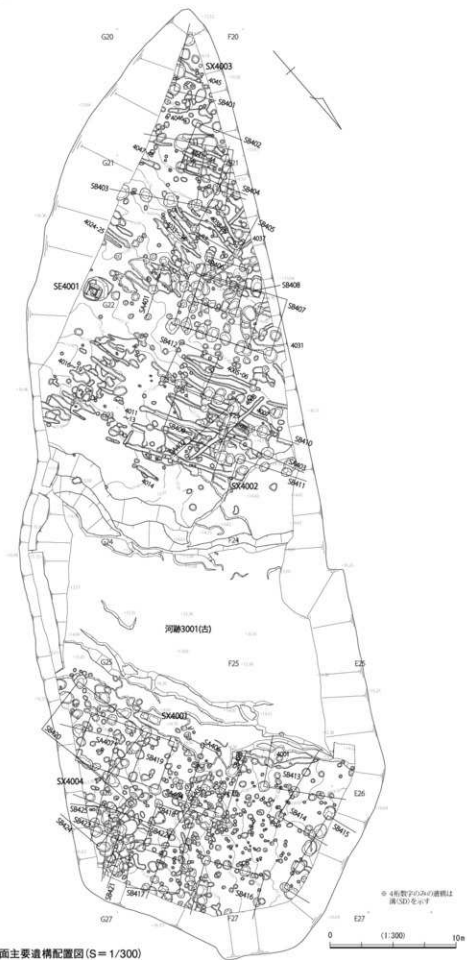
復元した掘立柱建物は26棟であり(第151図・第37表)、SB401～412が河跡3001(古)南側に、SB413～426が河跡3001(古)北側に分布する。調査区中央が河跡3001(古)で分断されることに加えて、調査区外に延びる建物が多いことから、規模を把握できた棟数は限られる。

分布状況からみれば、F地区北端～G地区南半に建物が展開しない空閑地が存在する可能性が高いことが指摘できる。グリッド番号でいえばG-20～23区を中心とし、A～D・F地区で連続的に建物が展開する状況とは異なる。その空閑地にSE4001が掘られる点で示唆的である。

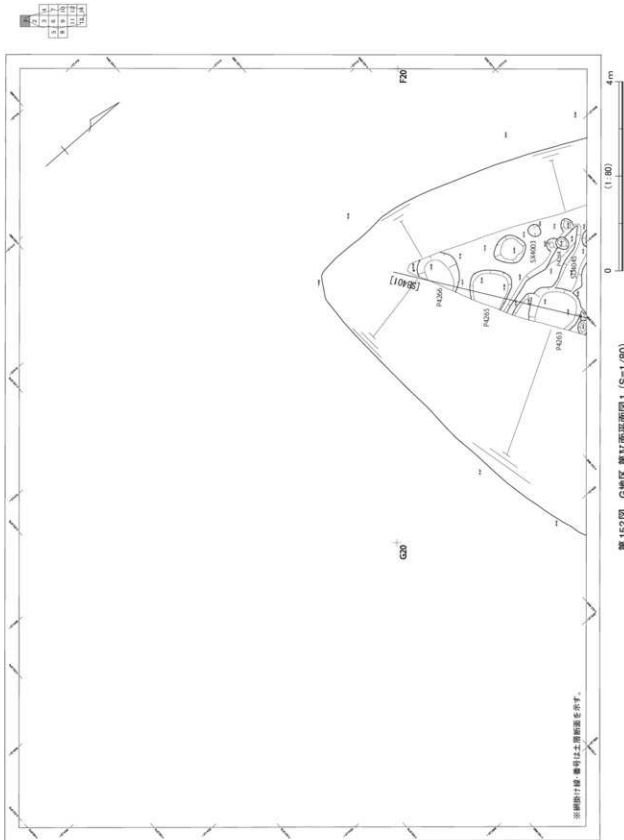
建物構造が把握できる21棟は全て側柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は存在しない。この様相は、A～F地区第Ⅳ面の様相と共通しており、A～F地区の調査で確認した総柱構造をもつ建物は、倉庫と考えられるC地区第Ⅳ面SB3(2×2間、8.4m)に限られる。G地区の建物規模は、身舎の床面積で30m前後が3棟(SB407・408・420)、15～18mが3棟(SB409・417・419)、15m未満が3棟(SB406・412・418)となる他、大型の掘方をもつSB403が40mを超える建物となる可能性をもつ。各建物の柱穴掘方の平面形態は、不整形形を基調としており、方形を指向する掘方は比較的少ない。また、他地区と同様に柱根はほとんど遺存せず、ベース土が掘りやすい土質であること等から、大部分の柱は抜き取られたと考えられる。柱根が出土したピットは、SA405柱穴P4067、掘立柱建物に復元できなかったP4205、P4225に限られる。柱穴からは、比較的多くの須恵器、土師器片が出土しており、SB408柱穴出土の須恵器壺(第192図813)は埋納された可能性をもつ。

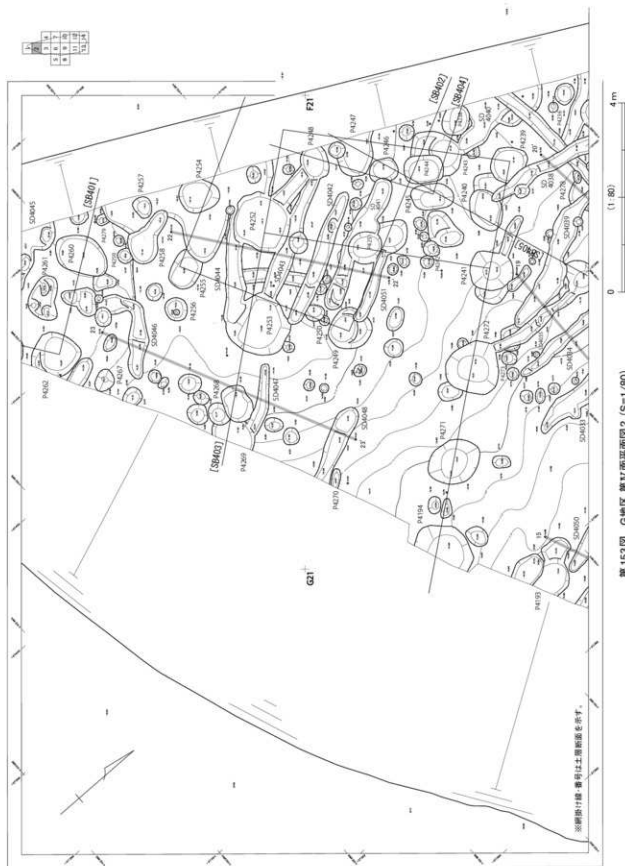


第150図 G地区 第17面全体図(S=1/300)

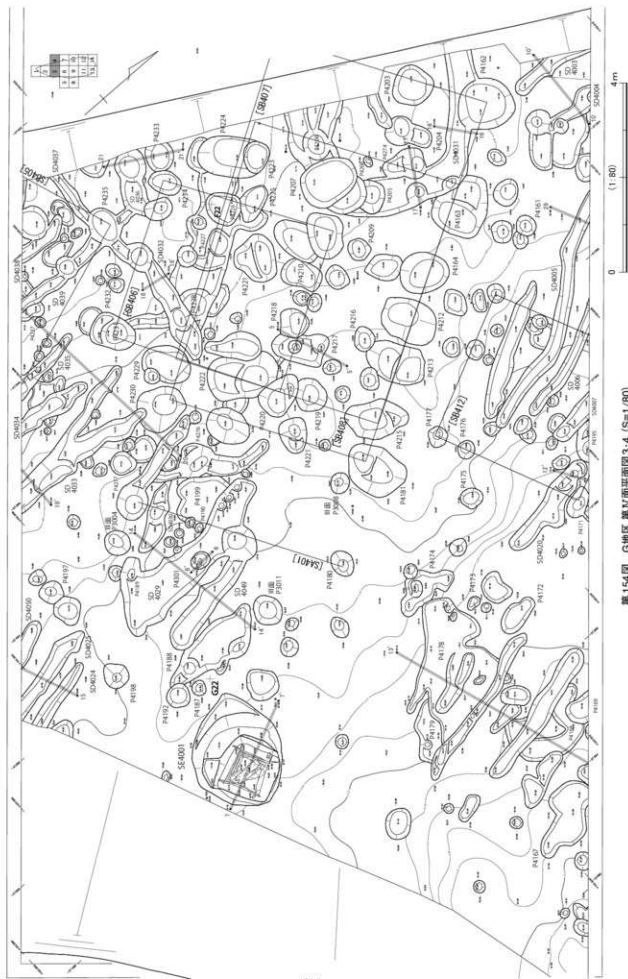


第151図 G地区 第IV面主要遺構配置図(S=1/300)

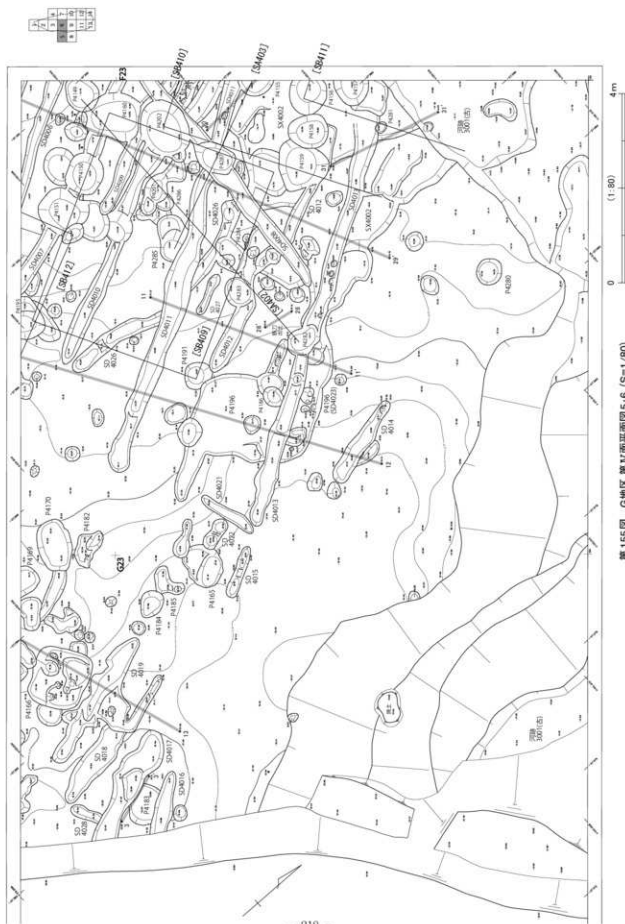




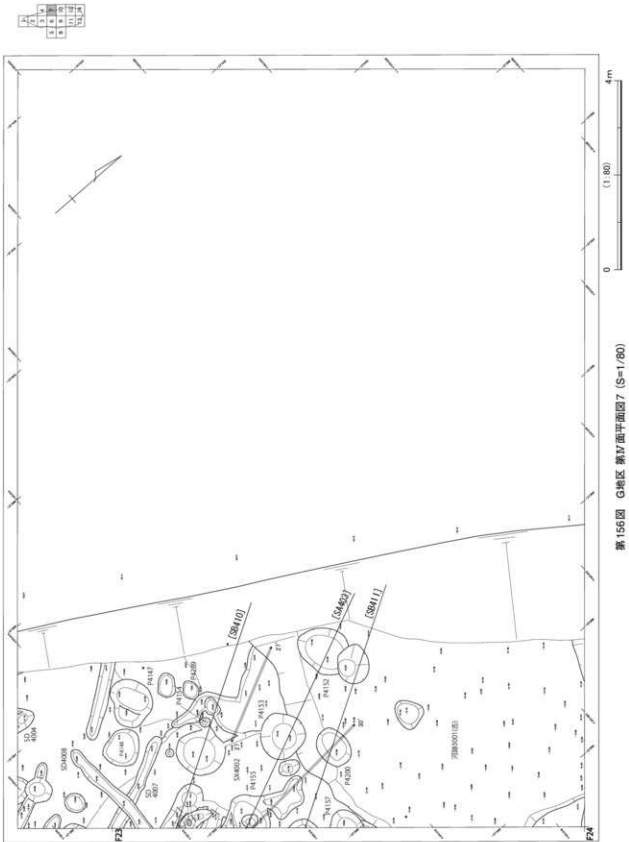
第153図 G地区 第IV面平面図2 (S=1/80)



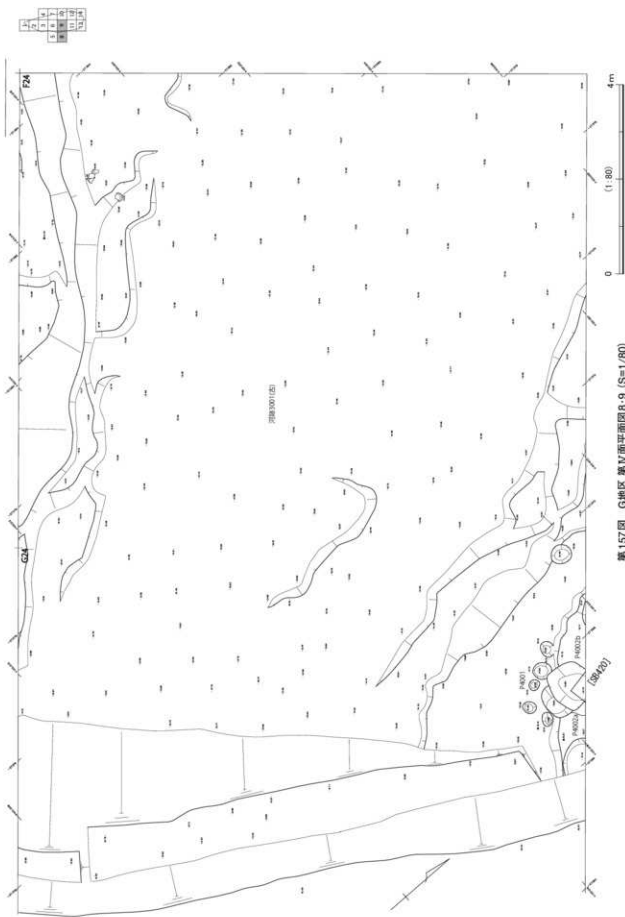
第154図 G地区 第IV遺平画図3-4 (S=1/80)



第155図 G地区 第IV面平面図5-6 (S=1/80)

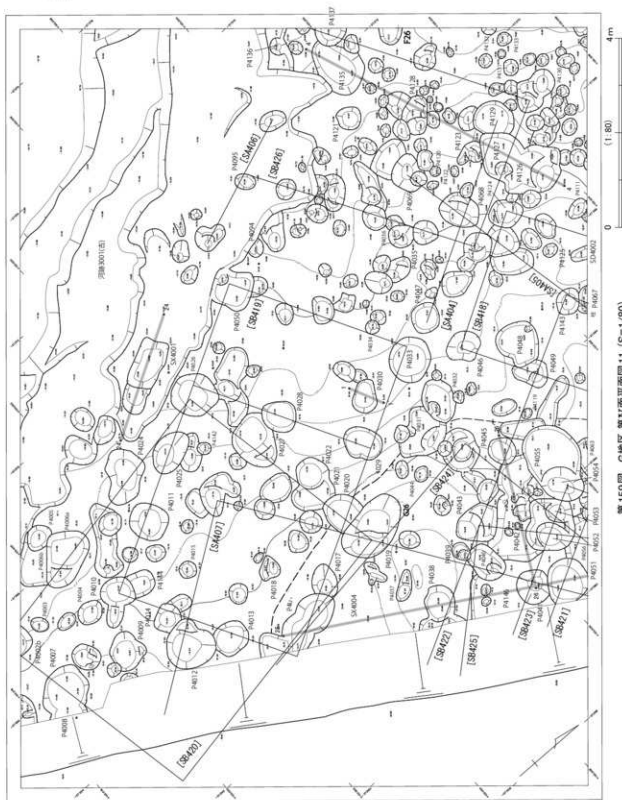


第156図 G地区 第Ⅲ面平面図7 (S=1/80)

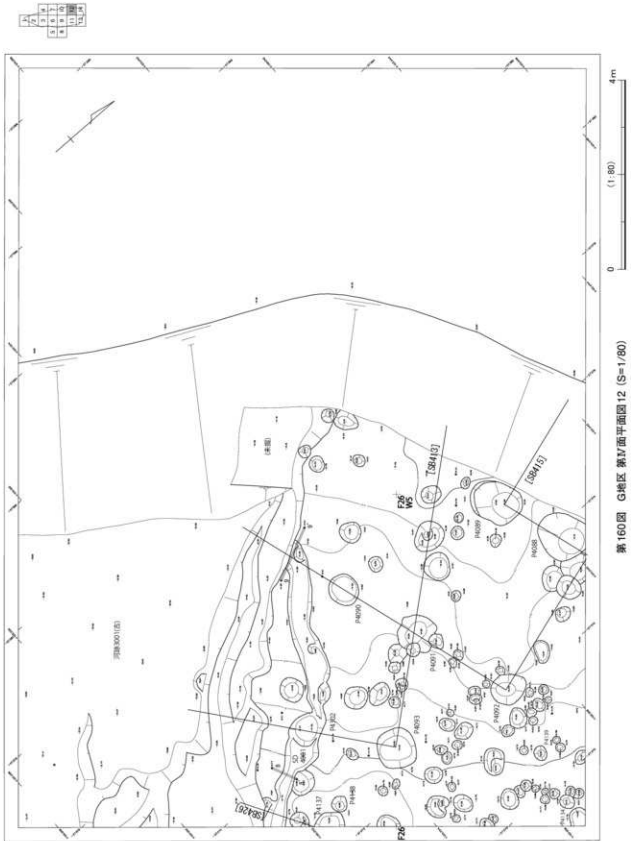


第157図 G地区 第IV面平面図B-9 (S=1/80)



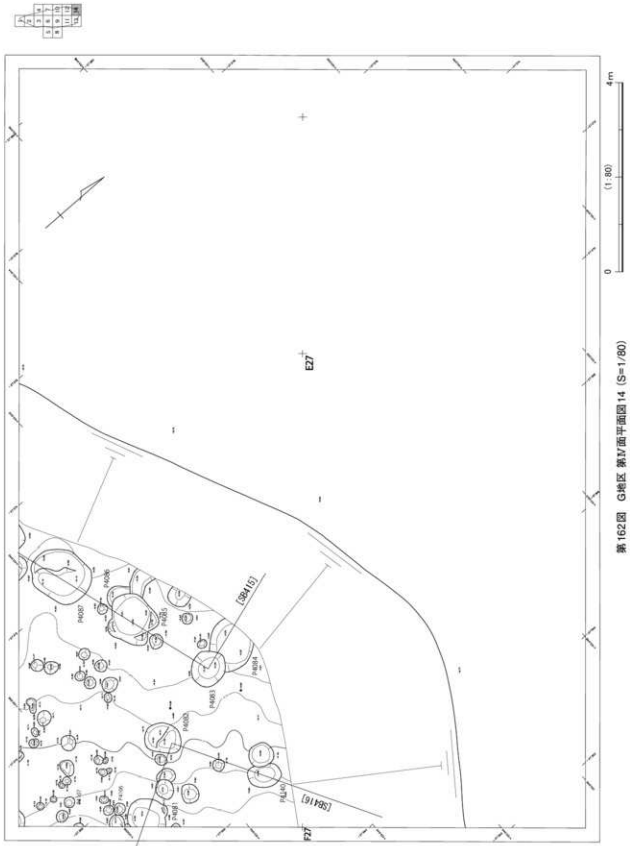


第155図 G地区 第四面平面図11 (S=1/80)





第161図 G地区 第IV面平面図13 (S=1/80)



第162図 G地区 第IV面平面図14 (S=1/80)

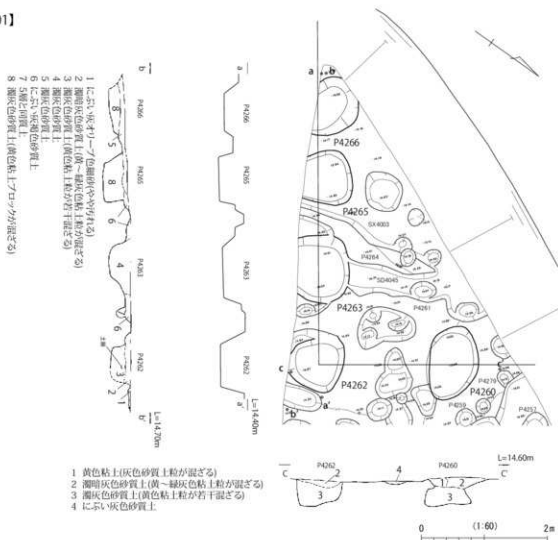
なお、現地調査で明確な平面プランを認識できた建物に加え、調査区壁際の側柱建物については整理段階で復元をおこなった。そのため、建物となりうるか不安を残すものについては、各遺構の説明に付記した他、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、柱穴と考えられるピットが一定数存在することから、存在した掘立柱建物数はさらに多くなるものと推定している。

SB401(遺構：第163図、遺物：第191図)

F-20区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側に延びる。主軸方位はN35°Wを示し、桁行1間以上(2.10m～)×梁間3間以上(4.15m～)を測る。桁行の柱間寸法2.10mに対して、梁間の柱間寸法は1.25m・1.45mとかなり短く、柱筋の通りは比較的よい。柱穴の平面形態は、不整形円形または不整形円形を主体とし、P4260が長径120cm、短径75cm、深さ42cmを測るように、径80～110cmの大型の掘方をもつ。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、下層から黄色粘土粒が混ざる濁灰色砂質土、黄～緑灰色粘土粒が混ざる暗灰色砂質土を基本に、P4260では埋土に黄色粘土粒を混ぜる。柱根、柱根痕跡とも確認できず、遺構の切り合い関係から柱穴P4265・66が整地土SX4003より、柱穴P4263がSD4045より、それぞれ古く位置付けられる。

柱穴出土遺物のうち、P4262・63出土の第191図793～797の非口クロ土師器を図化、うち793～796は甕である。古墳時代後期の甕793は球形形を呈し、細かい単位の手ハケ原体を用いる。794は口径約

【SB401】



第163図 G地区 第IV面SB401平面図・土層断面図(S=1/60)

第37表 G地区 第IV面SB-SA規模等一覧表

※ 軒高寸法は北端から南端寸法、または東端から西端寸法の順に記述。()は測定。

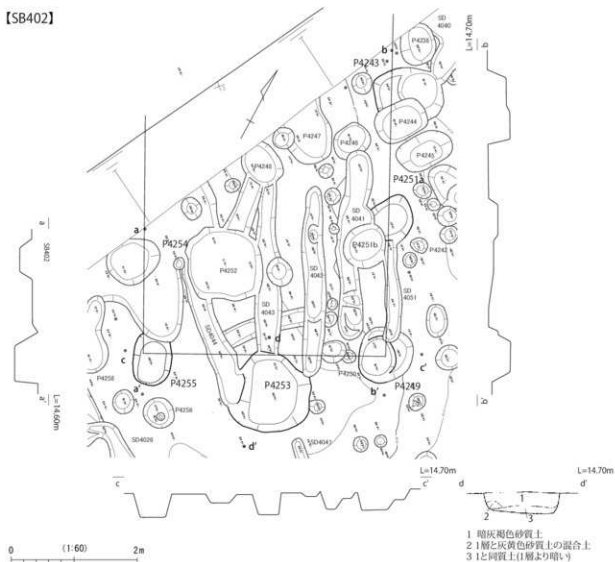
番地区	区分	アリオド名	柱構造	柱配置	坪面積 (㎡)	軒行長 (m)	軒行間寸法 (m)	軒行長 (m)	軒行間寸法 (m)	主要方位	柱下の 平面形状	柱間の 形状	備 考
SB001	163	F-20	鋼柱	1×3-2間	87	210	(北東側) 230+	135	(南東側) 1.65+1.65+1.25+	N35°E	不要内角	なし	P205-6645X4000より古。 P2084520405より古。
SB002	164	E-F-20-21	鋼柱	2×2間	156	140	(東側) +205+205	200	(南東側) 130+195	N25°E	不要内角 隅入角方向	なし	車道は軒下通らない。P22544 5+20403+22540より古。 P219-4234より古(築40)が新。
SB003	165	F-20-21	鋼柱	3×2間 (北東側)	205 (401+)	615 (863+)	(東側) 1230+240+240+240+	480	(北東側) 240+240	N38°E	不要内角 輪方向	なし	P22049250208より古。P2253 4924943より古。P2253車道 がP202より古(築35)が新。
SB004	166	E-F-20-21	鋼柱	1×1-1間	45	260	(南東側) 260+	175	(北東側) +1.75 36.3209	N58°E 36.3209	不要内角 不要内角	なし	P22049250404+41.2より古。 P22049250409より古。
SB005	166	E-21 F-21-22	鋼柱	2×1間	160	480	(南側) 2.60+2.60+	375	(東側) 375	N20°E	不要内角	なし	P21049250408より古。
SB006	167	E-F-21-22	鋼柱	1×2間	130	370	370	350	(南西側)1.75+1.75 (北東側)1.00+1.00	N31.5°E	不要内角	なし	P4200+5007(P4202より新。 SD402より古。
SB007	168	E-22 F-21-22	鋼柱	3×2間	317	705	(東側) 2.30+2.60+2.60	450	(南西側) 1.50+1.50+1.50	N31.5°E	不要内角 不要内角	なし	SD406より古。P41625SD401 より古。
SB008	169	E-22 F-21-22	鋼柱	3×2間	276	615	2.05+2.05+2.05	450	150+130+150	N31.5°E	不要内角	なし	P22049250403より古。
SB009	170	F-22-23	鋼柱	2×1間	169	465	230+235	360	365	N28°E	不要内角 不要内角	なし	P1460-420345X4002より古。 北東側柱はP13016/P1302より古。 SD407-12.2より古。
SB010	171	E-F-23	鋼柱	1×1-1間	78	300	(東側) +300	260	(西側) +260	N30°E	輪方向 不要内角	なし	軒梁は軒下としない。P2083001 (古)で構築。SD409より古。 SD409-12.2より古。
SB011	173	E-F-23	鋼柱	2×1間	68	300	+195+195	175	+1.75	N28°E	不要内角	なし	P2083001(古)で構築。SA402 より古。SD409より古。
SB012	173	F-22	鋼柱	1×1間	102	330	330	325	325	N26°E	不要内角	なし	ほぼ正方形。北東側がP208609 (P420)より古。P427が SD402より古。
SB013	174	E-25-26	鋼柱	2×1-1間	85	450	(北東側) +225+225	190	(南東側) 190+	N30°E	不要内角 不要内角	なし	南側柱はP208100/P408より古。 P20810と築。P402SD403 より古。
SB014	175	E-25-26	鋼柱	1×2-1間	114	245 (245+)	(東側) 245 (+2.60)	400	(南西側) +1.85+2.15	N42°E	輪方向 不要内角	なし	南側柱はP208100で構築。P20814 と築。SD411より古。
SB015	176	E-26	鋼柱	4×2間	-	600	(南側) 1.65+1.65+1.65+1.65	-	-	N27°E	不要内角	なし	
SB016	177	E-F-26-27	鋼柱	1×3間	110	230	(東側) +230	480	(南西側) 1.60+1.60+1.60	N57.5°E	不要内角	なし	
SB017	178	F-26	鋼柱	3×2間	151	420	(南西側) 1.80+1.80+1.80	360	(北西側) 1.80+1.80	N42°E	不要内角 輪方向	なし	SD406、SD418より古。 SD402より古。
SB018	179	F-26	鋼柱	1×1間	114	370	370	340	340	N58.5°E	不要内角	なし	SD417、SA402より古。
SB019	180	E-25 F-25-26	鋼柱	3×2-2間 (北東側)	166 (27.6)	530 (690)	(西側) (2.25)+1.50+1.50+1.55	400	(東側) 1.50+1.50+1.30 (北東側) 2.00+2.00	N26°E	不要内角 不要内角	なし	SD401より古。P4019/P4020 (P4019より新。)
SB020	181	F-G-25	鋼柱	3×2間	309	645	(西側) 2.15+2.15+2.15	480	(北東側) 1.60+1.60+1.60	N10°E	不要内角 不要内角	なし	SD404より古。P4019/P4019 (P4020より新。)
SB021	182	F-G-26	鋼柱	1×1-1間	5.6	240	(南西側) 2.80+	235	(北西側) +2.35	N28°E	不要内角	なし	軒梁は不附。SD421より新。 SD404より古。
SB022	183	F-G-26	鋼柱	1×2-1間	268	720	(南西側) 1.80+1.80+1.80+1.80+	400	(北西側) +2.00+2.00	N27.5°E	不要内角 輪方向	なし	SA402より新。SD404より古。
SB023	184	F-G-26	鋼柱	1×1-1間	51	235	(北東側) +2.35	220	(南西側) 2.20+	N28°E	不要内角 不要内角	なし	軒梁は不附。SD404、SD421 より古。
SB024	185	F-26 G-25-26	鋼柱	2×2-1間	223	550	(西側) 2.75+2.75+	425	(北東側) 1.80+2.65	N45°E	不要内角 不要内角	なし	車道間の可動橋あり。SD404、 SD420より古。
SB025	186	G-26	鋼柱	1×2間	-	-	-	515	(北東側) 150+165+130	N43°E	不要内角	なし	主軸方向に遮壁物と相連し、建 物でない可動橋。
SB026	187	E-25 F-25-26	鋼柱	2×2間	151	600	(北西側) 2.40+2.60 (南東側) 2.30+2.60+	320	(北東側) 1.65+1.65	N60°E	不要内角	なし	平面ラワン若干見られ。SA405 より古。
SA001	189	F-21-22	-	2間	-	450	2.25+2.25	-	-	N58.5°E	不要内角	なし	SD406と本棟が同一
SA002	188	F-22-23	-	3間	-	600	2.30+2.10+2.50	-	-	N98°E	不要内角 不要内角	なし	P146025SD409/P4160より古。 SD402、SD409等の小溝より古。
SA003	188	E-F-23	-	4間	-	800	+200+200+200+200	-	-	N21.0°E	不要内角 輪方向	なし	SD402、SD406より古
SA004	189	F-26	-	2間	-	460	2.30+2.30	-	-	N30.5°E	不要内角 輪方向	なし	
SA005	189	F-25-26	-	2間	-	480	2.40+2.40	-	-	N77.5°E	不要内角	あり (1層)	P4082は軒梁現存。 SD418-G25-G26より古
SA006	189	F-25	-	2間	-	300	150+150	-	-	N20°E	不要内角	なし	南側柱はP408200(古)で構築
SA007	190	F-25 G-25-26	-	1×2-1間	-	305	305+	610	+3.05+3.05	N35°E 36.3509	不要内角	なし	P4019/P4020(P4020より古。

23cmを測り、口縁部は短く外反する。795は肉厚である。鉢形に近い796は口径16.8cmを測り、口縁部は先細りながら大きく外反する。甌類797は、肉厚な胴部に直線的にのびる幅広の把手を貼り付ける。他にP4260・62・63から非ロクロ土師器甕を主体に、非ロクロ土師器赤彩坩、須恵器坏類等の小片が出土した。

SB402(遺構：第164図、遺物：第191図)

E・F・20・21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-27° Wを示し、桁行2間以上(4.10m-)×梁間2間(3.90m)、床面積15.6㎡以上を測る。桁行の柱間寸法2.05m等間に対して、梁間の柱間寸法は1.95m等間と若干短く、SB403柱穴P4253に切られるため判然としないが梁間の中間柱は柱筋が通らない可能性が高い。柱穴の平面形態は、不整形円形または隅丸長方形を呈し、P4249が径85～90cm、深さ28cm、P4255が長辺80cm、短辺60cm、深さ37cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、ベース土が粒状に混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB403～405と重複し、遺構の切り合い関係からSB402がSB403柱穴P4251bおよびSD4041・51より古く位置付けられる。

【SB402】



第164図 G地区 第IV面SB402平面図・土層断面図 (S=1/60)

柱穴出土遺物のうち、P4254出土のロクロ土師器赤彩塊798、P4249出土の非ロクロ土師器甕799を図化した。798は口径16.6cmを測り、ミガキ調整を施さない。器面には焼成に伴う小剥離が目立ち、Ⅲ期前後に位置付けられる。球形形を呈する甕799は口径19.8cmを測り、胎土に多量の粗砂が混ざる。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4243・49・54からロクロ土師器甕、P4253・54からロクロ土師器赤彩塊、P4243・54から製塩土器の小片が、それぞれ出土した。

SB403(遺構：第165図、遺物：第191図)

E-20・21区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、本地区で検出した中で最大の建物となる可能性が高い。主軸方位はN-38°Wを示し、桁行3間以上(6.15m～)×梁間2間(4.80m)、床面積29.5㎡以上を測る。桁行の柱間寸法は2.05m・2.30m、梁間の柱間寸法は2.40m等間であり、桁行より梁間の柱間寸法を長くとる。柱穴の平面形態は不整形形を呈し、桁行の柱穴が比較的大きい掘方を呈するのに対して、梁間の中間柱穴は一回り小振りの掘方となる。桁行の柱穴P4241が径80～90cm、深さ48cmを、P4253が径130～135cm、深さ37cmを、梁間の柱穴P4251bは径65～70cm、深さ35cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱採取埋土であり、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402・404・405と重複、遺構の切り合い関係からSD4038が柱穴P4239より、SD4043・44が柱穴P4253より、それぞれ新しい他、柱穴P4253土層断面の観察等からSB402よりSB403が新しく位置付けられる。また、北側梁間から2.20m北西側に廂(柱間寸法1.60m等間)を復元したが、SB403と柱筋を揃えた別の建物の一部となる可能性を残す。柱穴の平面形態は不整形形を呈し、P4239が径75cm、深さ33cmを測るとおり、SB403身舎部分より一回り小振りの掘方をもつ。柱穴覆土は、暗灰色土が混ざる灰色砂質土を基本とする。

柱穴出土遺物のうち、P4253出土の800・801、P4241出土の802～804を図化した。非ロクロ土師器甕800は口径15.0cmを測り、煮沸に伴う痕跡が明瞭に残る。須恵器杯蓋801は口径15.7cmを測り、回転ヘラ切り後にナデ調整を加えた天井部外面に、小さく「土万呂」と墨書する。また、未図化だが天井部内面にも薄い墨痕が残る。赤彩の非ロクロ土師器甕802・803は口径約13cmを測り、底部外面にケズリ調整を施す。802が内外面ともナデ調整で仕上げるのに対して、803は摩滅のため調整は判然としない。須恵器蓋類804は口径約20cmを測る大型品であり、口縁端部に内傾した面をもつ。801～803はⅢ～Ⅳ期に位置付けられる。他にP4239・43・51b・53以外の柱穴から非ロクロ土師器甕、P4194・4241・52・71・72から須恵器杯類等の小片が出土した。

SB404(遺構：第166図、遺物：第191図)

E・F-20・21区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、大部分は調査区外北西側に延びる。主軸方位はN-58°Eを示し、桁行1間以上(2.60m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。柱穴の平面形態は、不整形形または不整形楕円形を呈し、P4245が長径85cm、短径50cm、深さ32cmを測る。柱穴覆土は、暗黄～黄色粘土粒が多く混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とした特徴的な柱採取埋土となる。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402・403・405と重複、遺構の切り合い関係からSD4040・43・44より古く位置付けられる。

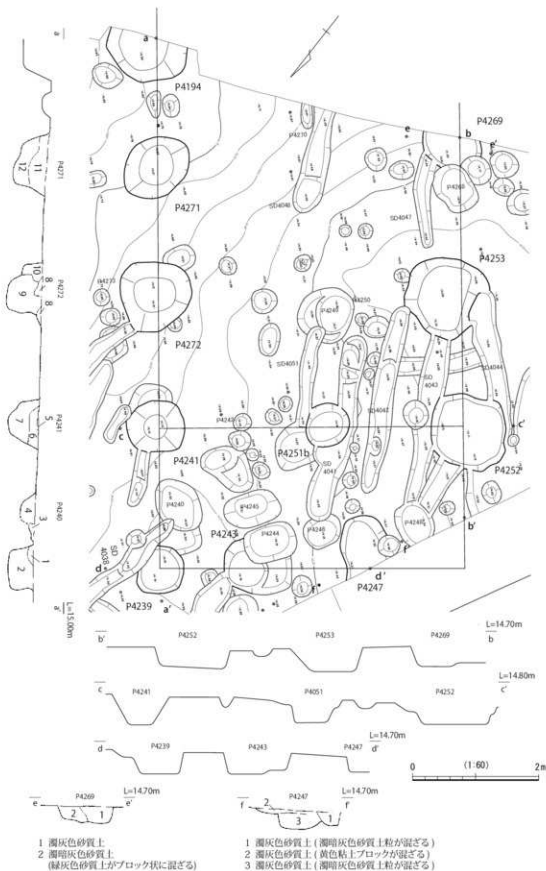
柱穴P4238から出土した須恵器有台杯805は、低い台部を貼り付け、Ⅴ₂期～Ⅵ期に位置付けられる。他にP4245・48から非ロクロ土師器甕、P4245からロクロ土師器甕、須恵器甕の小片が出土した。

SB405(遺構：第166図、遺物：第196図)

E-21区、F-21・22区で検出し、調査区外西側に延びる。柱筋の通りがよくないこと等から、掘立柱建物とはならない可能性を残す。側柱構造の掘立柱建物とした場合、主軸方位はN-70°Eを示し、桁行2間以上(4.80m～)×梁間1間(3.75m)、床面積18㎡以上を測る。柱穴の平面形態は不整形形を呈し、

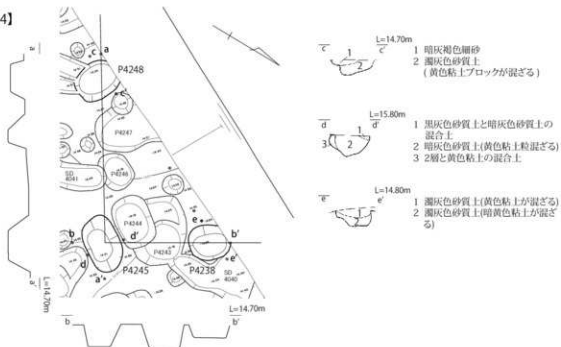
【SB403】

- 1 薄灰色砂質土
- 2 薄灰色砂質土(薄暗灰色砂質土粒が混ざる)
- 3 薄灰色砂質土(緑灰色砂質土がブロック状に混ざる)
- 4 薄灰色砂質土(薄暗灰色砂質土粒が混ざる)
- 5 薄暗灰色砂質土
- 6 2層と同一土
- 7 薄灰色砂質土と薄灰色砂質土の混合土
- 8 薄暗灰色砂質土
- 9 暗灰色砂質土
- 10 9層と緑灰色砂質土が混ざる
- 11 12層と暗灰色砂質土(12層がブロック状に混ざる)
- 12 9層と同一土

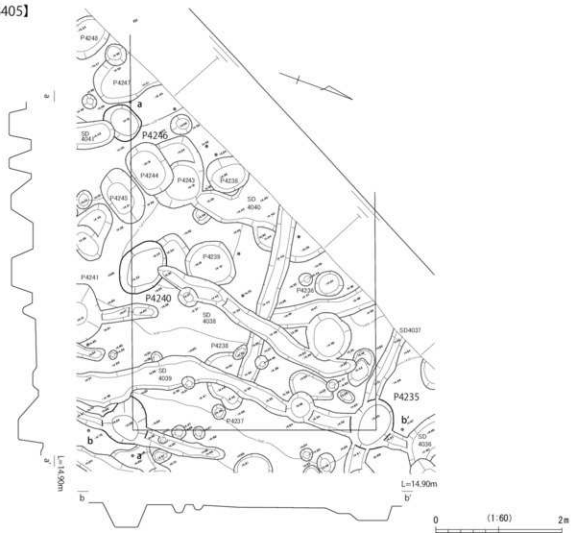


第165図 G地区 第IV面SB403平面図・土層断面図 (S=1/60)

[SB404]



[SB405]



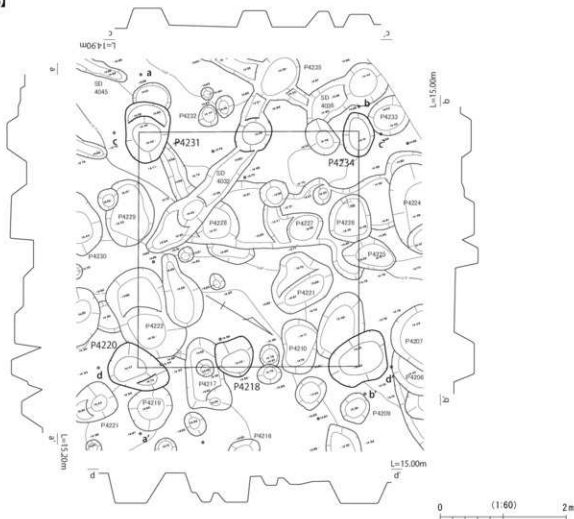
第166図 G地区 第IV画SB404-405平面図・土層断面図 (S=1/60)

P4240が径70～90cm、深さ34cm、P4246が径50～60cm、深さ32cmを測る。柱穴覆土は、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調とした柱抜取埋土である。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB402～404と重複、遺構の切り合い関係は柱穴P4240がSD4038より、南東隅柱穴がSD4035より、それぞれ古く位置付けられる。第196図859は、P4235出土のロクロ土師器甕で、8世紀後半代と考えられる。口径19.1cmを測り、胴部内面の調整はハケ状を呈する。他にP4235から非ロクロ土師器甕、P4240から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕、裂塩土器等、P4246から須恵器瓶の小片が出土した。

SB406(遺構：第167図、遺物：第191図)

E・F-21・22区で検出した。正方形を指向する側柱構造の小型獨立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はSB407・408と同じくN-31.5°Wを示し、桁行1間(3.70m)×梁間2間(3.50m)、床面積13.0㎡を測る。桁行の柱間寸法は長く、梁間の柱間寸法は南西辺が1.75m等間であるのに対して、北東辺は1.60m・1.90mとなる。柱穴の平面形態は、比較的大振りな不整楕円形を呈し、P4220が長径95cm、短径60cm、深さ47cmを、P4231が長径95cm、短径65cm、深さ31cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、濁黒灰～暗灰色砂質土を基調とし、ベース土や黄色粘土粒が混ざる柱穴も存在する。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB407・408と重複する。遺構の切り合い関係から柱穴P4220がSB407柱穴P4220より新しく、南西側梁間の中間柱穴がSD4032より古く位置付けられる。

[SB406]



第167図 G地区 第IV面SB406平面図・断面図 (S=1/60)

出土遺物のうち、柱穴P4220出土の須恵器無台坏806を図化した。806は口径11.9cm、器高3.0cmを測り、体部は内湾気味に立ち上がる。完形に近いことから、柱抜き時に埋納された可能性をもち、Ⅴ₂期に位置付けられる。他にP4220・31・34から非ロクロ土師器甕、P4220・31からロクロ土師器甕、須恵器坏類の小片が、それぞれ出土した。

SB407(遺構：第168図、遺物：第191・192図)

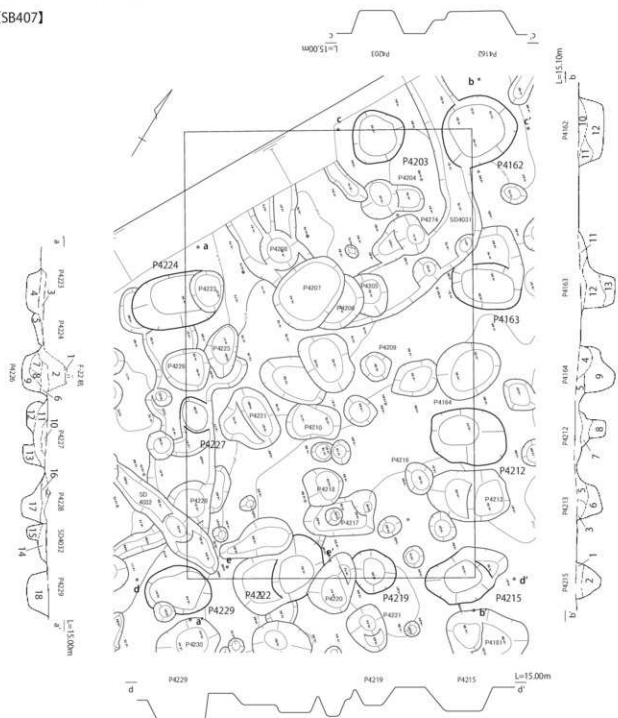
E-22区、F-21・22区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、一部が調査区外北西側に延びる。主軸方位はSB406・408と同じくN-31.5°Wを示し、桁行3間(7.05m)×梁間3間(4.50m)、床面積31.7㎡を測る。桁行の柱間寸法は、2.50m+2.05m+2.50mと、中間の柱間寸法が短い点に特徴をもつ。また、梁間の柱間寸法は1.50m等間と、桁行の柱間寸法に比して短い。柱穴の平面形態は、桁行が建物主軸方向とはほぼ直交する大振りな不整楕円形を呈するのに対して、梁間は小振りな不整円形を呈する。桁行の柱穴の形状・規模から、柱抜きに係わる掘方の可能性が高い。桁行の柱穴P4212が長径115cm、短径90cm、深さ42cmを、P4229が長径105cm、短径75cm、深さ30cmを、梁間の柱穴P4203が径80cm、深さ35cmを、それぞれ測る。柱穴覆土は柱抜き取埋土と考えられ、濁暗灰～灰色砂質土を基調とし、ベース土や黄色粘土粒が混ざる柱穴も存在する。柱根は遺存せず、建物敷地はSB406・408と重複、遺構の切り合い関係からSB407がSB406、SD4031より古く位置付けられる。

出土遺物は比較的多く、柱穴P4224出土の第191図807・808、柱穴P4203出土の第192図810、SB408柱穴と重複する柱穴P4163出土の第191図809および第192図811・812、またSB407柱穴P4224とSB408柱穴P4226からの破片が接合した813を図化した。ロクロ土師器807は口径14.7cmを測り、鉢類と考えられる。外面にわずかに平行叩き痕が残り、平坦に仕上げた口縁端部内端を嚙状に小さくのぼす。須恵器坏蓋808は天井部内面が平滑で墨痕が残ることから、硯に転用したと考えられる。ロクロ土師器甕片809は、内面に放射状文当て具痕、外面に彫り幅が広い平行叩き痕が残り、胎土中に粗砂・礫がほとんど混ざらない。須恵器甕810は口径17.1cmを測り、口縁端部は大きく外反する。胎土から羽咋窯跡群産と考えられる。須恵器坏蓋811は口径13.1cmを測り、口縁端部はほとんど目立たない。808と同様にⅣ₂期に位置付けられる。赤彩を施したロクロ土師器坏類蓋812は、口径18.2cm、器高3.9cmを測り、胎土に用いた複数種の土の練り込みが不十分であるため、渦巻き状に粘土粒子の流れが視認できる。大型の須恵器短頸壺813は口径17.8cmを測り、内面上半に液状物が垂れた暗灰色の痕跡が付着する。他に、P4212・19以外の柱穴から非ロクロ土師器甕を主体に、比較的多くの土師器、須恵器の小片が出土した。

SB408・SA401(遺構：第169図、遺物：第191・192図)

SB408は、E-22区、F-21・22区で検出した側柱構造の掘立柱建物である。柱筋の通りはあまりよくなく、主軸方位はSB406・407と同じくN-31.5°Wを示す。桁行3間(6.15m)×梁間3間(4.50m)、床面積27.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行が2.05m等間、梁間が1.50m等間と、重複するSB407より桁行長は短い。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、桁行の柱穴に比して梁間の柱穴が若干小振りとなる。桁行の柱穴P4164が長径100cm、短径90cm、深さ50cmを、梁間の柱穴P4208が径55～65cm、深さ26cmを、それぞれ測る。柱穴覆土は柱抜き取埋土と考えられ、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基調とし、P4208・4226等東側の柱穴覆土には黄色粘土粒が混ざる。柱根は出土せず、明瞭な柱根痕跡も確認できなかった。建物敷地はSB406・407と重複、遺構の切り合い関係から柱穴P4208がSD4031より古く位置付けられる。出土遺物のうち、第191図809、第192図811～813は前述のとおりである。柱穴P4228出土のロクロ土師器無台坏814は口径14.1cm、器高4.9cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。内面にわずかにミガキ調整が残る他、外面下半の広い範囲に回転ケズリ調整を加える。Ⅲ

[SB407]



(a-a'土層)

- 1 明茶色砂
- 2 薄暗褐色砂質土(第III面包含層)
- 3 薄暗灰色砂質土
- 4 薄暗灰色砂質土(黄色粘土ブロック多く混ざる)
- 5 灰色砂質土(炭化物が混ざる)
- 6 薄灰色砂質土(第IV面包含層)
- 7 灰色砂質土(8層がブロック状に混ざる)
- 8 暗灰色砂質土
- 9 4層と同質土
- 10 薄暗褐色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)
- 11 薄暗緑褐色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 12 淡灰色砂質土
- 13 灰色砂質土(炭粒が若干混ざる)
- 14 灰褐色砂質土
- 15 明灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 16 薄黄灰色土(黄色粘土が主体)
- 17 灰色砂質土(20cm大の石が混ざる)
- 18 暗灰色砂質土

(b-b'土層)

- 1 薄茶灰色粗砂と砂粒の混合土
- 2 薄灰色砂質土
- 3 にぶい黄色粘土
- 4 灰色砂質土(20cm大の石が混ざる)
- 5 薄暗灰色砂質土
- 6 薄暗褐色砂質土(ベース土が粒状に混ざる)
- 7 薄灰色砂質土
- 8 薄暗褐色砂質土
- 9 灰色砂質土とベース土の混合土
- 10 薄暗褐色砂質土(炭粒、2層がブロック状に混ざる)
- 11 薄灰色砂質土(1層、黄色粘土ブロックが少量混ざる)
- 12 灰色砂質土(黄色粘土がブロック状に混ざる)
- 13 6層と同質土(6層より暗く、しまりない)
[ベース土] 灰緑色砂質土

(e-e'土層)

- 1 薄暗褐色砂質土(第IV面包含層)
- 2 黄～灰褐色薄粘土層(焼けている)
- 3 薄灰色砂質土と灰黄色砂質土の混合土

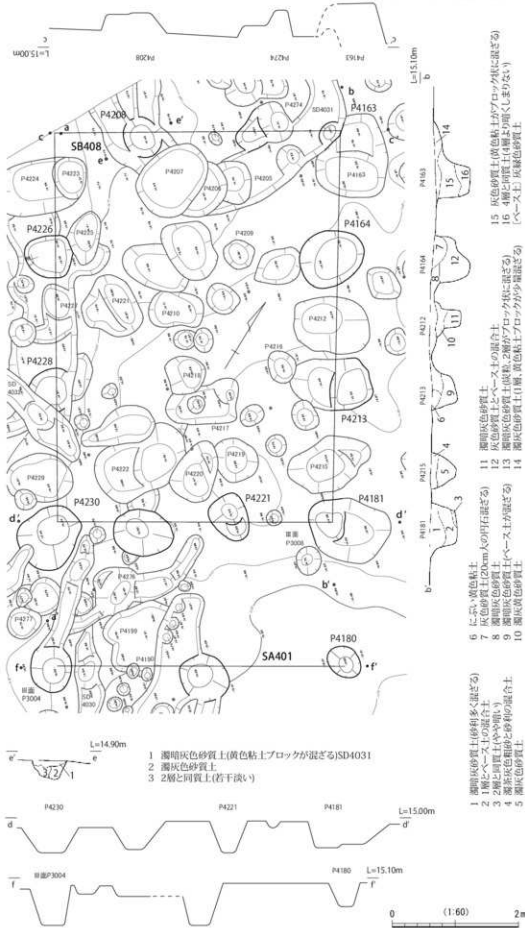
第168図 G地区 第IV面SB407平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SB408-SA401】

- 1 暗茶色砂
- 2 濃暗灰色砂質土(硬面直交層)
- 3 濃暗灰色砂質土
- 4 濃暗灰色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)
- 5 灰色砂質土(硬化物が混ざる)
- 6 濃暗灰色砂質土(硬面直交層)
- 7 灰色砂質土(硬面直交層)

- 8 暗灰色砂質土
- 9 4層と同質土
- 10 濃暗灰色砂質土(黄色粘土ブロックが混ざる)
- 11 濃暗灰色砂質土(硬面直交層)
- 12 淡灰色砂質土
- 13 灰色砂質土(硬面直交層)
- 14 灰色砂質土
- 15 暗灰色砂質土(硬面直交層)
- 16 濃暗灰色砂質土(粘土ブロック)

- 17 灰色砂質土(20cm×の石混ざる)
- 18 暗灰色砂質土
- 19 暗灰色砂質土(硬面直交層)
- 20 灰色砂質土(硬面直交層)
- 21 濃暗灰色砂質土

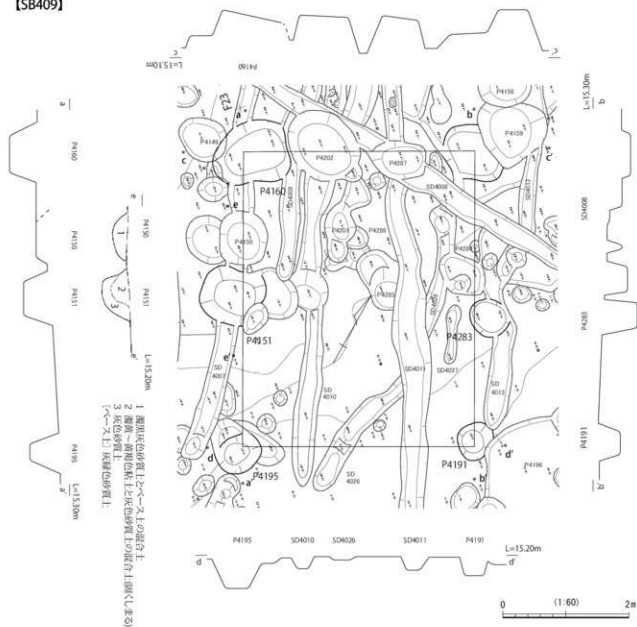


第169図 G地区 第IV面SB408・SA401平面図・土層断面図 (S=1/60)

期前後に位置付けられ、完形に近いことから柱抜き時に埋納された可能性が高い。柱穴P4213出土の須恵器坏身818は口径11.9cm、器高4.0cmを測り、底部外面に粗い回転ケズリ調整を加える。胎土から鳥屋窯跡群産と考えられ、I₁期に位置付けられる。他にP4163・4208・21・30以外の各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4164・4213・28から須恵器甕、P4213・4228からロクロ土師器甕の小片が、それぞれ出土した。

SA401は、SB408南側梁間より2.25m南東側に並行する2間の柱列(柱間寸法2.25m等間)であり、東端柱穴P4180がSB408の桁行柱筋と若干ずれるが、SB408と関連する欄列と考えた。柱穴の平面形態は不整形を呈し、P4180で径45~55cm、深さ38cmを測る。覆土は濁灰~暗灰色砂質土であり、SD4029・49より古く位置付けられる。未図化だが、P4180から非ロクロ土師器甕、須恵器短頸壺の小片が出土した。

[SB409]



第170図 G地区 第IV面SB409平面図・土層断面図(S=1/60)

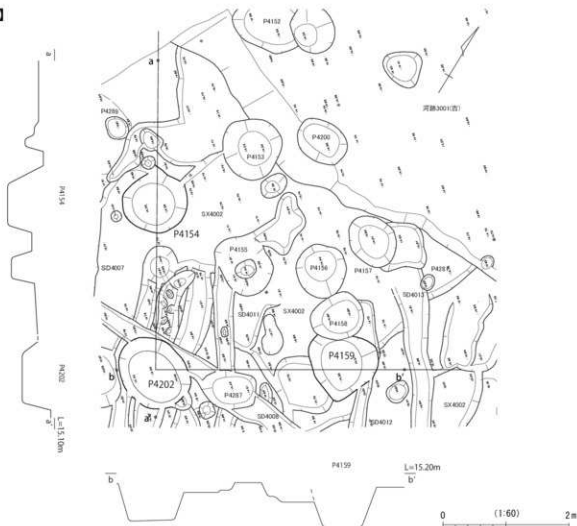
SB409(遺構：第170図、遺物：第192図)

F・22・23区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、柱間寸法、柱筋の通りとも若干乱れる。主軸方位はN-28°Wを示し、桁行2間(4.65m)×梁間1間(3.65m)、床面積16.9㎡を測る。桁行の柱間寸法は2.50m、2.15mと、梁間の柱間寸法を含めてSB405と近似した数値を示す。柱穴の平面形態は不整形または不整形を呈し、西側桁行の掘方が大きい傾向をもつ。P4151が径85～95cm、深さ37cmを、P4191が径55～60cm、深さ31cmをそれぞれ測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基調に、P4151では上層に濁黄～黄褐色粘土を混ぜた土を充填して固く埋め戻す。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB410・412、SA402・403と重複する。また、遺構の切り合い関係から柱穴P4160・4283が整地土SX4002より、北端隅柱穴がSB410柱穴P4159より、柱穴P4151・60がSD4007より、柱穴P4283・91がSD4012より、それぞれ古く位置付けられる。

柱穴P4151から出土した非ロクロ土師器甕815は口径21.6cmを測り、胴部内外面でハケの原体が異なる。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4151からV期以降のロクロ土師器甕の小片が出土した。

SB410(遺構：第171図、遺物：第192・193図)

E・F・23区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、建物北側は河跡3001(古)で損壊する。主

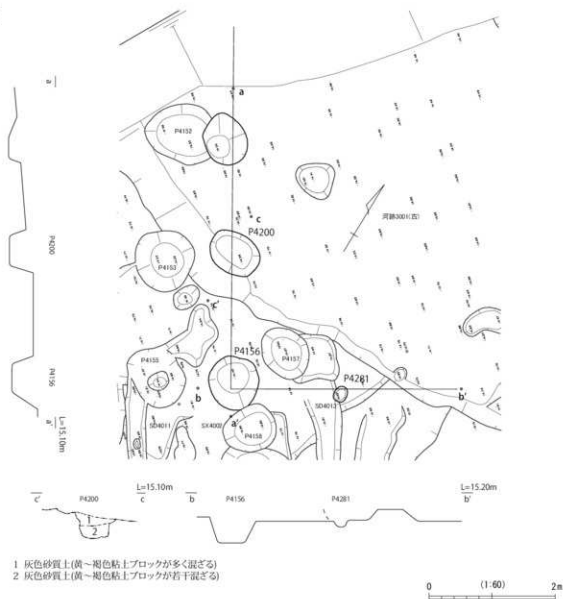
[SB410]

第171図 G地区 第IV面SB410平面図・断面図 (S=1/60)

軸方位はN-30° Wを示し、柱間寸法は西辺が2.60m、南辺が3.00mを測る。柱穴の平面形態は略円形または不整楕円形を呈し、P4154が径90～105cm、深さ40cm、P4202が長径120cm、短径100cm、深さ45cmと、比較的大振りである。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB409・411、SA402・403と重複する。また、遺構の切り合い関係から整地土SX4002、SD4009～12、河跡3001(古)より古く、SB409より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、柱穴P4159出土の非ロクロ土師器皿816、柱穴P4202出土の須恵器横瓶817・821を図化した。内黒外赤の皿816は口径14.5cm、器高1.9cmを測り、外面がハケ調整を基本とするのに対して、内面に丁寧なミガキ調整を加える。Ⅲ期前後に位置付けられる。817の破片は、P4073、SD4010からも出土する。内面および閉塞円盤を同心円叩きで整形し、外面側面に径約9.5cmの焼き台上で堅緻に横位で焼成された痕跡が残る。第193図821の破片はSD3548からも出土し、817と同じく横位に据え置いて焼成が行われる。他に、各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4202からV期以降の須恵器坏蓋、無

[SB411]



第172図 G地区 第IV面SB411平面図・土層断面図(S=1/60)

台盤の小片が、それぞれ出土した。

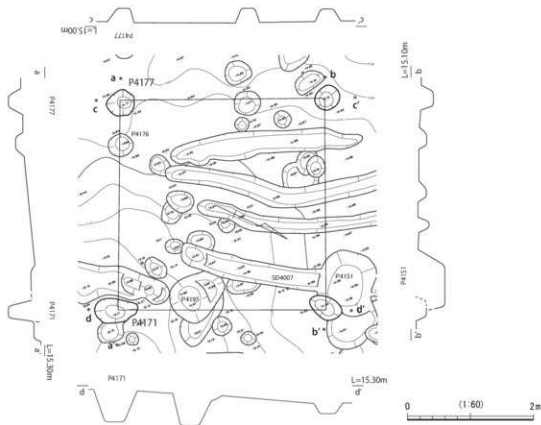
SB411(遺構：第172図)

E・F-23区で検出した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、北・東側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-29°Wを示し、桁行2間以上(3.90m～)×梁間1間以上(1.75m～)を測る。柱穴の平面形態は不整形形を呈し、梁行のP4200が径65～85cm、深さ55cm、P4156が径80～85cm、深さ40cmを測るのに対して、梁間のP4281は径約20cmと小さく、柱根痕跡のみが残存している可能性をもつ。柱穴覆土は、P4281を除いて柱抜取埋土と考えられ、黄～褐色粘土が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱根は確認できず、建物敷地はSB410、SA403と重複する。また、遺構の切り合い関係からSA403より新しく、整地土SX4002、河跡3001(古)より古く位置付けられる。未図化だが、各柱穴から非ロクロ土師器甕、P4156からロクロ土師器甕、P4200からⅢ期頃のロクロ土師器赤彩碗等が、それぞれ出土した。

SB412(遺構：第173図)

F-22区で検出した1×1間の小規模な掘立柱建物である。主軸方位はN-28°Wを示し、柱間寸法は、南北辺が3.30m・3.35m、東西辺が3.25mを測る。柱穴の平面形態は不整形形を呈し、P4177が径40～45cm、深さ24cm、北側柱穴が径35～50cm、深さ18cmと、比較的小振りな掘方となる。柱穴覆土は、北側2穴が灰色砂質土、南側2穴が濁灰色砂質土を基本とする。柱根は確認できず、建物敷地はSB409と重複する。また、遺構の切り合い関係は、北東隅柱穴がSB409柱穴P4151より新しく、柱穴P4171がSD4020より古く位置付けられる。遺物は、P4171から非ロクロ土師器甕小片が出土したにとどまる。

[SB412]

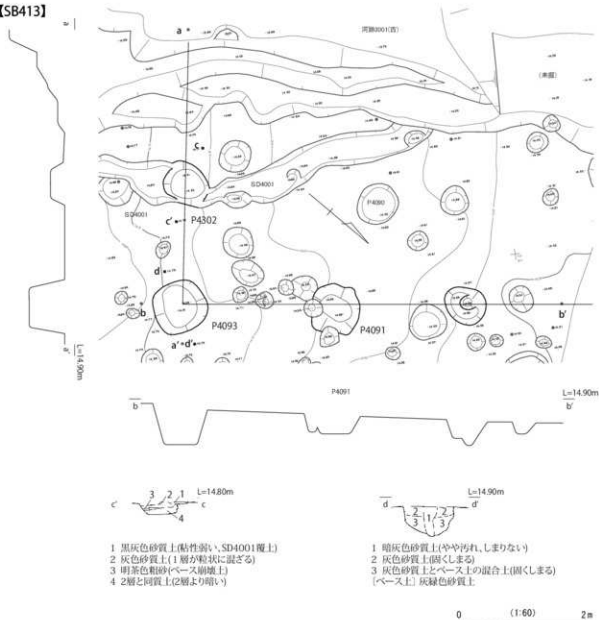


第173図 G地区 第Ⅳ面SB412平面図・断面図 (S=1/60)

SB413(遺構：第174図)

SB413～426は、河跡3001(古)の北側に位置する。SB413は、E-25・26区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北西側に延びる他、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-39°Wを示し、桁行2間以上(4.50m～)×梁間1間以上(1.90m～)を測る。柱間寸法は、桁行が2.25m等間、梁間が1.90mと、桁行と梁間との柱間寸法の差は比較的小さい。柱穴の平面形態は不整形円形または不整形方形を呈し、SB414柱穴と重複するP4091が径80cm、深さ27cm、P4093が一辺80×85cm、深さ48cmとなる。柱穴覆土は、黒灰色砂質土やベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調とする。柱根は確認できず、P4093で確認できた柱根痕跡は径約12cmを測る。遺構の切り合い関係は柱穴P4302がSD4001より古く、建物敷地が重複するSB414との前後関係は不明である。各柱穴からの出土遺物はない。

[SB413]



第174図 G地区 第IV面SB413平面図・土層断面図 (S=1/60)

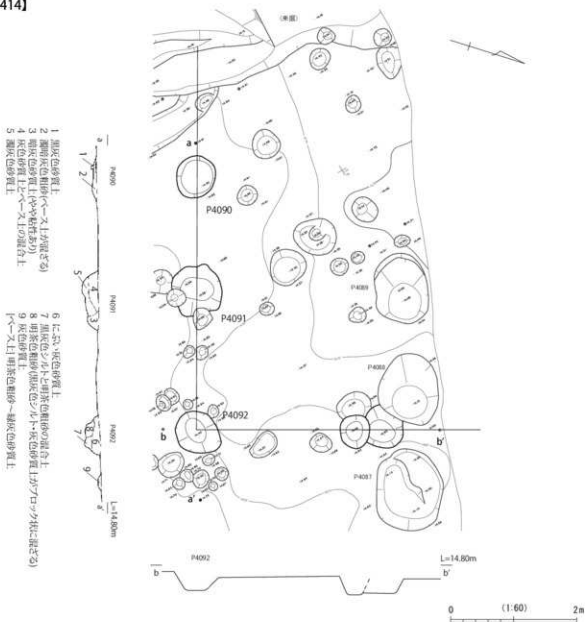
SB414(遺構：第175図)

E-25・26区で検出した桁行1間以上×梁間2間以上の欄柱構造をもつ掘立柱建物で、調査区外北側に延びる他、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-17°Wであり、SB415と近似した方位を示す。桁行の柱穴は、P4088東側に位置する2つのピットのいずれかを想定したが特定できず、柱間寸法は桁行が2.45mまたは2.85m、梁間が1.85m・2.15mとなる。柱穴の平面形態は略円形または不整形を呈し、P4090が径60～70cm、深さ10cm、P4092が径65～70cm、深さ20cmと、検出面からの掘方は比較的浅い。柱穴覆土は、ベース土が混ざる濁略灰～灰色砂質土を基調とする。柱根、柱根痕跡とも確認できず、建物敷地はSB413・415と重複する。P4092から非クロコ土器器片が出土した。

SB415(遺構：第176図、遺物：第192図)

E-26区で検出した欄柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外北側に延びる。主軸方位はN-72°

[SB414]



第175図 G地区 第175面SB414平面図・土層断面図(S=1/60)

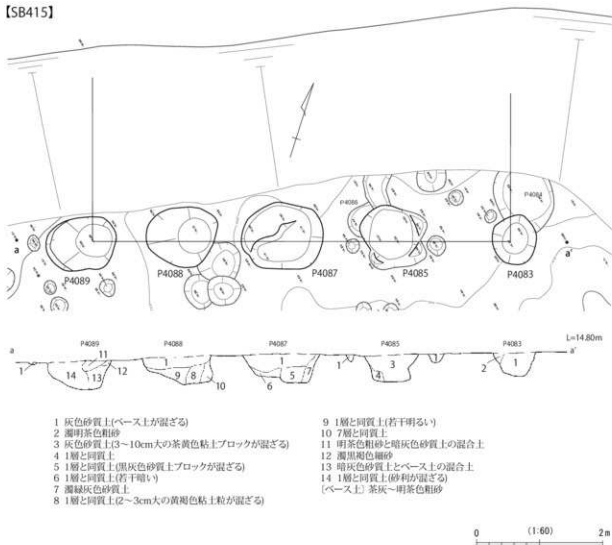
E(N-18° W)を示し、建物敷地が重複するSB414と近似した方位を示す。桁行4間(6.60m、柱間寸法1.65m等間)の建物を復元したが、西隅のP4083の掘方が一回り小さいことから、P4083を別の建物柱穴として梁間3間(4.95m)の建物となる可能性を残す。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4085・87～89が径80～130cm、深さ42～48cmを、P4083が径70～80cm、深さ38cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調に、P4085・88では埋土に粘土を混ぜた土を用いる。柱根は遺存せず、P4088の柱根抜取り痕は径22cmを測る。また、他の建物との重複や柱穴の切り合い関係は確認できない。

出土遺物のうち、P4085出土の819・820を図化した。平底の製塩土器片819は、内面にハケ調整を密に施す。土器器土鍾820は、4mmを超える礫を含めて混和材が多く混ざる。残存重量は、62.4gを量る。他に、P4085・88・89から非ロクロ土器器甕が、P4085からロクロ土器器甕やⅡ₃期の須恵器碗が、P4087から製塩土器が、P4089からⅣ₁期と考えられる須恵器坏蓋の小片が、それぞれ出土した。

SB416(遺構：第177図)

E・F・26・27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外北東側に延びる。主軸方位はN-57.5° Eを示し、桁行1間以上(2.30m～)×梁間3間(4.80m)を測る。梁間の柱間寸法は1.60m等間で、桁行

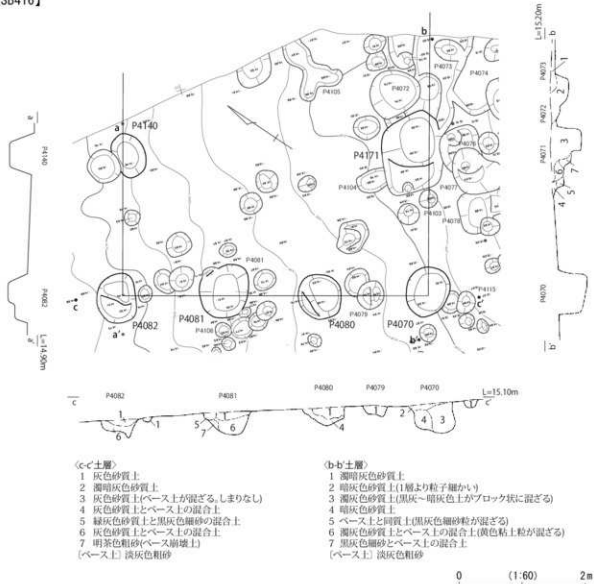
[SB415]



- | | |
|--------------------------------|---------------------|
| 1 灰色砂質土(ベース土が混ざる) | 9 1層と同質土(若干明るい) |
| 2 薄明茶色粗砂 | 10 7層と同質土 |
| 3 灰色砂質土(3～10cm大の茶黄色粘土ブロックが混ざる) | 11 明茶色粗砂と暗灰色砂質土の混合土 |
| 4 1層と同質土 | 12 濃黒褐色細砂 |
| 5 1層と同質土(黒灰色砂質土ブロックが混ざる) | 13 暗灰色砂質土とベース土の混合土 |
| 6 1層と同質土(若干暗い) | 14 1層と同質土(砂利が混ざる) |
| 7 濃緑灰色砂質土 | [ベース土] 茶灰～明茶色粗砂 |
| 8 1層と同質土(2～3cm大の黄褐色粘土粒が混ざる) | |

176図 G地区 第IV面SB415平面図・土層断面図(S=1/60)

【SB416】



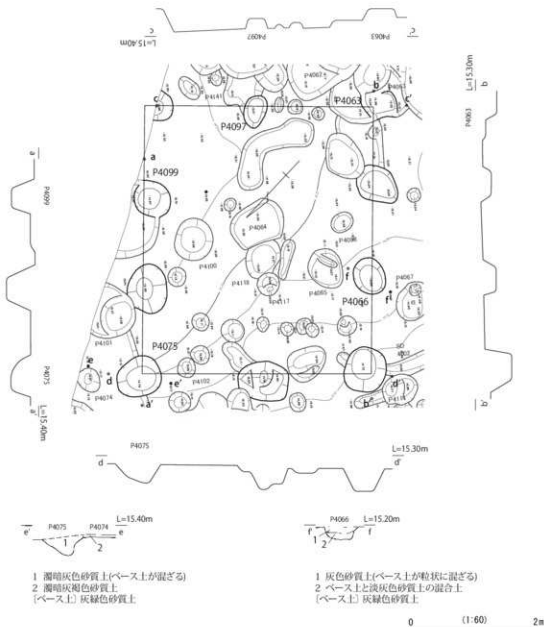
第177図 G地区 第IV面SB416平面図・土層断面図 (S=1/60)

の柱間寸法に比してかなり短い。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4140が径50～70cm、深さ37cm、P4080が径約70cm、深さ28cmとなる。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、P4082で柱根痕跡と考えられる径約10cmのくぼみが認められる。他の建物とは、敷地の重複や柱穴の切り合い関係はない。未図化だが、P4070・71・80・4140から非口クロ土師器瓦片が出土した他、P4070からⅢ期頃の口クロ土師器赤彩塼小片が出土した。

SB417(遺構：第178図)

F26区で検出した側柱構造をもつ小型の掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-42.5°Wを示し、桁行3間(4.20m)×梁間2間(3.60m)、床面積15.1㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.40m等間、梁間が1.80m等間で、桁行の柱間寸法が短い点に特徴をもつ。柱穴の平面形態は略円形または不整形円形を呈し、P4066が径50～60cm、深さ29cm、P4075が径60～70cm、深さ30cm、P4099が径約55cm、深さ34cmと、南西側に向うにつれ浅くなる傾向を示す。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる灰色砂質土を基本に、P4099では多くの炭粒と黄色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、

【SB417】



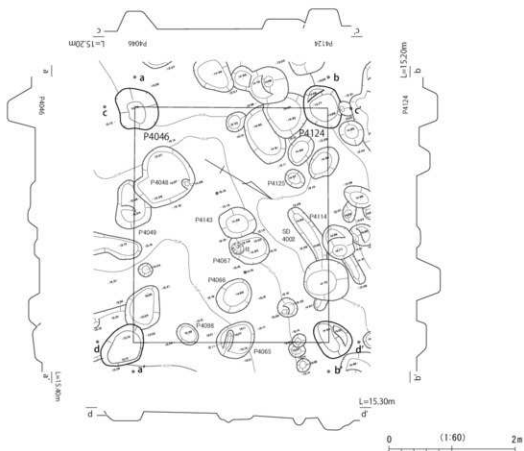
第178図 G地区 第IV面SB417平面図・土層断面図 (S=1/60)

北西側梁間中間柱穴で柱根痕跡と考えられるくぼみが認められる。建物敷地はSB418・222と重複する他、他遺構との切り合い関係はSD4002より新しく、整地土SX4004およびSB418より古く位置付けられる。遺物は、P4063・97・99から非ロクロ土師器甕が、P4063から製塩土器やⅡ期の内面返しをもつ須恵器坏蓋の小片が、それぞれ出土した。

SB418(遺構：第179図)

F-26区で検出した小型の掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-58.5° Eを示し、柱間寸法は長く、桁行1間(3.70m)×梁間1間(3.10m)、床面積11.4㎡を測る。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4046が径60～65cm、深さ42cm、その他の柱穴が径50～65cm、深さ15～23cmとなる。柱穴覆土は柱採取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・222、SA405と重複する。他遺構との切り合い関係は、遺構検出時の

[SB418]



第179図 G地区 第IV面SB418平面図・断面図 (S=1/60)

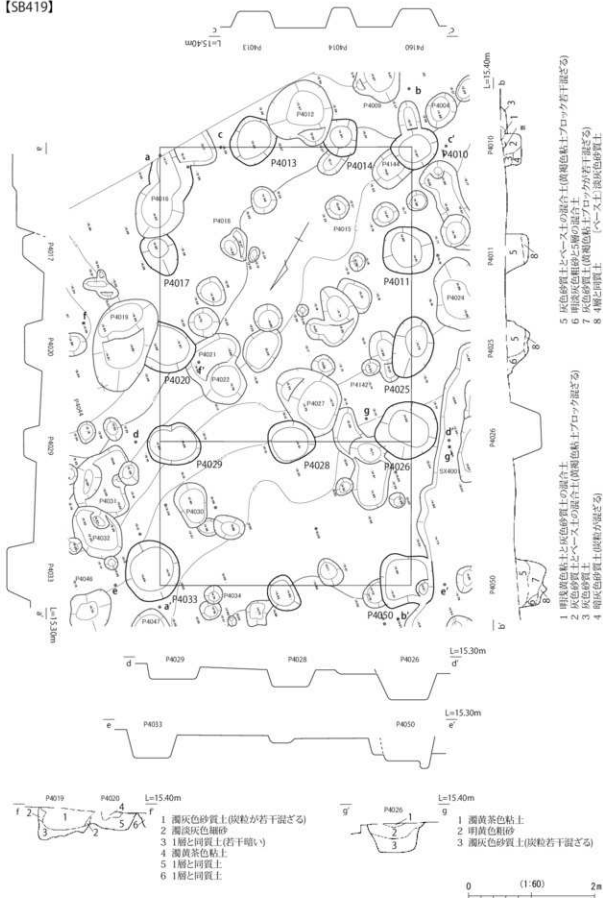
切り合い関係からSB417やSA405より新しく位置付けられる。遺物は、P4046・4124から非ロクロ土師器壘片が出土したととまる。

SB419(遺構：第180図、遺物：第193・195図)

E・F25区で、灰色砂質土と黄色粘土の混合土を用いた整地土SX4004(南西-北東方向10m以上、南東-北西方向4m以上)を掘り下げた後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-29°Wを示し、身舎の桁行3間(5.10m)×梁間3・2間(4.00m)、床面積18.6㎡を測る。また、北側梁間に廂が付すと考えられ、廂部分を含めた床面積は27.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行が1.55m等間(廂部分2.25m)、梁間は南側(3間)が1.20～1.50m、北側(2間)が1.80m等間となり、梁間の柱間寸法が比較的小さい点に特徴をもつ。柱穴の平面形態は不整形円形または不整形を呈し、径(一辺)55～95cm、深さ30～46cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土と考えられ、ベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基本に、P4017・28・33・50で黄色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、建物敷地はSB420、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSB419柱穴P4020がSB420柱穴P4019より古く位置付けられる。

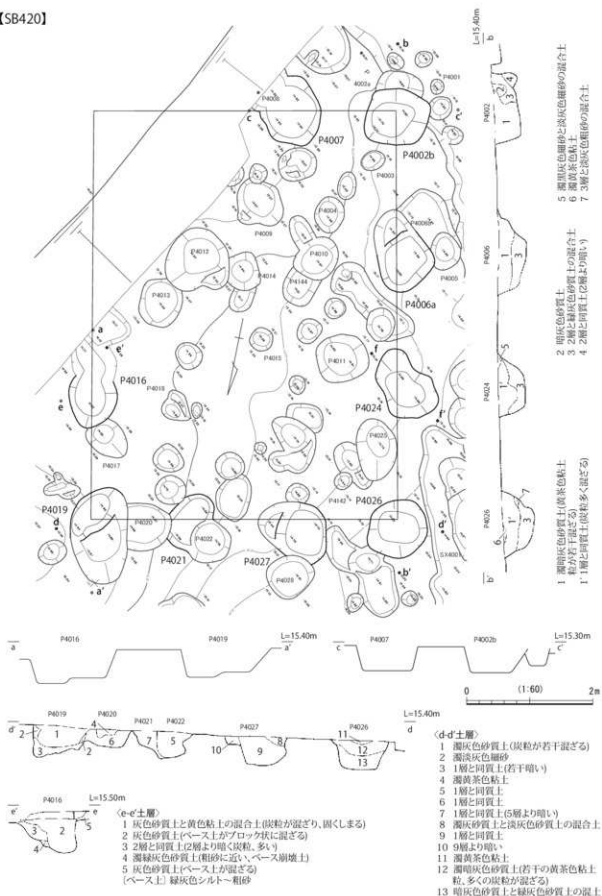
出土遺物は比較的多く、柱穴P4050出土の第193図822・823・825・826、柱穴P4010出土の824、柱穴P4033出土の827を図化した。また、第195図832の須恵器横瓶は、柱穴P4033・50の他、P4031等から出土した破片が接合する。薄手のロクロ土師器壘822は口径20.5cmを測り、頸部で明瞭に屈曲し、口縁部は外傾しながら直線的にのびる。非ロクロ土師器壘823は口径30.5cmを測る。ハケとケズリで整形し、824とともに煮炊きに伴う痕跡が明瞭に残る。非ロクロ土師器壘824は口径16.2cm、器高

【SB419】



第180図 G地区 第IV面SB419平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SB420】



第181図 G地区 第17面SB420平面図・土層断面図 (S=1/60)

14.7cmを測り、口縁部を薄く仕上げる。825・826は須恵器杯蓋で、口縁端部をしっかりと面取りする。825はⅣ₁期と考えられる。須恵器長頸瓶827は、自然釉や焼土の熔着状況から正位で焼成したと考えられる。832は口径14.0cmを測る両面閉塞の横瓶である。横位で焼成され、内外面とも淡黄～濃オリーブ色の自然釉が顕著に溶着する他、外面に焼台に転用した瓶類片・窯土が溶着する。他に、各柱穴から非ロクロ土師器甕を主体とした土師器、須恵器の小片が出土した。

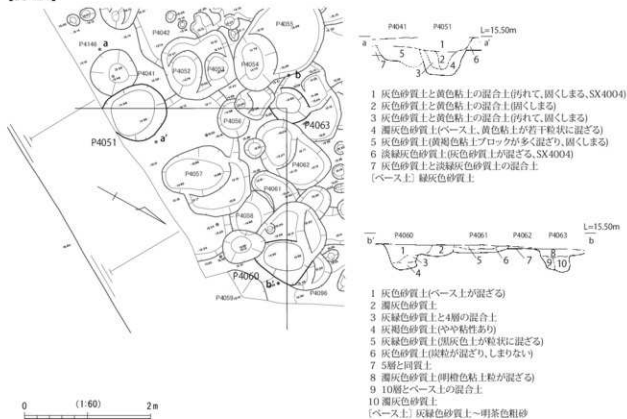
SB420(遺構：第181図、遺物：第193図)

F・G-25区で整地土SX4004掘り下げ後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは良好である。主軸方位はN-10°Wを示し、桁行3間(6.45m)×梁間3間(4.80m)、床面積30.9㎡と、梁間が比較的広い建物となる。柱間寸法は、西側桁行が2.15m等間、梁間が1.60m等間を測る。柱穴の平面形態は不整形円形または不整形方形を呈し、径(一辺)80～110cm、深さ42～50cmと、掘方は比較的大型である。柱穴覆土は柱抜取埋土で、ベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本に、P4002b・06a・07・16・24・26では黄～黄茶色粘土粒が混ざる。柱根は遺存せず、SB419・424、SA407と建物敷地が重複し、他遺構との切り合い関係についてはSB419より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、P4019出土の非ロクロ土師器甕片828を図化した。828は肉厚で、小片のため傾きに不安を残す。他にP4002b、P4007・16・19・21・24・27から非ロクロ土師器甕が、P4002b・P4007・16・19から須恵器杯類等の小片がそれぞれ出土、P4007出土の須恵器杯蓋片はⅤ期以降に位置付けられる。

SB421(遺構：第182図、遺物：第193図)

F・G-25・26区では、整地土SX4004を取り除いた段階で、重複する数多くの柱穴を検出した。整理時

[SB421]

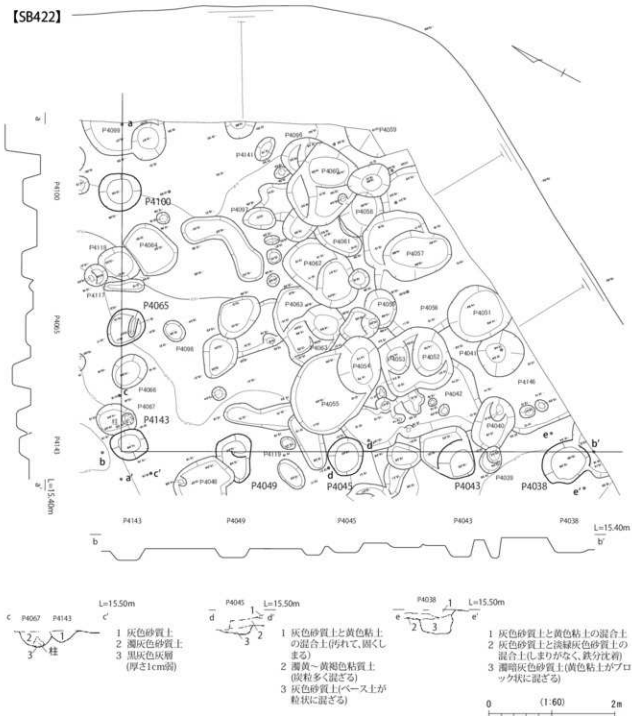


第182図 G地区 第IV面SB421平面図・土層断面図(S=1/60)

を含めてSB421～424、SA407・408を復元したが、SX4004と同様に調査区外東側及び北側に延びるため全体の規模は不明であり、周辺に存在した棟数はさらに増えるものと考える。

SB421は1×1間以上の側柱構造を想定した掘立柱建物で、主軸方位はSB419と類似したN-28°Wを示す。北西側の柱間寸法が2.40m、南西側の柱間寸法が2.35mを測る。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、P4051が径90～100cm、深さ43cm、P4060が径75～90cm、深さ38cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、明橙～黄色粘土を混ぜた灰色砂質土を用いて埋め戻すことを基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・423～425、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSB423より新しく位置付け

[SB422]



第183図 G地区 第17面SB422平面図・土層断面図 (S=1/60)

られる。出土遺物のうち、柱穴P4051出土の製塩土器片829を図化した。平底の829は口径約20cmを測り、外面に粘土紐の積み上げ痕を残す。他にP4051から非ロクロ土師器甕、Ⅱ₃期の須恵器坏蓋が、P4060から非ロクロ土師器甕、ロクロ土師器甕の小片が、それぞれ出土した。

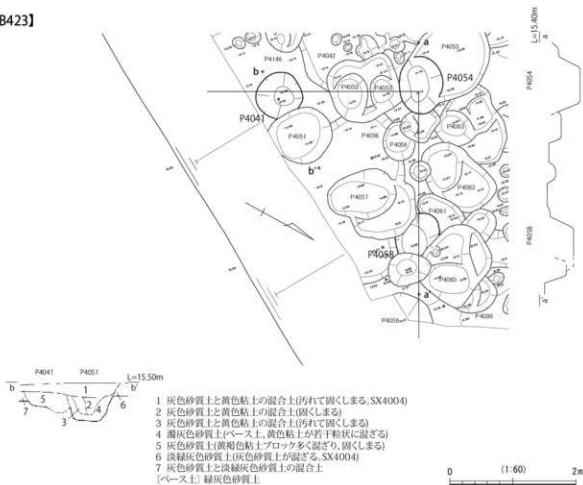
SB422(遺構：第183図、遺物：第193図)

F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に検出した側柱構造をもつ掘立柱建物で、柱筋の通りは比較的良好である。主軸方位はN-27.5° Wを示し、桁行4間以上(7.20m～)×梁間2間以上(4.00m～)、床面積28.8㎡以上と、比較的大型の建物となる可能性が高い。柱間寸法は、南西側桁行が1.80m等間、北西側梁間が2.00m等間と、桁行と梁間の柱間寸法に大きな差異は認められない。柱穴の平面形態は、小振りな不整形円または略円形を呈し、径50～75cm、深さ12～32cmを測る。柱穴は、南側に向かうにつれ深くなるものの、全体に浅い。柱穴覆土は柱芯取埋土と考えられ、ベース土や黄色粘土粒が混ざった濁暗灰～灰色砂質土を基調とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB417・418・421・423～425、SA405・407と重複し、他遺構との切り合い関係はSA405より新しく、SX4004より古く位置付けられる。出土遺物のうち、柱穴P4100出土の須恵器坏蓋830を図化した。Ⅳ₂期と考えられる830は、天井部両面に墨書が残り、外面の文字のつくりは第213図1021と同様に「目」と似る。他に各柱穴から非ロクロ土師器甕の小片が出土した。

SB423(遺構：第184図、遺物：第193図)

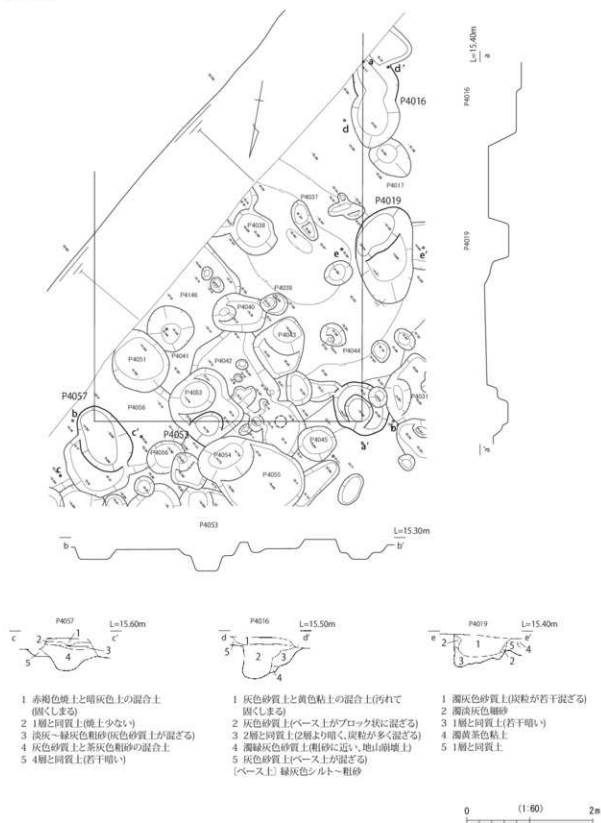
F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に1×1間以上の側柱構造を考えた掘立柱建物で、主軸方位は

[SB423]



第184図 G地区 第IV面SB423平面図・土層断面図 (S=1/60)

[SB424]



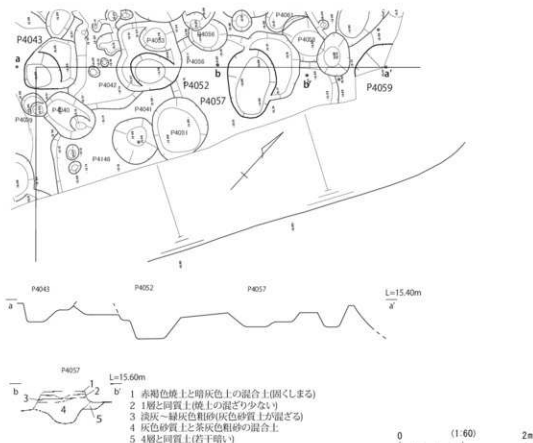
第185図 G地区 第Ⅶ面SB424平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB421・422と近似したN-28° Wを示す。柱間寸法は、北西辺が2.35m、南西辺が2.20mを測る。柱穴の平面形態は不整形円形または不整楕円形を呈し、P4041が径70cm、深さ26cmを、P4054が径70～90cm、深さ54cmを測る。柱穴覆土は柱抜取埋土であり、P4041が黄色粘土を混ぜた灰色砂質土、P4054・58が濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB421・424・425、SA407と重複、他遺構との切り合い関係はSX4004、SB421より古く位置付けられる。柱穴P4054出土の第193図831は、古墳時代のでづくね土器であり、細細の口縁部を非水平に仕上げる。他にP4041・58から非ロクロ土師器甕の小片が出土した。

SB424(遺構：第185図、遺物：第195図)

G-25区、F・G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に側柱構造を考えた掘立柱建物で、柱筋の通りはあまりよくない。主軸方位はN-85° Wを示し、桁行2間以上(5.50m～)×梁間2間または3間(4.25m)、床面積23.3㎡以上を測る。柱間寸法は、西側桁行が2.75m等間、梁間が2間とした場合1.80m、2.45mとなる。柱穴の平面形態は不整形円形または不整楕円形を呈し、径55～110cm、深さ21～49cmと、桁行の掘方は比較的大振りである。柱穴覆土は柱抜取埋土で、炭粒とベース土が混ざる濁灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、SB419～423・425、SA407と建物敷地が重複し、他遺構との切り合い関係はSX4004より古く位置付けられる。出土遺物のうち、SB425柱穴と重複する柱穴P4057出土の置きカマド片833を図化した。833は上端に粗いケズリ調整を施し、下端は接合面で剥離する。他にP4053・57から非ロクロ土師器甕等の小片が出土した。

[SB425]



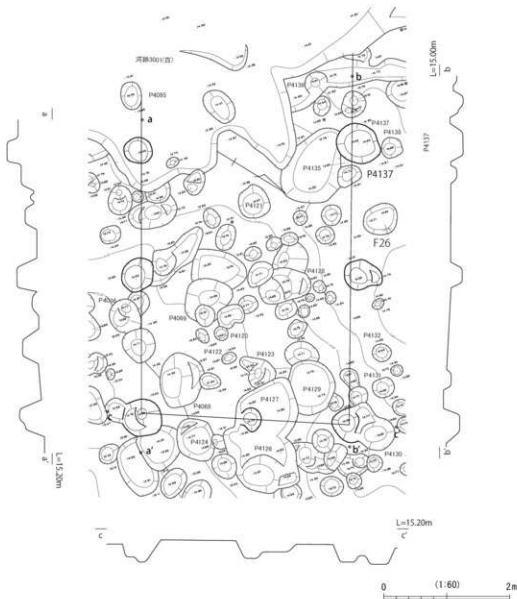
第186図 G地区 第IV面SB425平面図・土層断面図 (S=1/60)

SB425(遺構：第186図、遺物：第195図)

G-26区で整地土SX4004掘り下げ後に検出し、主軸方位N-43°Wを示す梁間3間(5.45m、柱間寸法1.90m・1.65m)の側柱構造の掘立柱建物を想定したが、建物とならない可能性を多分に残す。柱穴の平面形態は不整形円形を呈し、径60～110cm、深さ17～56cmを測る。柱穴覆土はベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土を基調に、P4043は黄色粘土を混ぜた土を埋土に用いる。柱根は遺存せず、建物敷地はSB421～424、SA407と重複する。遺物は、SB424柱穴と重複するP4057から第195図833の置きカマド片が出土した他、P4059からⅣ期を下限とする須恵器有台坏小片が出土したにとどまる。

SB426(遺構：第187図)

E-25区、F-25・26区で検出した小型の掘立柱建物で、西側は河跡3001(古)で損壊する。主軸方位はN-60°Eを示し、柱筋の通り、柱間寸法とも乱れ気味である。桁行2間以上(4.60m～)×梁間2間(3.30m)の建物で、桁行の柱間寸法は2.00～2.40m、梁間の柱間寸法は1.65m等間を測る。柱穴は平面不整形円形を呈し、径45～70cm、深さ18～35cmを測る。柱抜取埋土と考えられる柱穴覆土は、ベース土が混

[SB426]

第187図 G地区 第Ⅳ面SB426平面図・断面図 (S=1/60)

ざる暗灰～灰色砂質土を基本とする。柱根は遺存せず、建物敷地はSB418、SA404～406と重複、他遺構との切り合い関係はSA405より新しく位置付けられる。遺物は、P4137から非ロクロ土師器甕片が出土したにとどまる。

SA402(遺構：第188図)

F-22・23区でSX4002掘り下げ後に検出した柱間3間の柵列である。主軸方位はN-90°Wを示し、延長6.90m、柱間寸法は東側から2.30m、2.10m、2.50mと不均等である。柱穴の平面形態は不整円形または不整楕円形を呈し、径30～55cm、深さ30～50cmを測る。覆土はベース土が混ざる灰色砂質土である。柱穴P4149がSB409柱穴P4160より新しく、また、SA402各柱穴はSX4002及び重複する耕作に伴う小溝群より古い。未図化だが、P4284以外の柱穴から非ロクロ土師器甕等の小片が出土した。

SA403(遺構：第188図)

E・F-23区でSX4002掘り下げ後に検出した柱間4間の柵列である。主軸方位はN-24°Wを示し、延長は8.00m(柱間寸法2.00m等間)となる。柱穴の平面形態は不整円形または略円形を呈し、径65～110cm、深さ46～68cmを測る。覆土はベース土や黄～褐色粘土が混ざる灰色砂質土であり、柱根痕跡がP4155に残る。位置関係はSB409・410、SA402と重複し、他遺構との切り合い関係はSX4002及び重複するSD4008・11より古く位置付けられる。未図化だが、P4155以外の柱穴から非ロクロ土師器甕片が出土した他、P4152からMT15並行期の須恵器坏蓋小片が出土した。

SA404(遺構：第189図)

F-26区で検出した柱間2間の柵列で、柱筋はSB419東側桁行とほぼ一致する。主軸方位はN-30.5°Wを示し、延長は4.60m(柱間寸法2.30m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形または略方形を呈し、径50～90cm、深さ15cm前後と、かなり浅い掘方である。覆土はベース土が混ざる暗灰～灰色砂質土で、位置関係からSB426、SA405と前後関係をもつ。未図化だが、P4068以外の柱穴から非ロクロ土師器甕片等が出土した。

SA405(遺構：第189図、遺物：第196図)

F-25・26区で検出した柱間2間の柵列である。主軸方位はSB414と近似するN-77.5°Eを示し、延長は4.80m(柱間寸法2.40m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径50～90cm、深さ13～26cm、覆土はベース土や黄色粘土粒が混ざる灰色砂質土を基本とする。柱穴の切り合い関係からSB418・425・426より古く位置付けられる他、SA404と前後関係をもつ。第196図844は、P4067に残存したクリ材の柱根で、径14～18cmを測り、平坦に加工した底面に砂が圧着する。P4067からは、土師器甕、須恵器無台坏の小片も出土した。

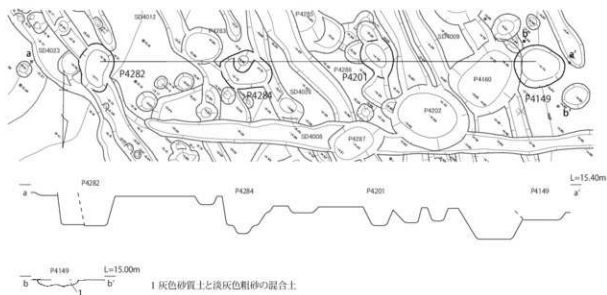
SA406(遺構：第189図、遺物：第195図)

F-25区で検出した柱間2間の柵列である。主軸方位はN-20°Wを示し、延長は3.00m(柱間寸法1.50m等間)を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径30～55cm、深さ15～37cm、覆土はベース土が混ざる暗灰色砂質土である。河跡3001(古)に削られ、SB426と重複する位置関係にある。出土遺物のうち、柱穴P4095出土の非ロクロ土師器塊第195図834を図化した。834は口径14.4cmを測り、内面の黒色処理が赤彩を施した外面にも及ぶ。他に非ロクロ土師器甕小片が出土した。

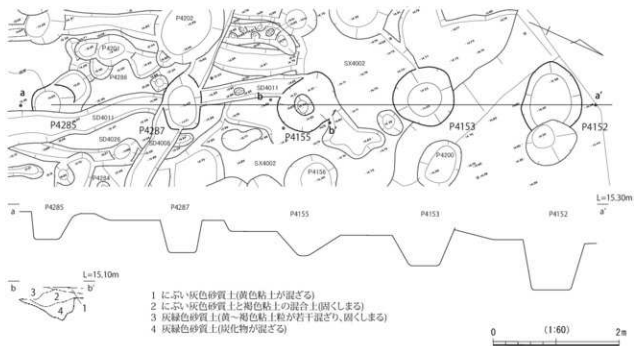
SA407(遺構：第190図)

F-25区、G-25・26区で復元したL字状に曲がる柵列で、柱間寸法は3.05m等間を測る。柱穴の平面形態は不整円形を呈し、径50～105cm、深さ20～52cm、覆土はベース土が混ざる濁暗灰～灰色砂質土を基本とする。SB419～425と重複する位置関係にあり、柱穴P4019がSB4020柱穴P4020より古く位置付けられる。遺物は、P4012・20から非ロクロ土師器甕片が出土したにとどまる。

【SA402】

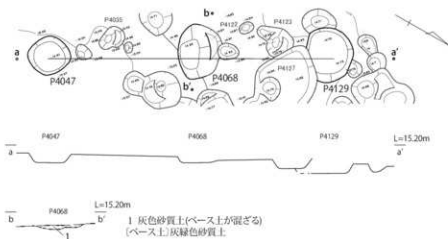


【SA403】

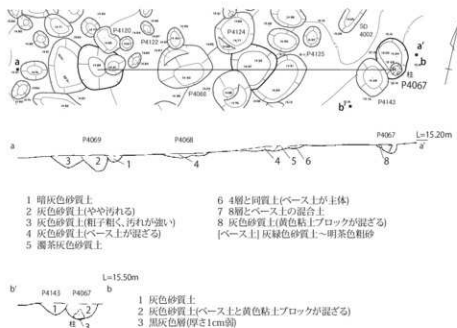


第188図 G地区 第IV面SA402・403平面図・土層断面図 (S=1/60)

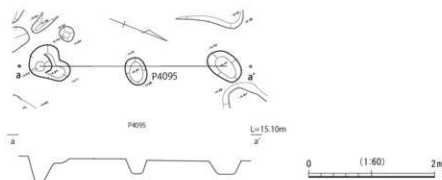
【SA404】



【SA405】

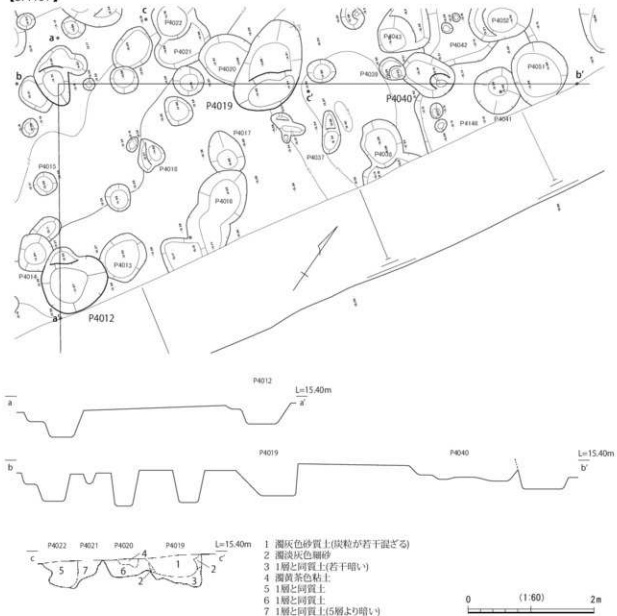


【SA406】



第189図 G地区 第IV面SA404～406平面図・土層断面図 (S=1/60)

【SA407】

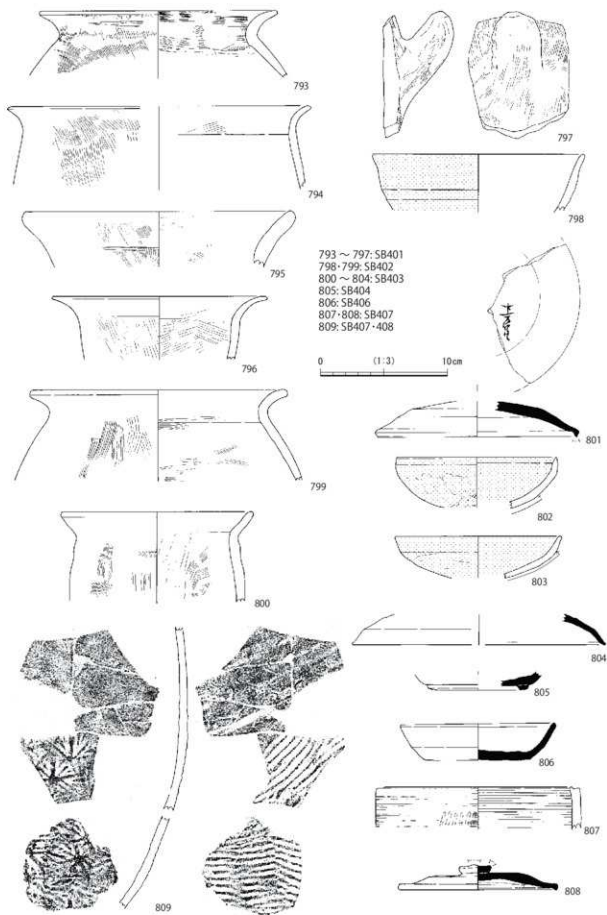


第190図 G地区 第17面SA407平面図・土層断面図 (S=1/60)

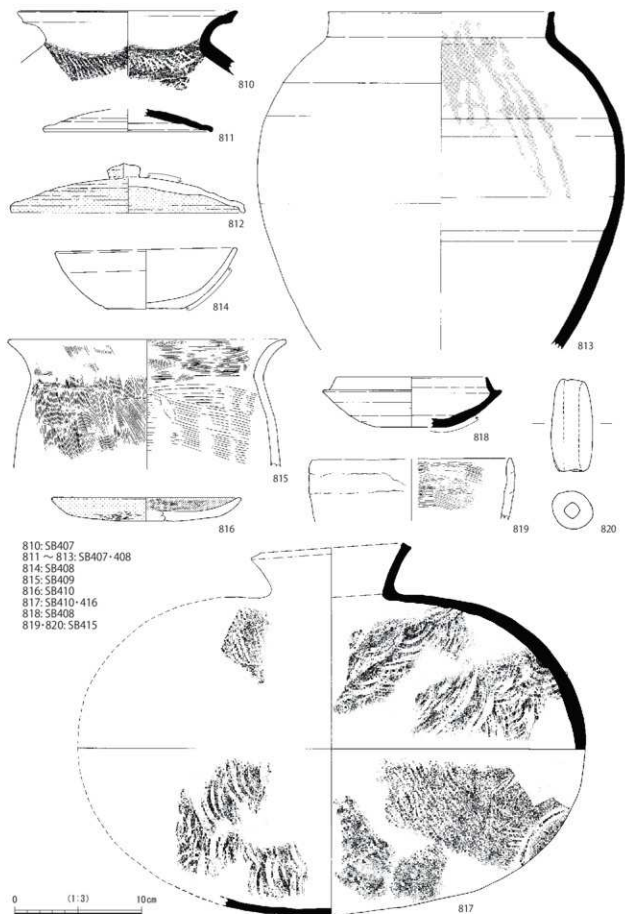
3 ピ ッ ト (P) (遺構：第194図、遺物：第195-196図)

調査区全体で多数のピットを検出しており、復元できなかった建物等構造物の柱穴を含むものと考えられる。現地調査では、遺物が出土したピットについて遺構番号を付しており、掘立柱建物を構成する柱穴以外の土層断面図は第194図に載せてある。以下では、主に出土遺物について記す。

第195図835はP4010出土の尖底タイプの製塩土器で、口径約15cmを測る。胎土中に2～3mm大の角張った長石が多く混ざり、硬質な焼き上がりである。836・837はP4016から出土した。内面黒色の非ロクロ土器器壺836は深身で、外面に縦方向のハケ調整を施す。837は口径約25cmを測るロクロ土器器瓶である。須恵器壺838はP4017・19出土の破片が接合した。838の外面は、肩部より下方に丁寧な回転ケズリ調整を施した後にカキメ調整を加える。また、肩部を1条の沈線で加飾する。P4019出土の須恵器有台坏839は、薄手の体部に、しっかりと外展する台部を貼り付ける。第195図840、第196

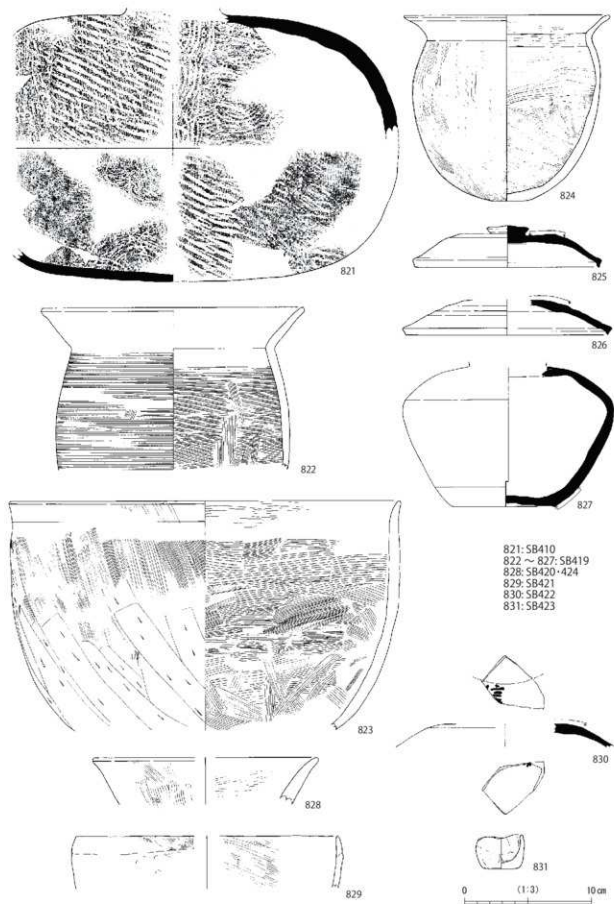


第191図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図1(S=1/3)



810: SB407
811 ~ 813: SB407・408
814: SB408
815: SB409
816: SB410
817: SB410・416
818: SB408
819-820: SB415

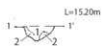
第192図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図2(S=1/3)



821: SB410
 822 ~ 827: SB419
 828: SB420・424
 829: SB421
 830: SB422
 831: SB423

第193図 G地区 第IV面SB出土遺物実測図3(S=1/3)

【F25-1区 P4030】(第159図)



- 1 灰色砂質土(粒子細かく、炭粒若干混ざる)
- 2 灰緑色細砂(黒灰色土がブロック状に混ざる)

【F26-3区 P4076～78】(第161図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 1層と明茶色粗砂の混合土
- 3 1層と同質土(明茶色が若干混ざる)
- 4 1層と同質土(1層よりやや明るい)
- 5 濁灰緑色砂質土

【G23-1区 P4183】(第155図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 黒色炭と灰色砂質土の交互堆積層

【F26-1区 P4126～28等】(第159図)



- 1 濁暗灰色砂質土(粘土粒が混ざる)
- 2 濁暗灰色砂質土(緑灰色砂質土が混ざる)
- 3 濁灰色砂質土
- 4 濁暗灰色砂質土
- 5 濁暗灰色砂質土(4層より若干暗い)
- 6 濁暗灰色砂質土
- 7 濁暗灰色砂質土

【F22-1区 P4217】(第154図)



- 1 濁灰色砂質土
- 2 濁灰褐色砂質土(黄～褐色粘土ブロックが多く混ざる)
- 3 濁灰褐色砂質土(// 2層より若干深い)
- 4 灰色砂質土とベース上の混合土 [ベース上] 茶灰色粗砂

【F21-4区 P4301】(第154図)



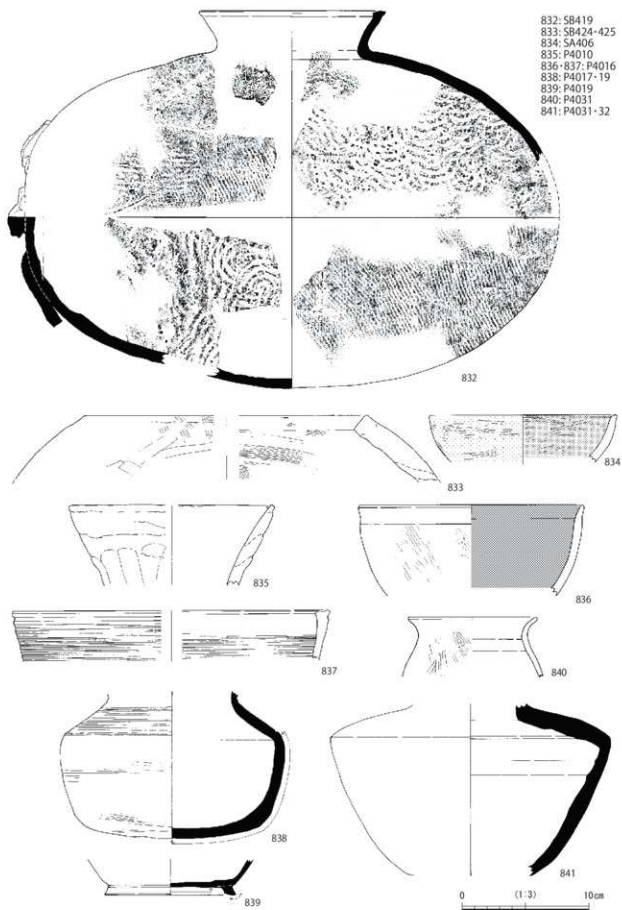
- 1 濁暗灰色砂質土

0 (1/60) 2m

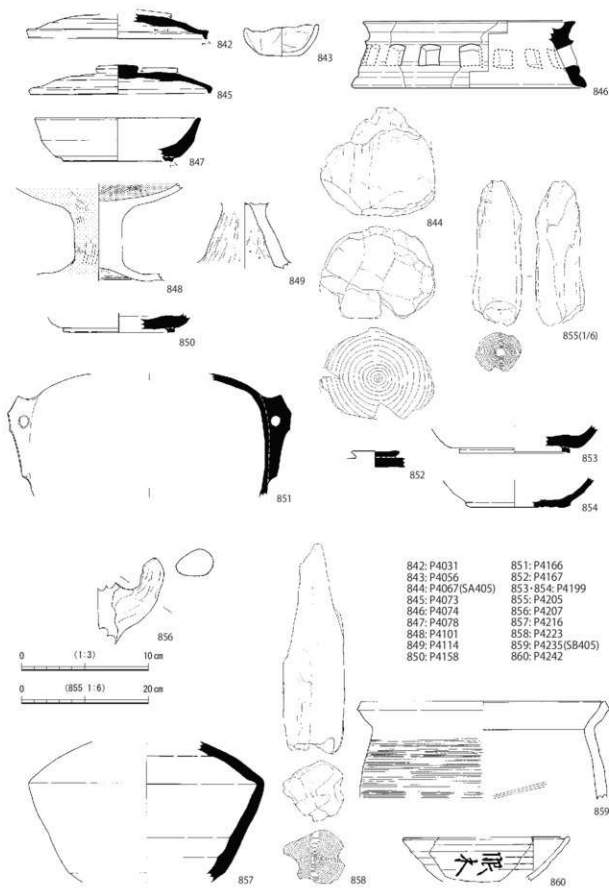
第194図 G地区 第1面ピット土層断面図 (S=1/60)

図842はP4031から出土した。非ロクロ土師器小甕840は口径10.0cmを測り、口縁部が短く外反する。須恵器坏蓋842は口縁端部を嘴状にひきのばす。粘性に富んだ精良な胎土を用い、焼成は堅緻である。P4031・32出土の須恵器長頸瓶841は降灰と自然釉から正位で焼成され、焼きぶくれが目立つ。

第196図843は、P4056出土のづくね土器である。口縁部は波打ち、外面に製作者の指紋が残る。P4073出土の須恵器坏蓋845は扁平で、径3.5cmを測る大振りな鈕を付ける。P4074出土の須恵器圈足円面視846は、上端径16.7cm、器高5.3cmを測り、1/6程度が残存した。足部外面を1条の面取りの鋭い稜と2条の沈線で加飾した後に、外側から方形孔を穿つ。また、降灰の付着状況から視面を特に保護せず、正位で焼成したと考えられる。P4078出土の須恵器有台坏847は、肉厚の体部に扁平で小振りな台部を付ける。P4101出土の非ロクロ土師器高坏848は、坏部内面を黒色、外面を橙色とする。P4114出土の849は、古墳時代の非ロクロ土師器高坏であり、脚部外面に密なミガキ調整を施す。P4158出土の須恵器有台坏底部850は、焼成堅緻である。P4166出土の須恵器双耳瓶851は、丁寧に面取りを行った耳部1ヶ所が残る。P4167出土の須恵器坏蓋鈕852は、扁平で径3.7cmを測る。須恵器853・854はP4199から出土した。有台坏853は、小振りな台部を内寄りに付ける。無台坏854は底部台状を呈する。外面に煤が付着し、VI期に位置付けられる。P4205出土の柱根855はクリ材を用いる。径6～8cmを測り、腐食が目立つ。P4207出土の非ロクロ土師器瓶頸把手856は、外面に黒斑が残る。P4216出土の須恵器長頸瓶857は、堅緻に正位焼成され、降灰と厚い自然釉が溶着する。P4223出土の柱根858はクリ材を用いる。径9.6cmを測り、腐植が目立つ。P4242出土のロクロ土師器壺860は口径



第195図 G地区 第Ⅳ面SB・ピット出土遺物実測図(S=1/3)



第196図 G地区 第17面ピット出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

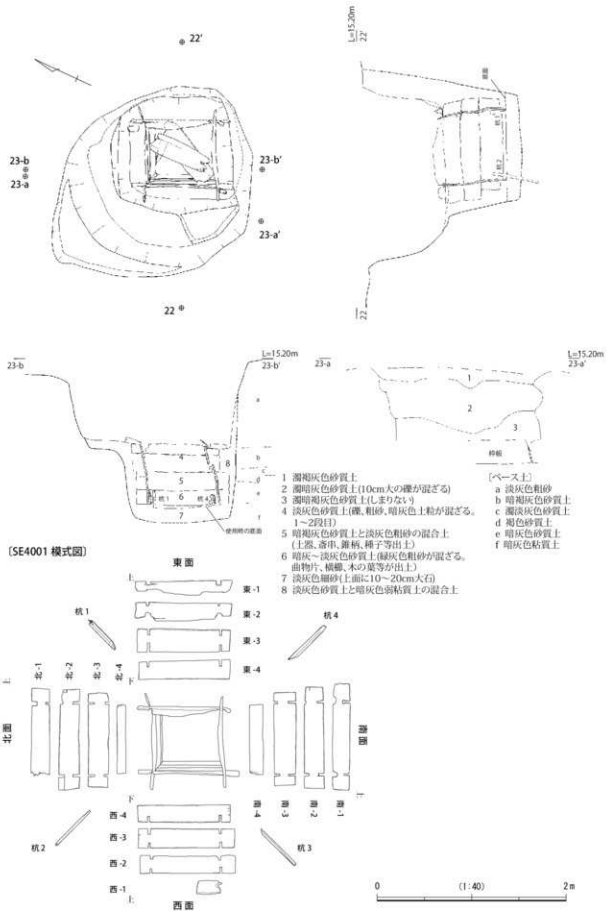
130cmを測り、体部外面に2文字の墨書を記す。2文字目は「木」と判読でき、Ⅵ期に位置付けられる。なお、未図化だが、P4113から硯に転用した須恵器有台坏が出土した。

4 井戸(SE4001)(遺構：第197図、遺物：第198～201図)

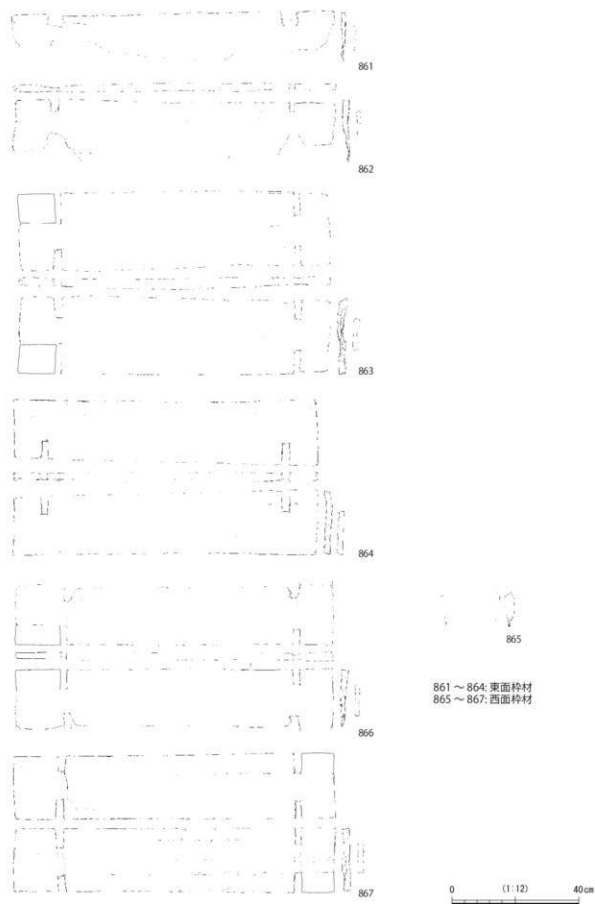
G-22区で検出した相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸で、上半の井戸枠は抜き取られる。掘方の平面形は、上半の掘方が崩れた略楕円形を、下半の掘方が隅丸方形をそれぞれ呈する。また、上半の掘方は西側に張り出し、作業用と考えられる2段の弧状の平坦面が確認できる。掘方の規模は、上半の掘方が検出面で東西方向247m、南北方向1.88m、検出面からの深さ約0.95mを、下半の掘方が北西-南東方向約1.3m、北東-南西方向約1.25m、深さ約0.75m、全体の掘方の深さ1.6～1.7mを、それぞれ測る。井戸枠の裏込め土は淡灰色砂質土と暗灰色弱粘質土の混合土(第197図土層8)を基本とし、非ロクロ土師器甕小片が出土したにとどまる。井戸枠は、底面から東西面で4段、南北面で3段が残存、土匠のため北西側及び南西側に傾斜する。各井戸枠材の高さ(15～25cm)を勘案すれば、遺構検出面までで5～6段の井戸枠が抜き取られたものと考えられる。残存した井戸枠の規模は、内法が北西-南東方向、北東-南西方向とも約72cm、高さ65～70cmを測る。井戸枠の組み上げは、まず検出面から深さ160～170cm(底面の標高約13.5m、掘方底面は暗灰色粘質土層で湧水顕著)の坑を掘り、浄水装置として淡灰色細砂(厚さ20cm前後、第197図土層7)でしっかりと埋める。井戸枠の第1段目(最下段864・868→872・875)を組みあげ、井戸枠の固定のため四隅に角杭を打つとともに、北西・南東面と北東・南西面との間で最大約8cmの段差が生じたことから、井戸枠外側からの土砂流入を防止するために北西面の枠材内側に横板(872・876)を追加する。その後は、仕口部外側を部分的に自然石で固定して裏込め土を充填しながら井戸枠材を組み上げ、最後に井戸底面に10～20cmの浄化装置として改めて自然石を敷き詰める(写真図版69)。また、枠材の切り欠きの深さが一律でないこと、井戸枠の組み上げが円滑にいくよう切り欠き周辺の側面を薄く加工してあること等から、現地で加工・調整しながら組み上げた様子もうかがえる。覆土は、第197図土層1～4が枠材抜き取り後の埋土、同図土層5・6が井戸機能時～埋没直前までの堆積土と考えられるが、第4～6層は顕著な湧水のため崩落し、正確な土層断面図を作成できなかった。また、他遺構と重複関係がなく、空地地に立地することは前述のとおりである。

遺物は、第198図861～第201図900を図化、うち861～880は井戸枠材である。861～864は東面、865～868は西面の井戸枠材で、上方のみに切り欠きをもつ864・868がそれぞれの辺の最下段となる。幅98～103cm、高さ15～25cm、厚さ2.5～3.7cm、切り欠きの幅2～2.5cm、深さ3.8～7cmを測り、上方の861・862は木やせが目立つ。865はスギ材を用いる。869～872は南面、873～876は北面の井戸側材で、切り欠きをもたない872・876は底面の土砂流入防止の役割をもつ。切り欠きをもつ枠材は、幅98.5～118cm、高さ19～24cm、厚さ2.8～3.8cm、切り欠きの幅2～4.5cm、深さ3～8.5cmを測る。最下段の枠材を固定するため四隅に打ち込まれた角材は、長さ50.8～52.5cmを測る。先端は、878が4側面を削って尖らすのに対して、他の3本は斜め方向に切断して尖らす。880の材はスギである。

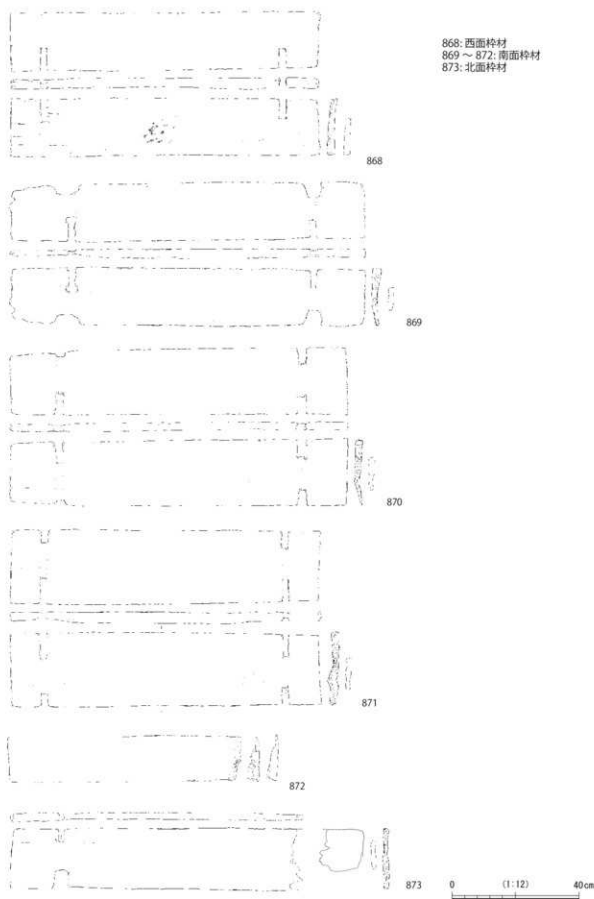
第201図881～900は井戸枠内の遺物で、882～885が覆土第1・2層、881、886～888が覆土第5層から、それぞれ出土した。井戸枠内からは、他に非ロクロ土師器甕片を主体にロクロ土師器甕、須恵器坏蓋、有台坏、無台坏等の小片が出土、中には底面に近い覆土第5・6層の無台坏底部片1点(V₂期)を含む。非ロクロ土師器甕881は球胴形を呈する。胴部外面のハケ調整はケズリに近い粗い仕上がりで、頸部に工具のあたり痕が顕著に残る。ロクロ土師器甕882は口径21.6cmを測り、口縁端部を嘴状に上方にのぼす。883～886は須恵器である。無台坏883は底部円盤状を呈し、Ⅵ期に位置付けられる。



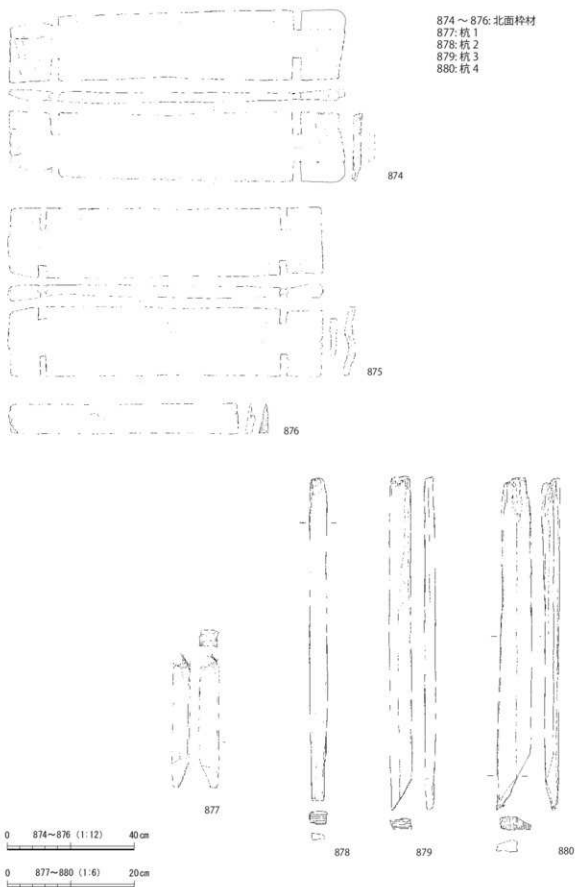
第197図 G地区 第IV面SE4001平面図・断面図 (S=1/40)



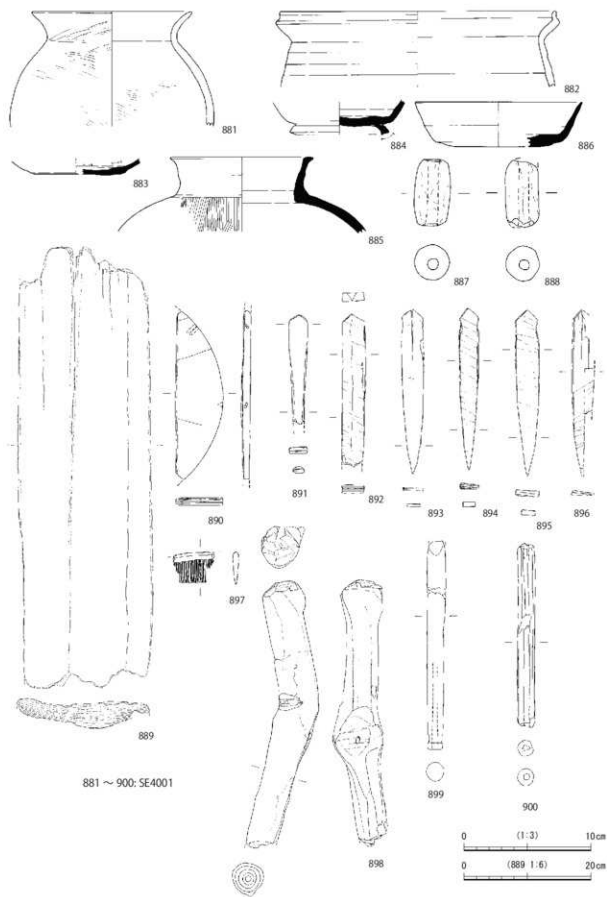
第198図 G地区 第Ⅳ面SE4001出土井戸枠材実測図1(S=1/12)



第199図 G地区 第IV面SE4001出土井戸杵材実測図2(S=1/12)



第200図 G地区 第IV面SE4001出土井戸杵材実測図3(S=1/6・1/12)



第201図 G地区 第IV面SE4001出土遺物実測図(S=1/3・1/6)

有台884は精良な胎土で、台部は強く外展する。横瓶885は口径12.3cmを測り、胴部外面に粗いカキメ調整を施す。無台886は肉厚の底部から直線的に体部がのび、IV期と考えられる。土師器土鍾887・888は、ほぼ同法量であるが、礫の混ざり具合が大きく異なる。887で重さ44.5gを量る。

889～900は、井戸枠内から出土した木製品で、889～891は覆土第4層、892～896・898～900が同第5層、897が第6層から、それぞれ出土した。板材889は、取り外された井戸枠材の一部の可能性をもつ。円形曲物底板890は、2孔1対の目釘痕から補修を行ったものと考えられる。891・892は、一端を圭頭状に加工しており、後者は斎串の使用も考えられる。892の樹種はスギである。893～896の4点はスギ材を用いた斎串で、長さ12.8～13.2cm、幅1.6～1.8cm、厚さ0.3～0.5cmを測る。いずれも頭部を圭頭状に、下端を剣先状に仕上げる。頭部近くの両側面2ヶ所に切込みを残し、893が上方の切込みを斜め上方向、下方の切込みを斜め下方向から入れるのに対して、894・895は2ヶ所の切込みとも斜め上方向から入れる。また、表面に刀子等の加工痕を残す個体も存在する。横橋片897は残存幅3.3cm、高さ2.5cm、厚さ0.5cm、残存歯数30本を測り、深さ約1.9cmの歯を挽きだす。材はツゲである。898はムラサキシキブ属を用いた加工材で、上端と枝部を粗く切断する。899は茎孔の形状から雑柄と考えられる。残存長16.6cm、径1.5cm、茎孔径0.3cmを測る。側面を丁寧に加工し、柄元に幅0.6cm、深さ0.1cmの鍔金具を装着した剣込みが認められる。900は、両端・側面を粗く加工した材で、長さ14.6cm、径1.4cmを測る。材質は899がクリ、900がムラサキシキブ属である。

5 溝(SD)

溝は、SD4001・02が河跡3001(古)北側に、他の溝は河跡3001(古)南側に分布する。河跡3001(古)南側に分布する溝は、平面形が咽張方形を呈するSD4031以外は、耕作に伴う小溝と考えられ、建物の雨落ち溝や敷地を区画するような溝は確認できない。耕作に伴う小溝は約60条を検出しており、緩やかに湾曲しながら、地形の傾斜に対して水平または垂直方向に掘られる。各小溝の規模・覆土等は第38表に示したとおりであり、肩部はゆるやかに立ち上がる。これらは、主軸方位や他遺構との切り合い関係から第38表で示したA～Cの順に大きく3小期に分類でき、B小期に約40条、最も新しいC小期に約10条の溝が属する。さらに分布状況から西に振れるB小期はB-1～B-3の3つの耕作単位を、南北を指向するC小期はC-2・C-2の2つの耕作単位を、それぞれ復元できる。最も古いA小期にはSD4026が属し、整地土であるSX4002上で、C小期のSD4008等とともに検出している。以下、主な溝について説明をおこなう。

SD4001・02(遺構：第159～160・202図)

SD4001はE・F-25区で検出した浅い溝で、屈曲しながら南東～北西方向に流れる。覆土は黒褐色砂質土で、遺構の切り合い関係からSB413より新しく、河跡3001(古)より古く位置付けられる。SD4002はF-26区で検出した浅く短い溝で、覆土は褐色砂質土である。遺構の切り合い関係からSB417柱穴より新しく位置付けられる。いずれの溝からも非ロクロ土師器壺小片が出土したにとどまる。

SD4026〔耕作地A〕(遺構：第155図)

F-23区で単独で検出した溝で、屈曲しながら南東～北西方向に延びる。覆土は濁褐色灰色砂質土で、他遺構との切り合い関係は、耕作地B-3に属するSD4011、耕作地C-2に属するSD4088より古く位置付けられる。遺物は、非ロクロ土師器壺、ロクロ土師器壺の小片が出土した。

SD4041～48・51〔耕作地B-1〕(遺構：第153・203図、遺物：第204図)

F-21-1・3区以南に分布する小溝群で、調査区外南東側及び北西側に延びる。主軸方位は重複するSB401～404に近いN-20～26°W、長さ4m未満、幅1.8～56cm、深さ4～19cmを測り、覆土はベース

第38表 G地区 第Ⅱ面SD規模等一覧表

遺構名	グリッド名	区分	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	備 考
SD4001	E-25・3・4	その他	680～	20～50	4～11	第202回断面8-9	SD413より新。河跡300(古)で損壊
SD4002	F-26・1	その他	170	18～26	9～13	褐色砂質土	
SD4003	E-22・4	C-2	120～	32～38	3～5	第202回断面10	SX4002より新
SD4004	E-22・4	C-2	150	24～52	3～11	第202回断面10	SX4002より新
SD4005	F-22・3	B-3	660	22～38	3～13	第206回断面29-29'	SX4002より新
SD4006	F-22・3	B-3	520	24～36	11～16	第206回断面29-29'	SX4002より新
SD4007	F-22・3・E-23・2	B-3	790	22～44	10～23	第206回断面29-29'	SX4002より新
SD4008	E-23・2・F-23・1	C-2	780	24～46	6～18	第206回断面29-29'	SX4002より新
SD4009	F-23・1	B-3	430	24～30	11～26	第206回断面29-29'	SX4002より新。SD4008より古
SD4010	F-23・1・F-22・3	B-3	700	24～46	9～15	第206回断面29-29'	SX4002より新。SD4008より古
SD4011	F-23・1・2	B-3	900～	28～56	12～18	第202回断面11-12、 第206回断面30-30'	SD4026、SX4002より新
SD4012	F-23・1・2	B-3	470～	22～38	5～12	第202回断面11、 第206回断面29-29'	SX4002より新
SD4013	F-23・1・2	B-3	900～	36～48	9～18	第202回断面11-12、 第206回断面31-31'	SX4002より新
SD4014	F-23・2・4	B-3	200	24～38	7～11	第202回断面12	
SD4015	G-23・1	B-3	110	18～26	3～14	薄層灰色砂質土	
SD4016	G-23・1	B-2	130～	36～40	10～13	薄灰色砂質土	
SD4017	G-23・1	B-2	250～	36～68	6～8	薄層灰色砂質土	
SD4018	G-22・3	B-2	180～	30～56	7～20	薄層褐色砂質土	
SD4019	G-22・3	B-2	310	28～52	7～20	第202回断面13	
SD4020	F-22・4	B-3	240	34～64	8～11	第202回断面12	
SD4021	F-23・2	B-3	130	20～26	5～8	薄層灰色砂質土	
SD4022	F-23・2	B-3	70	36～34	5～7	淡褐色砂質土	小ピット
SD4023	E-23・1・2	その他	450～	38～	5～8	第202回断面11	P4196と同じ
SD4024	G-21・3	B-2	160～	22～32	16	第202回断面15	
SD4025	G-21・3	B-2	230～	32～40	16	第202回断面15	
SD4026	F-23・1	A	600	22～34	6～17	薄層灰色砂質土	SX4002より新。SD4008-11より古
SD4027	F-23・1	B-3	90	16～34	8～11	薄層灰色砂質土	SX4002より新
SD4028	G-22・4	B-2	70	22～28	9～10	薄層灰色砂質土	
SD4029	F-21・4	B-2	410	64～90	4～17	第202回断面14	P4301より新
SD4030	F-21・4	その他	160	28～44	7～14	第202回断面14	
SD4031	E-22・1・3	その他	700～	46～84	5～26	第202回断面16-17	P4162-4274より新。胴張方形に高る
SD4032	F-21・3	C-1	490～	22～56	5～18	第202回断面18	SD4037と連続。P4228より新
SD4033	F21・4	B-2/C-1	480	24～68	7～22	第203回断面19-20	P4220より新
SD4034	F21・2・3	C-1	350	22～50	8～16	第203回断面19	
SD4035	F21・2・3	C-1	410～	16～32	2～21	第203回断面20	
SD4036	E-21・4	その他	140～	30～54	8～18	第203回断面21	
SD4037	E-21・4	C-1	490～	22～56	5～18	褐色砂質土	SD4032と連続
SD4038	F-21・3	C-1	350	26～38	5～20	第203回断面20	P4229-40より新
SD4039	F-21・3	C-1	630～	14～56	4～12	第203回断面19-20	
SD4040	F-21・4	C-1	150～	36～44	10	薄層灰色砂質土(ベース土混ざる)	
SD4041	F-21・1	B-1	300	32～56	8～19	第203回断面22	
SD4042	F-21・1	B-1	300	26～34	4～14	第203回断面22	
SD4043	F-20・3	B-1	260～	26～44	7～16	第203回断面22	
SD4044	F-20・3	B-1	340～	36～44	10～13	第203回断面22	
SD4045	F-20・1	B-1	270～	40～54	14～16	第203回断面19	
SD4046	F-20・1・2	B-1	230～	26～44	7～18	第203回断面23	
SD4047	F-20・4	B-1	140～	18～28	4～11	第203回断面23	
SD4048	F-21・2	B-1	170～	30～44	12～15	第203回断面23	
SD4049	F-21・4	B-2	230	36～54	10	第202回断面14	
SD4050	F-21・4	B-2	140	26～38	10	第202回断面15	
SD4051	F-21・1	B-1	160～	18～28	7～14	第203回断面22	

【E25-4区 SD4001】(第160図)



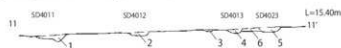
- 1 黒灰色砂質土

【E22-4区 SD4003-04】(第154図)



- 1 濁褐色砂質土(皮層が混ざり、
2 濁灰緑色砂質土(皮層が混ざり、
固くしまる。SX4002)

【F23-3区 SD4011～13】(第155図)



- 1 暗灰色砂質土(粗砂が混ざる)
2 濁暗灰色砂質土
3 濁黒灰色砂質土
4 黒灰色砂質土
5 濁黒灰色砂質土(攪乱)
6 濁暗褐色砂質土

【F22-23区 SD4011・13・14・20】(第154・155図)



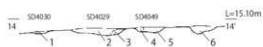
- 1 濁褐色砂質土
2 濁灰色砂質土
3 明灰色砂質土
4 濁褐色砂質土
5 濁暗灰色砂質土
6 暗灰色砂質土
7 濁灰色砂質土(白色砂粒が混ざる)
8 濁暗灰色砂質土(暗灰色砂質土が混ざる)
9 濁灰色砂質土(赤茶色粗砂が混ざる)
10 濁灰色砂質土
11 濁暗褐色砂質土

【G22区 SD4019等】(第154・155図)



- 1 明灰色砂質土
2 濁暗褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
3 暗灰色砂質土
4 濁暗褐色砂質土
5 濁暗褐色砂質土(赤茶色砂質土が混ざる)
6 濁暗灰色砂質土
7 濁暗灰色砂質土(黄土色粗砂が混ざる)
8 濁灰色砂質土
9 濁暗褐色砂質土
10 濁暗褐色砂質土

【F21-4区 SD4029・30・49】(第154図)



- 1 暗灰色砂質土と黄土色粗砂の混合土
2 濁暗褐色砂質土
3 濁暗褐色砂質土
4 濁暗褐色砂質土と黄土色粗砂の混合土
5 濁暗褐色砂質土
6 濁暗褐色砂質土と褐色砂質土(攪乱)の混合土

【F21-4区 SD4024・25・50】(第153・154図)



- 1 濁暗褐色砂質土
2 濁暗褐色砂質土(赤茶色砂質土が混ざる)
3 濁暗褐色砂質土
4 濁暗褐色砂質土(赤茶色粗砂が混ざる)

【E22-4区 SD4031】(第154図)



- 1 濁暗褐色砂質土(黄～褐色粘土ブ
ロック、炭化物が混ざる)

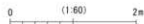


- 1 濁暗褐色砂質土(黄～褐色粘土ブ
ロック、炭化物が混ざる)
2 赤褐色焼土
3 灰色砂質土(20cm大の石が多く混ざる)

【F21-3区 SD4032】(第154図)

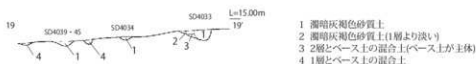


- 1 灰褐色砂質土

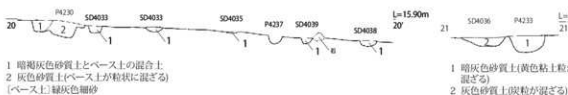


第202図 G地区 第17面土層断面図1 (S=1/60)

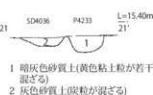
[F21-3区 SD4033～35-39] (第153・154図)



[F21-3区 SD4033-35-37～39] (第153・154図)



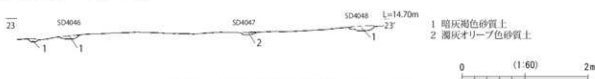
[E21-4区 SD4036-P4233] (第154図)



[F20-21区 SD4041～44-51] (第153図)



[F20区 SD4046～48] (第153図)



第203図 G地区 第IV面SD土層断面図2 (S=1/60)

土が混ざる薄暗灰褐～褐色砂質土を基本とする。また、耕作地B-1は、南東～北西方向で9m以上、南西～北東方向で約8mの土地を占める。他遺構との切り合い関係は、SB401～403より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4051出土の須恵器有台坏第204図911を図化した。911は底部外面に墨書を記す他、内面が使用に伴い平滑となる。文字は判読できず、Ⅳ₂期に位置付けられる。他に、SD4045～48以外の溝から土師器甕等の小片が出土した。

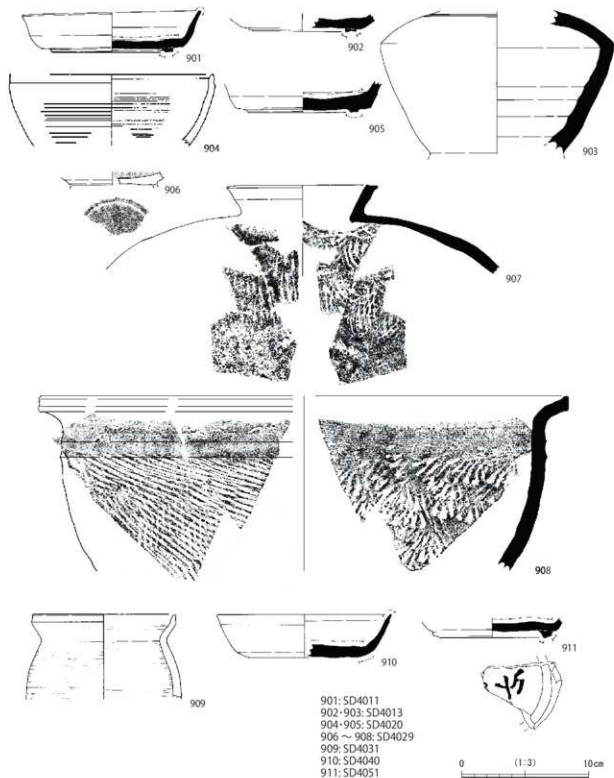
SD4016～19-24-25等〔耕作地B-2〕(遺構：第153～155・202-203図、遺物：第204図)

F-21-4区、F-22-2区、G-21～23区に分布する14条よりなる小溝群で、一部は調査区外南側に延びる。各溝は1m前後離れて掘られ、主軸方位はN-14～30°W、長さ5m未満、幅22～90cm、深さ4～22cmを測る。覆土は部分的にベース土が混ざる薄暗灰～褐色砂質土を基本とする。また、耕作地B-2は、南東～北西方向で8m以上、南西～北東方向で約19mの土地を占める。掘立柱建物の空白域に分布する点に特徴をもち、他遺構との切り合い関係はSD4029-49等がSA401柱穴より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4029出土の906～908を図化した。内黒のロクロ土師器有台坏906は台部が欠損する。外面に煤が付着し、Ⅵ期に位置付けられる。須恵器横瓶907はSD4029出土の破片と接合し、横位で堅緻に焼成される。須恵器鉢908は口径約41cmを測り、胴部内面に彫りの粗い扇形文の当て具を用いる。また、各溝から非ロクロ土師器甕等の小片、SD4016・17・29・50から製塩土器、SD4029からⅣ期以降の須恵器坏類、内黒のロクロ土師器坏の小片が、それぞれ出土した。

SD4005～07-09～15等〔耕作地B-3〕(遺構：第154・155・202-206図、遺物：第204図)

耕作地B-2北側のE-22-23区、F-22-3区～F-23区に分布する16条程度よりなる小溝群で、一部は調査区外北西側に延びる。主軸方位は重複するSB409-410-412に近いN-30°前後Wを示し、長さは直線的なSD4011-13が約9mを測るとおり、他の小溝群より長い溝を多く含む。溝の規模は幅16～64cm、深

さ3～26cmを測り、覆土は濁黒灰～褐灰色砂質土を基調とする。各溝の位置関係から2回以上の掘り直しが想定でき、耕作地B-3は南東-北西方向で12m以上、南西-北東方向で約10mの土地を占める。他遺構との切り合い関係はSB409・410、SX4002より新しく、SD4008より古く位置付けられる。出土遺物のうち、SD4011出土の901、SD4013出土の902・903、SD4020出土の904・905を図化した。須恵器



第204図 G地区 第Ⅳ面SD出土遺物実測図 (S=1/3)

有台坏901は、口径13.9cm、器高3.3cmを測り、使用に伴う摩耗が著しい。須恵器有台坏902は、肉厚な底部に扁平な台部を付ける。須恵器瓶903は肩部上方を2条の沈線で加飾する。焼成時の焼きぶくれが目立つ他、外面に自然釉と焼土片が溶着する。ロクロ土師器鉢類904は口径15.9cmを測り、口縁部下端に沈線を施す。二次被熱のため判然としないが内外面とも赤彩の可能性が高い。須恵器有台坏905は内寄りに扁平な台部を付ける。未図化だが、各溝から非ロクロ土師器甕等の小片、SD4010から縄文土器浅鉢片1点、SD4006・13からV期以降の須恵器無台坏片が、それぞれ出土した。

SD4032・34・35・37～40〔耕作地C-1〕(遺構：第153・154・202・203図、遺物：第204図)

E・F-21区に分布する小溝群で、調査区外西側に延びる。屈曲が目立つものの、主軸方位は耕作地Bと異なり、南北方向または東西方向を指向する。長さ6m前後、幅14～56cm、深さ2～20cmを測り、覆土はベース土が混ざる濁褐色～暗褐色砂質土を基本とする。また、耕作地C-1は南北方向で約7m、東西方向で7m以上の土地を占める。他遺構との切り合い関係は、SB403・405・406より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、SD4040出土の須恵器無台坏910を図化した。910は口径13.7cm、器高3.4cmを測り、体部はゆるやかに外傾する。また、SD4032・37以外の溝から非ロクロ土師器甕、SD4034から弥生土器甕、SD4035・39から製塩土器、SD4038からVI期の須恵器無台坏の小片が、それぞれ出土した。

SD4003・04・08〔耕作地C-2〕(遺構：第154・155・202・206図)

E-22・23区、F-23区に分布する3条の小溝群で、調査区外西側に延びる。主軸方位は、耕作地C-1と同様に南北方向または東西方向を指向する。直線的なSD4008が長さ約7.8m、幅24～46cm、深さ6～18cmを測り、SD4003・04と直交する位置関係にある。覆土は濁褐色～灰褐色砂質土で、耕作地C-2は東西方向で10m前後を測る。他遺構との切り合い関係は、SB409・410、SX4002、耕作地B-2に属する溝群より新しく位置付けられる。また、各溝から土師器甕小片が出土した他、SD4003からロクロ土師器埴輪・須恵器坏蓋片、SD4008から須恵器無台坏片が、それぞれ出土した。

SD4031(遺構：第154・202図、遺物：第204図)

F-22区で検出した溝で、調査区外北西側に延びる。平面プランは胴張方形を呈し、南西～北東方向で約3.5mの範囲を囲むものと考えられる。溝の幅は46～84cm、深さ5～26cmを測り、覆土は黄～褐色粘土、炭化物が混ざる濁褐色砂質土である。遺構の切り合い関係から、SD4031がSB407柱穴P4162、SB408柱穴P4274より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、ロクロ土師器小甕909を図化した。909は口径11.1cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。他に、非ロクロ土師器甕を主体にロクロ土師器甕、須恵器無台坏や、VI期のロクロ土師器無台坏等の小片が数点出土した。

6 その他の遺構(SX、河跡)

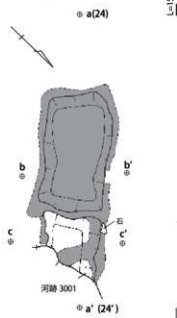
貼床をもつSX4001と、整地土(SX4002～04)を3ヶ所で確認しており、SX4004については整理段階で新たに番号を付与したものである。これまでの調査では、SX4002～04と同様の整地(地業)作業の痕跡は、A地区L・K-5・6区、B地区J・K-9・10区等で検出している。また、調査区中央を流下する河跡3001(古)については、第4節で述べたとおりである。

SX4001(遺構：第159・205図、遺物：第207図)

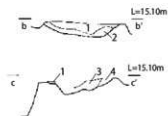
F-25区で検出し、主軸方位はN-22°Wを示す。平面略方形を呈する2基の浅い土坑が重複しており、いずれも平坦な底面から緩やかな壁面に、粘土を主体とした土を貼り付ける。南側の古い土坑は、長軸43cm以上、短軸52cmを測り、底面に厚さ3～6cmを測る黄褐色粘土粒が多く混ざる灰色弱粘質土を貼り付ける。北側の新しい土坑は、長軸106cm、短軸62cmを測る。底面に厚さ2～7cmの濁浅黄～黄色粘土を貼り付け、上層の炭粒混ざりの灰色砂質土が固く締まることから貼床の一部を構成する可能

【F25-2区 SX4001】

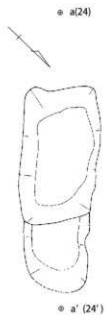
粘土面検出状況



● 断面は粘土を挟った範囲を示す。



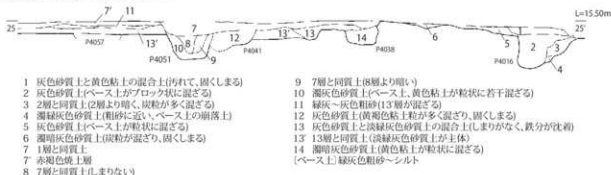
粘土面除去後状況



- 1 灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる)
- 2 薄浅黄～黄色粘土(灰色砂質土粒が混ざる)
- 2 薄浅黄～黄色粘土(1cm弱の小砂粒が混ざる)
- 3 灰色弱粘質土(黄褐色粘土粒が多く混ざる)
- 4 1層と同質土
- 5 にぶい褐色細砂(河跡3001(古覆土))

0 (1:30) 1m

【E-F23区 SX4004】(第159・161図)



- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる)
- 2 灰色砂質土(ベース上がブロック状に混ざる)
- 3 2層と同質土(2層より暗く、炭粒が多く混ざる)
- 4 薄緑灰色砂質土(薄砂に近い、ベース上の崩落土)
- 5 灰色砂質土(ベース上が粒状に混ざる)
- 6 薄暗灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる)
- 7 1層と同質土
- 7 赤褐色土層
- 8 7層と同質土(しまりない)
- 9 7層と同質土(8層より暗い)
- 10 薄灰色砂質土(ベース上、黄色粘土が粒状に若干混ざる)
- 11 緑灰～灰色粗砂(13層が混ざる)
- 12 灰色砂質土(黄褐色粘土粒が多く混ざり、固くしまる)
- 13 灰色砂質土と淡緑灰色砂質土の混合土(しまりがなく、鉄分が沈着)
- 13 13層と同質土(淡緑灰色砂質土が主体)
- 14 薄暗灰色砂質土(黄色粘土が粒状に混ざる)
- [ベース上] 緑灰～明茶色粗砂～シルト

【G26区 SX4004】(第159図)



- 1 灰色砂質土と黄色粘土の混合土(汚れて、固くしまる)
- 2 灰色砂質土(黄褐色粘土ブロックが混ざり、固くしまる)
- 3 薄黄～黄褐色粘質土(炭粒が多く混ざる)
- 4 2層と同質土
- 5 2層と同質土(黒灰色土がブロック状に混ざる)
- 6 2層と同質土(2層より暗く、炭化物が多く混ざる)
- 7 5層と同質土(ベース上が粒状に混ざる)
- [ベース上] 緑灰～明茶色粗砂

0 (1:60) 2m

第205図 G地区 第IV面SX平面図・土層断面図 (S=1/30・1/60)

性が高い。また、同時に数個の径7cm前後の自然石が埋め込まれる。ともに、遺構の切り合い関係から河跡3001(古)より古く位置付けられる。顕著な被熱痕はないものの、現時点では、屋外の煮炊き施設の可能性を考えたい。出土遺物のうち、第207図912の非ロクロ土師器甌片を図化した。912は口径25.5cmを測り、口縁端部に強いヨコナデ調整を施す。他に非ロクロ土師器甌片を主体に、ロクロ土師器甌、Ⅱ期の坏蓋を含む須恵器の小片が数点出土した。

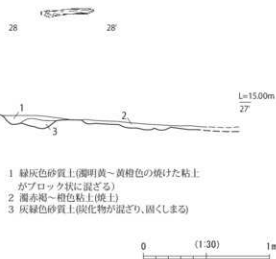
SX4002(遺構：第155・156・206図、遺物：第207・217図)

E-23-2区、F-23-1・3区で検出し、北側は河跡3001(古)で削平される。南北方向6m以上、東西方向9～11mの略方形の範囲を整地した痕跡である。最大厚約20cmを測る造成土は固くしまり、炭粒混じりの緑灰色砂質土を基本に、一部上層で緑灰色砂質土に黄～褐色粘土粒が混ざる。また、整地土上面で

【E23-2区SX4002 焼土面】(第156図)

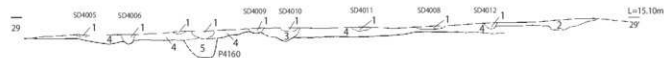


【F23-2区SX4002 鉄刀出土状況】(第155図)



- 1 緑灰色砂質土(濁明黄～黄褐色の焼けた粘土がブロック状に混ざる)
- 2 濁赤褐～褐色粘土(黄土)
- 3 灰緑色砂質土(炭化物が混ざり、固くしまる)

【F23-23区SX4002】(第159図)



- 1 濁褐色砂質土
- 2 1層と緑灰色砂質土の混合土
- 3 濁褐色砂質土
- 4 緑灰色砂質土(炭粒が混ざり、固くしまる。SX4002覆土)
- 5 4層と同質土(若干濃い)

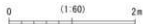


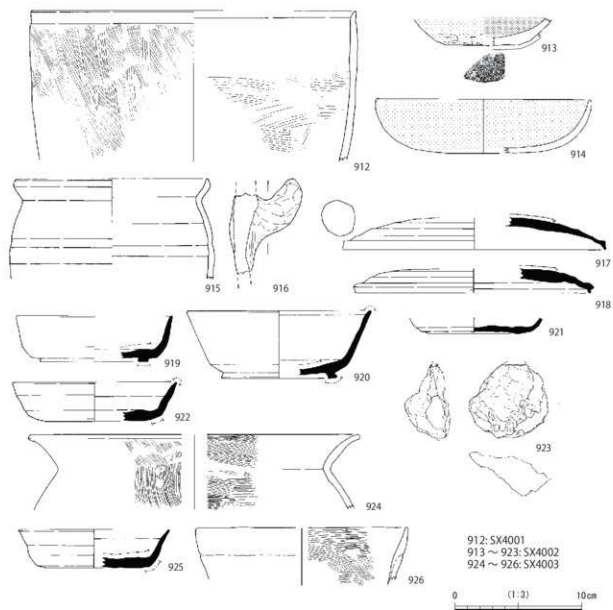
- 1 灰色砂質土(黄～褐色粘土粒が多く混ざる)
- 2 灰色砂質土(黄～褐色粘土粒が若干混ざる)
- 3 濁褐色砂質土
- 4 にぶい灰色砂質土(黄色粘土粒が混ざる)
- 5 灰緑色砂質土(黄色～褐色粘土粒が若干混ざり、固くしまる)
- 6 にぶい灰色砂質土と褐色粘土の混合土(固くしまる)
- 7 灰緑色砂質土(炭化物が混ざる)



- 1 濁灰緑色砂質土
- 2 灰緑色砂質土(炭化物が混ざる)

第206図 G地区 第Ⅳ面SX平面図・土層断面図2 (S=1/30・1/60)





第207図 G地区 第Ⅳ面SX出土遺物実測図 (S=1/3)

粘土を貼った焼土面を確認した(第206図)。平面不整形を呈する焼土面は、南北方向100cm以上、東西方向130cm以上、厚さ2～5cmを測り、SX4001と同様の性格をもつ焼土面と考えたい。整地層掘り下げ作業後に検出した遺構には、SB410柱穴(P4154・4159・4202)、SB411柱穴(P4156・4200等)、SB409柱穴(P4160)、SA402柱穴(4149・4201・4282・4284)、SA403柱穴(P4153・4155・4287)があり、整地作業より古く位置付けられる。また、耕作に伴う小溝であるSD4005・06・08～13は、整地作業より新しく位置付けられる。

出土遺物のうち、第207図913～923、第217図1113を図化、913・914・916は非ロクロ土師器、917～922は須恵器となる。内黒外赤の埴913は、底部を含めて外面下半にケズリ調整を施す。扁平な赤彩埴914は口径18.7cm、器高4.3cmを測る。磨減が著しいものの、底部外面にわずかにケズリ調整が残る。薄手のロクロ土師器壺915はロクロひだが目立ち、焼成は堅緻である。916は甌類把手片である。坏・盤類蓋917は口径20.7cmを測り、内面は不整方向ナデ調整の後、外寄りにカキメ調整を加える。坏蓋918は口径18.5cmを測り、口縁端部を小さく下方にひきのばす。919・920は有台坏で、919の体部は

直立気味である。920は口径14.4cm、器高5.3cmを測り、体部は直線的に外傾する。底部外面に回転ケズリ調整を施した後、外展する台部を付ける。無台坏921は器肉が薄く、922は底部外面に丁寧なナデ調整を加える。915を除き、Ⅲ～Ⅳ₂期に位置付けられる。塊形滓923は半分程度が残存する。鉄刀1113は、刃先をほぼ南方向に向けて水平の状態出土した(第206図)。茎部に近い部分であり、残存長24.7cm、最大幅3.2cm、最大厚0.8cmを測る。他に非ロクロ土師器甕を主体に、弥生土師器、ロクロ土師器、V期を下限とする須恵器坏類、尖底の製塩土器の小片が出土した。

SX4003(遺構：第152-163図、遺物：第207図)

調査区南西端F-20-1・2区のSD4045南側で検出した整地痕跡で、調査区外に延びる。厚さ約10cmを測り、整地土は濁灰色砂質土(第163図土層5)を基本とする。遺構の切り合い関係から、SB401柱穴P4265・66より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第207図924～926を図化した。非ロクロ土師器甕924は硬質で、口縁部は大きく外反する。須恵器無台坏925の底部内面は使用に伴い摩耗する。926は平底と考えられる製塩土器口縁部片で、口径約16cmを測る。他に非ロクロ土師器甕を主体に、内黒の非ロクロ土師器坏、ロクロ土師器、須恵器坏類、尖底の製塩土器の小片が出土した。

SX4004(遺構：第159-161・205図)

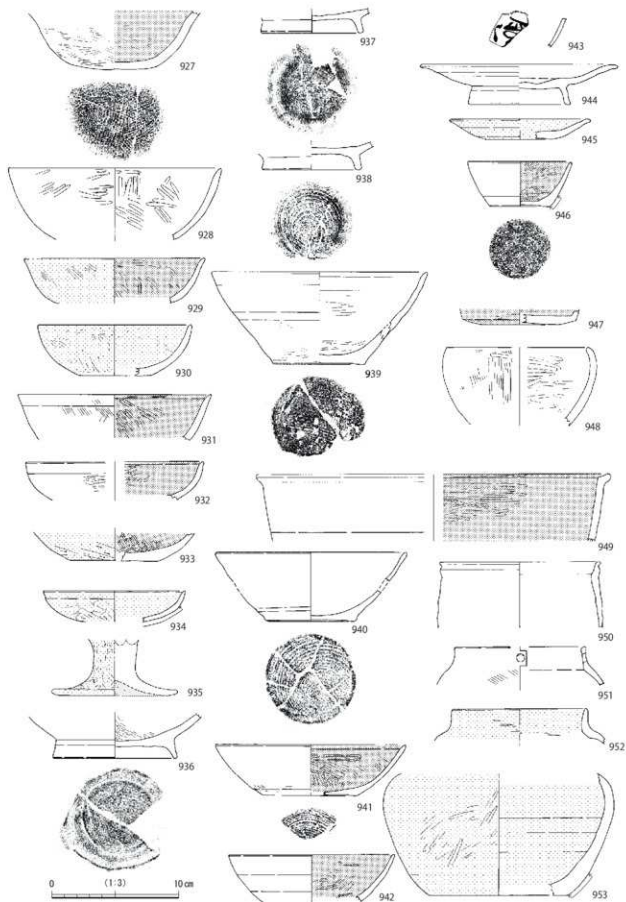
G-25-3区、F-26-2・4区、G-26区で検出した整地痕跡で、調査区外東側に延びる。南西-北東方向10m以上、南東-北西方向4m以上の範囲を、炭粒混ざりの灰色砂質土と黄色粘土の混合土で整地する。最大厚22cmを測る造成土上面には、部分的に赤褐色を呈した焼土層が確認でき、SX4002の焼土面と類似した性格をもつと考えられる。また、整地土上面で明確な遺構プランを把握できず、SB421・423等の柱穴は整地層掘り下げ作業後に検出したことから、SX4004に前出する建物の可能性が高い。

7 包含層等出土遺物(第208～216図)

第Ⅳ面の遺物包含層は、第8図32～35層の炭化物や黄色粘土粒が混ざる濁灰～暗灰色砂質土を基本とする。比較的多く出土した遺物のうち、第208図927～第216図1112を図化した。

第208図927～934・948は非ロクロ土師器坏類、935は高坏、951は小型甕で、Ⅱ₂期～Ⅳ₁期頃に位置付けられる。厚手の内面黒色塊927は口縁部で大きく外側に開く。外面はハケ調整の後、体部に粗いミガキ調整を加える。身の深い928は口径16.8cmを測り、外面下半にケズリ調整を施す。内黒外赤の929は口径14.1cmを測り、口縁端部で小さく外反する。両面赤彩の930は口径11.9cm、器高4.0cmを測り、外面に黒斑が残る。931・932は内面に黒色処理を施す。931は口径15.2cmを測り、胎土中に海綿骨針が多く混ざる。932は口径約14cmを測り、丁寧なミガキを施す薄手の精良品である。内黒外赤の933は、底部外面に静止糸切り痕をそのまま残す。両面赤彩の934は口径11.1cmを測る小形品である。赤彩の高坏935は、脚部を断面多角形状に仕上げる。肉厚の948は口径約11cmを測り、口縁部が内湾するため鉢形を呈する。内面にミガキ調整、外面にハケ調整が残る。非ロクロ成形と考えられる小型壺片951は口径約10cmを測る。短く内傾気味の口縁部に、焼成前に円孔(径0.6cm)を穿つ。

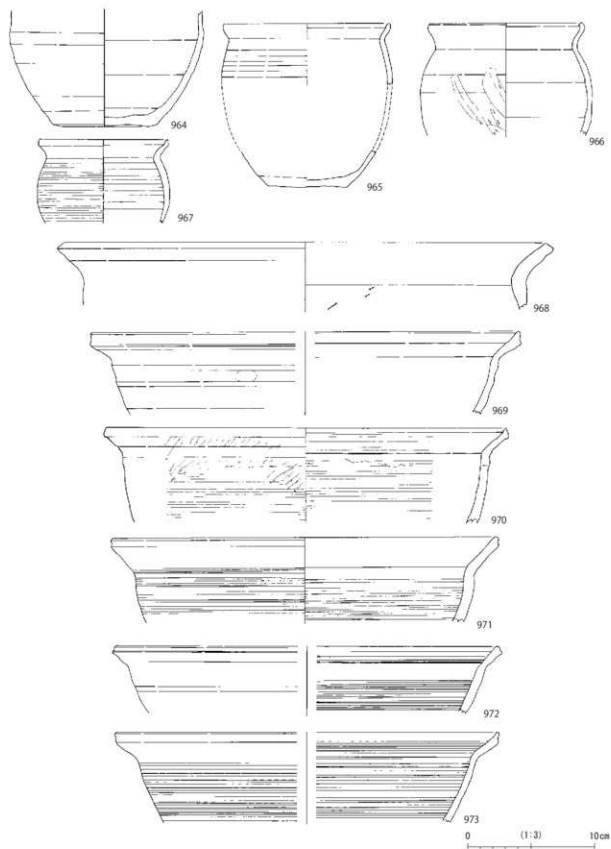
936～947・949・950・952・953はロクロ土師器で、煤の付着等の二次被熱痕を残す個体が多い。936～938は外展する台部をつける有台坏である。いずれも二次被熱痕を残し、938は内面に炭化物が付着することから灯明容器に転用した可能性が高い。939～942は無台坏である。939は口径16.7cm、器高約7.3cmを測る大型品で、底部外面に静止糸切り痕を残す。外面下半と内面にミガキ調整を施す。940は口径約15cmを測り、体部外面下端が沈線状にくぼむ。内黒の941は口径14.8cm、器高4.0cmを測る。内面のミガキは丁寧であり、体部外面下端にケズリ調整を施す。内黒の942は口径13.0cmを測る。塊形体部片943は、外面に第196図860と近似した判読不明の2文字の墨書が残る。有台皿944は口径15.4cm、



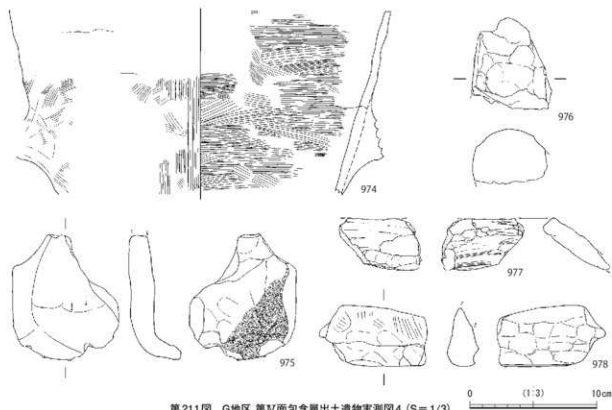
第208図 G地区 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)



第209図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)



第210図 G地区 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図3 (S=1/3)



第211図 G地区 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図4 (S=1/3)

器高3.2cmを測り、底部外面に回転ヘラ切り痕をそのまま残す。両面赤彩の皿945は口径10.4cm、器高1.6cmを測り、蓋の可能性を残す。小坏946は口径8.1cm、器高3.6cmを測り、内面は丁寧なミガキ調整の後に黒色処理を施す。正位で二次被熱し、口縁部外面に煤が付着する。坏類947は、両面とも丁寧なミガキ調整の後に黒色処理を施し、断面も黒灰色を呈する。内黒の鉢片949は口径約28cmを測り、口縁端部を横方向にひきのばす。小片のため傾きに不安を残す。小型の鉢類950は口径12.4cmを測る。直立する口縁端部外面に沈線状の加飾をおこなう。952・953は赤彩の壺類である。952は口径10.5cmを測り、口縁部は短く直立する。胴部片953は、胎土中に混和材がほとんど混ざらない。945・948・952・953はⅢ期前後、それ以外はⅤ₂期～Ⅵ₂期を中心とした時期に位置付けられる。

第209図954は非ロクロ土師器甕で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。955～961は、ロクロ成形の土師器長甕である。955は口径23.1cmを測り、口縁端部は外反しながら先細る。胴部下半を叩き痕がかすかに残る。956の口縁端部は断面三角形を呈し、粘土が柔いうちに叩き成形を施したため、外面の平行叩き痕の彫りが深い。957は煮炊きに伴う煤が付着し、磨減が著しい。958は口径21.0cmを測り、口縁部を上方に屈曲しながら薄くひきのばす。薄手の959は口径21.1cmを測り、口縁端部を内傾気味に短くつまみあげる。960は口径20.0cmを測り、口縁端部は内傾気味である。961は口径約20cmを測り、上半をロクロナデ、下半は叩きで整形する。内面の当て具は扇形文と考えられる。962は非ロクロ土師器甕で、頸部で明瞭に屈曲する。

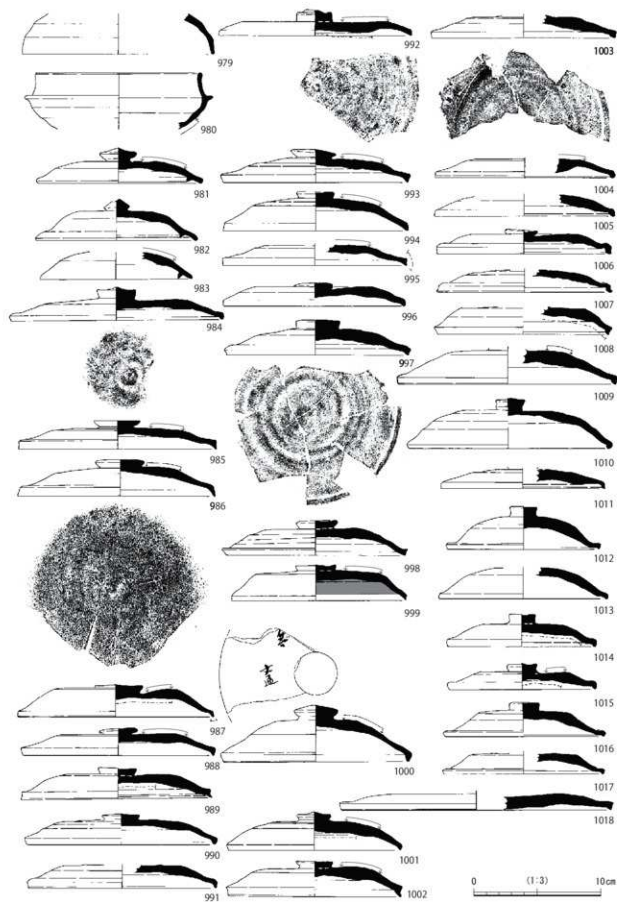
第209図963～第210図967はロクロ土師器小甕である。963は底部外面に静止糸切り痕を残す。964は底径8.4cmを、965は口径13.0cmを測る。ともにロクロひだが目立ち、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。薄手の966は口径11.8cmを測り、口縁端部が内屈する。967は口径10.1cmを測り、胴部両面にカキメ調整を施す。第210図968～973はロクロ土師器壺で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレやコゲが比較的明瞭に残る。口径は、968が38.0cm、969が約33cm、970～973が30cm強を測り、口縁端部の形状は、平

壇に仕上げる968、断面三角形を呈する969-971、小さくつまみ出す970-973、丸く仕上げる972と多様である。また、970の外面上には平行叩き痕がかすかに残る。第211図974は非ロク口成形の甌と考えられる。非ロク口成形の975は、箱形を呈する大型品のコーナー部と考えられ、類似の破片がP4011から出土している。内面に煤が付着する他、器面に一部は被熱に伴い橙色に変色する。976は支脚片と考えられ、外面が被熱する。977-978は粘土の積み上げ痕を残す置きカマド片である。977の外面下縁に剥離痕が、978の外面下部に切断痕が認められる。

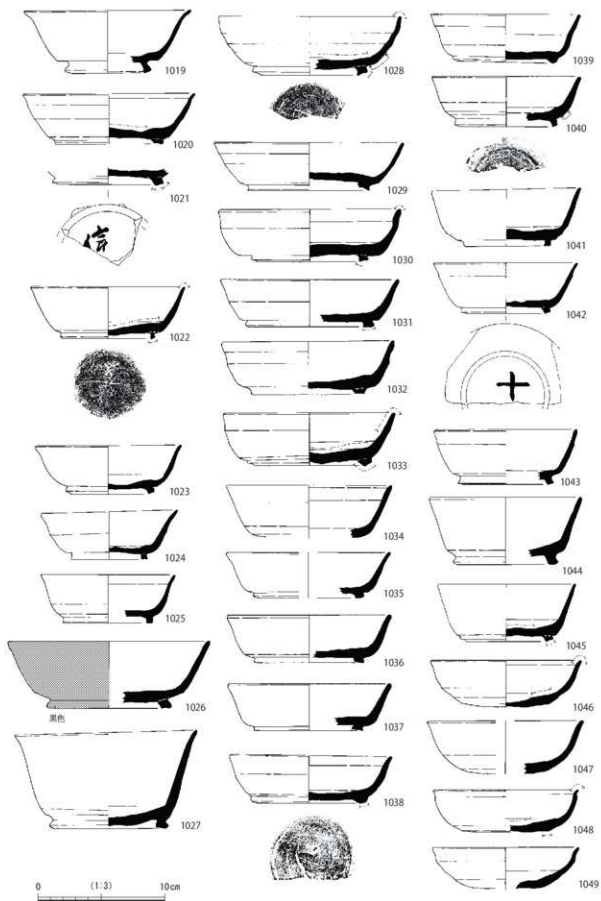
第212図979～第216図1103は、須器である。坏H蓋979は口径15.0cmを測り、還元が弱い赤褐色を呈する。肩部の稜は形骸化し、胎土の特徴から羽咋窯跡群産と考えられる。坏H身980は口径14.8cmを測り、口縁部は反りながら長くのびる。MT15並行期の能登産と考えられる。ともに、調査区周辺に集落域が存在したことを示す資料といえる。981～983は坏G蓋である。981は口径12.8cm、器高2.8cmを測り、降灰が著しい。982は口径12.6cm、器高3.3cmを測り、鈕頂部は成形時に歪む。内外面とも褐色を呈した漆状の付着物が残る他、内面に黒色の煤が付着する。

坏蓋984～1017のうち、扁平な大型鈕を付ける個体はⅡ₃期～Ⅳ_{2(前)}期を中心に位置付けられる他、1010～1017はⅣ_{2(前)}期以降と考えられる。984は口径16.7cm、器高2.6cmを測り、天井部外面は回転ヘラ切り後に回転ナデ調整を施す。985～987は口径約15.5cmを測り、径3.5cmを超える大型鈕を付ける。988-989は口径約15.2cm、器高約2.5cm、鈕径3.0cmを測り、口縁端部は目立たない。989は天井部外面をナデ調整にとどめる。990は口径14.8cm、器高2.4cmを、991は口径14.8cmを測り、天井部外面に回転ナデを施す。扁平な992は、しっかりとしたボタン状の鈕を貼り、口縁端部はほとんど目立たない。天井部内面に焼成前に刻んだヘラ記号「×」が残る。993～995は口径14.6cmを測る。993-995が口縁端部をしっかりと面取りするのに対して、994は折り返し弱い。996～998は口径14cm強を測る。997は、回転ヘラ切り後に粗いナデ調整を施す他、大型の鈕を付ける。口縁端部の面取りが鋭い998は、天井部内面に薄く墨痕が残り、摩耗具合からも転用甌と考えられる。平笠形を呈する999は、口径13.7cm、器高2.8cmを測り、甌に転用される。背が高い1000は口径14.0cm、器高4.3cmを測る。天井部外面2ヶ所に小さく墨書を記し、うち1ヶ所は「丈通」と判読可能である。1001-02は口径約13.6cm、1003は口径14.4cmを測る。1004は胎土に混和材がほとんど混ざらず、焼き影れが著しい。1005～1007は口径14cm以下で、回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。1008は口径13.4cmを測り、天井部内面は強く擦ったため、混和剤が剥離し、非常に平滑となる。1009は口径17.0cmを測り、天井部の器内は厚い。1010は口径15.6cm、器高4.1cmを測り、還元が弱い赤褐色を呈する。1011～15は甌に転用される。1011は口径12.8cmを測り、天井部内面に墨痕が残る。1012は口径12.0cm、器高3.4cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。鈕上面と天井部内面は使用に伴い平滑となる。ナデ屑の1013は、天井部内面中央付近に墨痕が認められる。1014は口径11.6cm、器高2.6cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。1015～17は肩部で明瞭に屈曲し、口縁端部を小さく折り曲げる。盤類蓋と考えられる1018は口径21.2cmを測り、回転ヘラ切り後にナデ調整を加える。

第213図1019～1045は有台坏で、1019がⅡ₃期、1020～30がⅢ期前後、1041以降がⅤ期に位置付けられる。1019は口径13.0cm、器高5.0cmを測り、やや内寄りに付けた台部は外側にしっかりとふんばる。焼成堅緻で、外面は黒灰色を呈する。1020は焼成堅緻で、扁平な台部を付ける。1021の底部外面に墨書が記され、文字のつくりは「言」と考えられる。1022の底部外面には焼成前に刻まれたヘラ記号「×」が残る他、使用に伴う磨耗が著しい。1023～1025は口径11cm前後、器高約4cmを測り、腰部に張りをもつ。また、1025は正位無蓋で焼成され、内面を含めて降灰が著しい。1026は外面に黒色処理を行った特殊な有台坏で、口径15.7cm、器高3.8cmを測る。体部は直線的に外傾し、第Ⅲ-Ⅱ面出土品(第



第212図 G地区 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図5 (S=1/3)



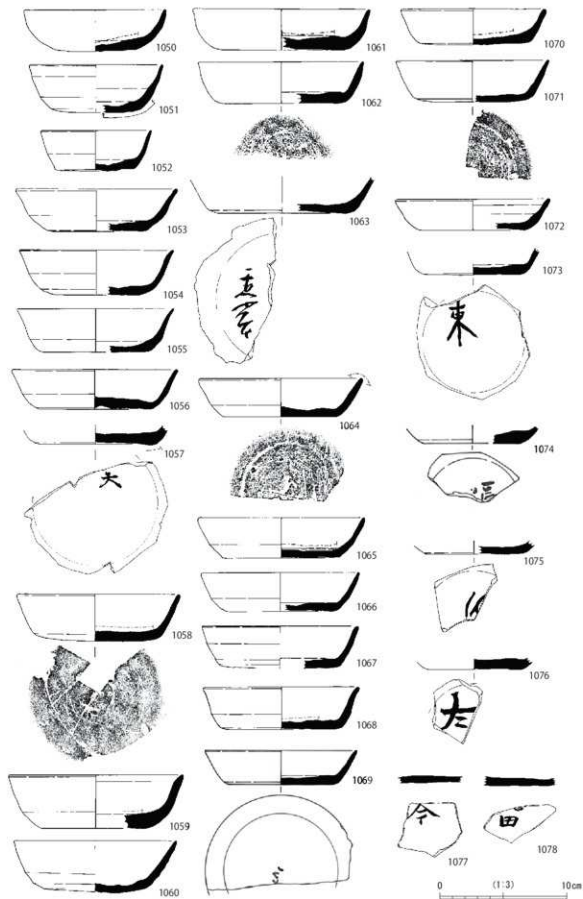
第213図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図6 (S=1/3)

136図559)と同一個体の可能性をもつ。1027は口径14cm、器高7.8cmを測り、身はかなり深い。1028は、体部が内湾気味に立ち上がり、胎土が精良である他、焼成は堅緻である。1029とともに外面下半に丁寧な回転ケズリ調整を施した後に台部を付ける。1029は口径14.8cm、器高3.8cmを測り、台部の一部は整形時につぶれる。1030～38は偏平な印象を受ける一群である。肉厚な1030は還元が弱く、小振りな台部を中央寄りに貼り付ける。1031に比して、1032の台部は目立たない。1033は還元が弱く、使用に伴う磨耗が著しい。1036～38は口径12.8cm前後、器高4cm弱を測る。箱形を呈する1039は口径11.7cm、器高3.9cmを測り、焼き歪みが目立つ。1040は底部外面にヘラ記号が刻まれる。1041は口径11.6cm、器高4.6cmを測り、台部は内屈気味である。1042は底部外面に記号様の墨書「+」が記される。1043は、体部が長くのびる。1044は口径11.8cm、器高5.4cmを測り、焼成が甘いため磨減が著しい。1045は底部外面に丁寧なナデ調整を加え、体部は直線的にのびる。

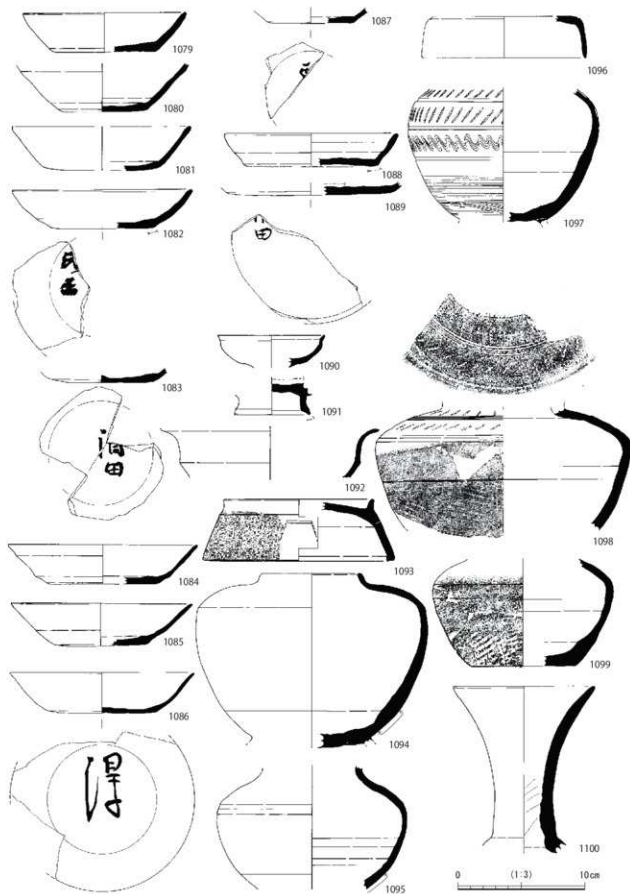
第213図1046～第214図1051は、Ⅱ期に主体を持つ無台碗である。1046は口径10.8cm、器高4.1cmを測り、腰部に屈曲する。1047は身が深く、底部は内外面とも丁寧なナデ調整を施す。1048は内湾気味に体部が立ち上がり、口縁端部で小さく外反する。1049～51は、胎土の特徴から羽咋産と考えられる。1049は底部が狭く、口縁部はゆるやかに外反する。1050の体部は内湾気味である。1051は底部外面に粗いケズリ調整を加え、体部は直線的に立ち上がる。1052は口径8.6cm、器高3.2cmを測り、Ⅴ期に位置付けられる。

第214図1053～第215図1087は無台碗で、1053・60・65・71・75・77がⅤ期、1079～87はⅥ期に位置付けられる。1053の底部は台状を呈する。1054は底部外面に丁寧な回転ナデ調整を加える。1055・56の体部は緩やかに外傾する。1057は肉厚の底部外面に「大」と墨書し、Ⅳ期に位置付けられる。1058は底部外面に三角形様のヘラ記号が残る他、底部内面を除いて被熱に伴い煤が付着する。1059は深身・肉厚の個体で、口径13.6cm、器高4.2cmを測る。1060は口径12.7cm、器高4.3cmを測り、黄橙色を呈する。1061～1072は偏平な一群である。1061は口径13.8cm、器高3.2cmを測る。底部の内外面ともかすかに墨痕が残り、転用碗の可能性をもつ。1063は、底部外面に「□(土カ)万呂」と墨書し、Ⅳ期と考えられる。1064は体部が直線的に外傾し、底部外面に數物瓦痕とヘラ記号「/」が認められる。1065は薄手で、体部は内湾気味に立ち上がる。1066・67は口径約12.3cm、器高3cm強を測る。1068は底部外面にかすかに墨痕が残る他、底部内面は使用に伴い平滑となる。1069は、底部外面中央に墨書が残るものの、文字は判読できない。1070は口径11.2cm、器高3.0cmを測り、体部は短い印象を受ける。1071の体部は直線的に外傾する。1072は偏平で、盤形態に近い。1073～1078は底部外面に墨書が残る。1073が「東」、1074は「□(福カ)、1077は「令」または「今」、1078の2文字目は「田」と判読できる。1079は還元が弱く、体部が大きく外傾する。1080の底部は円盤状を呈し、焼成不良のため磨減が著しい。1081は薄手で、体部は直線的に外傾する。煮沸容器に転用され、器内は脆くなるとともに外面に煤が付着する。1082は、底部外面に2文字の墨書が記され、2文字目は「主」の可能性が高い。1083の底部外面に記された墨書は「酒田」と考えられる。1080・85～88は、第三・二面石集中に伴う可能性が高い。1084～86は口径14cm台を測り、器肉が薄く、また焼成があまい。1086は底部外面に大きく「得」と墨書する。1087の底部外面に記された墨書の文字は判読できない。1088・89は、無台盤である。1088は口径13.5cm、器高2.6cmを測り、底部やや台状を呈する。1089は還元が弱く、底部外面に記された墨書の2文字目は「田」と判読できる。

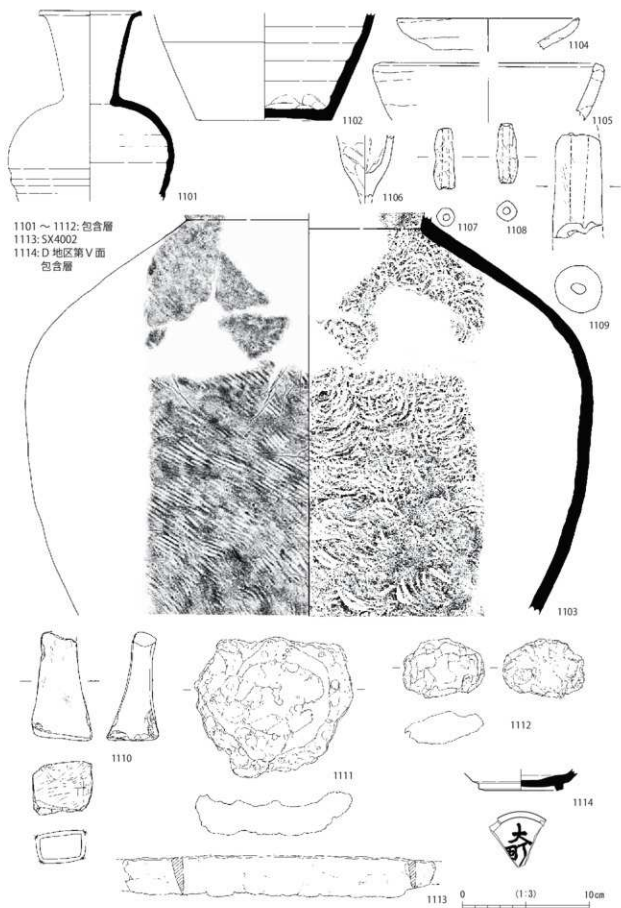
第215図1090は小型の碗類と考えられ、口縁端部を外側に短く折り曲げる。口径8.4cmを測り、脚が付す可能性をもつ。1091は台径5.9cmを測る仏器的器種と考えられ、底部内面は使用に伴い平滑となる他、煤が付着する。稜碗1092は体部中程で明瞭に屈曲する。團足円面碗1093は口径11.6cm、器



第214図 G地区 第IV面包含層出土遺物実測図7 (S=1/3)



第215図 G地区 第Ⅳ面包含層出土遺物実測図8 (S=1/3)



第216図 G地区 第Ⅳ面包含層等出土遺物実測図9 (S=1/3)

高4.9cmを測り、陸部は使用に伴い平滑となる。海部から陸部に向けて円滑に移行、足端部を内側に肥厚させる。また、足部外面を乱れ気味の斜格子で加飾する他、1ヶ所で残存する透かしは平面長台形を呈するものと考えられる。

第215図1094～第216図1102は壺・瓶類である。台付短頸壺1094は口径7.6cmを測り、降灰の状況から無蓋と考えられる。1095も同様に無蓋となる。壺類蓋1096は口径12.8cmを測り、肩部に小さな稜をつくる。台付長頸壺1097は、外面を沈線と刺突文、乱れた波状文、カキメで丁寧に加飾する。瓶類1098は外面を叩き具で整形し、肩部を4条の沈線、2列の刺突文で加飾する。小型の壺1099は外面を叩きとケズリ調整で整形する。長頸瓶1100は口径11.1cmを測り、内面はしほり痕が目立つ。Ⅵ期に位置付けられる長頸瓶1101は口径7.9cmを測り、ロクロひだが目立つ。瓶類1102は底部内面の整形が粗く、正位無蓋で焼成される。甕1103は胴径約45cmを測り、外面に自然釉が熔着する。

第216図1104～06は尖底タイプの製塩土器である。1104は、口径14.1cmを測る。器肉が厚い1105は、口径約16cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。1106は硬質の質感をもつ。1107～09は土師質土錘である。胎土が近似する1107-08は、ともに煤が付着し、重さ約11gを量る。大型の1109は径3.7cmを測り、胎土中に粗砂が多く混ざる。砥石1110は浅黄褐色を呈し、4側面を鎌等の中砥として使用する。また、両端は切れ目を入れた後に折られたものと考えられる。1111・12は塊形滓で、ほぼ完形の1111が594.8gを量る。なお、G地区では、未図化だが塊形滓片7点、フイゴの羽口片1点が出土した。D地区出土の須恵器有台坏1114は、底部外面に「大町」と墨書し、Ⅵ₁期と考えられる。

8 小 結

時間的位置付け 本遺跡の古代に営まれた集落域・耕作域の消長については、第1・2次調査報告書⁽¹⁰⁾でA～E期および集落1～6期に区分され、その時間軸が示されている(第39表)。G地区についても、この時間軸に基づき、掘立柱建物、出土遺物等の若干の整理をおこなった上で、7世紀末～9世紀末までの変遷案を示す。

掘立柱建物 検出・復元した掘立柱建物は26棟を数え、SB401～412の12棟が河跡

3001(古)の西側に、SB413～426の14棟が河跡3001(古)東側に、それぞれ分布する。以下では、前者の建物群を「西群」、後者の建物群を「東群」と呼称して、整理をおこなう。

調査区の土地利用については、集落域・耕作域がⅥ₂期に発生した調査区中央を縦断する土石流災害3(河跡3001(古))により、不明な点が多いものの、次の2点について指摘可能である。まず、地勢が西側に向けて傾斜する西群の建物主軸方位がN-20～38°W(N-27～32°Wに中心)に分布するのに対して、地勢が北西側に傾斜する東群の建物主軸方位がN-8.5～42.5°W(N-約10°W、N-約18°W、N-28～32°W、N-40°前後W)と、東群の建物主軸方位が偏在しながらも振幅がより大きく、明らかに異なる分布帯をもつ。これから、各期ともG地区全体を網羅するような画一的な建物主軸方位の規制をみいだすことが難しく、西群・東群それぞれで土地規制をもつものと考えられる。このあり方は、本遺跡A～C・E地区の調査でも確認されており、立地する勾配の強い扇状地形の制約から、基本的に北西～北を指向しながらも、建築群単位(土地占有単位を反映か)が一定の独立性を保持し、土地傾斜に応じた

第39表 古代集落の時間的位置付け

区 分	古代集落変遷期	田嶋氏編年
1次A期	集落1a・b期	Ⅱ ₁ 期～Ⅲ期
1次B期	集落2期	Ⅳ ₁ 期
1次C期	集落3期	Ⅳ ₂ 期
1次D期	集落4期	V期
	集落5期	Ⅵ ₁ 期
1次D期以降 (E期)	集落6期	Ⅵ ₂ 期～Ⅵ ₃ 期

建物群配置をおこなったものといえる。さらにいえば、両群の間(E~F・24区付近)に、土石流の誘因となった小河川等の何らかの区画が存在した可能性をもつ。2つ目に指摘できる点は、F地区北側~G地区南東側(G-20~23区付近)に建物が発見しない空地が継続することがあげられる。後述するとおり、この空白域には、集落4期に相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸(SE4001)が掘られ、斎申等を用いた小規模な祭祀行為がおこなわれる。集落域全体の中で、他とは異なる土地利用が継続したエリアであった可能性を示唆するものといえる。

建物構造が把握できる21棟は全て側柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は存在しない。身舎の柱間数・床面積がわかる9棟は、3間×3間3棟(SB407・408・420)が30㎡前後を、3間×3または2間1棟(SB419)と3間×2間1棟(SB417)が18㎡前後を、2間×1間1棟(SB409)が約17㎡を、平面正方形を指向する1間×2間1棟(SB406)と1間×1間2棟(SB412・418)が10㎡強となる。床面積でいえば、30㎡前後、20㎡程度、15㎡未満の3つの規模があり、A~C地区で確認した柱間数・平面積の分布とはほぼ同様な値を示す。また、不確定部分を残すものの、建物プラン・規模のありかたは、西群・東群で特に大きな差異が認めにくい。なお、大型の円形掘方をもつ西群のSB403が、B地区SB22と類似した床面積40㎡を超える大型建物となる可能性が高い。各建物の柱穴掘方の平面形態は、大部分の柱が抜き取られ、崩れやすい土質もあり、不整形を基調とする点も、他地区の様相と共通する。

耕作に伴う小溝群 SD4001-02・31以外の耕作に伴う小溝群約60条は、河跡3001(古)南側に分布する。小溝は、掘立柱建物廃絶以降に施された整地作業(SX4002・03)の後に、基本的に地形の傾斜に対して水平または垂直方向に掘られる。切り合い関係や主軸方位から、A小期(SD4026)→掘立柱建物主軸方位と類似する方位を示すB小期(約40条、B-1~3群、N-14~30°W)→C小期(約10条、C-1・2群、N-0~10°W)と変遷する。なお、河跡3001(古)北側は、掘立柱建物廃絶後に整地作業(SX4004)を行うものの、土地利用がなされなかった可能性が高い。また、遺構検出時に、各小溝に畝状の起伏がなく、覆土に土石流災害3の痕跡(淡灰色細砂等)が混ざらないことから、耕作域の廃絶と、土石流災害3の発生との間に一定の期間を想定するのが妥当と考える。

出土遺物 土壌堆積作用を基本とする扇状地地形の特質もあり、田嶋氏編年Ⅱ₂期~Ⅵ₂期に属する遺物が多数出土した。土器類の出土状況では、河跡3001(古)の両岸で顕著な時期差は認められず、両群の建物は密接に関連しながら存続したと考えられる。出土遺物は、墨書土器、円面硯、転用硯を含む多数の須恵器、土師器を中心に、尖底を主体とした製埴土器小片が目立つ他、金属製品(銅製巡刀、鉄刀)、生産活動を示す埴型滓、フイゴ羽口、土錘を確認している。また、斎申を主体としたSE4001での祭祀行為も、本地区を考えるうえで重要である。木製品の出土は、大型の区画溝・自然流路等が存在しないため、出土点数はそれ程多くない。

以下では、第0・Ⅰ面~第Ⅳ面の節ごとに分散して記述した墨書土器、特徴的な遺物について取りまとめを行う。G地区出土の墨書土器は、未実測の小片を含めて88点を数え(第40表)、便宜的に河跡3001を軸に3区分した場合、出土地点別で特に強い偏在性をみだせない。また、時期別にみた場合、各時期の中で集落5期(V₂~Ⅵ₁期)に属する墨書土器が28点を数え、出土点数全体の約1/3を占めることが分かる。次に、墨書を行った土器の種類・器種別で区分した場合、県内他遺跡とはほぼ同様の傾向を示し、食膳具である須恵器坏類、特に無台坏を主体としており、本地区では集落5期に新しく須恵器無台盤(376・1089)、ロクロ土師器埴(860・943)が加わる。部位でみれば、須恵器坏蓋が天井部外面に、有台坏・無台坏・無台盤が底部外面である他、ロクロ土師器埴が体部外面に横方向に2文字を記す。

文字が判読または推定できた個体は34点を数え、点数でみれば「酒田」6点、「乙上」4点、「玉万呂」4点が比較的目的立つ存在である。「酒田」(集落3・4期)、「玉万呂」(集落2・3期)、「梗女」(集落4期)、「仲」・「口

第40表 G地区出土土器土器等一覧表

出土地点別（未実測遺物 28 点を含む）

区 分	点数	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ ₁ (西)	Ⅴ ₂ (東)	Ⅵ ₁	Ⅵ ₂ ～Ⅵ ₃	Ⅵ ₄	時期不明
		集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
河跡3001 以南	41	0	3	2	3	2	14	2	15
河跡3001	17	2	3	1	3	1	3	0	4
河跡3001 以北	30	1	2	5	5	0	11	2	4
計	88	3	8	8	11	3	28	4	23

器種別（未実測遺物 28 点を含む）

区 分	点数	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ ₁ (西)	Ⅴ ₂ (東)	Ⅵ ₁	Ⅵ ₂ ～Ⅵ ₃	Ⅵ ₄	時期不明
		集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
須恵器・坏蓋	7	0	2	1	1	1	1	0	1
須恵器・有台坏	17	3	2	2	2	1	4	0	3
須恵器・無台坏	60	0	4	5	8	1	19	4	19
須恵器・無台盤	2	0	0	0	0	0	2	0	0
ロクロ土師器・埴	2	0	0	0	0	0	2	0	0
計	88	3	8	8	11	3	28	4	23

文字内容別（実測遺物 60 点のうち 34 点）

文 字 内 容	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ ₁ (西)	Ⅴ ₂ (東)	Ⅵ ₁	Ⅵ ₂ ～Ⅵ ₃	Ⅵ ₄	時期不明
	集落1期	集落2期	集落3期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	
「乙上」								1370502
「乙□（上々）」			1370586	1290463				
「□上」								1370630
「田田」					1460750			
「酒田」					1060204		2150303	
「□（酒々）田」							3070335、 21504089	2160108
「□（福または酒々）」					21403074			
「東」				21403073				
「寺」			1360562					
「正木□」				1460741				
「五万呂」			1910600					
「□□（五万々）」				3070338				
「□（五々）万呂」				1190204	21403063			
「□方□」								1470709
「梗女」							1290454	
「仲」					1010226			
「□（田々）仲」							1470766	
「得」								2150306
「文」						62077		
「□物」	1010228							
「□（信々）」		21304021	1030830					
「□（大々）」				21403057				
「□□（丈通々）」		21201000						
「□□（木々）」						1900800- 2080943		
「□（今または令々）」								2160107
「+」					21301042			
「田」						1070245		
転用後		2120996- 999-1011		1910808、 2120102-14-15				

「田々」仲（集落3・4期）は、本遺跡南半のA～C・E地区には存在せず、隣接するF地区や羽咋市教委調査区（第1図）で確認できることから、本遺跡北半側に偏在する文字といえる。「酒田」は特定の水田名称、

第41表 G地区出土特徴的な遺物一覧表

種別	器種	検出番号	番号	面	グリッド名	遺構名	備考
灰軸陶器	皿	62	78	第0・1面	F-22-4	F1100、包含層	K-90段階
銅製帯金具	遠方・表金具	108	349	第Ⅲ-1面	F-22-2	下層包含層	他にJ地区で2点出土
須恵器	円面硯	196	846	第IV面	F-26-4	P4074	第106図316と同一個体か
須恵器	円面硯	215	1093	第IV面	F-31-1	包含層	
須恵器	有台坏	213	1026	第IV面	F-26-4	包含層	外面黒色処理
須恵器	坏	215	1090	第IV面	F-23-2	包含層	燈坏か
木製品	歯串	201	893 ～ 896	第IV面	G-22-1	SE4001	
木製品	横櫛	201	897	第IV面	G-22-1	SE4001	
木製品	鎌柄	201	899	第IV面	G-22-1	SE4001	
鉄製品	直刀	216	1113	第IV面	F-23-2	包含層(下層)、 SX4002	
埴形滓	—	207	923	第IV面	E-23-2	SX4002	他にI111-12、未実測7点、未実測7イゴ詰I11点

「玉万呂」、「櫻女」は特定の人名を指すものと考えられ、「酒田」墨書は四柳ミッコ遺跡E地区第I面河道1からも出土をみる。一方、「乙上」(集落2期)、「田地」(集落3期)は、A～C・E・F地区(集落2～4期)や羽咋市教委第1次調査区で出土例があり、意味不明ながら、本遺跡で比較的広範に分布する文字である。

施設名または地名と考えられる文字では、集落2期に「東」、「寺」、「聖本□」が各1点出土している。「東」は、F地区で出土例がある他、A・B地区出土の「屋東」(集落3期)と関連する可能性をもつ。「寺」は、100m以上離れたA・B地区の集落5期に出土例があり、いわゆる村落内寺院が集落2期～5期まで長期にわたり存続した可能性を示すものといえる。さらに「聖本□」の3文字目が「寺」と推定可能であれば、本集落内に所在した寺院名称となりうる⁽¹¹⁾。「得」(集落6期)は吉祥句、「+」(集落4・5期)は数量管理を目的とした文字と考えられ、A～C地区に出土例をもつ。新出の文字「住」「文」については、類例の増加を待ちたい。なお、第216図114のD地区第IV面出土の墨書の文字「大町」は、本遺跡F地区や、約800m離れた大町C遺跡⁽¹²⁾から出土例があり、古代の本集落を中心とした周辺地域の「賑わい」を端的に示す地名または集落名と考えたい。

次に特徴的な遺物としては、灰軸陶器皿(78)、銅製巡方(349)、円面硯(846・1093)等がある(第41表)。灰軸陶器皿はK-90段階に位置付けられ、本遺跡の出土はF地区第Ⅲ面に中心域をもつ⁽¹³⁾。腰帯は、A地区出土の銅製丸帯、F地区出土の石製巡方、同地区第IV面出土の銅製鉋尾等を含め、本遺跡で6点出土している。須恵器製円面硯片2点は、第1次調査以降、各地区で広範に多出する転用硯とともに、本遺跡全体における活発な文書作成行為を裏付けるものであり、本遺跡のもつ性格の一端を示すものといえる。また、埴形滓の出土から、各地区で小鍛冶作業を行ったことが分かる。

G地区第IV面の変遷案 G地区第IV面については、前述のとおり田嶋氏編年Ⅱ₂期～Ⅱ₃期の遺物が継続的に出土するが、掘立柱建物柱穴等の遺構に伴う遺物は限られる。以下では、出土土器の比定時期を考慮しつつ、遺構間の切り合い関係や位置関係、また主軸方位等を併せて検討し、最も矛盾の少ないと考えられる現時点での変遷案を示す(第217・218図)。

G地区第IV面の変遷は、大きくは7世紀末～8世紀初頭(田嶋氏Ⅱ₂期～Ⅱ₃期)に成立した集落域(集落1～4期)、9世紀後葉(同Ⅱ₄期)の小規模な整地作業を伴う耕作地(高地)への転換(集落5期)、そして耕作地廃絶後の土石流災害3の発生(集落6期、10世紀初頭(同Ⅱ₅期))、第Ⅲ-2面の形成(10世紀前葉、Ⅱ₃期)という過程を経る。なお、復元できなかった建物が存在する可能性が高いことや、集落域が広

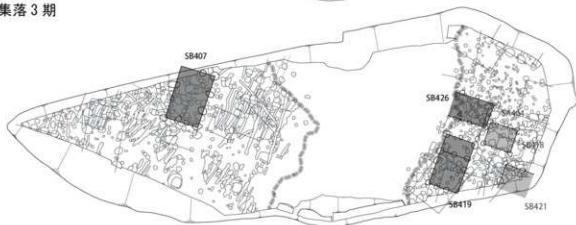
集落1期



集落2期



集落3期



集落4a期



第217図 G地区 第N面主要遺構変遷図1(S=1/500)

0 10 20 30 m

集落4b期



集落5a期



集落5b期



集落6期



第218図 G地区 第IV面主要遺構変遷図2(S=1/500)

0 1:500 10m

大で、かつ調査区の外側に延びること(東側の緩斜面に集落中心域を想定)に留意されたい。

集落1期 他地区と同様に古代の集落域が成立する大きな画期となる。西群でSB402、SB408・SA401(およびSA403)、東群でSB416、SB422、SB423(およびSA404・407)を想定し、櫓(塀)を多用する点に特徴をもつ。建物主軸方位(西群N-27・31°W、東群N-27～32.5°W)が近似する2つの建物群単位よりなり、両群の間には河跡3001(古)で流出した何らかの区画施設が存在を考えたい。西群はSB408(3間×3・2間、床面積27.6㎡)の南東側に櫓SA401を配し、調査区外東側に展開する空地と隔てる。東群は、大型建物SB422を含む建物を2回建て替えとしたが、SB422については主屋SB423を取り囲む櫓(塀)とも考えられ、その場合は櫓(塀)で囲まれた同規模の建物が建て替えられた(SB422+SB223、SA407+調査区外主屋)とも考えられる。墨書土器は「□物」(228)が確認できる。

集落2期 西群でSB401、SB403、東群でSB413、SB417を想定した。建物主軸方位は、西群がN-35～38°W、東群がN-39～42.5°Wを示す。西群は径1m前後を測る大型の柱穴掘方をもつ建物2棟で構成され、うちSB403は床面積40㎡を超える大型建物となる可能性が高い。西群のSB413、SB417(床面積15.1㎡)は、本遺跡で多くみられる居住用途をもつ建物と考えられる。墨書土器は増加し、「乙上」「土万呂」に加えて、施設名・地名と考えられる「東」「寺」「厩本□」が出土する。「寺」墨書がいわゆる村落内寺院を示す他、「厩本□」の位置付けについては前述のとおりである。

集落3期 西群でSB407(3間×3間、床面積31.7㎡)、東群でSB418・419・421・426、SA404を想定した。建物主軸方位は、西群SB407がN-31.5°W、東群がN-28～31.5°Wと近似した値を示す。東群は、廂をもつSB419(3間×3間、床面積18.6㎡)とSB426、またSB421とSB418(1間×1間、床面積11.4㎡)が、それぞれ主屋(居住)、副屋(雑舎)の関係をもつと考えられるが、前後関係は不明である。墨書土器は、「土万呂」に加え、新たに「田地」「酒田」「仲」の文字が確認できる。

集落4a期 9世紀前葉～中頃の集落4期を、a・b2小期に分けた。集落4a期は、西群でSB409・411(・405?)、東群でSB415・424を想定した。建物主軸方位は、西群が集落3期と大差ないN約28°Wを示すのに対して、東群はN-8・18°Wと北指向を強める。さらに2棟の主軸方位が異なることから、別の建物群単位とすることも可能性である。西群SB409の床面積は16.9㎡を測る他、集落1期以降、継続的に空地であったエリアにSE4001が掘られ、同地区における画期となる可能性をもつ。

集落4b期 西群でSB404・406・410・412、SE4001を、東群でSB414・420を想定した。西群の建物主軸方位はN-28～32°Wと、集落3期以降の方位を維持しており、SB404・410が主屋(居住)、床面積10㎡強を測るSB406・412が副屋(雑舎)と考えられる。相欠式横板組(横板蒸籠組)のSE4001では、畜串等を用いた小規模な祭祀行為が行われる。東群の建物主軸方位は、集落4a期と近似するN-10・17°Wを示し、それぞれの建物群単位で建て替えを行う。墨書土器は出土点数が増加する。文字内容は、「酒田」「梗女」「□(田)仲」「文」等が確認できる一方、集落3期までの「乙上」「田地」の文字は出土しない。

集落5a期 7世紀末に成立した集落域が廃絶し、西群が耕作域(畠地)に転換する大きな画期で、a・b2小期に分けた。集落5a期は、西群、東群とも黄色粘土粒を混ぜた土で整地作業痕跡(SX4002～04)を行い、西群で畠地が展開する。西群の小溝は、その分布からB-1～3群の3つの耕作単位が復元可能であり、集落4b期の土地区割りを踏襲している可能性をもつ。各群の小溝の主軸方位は、B-1群がN-20～26°Wを、B-2群がN-14～30°Wを、B-3群がN-30°Wを示し、地形の傾斜に強い影響を受けている。一方、東群は整地作業を行うものの、明確な耕作痕跡は認められない。いずれにしても、この集落5a期は、G地区のみならず、A・B地区での大規模な整地作業痕跡やF地区での耕作域への転換、また羽咋市教委第4次調査区で確認できる集落の活発化等、本遺跡全体の大きな再編期であった可能性が高い。

集落5b期 集落5a期の様相が基本的に継続する。西群の耕作地は、溝主軸方位がN-0～10°Wと、北

を強く指向する。SA402やSD4031は、本小期に属すると考えられる。東群は、前小期の様相を維持する。また、墨書土器は、吉祥句と考えられる「得」が1点出土している。

集落6期 集落5b期の耕作地(高地)が廃絶し、一定の期間を経て、河跡3001(古)を本流とする土石流災害3が発生、第Ⅳ面を厚い土砂で被覆する。その後、河跡河岸で第Ⅲ-2面(第149図)が展開する。

【註】

- (10) 布尾和史・澤辺利明他2005「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
川畑 誠他2017「羽咋市四柳白山下遺跡Ⅲ」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- (11) 3文字目は欠損部分が多いことから、あくまで可能性の域を出ない。また、「聖本」墨書は、「東院寺」墨書や鉄鉢等の仏器器種の出土から寺院及び関連施設と考えられる宝達志水町杉野屋専光寺遺跡から3点が出土している(註9文献、上野 敬他1998「杉野屋専光寺遺跡」志賀町教育委員会)。報告書の中で、「聖本」墨書は9世紀前半～半ばのものであり、比定地が定かでない古代羽咋郡の郷の一つである岡本郷との関連を指摘している。また、浅香年木氏(1980「第2章 古代」)「志賀町史」第5巻沿革編 志賀町役場)によれば、「和名類聚抄」記載の羽咋郡岡本郷については、子蒲川周辺(後の志雄庄・菅原庄周辺、杉野屋専光寺遺跡が立地)、志賀地域於古川・安津見川周辺(後の加茂庄周辺)、羽咋市柴垣周辺が考えられており、2遺跡で共有する「聖本」の文字の歴史的位置付けのついては、今後の類例の増加を待ちたい。四柳白山下遺跡と杉野屋専光寺遺跡は、直線距離で約6km離れる。
- (12) 中島俊一・川畑誠1995「大町遺跡 小金森ヘイナイメ遺跡-県営ほ場整備事業余喜地区埋蔵文化財発掘調査報告-」石川県立埋蔵文化センター
- (13) F地区第Ⅲ面では、白磁碗1点、緑釉陶器2点、灰釉陶器13点が出土した。

第46表 G地区 第Ⅳ面出土器類観察表5

発掘 番号	遺物 番号	出土層	器種	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内底形状	内底内径	取手	内底厚	外底厚	外底径	底形状	備考	調査 番号
210	1941	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	11.0	8.0	8.0	底 底	×	中	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底、	940019
210	1942	F1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	11.1	7.0	8.1	横底 横底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底、内底に器底「ナ」	940020
210	1943	F1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	11.1	7.8	8.3	底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底、	940021
210	1944	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	11.0	8.7	5.4	浅底 浅底	×	平底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940022
210	1945	F1-4	炊事器	須弥部	輪弁形	10.0	7.8	8.8	底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底	940023
210	1946	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	11.0	8.0	8.1	底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底が浅く、内底に口縁 隆起	940024
210	1947	F10-3	炊事器	須弥部	輪弁形	8.0	8.0	8.0	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940025
210	1948	F10-1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	11.4	8.0	3.3	深底 深底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底、内底に器底	940026
210	1949	F10-1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	11.9	8.0	3.2	深底 深底	×	中平底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底、器底へ うねり隆起ナナメ	940027	
210	1950	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	11.1	7.3	3.3	底→浅底 底→浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	口縁隆起が浅く、内底器底	940028
210	1951	F10-2-2	炊事器	須弥部	輪弁形	10.4	7.6	3.3	底→浅底 底→浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940029
210	1952	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	8.0	8.0	3.2	浅底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940030
210	1953	F10-1-4	炊事器	須弥部	輪弁形	12.1	7.8	3.4	底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940031
210	1954	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	7.0	3.4	底 底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940032
210	1955	F10-5	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.4	3.4	横底 横底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940033
210	1956	F10-3-2	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.0	3.2	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940034
210	1957	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	-	8.0	3.3	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底、器底「口」 隆起	940035
210	1958	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	10.4	3.7	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底が浅く、器底へ うねり隆起ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	940036	
210	1959	F10-5	炊事器	須弥部	輪弁形	13.0	8.0	4.2	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940037
210	1960	F10-6	炊事器	須弥部	輪弁形	12.7	8.1	4.3	浅底 浅底	×	平底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底、浅底器底	940038	
210	1961	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	10.7	3.2	浅底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底にうねり隆起「ナ」、内底器底 隆起あり、内底器底	940039
210	1962	F10-1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	10.2	3.3	横底 横底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底にうねり隆起、内底器底	940040
210	1963	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	10.0	2.8	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「口」は「ナ」	940041
210	1964	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.0	3.0	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底隆起、へう隆起「ナ」	940042
210	1965	F10-2-5	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.4	3.1	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940043	
210	1966	F10-1-2	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.4	3.1	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底器底隆起、浅底	940044	
210	1967	F10-1	炊事器	須弥部	輪弁形	12.2	8.2	3.4	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940045
210	1968	F10-1-5	炊事器	須弥部	輪弁形	12.1	8.7	3.3	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に口から器底	940046	
210	1969	F10-1-4	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.2	3.7	底→浅底 底→浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底、浅底器底	940047	
210	1970	F10-1-4	炊事器	須弥部	輪弁形	11.3	8.0	3.0	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底、内底器底	940048
210	1971	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	11.0	8.0	3.0	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底にへう隆起「ナ」、口縁器底 隆起	940049
210	1972	F10-6-3	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.4	3.3	底 底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940050	
210	1973	F10-2-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	8.0	(3.1)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「浅」	940051
210	1974	F10-2-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	7.6	(1.4)	浅底器 浅底器	×	中平底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底「口」隆起	940052	
210	1975	F10-2-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	8.0	(1.1)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底、浅底器底	940053	
210	1976	F10-1-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	7.8	(3.8)	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	-	内底に器底、浅底器底	940054
210	1977	F10-3-3	炊事器	須弥部	輪弁形	-	-	(3.6)	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	-	内底に器底、「やぶら」は「ナ」	940055
210	1978	F10-1-1	炊事器	須弥部	輪弁形	-	-	(3.7)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	-	浅底器底、内底に器底「口」隆起	940056
210	1979	F10-2	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	7.8	3.1	浅底 浅底	×	中平底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940057
210	1980	F10-2-2	炊事器(須弥部が 欠損)	須弥部	輪弁形	-	7.7	(3.8)	浅底器 浅底器	×	平底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	-	浅底器	940058	
210	1981	F10-3	炊事器	須弥部	輪弁形	8.0	8.2	3.4	浅底器 浅底器	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底(浅底器底が浅く)	940059
210	1982	F10-1-1	炊事器	須弥部	輪弁形	12.0	8.0	3.0	浅底器 浅底器	×	中平底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「口」は「ナ」	940060
210	1983	F10-4	炊事器	須弥部	輪弁形	-	7.0	(3.1)	浅底器 浅底器	×	中平底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「浅底器」、浅底器底	940061
210	1984	F10-1-1	炊事器	須弥部	輪弁形	14.0	8.2	3.1	底 底	×	平底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940062	
210	1985	F10-2-2	炊事器(須弥部が 欠損)	須弥部	輪弁形	14.2	7.2	3.7	浅底 浅底	×	平底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940063
210	1986	F10-2-2	炊事器	須弥部	輪弁形	14.4	8.0	3.2	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「浅」	940064
210	1987	F10-2-2	炊事器	須弥部	輪弁形	-	7.0	(3.2)	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に器底、浅底器底	940065
210	1988	F10-1-1	炊事器(須弥部が欠 損)	須弥部	輪弁形	13.1	10.8	(1.8)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底、内底器底	940066	
210	1989	F10-2	炊事器	須弥部	輪弁形	-	11.4	(1.0)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ、ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底「浅」	940067
210	1990	F10-2-2	炊事器	須弥部	輪弁形	8.4	-	(2.6)	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	浅底器底	940068
210	1991	F10-2-2	炊事器	須弥部	輪弁形	-	8.0	(3.5)	底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底平底、浅底器底	940069
210	1992	F10-3-3	炊事器	須弥部	輪弁形	-	-	(3.6)	浅底 浅底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	-	口縁隆起が浅く、内底器底	940070
210	1993	F10-1	炊事器(浅底器 底)	須弥部	内底器	11.0	10.2	8.0	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、器底へ うねり隆起ナナメ	0.011.06	内底に浅底器底が浅く、浅底 器底、浅底器底	940071
210	1994	F10-1-1	炊事器	須弥部	輪弁形	7.0	-	(3.5)	底 底	×	底	0.010ナナメ	0.010ナナメ、ナナメ	0.011.06	浅底器底隆起、浅底器底	940072

第47表 G地区 第Ⅳ面出土土器類観察表6

注1) 括弧内は数量を示す。

調査 番号	グリッド座	出土遺構	種 類	種 類	形 状	高径 (cm)	底径 (cm)	内径 (cm)	外径 (cm)	厚 度	内 蓋 形 状	外 蓋 形 状	注 記	備 考	調査 番号
210	1000 F-19-4, F-19-1-4	住居層	須恵器	甕	口徑 12.0	-	13.4	流紋	楕円	0	コウロコナデ	コウロコナデ、器脚7 式1	-	須恵器正統型、内径面一筋1 筋の須恵器	900003
210	1000 F-21-2, F-23-4	住居層	須恵器	須恵器類	12.0	-	13.3	流紋	圓	0	コウロコナデ	コウロコナデ	021.04	内蓋無し	900004
210	1000 F-24, F-29-2	住居層	須恵器	須恵器類	-	-	19.6	流	圓	0	コウロコナデ、ナデ	コウロコナデ、ナデ	-	流紋面・流紋文・流紋文で加飾	900005
210	1000 F-19-1-2	住居層	須恵器	甕	-	-	19.4	流	楕円	0	コウロコナデ	コウロコナデ、平行ナ デ多量	-	内蓋無し、流紋面・流紋文で加飾	900006
210	1000 F-20-1	住居層	須恵器	甕	口徑 8.2	18.3	流	圓	0	0	コウロコナデ	コウロコナデ、器脚7 式4型一筋7式1	0021.06	内蓋無し、内蓋面無	900007
210	1100 F-05-1, F-05-2	住居層	須恵器	須恵器類	11.3	-	13.2	流紋	圓	0	コウロコナデ、ナデ	コウロコナデ	019.26	上蓋面有蓋付、内蓋面無・蓋 面無蓋付、流紋面、流紋文	900008
210	1100 F-21, F-22-2	住居層	須恵器	須恵器類	7.0	-	15.0	流紋	長楕円	0	コウロコナデ	コウロコナデ	022.26	蓋無し(流紋)	900009
210	1100 F-22-2B, F-22-23	住居層	須恵器	甕	-	18.6	18.5	流	圓	0	コウロコナデ、ナデ	コウロコナデ、器脚7 式1	0021.06	内蓋無し、蓋面・流紋面・流紋文	900010
210	1100 F-20-1-1, F-21-2	住居層	須恵器	甕	-	-	21.8	底の 流紋	円形ワープ	0	流	コウロコナデ、平行ナ デ多量	-	内蓋・内蓋無し、蓋面・流紋 面	900011
210	1100 F-21	住居層	須恵土器	瓦	14.1	-	17.3	流紋面	須恵器	須恵器、赤色 粘土	ナデ	ナデ	019.26	-	900012
210	1100 F-21	住居層	須恵土器	瓦	-	10.0	-	流	流紋	須恵器、流紋 面多量	ナデ	ナデ	021.26	-	900013
210	1100 F-15-1	住居層	須恵土器	瓦	-	-	15.0	流紋面	須恵器	須恵器、赤少、 流紋面多量	ナデ	ナデ	-	内蓋・流紋	900014
210	1101 F-22-4	住居層	土師器	土師	高4.0	径1.4	-	流	楕円	縮少	ナデ	ナデ	019.26	瓦割付5cm、須恵器5cm、二筋 面・流紋面	900015
210	1100 F-21-1	住居層	土師器	土師	高4.7	径1.4	-	流	楕円	縮少	ナデ	ナデ	019.26	瓦割付10-12cm、須恵器11cm、二 筋面、流紋面	900016
210	1100 F-28-3	住居層	土師器	土師	0.1	径1.7	-	流紋	流紋	須恵器・須恵器等11 多	ナデ	ナデ	-	瓦割付10-13cm、須恵器量 021.26	900017
210	1101 須恵器類 F-18-1	住居層	須恵器	須恵器類	7.0	-	15.7	底の 流紋	楕円	0	コウロコナデ	コウロコナデ、器脚7 式4型多量	-	内蓋・流紋(瓦割)	900018

第48表 G地区 第Ⅳ面出土石製品観察表

調査 番号	番号	グリッド座	出土遺構	種 類	材 質	高径 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	厚径差 (±)	備 考	調査 番号
210	1110	F-26-1	住居層	燧石	流紋面	15.1	4.0	4.2	011.2	流紋面、内蓋面(須恵器の中)に使用、同 層の中央部より出土の物	900019

第49表 G地区 第Ⅳ面出土金属製品観察表

注1) 括弧内は数量を示す。

調査番号	番号	調査 番号	グリッド座	出土遺構	種 類	材 質	高径 (cm)	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	厚径差 (±)	備 考
207	001	900001-1	F-23-2	900002	銅製葉	-	18.1	15.0	12.0	006.0	
210	1111	900001-2	F-29-2	住居層	銅製葉	-	12.4	10.0	2.7	006.0	
210	1112	900001-3	F-21-2	住居層	銅製葉	-	18.1	14.1	2.4	005.5	
210	1113	900001-4	F-23-2	住居層(7層)	銅製葉	流紋	12.7	2.2	0.8	012.0	

第50表 G地区 第IV面出土木製品観察表

注1) は検出位置を示す。

検出番号	番号	グリップ名	出土遺構	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	検出位置 (検出位置)	備 考	検出番号
196	194	9-22-2	144区中6区7	椀底	117.1	10.1	14.4	ナリ	大径・底持ち丸木、遺跡に散らばる遺構、遺物に珍重集	9区A-15
196	195	9-22-2	144区	椀底	122.0	7.7	6.9	ナリ	大径・底持ち丸木、遺構遺物	9区A-16
196	198	9-22-2	144区	椀底	123.1	6.6	6.6	ナリ	立持材	9区A-17
196	191	9-22-1	144区1番-1	椀底	102.1	10.2	1.7	-	検出、遺物あり	9区B-1
196	192	9-22-1	144区1番-2	椀底	102.7	10.0	2.1	-	検出	9区B-2
196	193	9-22-1	144区1番-3	椀底	98.0	10.2	2.2	-	検出	9区B-3
196	194	9-22-1	144区1番-4	椀底	96.6	11.0	2.0	-	検出	9区B-4
196	195	9-22-1	144区1番-1	椀底	119.0	11.0	2.1	大径	検出	9区A-18
196	196	9-22-1	144区1番-2	椀底	101.0	10.4	2.3	-	検出	9区B-5
196	197	9-22-1	144区1番-3	椀底	102.0	10.4	2.2	-	検出	9区B-6
196	198	9-22-1	144区1番-4	椀底	96.3	10.6	2.7	-	検出、一部3字痕	9区B-7
196	199	9-22-1	144区1番-1	椀底	119.0	10.0	2.1	-	検出、遺物あり	9区B-8
196	191	9-22-1	144区1番-2	椀底	107.4	11.1	2.0	-	検出	9区B-9
196	192	9-22-1	144区1番-3	椀底	96.5	11.0	2.0	-	検出	9区B-10
196	193	9-22-1	144区1番-4	椀底	114.0	11.0	2.0	-	検出、一端の辺線あり	9区B-11
196	194	9-22-1	144区1番-1	椀底	102.0	10.1	2.1	-	検出	9区B-12
196	195	9-22-1	144区1番-2	椀底	106.1	10.1	4.4	-	検出	9区B-13
196	196	9-22-1	144区1番-3	椀底	100.0	10.4	2.0	-	検出	9区B-14
196	197	9-22-1	144区1番-4	椀底	71.0	6.7	2.0	-	検出	9区B-15
196	197	9-22-1	144区1番(北東隅部)	椀	17.0	6.7	1.4	-	美材(2区あり)、断面方形	9区A-21
196	198	9-22-1	144区1番(北東隅部)	椀	10.0	2.0	2.1	-	美材(2区あり)、断面方形	9区A-22
196	199	9-22-1	144区1番(北東隅部)	椀	12.4	2.4	1.7	-	美材(2区あり)、断面方形	9区A-23
196	200	9-22-1	144区1番(北東隅部)	椀	12.4	2.1	2.0	大径	美材(2区あり)、断面方形、角縁加工	9区A-24
196	201	9-22-1	144区1番内 A区①	加工材	69.0	11.3	4.3	-	検出、144区1番内A区①	9区B-16
196	202	9-22-1	144区1番内 A区②	内面遺構	112.3	13.0	0.4	-	検出、144区1番内A区②(遺跡)内側、大径遺物	9区A-25
196	203	9-22-1	144区1番内 A区③	加工材	18.7	1.0	0.3	-	検出、遺物	9区A-26
196	202	9-22-1	144区1番遺構	加工材	112.1	1.0	0.7	大径	検出	9区A-41
196	203	9-22-1	144区1番遺構	遺物	11.0	1.7	0.2	大径	検出	9区A-42
196	204	9-22-1	144区1番遺構	遺物	12.0	1.0	0.2	大径	検出	9区A-43
196	205	9-22-1	144区1番遺構	遺物	13.2	1.0	0.2	大径	検出	9区A-44
196	206	9-22-1	144区1番遺構	遺物	12.4	1.0	0.4	大径	検出	9区A-45
196	207	9-22-1	144区1番遺構	遺物	13.1	2.0	0.2	ナリ	検出、遺物残存	9区A-46
196	208	9-22-1	144区1番遺構	加工材	11.3	4.2	-	ムラサキシロクワ属	立持木、上縁等加工	9区A-47
196	209	9-22-1	144区1番遺構	遺物	10.0	1.0	-	ナリ	立持木、遺跡に3m、検出下層に加工、遺物あり	9区A-48
196	200	9-22-1	144区1番遺構	加工材	14.4	1.4	-	ムラサキシロクワ属	立持木、上縁・側面中央部加工	9区A-49

第6節 第V面の遺構と遺物（第219～241図、第51～54表）

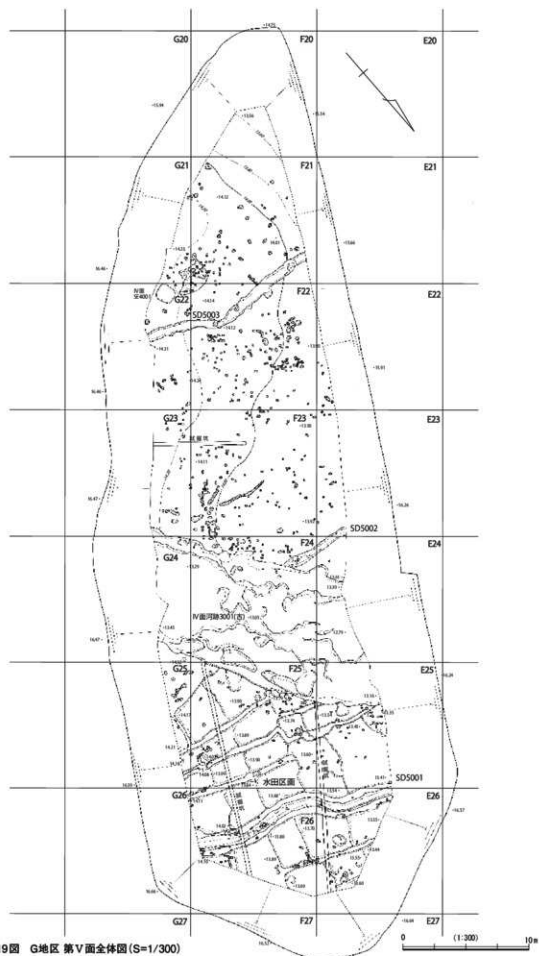
1 概 要(第219～233図)

G地区第V面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第IV面ベース土(第8図土層37～48層(洪水堆積土エ・以下、土石流災害4)を重機で除去した段階で検出した生活面である。遺構検出面(土石流災害4除去面)の標高は、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.73m(第IV面ベース面14.26mより-53cm)、G-23区杭脇で14.23m(同15.35mより-112cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で14.14(同15.30mより-116cm)、北端(F-26区杭西8m)で13.46m(同14.50mより-104cm)、北東端(F-27区杭脇)で13.69m(同14.90mより-121cm)を測り、第IV面ベース土(土石流災害4)の厚さは調査区北側で1mを大きく超える。また、遺構検出面の標高は13.3～14.3mを示し、標高差はGライン(北東-南西方向)が約0.04m、26ライン(南東-北西方向)が約0.6mを測る。基本的に北西側に向けて傾斜する地形といえ、北東-南西方向の傾斜は第IV面に比して緩やかである。第III・IV面にみられた急な傾斜地形は、第IV面ベース土(土石流災害4)の流入・堆積に起因するものといえる。

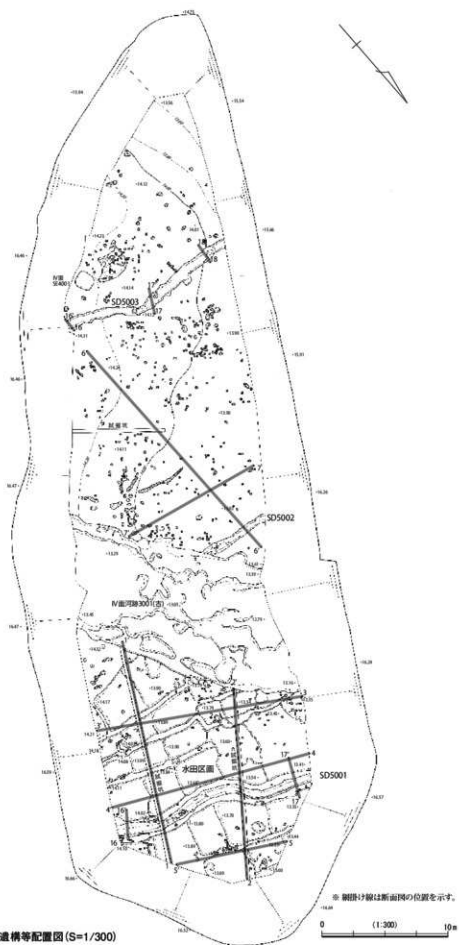
第V・VI面の基本的な土層順序(第231～233図)は、上層より順に第V面覆土(土石流災害4、淡灰色細砂～淡青灰色シルトまたは黄灰色砂利～砂)、第V面耕作土(土層a:暗褐色腐植土)、土層b(淡灰色粗砂、暗褐色腐植土等の交互堆積層)、古墳時代中期初め頃を下限とする第VI-1面遺物包含層(土層c:暗灰褐色砂質土)、第VI-1面ベース土(土層d等)、弥生時代中期後葉の第VI-2面遺物包含層(土層e:濁暗灰色細砂)、第VI-2面ベース土(灰オリブ色細砂・砂質土)となる。各層の厚さは、土層断面3-3を例にとれば、土層aが2～8cm、土層bが2～10cm、土層cが12～24cm、土層eが15～24cmを測る。

これらの堆積を子細にみれば、第IV面河跡3001(古)北側のE～G-25区付近、E～G-26区付近、第IV面河跡3001(古)南側の3つの様相に分かれる。まず、第IV面河跡3001(古)北側E～G-25区付近(第231図1-1'～第233図5-5')では、土層e(第VI-2面遺物包含層)から土層a(水田耕作土)まで間層をはは挟まず、安定的・連続的に順次堆積した状況を示す。次にE～G-26区付近では、土層cと土層bの間層に乳灰～青灰色細砂を主体とした土砂層(土層断面1-1'第9～12層、同2-2'第5～7層、同5-5'第4～9層)が認められる。これは、土層断面1-1'第11・12層、同2-2'第6・7層を本流とする南東方向から北西方向に向けた比較的小規模な土砂の流入・堆積痕跡(現地調査時はSD5004と呼称、写真図版99・100参照)であり、土層bも同期の堆積層と考えられる。3つ目の第IV面河跡3001(古)南側(第233図土層断面6-6'、7-7')では、土層c(第VI-1面遺物包含層)の直上に、第V面覆土(土石流災害4)が流入・堆積し、耕作土(土層a)が未形成である点や、E～G-26区付近に存在した土層bを含む小規模な土砂の流入・堆積痕跡が認められない点に特徴をもつ。以上のことから、第VI-1面・V面の展開は、第VI-1面集落域の廃絶→調査区北側斜面(E～G-25区付近中心)での小規模な土砂の流入・堆積→第V面(耕作域)の造成・放棄→土石流災害4の発生が想定でき、さらに間層のあり方から、第VI-1面集落域～第V面の耕作放棄までは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。

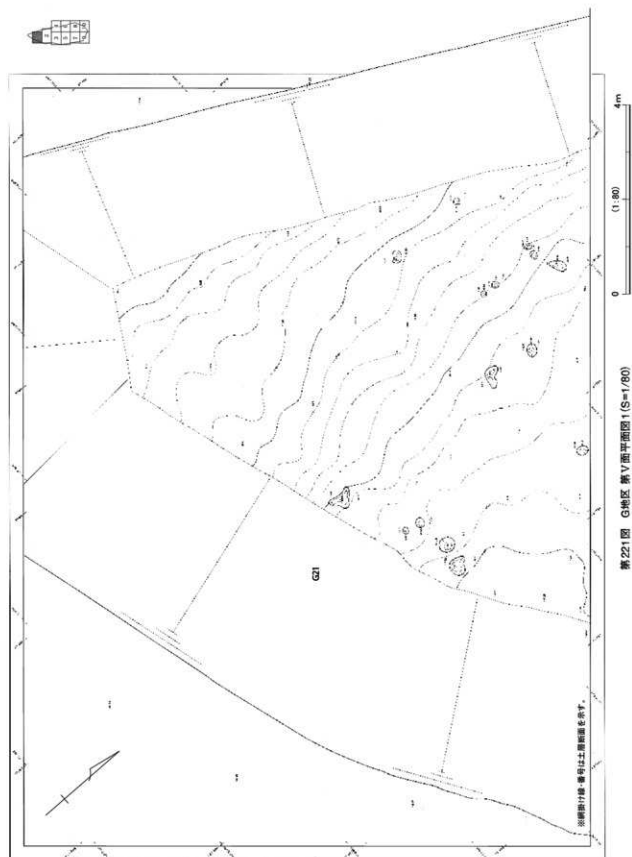
調査の結果、第IV面河跡3001(古)北側で、第7次調査を踏まえると、古墳時代中期末頃と推定できる水田区画1ヶ所(小区画水田27枚、その間を流れる溝1条)を、第IV面河跡3001(古)南側で溝2条を検出し、調査区全面で水田耕作を意図したものと考えられる。遺物は、遺構の性格もあり、少量の弥生土器、土師器、木製品、石器が出土したにとどまる。なお、本遺跡の一連の調査の中では、同規模の小区画水田を、第4次調査D・F地区第V面、第7次調査K地区第V面で検出している。

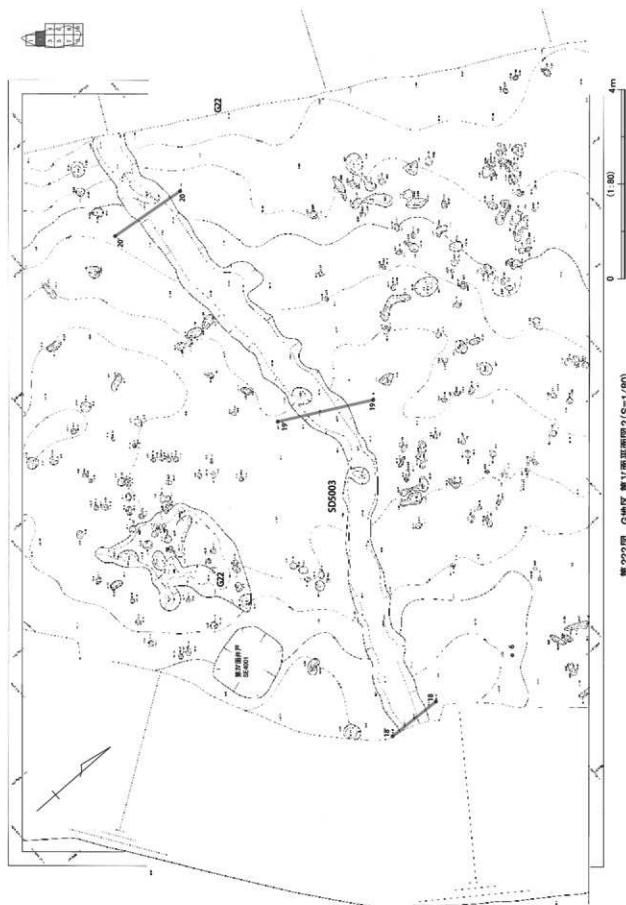


第219図 G地区 第V面全体図(S=1/300)

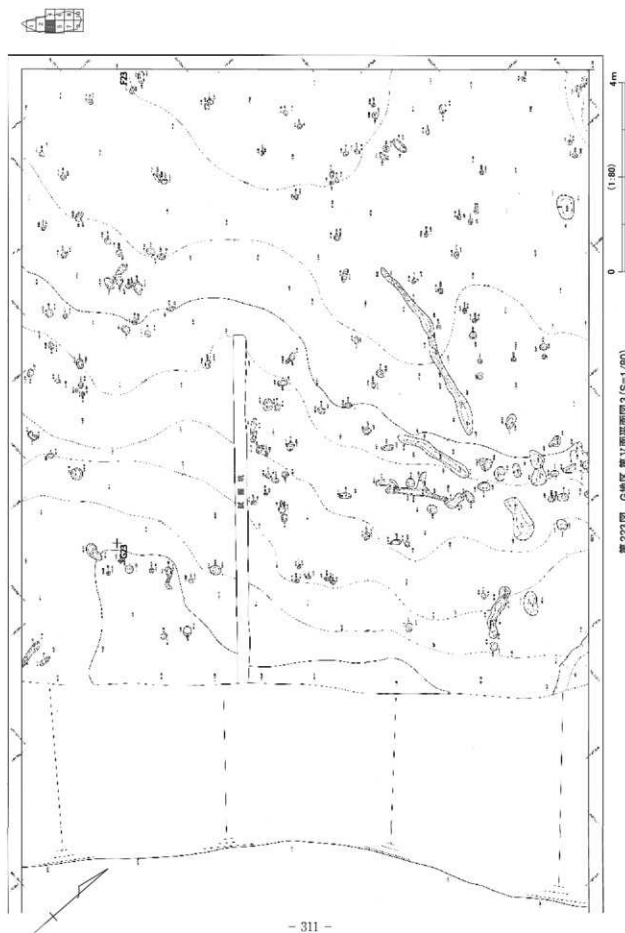


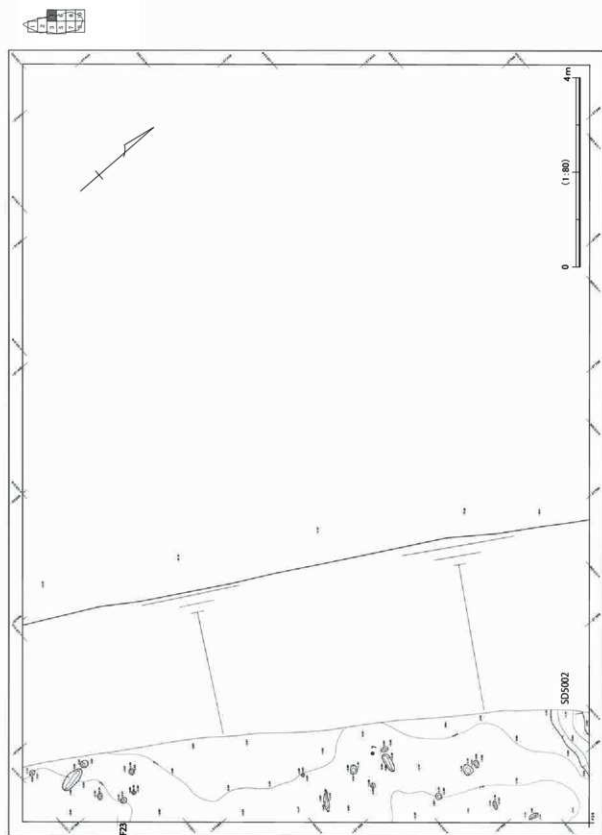
第220図 G地区 第V面遺構等配置図(S=1/300)



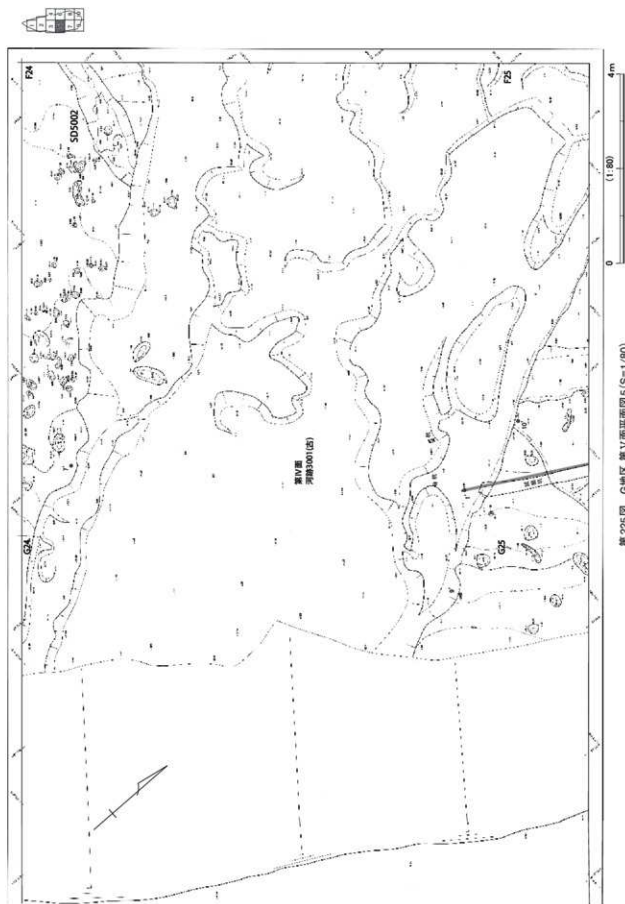


第222図 G地区 第V面平面図2 (S=1/80)



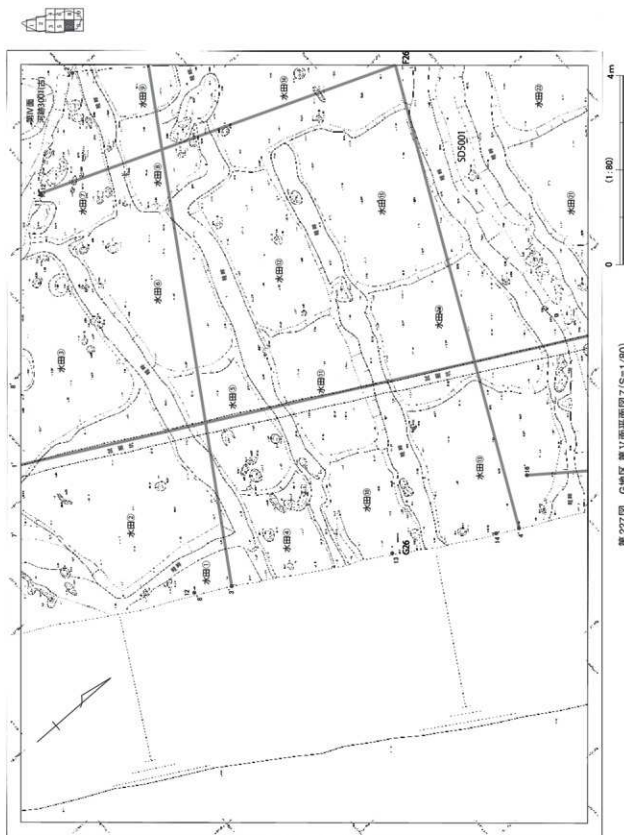


第224図 G地区 第V面平面図4(S=1/80)

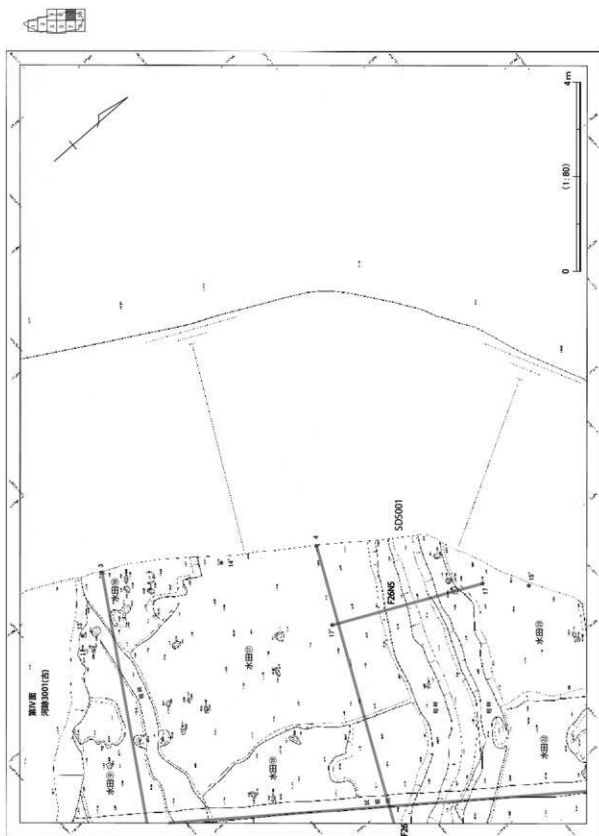




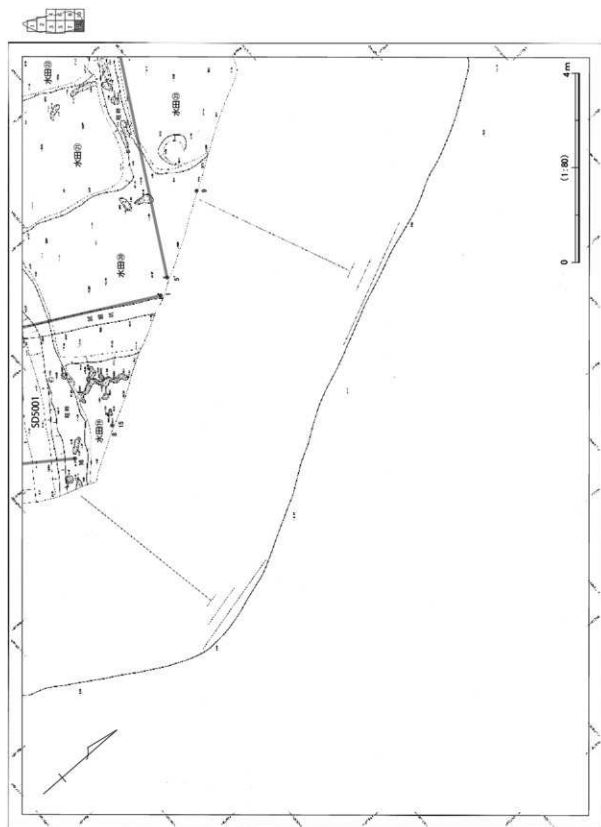
第226図 G地区 第V面平面図6 (S=1/80)



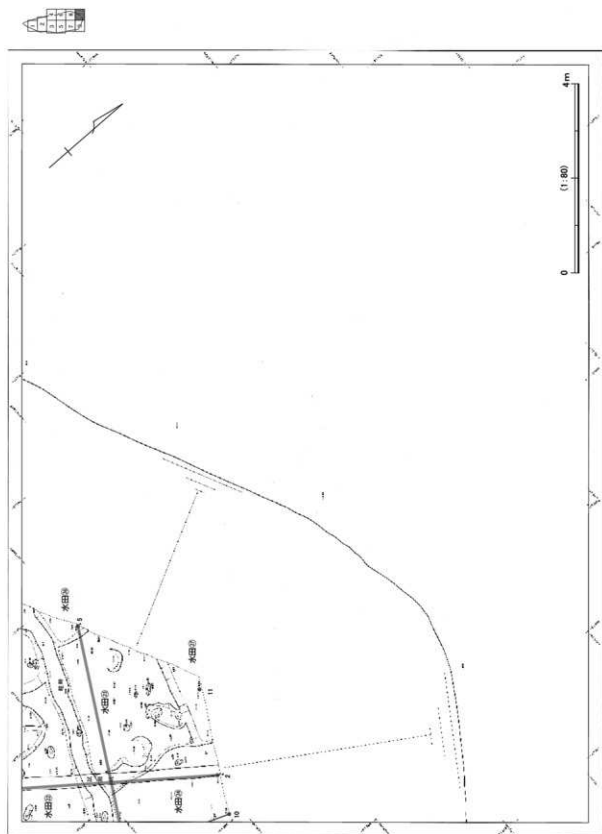
第227図 G地区 第V面平面図7(S=1/80)



第228図 G地区 第V面平面図B(S=1/80)

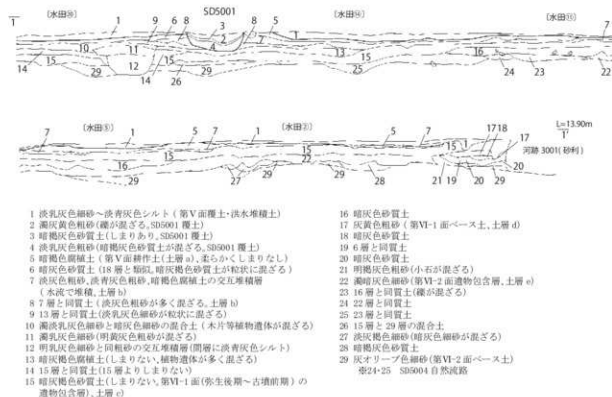


第229図 G地区 第V面平面図S (S=1/80)

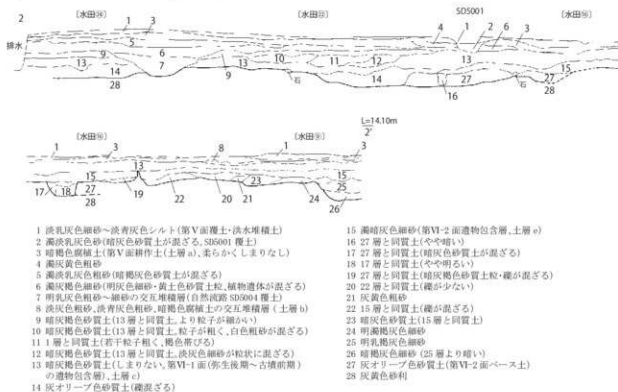


第230図 G地区 第V面平面図10 (S=1/80)

【第V・VI-1面南北土層断面1-1'】(第221図)

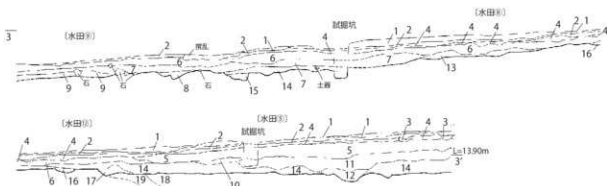


【第V・VI-1面南北土層断面2-2'】(第221図)



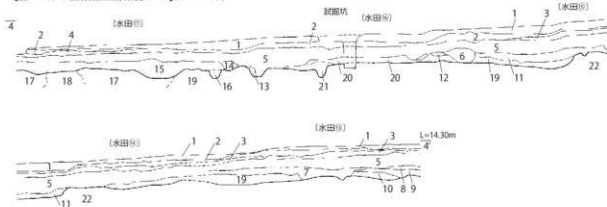
第231図 G地区 第V・VI面土層断面図1(S=1/60)

【第V・VI-1面東西土層断面 3-3'】(第221図)



- | | |
|--|---------------------------------|
| 1 洗乳灰色細砂～洗青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土) | 10 暗灰褐色砂質土 |
| 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a), 柔らかくしまりなし) | 11 濃暗灰色粗砂(第VI-2面遺物包含層, 土層 e) |
| 3 4層に5層が混ざる(耕作土) | 12 暗灰色細砂 |
| 4 淡灰色粗砂, 洗青灰色粗砂, 暗褐色腐植土の交互堆積層
(水流で堆積, 土層 b) | 13 濃明灰褐色砂質土(粒子粗く, 礫が混ざる) |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりない, 第VI-1面(弥生後期～古墳前期)
の遺物包含層), 土層 c) | 14 灰オリーブ色細砂(遺物が混ざる, 第VI-2面ベース土) |
| 6 5層と同質土(植物遺体が混ざる, 第VI-1面遺物包含層) | 15 14層と同質土(暗灰色細砂が混ざる) |
| 7 5層と同質土(小石が混ざる, 第VI-1面遺物包含層) | 16 17層と同質土(小石が混ざる) |
| 8 濃灰オリーブ色細砂(小石が混ざる) | 17 濃灰褐色細砂 |
| 9 暗灰褐色細砂(小石が混ざる) | 18 淡灰色細砂 |
| | 19 17層と同質土(若干暗い) |

【第V・VI-1面東西土層断面 4-4'】(第221図)

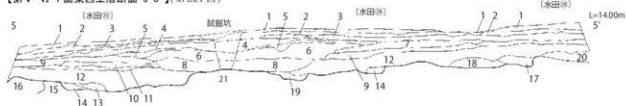


- | | |
|--|--|
| 1 洗乳灰色細砂～洗青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土) | 12 5層と同質土(粒子が細かい, 第VI-1面遺物包含層) |
| 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層 a), 柔らかくしまりなし) | 13 濃褐色細砂 |
| 3 淡灰色粗砂, 洗青灰色粗砂, 暗褐色腐植土の交互堆積層
(水流で堆積, 土層 b) | 14 13層と同質土(石が混ざる) |
| 4 2層と5層の混合土(暗褐色腐植土に洗乳灰色細砂粒が混ざる) | 15 暗灰褐色砂質土(5層と同質土, 粒子粗かい, 第VI-1面遺物包含層) |
| 5 暗灰褐色砂質土(しまりない, 第VI-1面(弥生後期～古墳前期)
の遺物包含層), 土層 e) | 16 15層と19層の混合土 |
| 6 濃暗灰色粗砂(南北方向の流路か) | 17 濃褐色細砂(土器が混ざる, 遺構) |
| 7 濃暗灰色粗砂(第VI-2面遺物包含層, 土層 e) | 18 濃灰オリーブ色細砂(炭粒が混ざる, 第VI-2面ベース土か) |
| 8 5層と9層の粉砂層 | 19 淡灰オリーブ色細砂(しまりない, 第VI-2面ベース土) |
| 9 7層と同質土(7層より深い) | 20 19層と同質土(若干暗い, 第VI-2面ベース土) |
| 10 7層と同質土(灰緑色が粒状に混ざる) | 21 濃暗灰オリーブ色細砂 |
| 11 暗灰色細砂(小石が混ざる) | 22 淡灰～灰黄色細砂～砂利 |



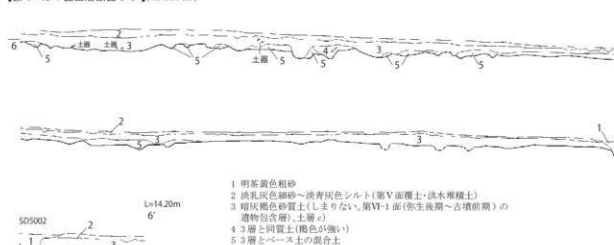
第232図 G地区 第V・VI面土層断面図2(S=1/60)

【第V・VI-1面東西土層断面 5-5'】(第221図)



- 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
- 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(土層a),柔らかくしまりなし)
- 3 淡灰色粗砂,淡青灰色粗砂,暗褐色腐植土の交互堆積層(水流で堆積,土層b)
- 4 高乳灰色細砂(暗灰褐色腐植土が粒状に混ざる)
- 5 淡青灰色シルト(淡乳灰色細砂が混ざる)
- 6 明乳灰色細砂(暗灰褐色シルト層が入る)
- 7 濁青灰色細砂(暗褐色腐植土,植物遺体が混ざる)
- 8 暗青灰色細砂と高乳灰色粗砂の交互堆積層(植物遺体が混ざる)
- 9 暗灰褐色砂質土(木片等の植物遺体が多く混ざる)
- 10 暗灰褐色砂質土(しまりない,第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の遺物を含む層,土層c)
- 11 灰黄色粗砂(第VI-1面ベース土,土層d)
- 12 濁暗灰色細砂(第VI-2面遺物を含む層,土層e)
- 13 灰オリーブ色砂質土(暗灰色砂質土がブロック状に混ざる)
- 14 灰オリーブ色砂質土
- 15 淡灰色砂質土(粗砂に近い,第VI-2面ベース土)
- 16 細かい淡褐色砂質土(第VI-2面遺物堆積土)
- 17 灰オリーブ色砂質土(小石が混ざる)
- 18 12層と同質土(若干明るい,小石,植物遺体混ざる)
- 19 暗灰褐色砂質土
- 20 明黄色砂利(第VI-2面ベース土)
- 21 淡灰色砂利(第VI-2面ベース土)

【第V・VI-1面土層断面 6-6'】(第221図)



- 1 明茶黄色粗砂
- 2 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
- 3 暗灰褐色砂質土(しまりない,第VI-1面(弥生後期～古墳前期)の遺物を含む層,土層c)
- 4 3層と同質土(色が強い)
- 5 3層とベース土の混合土

【第V・VI-1面土層断面 7-7'】(第221図)



- 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積層)
 - 2 暗灰褐色砂質土(しまりない,第VI-1面(弥生後期)の遺物を含む層,土層c)
- [ベース土] 淡灰色粗砂



第233図 G地区 第V・VI面土層断面図3(S=1/60)

2 水田区画(遺構:第225～237図、第51表、遺物:第238図)

E～G・25・26区で検出した耕作域で、小規模水田27枚(水田①～㉔)と、その間を貫流する溝(SD5001)で構成される(第234図)。水田区画は、東西方向約17m、南北方向約20mの規模でひろがり、さらに東・西・北側の水田は調査区外に延びる。水田耕作面の様相や土層断面の観察等から、造成後、比較的短期間で耕作が放棄され、耕作土や畦畔が雨水等でかなりの程度流出した後に、土石流災害4で被覆されたものと考えられる。なお、第234図で示した水田・畦畔の番号は、報告時に新たに付与している。

水田①～㉔ 南東方向から北西方向及び南西方向から北東方向に下がる地形の傾斜を利用し、南北方向で6列以上、東西方向で5列以上の棚田景観をもつ小区画水田を一体的に造成する。水田の平面形は、縦長の略長方形を基本とし、水田②・③・㉔等は略台形を呈する。水田の規模は、第51表のとおり、最大の水田⑬が東西3.8m以上×南北約5.3m、面積20.3㎡以上を、最小の水田⑥が東西約1.8m×南北約1.7m、面積約3.1㎡を、規模が判明した11枚の平均で東西約3.05m×南北約2.64m、面積約8.1㎡をそれぞれ測り、下流側の水田規模がより大きい傾向を示す。また、各列で隣接する水田耕作面は10～25cmの高低差をもち、計画的に棚田を造成したと考えられる。水田耕作面の標高は、最も高い水田①が14.18m、最も低い水田⑱が13.23mと、標高差は1m弱となる。

また、各水田は、耕作土が未成熟であること、明確な耕作痕跡が欠落すること、耕作面が急勾配であることで共通する。耕作土(土層a)は、前述のとおり約10cm以下の厚さをもつ腐植土であり、雨水等による表土流出を考慮しても、同期に埋没したC・D地区第V面の耕作土・床土(厚さ20～40cmのシルト質土)に比して、耕作土として、かなり未成熟な土質といえる。さらに、通常、耕作面の起伏や土層断面の土層攪乱等で確認できる耕作痕跡が欠落する状況からも、短い耕作期間が想定できる。各水田耕作面の勾配については、第51表に各水田の耕作面の標高および高低差を示した。例えば水田②が高低差17cm(東西長337cm)、水田⑳が高低差20cm(同343cm)を測るとおり、第3節で記した第Ⅲ-1面の水田と比しても急勾配であり、恒常的に湛水状態を保持できない様相を呈する。耕作土がかなりの程度、雨水等で流出したと考えざるを得ない。

水田間に設けられた畦畔は、第234図で示した東西方向8列(畦A～H)の基底部が残存する一方、斜面と直交する南北方向の畦畔は完全に流出する。東西方向の畦畔は、上幅で14～74cm、耕作面からの高さは1～13cmを測り、比較的幅広い印象を受ける。水田間をつなぐ水口は確認できないものの、灌漑水は水田列ごとに上方の水田から下方の水田の流れ(例えば、水田⑩→⑪→⑫→⑬→⑭→⑮の順)や、SD5001に向けた横並びの水田に流れ(例えば、水田③→⑥→⑫→⑮→SD5001の順)を基本として、順次掛け落としと想定できる。1枚の水田内での灌漑水は、検出した耕作面の標高に依拠すれば、東方向から西方向、南方向から北方向の流れを基本とする。

遺物は、水田を被覆した土石流災害4から第238図1115～17が、水田耕作土(土層a)から同図1118～20が出土した。肉厚の土師器甕1115は口径22.5cmを測り、口縁部は短く外傾する。土師器高坏1116は口径14.1cmを測る。外面は摩滅のため判然としませんが、内面に暗赤褐色を呈した赤彩が残る。高坏脚片1117は1116と同一個体と考えられ、外面に同色の赤彩を施す。ミカン割りの加工材1118～1120は、耕作土を保持する目的で据え置いたものと考えられる。いずれもマツ属複雑管束亜属の材を用いる。1115～17は、古墳時代古墳時代前期後半～中期初めに位置付けられる。

SD5001 E～G・26区で検出した溝で、水田間を屈曲しながら南東方向から北西方向に流下する。溝の規模は、上幅57～114cm、深さ17～24cm(溝底の標高14.01m→13.25m)を測り、流入・堆積した灰黄～灰茶色または淡乳灰色を呈する粗砂～シルトを覆土とする。堰施設や水田とつながる水口は確認

第51表 G地区 第V面水田区面積規模等一覧表

水田 番号	平面形状		規模 (cm)		計算面積 (㎡)	水田面の標高 (m)				高低差 (0.04～)	備考
	東西	南北	東西	南北		南東隅	北東隅	南西隅	北西隅		
①	(58～)	(281)	(1.6～)	-	14.17	14.21	14.17	14.10	14.10	14.10	調査区外に及びる
②	略台形	337	308	104	14.17	14.10	14.10	14.00	14.10	0.17	水田①との高低差-11cm以上
③	略正方形	(292～)	301	(11.4～)	14.09	13.65	(14.00)	13.82	13.90	(0.19～)	河跡3001(古)で一部埋壊。水田②との高低差-20cm
④	略正方形	(182～)	333	(2.4～)	(14.16)	(14.18)	14.12	14.09	14.14	(0.09～)	調査区外に及びる
⑤	略長方形	289	166	4.8	14.05	14.03	13.94	13.94	13.99	0.06	水田①との高低差-15cm
⑥	略長方形	300	228	8.9	13.87	13.89	13.82	13.79	13.85	0.10	水田①との高低差-14cm
⑦	略正方形	(226～)	(140～)	(3.2～)	(13.76)	13.76	(13.68)	(13.66)	13.73	(0.10～)	河跡3001(古)で一部埋壊。水田⑥との高低差-12cm
⑧	略台形	182	168	3.1	13.74	13.69	13.70	13.63	13.66	0.11	水田⑥との高低差-10cm
⑨	略長方形	(365～)	159	(5.8～)	13.58	13.57	(13.42)	(13.30)	13.49	(0.19～)	河跡3001(古)で一部埋壊。東西方向は最長510cm。水田⑧との高低差-17cm
⑩	略長方形	(222～)	169	(3.7～)	(14.11)	(14.12)	14.05	14.07	14.10	(0.07～)	調査区外に及びる
⑪	*	284	198	5.6	13.99	13.93	13.92	13.92	13.97	0.07	水田⑩との高低差-13cm
⑫	*	358	177	6.3	13.90	13.83	13.80	13.70	13.80	0.20	水田⑩との高低差-17cm
⑬	略台形	(326～)	308	(10.0～)	(14.11)	(14.08)	14.04	14.02	14.08	(0.09～)	調査区外に及びる
⑭	略台形	243	309	7.5	13.93	13.89	13.84	13.79	13.83	0.14	水田⑬との標高差-25cm
⑮	略台形	328	253	8.3	13.76	13.71	13.65	13.65	13.69	0.11	水田⑬との標高差-16cm
⑯	不整形長方形	325	445	14.5	13.63	13.53	13.50	13.50	13.58	0.13	水田⑬との標高差-11cm
⑰	不整形長方形	(384)	534	(30.3～)	13.50	13.46	13.45	13.41	13.41	(0.09～)	調査区外に及びる。水田⑬との標高差-17cm
⑱	不明	(141～)	(229～)	(3.2～)	13.38	13.23	(13.23)	-	13.24	(0.15～)	* 水田⑬との標高差-17cm
⑲	不明	(120～)	(92～)	(1.1～)	(14.10)	-	14.06	(14.00)	14.05	(0.10～)	調査区外に及びる。東西方向は最長267cm。南北方向は最長454cm
⑳	略台形	343	(312～)	(10.7～)	14.00	(13.90)	13.83	(13.70)	13.89	(0.30～)	* 水田⑬との標高差-16cm
㉑	略台形	250	351	8.8	13.75	13.75	13.72	13.76	13.78	0.06	水田⑬との標高差-11cm
㉒	略台形	365	302	11.0	13.70	13.70	13.56	13.58	13.64	0.12	水田⑬との標高差-14cm
㉓	略長方形	(267～)	233	(6.1～)	13.51	13.48	(13.45)	(13.49)	13.50	(0.06～)	調査区外に及びる。東西方向は最長270cm
㉔	不整形長方形	356	(220～)	(8.9～)	13.72	(13.69)	13.75	(13.71)	13.73	(0.06～)	* 水田⑬との標高差-16cm
㉕	略菱形	(322～)	202	(6.5～)	13.66	(13.70)	13.55	(13.60)	13.64	(0.15～)	* 水田⑬との標高差-9cm
㉖	不明	(47～)	(52～)	-	13.44	-	-	-	(13.44)	-	* 水田⑬との標高差-20cm以上
㉗	不明	(170～)	(68～)	(1.1～)	13.65	-	(13.59)	-	(13.60)	(0.06～)	* 水田⑬との標高差-13cm以上

南東隅は、各水田中央上角での計測値。()は既存数値を示す。また、「水田面の標高」の項目における高低差は各水田内の標高差(各水田の傾斜具合)を、備考欄の高低差は上部の水田と中央での標高差を、それぞれ示す。

略号

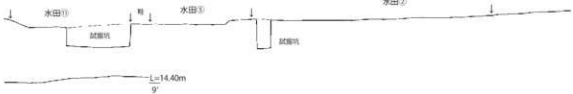
番号	上幅 (cm)	高さ (cm)	番号	上幅 (cm)	高さ (cm)
A	31～53	1～5	E	26～65	2～6
B	25～43	5～9	F	16～70	4～13
C	14～51	1～7	G	25～57	2～7
D	24～74	1～3	H	24～42	1～5

【水田区画 8-8'】

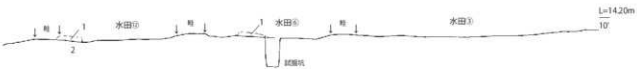


※ ↓印は水田面の段差を示す

【水田区画 9-9'】



【水田区画 10-10'】



【水田区画 11-11'】



- 1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
- 2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(上層 a)、柔らかくしまりなし)



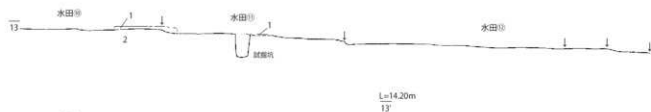
第235図 G地区 第V面水田区画断面図1 (S=1/60)

【水田区画 12-12'】

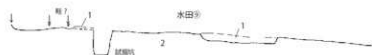


※ ↓印は水田面の段差を示す

【水田区画 13-13'】



L=14.20m
13'



1 淡乳灰色細砂～淡青灰色シルト(第V面覆土・洪水堆積土)
2 暗褐色腐植土(第V面耕作土(上層a)、柔らかくしまりなし)

【水田区画 14-14'】



L=14.20m

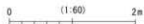


L=13.80m
14'

【水田区画 15-15'】



L=14.10m
15'



第236図 G地区 第V面水田区画断面図2(S=1/60)

【SD5001】(第227～229図)



- 1 灰黄色粗砂
- 2 灰黄～灰茶色粗砂(10cm 大円礫が多く混ざる)
- 3 淡乳灰色細砂～シルト(褐色腐植土が層状に混ざる)



- 1 淡乳灰色細砂～シルト(褐色腐植土が層状に混ざる)
- 2 淡乳灰色細砂～砂(1層と同質土、#)
- 3 灰色～黄灰色粗砂と褐色腐植土の交互堆積層
※1～3 洪水堆積層
[ベース土]暗褐色腐植土(耕作土)

【SD5003】(第222図)



- 1 淡灰黄色砂利(10cm 大円礫混じる)
- 1' 淡灰黄色砂利～粗砂
- 2 淡黄灰色砂
- 3 淡黄灰～灰オリブ色細砂



- 4 3層とベース土の混合土
※1～4 洪水堆積土
[ベース土]暗褐色砂質土(第VI-1面
遺物包含層、土層c)



0 (1/60) 2m

第237図 G地区 第V面SD土層断面図(S=1/60)

できず、溝底と水田⑬～⑰耕作面の標高差が8～28cm、水田⑱～㉓耕作面との標高差が9～22cmを測ること等から、主に排水機能を担ったと考えられる。遺物は、第238図1121の弥生時代後期後半の甕が出土した。1121は口径15.8cmを測り、外面に煤が付着する。

3 溝(SD) (遺構：第222・224～227図)

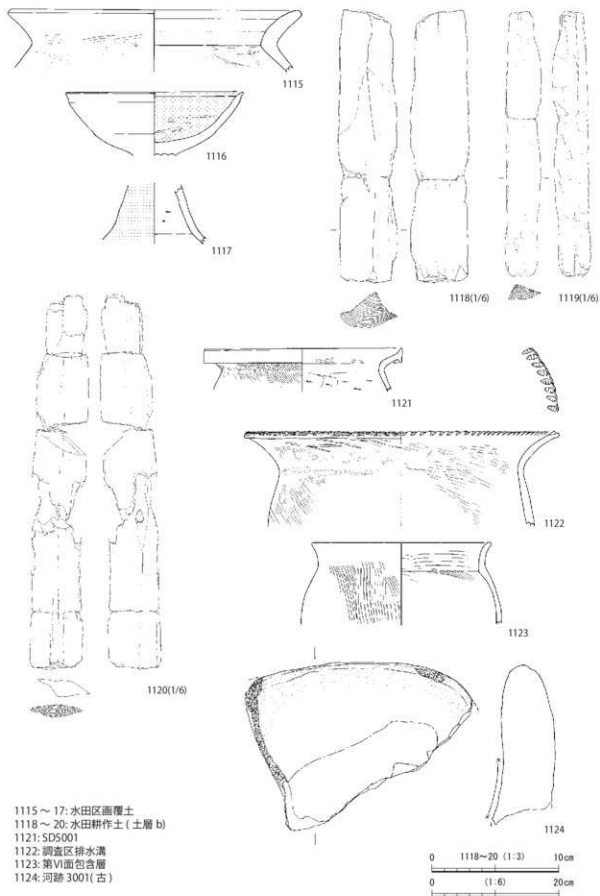
溝は、前述のSD5001に加え、第IV面河跡3001(古)南側で水田区画と同時に土石流災害4で埋まったSD5002・03を検出した。3条の溝は、いずれも同程度の規模であり、堰施設をもたずに屈曲しながら南東方向から北西方向に流下する点で共通する他、溝間距離が19～20m離れる規則性をもつ。これらから、SD5002・03は水田区画を造成する目的で掘られた水路と位置付けられる。ただしSD5003周辺では、畦畔や明確な耕作痕跡がないこと、前述のとおり耕作土の形成が認められないこと(第233図土層断面6-6・7-7)から、水路を掘ったものの水田区画は整備しなかったと推定できる。

SD5002 E・F-24区で検出した溝で、東側は第IV面河跡3001(古)で損壊する。溝の規模は、上幅54～90cm、深さ7～30cm(残存する溝底の標高13.55～13.81m)を測り、一度に流入・堆積した明茶黄色粗砂を覆土とする(第233図土層断面6-6)。堰等の付属施設や出土遺物はない。

SD5003 F・G-22区で検出した溝で、屈曲しながら南東方向から北西方向に流れる。溝の規模は、上幅56～86cm、深さ5～19cm(溝底の標高14.15～13.77m)を測り、一度に流入・堆積した淡灰黄色砂利・砂や淡黄灰～灰オリブ色細砂を覆土とする。堰等の付属施設や出土遺物はない。

4 その他の出土遺物(第238図)

第238図1122～1124を図化した。調査区排水溝出土の弥生土器甕1122は、後述する第VI-2面に属する遺物である。口径25.0cmを測り、口縁部外面に胴部整形に用いた板状工具の接触痕が明瞭に残る。試掘坑から出土した土器甕1122は、第VI-1面に属する遺物である。口径14.0cmを測り、内外面とも粗いハケ調整を施す。第IV面河跡3001(古)出土の磨石1123は、淡灰色の砂岩を用いる。外面全体に赤色付着物(ベンガラか)が残り、付着物の磨りおろし行為に伴い上面中央付近の器面は平滑となる。



第238図 G地区 第V面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

第52表 G地区 第V面出土土器観察表

調査番号	グリッド区	出土遺構	種類	形状	口径 (mm)	底径 (mm)	最大径 (mm)	最大高さ (mm)	容積 (L)	備 考	調査番号
F20	F-05-5	弥生Ⅰ～Ⅱ土 (弥生前期)	土師器	罎	22.5	-	14.0	12.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F1002
F20	F-02	V面遺土 (弥生前期)	土師器	罎	14.1	-	15.0	14.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F102-1
F20	F-02	V面遺土 (弥生前期)	土師器	罎	-	-	15.0	14.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F102-1
F20	F-08-2	弥生Ⅰ土 (弥生前期)	瓦葺土器	罎	15.0	-	15.0	14.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F100
F20	F-04	弥生Ⅰ土	瓦葺土器	罎	23.0	-	15.0	14.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F103
F20	F-03-2	弥生Ⅰ土 (弥生前期)	土師器	罎	14.0	-	15.0	14.0	0.1	横溝・横溝・横溝・横溝	F1002

第53表 G地区 第V面出土石製品観察表

調査番号	グリッド区	出土遺構	種類	石 材	最大径 (mm)	最大高さ (mm)	容積 (L)	備 考	調査番号
F20	F-05	弥生Ⅰ(Ⅱ)土(弥生前期)	磨石	磨石	13.0	13.0	4.1	1301号	F102-2

第54表 G地区 第V面出土木製品観察表

調査番号	グリッド区	出土遺構	種類	最大径 (mm)	最大径 (mm)	最大径 (mm)	容積 (L)	備 考	調査番号
F20	F-05	弥生Ⅰ土(弥生前期)	加工材	43.0	8.0	4.0	0.1	弥生Ⅰ土(弥生前期)	F103-4
F20	F-05	弥生Ⅰ土(弥生前期)	加工材	42.1	7.2	4.0	0.1	弥生Ⅰ土(弥生前期)	F103-4
F20	F-05	弥生Ⅰ土(弥生前期)	加工材	60.4	10.1	4.1	0.1	弥生Ⅰ土(弥生前期)	F103-1

また、破片化後に被熱し、煤が付着する。

8 小 結

第V面の水田区画の存続時期は、次節で述べるG地区第VI-1面が弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の生活面であること、土層観察で第VI-1面の廃絶～第V面の造成までが比較的短期間であると推定できること、また後述する第4次調査D・F地区第V面の小区画水田が、直下のD地区第VI面SD301の位置関係・出土遺物から古墳時代前期に位置付けられること、第7次K地区第V面出土遺物等から、おおむね古墳時代中期末頃と考える。

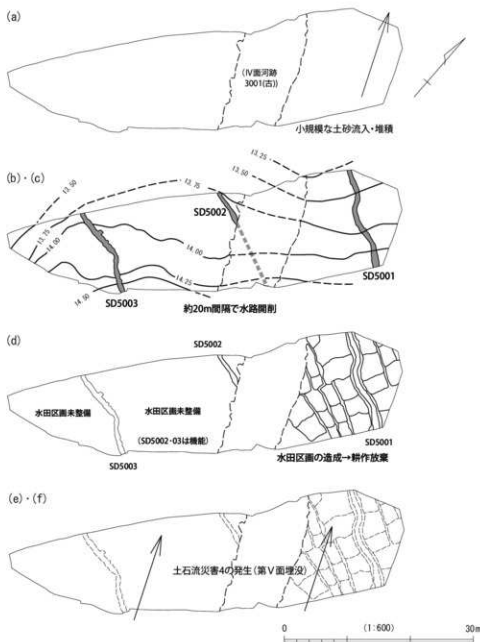
その変遷は、(a)第VI-1面廃絶後に、調査区北側斜面(E～G-25区付近中心)で小規模な土砂の流入・堆積が発生、(b)その直後から、G地区を含む斜面(南北方向45m以上)で複数の小水路を取り込む小区画水田の造成を計画、(c)水路SD5001～03を約20m間隔で開削、(d)SD5001-02を基幹水路とした小区画水田の造成と耕作開始(SD5003周辺の水田は未整備)、(e)短期間での耕作放棄(SD5003周辺の水田は未整備)、(f)水田表土(耕作土・畦畔)が一定程度流出した時点での土流災害4が発生(第V面の埋没)、という6つの過程(第239図)に整理でき、(a)～(f)までは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。以下では、G地区第V面の小区画水田を、第4次調査D・F地区第V面の小区画水田、また弥生時代後期～古墳時代前期の県内事例と、若干の比較を行うことで小結としたい。なお、第7次調査K地区第V面でも、同時期と考えられる小規模水田区画を確認している。

まず、本遺跡第4次調査D・F地区第V面の小区画水田は、G地区と同様に第IV面ベース土(土流災害4の続き)を重機で除去した段階で検出している。この小区画水田は、黄褐色砂質土層で一度に被

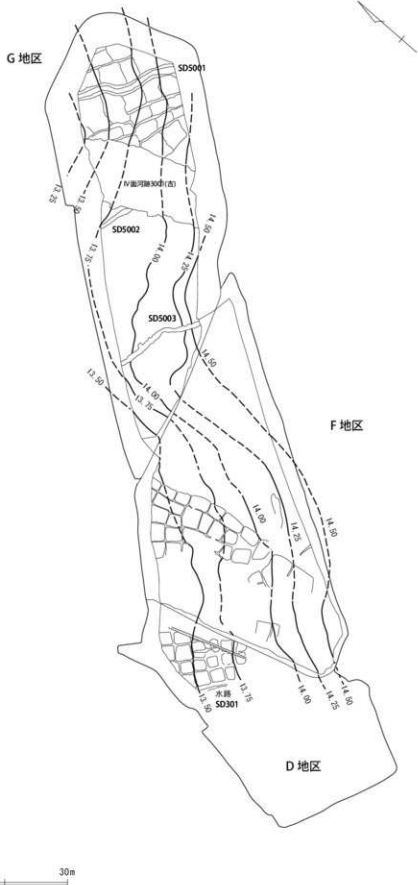
覆され、標高13～14m台の緩斜面(平均勾配約5度)に、東西方向で最長約28m、南北方向で最長28m以上を測る略台形の土地を一体的に造成する(第240図)。残存した水田は、D地区で19枚、F地区で29枚を数える。略方形の平面形を基本とする水田は、1枚の平均面積約5㎡、耕作土・床土(シルト質土)の厚さは20～40cmを測る。また、四方に残る畦畔は高さ10～15cm、幅20～30cmを測り、水田に伴う小水路は水田区画の南西隅に1条が付随する。

G地区第V面との比較でいえば、第240図で示すとおり、等高線におおよそ水平から45°傾いて水田区画を造成する点で共通する。いずれの耕作単位とも緩斜面における灌漑水の有効な循環を目的とした農耕技術と考えられる。一方、異なる要素として、水田間の小水路の有無や、水田の平面形や規模(D・F地区約5㎡、G地区約8㎡)が指摘できる。さらに、SD5003までを一体の耕作単位とすれば複数の水路を用いるG地区の耕作規模は、K地区第V面水田区画と同様に、D・F地区より広大な土地の経営を意図したものと見える。また、畦畔の残存状況は、土石流災害4発生時の耕作状況を反映したものであり、G地区水田区画が耕作を放棄した状態であるに比して、D・F地区水田区画が耕作を維持した可能性が高いと考えられる。

次に、県内の弥生時代後期～古墳時代前期の水田区画と比較したい。同時期の水田区画は、低地に立地する金沢市梅田B遺跡、小松市白江梯川遺跡、津幡町加茂遺跡において、いずれも洪水砂で覆われた状態で検出されている^[14]。梅田B遺跡第4次調査1・2区中層の水田区画は、標高約6～7mの谷平

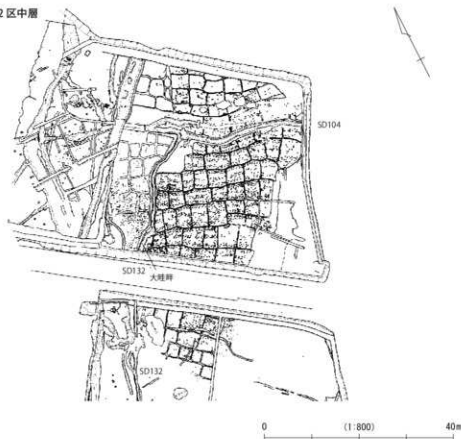


第239図 G地区 第V面変遷図(S=1/600)



第240図 G地区 D・F地区水田区画配置図 (S=1/600)

畝田B遺跡第4次1・2区中層



第240図 金沢市梅田B遺跡水田区画図(S=1/800)

野中央部に位置し、弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭に作られる(第240図)。水田区画は、南北約60m、東西約50mの規模をもち、さらに隣接地・周辺地に水田区画が展開した可能性が高いようだ。検出した水田区画は、谷から流下する基幹用水路(SD104)、南側に分岐する用水路SD132および大畦畔1本を軸に造成されており、小区画水田は約96枚以上を数える。水田の面積は、最大約20㎡、最小約4㎡、平均約10㎡を測り、小畦畔の水口を介して標高の高い東側から西側に向けて順次水をかけ落とす(懸流灌漑)。また、梯川中流左岸の低湿地(標高2m弱)に立地する白江梯川遺跡では、平成16・17年度調査で弥生時代後期～古墳時代前期頃の小区画水田14枚程度を確認している。水田は一辺約2×2～4m(面積4～8㎡)を測るようだ。また、河北潟に面した加茂遺跡L区第2面でも小規模な小区画水田を検出している。これらの低地に立地する水田区画は、本遺跡に比して用水路系統をしっかりと掘り、水田面積を大きくつくる傾向が指摘できる。また、低地の水田区画においては灌漑水の有効な循環が比較的容易と考えられる。本遺跡で検出した、緩斜面におおよそ水平から45°傾いて造成する棚田状の小水田区画の技術が、低地に展開した水田区画と比して、構造的・質的どのような差異をもつか、現時点では類例が少なく判然とせず、今後の類例の増加を待ちたい。

【註】

- (14) (財)石川県埋蔵文化財センター 2005「石川県埋蔵文化財情報第5号」
 (財)石川県埋蔵文化財センター 2005「石川県埋蔵文化財情報第14号」
 (財)石川県埋蔵文化財センター 2006「石川県埋蔵文化財情報第16号」
 柿田祐司2006「金沢市梅田B遺跡Ⅲ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

第7節 第VI-1面の遺構と遺物（第242～259図、第55～58表）

1 概要(第242図)

G地区第VI-1面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。灰黄色や茶灰色を呈する粗砂～砂利をベース土(遺構検出面)とする、弥生時代後期後半～古墳時代前期の生活面であり、仿製乳文鏡が出土した古墳時代前期のF地区第VI面につながる。第6節第1項で述べた(第231～233図)、第IV面河跡3001(古)北側では第V面耕作土(土層a:暗褐色腐植土)、土層b(淡灰色粗砂、暗褐色腐植土等の交互堆積層)及び第VI-1面遺物包含層(土層c:暗灰色砂質土)を、第IV面河跡3001(古)南側では土層cを、それぞれ人力で掘り下げた。遺構検出面の標高は、第V面より10～20cm程度下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.55m(第V面ベース面13.73mより-18cm)、G-23区杭幅で14.02m(同14.23mより-21cm)、南東端(G-26区杭南東3m)で約14.00m(同14.14mより-約14cm)、北端(F-26区杭西8m)で約13.35m(同13.46mより-約10cm)を測る。また、遺構検出面の標高は13.1～14.1mを示し、SK6001付近が最も高くなる。標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.20m、23ライン(南東-北西方向)が約0.1m、26ライン(同)が約0.8mを測る。基本的に北西側に向けて傾斜する地形であり、河跡3001(古)北側における北東-南西方向の傾斜がより強くなる。

調査の結果、第IV面河跡3001(古)南側で、土坑(SK)5基、溝(SD)約25条、落ち込み(SX)1ヶ所、ピット多数を検出したにとどまり、調査区外東側での展開が推定できる集落域の縁辺に近い様相を呈する。遺物は、定量の弥生土器、土師器の他、石鏃1点が出土した。なお、河跡3001(古)北側については、明確な遺構が検出できないため、航空測量図化の対象から除外しており、第259図で概略の平面図を示している。以下では、主に第IV面河跡3001(古)南側の様相について述べる。

2 土坑(SK)、ピット(遺構:第248図、遺物:第252図)

土坑は、現地調査段階で遺物が出土した3基(SK6001～03)と、整理段階で新たに追加した2基(SK6031・32)の5基を数える。

SK6001 G-22-4区で検出した平面不整形を呈する竪穴状の土坑で、長軸316cm、短軸220cm以上、深さ6～20cmを測る。底面は比較的平坦で、深さ4～9cmを測る不定形小ピットを検出したものの、土坑周辺を含めて明確な柱穴は確認できなかった。覆土は暗灰褐色砂質土を基調とし、他遺構との切り合い関係はない。遺構検出面に近い覆土西隅から土師器甕細胴部片約120点、高坏細片、小型銚細片が出土した。

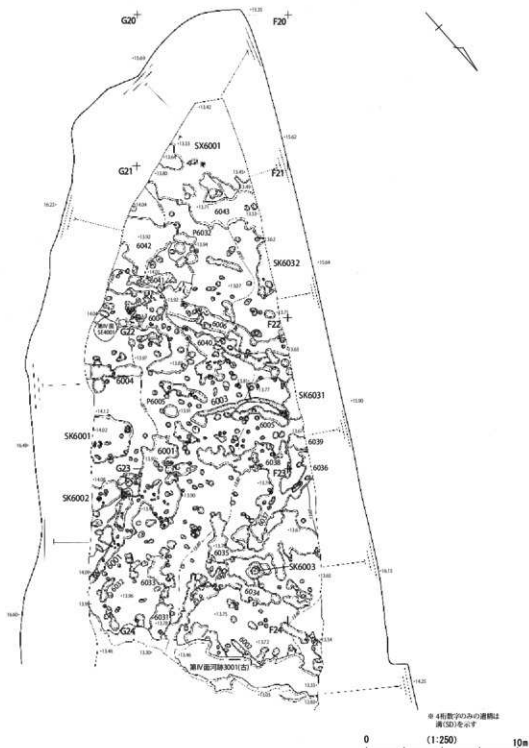
SK6002 G-23-1区で検出した不定形な落ち込みで、調査区外東側にのびる。長軸200cm以上、短軸135～190cm、深さ5～16cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は、ベース土が粒状に混ざる濁暗灰褐色砂質土で、切り合い関係からP6001より新しく位置付けられる。土師器小型銚小片1点が出土した。

SK6003 F-23-3区で検出した平面不整形を呈する土坑で、一辺120cm弱、深さ14cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土を基本とし、切り合い関係からSD6034より新しく位置付けられる。遺構検出面近くの覆土から10cm大の自然石や土師器甕小片が出土した。

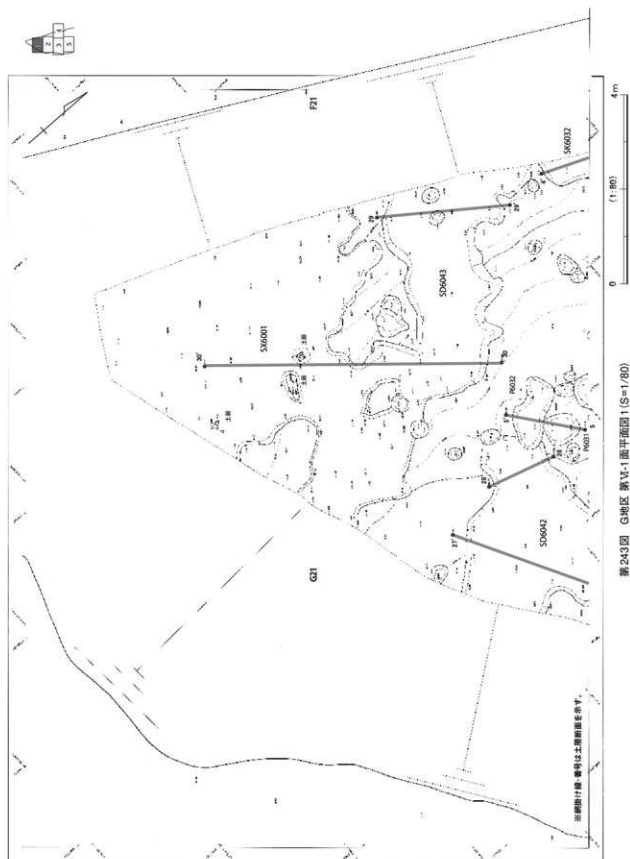
SK6031 E-22-2区で検出した不定形な落ち込みで、調査区外西側にのびる。深さ3～10cmを測り、底面は起伏をもつ。覆土は礫が多く混ざる暗灰褐色砂質土で、切り合い関係からSD6003-05より古く位置付けられる。出土遺物はない。

SK6032 F-21-3区で検出し、調査区外西側にのびる2つの浅い落ち込みが重複する。深さ2～10cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は、南側の落ち込みが礫の多く混ざる暗灰褐色砂質土、北側の落ち込みが濁褐灰色砂質土を基本とする。他遺構との切り合い関係、出土遺物はない。

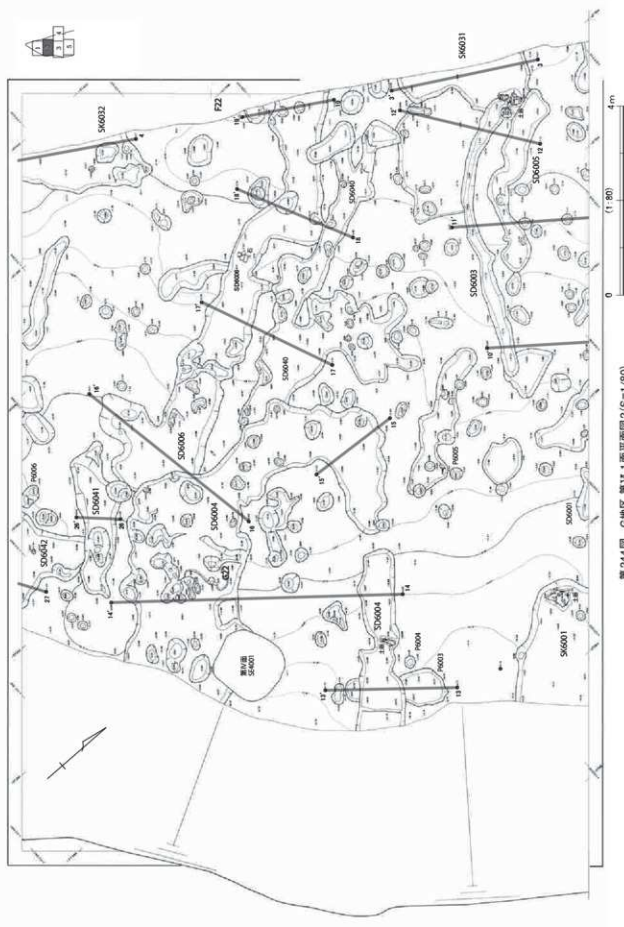
ピット 現地調査段階で大小含めて約200基のピットを検出し、うち土師器小片が出土した6基に遺構番号(P6001～06)を付した。また、整理段階で新たに3基に遺構番号(P6031～33)を追加している。



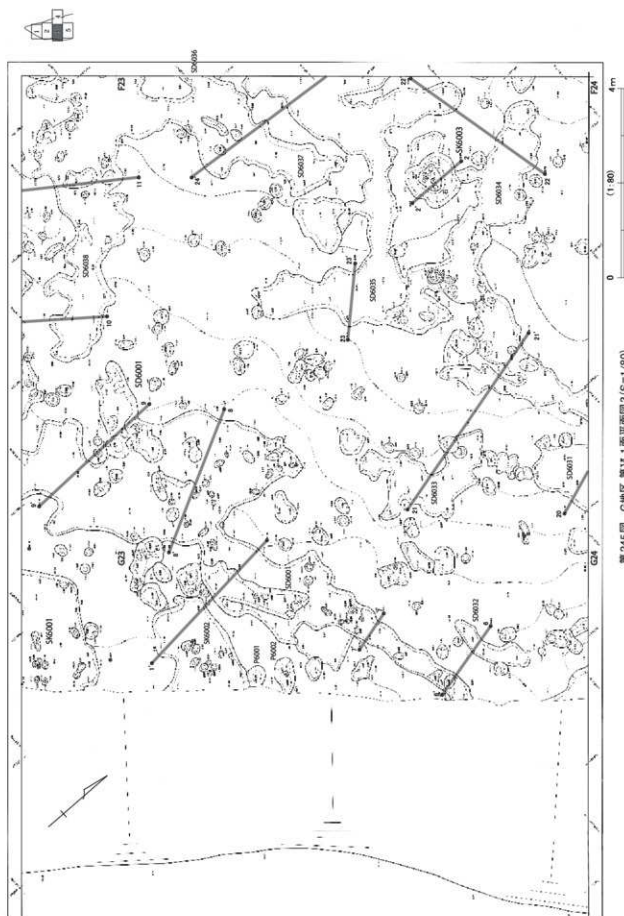
第242図 G地区 第Ⅵ-1面全体図(S=1/250)



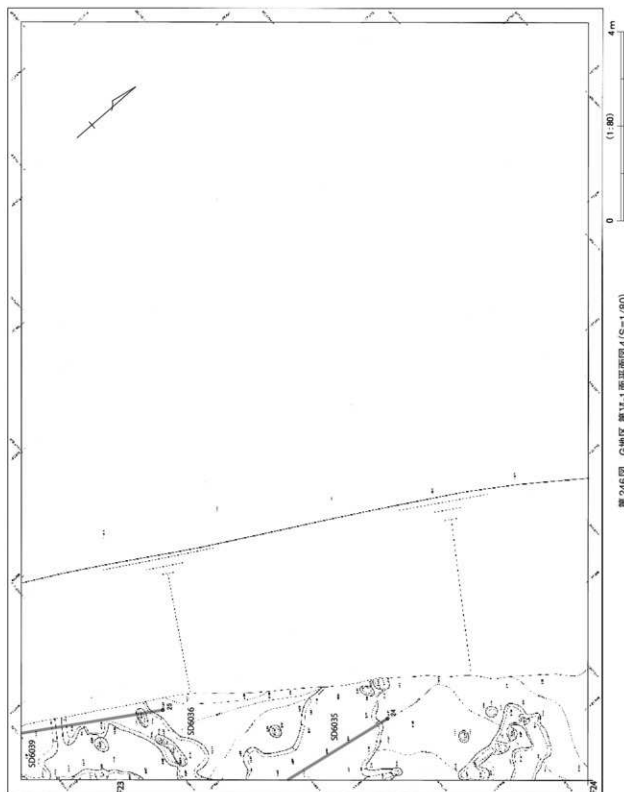
第243図 G地区 第V-1面平面図1 (S=1/80)



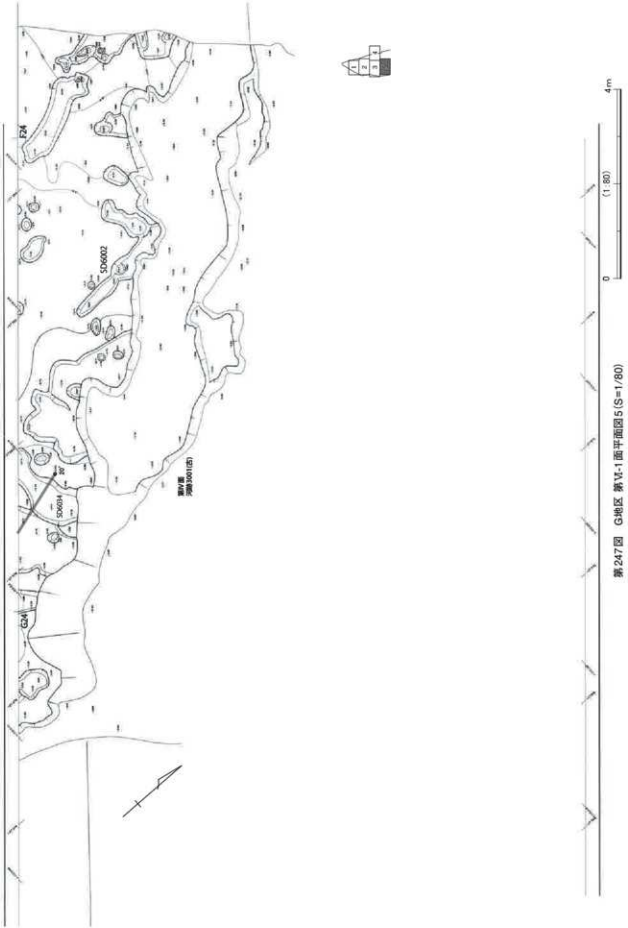
第244図 G地区 第Ⅴ-1面平面図之(S=1/80)



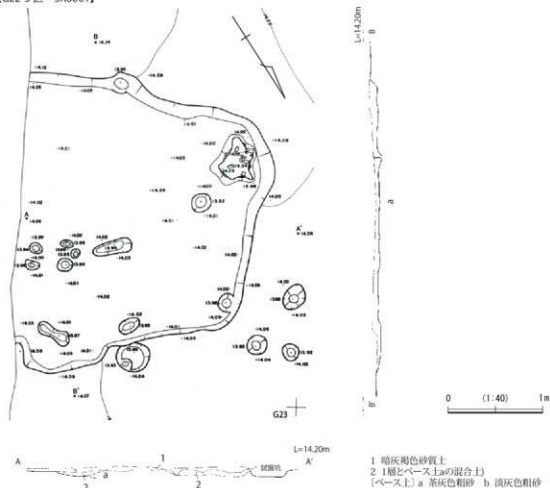
第245図 G地区 第V-1面平面図3(S=1/80)



第246図 G地区 第Ⅴ-1面平面図4 (S=1/80)



【G22-3区 SK6001】



【G23-1区 SK6002・SD6001】(第245・246図)



【F23-3区 SK6003】(第245・246図)



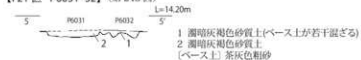
【E22区 SK6031】(第244図)



【F21区 SK6032】(第243図)



【F21区 P6031・32】(第243図)



0 (1:60) 2m

第248図 G地区 第VI-1面 SK、ピット平面図、土層断面図(S=1/40・1/60)

いずれのピットでも柱根出土または明確な柱根痕跡は確認できず、大部分のピットは深さ20cm以下(10cm以下が主体)を測る浅いものとなる。覆土は、遺物包含層と同質の暗灰褐色砂質土、または灰色砂質土とベース土の混合土を基調とする。出土遺物のうち、P6005出土の第252図1125を図化した。1125は、弥生時代後期の高坏坏部で、口径31.7cmを測る。未図化ではあるが、外面2ヶ所に環状把手が剥離した痕跡を残す。また、内外面とも丁寧なミガキ調整を施し、わずかに赤彩が残る。

3 溝(SD) (遺構：第242・248～251図、遺物：第252・253図)

溝は、溝状を呈する遺物包含層(土層c)の浅い落ち込みを含めて、約25条を検出した。現地調査段階で6条に遺構番号(SD6001～06)を付し、整理段階で第56表のとおり新たに13条(SD6031～43)を追加している。

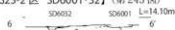
SD6001 F-22-23区、G-23区で検出した古墳時代前期の溝で、調査区外東側にのびる。屈曲しながら直線的に掘られ、南西側で浅い落ち込みと重複する(第249図土層断面8'8')。溝の規模は、長さ10m以上、幅40～200cm、深さ4～12cmを測り、覆土は濁暗灰褐色砂質土である。

遺構検出面に近い南西側覆土から比較的多くの古墳時代前期の土師器が出土しており(第249図)、うち第252図1126～第253図1136を図化した。1126～28は甕、1129～34は壺、1135・36は小型の鉢である。有段口縁の1126は口径17.8cmを測り、口縁部内面は屈曲に乏しい。1127は口径13.5cmを測り、口縁部は比較的長く外側にのびる。胴部外面は、ハケ調整の後に全面にケズリ調整を加える。小型甕1128の口縁端部は大きく外傾し、水平に近い部分もある。1129は口径12.0cmを測り、口縁部は内湾気味に長く立ち上がる。摩滅が著しく、調整は判然としない。1130の胴部は球胴形を呈し、頸部との境に断面方形の突帯を貼り付ける。外面にミガキ調整を施す底部片1131は平底風、1132は丸底風に仕上げられる。1133・34の胴部は球胴形を呈し、外面に粗いミガキ調整を施す。底部台状を呈する小型鉢1135

第55表 G地区 第Ⅴ-1面SD規模等一覧表

遺構番号	グリッド名	長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	土 層	出土遺物	備 考
SD6001	F-23-4, F-23-2, G-23-1-3	1000～	40～200	4～12	第248回土層1、第249回土層6～9	あり	南西側は地遺構と重複
SD6002	F-24-1	250～	30～30	3～5	高嶋樹色粘質土と淡灰色粗砂の混合土	あり	華吉面河路3001(古)で損壊
SD6003	F-23-3-4	500	25～40	8～15	第249回10～12	あり	SK0031より新
SD6004	G-23-1	380～	40～200	4～12	第249回断面13、第250回14～16	あり	SD6006-40より新
SD6005	F-23-3	400	25～60	5～10	第249回断面11・12	なし	SK0031より新
SD6006	E-23-4, G-23-3, F-23-1-3	930～	60～120	3～12	第250回断面16～19	なし	SD6040より新、SD6004より古
SD6031	F-23-4, F-24-2	220～	90～130	5～10	第250回断面20	なし	華吉面河路3001(古)で損壊
SD6032	G-23-2	180	30～50	4～7	第249回断面6	なし	
SD6033	F-23-4	200	30～90	6～12	第250回断面21	なし	
SD6034	F-23-3	970～	40～105	3～8	第250回断面20～22	なし	孤立。華吉面河路3001(古)で損壊
SD6035	E-23-2-4, F-23-1-3	720～	40～250	3～5	第250回断面22-24	なし	
SD6036	E-23-4, E-23-2	260～	40～70	4～8	第251回断面25	なし	SD6037と分岐
SD6037	F-23-1	580	50～160	9～17	第250回断面24	なし	SD6036-38に連続
SD6038	F-23-3, F-23-1	630	60～170	2～12	第249回断面10-11	なし	SD6037に連続
SD6039	E-22-4	130～	75～85	4～14	第251回断面25	なし	
SD6040	F-22-1-2	740～	33～140	2～12	第249回断面17-18	なし	SD6004-06より古
SD6041	F-23-4	330	55～100	4～11	第251回断面26	なし	
SD6042	F-21-2-4, G-21-1-3	360～	120～400	8～14	第251回断面27-28	なし	SD6041より古
SD6043	F-21-1-2	790～	130～250	2～23	第251回断面29-30	なし	南側でSK6001と連続

【G23-2区 SD6001-32】(第245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土(土器が上方に混ざる)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース上aの混合土
[ベース上] a 茶灰色粗砂ー砂利
b 暗灰色粗砂

【G23-2区 SD6001】(第245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土

【F23-2区 SD6001】(第245図)



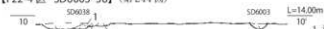
- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 1' 1層と同質土(ベース上が粒状に混ざる,しまりない)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース上の混合土
[ベース上] 茶灰色粗砂

【F22-23区 SD6001】(第244-245図)



- 1 濁暗灰褐色砂質土
- 1' 1層と同質土(ベース上が粒状に混ざる,しまりない)
- 2 暗灰褐色砂質土とベース上の混合土
[ベース上] 茶灰色粗砂

【F22-4区 SD6003-38】(第244図)



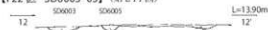
- 1 濁暗灰褐色砂質土(粒子粗い)
- 2 濁暗褐色砂質土
- 3 2層と同質土(1層が粒状に混ざる)
- 4 ベース上と同質土(1層が粒状に混ざる)
[ベース上] 茶灰色粗砂

【F22-3区 SD6003-05-38】(第244-245図)



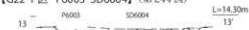
- 1 濁暗灰褐色砂質土(粗砂に近い)
- 2 濁暗褐色砂質土(附っぽく,5cm大の砂利混ざる)
- 3 濁暗褐色砂質土とベース上の混合土
- 4 ベース上と同質土(灰褐色砂質土が粒状に混ざる)
- 5 2層と同質土
[ベース上] 茶灰色粗砂

【F22区 SD6003-05】(第244図)



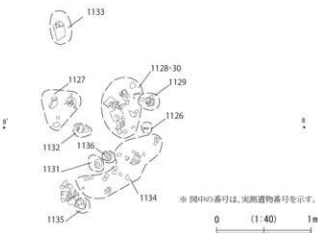
- 1 濁暗褐色砂質土(粒子粗く,5cm大の砂利が混ざる)
- 2 濁暗褐色砂質土(粗砂に近い)
- 3 1層とベース上(茶灰色粗砂)の混合土

【G22-1区 P6003-SD6004】(第244図)

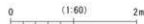


- 1 暗灰褐色砂質土(5cm大の砂利が混ざる)
- 1' 1層と同質土(若干暗い)
- 2 灰褐色砂質土

【F22-23区 SD6001 遺物出土状況】



※ 図中の番号は,実測遺物番号を示す。

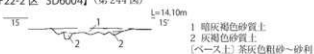


第249図 G地区 第Ⅵ-1面SD実測図(S=1/40-1/60)

【G22-1区 SD6004】(第243・244図)



【F22-2区 SD6004】(第244図)



【E21-4区 SD6004・06】(第243・244図)



【F22区 SD6006・40】(第243・244図)



【F22-1区 SD6006・40】(第244図)



【F22-1区 SD6006】(第244図)



【F23-24区 SD6031・34】(第245・247図)



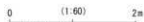
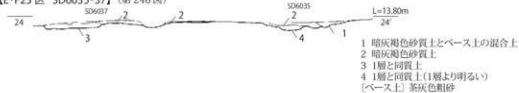
【F23-4区 SD6033・34】(第245図)



【F23-3区 SD6034・35】(第245図)



【E・F23区 SD6035・37】(第246図)



第250図 G地区 第VI-1面SD土層断面図(S=1/60)

は口径12.8cm、器高5.9cmを、1136は口径9.5cm、器高5.5cmをそれぞれ測り、内外面ともミガキ調整を施す。1136の器面は橙色に発色し、赤彩に近い効果をもつ。

SD6002 F-24-1区で検出した浅い溝で、北側は第Ⅳ面河跡3001(古)で損壊する。長さ2.5m以上、幅20～30cm、深さ3～5cmを測り、覆土は濁暗褐色粘質土とベース土(淡灰色粗砂)の混合土である。未図化だが土師器甕小片が出土した。

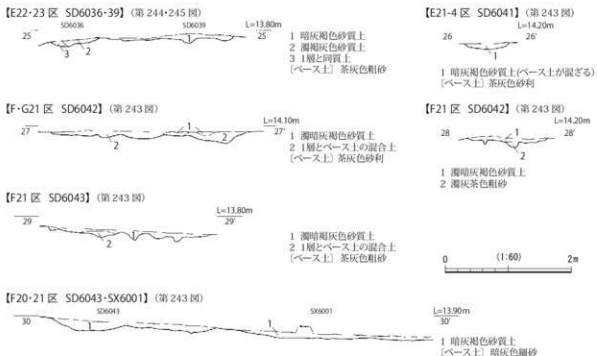
SD6003 F-22-3-4区で検出したゆるやかに屈曲する溝で、規模等を含めてF地区第Ⅵ面SD2001⁽¹⁴⁾に近い印象を受ける。長さ590cm、幅25～40cm、深さ8～15cmを測り、覆土は濁暗灰褐～灰褐色砂質土である。遺構の切り合い関係からSK6031より新しく、弥生土器甕と考えられる小片2点が出土した。

SD6004 G-22-1区で検出した平面不定形な溝で、調査区外東側にのびる。北東～南西方向約2.5m、北西～南東方向5.5m以上の土地を取り囲むように掘られ、何らかの区画の外周溝となる可能性をもつ。深さ4～12cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土を基本に、底面近くではベース土が混ざる。遺構の切り合い関係から、SD6006より新しく位置付けられる。土師器甕小片が出土した。

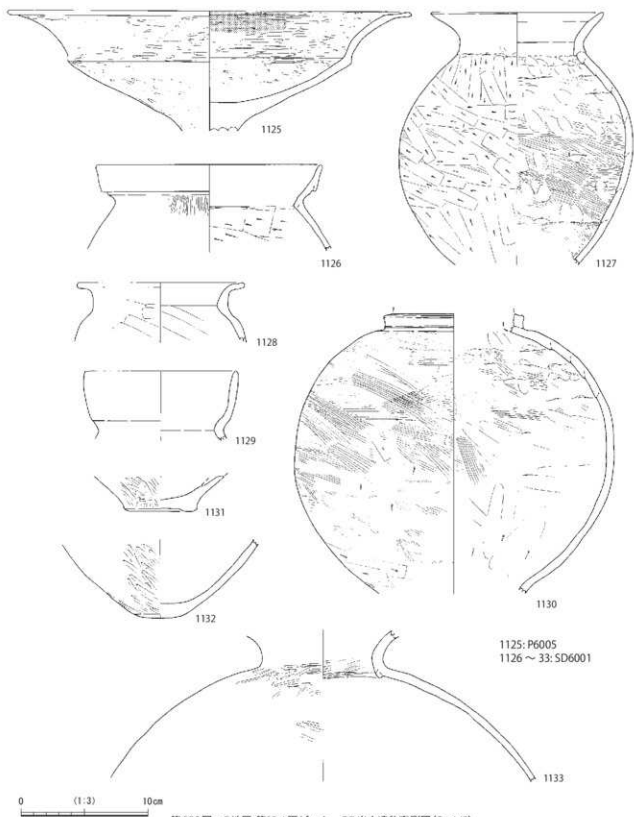
SD6005 F-22-3区で検出した溝で、SD6003と平行する位置関係にある。長さ400cm、幅25～60cm、深さ5～10mを測り、覆土は濁灰褐～灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SD6006 E～G-22区で検出した浅い溝状の落ち込みで、等高線にはほぼ直交してのびる。長さ9.2m以上、幅60～120cm、深さ3～12cmを測り、覆土は円礫が混ざる暗灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。

SD6031～43 整理段階で新たに遺構番号を付した溝であり、乱れた平面プランをもつ溝状を呈した遺物包含層(土層c)の浅い落ち込みを含む。規模、覆土等は第56表に示すとおりで、いずれからも遺物な出土していない。



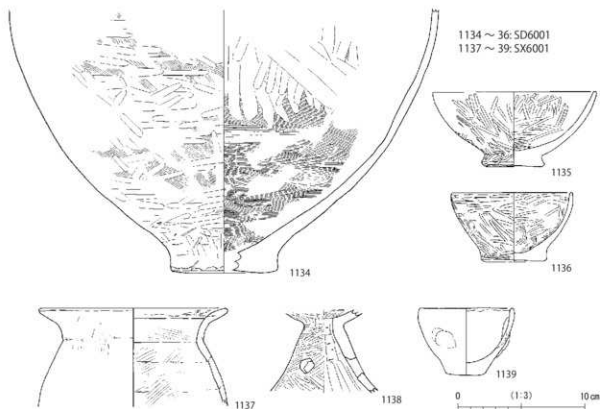
第251図 G地区 第Ⅵ-Ⅰ面SD等土層断面図(S=1/60)



第252図 G地区 第VI-1面ピット、SD出土遺物実測図(S=1/3)

4 不明遺構(SX)(遺構：第242・251図、遺物：第253図)

調査区南端のF-20区で検出した落ち込みである。北側でSD6043と接続、調査区外南側に向けて次第に深くなる。深さ8cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物のうち、第253図1137～39



第253図 G地区 第VI-1面SD、SX出土遺物実測図(S=1/3)

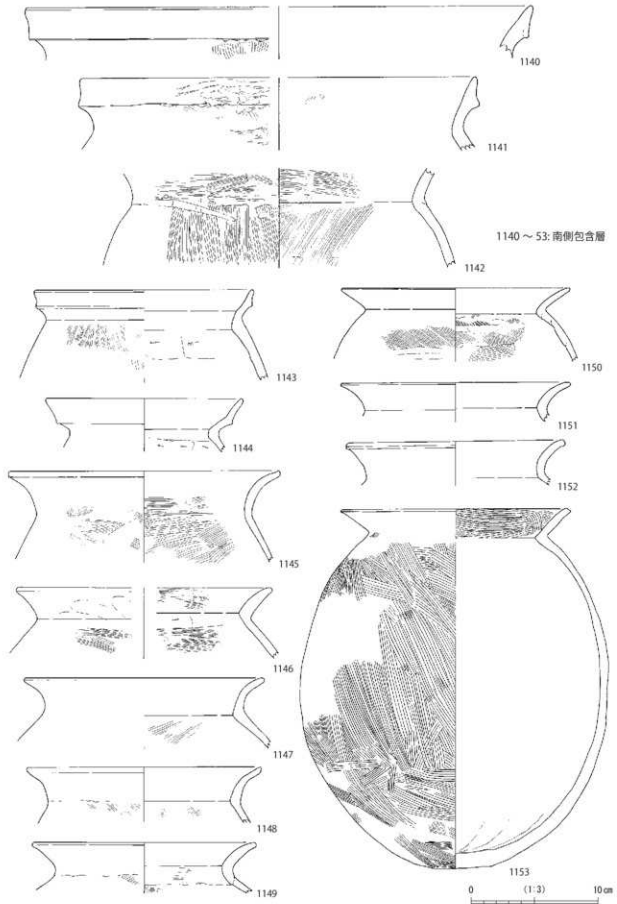
の古墳時代前期の土師器を図化した。甕1137は口径14.5cmを測り、ナデ肩の胴部はハケ調整が粗いため粘土紐の積み上げ痕がみえる。器台1138は、乾燥の進んだ段階で平面五角形を呈する孔を外側から3ヶ所に穿つ。小型の鉢1139は口径7.2cm、器高5.4cmを測り、口縁端部の仕上げが粗い。また、整形時に粘土紐の長さが不足し、約2.5cm大の粘土塊を外側から継ぎ足し、内側から強く押したため、その部分の体部は外側にふくらむ。

5 包含層出土遺物(第254～258図)

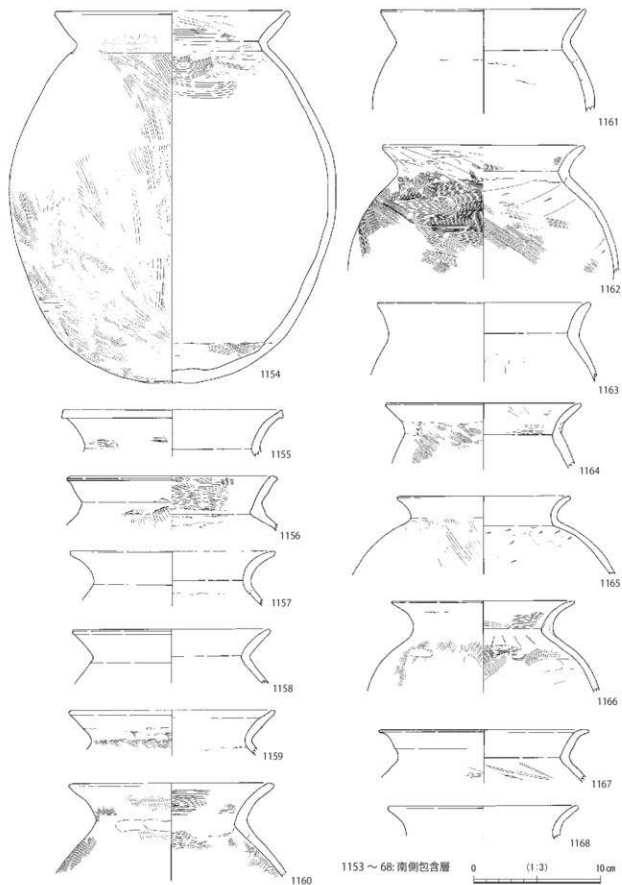
第254図1140～第257図1204は河跡3001(古)の南側包含層から、第257図1205～第258図1217は河跡3001(古)の北側包含層からそれぞれ出土した遺物であり、後者は多くが弥生土器となる。

1140・41は、弥生時代後期の大型有段口縁の甕片であり、口径は1140が約40cm、1141が約31cmを測る。1141は、口縁部外面の整形が非常に粗いため、器面は乱れる。土師器の大型甕1142は頸部の接合が粗い他、内外面に異なるハケ原体を用いる。弥生時代終末期の甕1143は口径17.0cmを測り、口縁部内面の屈曲が弱い。土師器甕1144は口径15.6cmを測り、口縁部が大きく外傾する。

古墳時代前期の土師器甕1145～1169は、胴部内外面はハケ調整を基本に、ナデ調整が定量存在する他、ケズリ調整で仕上げた個体も認められる。薄手の1145は口径21.1cmを測る。口縁部はゆるやかに外反しながら長くのび、端部を小さくつまみあげる。1146は頸部で明瞭に屈曲し、頸部内面にケズリ調整を施す。1147は口径18.6cmを測り、胴部外面をナデ調整で仕上げる。1148は口径18.2cmを測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。1149は口径17.7cmを測り、煮炊き痕が明瞭に残る。1150は頸部で明瞭に屈曲し、胴部内面のハケ調整が粗いため、粘土紐の積み上げ痕がみえる。1151



第254図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図1 (S=1/3)



第255図 G地区 第Ⅵ-1面包含層出土遺物実測図2 (S=1/3)

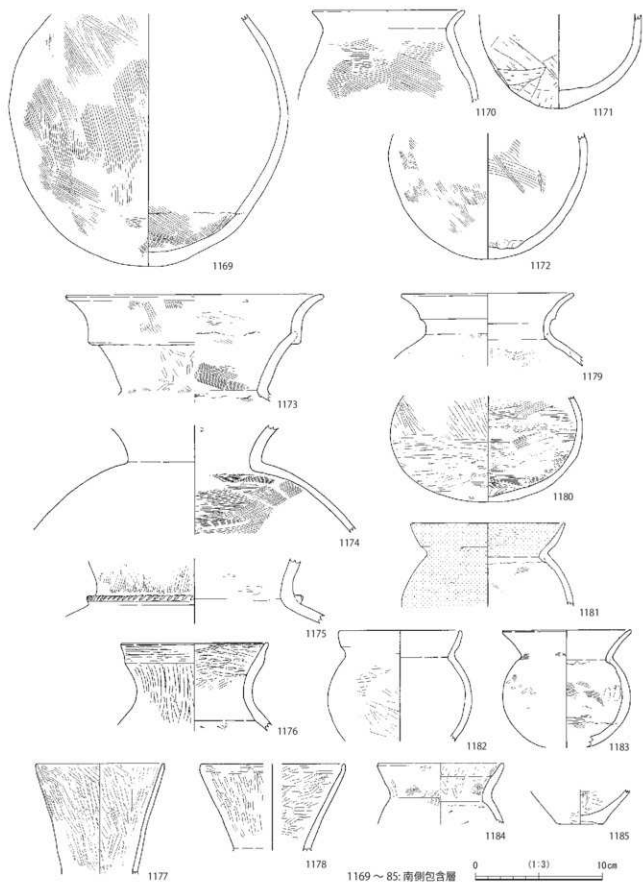
は口径17.7cmを、1152は口径16.8cmを測る。第254図1153は口径17.4cm、器高28.5cmを、第255図1154は口径18.4cm、器高29.4cmをそれぞれ測る。いずれも底部を丸底風につくり、球形の胴部内面をナデ調整で仕上げる。また、口縁端部を平坦に面取りし、煮炊きに伴う煤、コゲの付着が認められる。1155は口縁端部を小さくつまみ上げ、平坦とする。1156は煮炊きに伴う煤、ヨゴレが明瞭に残る。1157は口径16.0cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。1158は口径15.4cmを測り、胴部内外面ともナデ調整で仕上げる。1159は口径16.0cmを測る。1160の口縁部は長くのび、端部を平坦とする。1161は口径16.0cmを測り、胴部内外面ともナデ調整で仕上げる。1162は、口縁部外面にハケ調整原体の接触痕、胴部内面上半にケズリ調整痕がそれぞれ認められる。1163は口径16.6cmを測り、頭部の屈曲が弱い。1164の頭部外面は粘土紐の積み上げ痕を残す。球形の1165は口径13.9cmを測り、胴部内面にケズリ調整を施す。1166は口径14.1cmを測り、胴部内面は胎土がかなり柔らかい状態でナデ調整を施すことから一部がハケ様にみえる。1167の口縁端部は水平に近く、胴部内面にナデ調整を施す。1168は精良な胎土を用い、煮炊きに伴い煤が付着する。第256図1169は球形を呈し、ハケ調整により丸底に仕上げる。1170～72は小型の土師器甕である。1170は口径11.7cmを測り、胴部はナデ肩気味である。1171は、内面にナデ調整、外面にケズリ調整を施し、丸底とする。1172は、煮炊きに用いた痕跡が明瞭に残る。

第256図1173～1185は壺類で、1175・76が弥生土器、それ以外が古墳時代前期の土師器となる。大型・有段口縁の1173は口径20.0cmを測り、口縁端部は大きく外反する。内外面ともハケ調整後に粗いミガキ調整を加える。球形の1174は、外面の摩滅が著しい。弥生時代後期の壺1175は、肩部に断面三角形を呈する突帯を貼り付け、刺突文で加飾する。1176は口径11.4cmを測り、先細る口縁部は有段口縁状を呈する。また、ミガキ調整は、内面に比して外面が丁寧である。1177・78は器肉が薄く、内外面とも丁寧なミガキ調整を加える。二重口縁様の1179は口径17.6cmを測り、精良な胎土を用いる。1180は、横に張った球形を呈する。赤彩を施す1181は口径12.0cmを測り、古墳時代前期後半に位置付けられる。1182・83は口径10cm前後を測り、胴部外面にミガキ調整を加える。口縁部の形状は、1182は内湾気味であるのに対して、1183は直線的に外傾する。1184は口径9.7cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。胎土は精良である。1185は、内面にミガキ調整を施すことから鉢の可能性をもつ。

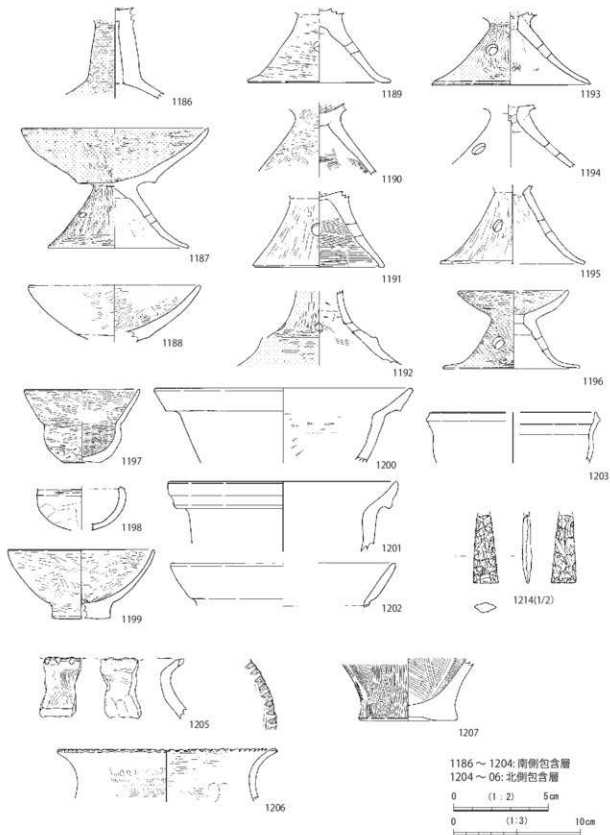
第257図1186～1191は、土師器高坏である。1186は、外面にわずかに赤彩が残る。1187は口径14.7cm、器高9.5cmを測り、濃赤色の赤彩を施す。坏体部は内湾気味で、大きくひろがる脚裾部3ヶ所に円孔を穿つ。1188は口径13.5cmを測り、外面は2次被熱により煤が付着する。1189の外面は、ハケ調整の後にミガキ調整を加える。1190・91の脚部に穿たれた円孔の数は不明である。1191は脚端部を平坦にする点、内面にハケ調整を施す点で、他の高坏と異なる。弥生時代後期～終末期の器台1192は、摩滅が著しい。土師器器台1193～96は、脚部3ヶ所に円孔を穿つ。1193は赤彩を施し、1194は赤彩を意識した橙色の色調を呈する。1196は口径8.5cm、器高6.2cmを測り、脚裾部は先細りながら外展する。

1197～99は、土師器小型鉢である。平底の1197は口径9.1cm、器高5.8cmを測り、体部内面は黒色処理様の器面を呈する。1198は底部外面を手持ちケズりで整形する。塊状の1199は口径11.5cm、器高5.5cmを測り、胎土中に混和材が多く混ざる。土師器鉢1200は口径20.0cmを測り、有段の口縁部は大きく外傾する。弥生時代後期の有段口縁の壺1201は、器肉が厚い。土師器1202は口径17.6cmを測り、甕と考えられる。薄手の1203は弥生時代後期の甕と考えられ、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。長身・平基形の石甕1214は、黒色のガラス質安山岩製であり、先端部が欠損する。

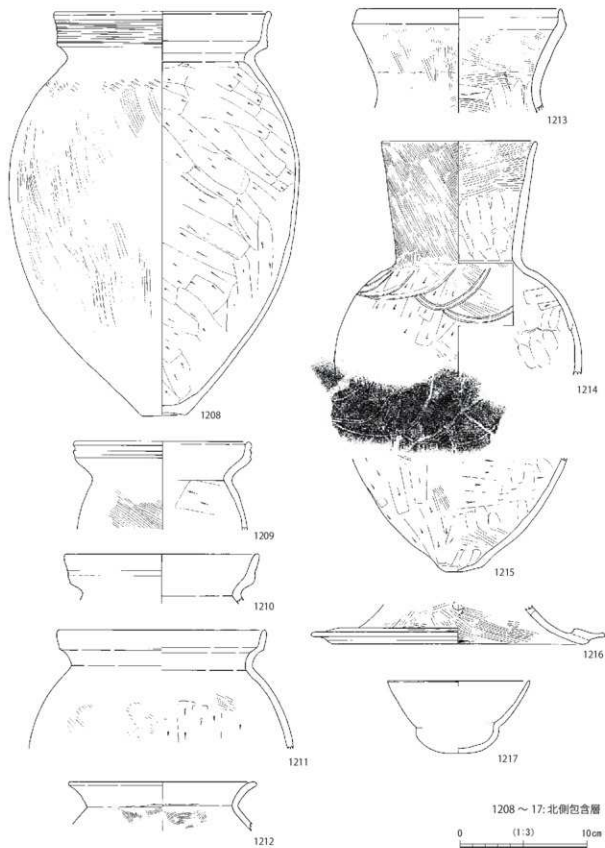
第257図1205～第258図1217は、河跡3001(古)以北から出土し、古墳時代前期に属する1211・12・16以外は弥生土器である。弥生土器甕1205～1207は、本来、第VI-2面に属する。1205は口縁部を短く



第256図 G地区 第Ⅵ-1面包含層出土遺物実測図3 (S=1/3)



第257図 G地区 第VI-1面包含層出土遺物実測図4 (S=1/2・1/3)



第258図 G地区 第Ⅵ-1面包含層出土遺物実測図5 (S=1/3)

折り曲げ、端部を連続した刻みで加飾する。1206は口径17.0cmを測り、口縁部はゆるやかに外反する。1207は、底部外面にケズリ調整を施す。第258図1208・09は弥生時代後期後半に属する有段口縁の甕である。1208は口径16.9cm、器高32.0cmを測り、口縁部外面を擬凹線、肩部外面を斜行刺突文で加飾する。1209は口径13.7cmを測り、口縁部外面に2条の凹線文を施す。磨滅した甕1210は口径15.2cmを測り、弥生時代終末期に属するものと考えられる。土師器甕1211は口径16.2cmを測り、有段の口縁部は短く直立する。土師器甕1212は口径14.8cmを測り、煮炊きに伴う煤、ヨゴレが付着する。1213～15は甕で、1214と1215は胎土の特徴から同一個体の可能性が高い。1213は口径16.0cmを測り、有段状の口縁部が内傾気味である。直口の1214は口径12.2cmを測り、肩部外面を乱れた弧状文で加飾する。1215は、底部が突出する。器台1216は、脚端部に突帯を貼り付けた後に、ミガキ調整を施す。古墳時代前期後半の土師器小型鉢1217は口径11.5cm、器高5.7cmを測り、口縁部は内湾しながら長くのびる。磨滅が著しいため、調整は判然としない。

6 小 結

第VI-1面では、第IV面河跡3001(古)南側において土坑(SK)5基、溝(SD)約25条、落ち込み(SX)1ヶ所、ビット多数を検出した。出土遺物から弥生時代後期後半～古墳時代前期と、比較的存続期間の長い生活面であり、その中で弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺物は目立たない存在となる。

主な遺構の所属時期は、弥生時代後期後半がP6005、古墳時代前期がSK6001、SK6002、SD6001、SD6004、SX6001となる。また、第IV面河跡3001(古)を挟んで、北側の調査区で明確な遺構が検出できず、弥生時代後期後半の遺物が多い一方、南側の調査区で古墳時代前期を主体とした遺構・遺物を確認できたことは、おそらく調査区東側に展開した集落の中心城の差を反映したものと考えられる。さらに、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての集落活動は低調であった可能性が高いことも指摘できよう。

第IV面河跡3001(古)南側で検出した古墳時代前期の様相は、遺物量が当該期他遺跡に比して少ないことを加味すれば、連続する第4次調査F地区第VI面と同様に、集落域の縁辺部に近い印象が強い。現段階で復元しうる集落の構成要素として、平面不整形を呈する堅穴状遺構SK6001(長軸3.16m)、略長楕円形の範囲を取り囲む外周溝SD6004、何らかの区画を示す屈曲した溝SD6001、SD6004があげられる。さらに、これまでの当該期の事例・研究¹⁵⁾と対比すれば、溝掘り方の不安定さ(掘り方プランの不安定さ)、建物柱穴の欠落、外周溝とした場合の出土遺物の欠落等から、その復元にかなりの躊躇を覚えるが、第259図で示した復元建物4棟について、あくまで可能性として提示しておきたい。具体的には、SD6035を南西側の外周溝とする平地建物(1×1間、出土遺物なし、主柱穴欠落)、SD6034等を外周溝とする平地建物(1×1間、出土遺物なし)、SD6042・43、SK6032を外周溝とする平地建物(出土遺物なし、主柱穴特定できず)、SK6001を中心とするような柱穴群(径約6.2m、6本主柱)である。今後、調査事例の増加を待って、その位置付けを行いたい。

【註】

15) 田嶋明人1991「北陸の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物—本編—』埋蔵文化財研究会

岡本淳一郎2003「『周溝をもつ建物』の基礎的研究」『富山大学考古学研究室論集 張気楼—秋山進午先生古希記念—』秋山進午先生古希記念論集刊行会、六一—書房

久田正弘2004「第2節 多角形建物の覚書」『志賀町穴口遺跡・穴口貝塚』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
(財)石川県埋蔵文化財センター 2008「弥生時代の家と村」平成20年度環日本海文化交流史調査研究会発表要旨・資料集



第259図 G地区 第VI-1面主要遺構復元案(S=1/300)

第8節 第VI-2面の遺構と遺物 (第260～285図、第59～63表)

1 概 要(第260～270図)

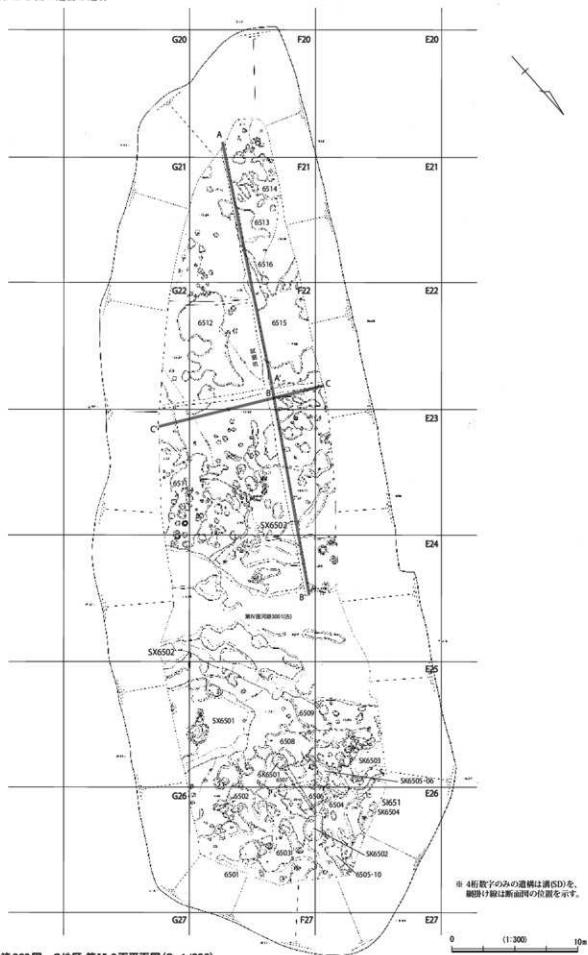
G地区第VI-2面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第VI-1面ベース土(第8図土層53～55層(洪水堆積土層オ))を人力で掘り下げて検出した弥生時代中期後葉の集落域であり、本遺跡の一連の調査の中で、初めて確認した生活面となる。遺構検出面は、第VI-1面検出面より30～60cm下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.26m(第VI-1面ベース面13.55mより-29cm)、G-23区杭脇で13.44m(同14.02mより-58cm)、北東端(G-26区杭南東3m)で13.61m(同約14.00mより-約40cm)、北端(F-26区杭西8m)で13.00m(同約13.35mより-約35cm)をそれぞれ測る。また、遺構検出面の標高は12.85～13.60mを示し、G-25区付近が最も高くなる。また、調査区内の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.3m、23ライン(南東-北西方向)が0.3m弱、26ライン(同)が約0.6mを測る。第VI-1面と同様に、北西～西側に向けて傾斜する地形であり、第IV面河跡3001(古)北側における南北方向の傾斜がより強い。

第VI-1面～第VII-2面の基本的な土層層序は、第IV面河跡3001(古)北側と南側で若干様相が異なる。第5節で記したとおり、第IV面河跡3001(古)北側の土層層序(第231～233図)は、下層から順に第VI-2面遺物包含層(土層e(濁暗灰色細砂、厚さ15～24cm)、同図土層断面1-1'第22層、同2-2'第15層等)と、第VI-1面遺物包含層(土層e(暗灰褐色砂質土)、第231図土層断面1-1'第15層、同2-2'第13層等)が堆積する。間層(第231図土層断面1-1'第16・17層、同2-2'第14層等)の形成は、かなり貧弱でありつつも、調査区北側および西側で第VI-2面遺物包含層を浸食する。なお、次節で記すように、第VI-3面の形成(大規模な土砂流入・堆積)により、第VII-1-2面は損壊し、確認できない。

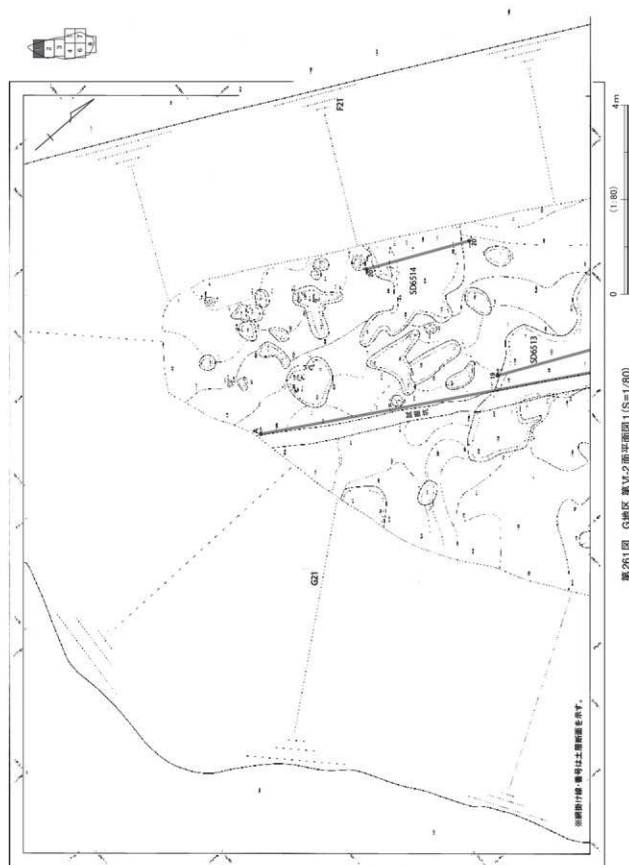
一方、第IV面河跡3001(古)南側の土層層序(第269・270図)は、下層から順に第VII-2面遺物包含層(淡灰オリーブ色弱粘質土(第269図第36・37層、第270図第17・18層)、第VII-1面遺物包含層(濁灰色細砂(同図第29層、第7層)、第VI-2面遺物包含層(土層e(暗灰色細砂等)、同図第3・4層)、第VI-1面ベース土層(茶灰色粗砂、同図第1層)が、若干の傾斜を示しつつ水平的に堆積する。また、土砂流入・堆積を示す無遺物の間層は、第VI-2面遺物包含層と第VII-1面遺物包含層との間で、第VI-3面に相当すると考えられる淡灰色粗砂(第269図第13層)、濁暗灰褐色細砂(第270図第4・5層)が、部分的に厚さ10cm前後堆積する程度である。これらから、第IV面河跡3001(古)南側については、第VII-2面(縄文時代中期)～第VI-2面(弥生時代中期後葉)にかけて、大規模な土石流災害の発生痕跡は認められず、比較的安定的な状況が続いたものと想定できる。続く、第VI-2面遺物包含層と第VI-1面遺物包含層の間は、第VI-1面ベース土層(茶灰色粗砂、厚さ20～40cm)の存在から、かなりの規模の土砂流入・堆積が想定できる。

以上、整理すれば、第VII-1面と第VI-2面の間に発生した土石流災害(第VI-3面:土石流災害6)は、傾斜の強い調査区北側で限定的に大きな影響を及ぼすのに対して、第VI-2面と第VI-1面の間に発生した土石流災害(第VI-1面ベース土層:土石流災害5)は、より厚い堆積を示す第IV面河跡3001(古)南側を中心に、第IV面河跡3001(古)北側で一部の第VI-2面遺物包含層を押し流すような、広範に影響を及ぼす規模であったものと想定できる。

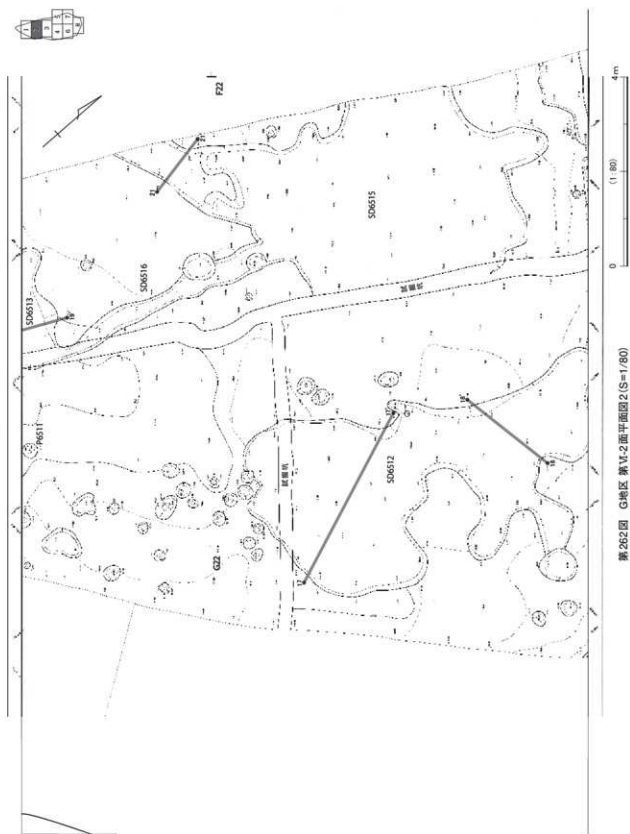
調査の結果、第IV面河跡3001(古)北側を中心に周溝をもつ建物1棟(SI651)や、土坑(SK)4基、遺物包含層の浅い落ち込みを含む溝(SD)14条、不明遺構(SX)2基、ピット200基以上を検出し、調査区外東側に中心域をもつ弥生時代中期後葉の小規模な集落の一部を調査したものと推定できる。遺物は、SI651の外周溝を主体に弥生土器の他、集落内での石器製作を示す黒色を呈するガラス質安山岩の剥



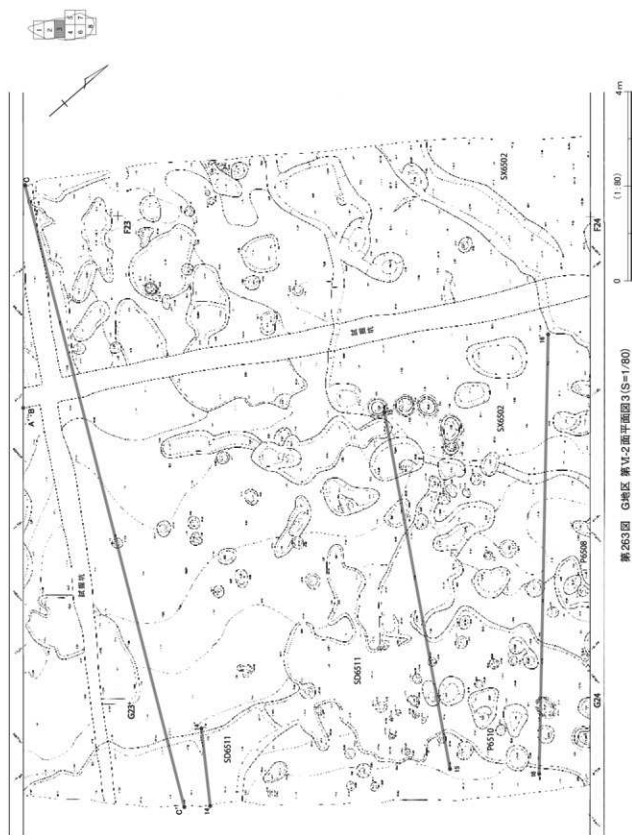
第260図 G地区 第VI-2面平面図(S=1/300)



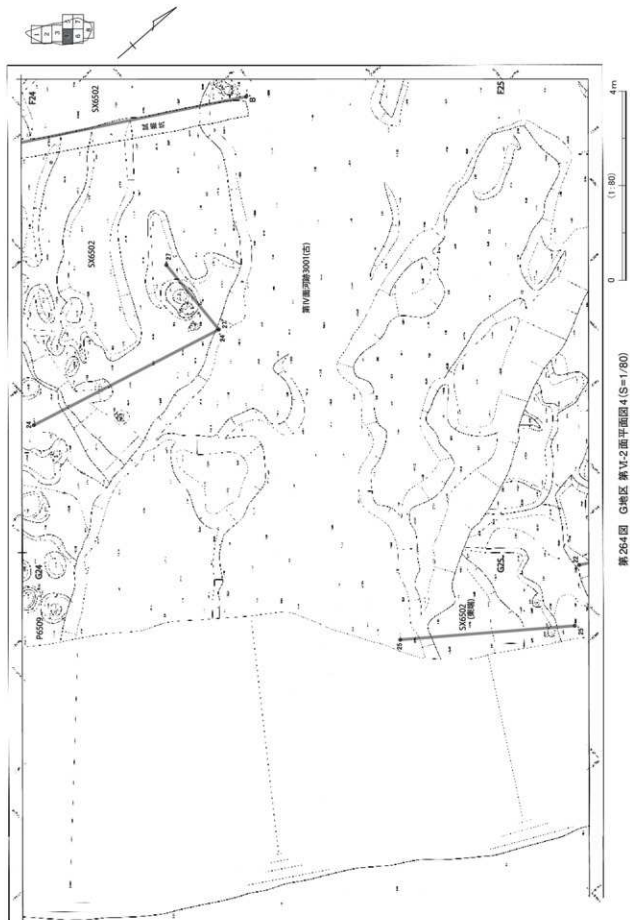
第261図 G地区 第V-2面平面図1 (S=1/80)

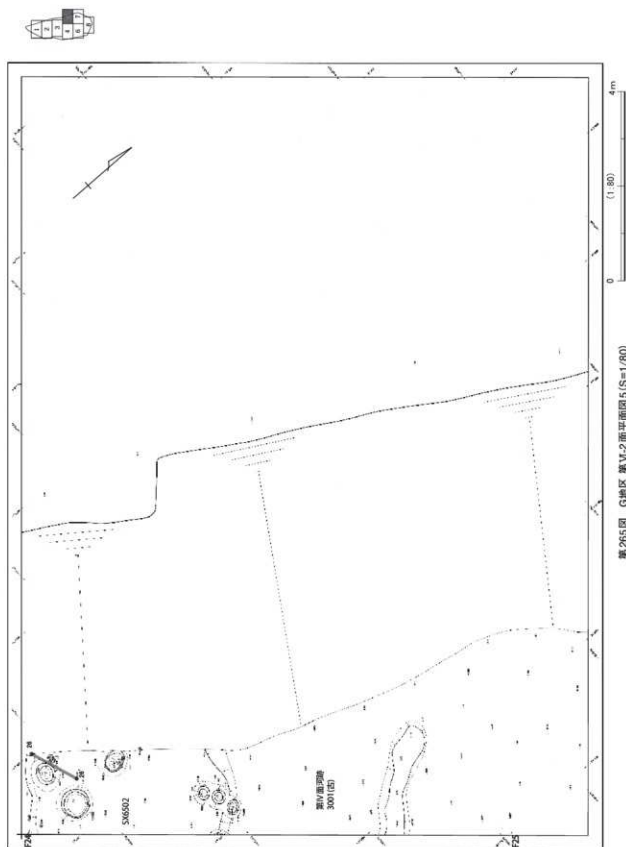


第262図 G地区 第VI-2面平面図2(S=1/80)

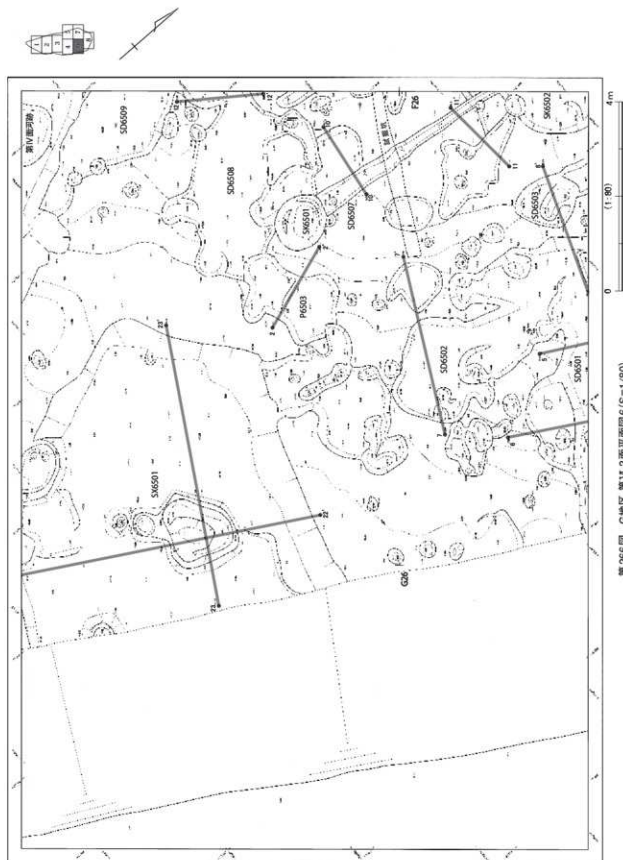


第263図 G地区 第V-2面平面図3(S=1/80)

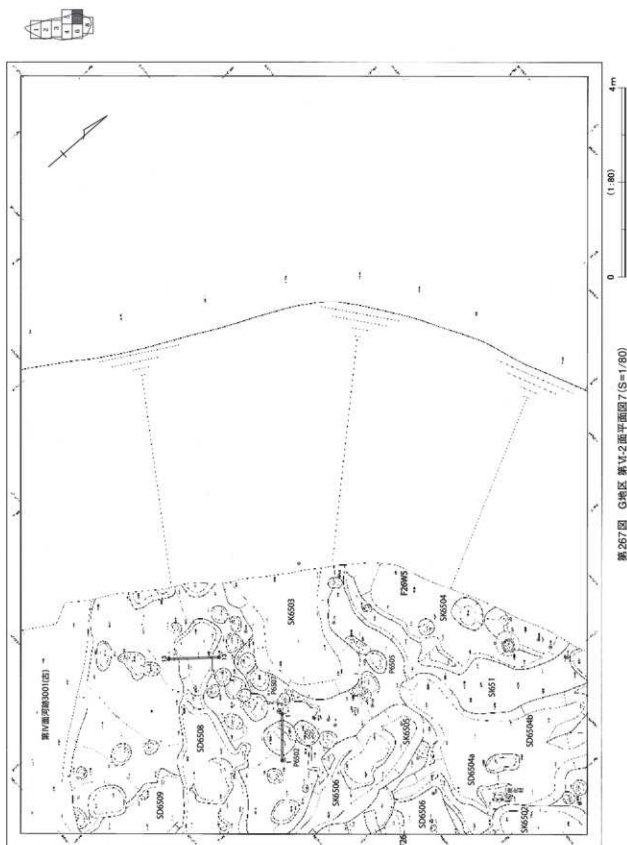


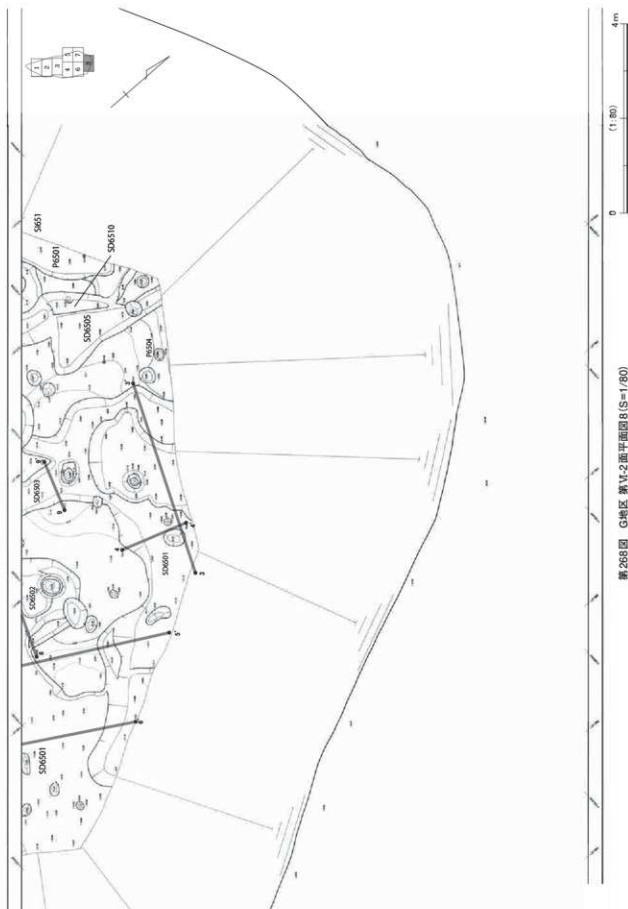


第265図 G地区 第V-2面平面図S (S=1/80)



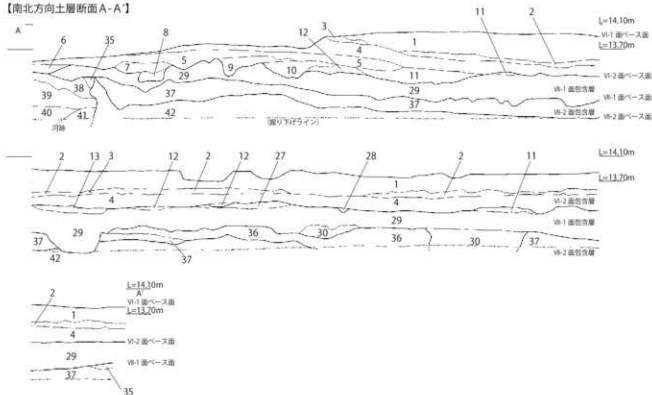
第266図 G地区 第Ⅵ-2面平面図C(S=1/80)



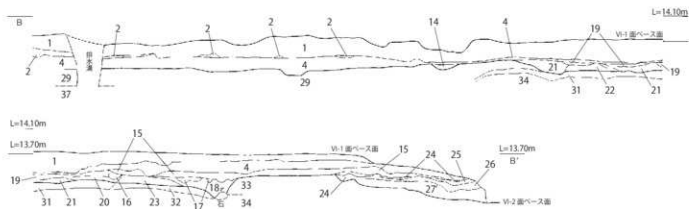


第268図 G地区 第VI-2面平面図(S=1/80)

【南北方向土層断面A-A'】



【南北方向土層断面B-B'】

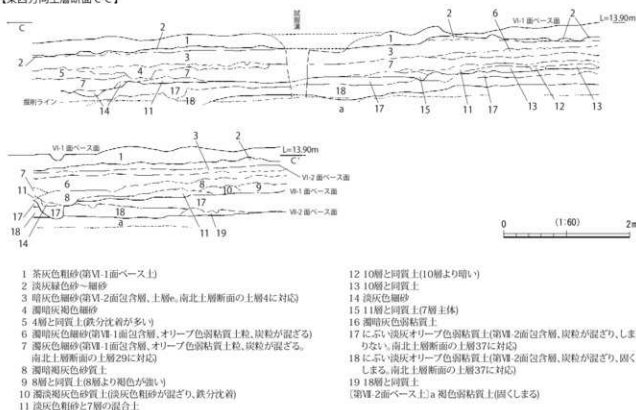


- | | | |
|---------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1 茶灰色粗砂(第VI-1面ベース上) | 19 14層と濁暗灰褐色細砂の混合上 | 35 37層と同質上(植物遺体が混ざる) |
| 2 淡灰緑色砂～細砂 | 20 14層と同質上(茶褐色粗砂が混ざる) | 36 明オリブ灰色砂質土(粒子が細かい) |
| 3 2層と暗灰褐色砂質土の混合上 | 21 14層と同質上(茶褐色細砂が混ざる) | 37 にくい淡灰オリブ色弱粘質土(第VII層2面包含層、炭粒が混ざる) |
| 4 暗灰色細砂(第VI-2面包含層、土層e) | 22 19層と同質上 | 38 濁暗灰褐色細砂(河跡層上) |
| 5 暗灰色砂質土 | 23 濁茶灰色粗砂 | 39 38層と同質上(38層より明るい) |
| 6 濁暗灰褐色粗砂(炭粒が混ざる) | 24 23層と同質上(26層が混ざる) | 40 明黄色粗砂(河跡層上) |
| 7 濁灰色粗砂(オリブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる) | 25 4層と同質上(やや明るい) | 41 褐色粗砂(「e」) |
| 8 7層と同質上(褐色が強くなる) | 26 濁淡灰色細砂(褐色砂質土粒、炭粒が混ざる) | 42 褐色弱粘質土(第VII層2面包含層) |
| 9 7層と同質上(7層より暗い) | 27 29層と淡灰色粗砂の混合上 | |
| 10 5層と同質上 | 27' 26層と同質上(やや明るい) | |
| 11 4層と29層の混合上 | 28 29層と同質上(茶灰色粗砂が混ざる) | |
| 12 4層と同質上(淡灰色粗砂が混ざる) | 29 濁灰色細砂(第VII-1面包含層、オリブ色弱粘質土粒、炭粒が混ざる) | |
| 13 淡灰色粗砂と暗灰褐色砂質土の混合上 | 30 29層と同質上(褐色が強くなる) | |
| 14 灰オリブ色粗砂 | 31 濁暗灰褐色細砂 | |
| 15 4層と同質上(褐色が強くなる) | 32 暗灰色砂質土 | |
| 16 濁暗褐色砂質土 | 33 濁淡灰褐色粗砂(礫が混ざる) | |
| 17 15層と18層の混合上 | 34 濁淡灰色粗砂 | |
| 18 淡灰色粗砂 | | |

0 (1:60) 2m

第269図 G地区 第VI-2面～VII-2面土層断面図1(S=1/60)

【東西方向土層断面C-C'】



第270図 G地区 第VI-2面～VII-2面土層断面図2(S=1/60)

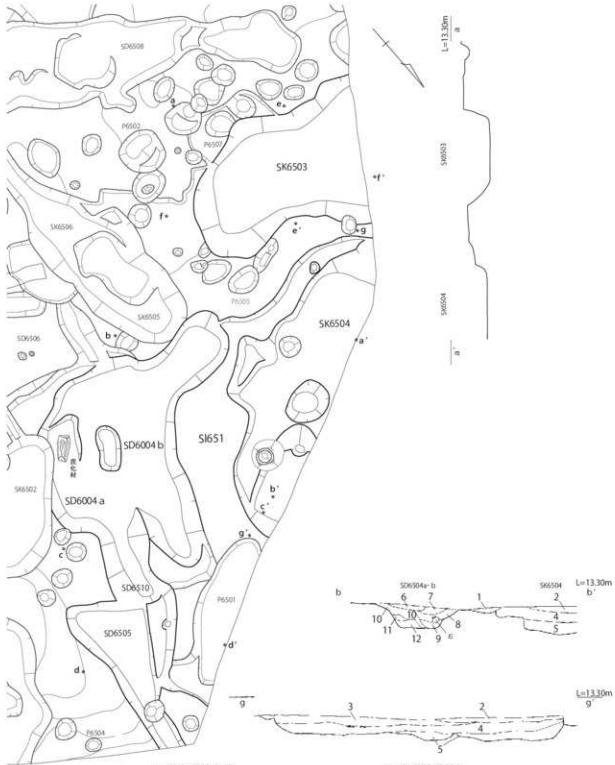
片や磨滅した小骨片が出土した。

2 周溝をもつ建物(SI)(遺構：第271・272図、遺物：第273～275図)

SI651 E-25・26区で検出した弧状の土坑・溝群の連なりを外周溝と考えて復元した建物で、調査区外北西側にのびる。建物は、SK6504、SD6504a・b、SD6505、SD6510で構成され、SK6504以外は外周溝とする。南東辺の外周溝は、遺構の切り合い関係から4回の掘り直しが認められ、古い順からSD6504a(幅約150cm、深さ34cm)→SD6504b(同75～100cm、35～45cm)→SD6510(同70cm前後、25～40cm)→SD6505(同40～100cm、25～40cm)となる。一方、南西辺の外周溝となる幅広のSK6503(幅260cm、深さ44cm)は掘り返しの痕跡が認められない。やや崩れた略円形を呈するSK6504は、外周溝とする場合、囲まれる内部空間が径3m以下と極めて狭くなり、掘り返しのない水平な土層堆積(第271図)の状況からも、堅穴部の掘削と考えた¹⁶⁾。壁周溝は認められず、支柱穴は判然としない。SI651を堅穴系の建物とした場合、外周溝は外径約12m、内径約8.6m、幅0.4～2.6m、深さ24～52cm、堅穴部は径6.7m前後、深さ34～46cm、外周溝内径と堅穴部の間の幅1～1.6mとなる。連結土坑群で構成される外周溝をもつ堅穴系建物は、平地系建物の影響を受けたあり方を示す可能性をもつ。

なお、SI651の南東側に接して、幅広で浅い掘方をもつSD6508の一部、P6503、SD6502の一部が、弧状に近い配置を呈しており、平地建物を構成する外周溝の可能性を多分に残す(第279図)。支柱穴が特定できないこと等から、あくまで可能性を図示するにとどめたい。仮に平地建物とした場合、外周溝は外径9.6～9.9m、内径6.2～6.4m、幅1.1～1.6m、深さ5～14cmを測る。

遺物は、比較的多く出土し、うち第273図1218～第275図1253を図化した他、SK6504出土のガラ

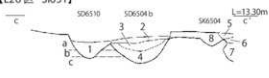


- | | |
|----------------------------|--|
| 1 濃暗灰褐色粗砂 | 8 暗灰褐色砂質土 |
| 2 にぶい灰オリブ色細砂(炭粒が混ざり、固くしまる) | 9 灰緑色砂質土(暗灰褐色砂質土、淡灰色土が粒状に混ざる) |
| 3 濃灰緑色砂質土(暗灰褐色土が粒状に混ざる) | 10 灰緑色砂質土(淡灰色土が粒状に混ざる) |
| 4 暗灰色砂質土(炭粒が混ざる) | 11 10層と同質土(淡灰色土粒が多く混ざる) |
| 5 濃暗灰色細砂(炭粒多く混ざり、しまりない) | 12 10層と同質土(10層より暗い) |
| 6 褐色砂質土 | 2~5:SK6504, 6~9:SD6504b, 10~12:SD6504a |
| 7 淡灰緑色細砂(暗灰色砂質土が粒状に混ざる) | |

0 (1:60) 2m

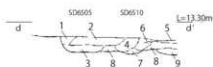
第271図 G地区 第VI-2面SI651平面図・土層断面図(S=1/60)

【E26区 SK651】



- 1 濃暗灰褐色砂質土
- 2 暗灰色砂質土(淡灰色細砂が粒状に混ざる)
- 3 淡灰色細砂(2層が粒状に混ざる)
- 4 濃暗灰褐色砂質土
- 5 にふい灰オリブ色細砂(固くしまる)
- 6 暗灰色砂質土

- 7 暗灰色細砂(炭粒混ざり、しまりない)
- 8 2層と同質土
- 1層:SD6510, 2~4層:SD6504 b, 5~7層:SK6504 (ベース上) a 緑灰色砂質土, b 黒灰色細砂, c 淡灰色砂利



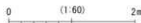
- 1 暗灰褐色砂質土
- 2 濃暗灰褐色砂質土(しまりない)
- 3 暗暗灰褐色砂質土
- 4 濃暗灰褐色砂質土(7層が粒状に混ざる)
- 5 濃暗灰褐色土

- 6 2層と同質土(暗灰褐色土が混ざる)
- 7 4層と同質土(4層より暗い)
- 8 濃灰色砂質土(粒子細かい)
- 9 灰褐色砂質土
- 1~3層:SD6505, 4~9層:SD6510, 10層:P 6501

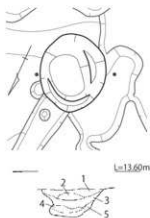


- 1 濃暗灰褐色砂質土(緑灰色砂質土粒、炭粒が少し混ざる)
- 2 濃灰褐色砂質土(3層が粒状に混ざり、固くしまる)
- 3 濃灰色砂質土(炭粒が混ざる, 2層と同質土)
- 4 濃黒灰色砂質土(炭粒・炭化物が多く混ざり、しまりない)
- 5 4層と灰緑色砂質土の混合土
- 6 黒灰色層(しまりない)
- 7 ベース上aと同質土(3層が粒状に混ざる) [ベース上] a 淡灰緑色細砂, b 灰褐色細砂

- 8 2層と同質土(暗灰褐色土が混ざる)
- 9 灰褐色砂質土
- 1~3層:SD6505, 4~9層:SD6510, 10層:P 6501

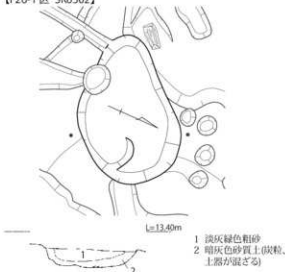


【F25-3区 SK6501】



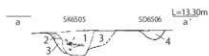
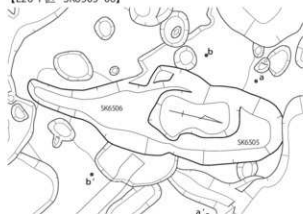
- 1 にふい黄色粗砂
- 2 にふい灰緑色粗砂
- 3 黒色細砂と淡灰色細砂の交互堆積層(レンズ状堆積)
- 4 淡灰色粗砂~細砂
- 5 黒灰色細砂(しまりない)

【F26-1区 SK6502】



- 1 淡灰緑色粗砂
- 2 暗灰色砂質土(炭粒、土器が混ざる)

【E26-1区 SK6505-06】



- 1 濃暗灰褐色砂質土
- 2 緑灰色砂質土と淡灰色細砂の混合土
- 3 緑灰色細砂(暗暗灰褐色細砂が粒状に混ざる)
- 4 暗暗灰褐色細砂と緑灰色砂質土の混合土



- 1 濃灰緑色粗砂
- 2 淡灰緑色細砂(4層が粒状に混ざる)
- 3 暗暗灰褐色砂質土(淡灰緑色細砂粒が多く混ざる)
- 4 3層と同質土(炭粒が多く混ざる)

第272図 G地区 第VI-2面SK651、SK平面図・土層断面図(S=1/60)

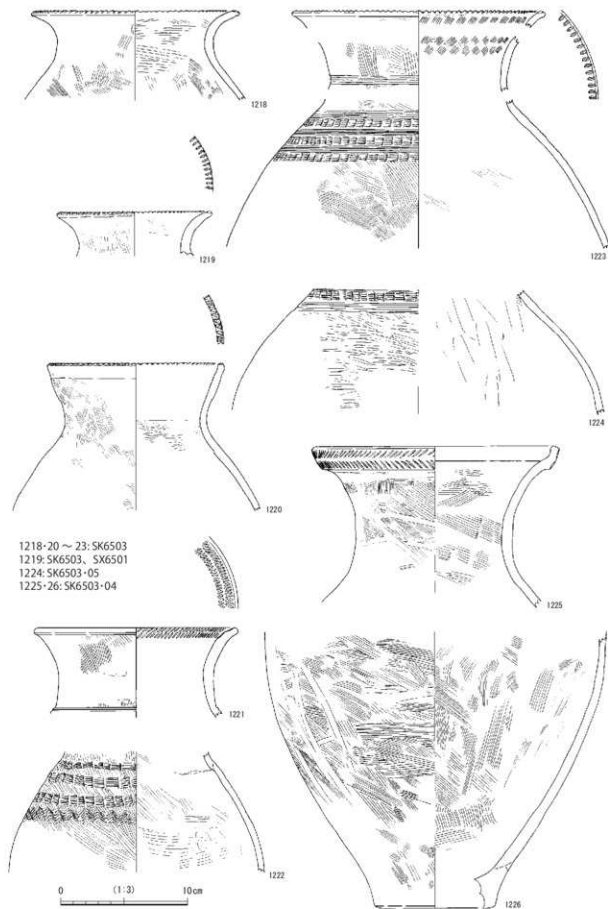
ス質安山岩剥片を写真図版114に掲載した。

SK6503出土の1218～1237のうち、1219の破片の一部がSX6501、1224・30の破片の一部がSK6505、1225・26の破片の一部がSK6504、1232の破片の一部がSD6505・10から、それぞれ出土しており、遺構間の接合が比較的目立つ。1218～29・35は壺である。1218は口径15.7cmを測り、ゆるやかに外反する口縁部に刻みを施す。破片化後に被熱する。1219は口径12.0cmを測り、口縁内面に丁寧な板状工具を用いた連続刺突文(以下、刻み)を施す。1220は口径13.7cmを測る。口縁部は内湾気味に長くのび、端部をヨコナデ調整で平坦とした後に浅い刻みで加飾する。1221は口径15.6cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。口縁内面に2列の刻み、頸部外面にクシ状工具を用いた直線文を施す。胴部片1222はハケ調整の後に5条1単位のクシ状工具を用いて、乱れた簾状文3列と波状文1列を施す。1223は同一個体と考えられる接点のない破片群を図上復元したものであり、全体に磨減が目立つ。口縁内面にクシ状工具を用いた斜行短線文、刻みを、胴部外面にはハケ調整の後にクシ状工具を用いた時計廻りの簾状文・直線文をそれぞれ施す。1224は胴部外面をミガキ調整の後に、時計廻りで工具を押し当てたままで施す簾状文と乱れた直線文で加飾する。受口状の壺口縁部1225は口径18.7cmを測り、磨減が著しい。口縁部外面に粘土紐を貼り付け突帯をつくった後、綾杉状に羽状文を施す。底部1226は、1225と同一個体の可能性が高い。受口状の壺片1227は、口縁部が内傾し、下端に小振りの刺突文を施す。1228は、壺頸部の貼付突帯が剥離したもので、板状工具を用いた連続刺突文の後に3条の沈線文を加える。胴部片1229は、外面にヘラ状工具を用いた直線文がかすかに残る。胎土は、0.5mm以下の砂粒が非常に多く混ざる特徴をもち、他の土器とは異なる場所で焼かれ、持ち込まれた可能性が高い。第274図1235は受口状の壺口縁部片と考えられ、屈曲部に丸棒状の工具で刻みを入れる。

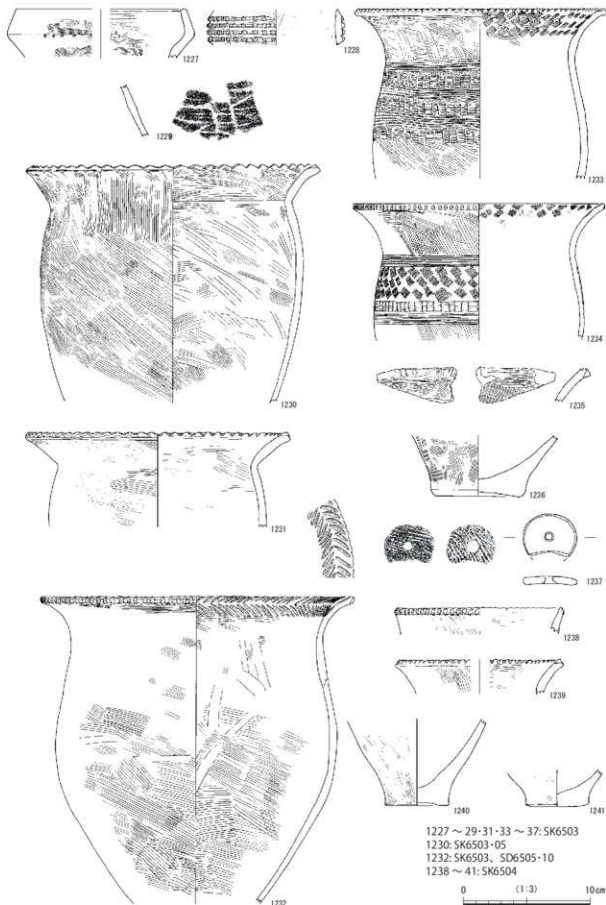
1230～1234・36は甕で、煮炊きに伴う煤・ヨゴレ・コゲが比較的良好に残る。1230・31は、頸部で明瞭に屈曲する。1230は口径22.6cm、胴部最大径20.6cmを測り、頸部～口縁部外面に縦方向のハケ調整を施す。口縁端部はヨコ方向のナデで平坦面をつくった後に、内面上部から指で押さえて小波状口縁に仕上げる。1231は口径20.4cmを測り、胴部外面に横方向のハケ調整が残る。平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から深い刻みを加える。1232～34の口縁部は、ゆるやかに外反する。薄手の1232は口径24.5cm、胴部最大径22.4cmを測り、口縁内面を板状工具で綾杉状の羽状文、また口縁外端を下方からの刻みで、それぞれ加飾する。1233・34は口径19cm強を測る。口縁内面の斜行短線文の施文は、1233がクシ状工具、1234が板状工具を用いる。また胴部外面を、1233は垂下線、クシ状工具を用いた乱れた直線文、簾状文で、1234はクシ状工具で直線文を施した後に時計廻りの簾状文(板状工具)、斜行短線文(クシ状工具)で、それぞれ加飾する。底部片1236は、外面に短い単位のハケ調整を施す。土製円盤1237は、径3.4cm、厚さ0.7cmを測る。両面から穿孔し、側面を研磨する。SK6503からは、他に甕を主体に多くの弥生土器や炭小片が出土した。

SK6504出土遺物として第274図1238～第275図1242を図化した。甕1238は口径13.0cmを測り、外傾する口縁部外縁に刻みを施す。1239は、平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に上方から刻みを加える。甕1240は、底部をつくる円盤状粘土が明瞭にわかる他、底部外面にケズリを施す。1241は壺と考えられる。1242は、富来・志賀周辺を産地とする黒色のガラス質安山岩剥片である。他に比較的多くの甕片が出土した。

SD6504出土遺物のうち、第275図1243～51を図化した。厚手の鉢1243は口径13.8cmを測り、水平な口縁端部にX字状の刺突文を施す。1244～46・48～50は甕である。1244は口径24.2cmを測り、平坦な口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から刻みを加える。1245は口径16.8cmを測り、口縁部が長くのびる。口縁内面に施したクシ状工具を用いた2列の斜行短線文は、粗い印象を受ける。



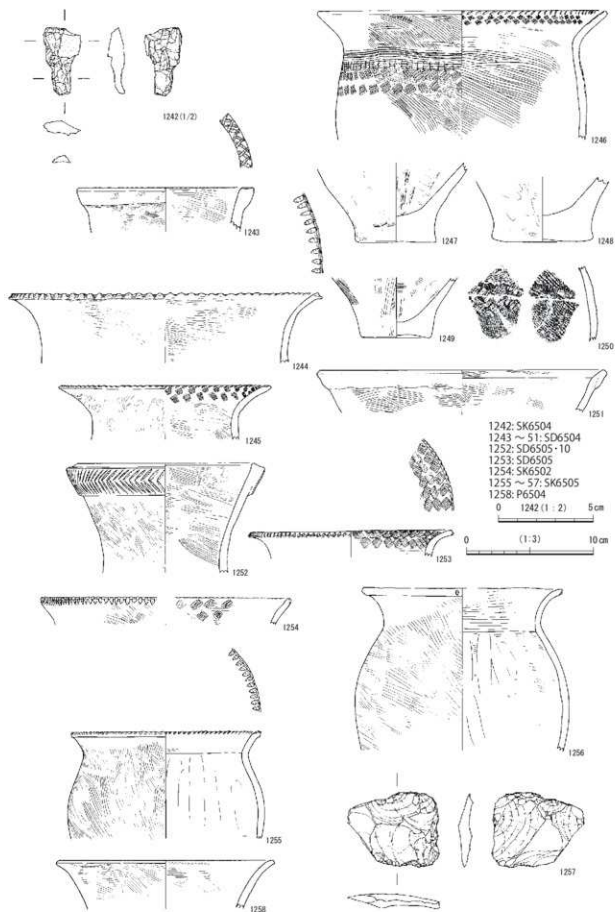
第273図 G地区 第Ⅵ-2面SI651出土遺物実測図1(S=1/3)



第274図 G地区 第VI-2面SI651出土遺物実測図2(S=1/3)

1227 ~ 29-31-33 ~ 37: SK6503
 1230: SK6503-05
 1232: SK6503, SD6505-10
 1238 ~ 41: SK6504

0 (1-3) 10cm



第275図 G地区 第Ⅵ-2面S1651-SK出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

第275図1246は口径22.6cm、胴部最大径19.8cmを測る。口縁端部は、ヨコナデ調整で平坦に面取りした後、刻みとクシ状工具を用いた簾状文を施す。また、胴部外面にクシ状工具を用いて乱れた施文を行なう。壺底部1247のハケ調整は粗い印象を受ける。平底の甕1248は磨滅が目立つ。甕1249の底部外面はナデにより凸状を呈する。甕胴部片1250は、外面を波状文、斜行短線文で加飾する。鉢1251は口径22.3cmを測り、口縁部外面に貼りつけた粘土紐の接合痕が残る。SD6504からは、他に弥生土器甕を中心とした小片が比較的多く出土した。SD6505・10出土の壺1252は口径15.6cmを測る。口縁部外面に幅の広い突帯を貼り付け、綾杉状に羽状文を施す。SD6505出土の甕1253は口径16.0cmを測り、口縁内面を綾杉状の斜行短線文、口縁端部を下方からの刻みを施す。SD6505・10からは、他に弥生土器片や炭片(写真図版114)が出土した。

3 土 坑(SK) (遺構：第272図、遺物：第275図)

第IV面河跡3001以北で6基の土坑を検出し、うちSK6503・04はSI651を構成する。

SK6501 F-25-3区で検出した平面略円形の土坑である。長径114cm、短径108cm、深さ44cmを測り、掘削直後に覆土第4・5層が堆積、しばらく開放状態であったと考えられる。他遺構との切り合い関係からSD6507より新しく位置付けられ、出土遺物はない。

SK6502 E-26-2区、F-26-1区で検出した大型の土坑である。長軸244cm、短軸150cm、深さ35cmを測り、底面は比較的に平坦である。下層から順に炭粒や土器が混ざる暗灰色砂質土、淡灰緑色粗砂が堆積し、他遺構との切り合い関係からSD6507より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第275図1254の甕を図化した。1254は口径約20cmを測り、口縁内面を綾杉状の斜行短線文(クシ状工具)、口縁端部を下方からの刻みで加飾する。他に覆土第2層から比較的多くの甕片が出土した。

SK6505 E-25-4区で検出した平面略楕円形を呈する土坑で、切り合い関係は不明ながら南側でSK6506と重複する。長径約180cm、短径126cm、深さ42cmを測り、覆土第1層の濁暗灰褐色砂質土から比較的多くの弥生土器が出土しており、第275図1255～57を図化した。甕1255は口径14.8cm、胴部最大径15.6cmを測り、胴部内面を縦方向のナデ調整で仕上げる。口縁端部中央に1条の凹線を施した後、上方から刻みを加える。搔器の可能性をもつ1257は、富来・志賀周辺を産地とする黒色のガラス質安山岩製である。他に弥生土器甕、壺片が比較的多く出土した。

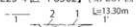
SK6506 E-25-4区で検出した大型の土坑で、平面形は南側が溝状に長くのびる。長軸約300cm、短軸106cm、深さ40cmを測り、覆土は下層から暗灰褐色砂質土、濁灰緑色粗砂となり、第4層に炭粒が多く混ざる。北側でSK6506と重複するが、新旧関係は不明である。弥生土器甕片が少量出土した。

4 ビ ッ ト (遺構：第276図、遺物：第275図)

現地調査段階で大小合わせて200基以上のピットを検出し、うち弥生土器片が出土した10基に遺構番号(P6506は欠番)を付した。いずれのピットからも柱根出土または明確な柱根痕跡は確認できず、多くのピットは深さ20cm以下(10cm以下が主体)を測る浅いものである。特にF・G-21・22区に分布するピットはその傾向が著しい。覆土は、炭粒が混ざる濁暗灰褐色～暗灰褐色を呈する細砂～砂質土を主体とし、ベース土が粒状に混ざるものも多い。出土遺物のうち、P6504出土の第275図1258を図化した。弥生土器甕1258は口径16.8cmを測り、磨滅が著しい。

なお、P6503が平地建物の外周溝の可能性を残す他、柱根痕跡はないもののF-23区に分布するピットが平面プランから1×1間の掘立柱建物2棟に復元できる可能性を残す(第279図)。仮に掘立柱建物であった場合、SB651が桁行長4.8m、梁行長3.8・4.1m、床面積約19㎡、SB652が桁行長4.8m、梁行長

【E25-4区 P6502】(第267図)



- 1 暗褐色細砂(ベース上)が粒状に少し混ざる)
- 2 暗褐色細砂(ベース上)が粒状に多く混ざる)
- 〔ベース上〕 緑灰色砂質土

【E25-3区 P6503】(第266図)



- 1 暗褐色砂質土(砂利が混ざる)
- 〔ベース上〕 茶黄色砂利

【F26区 SD6501】(第266・268図)



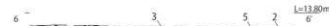
- 1 黒灰色粗砂
- 2 灰緑色粗砂
- 3 にぶい濁灰色砂質土
- 4 3層と5層の混合土
- 5 濁灰色砂質土(ややしまりない)



- 1 濁灰色砂質土(ベース上)が混ざる)
- 2 1層とベース上の混合土
- 3 淡灰緑色粗砂(1層)が粒状に少し混ざる)
- 〔ベース上〕 灰緑色砂質土(固くしまる)



- 1 黄茶色粗砂
- 2 にぶい褐色細砂(固くしまる)
- 3 にぶい灰褐色砂質土
- 4 ベース上bと3層の混合土
- 5 暗褐色砂質土(ベース上a)が混ざる)
- 6 灰緑色粗砂(5層)が粒状に混ざる)
- 〔ベース上〕 a 茶灰色砂利, b 灰緑色砂質土



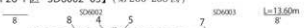
- 1 濁灰色砂質土(ベース上)が混ざる)
- 2 灰緑色粗砂(5層)が粒状に混ざる)
- 〔ベース上〕 a 茶灰色砂利, b 灰緑色砂質土

【F26-1区 SD6502】(第266図)



- 1 濁灰緑色砂質土
- 2 濁暗褐色砂質土
- 3 2層とベース上bの混合土
- 4 濁茶灰色粗砂
- 5 にぶい灰色砂質土
- 6 濁暗褐色砂質土
- 7 6層と同質土(灰粒が多く混ざる)
- 8 6層と同質土(ベース上b)が粒状に混ざる)
- 9 ベース上bと同質土(8層)が粒状に混ざる)
- 10 7層と同質土(ベース上b)が混ざる)
- 〔ベース上〕 a 灰茶色砂利, b 灰緑色砂質土

【F26-1区 SD6002-03】(第266・268図)



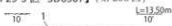
- 1 濁暗褐色砂質土(ベース上)が混ざる)
- 〔ベース上〕 灰緑色砂質土

【F26-3区 SD6003】(第268図)



- 1 濁暗褐色砂質土(ベース上)が混ざる)
- 〔ベース上〕 灰緑色砂質土

【F25-3区 SD6507】(第266図)



- 1 濁暗褐色砂質土(ベース上)が混ざる)
- 〔ベース上〕 灰緑色砂質土



- 1 濁茶灰色粗砂
- 2 暗褐色細砂(灰褐色細砂が混ざる)
- 3 暗褐色砂質土
- 4 濁緑灰色砂質土(ベース上に類似)

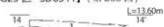
【E-F25区 SD6508】(第266・267図)



- 1 濁暗褐色砂質土(砂利が多く混ざる)
- 2 緑灰色砂質土(1層)が混ざる)



【G23区 SD6511】(第263図)



- 1 濁暗褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
- 〔ベース上〕 濁暗褐色砂質土

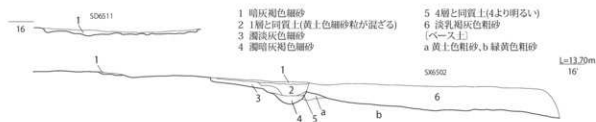


第276図 G地区 第VI-2面ピット、SD土層断面図(S=1/60)

【F-G23区 SD6511】(第263図)



- 1 暗灰褐色細砂
2 暗灰色細砂
〔ベース上〕 濃淡灰色細砂



- 1 暗灰褐色細砂
2 1層と同質土(黄土色細砂粒が混ざる)
3 濃淡灰色細砂
4 濃暗灰褐色細砂
5 4層と同質土(4より明るい)
6 淡乳濁灰色粗砂
〔ベース上〕 a 黄土色粗砂、b 緑黄色粗砂

【F-G22区 SD6512】(第262図)



- 1 濃暗灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
〔ベース上〕
a 濃暗灰色砂質土
b 濃暗灰色砂質土(1層より明るい)



- 1 濃暗灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
〔ベース上〕 濃暗灰色砂質土

【F21区 SD6513】(第261-262図)



- 1 濃暗灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)
2 1層と同質土(1層より粒子細かへ)
〔ベース上〕
a 濃暗灰色砂質土、b 暗灰褐色細砂

【F21-1区 SD6514】(第261図)



- 1 暗灰褐色砂質土
2 1層と同質土(灰色が強い)
〔ベース上〕 濃淡灰色細砂

【F21-3区 SD6515】(第262図)



- 1 濃暗灰褐色砂質土(白色砂粒が混ざる)

【F-G25区 SX6501】(第264-266図)



- 1 にぶい、暗灰褐色砂質土と灰オリーブ色砂質土の混合土
2 灰色砂質土(粒子細かく、固くしまる)
3 暗灰褐色砂質土(土器混ざる)
4 にぶい、灰色砂質土(淡灰砂質土が粒状に混ざる)
5 灰オリーブ色砂質土
6 明黄色粗砂
7 4層と同質土(4層より暗い)

- 8 にぶい、黄茶色粗砂
9 明黄色砂利(固くしまる)
10 灰色砂質土(粒子粗い)
11 5層と同質土(褐色細砂が混ざる)
〔ベース上〕 a 淡灰オリーブ色砂質土、b 黒灰色細砂(淡灰色細砂が層状に入る)、c ベース上 b-d の混合土、d 淡灰色粗砂

0 (1:60) 2m

第277図 G地区 第VI-2面SD、SX土層断面図(S=1/60)

3.8・4.0m、床面積約18.7㎡と、ほぼ同規模となる。いずれのピットからも出土遺物はない。

5 溝(SD) (遺構：第276・277図、遺物：第280図)

溝は、16条に遺構番号(SD6501～15、整理段階でSD6516を追加)を付し、第Ⅳ面河跡3001(古)以北にSD6501～10が、第Ⅳ面河跡3001(古)以南にSD6511～16がそれぞれ分布する。形状や推定される性格から、落ち込み様のSD6501、直線的なSD6503・06・07・16、SI651の外周溝となるSD6504・05・10、遺物包含層の浅いくぼみと考えられるSD6502・08・09・11～15に類別できる他、前述のとおりSD6502・08の一部が平地建物の外周溝となる可能性を残す。

SD6501 F-26区で検出した不整形な浅い落ち込みで、調査区外北東側に向けて少しずつ深くなる。延長10m以上、深さ22～30cmを測り、粗砂、砂質土が自然堆積する。出土遺物のうち、第280図1259を図化した。受口状口縁の壺1259は口径約24cmを測り、口縁部は内傾する。他に比較的多くの弥生土器壺片が出土した。

SD6502 F-26-1-2区で検出した不整形な浅い溝状の落ち込みである。長軸約6.1m、短軸1.2～2.3m、深さ2～18cmを測り、覆土は濁暗灰褐色砂質土を基調とする。少量の弥生土器壺片が出土した。

SD6503 F-26-1区で検出した直線的な溝で、不整形な溝を呈する南側が一段深くなる。深さは北側が約10cm、南側が30cm弱を測り、ベース土が混ざる濁暗灰褐色砂質土を覆土とする。弥生土器壺片が出土した。

SD6506 E-26-2区で検出した溝で、切り合いからSD6504より古く位置付けられる。幅26～44cm、深さ14cmを測り、覆土は暗褐色細砂と緑灰色砂質土の混合土である。弥生土器壺片が数点出土した。

SD6507 F-25・26区で検出した直線的な溝である。長さ約450cm、幅22～50cm、深さ4～12cmを測り、淡灰色細砂が混ざる暗灰色細砂を覆土とする。遺構の切り合い関係からSK6501・02より古く位置付けられる。摩滅した弥生土器壺片が出土したとどまる。

SD6508 E・F-25区で検出した。3つの不整形な浅い落ち込みが連なったものと考えられ、南東端の落ち込みは平地建物の外周溝の一部となる可能性を残す。幅0.4～1.4m、深さ7～10cmを測り、覆土は砂利が多く混ざる暗褐色砂質土を基調とする。切り合い関係からSK6501より古く位置付けられ、弥生土器壺片が出土した。

SD6509 F-25区で検出した浅い落ち込みである。深さ6～22cmを測り、暗灰褐色砂質土を覆土とする。切り合い関係からSD6508より古く位置付けられ、出土遺物のうち第280図1260を図化した。鉢1260は赤橙色を呈し、体部外面にミガキ調整を施す。また外傾する口縁端部を1条の太い沈線と刻みで加飾する。他に弥生土器壺片が出土した。

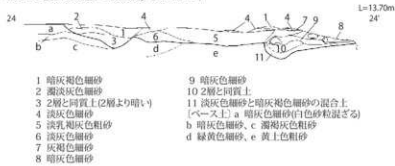
SD6511～15 第Ⅳ面河跡3001(古)以南のE～G-21～24区で検出し、遺物包含層の浅い落ち込みと考えられる。平面形は不整形であり、深さ2～24cmを測る。覆土は白色石英粒が目立つ濁暗灰褐色砂質土を基本とする。出土遺物のうち、SD6511出土の第280図1261の甕底部を図化した。他にSD6511・12から弥生土器壺小片が出土した。

SD6516 F-21-2区に位置する直線的な溝で、整理段階に新たに遺構番号を付している。SD6513とSD6515をつなぐような位置関係にあり、長さ約5.0m、幅30～60cm、深さ7～14を測る。覆土は白色石英粒が目立つ濁暗灰褐色砂質土である。

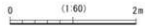
6 その他の遺構(SX) (遺構：第277・278図、遺物：第273・280図)

SX6501 F-25区で検出した大型の落ち込みである。南北方向約6.6m、東西方向6.5m以上、深さ24～

【E・F23・24区、G25区 SX6502】(第264図)



- 1 薄暗灰褐色砂質土
2 にふい茶灰色細砂
3 薄灰褐色砂質土(淡灰緑色砂質土混ざる)
4 薄灰褐色砂質土
5 淡茶色粗砂(層が粒状に少し混ざる)
6 淡灰緑色砂質土(粒子細かい)



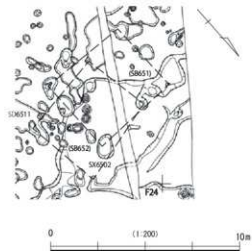
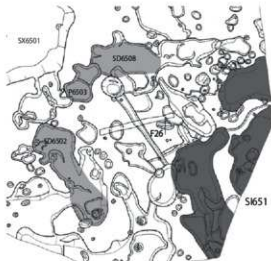
【E24-2区 遺物出土状況(S=1/30)】



【F24-1区 遺物出土状況(S=1/30)】



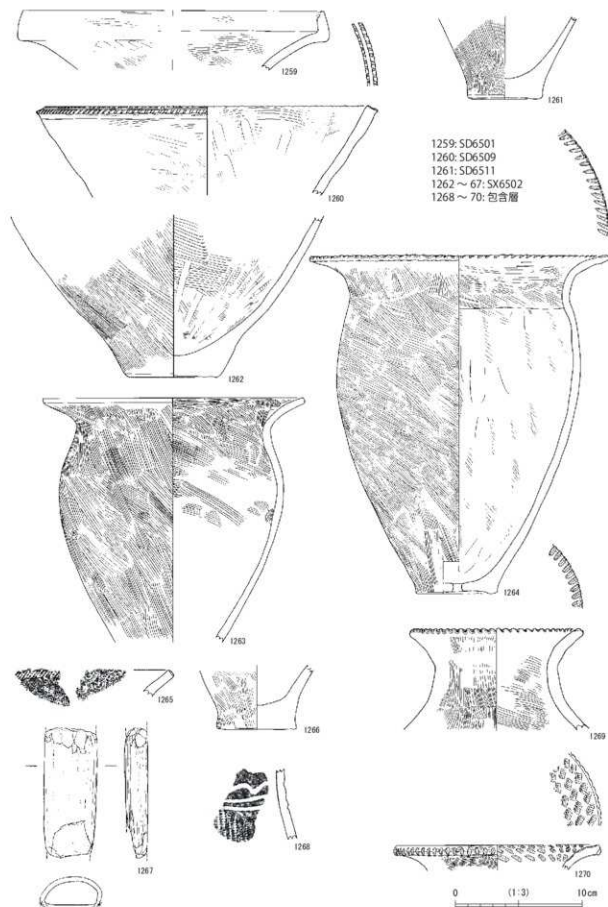
第278図 G地区 第VI-2面SX6502実測図(S=1/30・1/60)



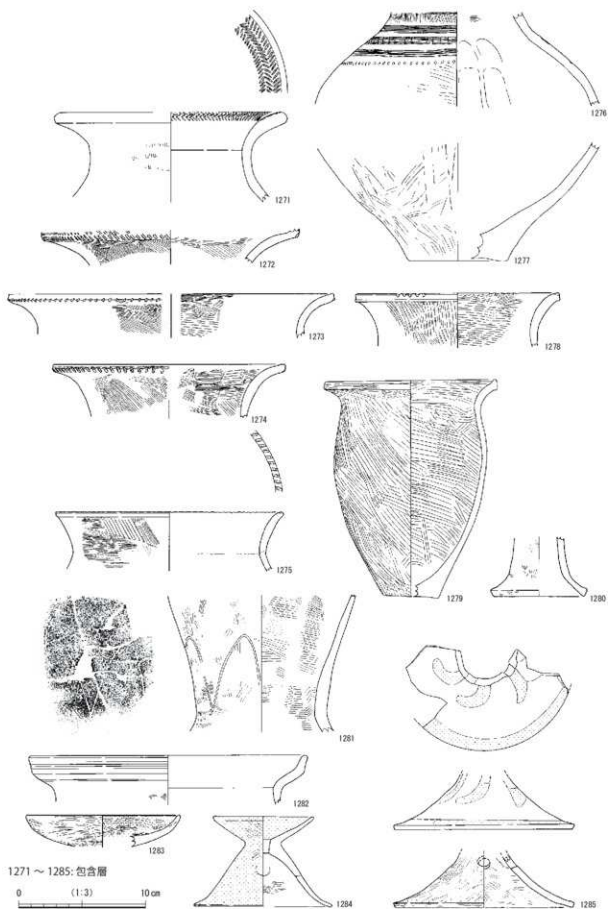
第279図 G地区 第VI-2面建物の可能性をもつ遺構復元案(S=1/200)

55cmを測り、底面は起伏に富む。覆土は灰～暗灰褐色を基調とする砂質土と明黄～黄茶色を呈する粗砂が自然堆積する。弥生土器片が少量出土したにとどまる。

SX6502 E・F・23・24区、G・24・25区で検出し、現地調査段階で6501落ち込みとしたものである。第IV



第280図 G地区 第Ⅵ-2面出土遺物実測図1(S=1/3)



第281図 G地区 第VI-2面出土遺物実測図2(S=1/3)

面河跡3001(古)で大きく損壊するが、東方向から西方向に流下する幅10m前後の浅い溝を想定している。深さ24～60cmを測り、粗砂、細砂、砂質土が複雑に堆積する。比較的多くの遺物が出土し、うち第273図1219、第280図1262～67を図化した。大型の壺1262は、内面に放射状のナデ調整が残る他、底部外面にケズリを加える。1263～66は甕である。無文の1263は口径20.6cm、胴部最大径17.8cmを測る。口縁端部を平坦に仕上げ、煮炊痕が明瞭に残る。1264は口径23.5cm、器高26.7cm、胴部最大径19.4cmを測り、胴部内面はナデの後にハケ調整を施す。底部外面に焼成前に円孔を穿ち、煮炊痕が良好に残る。口縁部片1265は、内面に扇形文を、平坦な端部に密に刻みを施す。平底の1266内面は、焼成時に亀裂が生じる。縄文時代の石棒または石剣と考えられる1267は、両端が欠損、側面中央の稜付近で剥離が認められる。黒色を呈した粘板岩系石材を用いる。他に弥生土器甕片、壺片が出土した。

5 包含層出土遺物(第280・281図)

第280図1268～第281図1285を図化した。縄文時代後期前葉の深鉢片1268は、太くしっかりとした沈線を施す。1269～80は、弥生時代中期後葉の土器である。1269・71・72・76・77は壺である。1269は口径13.0cmを測り、口縁内面に刻みを施す。1271は口径17.4cmを測り、肥厚気味の口縁内面に丁寧な羽状文を3列施す。受口状の1272は、接合面で剥離し、外面を2列以上の刺突文で加飾する。1276は、胴部外面を刺突列点文と、同一のクシ状工具を用いた直線文・簾状文で加飾する。胎土の特徴から1277と同一個体の可能性をもつ。底部片1277は、内面をナデ調整、外面を板状工具で仕上げる。1270・73～75・78・79は甕である。1270は口径16.0cmを測り、口縁内面にクシ状工具を用いた斜行短線文、外縁を刻みで加飾する。1273は口径約25cmを測り、平坦に仕上げた口縁端部に下方から刻みを加える。1274は口径18.2cmを測り、口縁端部中央に1条の凹線を施した後に、上方から刻みを加える。1275は口径17.8cmを測り、口縁部外面に異なるハケ原体で垂下線様の調整を施す。1278は、平坦に仕上げた口縁端部に、上方から5ヶ所に刻みを施す。1279は口径13.5cm、器高17.5cm、胴部最大径12.0cmを測り、内外面とも同一原体で粗いハケ調整を施す。また、口縁部外面をハケ調整で平坦に仕上げるため、端部は上方に短くのびる印象を受ける。1280は高坏脚部と考えられ、裾端部に平坦面をもつ。

第281図1280～1286は、第VI-1面に属する遺物で、遺物取り上げ時にラベルの面番号記載を誤ったものである。弥生時代後期の壺1281は、外面にミガキ調整の後にヘラ状工具で文様を刻む。有段口縁の甕1282は、擬凹線文がわずかに残る。土師器高坏1283は口径12.1cmを測り、内外面ともミガキ調整の後に赤彩を施す。赤彩の土師器器台1284は口径7.8cm、器高7.1cmを測り、1285とともに円孔数は不明である。器台と考えられる土師器1285は、外面を赤彩で加飾する。

6 小 結

第VI-2面で確認した遺構、遺物が限られることから言及できる部分はそれほど多くない。以下では、出土土器の器種や特徴等を概観するとともに、周辺地域の集落遺跡の分布・消長との比較の中で、第VI-2面集落の位置付けを行ないたい。

出土土器(第282図)

出土した土器は、コンテナバットで約7箱、第0-I～第VI-1面出土土器を加えても実測土器は67点にとどまる。これらは、弥生時代中期後葉に位置付けられ、加賀地域でいえば小松市八日市地方遺跡の時期区分⁽¹⁷⁾8・9期の様相を示し、金沢市磯部運動公園遺跡出土土器群⁽¹⁸⁾、周辺地域でいえば羽咋市長者川遺跡平成15年度調査SD03出土土器群⁽¹⁹⁾と並行する部分が多いと考えられる。器種別では、甕が最も多く、次いで壺となり、鉢、高坏は少数である。

第59表 G地区 第VI-2面出土土器類観察表1

調査 番号	グリッド	出土遺構	層	深 度	口徑 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径形状	外径形状	胎土	焼成 色	片 割	外 形	遺存数	備 考			
															備 考	調査 番号		
70	1218	3-15-4-1	1343 (3R52) 土器 上層	弥生土層	遺構	15.7	-	18.9	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ	ハタ、ナギ	01/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文、外縁部縁部、内径上縁 部二次的磨、縁部磨	019008	
70	1219	3-15-1 3-15-2 3-15-3	1343 (3R52) 土 器、土器類1層	弥生土層	遺構	12.0	-	13.0	筒	縁	焼成多	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ、ヨコナギ	02/26	口縁部に内径より上縁部 縁部文	019009	
70	1220	3-15-1	1343 (3R52) 土 下層	弥生土層	遺構	13.7	-	11.7	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ、ナギ	ヨコナギ、ハタ	01/27	口縁部に内径より上縁部 縁部文、内径上縁部、縁部文	019017	
70	1221	3-15-1	1343 (3R52) 下 層	弥生土層	遺構	15.4	-	12.1	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	赤黒	ハタ	01/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文	019018	
70	1222	3-15-1 3-15-2	1343 (3R52) 下 層、土器類1層	弥生土層	遺構	-	-	18.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ	ハタ	-	内径より上縁部縁部文	019024	
70	1223	3-15-1	1343 (3R52) 土 下層、土器類1層	弥生土層	遺構	18.2	-	18.8	筒形	底無縁	焼成多、2mX 縁部磨	黒	ハタ	ハタ	02/26	縁部上縁部、口縁部に内径より上縁部 縁部文、内径上縁部縁部文、口 縁部縁部、縁部文	019005	
70	1224	3-15-1 3-15-2	1343 (3R52) 弥生 土層、土器類1層	弥生土層	遺構	-	-	18.9	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ナギ	ハタ、ヨコナギ	-	口縁部上縁部縁部文により上 縁部文、縁部上縁部縁部文、縁部上 縁部縁部、縁部文	019025	
70	1225	3-15-4-1 3-15-4-2 3-15-4-3	1343 (3R52) 土 下層、土器類1層	弥生土層	遺構	18.7	-	12.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ヨコナギ、ハタ	ヨコナギ、ハタ	02/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文、内径上縁部縁部文、内径上 縁部縁部、縁部文	019011	
70	1226	3-15-4-4 3-15-4-5	1343 (3R52) 土 下層、土器類1層	弥生土層	遺構	-	-	8.0	12.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ	ハタ、ナギ	-	内径上縁部縁部文、内径上縁部 縁部文	019012
70	1227	3-15-5	1343 (3R52) 下 層	弥生土層	遺構	10.7	-	13.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ、ヨコナギ	02/26	内径縁部文	019003	
70	1228	3-15-5	1343 (3R52) 下 層	弥生土層	遺構	-	-	12.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ	ハタ	-	縁部上縁部縁部文、縁部上縁部 縁部文	019020	
70	1229	3-15-5	1343 (3R52)	弥生土層	遺構	-	-	14.0	筒形	底無縁	焼成・緑多	黒	赤黒	赤黒	0/8	口縁部上縁部縁部文、縁部上縁部 縁部文	019013	
70	1230	3-15-5-4	1343 (3R52) 土 器類1層(土器類1層)	弥生土層	遺構	22.4	-	12.8	筒	縁	焼成多、2mX 縁部磨	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ	02/28	縁部上縁部縁部文、口縁部に内径 より上縁部縁部文、内径上縁部縁部 文、内径上縁部縁部文	019014	
70	1231	3-15-5-4	1343 (3R52) 下 層	弥生土層	遺構	20.4	-	17.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ、ナギ	ハタ	01/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文、内径上縁部 縁部文	019026	
70	1232	3-15-5-4 3-15-5-5	1343 (3R52) 土 器類1層、土器類1層	弥生土層	遺構	24.0	-	24.0	筒形	底無縁	焼成・緑多	黒	ハタ、ナギ	ハタ、ヨコナギ	02/28	縁部上縁部縁部文、口縁部に内径 より上縁部縁部文、内径上縁部縁部 文、内径上縁部縁部文	019015	
70	1233	3-15-5-6	1343 (3R52) 土器類 1層	弥生土層	遺構	18.1	-	13.0	筒形	底無縁	焼成多、2mX 縁部磨	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ、ヨコナギ	02/26	縁部上縁部縁部文、口縁部に内径 より上縁部縁部文、内径上縁部縁部 文	019023	
70	1234	3-15-5-4-1 3-15-5-4-2	1343 (3R52) 土 器類1層	弥生土層	遺構	18.0	-	10.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	赤黒	ハタ	02/28	縁部上縁部縁部文、縁部上縁部 縁部文	019021	
70	1235	3-15-5-1	1343 (3R52) 土器類 上層	弥生土層	遺構	-	-	13.1	筒形	底無縁	焼成・緑多、2mX 縁部磨	黒	ハタ	ハタ	-	内径上縁部縁部文、縁部上縁部 縁部文	019022	
70	1236	3-15-5-1	1343 (3R52) 下 層	弥生土層	遺構	-	-	8.8	18.8	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ナギ	ハタ、ナギ	02/28	内径ナギ、内径縁部	019016
70	1237	3-15-5-1	1343 (3R52) 土器類 上、下層	弥生土層	土器類	12.4	-	18.7	筒形	底無縁	焼成・緑多	黒	ハタ	ハタ	-	縁部上縁部縁部文、縁部上縁部 縁部文	019019	
70	1238	3-15-5-2	1343 (3R52)	弥生土層	遺構	13.0	-	12.1	筒形	底無縁	焼成・緑多	黒	ハタ	ハタ、ヨコナギ	02/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文	019018	
70	1239	3-15-5-2-1	1343 (3R52) 土 器類1層(土器類1層)	弥生土層	遺構	10.7	-	12.7	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ	ハタ、ヨコナギ	0/8	口縁部に内径より上縁部 縁部文	019021	
70	1240	3-15-5-4 3-15-5-5	1343 (3R52) 土 器類1層	弥生土層	遺構	-	-	8.0	18.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ナギ	ハタ、ナギ、ナギ	02/28	内径ナギ	019010
70	1241	3-15-5-4	1343 (3R52) 土器類 1層	弥生土層	遺構	-	-	8.0	12.0	筒形	底無縁	焼成・緑多、2mX 縁部磨	黒	ナギ	ナギ、ハタ	02/28	内径ナギ、内径縁部	019017
70	1242	3-15-5-2	1343 (3R52)	弥生土層	遺構	13.0	-	13.1	筒形	底無縁	焼成・緑多	黒	ハタ	ハタ、ヨコナギ	02/28	口縁部に内径より上縁部 縁部文	019006	
70	1243	3-15-5-2	1343 (3R52)	弥生土層	遺構	14.2	-	15.0	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ、ヨコナギ	02/26	口縁部に内径より上縁部 縁部文、内径上縁部 縁部文	019010	
70	1244	3-15-5-2	1343 (3R52)	弥生土層	遺構	14.0	-	14.3	筒形	底無縁	焼成・緑多 灰緑黄多	黒	ハタ、ヨコナギ	ハタ、ヨコナギ	02/26	口縁部に内径より上縁部 縁部文、口縁部上縁部縁部文、縁部 上縁部縁部文	019017	

第60表 G地区 第VI-2面出土土器類観察表2

発掘 番号	遺物 番号	アトリッド	出土遺構	種類	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径形状	外径形状	口 ノ	底底	内 径	外 径	透孔状	備 考	写真 番号				
275	1248	2-19-2	11411(2)M506	灰土土器	罎	22.4	-	19.3	流紋	樽一様筒形	縁部・腹多 段縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24	内腔内面に厚さ1.5cm、口縁部(器 内、口縁内面に)縁土層による 透縁部観察可能。底径より口径より 斜行縁部存在。器内内面に土層 による透縁部観察可能。口縁部 1段。縁部・腹多(4段)縁部1段。 内径・外径ともに厚さ1.5cm、 内径・外径ともに厚さ1.5cm。	018201-1		
275	1247	2-19-2	11411(2)M504	灰土土器	罎	-	4.3	18.3	流紋	筒形	縁部多、2段式 縁部多	直	ハテ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	018-26	内腔一様筒形	01842	
275	1246	2-19-2	11411(2)M504(分 1)	灰土土器	罎	-	3.9	18.1	流紋	流紋筒	縁部・腹多、 段縁部多	直	ナデ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	018-26	内腔一様筒形(縁部)	01843	
275	1245	2-19-2	11411(2)M504(1)	灰土土器	罎	-	3.9	18.6	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	026-24	内腔一様筒形、口縁部 一様一様筒形	018201-2	
275	1250	2-19-2	11411(2)M504(1)	灰土土器	罎	-	-	18.7	流紋	流紋	縁部存在	直	ハテ	ハテ	-	-	-	018-26	少くは口縁部・縁部(縁部)による透 縁部観察可能。斜行縁部観察可能。透 縁部	018201-3	
275	1251	2-19-2	11411(2)M504(1)	灰土土器	罎	22.5	-	13.4	流紋	流紋	縁部多、2段式 縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	026-24	内腔(縁土層)の透縁部観察可能	018201			
275	1252	2-19-2-4	11411(2)M504(分 1-4)	灰土土器	罎	15.4	-	18.7	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	026-24	透縁部観察可能	018201			
275	1253	2-19-4	11411(2)M504(分 1-4)	灰土土器	罎	16.0	-	18.1	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ハテ	ヨコナデ	ヨコナデ	026-24	口縁内面にナリテ土層より斜行透 縁部観察可能。口縁部(縁部)による透 縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。透縁部観察可能。	018201-2			
275	1254	2-26-1	11411(2)M506	灰土土器	罎	20.0	-	12.1	流紋	流紋	縁部存在	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	026-24	口縁内面にナリテ土層より透縁部 観察可能。透縁部観察可能。透縁部 観察可能。透縁部観察可能。	018201			
275	1255	2-25-4	11411(2)M506	灰土土器	罎	14.0	-	18.6	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	ハテ	026-24	透縁部観察可能。口縁内面に 透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201-3		
275	1256	2-25-4	11411(2)M506	灰土土器	罎	16.7	-	13.0	流紋	流紋	縁部多、2段式 縁部多	直	ハテ	ナデ	ハテ	026-24	透縁部観察可能。口縁内面に 透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201-4			
275	1257	2-26-4	11411(2)M506	灰土土器	罎	16.0	-	13.0	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ハテ	026-24	内腔一口縁部観察可能	018201				
275	1258	2-26-4-2	11411(2)M506 中	灰土土器	罎	20.4	-	14.7	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24		01846		
275	1259	2-25-4、 2-25-2	11411(2)M506 (2層)	灰土土器	罎	25.0	-	17.1	流紋	流紋	縁部多、2段式 縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24	口縁部(口縁部)1層厚、縁部・腹多 による透縁部観察可能	018201-5		
275	1261	2-21	11411(2)M506 (透縁部)	灰土土器	罎	-	3.9	18.6	流紋	流紋	縁部多、2段式 縁部多	直	ナデ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	026-24	内腔ナデ、内腔透縁部観察 可能	018201	
275	1262	2-24-1	11411(2)M506中	灰土土器	罎	-	7.7	18.0	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ハテ	ナデ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	026-24	内腔ナリテ、内腔(透縁部)観察 可能。透縁部観察可能	018201
275	1263	2-24-2、 2-24-1	11411(2)M506中 上	灰土土器	罎	20.4	-	19.8	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24	透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201		
275	1264	2-24-2	11411(2)M506	灰土土器	罎	23.5	4.9	26.7	流紋	流紋	縁部多、2段式 縁部多	直	ナデ	ハテ	ナデ	ハテ	ナデ	026-24	透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201	
275	1265	2-24-2	11411(2)M506	灰土土器	罎	-	-	12.1	流	樽	縁部多、縁部 多	直	ナデ	ハテ	026-24	口縁部(透縁部)観察可能。透縁部 観察可能。	018201				
275	1266	2-24-2	11411(2)M506	灰土土器	罎	-	4.4	18.1	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ナデ	ハテ	ナデ	縁部・腹多	縁部・腹多	026-24	内腔(透縁部)観察可能。透縁部 観察可能。	018201	
275	1268	2-25	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	-	-	15.0	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ナデ	ナデ	流紋	流紋	流紋	流紋	026-24	透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201-6
275	1269	2-23-4	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	13.0	-	17.9	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ナデ	ヨコナデ	ハテ	ハテ	026-24	口縁内面に透縁部観察可能。透縁部 観察可能。	018201		
275	1270	2-26-4	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	16.0	-	12.0	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ヨコナデ	ハテ	026-24	透縁部観察可能。透縁部観察可能。透 縁部観察可能。	018201				
275	1271	2-25-2-4	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	17.4	-	17.1	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24	口縁内面に透縁部観察可能。透縁部 観察可能。	018201			
275	1272	2-24-2	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	-	-	12.7	流紋	流紋	縁部多、縁部 多	直	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	ハテ	-	上段(透縁部)観察可能。透縁部 観察可能。透縁部観察可能。	018201		
275	1273	2-25-4	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	20.0	-	13.5	流紋	流紋	縁部存在	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	026-24	口縁部(透縁部)観察可能。透縁部 観察可能。透縁部観察可能。	018201			
275	1274	2-21-1	11411(2)M506(1 層)	灰土土器	罎	16.2	-	14.2	流紋	流紋	縁部・腹多、 段縁部多	直	ハテ	ヨコナデ	ハテ	ヨコナデ	026-24	口縁部(透縁部)観察可能。透縁部 観察可能。透縁部観察可能。	018201		

第61表 G地区 第VI-2面出土土器類観察表3

調査 番号	グリッド名	出土遺構	種 類	種 別	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径内縁	内径外縁	胎 土	焼成 内 裏 面	外 裏 面	透孔数	備 考	調査 番号		
200	1218	F-21	灰層出土土器類 (燻黒土)	弥生土器	甕	17.0	-	(18.7)	滑焼	灰黄焼	黒胎土、2回式 焼成中・多。 海緑黄赤多。	黒	不明	ハチ、タコナデ	021-76	口縁部(口縁上縁)より連続 刺突文、内面下部に、内面 作重、内面底縁部	01002
200	1218	F-20-2、 F-19-2	灰層出土土器類	弥生土器	甕	-	-	(17.4)	焼成	灰黄焼	黒胎土・多	黒	ナデ、ハチ	ナデ、ハチ	-	内面(口縁上縁)より連続 刺突文、内面下部に、内面 作重、内面底縁部 胎土(厚、黄赤土質)、黄赤土質 (内、底縁部、縁部等、127.5) 黒胎土多。	01004-1
200	1218	F-19-2、 F-19-3	灰層出土土器類	弥生土器	甕	-	7.0	(19.0)	焼成	灰黄焼	黒胎土・多	黒	ナデ	ナデ、タコナデ	001-76	透孔部(頸部、内面)の一角に 透孔	01004-2
200	1218	F-26	灰層出土土器類	弥生土器	甕	16.0	-	(18.3)	滑焼	灰黄焼	黒胎土・多 海緑黄赤多	黒	ハチ	ハチ、タコナデ	021-76	口縁部(口縁上縁)による刺突文 3つ(刺突文が)、内面底縁部	01003
200	1218	F-23-4、 F-22、 F-24-2	灰層出土土器類	弥生土器	甕	12.0	4.4	(13.1)	灰黄焼	灰黄焼	黒胎土・多 海緑黄赤多	黒	ハチ	ハチ、ナデ	0218-76	頸部(口縁上縁)より、内面ナデ、 内面(口縁部)に連続した刺突文、内面 作重(口縁部)	01002
200	1218	F-15-1	灰層出土土器類	弥生土器	燻黒土器	-	7.1	(18.7)	滑	灰黄焼	黒胎土、2回式 焼成中・多	黒	ナデ	ハチ、タコナデ	001-76		01001
200	1218	F-25-4、 F-27	灰層出土土器類	弥生土器	甕	-	-	(18.8)	灰黄焼	灰黄焼	黒胎土・多	黒	ハチ	ハチ、タコナデ	-	内面ナデ	01005
200	1218	F-24-1	灰層出土土器類	弥生土器	甕	21.7	-	(13.0)	灰黄焼	灰黄焼	黒胎土、2回式 焼成中・多。 海緑黄赤多	黒	タコナデ	タコナデ、ハチ	021-76	頸部(口縁上縁)より連続 刺突文、内面下部に、内面 作重	01001
200	1218	F-24-2	灰層出土土器類 (燻黒土)	土器類	燻黒土器	12.1	-	(13.5)	焼	焼	黒胎土・少 海緑黄赤少	黒	タコナデ	タコナデ	0218-76	内面作重、内面(口縁部)の内面	01003
200	1218	F-23-2-4	灰層出土土器類	燻黒土器	燻黒土器	7.0	11.0	7.1	滑焼	滑焼	黒胎土・少 海緑黄赤少	黒	タコナデ、ハチ	タコナデ	0218-76	透孔、頸部(口縁部)に連続した刺突文、 内面(口縁部)	01002
200	1218	F-23-1、 F-24-4	灰層出土土器類	土器類	燻黒土器	-	14.0	(18.1)	滑焼	滑焼	黒胎土・多 海緑黄赤多	黒	ハチ、ナデ	タコナデ	001-76	透孔文、透孔(内面) (内縁部 3個)	01004

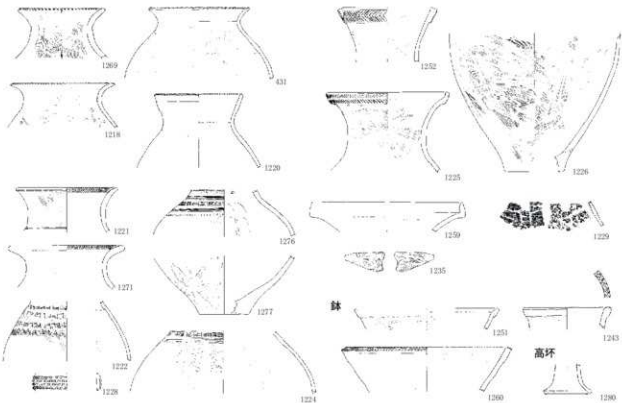
第62表 G地区 第IV面出土土器観察表

調査 番号	番号	グリッド名	出土遺構	種 類	種 別	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土重量 (g)	備 考	調査 番号
200	1202	F-26-2	E101(00004セキ下層1)	甕	タコナデ型土器	(18.4)	1.0	1.1	(15.7)	黒胎土、透孔が口縁部(口縁部)でない	01001-1
200	1207	F-26-4	00003	燻黒土器	タコナデ型土器	5.9	7.4	1.1	01.6	黒胎土	01001-6
200	1207	F-26-1	00003燻黒	燻黒土器	燻黒土器	(19.2)	4.7	(13.8)	(138.2)	内面底縁部、頸部(口縁部)に連続した刺突文、内面作重	01001-3

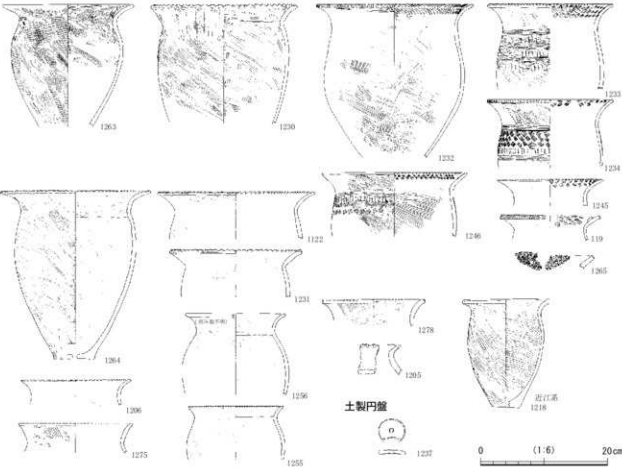
甕は、24点を実測し、口径は13～19cm、約24cmに、あまり偏在性を示さずに分布する。調整は、ハケ調整を基本とし、1224の胴部外面にはミガキ調整が認められる。器形や加飾方法は多様であり、口縁内端に刻みを加える個体(431-1218～20-69)、櫛描文で口縁部や胴部上半を加飾する個体(1221-22-24-28-71-76-77)、直立・肥厚する口縁部を綾杉様の羽状文で加飾する個体(1252)、受口状の口縁部を綾杉様の羽状文で加飾する個体(1225-26)、口縁部下端で屈曲し端部が内傾する個体(1235-59)、胴部上半に直線文が残る個体片(1229)が確認できる。口縁内端に刻みを加える個体は、口縁部が大きく外反する1219-69、内湾気味の口縁部をもつ1220、口縁部が短く球胴形を呈する431-1218に細分可能である。櫛描文で口縁部と胴部上半を加飾する個体は、口縁内縁を2列以上の連続刺突文(1221-71)、斜行短線文(1223)、胴部上半を数列の乱れ気味の直線文、簾状文、波状文、刺突列点文を組み合わせ、それぞれ加飾する。また、1228は頸部に貼り付けた突帯と考えられる。1225-35-52-59とも細部の形状は異なるが、櫛描文系の特徴を示す他、胎土が大きく異なる1229は、他の土器とは異なる場所で焼かれ、持ち込まれた可能性が高い。

甕は、38点を実測し、口径は13cm台、15～18cm台、20cm前後、22～25cm台に分布する。器形は、頭部から緩やかに外反しながら口縁部に至る個体が主体となる中、頭部でくの字状に屈曲する個体(119、1230-46等)も確認できる。調整は、胴部内外面とも左斜め上りのハケ調整で仕上げることを基本とし、内面をハケ調整後にタテ方向の指ナデを加える個体(1255-56-64等)も客観的に存在する。

壺



鉢



第282図 G地区 第VI-2面出土土器分類図(S=1/6)

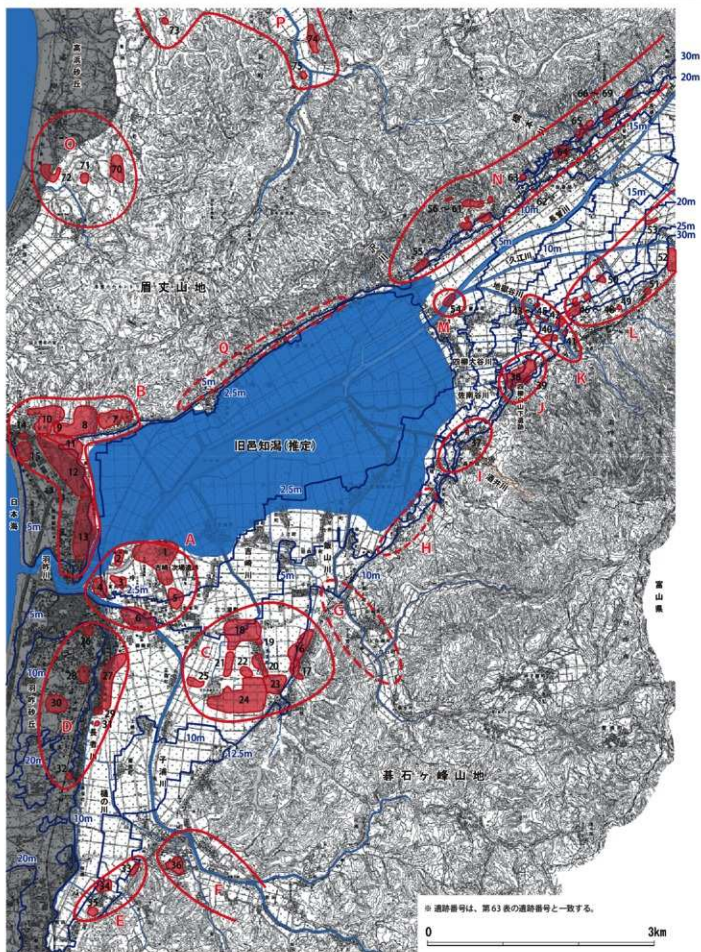
また、近江系と考えられる1218以外は、口縁端部に弱いヨコ方向のナデで、面取りを行なう点で共通する。器形と加飾方法は多様であり、個体数が少ないこともあり、明瞭な規則性を把握できない。口縁部、胴部上半の加飾等からみれば、無文の甕(1258・63)、小波状口縁をもつ甕(1230)、口縁端部のみを刻みで加飾する甕(1264等)、刻みと柳描文で加飾する甕(119・120、1232～34・45・46・50・53・54・65・70)、口縁端部にハケ調整を施す甕(1218)に大別でき、口縁端部のみを刻みで加飾する甕が15点と量的に多く、柳描文を施す個体は12点と若干少ない。無文の甕1263は、胴部上半に最大径をもつ。小波状口縁をもつ甕1230は、頸部で屈曲し、胴部の張りが弱い。口縁端部のみを刻みで加飾する甕は、頸部から口縁部に緩やかに外反する個体(1122・64、1206等)、頸部で屈曲する個体(1122・1231)、口縁部の外反度合いが弱く、球形を呈する個体(1255・56)、口縁部が短く外傾する個体(1205)が存在する。口縁端部の刻みの様相で見れば、上から刻みを施す個体10点に対して、下から刻みを施す個体5点を数え、前者には刻みが全周しない個体1278を含む。また、平坦に仕上げた口縁端部中央に1条の凹線を施した後刻みを入れる技法は、上から刻みを入れる1122・31・39・44・55と、下から刻みを入れる1274で確認できる。刻みと柳描文で加飾する甕は、口縁部が緩やかに外反する個体が主体を占め、口縁端部に刻みを施す点で共通する(上から施文4点、下から施文7点)。口縁内端を2列または3列の同方向の斜行短線文を施す個体(119に円形浮文)が主体であり、1232が綾杉様の羽状文、1265は扇形文でそれぞれ加飾する。また、胴部上半の加飾は、乱れた直線文、簾状文、斜行短線文を組み合わせる他、1233には垂下線が確認できる。近江系と考えられる1279は、粗いハケ原体を用いて口縁部外面にヨコ方向のナデを施し、端部を上方にのぼす。なお、凹線文系甕の特徴である口縁端部に凹線文を施した個体や、胴部外面上半にヨコ方向のハケ調整を加える個体は確認できない。

鉢には、完形品はない。粘土紐を貼り付け口縁部を肥厚させる1251、平坦に仕上げた口縁端部を沈線と連続刺突文で加飾する1260、粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁端部にX字状の連続刺突文を施す1243が確認できる。点数は限られるものの、口縁部のあり方は多彩な様相を呈する。高坏は、完形品はなく、端部に平坦面をつくる脚部片1280の1点にとどまる。

旧邑知湯周辺遺跡の消長(第283～285図、第63表)

本遺跡周辺の地形、遺跡については、第2章で通史的に概要を示したが、改めて弥生時代の集落分布と盛衰の観点から整理し、第VI-2面で確認された集落の位置付けを行なう。

まず、本遺跡周辺の地形を概観すれば、第2章第3図、本章第283図のとおり、東側から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯・邑知湯、眉丈山地が北東―南西方向に連なり、羽咋・高浜砂丘を経て、西側で日本海に接する。邑知地溝帯は、並走する2条の断層帯により切断された土地が沈降してきた低地帯であり、南西端に位置する旧邑知湯は縄文時代前期のいわゆる縄文海進で入り江状に入り込んだ海が、海岸砂丘(羽咋砂丘のうち東側の内列砂丘)の形成により外海から隔絶してきた海跡湖である。本遺跡が属する地溝帯南東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流下する中小河川(長曾川、久江川、地獄谷川、四柳大谷川等)が運んだ土砂が堆積した中・小規模な合成扇状地が碁石ヶ峰山地の山裾に連なる。同様に、地溝帯北東部の眉丈山地山裾にも小河川(沢川、橋本川等)による急傾斜な小扇状地形をみとることができる。一方、地溝帯南西部には、吉崎川、子浦川等の複合扇状地と三角州性低地が発達する。これらの地形は、弥生時代に焦点をあてた場合、現在と若干異なる景観を示す。藤則雄氏の一連の研究⁽²⁰⁾によれば、「縄文時代後・晩期～弥生時代終末には海水面は、現海水準下1～2mに定降下し、当時の海岸線は現海岸線から約1kmも沖に退き、そこには今は失き幻の砂丘が分布する様相であった。旧邑知湯も湖面が縮小し⁽²¹⁾、一部は陸化していたと考えられている。また、海岸砂丘については、内陸側(東



第283図 周辺の弥生時代の集落遺跡分布図(S=1/60,000)

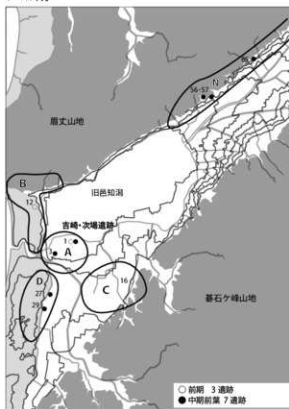
第63表 周辺の弥生時代の集落遺跡消長一覧表

No	分布域の区分	遺跡名	前期	中期				後期		末
				I	II	III	IV	V	VI	
1	A 池沼湖沼	吉崎・本郷遺跡								
2		東屋遺跡								
3		東野崎ラフパ遺跡								
4		石高遺跡								
5		次木コロン遺跡								
6		子瀬川遺跡	(弥生前期)							
7	B 築堤台地(築堤・)	柳田ワノ遺跡								
8	野内砂丘集落	柳田台地遺跡								
9		柳田シャコフ遺跡								
10		宮多木遺跡								
11		柳田園ノ段遺跡								
12		寺家遺跡								
13		屋敷遺跡								
14		一ノ宮郵便局遺跡								
15		寺家遺跡								
16	C 吉崎川水系	中ノ山遺跡								
17		杉野集光寺遺跡								
18		太田ニシワダ遺跡								
19		太田遺跡	(弥生前期)							
20		太田遺跡								
21		太田ツツミダ遺跡								
22		太田A遺跡								
23		杉野集遺跡								
24		杉野集ラウワワ遺跡								
25		二ノかみあれた遺跡								
26	D 野内砂丘集落	野内長杉遺跡								
27	(長者川水系)	長者川遺跡								
28		長者カサヤクダ遺跡								
29		長者遺跡								
30		千重遺跡	(弥生前期)							
31		養生遺跡								
32		養生シモノ遺跡								
33	E 長者川水系上流	長谷遺跡								
34		長谷遺跡								
35		長谷遺跡								
36	F 子瀬川上流(子瀬谷)	子瀬集山遺跡	(弥生前期)							
37	(G 堀山川水系上流)	渡野トダ遺跡	(弥生前期)							
38	I 西野川水系上流	西野山下遺跡								
39	II 西野大谷川水系	西野集遺跡								
40	K 地蔵谷川水系	小倉森ノイタビ遺跡								
41		高島弥生遺跡	(弥生前期)							
42		野吹遺跡								
43		野吹野原遺跡	(弥生前期)							
44		野吹大坪遺跡	(弥生前期)							
45		野吹の遺跡								
46	L 久江山川水系	高島カク・スギモト遺跡								
47		高島遺跡								
48		高島カンジダ遺跡								
49		藤井谷遺跡	(弥生前期)							
50		藤井ツツミダ遺跡								
51		小畑中庭遺跡	(弥生前期)							
52		小畑中庭はけ遺跡								
53		久江ササメヤシ遺跡								
54	M 田島湖沼集落	下野崎ウチヤマ遺跡	(弥生前期)							
55	N 遊芝山南縁	金丸寺遺跡								
56	(長者川水系右岸)	谷内フナギヤ遺跡								
57		金丸テラヤマ遺跡								
58		金丸コロシヤ遺跡								
59		杉野チャノバタ遺跡								
60		金丸杉遺跡								
61		金丸杉谷川遺跡	(弥生前期)							
62		能登部ノ坪遺跡								
63		能登部ノ坪遺跡	(弥生前期)							
64		能登部ノ坪遺跡								
65		能登部遺跡								
66		能登部神社遺跡	(弥生前期)							
67		能登部上遺跡	(弥生前期)							
68		宮ノ上北遺跡								
69		中門遺跡								
70	O 築堤周辺(台地・砂丘)	甘野タイ遺跡								
71		滝野八幡社遺跡								
72		築堤周辺遺跡								
73	P 田嶋野湖水系	宮女山遺跡								
74		上郷中村遺跡	(弥生前期)							
75		上郷遺跡	(弥生前期)							

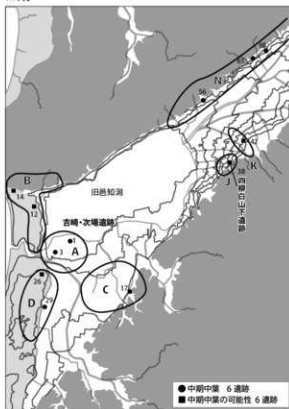
側)の内列砂丘、中列砂丘(縄文時代前期末～中期)がのびる中、外列砂丘(縄文時代後・晩期～弥生時代終末)が形成中途の段階にあり、飛砂により砂丘列近辺の集落遺跡は時として大きな影響を受けている。なお、現在の砂丘景観も10世紀前半代、14世紀末の大規模な砂丘の移動・堆積を経た姿である。さらに、本遺跡や中能登町徳丸遺跡⁽²²⁾の発掘調査事例で確認できるとおり、急峻な碁石ヶ峰・眉丈両山地の前縁に張り出した狭い微高地・合成扇状地(集落適地)では、各中小河川の氾濫と土砂堆積が断続的に発生していたものと考えられる。このように、弥生時代の本遺跡周辺は、旧線が後退し、旧邑知潟湖面はかなり縮小した景観であり、さらに外列砂丘の形成に伴う飛砂や、碁石ヶ峰・眉丈両山地前縁にでの中小河川の断続的な氾濫が発生する状況が想定できる。

さて、弥生時代の旧邑知潟周辺の集落遺跡については、県教育委員会が製作する「いしかわ文化財ナビ」⁽²³⁾を元に、土器のみの出土を含めて、弥生時代の何らかの生活痕跡⁽²⁴⁾が確認できる遺跡を抽出したところ、地域的な粗密を内在するが、2000年代に進んだ県営は場整備事業や道路拡幅事業に伴う発掘調査の蓄積もあり、第283図・第63表で示した75遺跡を数える。

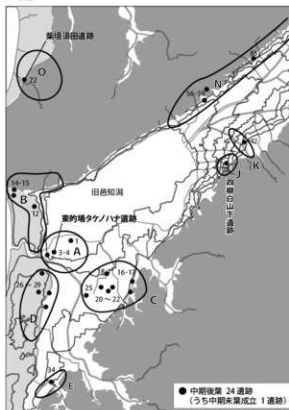
I・II期



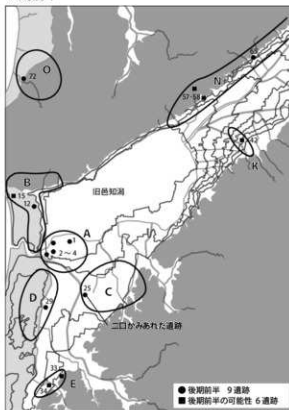
III期



IV期



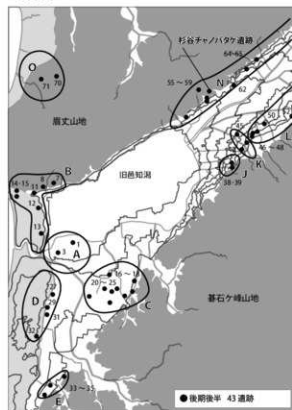
V期前半



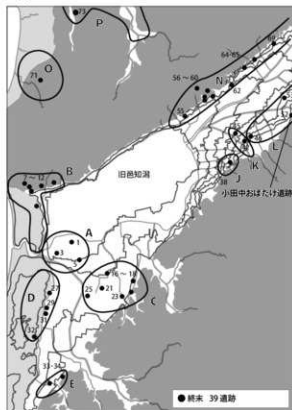
0 3km

第284図 周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図1 (S=1/140,000)

V期後半



VI期



第285図 周辺の弥生時代の集落遺跡の消長模式図2(S=1/140,000)

これら集落遺跡の稠密な分布は、第2章で述べたとおり、集落を支える基盤として、生産面で日本海・邑知潟が漁業の場を、邑知潟より続く三角州性低地や扇状地が肥沃な耕作地を、さらに集落域背後の山地が林業資源を提供したことや、陸上交通路や、邑知潟と中小河川を利用した水上交通路が結節し、容易に物資・情報の集積・移動ができたこと等が理由としてあげられる。

現在把握されている集落遺跡は、地形や水系、分布状況等から、第283図・第63表のA～Qの17グループ⁽²⁵⁾に区分が可能である。そのうち、Bグループ(柴垣台地内縁と内列砂丘東縁)、Dグループ(長者川水系に属する内列砂丘東縁)、Nグループ(長曾川水系に属する碓石ヶ峰山南縁)は、将来的により小エリアの小扇状地・微高地や水系を一つの単位集団とするような集落群に細分できる可能性が高い。また、現在、集落遺跡の分布をみないG・H・Qのグループが想定できる他、特異な立地を示すMグループ(54:下曾祿ウチマチ遺跡)は祭祀・交易等の要素または干拓等に伴う二次的移動を考慮すべきであろう。集落規模でみれば、地帯南西部のA～Cのグループは、比較的広範な集落適地(自然堤防、微高地、台地等)に立地するため、複数の時代の集落が少しずつ中心域を移動しながら営まれる傾向を示す。

集落遺跡の消長については、詳細不明の17遺跡を除く11グループ58遺跡を対象として、I～VI期(おおむね畿内の弥生時代土器様式に対応)の7つの時期に区分、各集落遺跡の相対的な盛衰を3段階(薄網掛け破線→薄網掛け→濃網掛けの順に盛期)を示した。以下では、同地域の弥生時代の集落遺跡の消長に関する安英樹、下濱貴子氏の論考⁽²⁶⁾を参考としつつ、時期ごとに整理を行いたい。

【I期】 弥生時代前期で、柴山出村式並行期の土器出土を指標とした。現在、3グループ3遺跡(1:吉崎・次場遺跡、12:寺家遺跡、16:中川A遺跡)が点在する状況にあり、いずれも集落の様相は判然としな

い。このうち、旧邑知湯南縁の自然堤防上に成立した吉崎・次場遺跡は、I期後半の土器の出土点数が比較的多く、西日本の弥生文化が確実に波及していたと考えられている。

【Ⅱ期】 弥生時代中期前半のうち、中期前葉にあたる矢木ジワリ式並行期の土器出土を指標とした。現在、Ⅵ期まで集落群(単位集団)を継続するA・D・Nの3グループ7遺跡が確認でき、B・C等のグループで追加が予想される。このうち、集落規模・内容が卓越する吉崎・次場遺跡では、弥生文化が確実に定着しており、Ⅲ期まで他地域との活発な交流を前提とした生産や情報伝達等の諸機能をもつ「拠点集落」として第一の盛期を迎える。吉崎・次場遺跡の一連の調査では、建物や集落域を画する大溝を検出、搬入品を含めた多種多様な豊富な遺物に加えて太型蛤刃石斧やヒスイ・緑色凝灰岩の玉、木器の生産が確認されている。また、Aグループの東の場タケノハナ遺跡(3)、Nグループの谷内ブンガヤチ遺跡(56)等が成立をみるが、吉崎・次場遺跡に比して小規模であった可能性が高い。

【Ⅲ期】 弥生時代中期前半のうち、おおむね中期中葉の時期にあたり、小松式並行期の土器出土を指標とした。現在、可能性を含めて7グループ12遺跡が確認でき、Ⅵ期まで継続する集落群(単位集団)・生産空間が、ほぼ同時に成立する意味で大きな画期と推察する。四柳白山下遺跡(38)G地区では、小規模な土砂流入・堆積(第Ⅵ-3面、第9節)を経つつも、第Ⅵ-2面集落が継続し、搬入したガラス質安山岩を用いて石器を製作しながら、Ⅳ期まで集落を営む。中核的な位置を占めるAグループでは、吉崎・次場遺跡が盛期を保持しつつ、西側約400m西に位置する東の場タケノハナ遺跡で環濠(溝間距離約80m)の掘削が確認でき、吉崎・次場遺跡との補充関係が想定されている。Aグループ総体としての「拠点集落」機能は拡充される方向にあり、他グループを卓越した集落規模・生産活動を示す。

【Ⅳ期】 弥生時代中期後半のうち、中期後葉の磯部運動公園式、中期末葉の戸水B式並行期の土器出土を指標とした。磯部運動公園式並行期は、新たにEグループ(34:萩島遺跡)が加わって8グループとなり、集落遺跡数は23遺跡に倍増する。集落遺跡の数は、地溝帯南西部のA～Dグループで増加が顕著であり、特に吉崎川水系に属するCグループがⅢ期の1遺跡(17:杉野屋専光寺遺跡)から7遺跡と急増する。Aグループは、吉崎・次場遺跡が確実に縮小・衰退傾向を示す一方、東の場タケノハナ遺跡で環濠(溝間距離約90m)の掘り直しを伴う集落規模の拡張が認められることから、吉崎・次場遺跡の担った中核的機能の移動が指摘されている。ただし、グループ間の関係でみれば、Aグループ総体として卓越した内容もち、優位性を保持し続けるのに対して、現時点でCグループの調査内容は低調であることから、本質的にⅡ・Ⅲ期のあり方に変化していない可能性が高い。その意味で、集落遺跡数の急増は、Ⅲ期で成立した各グループの個々の理由に基づく新規開発を伴った集落形成の活発化を示すものと考えられる。

中期末葉に位置付けられる戸水B式並行期は、4グループ8遺跡と、集落遺跡数は確実に急減する。確認された8遺跡のうち7遺跡は、Ⅳ期から継続する集落であり、Nグループ(眉丈山地南縁)に属する谷内ブンガヤチ遺跡(56)、金丸テラダヤチ遺跡(57)以外での集落活動はかなり低調に転ずるようだ。一方、これまで集落遺跡が確認できなかったOグループの砂丘上で柴垣須田遺跡(72)が成立、Ⅴ期前半まで営まれ、新たな要素を伴った注目すべき動きといえる。なお、Ⅳ期末～Ⅴ期前半という数世代にわたる集落数の減少は、全果的な動向とされる。現時点では判然としませんが、広範な地域を包括するような同一要因の結果と思われる。

【Ⅴ期前半】 弥生時代後期前半にあたり、猫橋Ⅰ式並行期の土器出土を指標とした。現在、可能性を含めて8グループ15遺跡が確認でき、Ⅳ期末でみられた集落遺跡数の減少・集約傾向は、Ⅴ期前半のうちに回復基調に転じる。Aグループに属する東の場タケノハナ遺跡では、建物を未確認だが、環濠の掘り直しや木器・(玉?)生産が確認でき、吉崎・次場遺跡では第二の盛期が始まる。また、定量の遺

物出土をみるCグループの二口のみあれた遺跡(25)、Oグループの柴垣須田遺跡では、活発な集落活動が想定できる。確認できるグループ数や、Aグループに属する2遺跡の様相が、中期後葉(磯部運動公園区並行期)とほとんど変わらない点からみれば、中期末～後期前半という比較的長期の集落遺跡数急減という状況を経つつも、Ⅲ期までに成立したグループ間の関係や、各グループ内の生業空間の構成は、基本的に保持され続けた可能性が高い。なお、四柳白山下遺跡G地区は、この頃に第VI-I面ベース土をなす茶灰色粗砂(厚さ20～40cm)が一時期に流入・堆積し、調査区内で集落活動は確認できない。

【V期後半】 弥生時代後期後半にあたり、法仏式並行期の土器出土を指標とした。現在、10グループ43遺跡が確認でき、各グループとも集落遺跡数が急増、弥生時代を通じて最多となる。

また、様々な新たな動きも各グループで確認できる。中核的な位置を占めるAグループでは、吉崎・次場遺跡が集落の中心域を南東側に移動し、集落規模を縮小しつつも第二の盛期を迎え、以降古墳時代前期まで存続する。一方、東的場タケノハナ遺跡が環濠を掘り直し、北西側に集落域を拡大または移動し、盛期を迎えるようだ。Bグループでは、柳田台地上への集落進出が始まる(7・柳田ウワノ遺跡、8・柳田台地遺跡)。Cグループでは、Ⅳ期と同程度まで集落遺跡数が急増し、おそらく耕作地も大規模に再開されたと考えられる。D・Eグループでは粟生シモエ遺跡(32)等で活発な製玉活動が認められ、Jグループでは集落活動が再開される。さらに、同時期を特徴付ける動きとして、久江川水系上流に位置するLグループで新たに5遺跡が成立し、久江川左岸の扇状地(標高20～30m)の開発が本格的に始まることや、Nグループの杉谷チャノバタケ遺跡(59)で環濠を伴う高地性集落の出現することがあげられる。これらの様々な新たな動きは、V期前半のうちに各グループが次第に活発化する中で、Ⅲ期に成立したグループ間の関係がV期後半をピークとして再編された可能性を示唆するものといえる。

【Ⅵ期】 弥生時代末にあたり、月形式並行期の土器出土を指標とした。現在、11グループ39遺跡が確認できる。V期後半のグループ数・集落数とも、ほぼ同水準を維持しており、この状況は基本的に古墳時代初頭まで継続するようだ。各グループの存続を前提として、Lグループのように衰退・廃絶する集落遺跡が目立つ一方、Oグループの滝谷八幡社遺跡(71)等のように新たな集落が成立する等、集落群のあり方は複雑な様相を呈する。また、Bグループに属する集落遺跡が柳田台地上に偏在する傾向を示しており、前述の飛砂による砂丘の成長の影響とも考えられる。

以上、旧邑知湯周辺の集落遺跡の消長を概観した。生業空間を反映したグループについては、Ⅱ期にAグループを中核として新規開発や技術移殖を伴って準備が進み、Ⅲ期のうちに主要グループの基盤が同時期的に広い範囲で成立したと考えられる。この生業空間の基盤は、その後の集落遺跡数の増減や、グループ間の関係の変化とはあまり相関関係を示さず、古墳時代以降も基本的に存続したと推察する。その意味では、旧邑知湯周辺の集落消長については、弥生文化が面的な定着をみるⅢ期に大きな画期が存在するものと考えられる。

また、グループ間の関係は、Ⅱ期以降、邑知湯南縁の微高地に営まれたAグループ(吉崎・次場遺跡、東的場タケノハナ遺跡を核とする単位集団)が集落規模、内容とも一貫して卓越する「拠点集落」であり、そのあり方が大きく再編する時期はV期後半前後に求められよう。これまで、同地域におけるⅣ期後半の集落遺跡数の急増については、吉崎川上流域(Cグループ)の活発化や、吉崎・次場遺跡の一時的衰退に呼応する東的場タケノハナ遺跡の活発化と関連付けて、吉崎・次場遺跡の中核機能の喪失と周辺地域への移動・分散という社会構造の変質を伴う大きな転換期として理解されることが多い。しかしながら、AグループがV期後半まで卓越性を保持し続ける状況と矛盾する部分も存在する。Ⅲ期までに成立した生業空間を共有する集落群(単位集団)の継続性を重視した場合、Ⅳ期の集落遺跡の状況はグループ内における新規開発を含んだ集落形成の活発化を反映したレベルにとどまるとの解釈も

可能である。さらに、同質のレベルによる解釈は、集落遺跡数が急減するⅣ期末、集落遺跡数が増加傾向に転じるⅤ期前半にも可能といえる。

最後に、邑知潟周辺の集落遺跡の動向については、小規模調査や遺物の表面採取による周知化が多いことに加え、限られた集落適地で盛衰を繰り返した集落遺跡自体が、現在の集落域とほぼ重複し、さらに前述の外列砂丘の成長や、中小河川の度重なる氾濫で地中深く埋まっていることも多いと想定できる。このような不確定要素が多く残る中、今回は検討しえなかった集落構造や墓制、流通関係を含めて、集落遺跡数の消長が、どのレベルの社会変化を示すのか、今後とも慎重に検討を続ける必要がある。

【註】

- (16) 県内の弥生時代中期の連結した土坑群を外周溝とする平地式建物は、金沢寺中遺跡(外周溝内径約9m、多主柱)、西念南新保遺跡]区SB01(外周溝内径約8m、6本柱)、羽咋市吉崎・次場遺跡第16次連結土坑群(外周溝内径約10m、6本以上の主柱)等があり、いずれも堅穴部(居住エリア)に地山面掘り込みが確認できない。本遺跡SI651(外周溝内径約8.6m)は、SK6504の位置・規模及び出土遺物の接合状況を根拠として、SK6504を堅穴部と理解したが、例えば吉崎・次場遺跡第16次調査の平地式建物外周溝(連結土坑群)のSK26・30と、その内側の掘り返しSK24・29の位置関係と同質のものともみられる。建物の一部調査という制約もあり、今後の類例の増加をまって再考すべきと考える。(久保有希子1995「第4章 まとめ」]石川県金沢市上笠屋遺跡I]金沢市教育委員会、宮下栄仁1998「羽咋市内遺跡発掘調査報告書-住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第16次発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会、岡本淳一郎2003「[周溝をもつ建物]の基礎的研究」]富山大学考古学研究室論集 賢気楼-秋山進午先生古希記念-」六一書房)
- (17) 下濱貴子2016「第1章 土器」]八日市地方道跡Ⅱ-小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」第5部 土器・土製品編 小松市教育委員会
- (18) 増山仁1988「金沢市磯部運動公園遺跡」]金沢市教育委員会
増山仁1992「金沢市専光寺養魚場遺跡」]金沢市教育委員会(株)本業建設
- (19) 小林直樹他2005「長者川遺跡-一級国道415号道路改良事業(改良工事)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」]羽咋市教育委員会
- (20) 藤 剛雄2006「第6章 寺家遺跡の砂丘環境についての研究」]寺家遺跡-第14次~第18次発掘調査報告書-」]羽咋市教育委員会
- (21) 邑知潟は、注ぎ込み中小河川からの土砂堆積や近世以降の新田開発等で水面面積・深さを時代を経るにつれて減じている。「弥生の小海退」に伴う湖面の縮小化もあり、弥生時代の湖回復元は困難であるため、第283図の湖相範囲は、あくまで地形・標高等からみた個人的な推定である。
- (22) 徳丸遺跡では、平成11-12年度発掘調査で縄文時代中期中葉-後葉に営まれた1期以降、近世の7期に至る、橋本川の度重なる氾濫・埋没と集落の廃絶・形成を繰り返した過程が如実にみとれる。
- (23) 対象とした集落遺跡の引用文献は非常に多い。専教育委員会が製作し、HPで公開している石川県遺跡地図「いしかわ文化財ナビ」では、確認した遺跡について文献を含めた詳細情報を提供している。本節でとりあげた各遺跡の引用文献は、第7章末に記している。
- (24) 一般に、集落規模に比して発掘調査面積は極めて小さい場合が多い。ここでは、少量の弥生土器の出土を、単なる二次的移動というより、調査区外の近接した場所に集落が存在するものと積極的に評価した。
- (25) 集落遺跡の周辺には、用排水路網を伴う耕作地に代表される生業空間がひろがる。土地・資源等の利用を伴う生業空間のあり方は、一度成立すれば、集落遺跡の動向に比して、自然的・社会的・政治的な一時的休止をはきんでも、基本的に大きな変動を伴わない可能性が高いことを前提としている。その意味で、グループは、生業空間を共有する集落群(単位集団)と略同義の語句として使用している。
- (26) 安 英樹2001「北陸における弥生時代の拠点集落について」]石川県埋蔵文化財情報 第6号]財団法人 石川県埋蔵文化財センター
下濱貴子2009「報告3 石川における弥生時代の拠点集落について」]「まいふんフォーラム報告2 弥生時代の北陸を探る-考証- 八日市地方道跡とは-」]小松市教育委員会

第9節 第VI-3面・第VII-1面の遺構と遺物 (第286～297図、第64・65表)

1 概 要(第286図)

G地区第VI-3面・第VII-1面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。第VI-2面ベース土を人力で掘り下げて検出した生活面であり、24杭ラインを境として、北側に第VI-3面(弥生時代中期中葉)、南側に第VII-1面(縄文時代晩期後半～末)が展開する。遺構検出面は、第VI-2面検出面より15～40cm程度下がり、調査区南東端付近(F-21区杭南東4m)で13.07m(第VI-2面ベース面13.26mより-19cm)、G-23区杭脇で13.18m(同13.44mより-16cm)、北東端(G-26区杭南東3m)で13.20m前後(同13.61mより-約40cm)、北端(F-26区杭西8m)で12.65m(同約13.00mより-約35cm)をそれぞれ測る。また、遺構検出面は、標高12.52～13.24mを示す緩斜面であり、G-24区付近が最も高くなる。調査区内の標高差は、Gライン(北東-南西方向)が約0.2m、23ライン(南東-北西方向)が約0.3mと、これまでと同様の北西～西側に向けて傾斜する地形であるが、傾斜は次第に緩くなりつつある。

土層層序については、第8節第1項を参照されたいが、24杭ライン以南の第VII-1面は、上層から、部分的に厚さ10～20cm前後堆積した第VI-2面ベース土(淡灰色粗砂、濁暗灰褐色細砂)、第VII-1面遺物包含層(濁灰～淡灰色細砂～砂質土)、第VII-1面ベース土(第VII-2面遺物包含層：淡灰オリブ色弱粘質土)となる。

調査の結果、第VI-3面でピットや河道3条を、第VII-1面で堅穴状遺構1棟、土坑、ピットをそれぞれ検出した。出土遺物は比較的少ない。

2 第VI-3面の遺構・遺物(遺構：第286～292図、遺物：第293・305図)

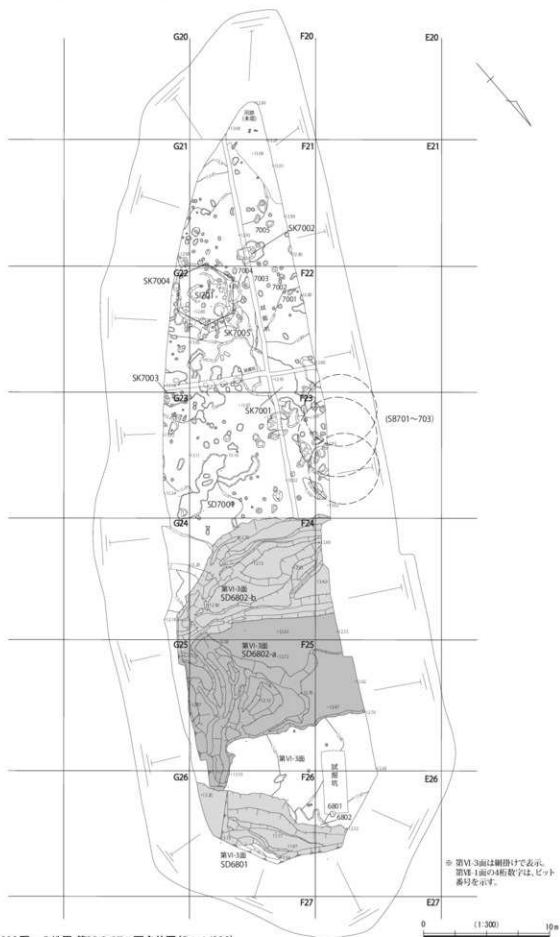
F・G-24区以北で、ピット8基、河道3条を検出し、河道SD6802-bを中心に縄文～弥生の土器片約110点が出土した。ピットは暗灰褐色砂質土を基調とした覆土で、弥生時代中期中葉に調査区外を含めた扇状地北側を中心に営まれた集落の一部と考えられ、河道で大きく損壊する。河道3条は、弥生時代中期後葉に営まれた第VI-1面のベース土ともなる小規模な土石流痕跡(土石流災害6)であり、土層の切り合い関係からSD6802-a→SD6802-b→SD6801の順に発生する。

P6801 E-26区のSD6801-02の流路から外れた位置で検出した不整形を呈する小穴である。径約45cm、深さ45cmを測り、覆土は下層から暗灰色砂質土、にぶい灰白色砂が堆積する。同一個体と考えられる第293図1286・87の壺が出土した。1286は口径18.1cmを測り、ゆるやかに外傾する口縁部外面に幅広の突帯を貼り付ける。突帯は、クシ状工具を用いて、やや斜め方向の連続刺突文で加飾し、器形を含めて第282図1258と類似する。底部台状の1287は、煮炊きに伴う煤・ヨゴレが付着する。

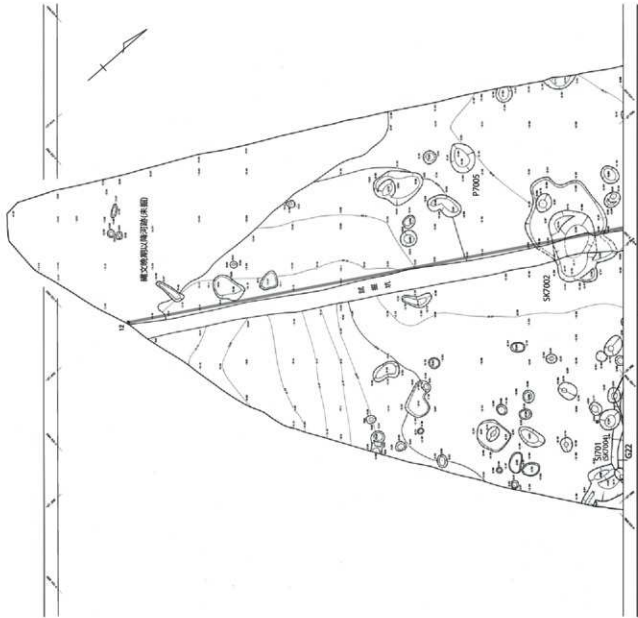
P6802 E・F-26区SD6801脇で検出した不整形な落ち込みで、切り合い関係からSD6801より古く位置付けられる。暗灰褐色砂質土を覆土とし、深さ15cmを測る。摩滅した縄文土器細片が出土した。

SD6801 E・F-26区で検出した小規模な土石流痕跡で、地形と垂直方向(北西方向)に流下する。幅3～4m、深さ95～135cmを測り、覆土は淡灰～明黄色の砂利・礫(10～30cm大)を基本とする。特に第292図土層断面図の第7・9・10層は同質土で、一挙に流入・堆積したと考えられる。遺物は、第VII-1期に属する条痕文を施した土器小片を含む、縄文土器片数点が出土したにとどまる。

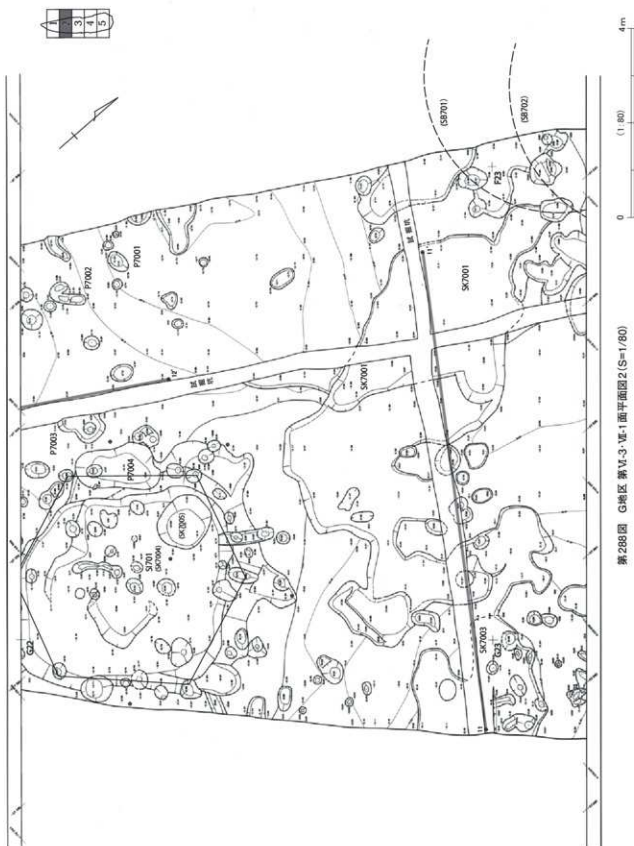
SD6802-a・b E～G-24・25区で検出した2条の土石流痕跡であり、南東方向から北西方向に流下する。前述のとおり、遺構の切り合い関係からSD6802-bが新しい。SD6802-aは、調査区南東壁で幅約12m、



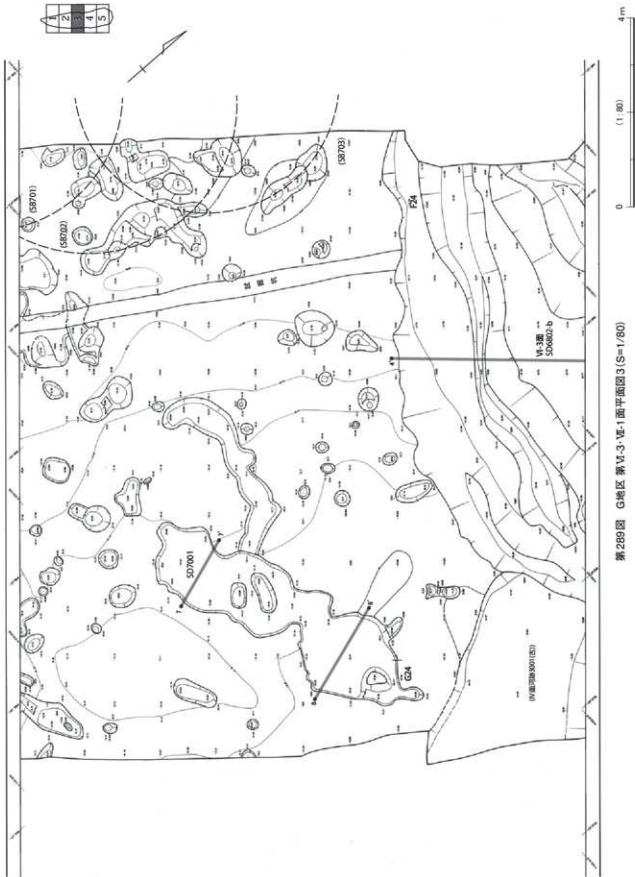
第286図 G地区 第Ⅵ-3・Ⅴ-1面全体図(S=1/300)



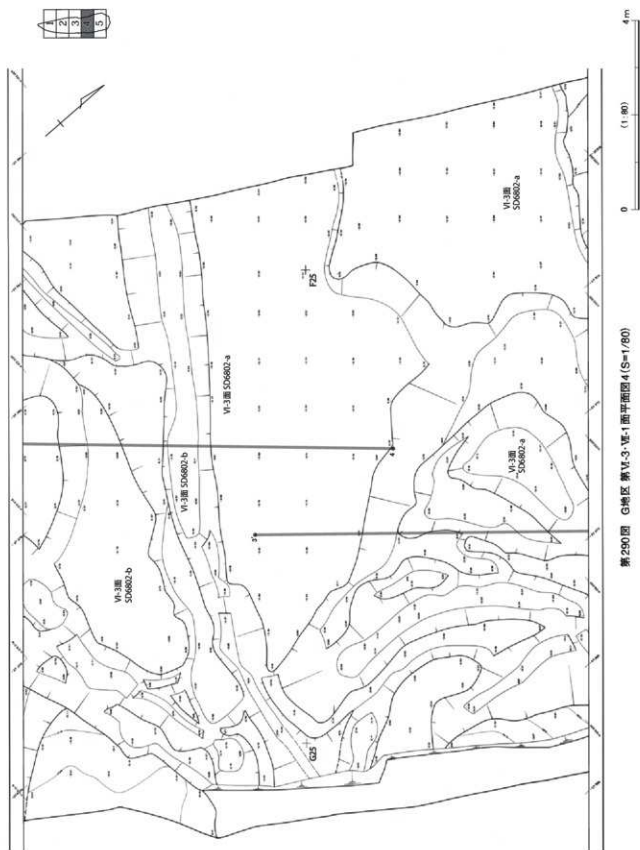
第287図 G地区 第V-3-VI-1面平面図1 (S=1/80)



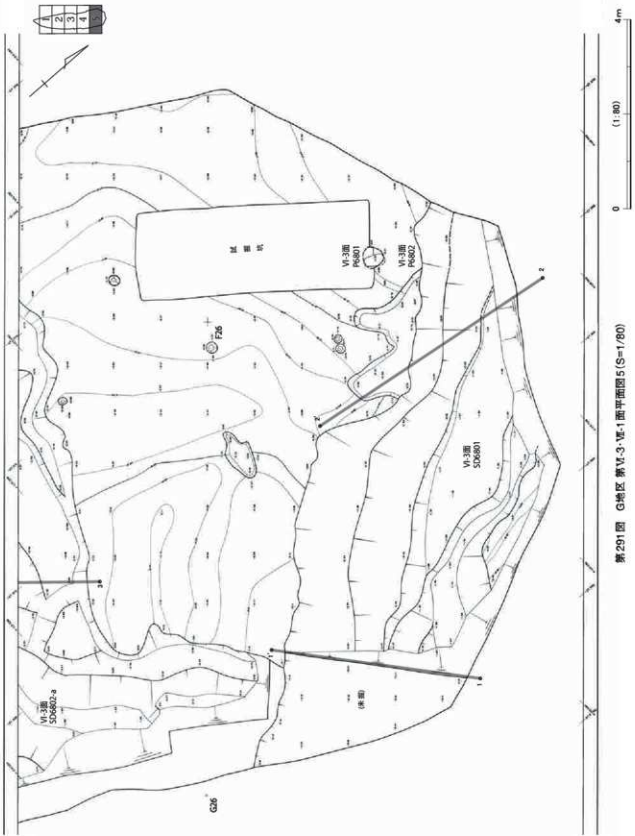
第288図 G地区 第Ⅴ-3-V-1面平面図2 (S=1/80)



第289図 G地区 第V-3・VE-1面平面図3 (S=1/80)



新290図 G地区 第Ⅴ-3・Ⅴ-1面平面図4 (S=1/80)

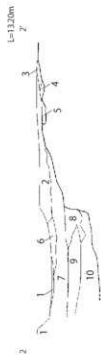


第291図 G地区 第V-3-ⅡE-1面平面図5(S=1/80)

[E-F26区 SD6801] (第291図)



- 1 土壌、明黄色細砂(植物遺体混ざる、土層出土)
 - 2 明黄色砂利(厚くしまる)
 - 3 ベース土と明黄色土の混合土
 - 4 2層と向質土やややく、砂利の混ざりが少ない)
 - 5 4層とベース土の混合土
 - 6 ベース土
 - 7 淡灰色細砂(10~30cm)の濃多く混ざり、厚くしまる)
 - 8 淡灰色細砂と褐色細砂の交互層積層(巨木本の柱が混ざる)
 - 9 淡灰色砂利(10~30cm)が混ざる)
 - 10 淡灰色粗砂(10~30cm)の層が混ざる)
- [ベース土、a)明褐色細砂、b)淡灰色粗砂]



[F24-25区 SD6802-a] (第290-291図)



- 1 土壌、明黄色砂利(濃弱(10cm)入)
 - 1' 1層と同質土(白層より深い)
 - 2 淡灰色細砂と褐色細砂の交互層積層
 - 3 淡灰色細砂と褐色粗砂が水底で複雑に再積
 - 4 淡灰色砂利(濃弱(30cm)入層が混ざる)
 - 5 淡灰色砂利(濃弱(20cm)入層が混ざる)
 - 6 3層と同質土(淡灰色細砂が多くなる)
 - 7 土壌、明黄色細砂(1層が混ざる)
 - 8 淡灰色粗砂
 - 9 淡灰色細砂
 - 10 淡灰色粗砂
 - 11 ベース土と淡灰色砂利の混合土
 - 12 褐色粗砂
- [ベース土、明褐色細砂、b)淡灰色粗砂]

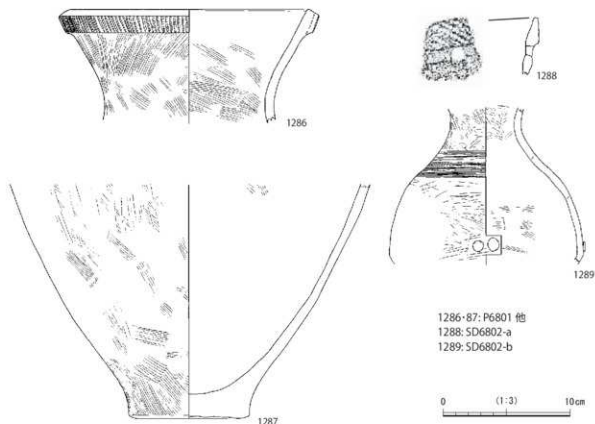
[F24-25区 SD6802-b] (第289-290図)



- 1 明黄色砂利(20~30cm)入層が混ざる)
 - 2 土壌、明黄色砂利(10cm)入層が混ざる)
 - 3 2層と同質土(やや濃い、土層が混ざる)
 - 4 淡灰色細砂(土層が混ざる)
 - 5 褐色細砂
 - 6 淡灰色粗砂と5層の混合土
 - 7 淡灰色細砂と褐色土の混合土
 - 8 褐色砂利(濃弱くしまり、土層が混ざる)
 - 9 明褐色砂利
 - 10 淡灰色粗砂とベース土の混合土
- [ベース土、明褐色粗砂、土層が混ざる、明褐色粗砂]

第292図 G地区 第VI-3面土層断面図 (S=1/60)





第293図 G地区 第VI-3面出土遺物実測図(S=1/3)

第64表 G地区 第VI-3面出土土器観察表

調査番号	グリッド名	出土遺構	種別	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	内径 (cm)	内径色彩	胎土	焼成	内面装飾	外面装飾	遺存年	備考	調査番号
700	1286	F-25 F-25	内径: 赤褐色, 白色装飾	浅鉢土器	8.1	-	15.7	緑	磁砂多, 2x6x6網目網目土器	高	ハヤ, ナヤ	赤十字, ハヤ	約1700	約1700年頃に付く出土品。土器の表面は赤褐色。1287と同一の形状。	01800-1
700	1287	F-24 F-25	内径: 赤褐色, 白色装飾	浅鉢土器	-	9.4	18.5	緑	磁砂多, 2x6x6網目網目土器	高	ハヤ, ナヤ	ハヤ, ナヤ式	約1700	約1700年頃に付く。内面は赤褐色。土器の表面は赤褐色。	01800-2
700	1288	F-25	SD6502-a(赤褐色)	浅鉢土器	-	-	14.5	緑褐色	磁砂多(赤褐色), 高純度磁砂	高	ナヤ式	縄文	小穴	後期前葉(気屋Ⅱ式)。約1700年頃に付く。土器の表面は赤褐色。土器の表面は赤褐色。	01804
700	1289	F-23-3, F-24-2	SD6502-b, SD6503(赤褐色)	浅鉢土器	-	-	17.3	赤褐色	磁砂多・磁砂, 高純度磁砂	高	ナヤ, ハヤ, 高純度	ハヤ, 高純度	-	後葉期, 約1700年頃に付く。土器の表面は赤褐色。土器の表面は赤褐色。土器の表面は赤褐色。	01802

注: 1) 土器の表面は赤褐色。

北西壁で幅約8.2mを、また東側で底面の起伏が目立ち、深さ74～97cmを測る。覆土は、淡灰～淡灰黄色を呈した砂利・礫(10～30cm大)を基調に、南側肩部に細砂、粗砂が堆積する。出土遺物のうち、第293図1288の縄文土器深鉢片を図化した。波状口縁の1288は、幅広の沈線上に外側から円孔を穿つ。後期前葉(気屋Ⅱ式)に位置付けられ、同時期の遺物はF地区で出土する。他に弥生土器片や爪形文をもつ縄文時代前期の土器片や第Ⅶ-1面に属する条痕文をもつ土器片が約30点出土した。

SD6502-bは、調査区南東壁で幅約3m、北西壁で幅約8mを、また両肩部添いが一段深くなり、深さ46～82cmを測る。覆土は、灰・淡灰～明黄色を呈した砂利・礫(10～30cm大)を基調に、北側で細砂、粗砂が堆積する。F-24-2区の第3・4・8層を中心に出土した遺物のうち、弥生土器1289を図化しており、土石流災害の発生時期を示すものと考えられる。東海系の細頸壺1289は、胴部下端で最大径15.4cmを測る。胴部外面を4条1単位のクシ状工具を用いて直線文、簾条文を施し、2個一対の円形浮文を2ヶ

所以上に貼り付ける。在地の胎土でつくられ、弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を中心とした時期に位置付けられる。他に弥生土器や条痕文をもつ土器の破片約60点が出土した。

2 第Ⅶ-1面の遺構・遺物(遺構:第286・294～296図、遺物:第297図)

第Ⅵ-3面(弥生時代中期後葉)に発生した土石流の影響をほとんど受けないE～G-23区以南で検出した生活面で、縄文時代晩期後半～末の竪穴状遺構1棟(SI701)、土坑4基、溝1条、ピット約160基を検出し、ピットの中には円形建物の可能性をもつものが存在する(SB701～703)。遺物量はかなり少なく、第Ⅶ-2面に属する遺物を含めても約130点の出土にとどまる。

SI701(SK7004-05、P7004) F・G-22区で検出した竪穴状遺構で、現地調査では竪穴部をSK7004、床面北縁の大型坑をSK7005、北西辺の土坑をP7004の遺構番号を付した。平面プランは崩れた隅丸方形を呈し、北西辺は規模を縮小した後に、P7004が掘られる。竪穴部の規模は、北東-南西方向が約510cm、南東-北西方向が約390～400cm(当初約510cm)、深さ30cm前後、平面積約20㎡(当初約26㎡)を測り、竪穴部壁はゆるやかなちあがる。覆土は、暗灰褐色砂質土を基調とした自然堆積土(第294図土層1～8層)、竪穴部西辺を縮小した埋土(同図11～13層)、P7004埋土(同9・10)となり、若干の起伏をもつ床面では硬化面や炉跡・焼土面を確認できなかった。柱穴の可能性をもつピット(第294図網掛け表示、覆土は暗灰褐色砂質土)を約20基検出し、北東辺中央の1基(長軸65cm)を除いて径25～44cm、深さ11～37cmを測る。6本主柱を復元しており、柱間距離は北東-南西方向約480cm、南東-北西方向約420～450cm、各柱穴間が230～280cmを測る。また、南東辺の2つのピット(第294図矢印表示)は竪穴部中心に向けて斜方向に掘られており、支柱の可能性が高い。床面検出時に確認したSK7005は、略方形を呈し、長軸118cm、短軸98cm、深さ72cmを測る。炭粒が多く混ざる暗灰褐色砂質土の単層で、貯蔵穴的用途が想定できる。出土遺物のうち、SK7004出土の第297図1290、P7004出土の1091の深鉢を図化した。1290は、外面に条痕文を施し、晩期末～弥生時代前期に位置付けられる。1291は外面に摺糸文が残り、後期中葉と考えられる。また、SK7004-05、P7004から晩期末の条痕文を残す土器片が少量出土した。床面の状況や出土遺物の少なさから、かなり短期のうちに廃絶したと考えられる。

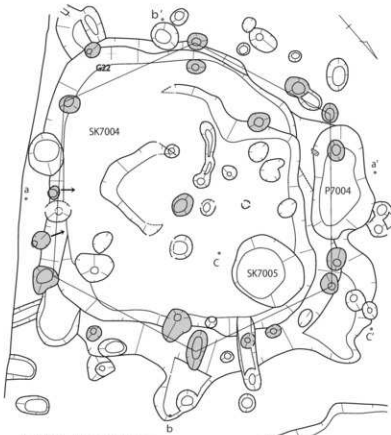
SK7001 F-22-3・F-23-1区で検出した不整形な浅い落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分である。深さ5～12cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。縄文土器深鉢底部片1点が出土した。

SK7002 F-21-3・4区で検出した土坑である。長軸213cm、短軸170cm、深さ48cmを測り、平面不整形円形を呈する中央部が一段深くなる。覆土は炭粒が混ざる濁暗灰色砂質土で、条痕文を含む縄文土器片数点が出土した。

SK7003 F・G-22-23区で検出した不整形な浅い落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分である。深さ3～15cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。条痕文を含む縄文土器片数点が出土した。**ピット** 現地調査段階で大小合わせて約160基のピットを検出し、大半のピットは深さ10cm以下の遺物包含層の浅い起伏と考えられる。覆土は、炭粒が混ざる暗灰褐～濁灰色を呈した細砂～砂質土を基調とし、炭粒が多く混ざるものも存在した。遺物が出土した5基に番号を付しており、P7001～03・05から、縄文土器小片が各1点出土した。

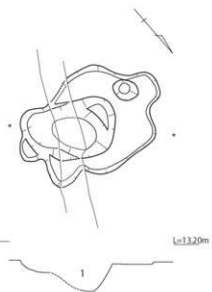
SB701～703 E・F-22-23区で検出したピットのうち、全主柱配置が未確認で、かつ柱痕跡や出土遺物をみないものの、円形建物の可能性をもつピット群についてSB701～703として復元案を図示した(第295図)。SB701は8本主柱を想定、平面不整形円形を呈する3基の柱穴は長径60～70cm、短径50cm弱、深さ12～20cmを測る。柱で囲まれた空間は直径5.76m、床面積約26㎡、柱穴間の距離約210cmとなる。SB702は10本主柱を想定、平面不整形を呈する4基の柱穴は長軸60～85cm、短軸53～66cm、深さ8

【F22区 SI701(SK7004-05)】



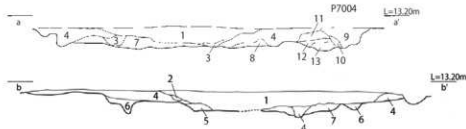
※ 網掛けは、柱の可能性をもつ
ピットを示す。

【F21区 SK7002】



1 濁暗灰色砂質土(炭粒が混ざる)

0 (1:60) 2m



- 1 暗灰褐色砂質土(粗砂に近く炭粒が混ざり、しまらない)
- 2 淡灰色粗砂
- 3 1層とベース土の混合土
- 4 1層と同質土(褐色強くなり、粒子細かい)
- 5 1層とベース土の混合土
- 6 4層と同質土(4層より暗い)
- 7 に近い濁暗灰色砂質土(1層が粒状に混ざる。炭粒が若干多く混ざる)

- 8 4層とベース土の混合土
- 9 暗暗灰色砂質土(炭粒が混ざり、しまらない)
- 10 暗暗灰色砂質土(炭粒が多く混ざる)
- 11 濁暗灰色砂質土(4層が粒状に少し混ざる)
- 12 濁暗灰色砂質土(炭粒が混ざる)
- 13 濁暗灰色砂質土(多くの炭粒と土器が混ざる
[ベース土] 灰緑色粗砂



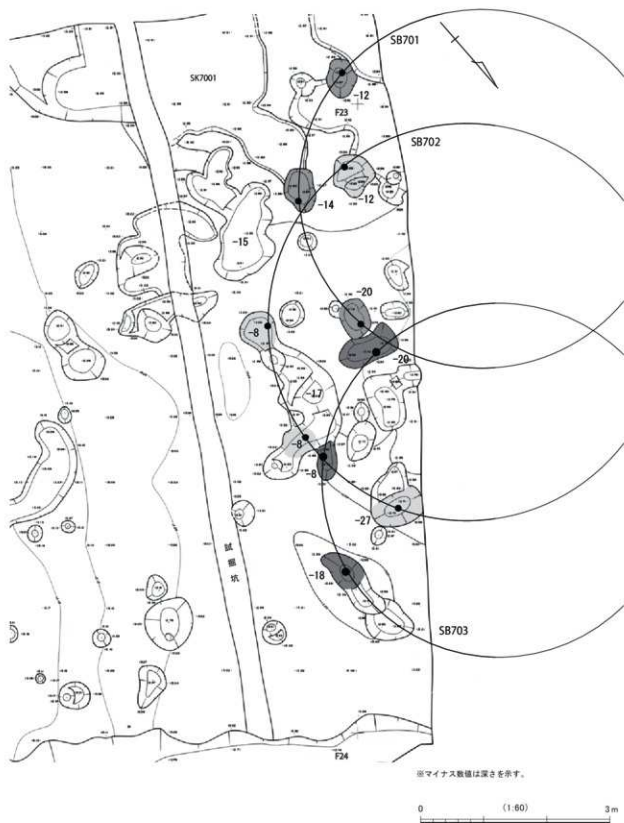
1 に近い暗灰褐色砂質土(粒子細かく、
炭粒が多く混ざる)

【F-G23区 SD7001】 (第289図)



- 1 暗灰褐色砂質土(粗砂に近く、炭粒が混ざる)
- 2 1層とベース土(灰オリーブ色砂質土)の混合土

第294図 G地区 第Ⅶ-1面SK・SD平面図・土層断面図(S=1/60)

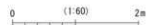


第295図 G地区 第Ⅵ-1面円形建物復元要素(S=1/60)

【東西方向土層断面】(第287-288図)

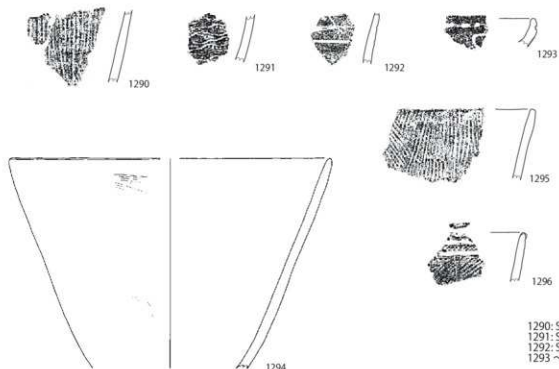


【南北方向土層断面】(第288図)



- 1 乳褐色粗砂(礫が混ざる)
 - 2 灰色細砂(白礫と同質上、礫が混ざる)
 - 3 明褐色粗砂
 - 4 濁灰色粗砂
 - 5 4層と同質上(礫が多く混ざる)
 - 6 暗灰色砂質土(礫が混ざる)
 - 7 灰褐色粗砂(大きな礫が混ざる)
 - 8 濁灰色砂質土
 - 9 濁灰～淡灰色細砂～砂質土
 - 10 暗灰褐色細砂
 - 11 濁灰褐色粗砂
 - 12 濁暗灰色砂質土
 - 13 濁黄褐色粗砂
- 〔ベース上〕a 淡灰乳色粗砂、b 暗褐色砂質土、c 黄オリーブ色粗砂、
d 濁灰色粗砂(礫が混ざる)、e 濁淡灰色砂質土、f 暗褐色細砂、
g 暗灰色細砂、h 濁灰褐色砂質土。

第296図 G地区 第Ⅵ-1面土層断面図(S=1/60)



1290: S1701(SK7004)
1291: S1701(P7004)
1292: SD7001
1293～96: 包含層

第297図 G地区 第Ⅵ-1面出土遺物実測図(S=1/3)

第65表 G地区 第Ⅶ-1面出土土器観察表

調査 番号	調査 番号	プランID	出土遺構	種 類	器 種	口径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	内径形状	外径形状	胎 土	焼成	内 装 装 飾	外 装 装 飾	注 記	備 考	
287	1291	河跡跡-1-2	F-20	江戸川(2975000m) 横尾(横尾土)	縄文土器	深鉢	-	-	13.6	黄緑	黄緑	焼物多、2m大深鉢中に多、赤褐色・陶質多	黒	ナシ	黒線	-	外装線文、縄文陶質(黒竹式)一色土(横尾山土質)
287	1291	河跡跡-1-2	F20-3	江戸川 河跡跡	縄文土器	深鉢	-	-	13.1	黄緑	黄緑	焼物多、2m大深鉢中に多、陶質多	黒	ナシ	縄文	-	江戸川縄文、後期中葉(縄文式)
287	1291	河跡跡-1-1	F-20-4	河跡跡	縄文土器	深鉢	-	-	14.0	黄緑	黄緑	焼物多、2m大深鉢中に多	黒	ナシ	縄文	-	外装に沈線文、後期中葉(縄文式)
287	1291	河跡跡-1-4	F-20	土器層	縄文土器	深鉢	-	-	13.5	12.5以内	12.5以内	焼物多、黒土、陶質多	黒	ナシ	土灰帯	小片	外装に沈線文、後期中葉(縄文式)土(横尾山土質)
287	1296	河跡跡	F-21	横尾(横尾土) 土器層(土器層土)	縄文土器	深鉢	約10	-	14.6	12.5以内	黄緑	焼物多、2m大深鉢中に多、陶質多	黒	ナシ	黒線、ナシ	12.5以内	外装に沈線文、後期中葉
287	1291	河跡跡-1-4	F-21	土器層(河跡跡)	縄文土器	深鉢	約10	-	16.0	約10	12.5以内	焼物多、2m大深鉢中に多、陶質多	黒	ナシ	黒線	2.74	外装線・内装コナリ、縄文陶質(黒竹式)一色土(横尾山土質)
287	1291	河跡跡-1-5	F-21	土器層(河跡跡)	縄文土器	深鉢	-	-	13.1	横尾	横尾	焼物・陶質中に多	黒	ナシ	ナシ	小片	外装に沈線文、内装線・内装コナリ、縄文陶質(黒竹式)

～27cmを測る。柱で囲まれた空間は直径6.30m、床面積約31㎡となる。柱穴間の距離は南側が広く3.20m、他が1.85mを測り、明瞭な門扉状柱穴はないものの南側に開口する可能性をもつ。SB703は8本主柱を想定、平面不整形円形を呈する3基の柱穴は長径60～100cm弱、短径30～50cm弱、深さ8～20cmを測る。柱で囲まれた空間は直径5.60m、床面積約26㎡、柱穴間の距離約190cmと、SB701と近似する。

SD7001 F・G-23区で検出した不整形な浅い溝状落ち込みで、遺物包含層のくぼみ部分と考えられる。深さ2～10cmを測り、炭粒が混ざる濁灰褐色砂質土を覆土とする。出土した第297図1292の縄文土器深鉢片は、外面に浅い沈線文2条が残り、後期中葉に位置付けられる。

南端河跡 調査区南端のF-21区で検出した河跡である。F地区北端で検出した河跡と一体をなすと考えられる。灰色を基調とする砂利・粗砂を覆土とし、肩部から縄文時代晩期後葉(下野式並行)の土器が出土した。深鉢第305図1299は、口縁部内面に指頭圧痕が残り、外面に斜方向の条直文を施す。

包含層出土遺物 縄文時代後期前葉～中葉、晩期後半～末の土器細片約90点が出土、うち第297図1293～1296を図化した。後期前葉の1293は、内湾する口縁部に深い沈線文を施す。晩期後半の深鉢1294は口径約25cmを測り、先細る口縁部は直線的にのびる。晩期末頃の深鉢1295は、器面に煮炊き痕が明瞭に残る。晩期末の深鉢1296は、条直文の後、口縁部に沈線文を施す。

4 小 結

調査区南半で検出した第Ⅶ-1面は、縄文時代晩期後半～末(下野式～長竹式並行期)に営まれた集落域である。G地区窪穴状遺構SB701、出土遺物の量や、F地区第Ⅶ面北側の河跡出土遺物の様相から、当該期の集落域の中心はG・F地区の調査区外東側斜面に展開したと考えられる。当該期の周辺集落は、四柳ミッコ遺跡、小金森ヘイナイメB遺跡で土器棺墓、曾棟C遺跡で円形建物やガラス質安山岩の加工場⁽²⁷⁾が確認されている。特に谷地形を挟んだ四柳ミッコ遺跡では、B区Ⅲ面・D区Ⅱ面下層で晩期末(長竹式後半)の円形建物10棟以上、方形建物2棟以上を検出しており、その関係が注目される。四柳ミッコ遺跡の円形建物が、布尾和史氏による縄文時代晩期建物類型⁽²⁸⁾C2類6棟(8本主柱、直径5.7～8m、床面積25.8～50.6㎡)、C3類4棟(10本主柱、直径7.6～8.4m、床面積45～55.9㎡)と比して、G地区で復元したSB701～703(8本主柱、直径5.6～6.3m、床面積26～31㎡)は、C2類の中でも小規模な建物といえる。なお、調査区南半では第Ⅵ-3面に属する遺構・遺物は確認できない。

調査区北半で検出した第Ⅵ-3面は、集落存続期と土石流災害の発生に伴う集落廃絶期に細分でき、いずれの遺構からも弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を中心とした遺物が出土する。集落域の様相は不明であるが、調査区外北東側及び南東側に展開し、南東側に中心域をもつものと推定される。

また、第VI-2面との関係から、中葉でも後葉に近い時期に営まれた集落と考えられる。

〔註〕

(27) 岡本恭一・久田正弘1995「曾祇C遺跡」社団法人石川県埋蔵文化財保存協会

中島俊一1995「大町遺跡 小金森ヘイナイメ遺跡」石川県立埋蔵文化財センター

林大智他2015「羽咋市 四柳ミッコ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

(28) 布尾和史2012「北陸縄文時代晩期の建物跡について—建物類型と集落跡における建物類型の構成—」石川考古学研究会々誌第55号 石川考古学研究会

第10節 第VII-2面の遺構と遺物 (第298～306図、第66・67表)

1 概要(第298～303図)

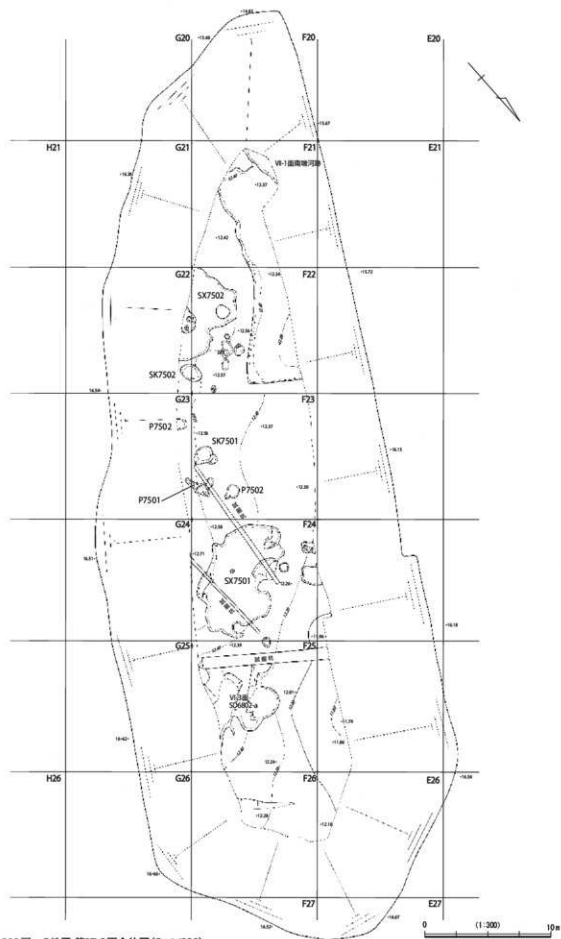
G地区第VI-2面の調査は、第5次調査(1998年)で実施した。F地区第VII面より延びる縄文時代中期～後期前葉の生活面であり、第VII-1面ベース土の一部をなす淡灰オリブ色弱粘質土(第270図第17・18層)を遺物包含層、褐色弱粘質土(同図土層a)をベース土(遺構検出面)とする。遺構検出面は、調査区南東端付近(F-21区杭南東5m)で12.51m(第VI-2面ベース面13.07mより-56cm)、G-23区杭橋で12.68m(同13.18mより-50cm)、北東端(G-26区杭北西4m)で12.15m(同約13.10mより-95cm)、北西端(F-26区杭西2m)で11.79m(同約12.65mより-86cm)をそれぞれ測る。第VI-2面検出面より20～95cm下がった高さとなり、調査区北側に向けて、長い期間をかけて厚い遺物包含層が形成されたことがわかる。また、遺構検出面の標高は11.79m～12.68mを示し、南東方向から北西方向に向けて緩やかに傾斜する地形である。調査区内の標高差は、G・Fの中間ライン(北東-南西方向)が0.35m、23ライン(南東-北西方向)が0.4m弱、26ライン(同)が約0.3mを測り、上面に比して傾斜がかなり緩やかになる。なお、第VII-1面調査後に人力にて第VII-2面の試掘調査を実施し、厚い遺物包含層中に遺物が少ないことを確認、遺物包含層については重機を用いて取り外している。

調査の結果、G・F-22～24区で土坑(SK)2基、ピット12基、浅い落ち込み2ヶ所(SX7501・02)を検出し、集落域の縁辺部の様相を呈する。遺物は、遺物包含層を中心として縄文時代前期中葉、中期～後期前葉、晩期の土器片約170点が出土したにとどまる。調査区北側での遺物包含層の厚さを加味すれば、これらの遺物の大半は、比較的安定した緩斜面に、調査区外東側の集落中心域から土砂とともに流入・堆積したものと考えられる。また、第VII-2面調査終了後、人力にて第VII-2面ベース土以下の土層堆積状況を把握し、第VII-2面より下層に生活面が存在しないことを確認した。重機を用いた調査区埋戻し作業と並行して、調査区東壁5ヶ所で第0・1面～第VII-2面の土層柱状図を作成し、詳細は第3章第2節に記している。

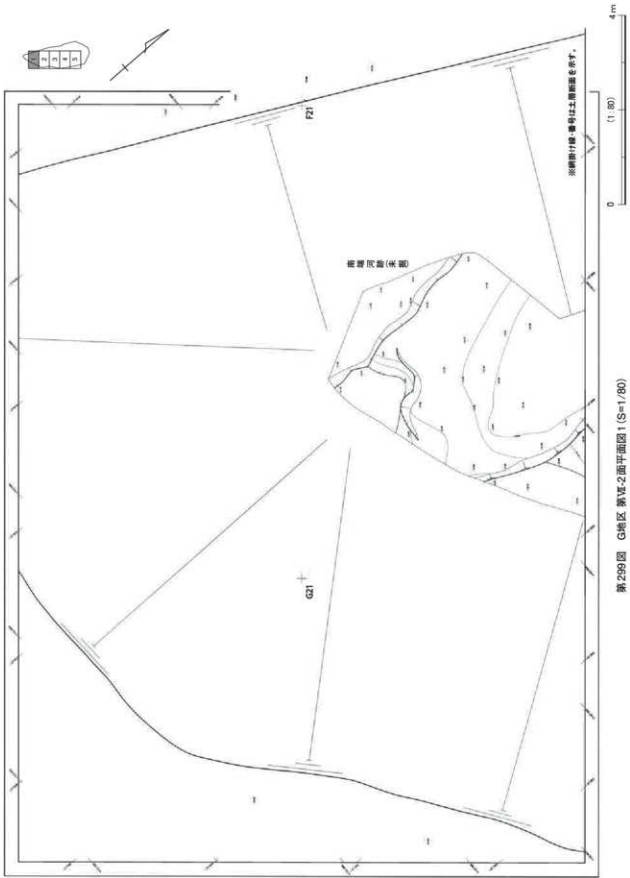
2 土坑(SK) (遺構：第304図)

SK7501 F-23区で検出した平面楕円形を呈する大型土坑で、長径175cm、短径122cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、肩部はしっかりとたちあがる。第304図土層断面図第1層(褐色灰砂質土)が、他面で検出した土石流堆積土と同質土であることから、第VII-2面の中でも新しい段階に位置付けられる。出土遺物はない。

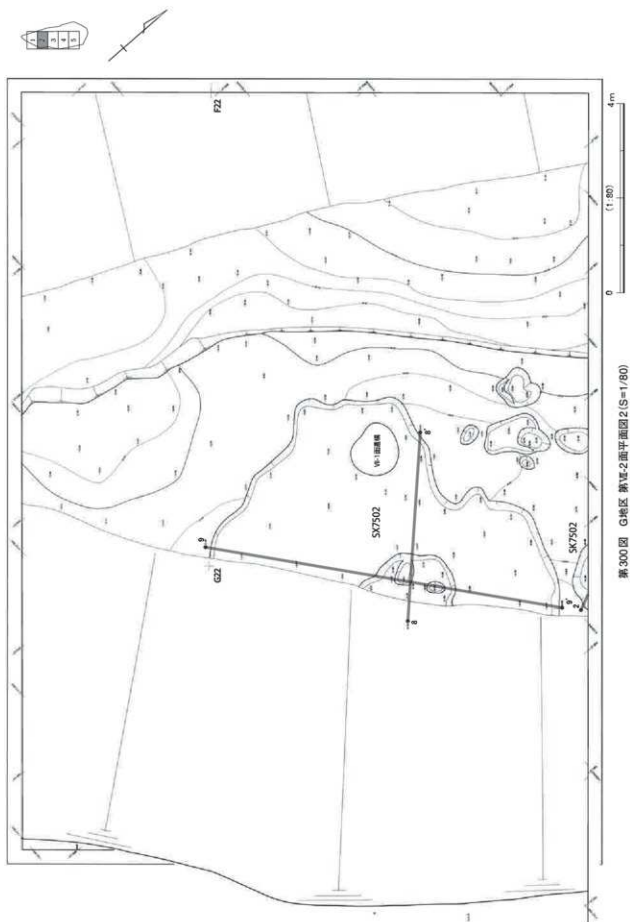
SK7502 F・G-22区で検出した平面楕円形を呈する大型土坑である。長径172cm、短径118cm、深さ54cmを測り、底面は平坦である。下層から順に炭粒が多く混ざる暗灰褐色オリブ色砂質土、濁暗灰色砂質土が自然堆積する。上層から縄文土器小片が出土した。



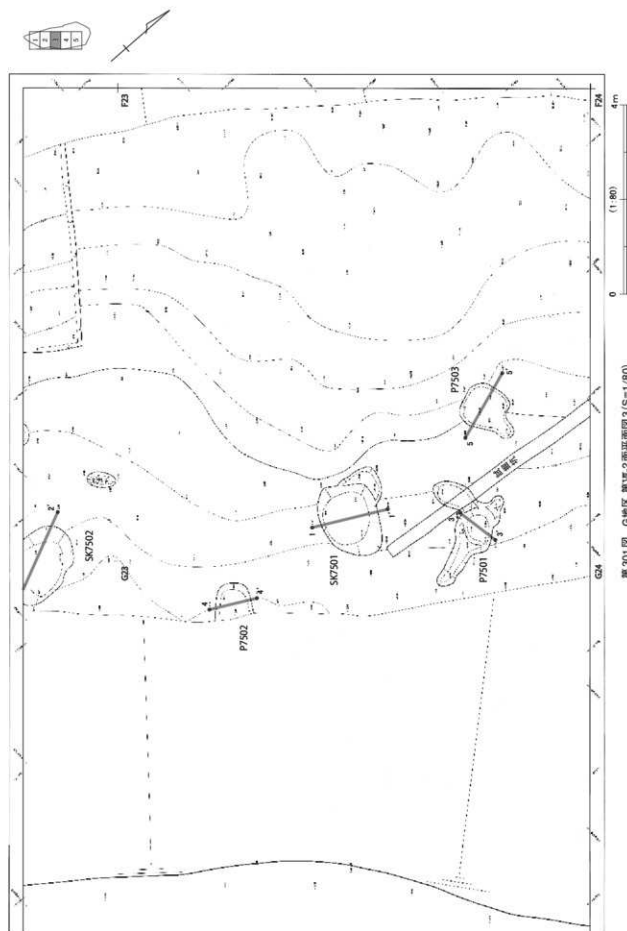
第298図 G地区 第Ⅴ-2面全体図(S=1/300)



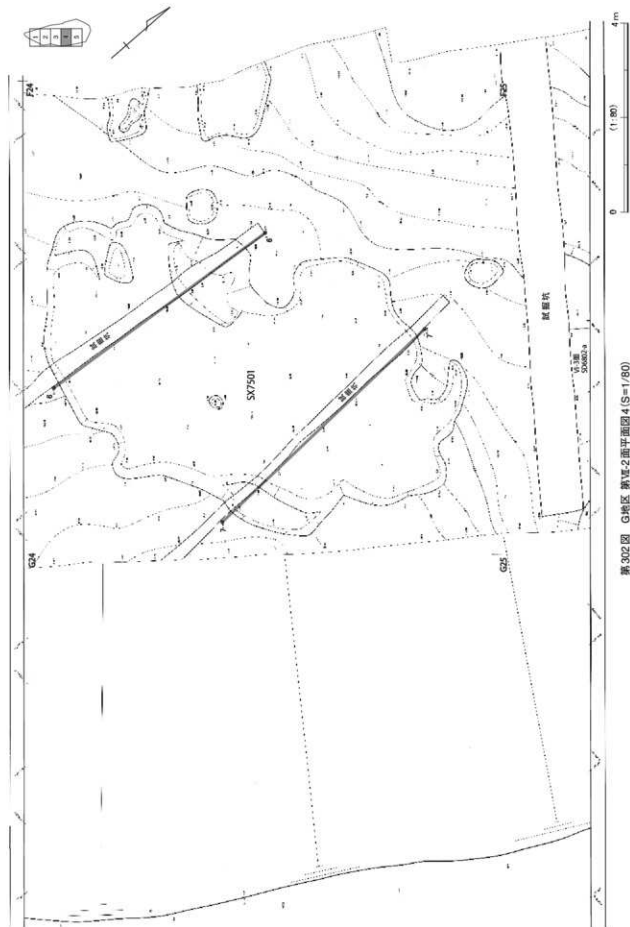
第299図 G地区 第Ⅴ-2面平面図1 (S=1/80)



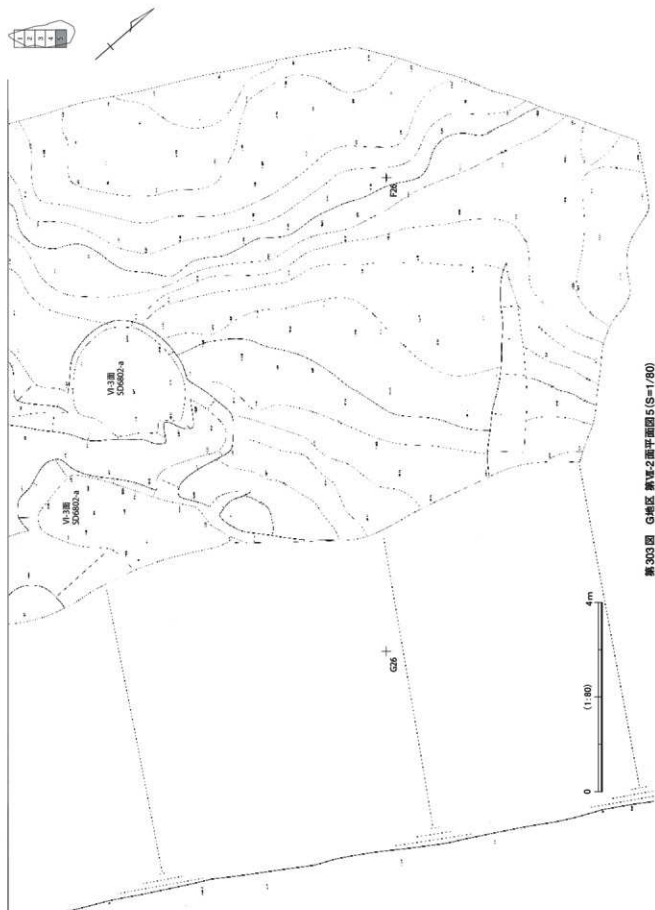
第300図 G地区 第Ⅱ-2面平面図2 (S=1/80)



第301図 G地区 第Ⅷ-2面平面図3 (S=1/80)



第302図 G地区 第Ⅴ-2面平面図4 (S=1/80)



第303図 G地区 第Ⅴ-2面平面図5(S=1/80)

【F-24-4区 SK7501】



- 1 濁灰色砂質土
- 2 灰緑～灰黄色粗砂
- 3 2層とベース上の混合土
[ベース上]茶褐色砂質土

【F-22-4区 SK7502】



- 1 濁暗灰色砂質土(小石が多く混ざる)
- 2 暗灰濁オリブ色砂質土(炭粒が多く混ざる)

【F-23-4区 P7501】(第301図)



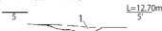
- 1 暗褐色砂質土(炭粒が混ざる)
- 2 暗灰色砂質土(炭粒が多く混ざる)

【G-23-1区 P7502】



- 1 におい、淡灰黄色細砂(炭粒、5cm大の砂利が混ざる)

【F-23-4区 P7503】



- 1 淡灰緑色細砂

【F-24区 SX7501】



- 1 明黄色粗砂
- 2 淡灰緑色シルト～砂利(上層18)
- 3 におい、淡濁灰色細砂
(炭粒が混ざる)
- 4 におい、濁灰色細砂(炭粒が混ざる)
- 5 暗灰色砂質土
- 6 明淡灰緑色細砂(炭粒が混ざる)
- 7 3層と同質土

【F-22区 SX7502】



- 1 濁淡灰緑色砂質土
- 2 明黄色砂質土
- 3 濁暗灰色砂質土

第304図 G地区 第Ⅵ-2面平面図・土層断面図 (S=1/60)

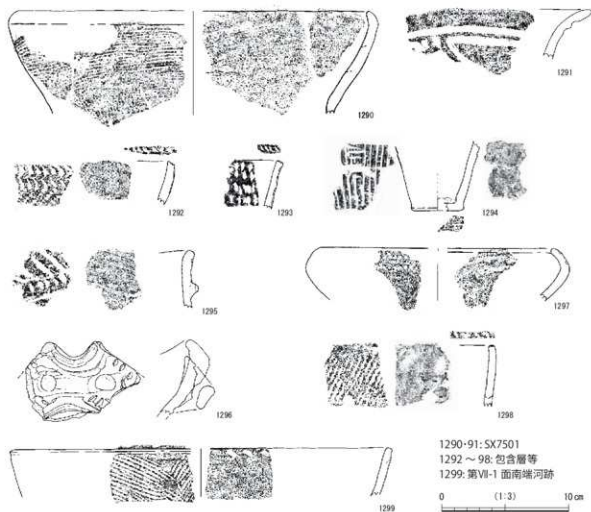
3 ビット (遺構：第301・304)

大小含めて12基のビットを検出した。P7501・502およびSK7502北側約2mに位置するビット(覆土は炭粒が多く混ざる淡灰黄色シルト)以外は、遺物包含層の浅い窪み部分と考えられる。

P7501 F-23-4区で検出した。深さ18cmを測り、覆土は炭粒が多く混ざる。出土遺物はない。

P7502 G-23-1区で検出し、調査区外東側に延びる。平面不整形を呈し、長軸80cm、短軸75cm以上、深さ8cmを測る。覆土は砂利や炭粒が混ざる淡灰黄色細砂で、出土遺物はない。

P7503 F-23-4区で検出した。平面不整形を呈し、長軸125cm、短軸95cm、深さ12cmを測る。覆土は遺物包含層と同質の淡灰緑色細砂で、出土遺物はない。



第305図 G地区 第VII-2面出土遺物実測図(S=1/3)

第66表 G地区 第VII-2面出土土器観察表

発掘 層位	発掘 番号	フリットNo	出土位置	形 状	容 積	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内面形状	外面形状	胎 土	焼成 内 容 量	内 蓋	外 蓋	蓋 形 式	蓋 高	備 考	実測 番号
300	1290	F-24	387501	碗状土器	深鉢	82.7	-	18.2	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少	黒	ナナ	ナナ	小	2.0	平縁部直線中溝付式(小)	9179010
300	1291	F-24	387501	碗状土器	深鉢	-	-	13.7	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、赤褐色、 緑砂少量	黒	ナナ	ナナ	小	0.8	外蓋(口縁部)・内蓋、外蓋縁に 粘砂、緑砂付(緑砂心)	9180117
300	1292	F-24	包含層	碗状土器	深鉢	-	-	13.8	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、海緑砂多	黒	ナナ	内蓋	小	0.8	外蓋(口縁部)・内蓋、粘砂 中蓋(緑砂心)	9179017
300	1293	F-23	緑水層	碗状土器	深鉢	-	-	13.6	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、海緑砂多	黒	ナナ	内蓋	小	0.8	外蓋(口縁部)・内蓋、粘砂 中蓋(緑砂心)	9180115
300	1294	F-23-2 9-23-1	包含層等 (12層位)	碗状土器	深鉢	-	4.1	15.6	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂少ない、海緑 砂少量	黒	ナナ	ナナ	小	0.8	平縁部直線中溝付式	9179016
300	1295	F-23-2 9-23-1	包含層等 (12層位)	碗状土器	深鉢	-	-	14.6	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少	黒	ナナ	ナナ	小	0.8	口縁部二層一帯、中蓋縁部(緑砂心)	9179018
300	1296	F-23-2 9-23-1	包含層等 (12層位)	碗状土器	深鉢	-	-	13.7	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少	黒	ナナ	ナナ	小	0.8	外蓋縁部直線中溝付式、粘砂・ 粘砂心、粘砂中蓋(緑砂心)	918011
300	1297	F-23-4	包含層等 (12層位)	碗状土器	深鉢	81.0	-	18.1	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少、赤 粘砂	黒	ナナ	ナナ	小	2.0	平縁部直線中溝付式	9179013
300	1298	F-26	包含層等 (12層位)	碗状土器	深鉢	-	-	14.5	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少	黒	ナナ	内蓋	小	0.8	口縁部直線中溝付式、粘砂中蓋 付式、粘砂付ナナ	9179019
300	1299	F-26	河跡部(河跡 部北縁)	碗状土器	深鉢	82.9	-	13.8	CC14黄褐色	CC14黄褐色	粘砂多、緑少	黒	ナナ	内蓋	小	0.8	口縁部直線中溝付式、粘砂中 蓋付式	9179014

注() : 注開閉は任意とする。

4 その他の遺構(SX) (遺構：第300-302-304図、遺物：第305図)

SX7501 F・G-24区で検出した遺物包含層の浅い落ち込み部分である。南西-北東方向で約9.5m、南東-北西方向で約6m、深さ12～20cmを測り、淡灰緑色・褐灰色を基調とするシルト・粗砂・砂利が水平に堆積する。約30点出土した縄文土器小片のうち、第305図1290・91の深鉢を図化した。平縁の1290は口径約27cmを測り、口縁端部は内傾する。外面は下方から縦方向の燃糸縄文、横方向の燃糸縄文を施した後、口縁部にヨコナデを行う。1291は平縁で、口縁部は大きく外反する。口縁部外面は幅広の1条の沈線を描いた後、同じ施工具を用いて沈線文、刺突文を描く。1290は中期前葉後半の新崎式、1291は後期初頭の前田式に位置付けられる。

SX7502 F・G-22区で検出した遺物包含層の浅い落ち込み部分で、調査区外東側に延びる。南西-北東方向で約8m、南東-北西方向で4.1m以上、深さ7～24cmを測り、中央付近が一段深くなる。覆土は濁淡灰緑色砂質土を基本に、一段深い部分には明黄土色砂質土が堆積する。縄文土器小片が出土した。

5 包含層出土遺物(第305図)

縄文土器小片約120点が出土、うち第305図1292～1298を図化した。口縁部に刻みをもつ1292は、外面に縄文を施した後、大型の連続爪形文2列を配する。1293も同様な文様構成であり、4列以上の爪形文は粗い印象を受ける。1292-93は、前期中葉の前田式に位置付けられる。中期前葉の新保式と考えられる小形の深鉢1294は円筒形を呈し、外面を半裁竹管を用いて複雑な文様構成に仕上げる。1295と1296は同一個体と考えられ、中期後葉の串田新式に位置付けられる。1295は隆帯上に刻みを施す。双頭状の波状口縁部片1296は、横方向に把手を貼り付けた後、刻み、幅広の沈線、指頭で文様を施す。浅鉢1297は、口縁部が強く内湾し、端部を丸く仕上げる。外面に小振りに刺突文2列を施し、後期前葉と考えられる。1298は平坦な口縁端部に粗い刻み、外面に粗い燃糸縄文を施し、焼成後に外側から穿孔を行う。後期中葉に位置付けられる。

6 小 結

第Ⅶ-2面で検出した遺構、遺物は限られ、集落域の縁辺部の様相を呈する。以下では、D・F・G地区と、本遺跡の東側に立地する四柳貝塚、四柳中の堂遺跡⁽²⁰⁾から出土した縄文土器の時期の整理を通じて、本遺跡の立地する扇状地～東側の台地で営まれた集落域の消長を考える一助としたい。

四柳貝塚と四柳中の堂遺跡は、南北を小河川で区切られた舌状台地(幅約100m)を中心に営まれた縄文時代の集落として知られる。四柳貝塚は、本遺跡の北東約100mの四柳神社境内(標高25～30m)付近から旧国道159号線に広がる(第306図)。昭和44年(1969)に発見、昭和46・47年度(1971・72)に県立羽咋高等学校地歴部が実施した試掘調査により、中期に属する最大厚約20cmを測るシジミの淡水貝塚の形成が確認されている。貝塚を中心に、中期前葉の新崎式、中葉の古府式、後葉の串田新式の土器片が出土、新崎式に盛期をもつとされる。神社境内・参道からは後期前葉の気屋式に属する土器が採取されている。また、四柳中の堂遺跡は、四柳貝塚東側の同一台地(標高40～50m台)に立地し、昭和33年(1958)に縄文土器、磨製石斧、石鏃等の採取から、新たに確認された遺跡である。昭和44年(1969)の県立羽咋高等学校地歴部の調査で、中期前葉の新崎式に属する遺跡であることが判明している。

本遺跡D・F・G地区の一連の調査では、F地区第Ⅶ面で中期中葉後半～後葉(古府式～串田新式)の竪穴建物2棟や、F・G地区の境(E～G-19～21区)で晩期末を中心とした土器が混ざる土石流痕跡を確認



第306図 調査区と周辺の遺跡(S=1/15,000)

第67表 四柳貝塚等の盛衰対比略表

時期		四柳白山下遺跡		四柳貝塚・ 四柳中の堂 遺跡
		D・F地区	G地区	
前期	前葉			
	中葉			
	後葉			
中期	前葉			
	中葉			
	後葉			
後期	前葉			
	中葉			
	後葉			
晩期	前葉			
	中葉			
	後葉			
	末			

※ 四柳白山下遺跡は、黒・黒影が遺物出土、
黒・黒影が遺構検出を示す。

した。第9節・本節で報告したG地区第Ⅶ-1・2面の調査では、前期中葉(朝日C式)、中期前葉(新保式～新崎式)、後期前葉(前田式～気屋式)、後期中葉(酒見式)に加え、晩期後葉～末(下野式～長竹式)の土器片が出土している。

以上、本遺跡の立地する扇状地～東側の台地出土の土器を整理すれば、第67表のとおり、本遺跡D・F・G地区と四柳貝塚、四柳中の堂遺跡は、かなり密接な関係もちながら盛衰していることがわかる。細かい土器片が多いため、比定時期に若干の差異を示すが、中期前葉～後葉、後期前葉～中葉に加え、G地区の調査成果から前期中葉や晩期後葉～末にも、東側の扇状地～台地に集落域が形成された可能性が高い。また、中期前葉の新崎式並行期や中葉の古府式並行期は、集落域が大きく広がるようだ。このように、縄文時代前期中葉以降、継的に短・中期の集落域が営まれ、その範囲は現在把握されている埋蔵文化財包蔵地よりも外側に大きく拡がることが予想される。なお、四柳貝塚の調査では、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器や、奈良～平安時代前期の須恵器が出土しており、やはり同様なことを想定すべきと考えられる。

【註】

(29) 四柳貝塚、四柳中の堂遺跡の範囲については、次の2報告と原教育委員会が1991年に刊行した「石川県遺跡地図」を元に作成した。

越前井亮1973「石川県羽咋市四柳遺跡略報(遺構)」『石川考古学研究会々誌』第16号 石川考古学研究会
高野勝喜1973「羽咋の縄文遺跡—四柳貝塚」『羽咋市史 原始・古代編』羽咋市役所

第5章 H地区の遺構と遺物

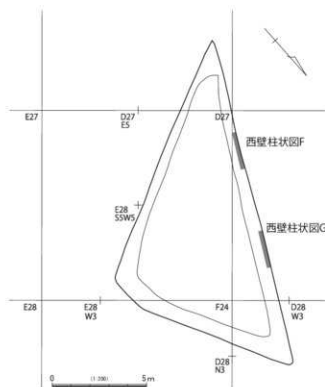
第1節 調査の概要

H地区は、第5次調査(1998)において、G地区北側の農道(幅約10m)を挟んで設定した小規模な調査区である。調査杭グリッドでいえば、D26-3区、C・D-27・28区にあたり、実調査面積は約70㎡(南北方向約8m、東西方向約16m)を測る(第307図)。

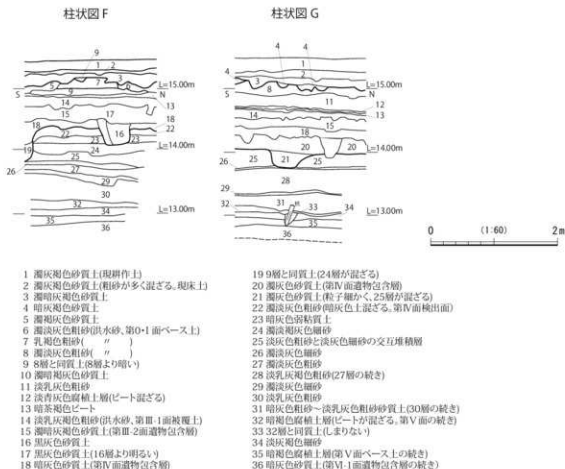
調査の結果、C・D・F・G地区より連続する第0-I面、第Ⅲ-1面、第Ⅳ面の各生活面を検出、G地区第Ⅲ-2面から続く遺物包含層を確認した。また、第Ⅴ面以下の調査については、予想される調査区が極めて狭小となることから県教委と協議を行い、層位を確認するトレンチ調査を実施した。

第0-I面は、G地区と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面である。欄1条、掘立柱建物の柱穴を含むピット、土坑等を検出したが、耕作や過去の耕地整理等により遺存状態はあまりよくない。遺物は、珠洲焼、越中瀬戸等の陶磁器片、漆器椀、柱根等の木製品が出土した。第Ⅲ-1面は、G地区第Ⅲ-1面北側の水田域と一体をなす水田域と考えられ、G地区と同様に一度に流入した土砂で埋没する。畔畦を挟んで2枚の水田及び足跡または耕作痕多数を検出、畔畦の方向はG地区第Ⅲ-1面とはほぼ平行する。第Ⅲ-2面は、G地区と同様の遺物包含層(第Ⅲ-1面耕作土)が存在するものの、耕作に伴う小溝群は明確にできなかった。比較的多くの須恵器、土師器が出土した。第Ⅳ面は、F・G地区と同様に遺構密度が高く、掘立柱建物7棟、掘立柱柱穴を含む多くのピット、土坑を検出し、墨書土器や転用碗を含む須恵器、土師器、柱根等の木製品が出土した。

層位確認調査は、調査区西壁2ヶ所で、現水田より約3mの深さまで人力で掘り下げて土層観察を行う方法で実施した(第307・308図)。主な土層層序は、上層から第0-I面遺物包含層(第3・4層)、第0-I面と第Ⅲ-1面間の流入・堆積層(第5～14層、うち第14層は第Ⅲ-1面を被覆した流入・堆積層)、第Ⅲ-1面耕作土(第Ⅲ-2面遺物包含層、第15層)、第Ⅳ面遺物包含層・遺構(第18～21層)、第Ⅳ面検出面(第22・25層)、第Ⅴ面を被覆した流入・堆積層(第30・31層)、第Ⅴ面耕作土(第32・35層)、第Ⅵ-1面遺物包含層(第36層)となる。G地区の所見と異なる点としては、柱状図Gで、第Ⅳ面が第20層をベース面とする小期と、第25層をベース面とする小期が確認できること、第Ⅴ面の生活面が第34層(淡灰褐色細砂)を挟んで2小期存在することが指摘できる。前者の特徴は、I地区(第Ⅲ-2面相当)でも確認され、北側に向けた傾斜に起因すると考えられる。また、各面の検出面の標高は、第0-I面が14.9m前後、第Ⅲ-1面が14.5～14.7m、第Ⅳ面が14.0～



第307図 H地区 グリッド配置図(S=1/200)



第308図 H地区西壁土層柱状図 (S=1/60)

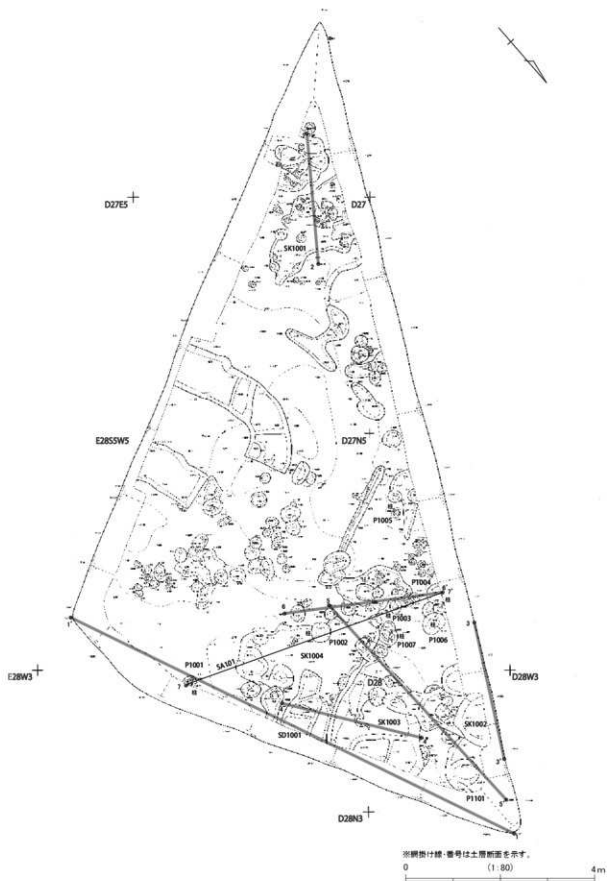
14.2m、第V面が13m前後を測り、第IV面と第V面間の土砂堆積層はG地区と同様に1～1.2mとかなり厚い。なお、第V面・VI-1面に属する土層から出土した遺物はない。

第2節 第0・I面の遺構と遺物 (第309～311図、第68・70・73表)

第0・I面は、C地区以北に展開する最上層の生活面で、H地区は16世紀後半から17世紀代を中心に営まれた集落域と考えられる。調査区北側を中心として横1条、掘立柱建物の柱穴を含む大小様々なピット約70基、土坑4基、溝1条等を検出し、耕作や過去の耕地整理等で削平を受けたため、遺構の遺存状態は比較的良好でない。遺物は、須恵器、土師器や珠洲焼、越中瀬戸等の近世以降の陶磁器片、土師器皿片、漆器碗、柱根等の木製品が少量出土した。

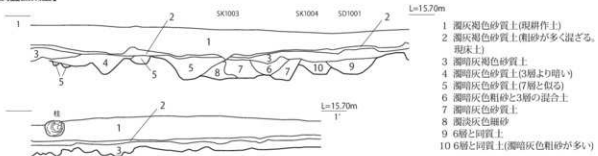
SA101 C・D-27区で検出した櫓で、調査区外に延びる可能性が高い。P1001・02・04を柱穴とし、主軸方位N-79°W、柱間寸法2.70～2.80mを測る。柱穴の平面形態は略円形を呈し、柱穴覆土は濁淡褐色砂質土～粗砂を基本とする。柱穴の規模は、P1002が径約42cm、深さ17cmを測る。また、いずれの柱穴も柱根の樹皮のみが遺存し、現地調査時に確認した柱径はP1001が約12cm、P1004が約18cmである。他遺構との切り合い関係はSK1004より新しく、土器は出土していない。

ピット 耕作や耕地整理等に起因する浅い起伏が目立つ中、調査区北側のP1003・05・06から掘立柱建物や櫓の柱と考えられる柱根樹皮片が出土した。また、P1007から土師器片が出土した。

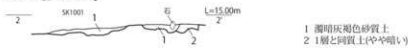


第309図 H地区 第0・1面平面図(S=1/80)

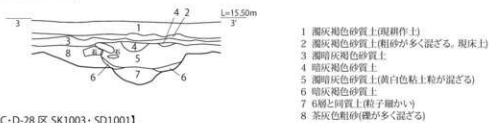
【調査区東壁】



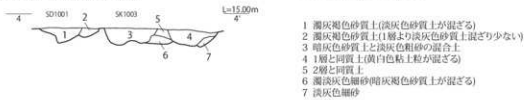
【D-26-27区 SK1001】



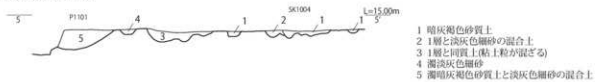
【C-28区 SK1002】



【C-D-28区 SK1003・SD1001】



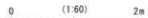
【D-27-28区 SK1004】



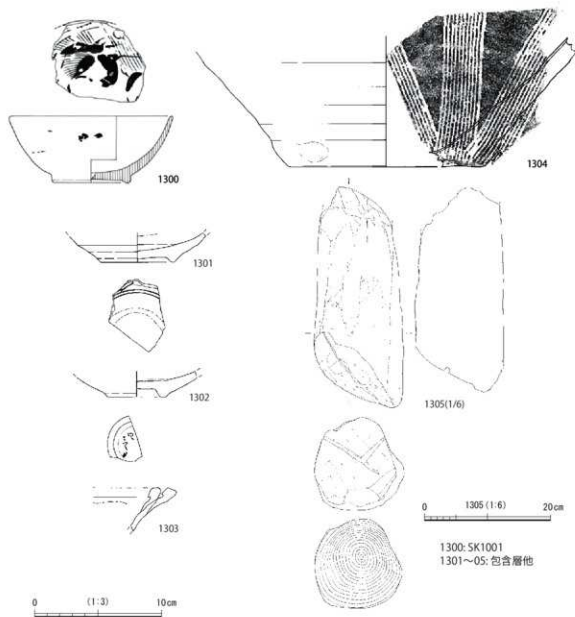
【C-D-27区 P1004】



【C-D-27区 SA101】



第310図 H地区 第O-I面土層断面図 (S=1/60)



第311図 H区第0・1面出土遺物実測図 (S=1/3・1/6)

SK1001 D-27区で検出した不整形な落ち込みで、調査区外西側に延びる。長軸195cm以上、短軸約160cm、深さ3～28cmを測り、底面は凹凸が目立つ。覆土は濁暗灰褐色砂質土で、第309図1300の漆器碗が出土した。1300は口径12.8cm、器高5.3cmを測り、黒漆地に朱漆で文様を描く。材はブナ属を用いる。他に珠洲焼甕片、17世紀代の肥前すり鉢片が出土した。

SK1002 C-28区で検出した平面略円形を呈する土坑で、調査区外西側に延びる。径120cm前後、深さ67cmを測り、暗灰褐～暗灰色砂質土を覆土とする。肩部の一部に自然石が残ることから、小型の石組井戸の可能性をもつ。須恵器坏片が出土したにとどまる。

SK1003 C・D-28区で検出した不整形な土坑で、調査区外東側に延びる。長軸2m以上、深さ44～48cmを測り、細砂、粗砂、砂質土(第310図土層断面1-1'、4-4')を床面埋土とした堅穴状遺構の可能性を残す。他遺構との切り合いはSK1004より新しく、17世紀前半の越中瀬戸灰釉皿片が出土した。

SK1004 D-27・28区で検出した平面不整形な浅い落ち込みで、調査区外東側に延びる。長軸3.9m以上、

深さ12cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。他遺構との切り合い関係はSK1003、SD1001より古く位置付けられ、出土遺物はない。

SD1001 D-28区で検出した溝状遺構で、幅66cm、深さ24cmを測る。濁灰褐色砂質土と淡灰色砂質土の混合土で埋められ、内黒土師器焼片が出土した。

包含層出土遺物 第311図1301～1305が出土した。鉄軸の越中瀬戸皿1301は、内面および高台端部が使用に伴い平滑となる。肥前磁器碗1302は、破断面に焼き継ぎ痕、外底に朱文字で記された文字(屋号か)が残る。肥前陶器すり鉢片1303は、断面方形の口縁部に鉄軸を施す。越前焼すり鉢1304は、破断面に黒漆状の補修痕を残す。1301・03が17世紀前半代、1302が18世紀末～19世紀代、1304が16世紀代に位置付けられる。他に須恵器、土師器、珠洲焼、土師器皿、陶磁器片が出土した。

第3節 第三-I・2面の遺構と遺物 (第312～316図、第68～70・73表)

第三-I面は、G地区第三-I面北側より続く10世紀中葉頃の水田域である。検出面の標高は14.50m～14.70mを測り、南東から北西方向、南西から北東方向に向けて緩やかに標高を減ずる。G地区第三-I面水田の標高14.80～14.90mに比して、若干標高が下がる程度であり、比較的平坦な緩斜面に棚田様水田が連続する景観が復元可能であろう。調査の結果、洪水層である淡乳灰褐～淡青色を呈した粗砂～細砂で覆われた状態で、一体的に造成された2枚の水田及び畦畔3ヶ所を検出した。また、SD3101は、洪水層の流路の一部と考えられる。遺物は、洪水層、耕作土から須恵器、土師器が出土した。

第三-II面は、G地区では第三-I面耕作土を取り除いて検出した畠地であり、H地区では遺物包含層を確認したにとどまり、平面図は作成しなかった。耕作土を中心に比較的多くの須恵器、土師器に加え木製品が出土した。

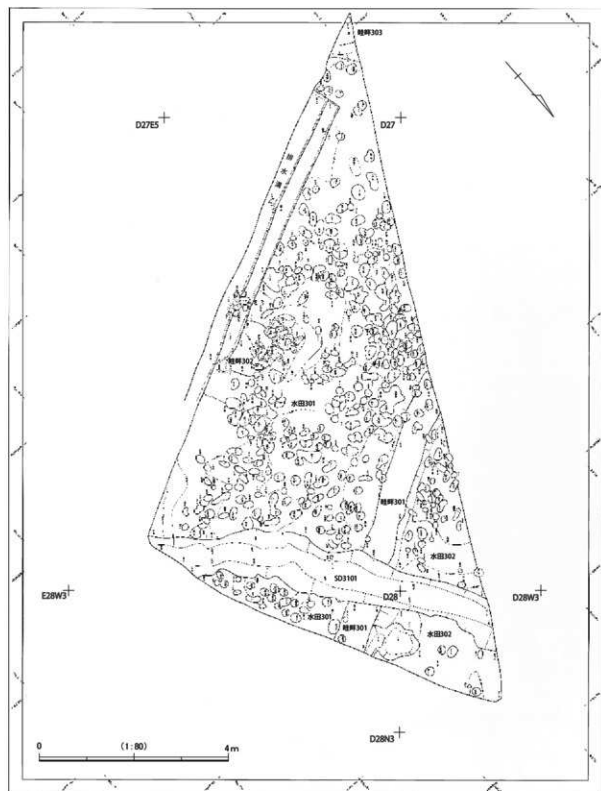
水田301 D-27・28区で検出した水田で、南西端を畦畔303、北西端を畦畔301で画される。平面長方形を呈すると考えられ、調査区内で北西～南東方向4m以上、南西～北東方向11m以上を測る。水田面の標高は、調査区南西隅が14.75m、東隅が14.70m、北東隅が14.58mを、標高差が北西～南東方向で17cm、南西～北東方向で10cmをそれぞれ測る。耕作面で多数検出した平面不定形な浅い窪みは、深さ5～15cmを測り、足跡とする規則性をみいだすことはできなかった。

水田302 C-27・28区で検出した水田で、南東端を畦畔301で画される。平面長方形を呈すると考えられ、調査区内で北西～南東方向3m以上、南西～北東方向5m以上を測る。水田面の標高は、調査区南西隅が14.54m、東隅が14.50m、北東隅が14.49mを、標高差が北西～南東方向で4cm、南西～北東方向で5cmをそれぞれ測る。耕作面で、水田301と同様な平面不定形な浅い窪み多数を検出した。

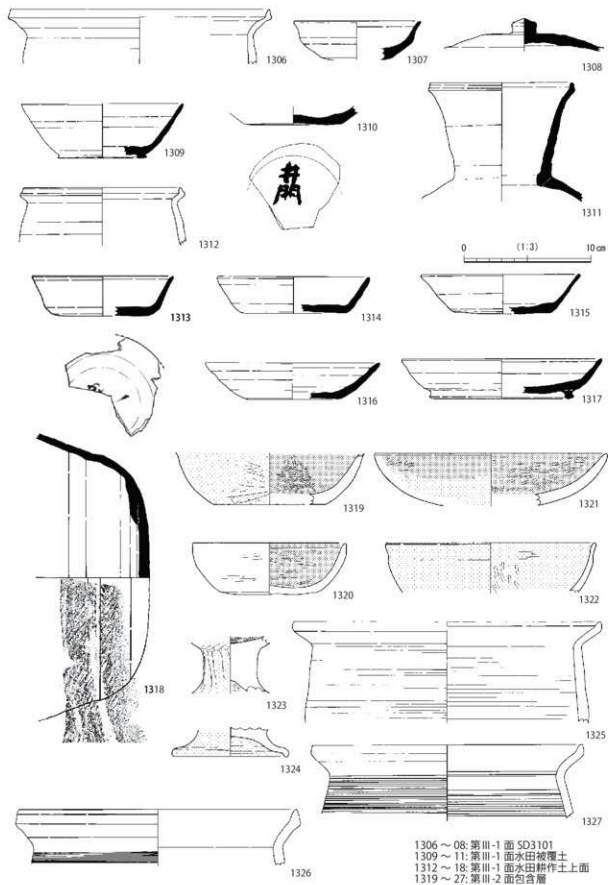
畦畔301 水田301・302間で延長5.5mを検出した幅広で低い畦畔である。主軸方位N-60°E、標高14.60m前後を示す。上幅55～65cm、下幅70～80cm、水田302耕作面との標高差5～10cmを測る。

畦畔302・303 畦畔302は、D-27区で検出した南西方向に延びる土手状の高まりで、肩部に15～45cm大の自然石約30個を乱雑に据え置く。幅約220cm、水田301耕作面との標高差10～15cmを測り、G地区第三-I面で検出した石集中301と同様に、水田肩部を保全した土留め跡と考えられ、J地区第三-0面で類似した形状の石積みを確認している。畦畔303は、調査区南西隅のC-27区で一部を検出した。畦畔301と直交する位置関係にあり、上幅60cm以上、水田301耕作面との標高差9cmを測る。

SD3101 調査区北東側で検出した洪水流路で、蛇行気味に水田区画を浸食しながら南東方向から北西方向に流れ下る。幅63～110cm、深さ30～35cmを測り、覆土は淡乳灰褐色粗砂～砂利である。遺物は、第313図1306～1308を図化した。ロクロ土師器甕1306は口径20.3cmを測り、ロクロひだが目立つ。



第312図 H地区 第Ⅲ-1面平面図(S=1/80)



第313図 H地区 第III-1・2面出土遺物実測図1 (S=1/3)

須恵器埴1307は腰部で明瞭に屈曲、口縁部で小さく外反する。須恵器坯蓋1308はボタン状の鈕を貼り付け、Ⅵ期に位置付けられる。

水田面被覆土出土遺物 第308図第14層(淡乳灰・淡青色粗砂～細砂淡乳灰褐色粗砂)から出土した第313図1309～1311の須恵器を図化した。薄手の有台坏1309は口径12.8cm、器高4.3cmを測り、体部は大きく外傾する。無台坏底部片1310は、外面に「井門」と墨書した後、被熱のため煤が付着する。正位で焼成された瓶1311は口径11.1cmを測り、口縁端部を上方につまみ出す。1309がⅡ期、1310がⅤ期、1311がⅥ期に位置付けられる。

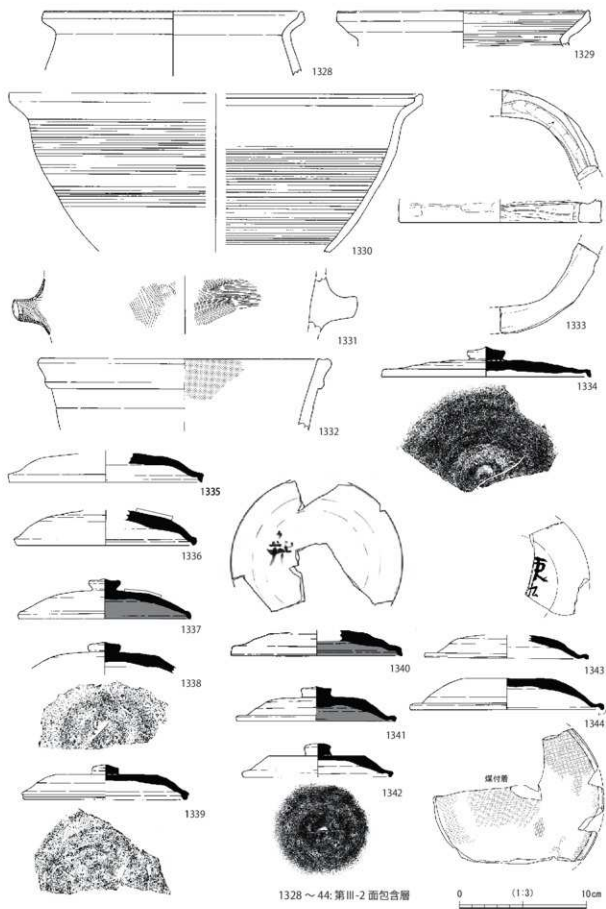
水田耕作土出土遺物 第308図第15層(濁暗灰褐色砂質土)から比較的多くの須恵器、土師器が出土し、うち第313図1312～第316図1379を図化した。なお、同土層は、第Ⅲ-2面遺物包含層でもある。

1312～18は洪水被覆土との境から出土した。ロクロ土師器小甕1312は口径12.3cmを測り、口縁端部を小さくつまみあげる。1313～16は須恵器無台坏である。1313の底部外面に記された墨書は判読できない。1314は口径11.9cm、器高2.9cmを測り、小盤に近い形態を呈する。外面に煤が付着する。1315-16は、底部台状を呈し、体部は大きく外傾する。須恵器有台盤1317は口径15.7cm、器高3.2cmを測り、底部内面は使用に伴い平滑となる。須恵器横瓶1318は、内面に液だれ状の付着物が認められる。1312-13以外はⅤ期以降に位置付けられる。

第313図1319～21は非ロクロ成形の土師器埴で、1319-21は内面に黒色処理、外面に赤彩を施す。平底の1319は外底まで丁寧に赤彩を施す。1320は口径12.0cm、器高4.1cmを測る。1321の黒色処理は、外面に大きくはみだす。ロクロ成形の土師器赤彩埴1322は口径16.4cmを測る大型品である。1323は非ロクロ成形の低脚高坏、1324はロクロ成形の臺台部である。1325～30はロクロ成形の土師器で、甕1325～29の口径は20cm前後～24cmに分布する。埴1330は、外面に厚い煤が付着する。瓶1331の把手は断面長方形を呈し、短く横方向にのびる。ロクロ成形の瓶1332は、破損後に2次被熱する。1333は瓶底部片と考えられる。

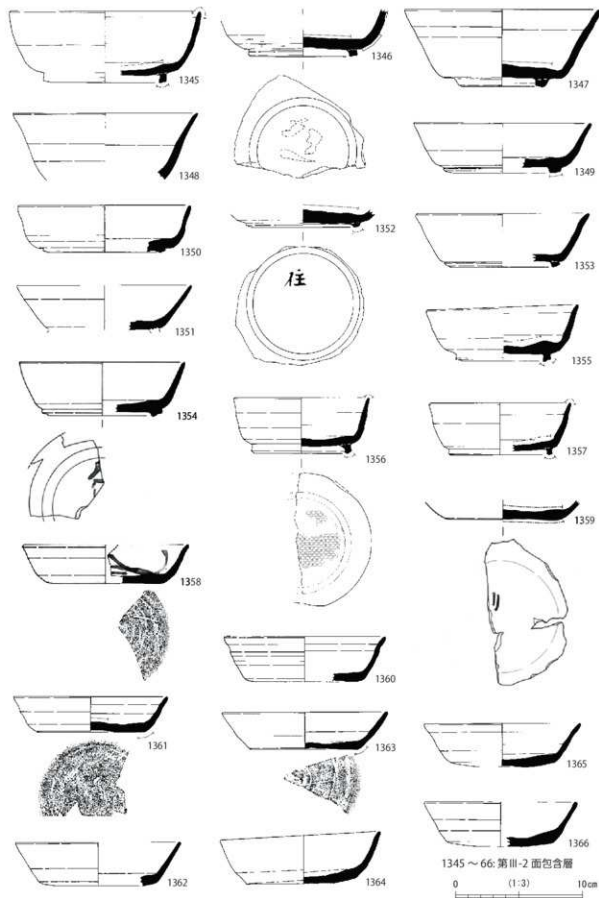
第314図1334～第316図1374は須恵器で、うち1334～44は坏蓋である。扁平な1334は口径16.4cm、器高2.4cmを測り、大振りな鈕を付ける。1335は全面に煤が付着する。山笠形の1337は硯に転用され、内面全体に墨痕を残す。1338の天井部内面は、使用に伴い摩耗する。1339は口径12.6cm、器高2.8cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。1340は外面を墨書する他、1341と同様に硯に転用される。1342は外面全体に降灰が認められる。口縁端部を丸く仕上げる1343は、天井部内面が摩耗する。天井部外面に記された墨書の1文字目は「東」と考えられる。無鈕の1344は口径15.1cm、器高2.5cmを測り、内面に煤が付着する。1334～40がⅣ期、1341-43がⅤ期～Ⅵ期、1344がⅥ期に位置付けられる。第315図1345～57は有台坏で、1345～48は深身の器形を呈する。1345は体部が内湾気味に立ち上がり、台部が内屈する。1346は底部外面中央にかすかに墨痕が残る。1347は口径15.3cm、器高6.1cmを測り、狭い底部から体部が大きく外傾する。底部内面が使用に伴い平滑となる他、2次被熱する。1349～51は口径約14cm、器高4cm弱を測る。1349は低い台部がしっかりと外展するのに対して、1350は内寄りに小振りの台部を付ける。1352は底部外面に小さな文字で「住」と墨書する他、内面は使用に伴い平滑となる。1353の体部は直線的に外傾する。1354の底部外面に記された2文字の墨書は判読できない。1355-57は使用に伴う摩耗が目立つ。1356は体部が直立し、台部より内側全体に黒色の煤・タールが付着する。Ⅵ期の1347以外は、おおむねⅣ期以前に位置付けられる。

第315図1358～第316図1370は無台坏である。扁平な1358は内面を硯面に利用するため、筆跡と顕著な摩耗が認められる。1359の底部外面に記された墨書は、使用に伴う摩耗と被熱のため判然としない。1360は、重ね焼きにより口縁部下端から屈曲する。1361は底部外面に塵状圧痕が残る。1362は体

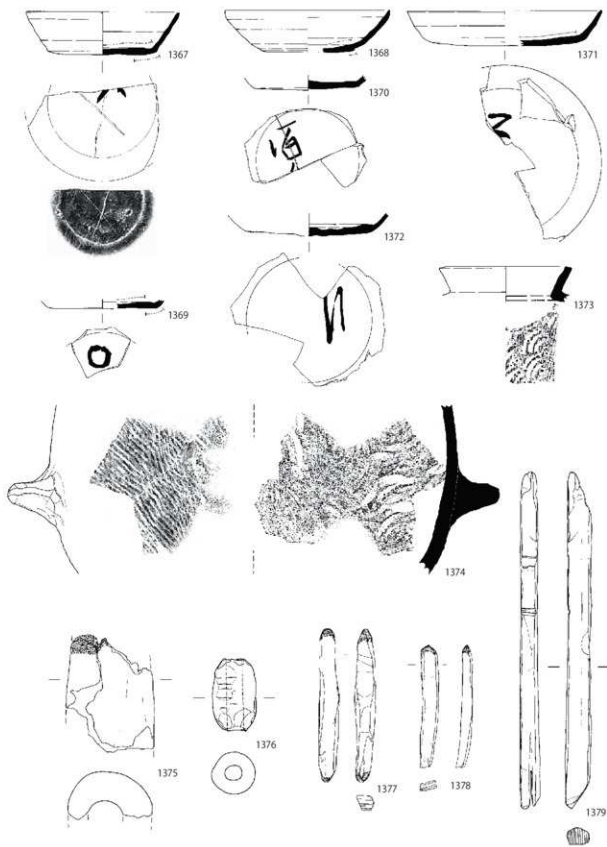


1328～44: 第Ⅲ-2 面包含層

第314図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図2 (S=1/3)



第315図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図3 (S=1/3)



1367～79: 第Ⅲ-2面包含層

第316図 H地区 第Ⅲ-1・2面出土遺物実測図4 (S=1/3)

0 (1:3) 10cm

第69表 H地区 Ⅲ-2面出土土器観察表

調査 番号	プラン号	出土遺構	種 類	形 様	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	内径比率	外径比率	胎 土	表 装 装 容	外 装 装 容	透水性	備 考	
														調査番号	実測番号
114	1340 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	13.2	-	11.8	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、図柄へう紋付	2119	内装裏面、図柄付。内装裏面、内装裏面、内装裏面	917901
114	1341 0-27-2	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.7	9.4	7.7	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、図柄へう紋付	2120	内装裏面、内装裏面、内装裏面、内装裏面	91901
114	1342 0-27-3	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.5	8.4	7.7	底	底	+	黒ロウナリ、ナリ	ロウナリ、図柄へう紋付	2121	内装へう紋付(「」)、内装裏面	91902
114	1343 0-27-4	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.4	-	11.8	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、図柄へう紋付	2122	内装裏面、内装裏面、内装裏面、内装裏面	91903
114	1344 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	13.1	7.4	2.3	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2123	内装へう紋付(「」)、内装裏面、内装裏面、内装裏面	91904
114	1345 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	14.8	8.8	3.4	底	底	+	黒ロウナリ、ナリ	ロウナリ、図柄へう紋付	2124	内装裏面、内装裏面	91905
114	1346 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	8.4	13.5	底	底	+	黒ロウナリ、ナリ	ナリ、内装へう紋付	2125	内装へう紋付(「」)、内装裏面	91906
114	1347 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	13.2	-	6.7	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、ナリ、内装へう紋付	2126	内装裏面、内装裏面、内装裏面	91907
114	1348 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	14.2	-	12.2	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ	2127	内装裏面	91908
114	1349 0-27-1、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	14.9	7.4	3.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2128	内装へう紋付	91909
114	1350 0-27-1、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.4	8.8	3.7	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、ナリ、内装へう紋付	2129	内装裏面、内装裏面、内装裏面	91910
114	1351 0-27-1、4	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	13.8	-	13.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、ナリ、内装へう紋付	2130	内装へう紋付(「」)	91911
114	1352 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	8.8	11.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、ナリ、内装へう紋付	2131	内装裏面「」、内装裏面	91912
114	1353 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.5	8.2	4.2	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2132	内装裏面	91913
114	1354 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.1	8.2	4.2	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2133	内装へう紋付(「」)	91914
114	1355 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.2	7.4	4.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、ナリ、内装へう紋付	2134	内装裏面、内装裏面、内装裏面	91915
114	1356 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	10.5	3.4	4.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2135	内装へう紋付(「」)	91916
114	1357 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.2	8.4	4.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2136	内装へう紋付(「」)	91917
114	1358 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.4	8.2	3.1	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2137	内装へう紋付(「」)	91918
114	1359 0-27-5、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	8.8	11.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2138	内装裏面、内装裏面、内装裏面、内装裏面	91919
114	1360 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.4	10.8	3.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2139	内装裏面	91920
114	1361 0-27-2	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.8	8.8	3.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2140	内装裏面、内装裏面	91921
114	1362 0-27-3、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	11.4	7.4	2.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2141	内装裏面、内装裏面「」、内装裏面、内装裏面	91922
114	1363 0-27-1、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	13.8	8.4	2.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2142	内装へう紋付(「」)	91923
114	1364 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	12.5	8.8	4.1	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2143	内装裏面付、内装裏面付	91924
114	1365 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.2	8.2	3.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2144	内装裏面	91925
114	1366 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	11.8	8.4	2.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2145	内装裏面付、内装裏面付	91926
114	1367 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.4	8.4	3.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2146	内装へう紋付(「」)、内装裏面「」、内装裏面「」、内装裏面「」	91927
114	1368 0-27-2	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	12.4	7.4	3.5	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2147	内装裏面、内装裏面	91928
114	1369 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	8.4	11.8	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2148	内装裏面、内装裏面「」	91929
114	1370 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	8.1	11.2	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	-	内装裏面「」(遺構は図録に)	91930
114	1371 0-27-4、0-28-1	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	13.2	11.4	2.4	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2149	内装裏面、内装裏面「」、内装裏面、内装裏面	91931
114	1372 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構、跡水溝	透土器	中盤	-	10.8	11.8	底	底	+	黒ロウナリ	ロウナリ、内装へう紋付	2150	内装裏面「」	91932
114	1373 0-27-1、1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	12.4	-	13.8	底	底	+	黒ロウナリ、内装へう紋付	ロウナリ、内装へう紋付、内装へう紋付、内装へう紋付	2151	内装裏面、内装裏面「」、内装裏面、内装裏面	91933
114	1374 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	透土器	中盤	-	-	13.4	底	底	+	黒ロウナリ	内装へう紋付、ナリ	-	内装裏面	91934
114	1375 0-27-1	第Ⅲ-2面遺構	土製器	ナイフ型	長さ 19.2 幅 11.8 高さ 8.1	-	-	底	底	+	黒ロウナリ、内装へう紋付	ナリ	-	内装へう紋付	91935
114	1376 0-28-1	第Ⅲ-2面遺構	土製器	鉢	長さ 5.5	1.5	-	底	底	+	黒ロウナリ	ナリ	-	内装へう紋付、内装裏面、内装裏面	91936

第70表 H地区 第0-1面、Ⅲ-2面出土木製品観察表

調査 番号	番号	種 類	出土遺構	種 類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (mm)	用途	備 考	実測番号	実測番号
114	1300 0-1	200-1	20000	透土器	10.2	2.9	0.3	ナラ	透土器「」(「」)	91937	91937
114	1308 0-1	200-1	透土器	透土器	18.7	14.8	10.1	ナラ	透土器「」(「」)	91938	91938
114	1317 0-2	0-20-2	透土器	透土器	12.2	1.4	1.4	-	透土器、透土器、透土器	91939	91939
114	1318 0-2	0-27-1	透土器	透土器	9.2	1.4	0.5	-	透土器、透土器、透土器	91940	91940
114	1319 0-2	0-27-1	透土器	透土器	16.4	2.1	1.4	-	透土器、透土器、透土器	91941	91941

がV期、1359・60・63・67～71がVI期に位置付けられる。横瓶1373は横位で焼成され、厚い自然釉が溶着する。1374は球形形の甕で、横方向にのびる把手を付ける。1375はフイゴの羽口、1376は側面に数物圧痕を残す土師器土鍾である。木製品1377～79は加工材で、1377・78は焦げ跡を残す。

第4節 第Ⅳ面の遺構と遺物 (第317～323図、第71～73表)

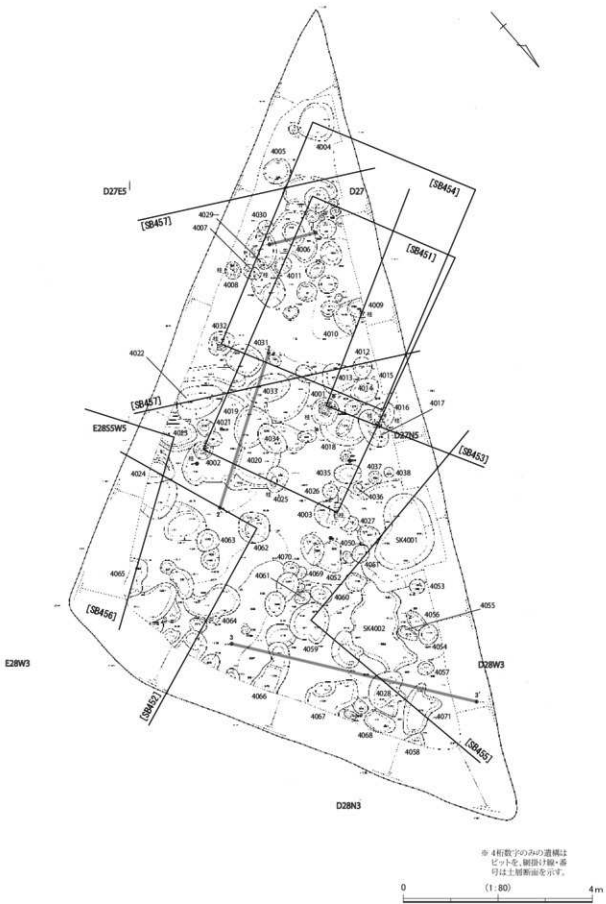
第Ⅳ面は、G地区第Ⅳ面から続く7世紀末頃～9世紀末に営まれた集落域である。検出面の標高は14m弱～14.1mを測り、第Ⅲ-1面と同様に南東から北西方向、南西から北東方向に向けて緩やかに標高を減ずる。第Ⅲ-2面と第Ⅳ面の間に、土石流に起因する流入・堆積土を確認できないことから、10世紀初頭(VI₂期)に発生したG地区河跡3001(古)を本流とする土石流災害の影響は少ないものと推察される。調査の結果、土坑(SK)2基や約110基のピットを検出、掘立柱建物(SB)7棟を復元した。遺物は、墨書土器や転用硯を含む多数の須恵器、土師器の他、製塩土器、フイゴ羽口、土鍾、柱根等の木製品が出土した。なお、調査区の制約から、掘立柱建物として復元した柱穴以外にも、P4008・18・20・35・54等の柱穴となるピットが一定数存在することから、存在した掘立柱建物数はさらに多いと推定している。

SB451 C・D-27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外南西側にのびる(第318図)。建物主軸方位はN-68°Eを示し、桁行3間(5.90m)×梁行2間(3.06m)、床面積は約18㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m・2.10m、梁間の柱間寸法は1.53m等間で、柱筋の通りは比較的良好。柱穴の平面形態は不整形を呈するものが主体で、P4003が長径76cm、短径56cm、深さ38cmを、P4031が長径80cm、短径64cm、深さ24cmをそれぞれ測る。柱根は径10～18cmを測る4本が残存し、柱穴覆土は濁暗灰～暗灰褐色砂質土を基本とする。建物の主軸方向や柱配置はSB454と類似する。建物敷地はSB453・454・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4017がSB454柱穴P4016より、南東隅柱がSB457柱穴より、それぞれ新しい。遺物は、P4031出土の第321図1380、P4025出土の1381を図化した。古墳時代前期の土師器球胴壺1380は、口縁部が長くのびる。須恵器坏蓋1381は口縁端部を鋭い嘴状に仕上げ、Ⅱ₃期に位置付けられる。他にP4002-03-07から土師器、須恵器片が、P4025・31から土師器甕片が出土した。また、柱根は、柱穴P4002から第322図1394、P4003から1395、P4017から1396、P4025から1397の柱根がそれぞれ出土した他、P4031に残欠を確認している。図化した柱根は、径10～18cmを測り、いずれも先端を2方向から突らしたマツ属複雑管束亜属の丸木材を用いる。

SB452 D-27区で復元した側柱構造と考えられる掘立柱建物(第318図)で、調査区外東側にのびる。建物主軸方位はN-17°Wを示し、桁行柱間寸法2.70m、梁行柱間寸法2.50mを測る。柱穴の平面形態は隅丸方形または不整形を呈し、P4062が長辺68cm、短辺54cm、深さ37cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とする。建物敷地はSB456・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4024がSB456柱穴より新しく位置付けられる。遺物は、P4024から土師器甕片が出土した。

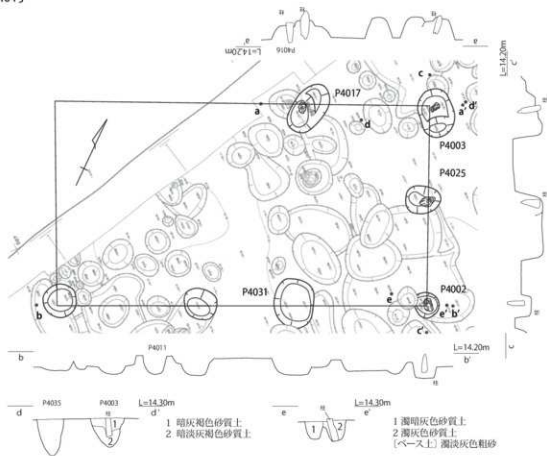
SB453 C・D-27区で復元した掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物主軸方位はN-26°Wを示し、1間のみ確認できた梁行の柱間寸法は2.10mを測る。柱穴P4001の平面形態は略円形を呈し、長径58cm、短径54cm、深さ22cmを測る。柱根は2柱穴が残存し、柱穴覆土は濁淡灰褐～暗灰褐色砂質土を基本とする。建物の主軸方向はSB451・454と類似する。建物敷地はSB451・454・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4001がP4018より新しい。遺物は、P4001からⅣ₁期と考えられる須恵器有台坏片の他、土師器甕、尖底形の製塩土器の小片が出土した。また、柱根は、P4001に第322図1398、P4009に1399が残存、1398が径17.4cmを測るサイカチ材、1399が径9.7cmを測るクリ材である。

SB454 C・D-26・27区で検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物

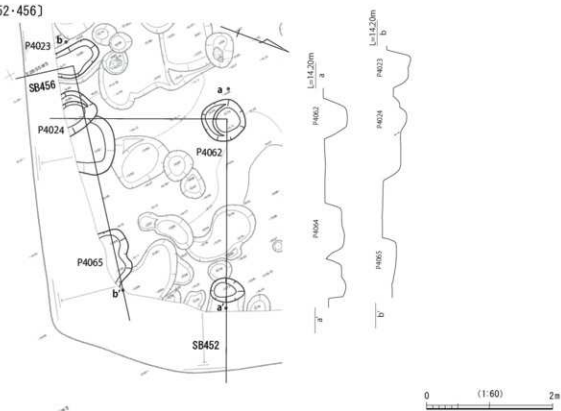


第317図 H地区 第1面平面図(S=1/80)

[SB451]

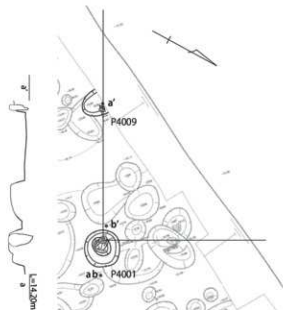


[SB452・456]

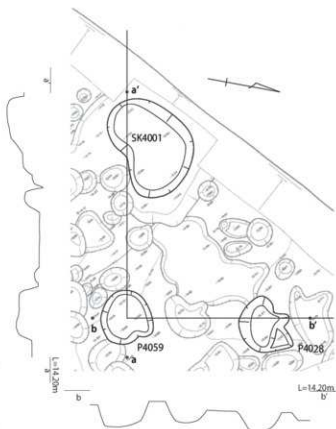


第318図 H地区 第IV面SB平面図・土層断面図1(S=1/60)

[SB453]

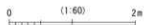
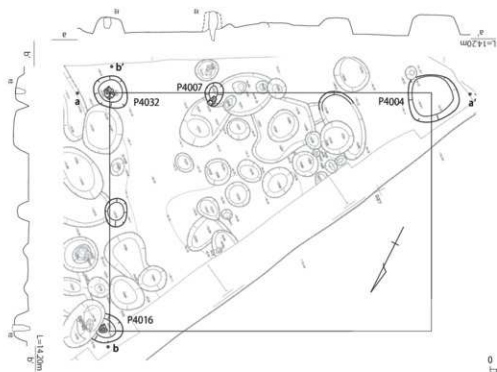


[SB455]



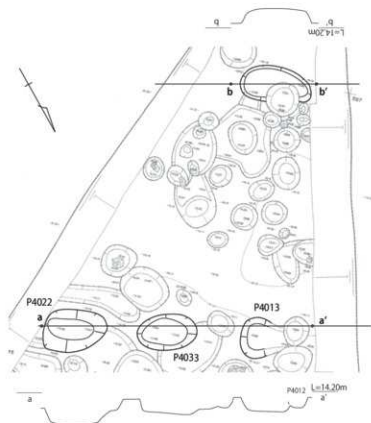
- 1 濃暗灰色砂質土(粘土ブロック混ざる)
- 2 黄上色粘土
- 3 濃暗灰色細砂(淡灰色細砂混ざる)
- 4 暗灰色細砂

[SB454]



第319図 H地区 第IV面SB平面図・土層断面図2(S=1/60)

[SB457]

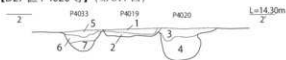


【D27区 P4006】(第317図)



1 濁淡褐色砂質土

【D27区 P4020等】(第317図)



- 1 暗灰色砂質土
- 2 淡乳灰色細砂
- 3 暗灰褐色砂質土
- 4 濁暗褐色砂質土
- 5 暗灰褐色砂質土(3層と同質土)
- 6 濁暗灰褐色砂質土(淡灰色細砂がブロック状に混ざる)
- 7 淡乳灰色粗砂

【C-D28区 P4028等】(第317図)



- 1 濁暗灰色砂質土
- 2 濁淡灰褐色砂質土
- 3 濁暗灰褐色砂質土(黄砂が混ざる)
- 4 濁暗灰色砂質土(3層が混ざる)
- 5 濁淡褐色砂質土
- 6 淡灰色細砂
- 7 暗灰色砂質土
- 8 濁淡灰色粗砂

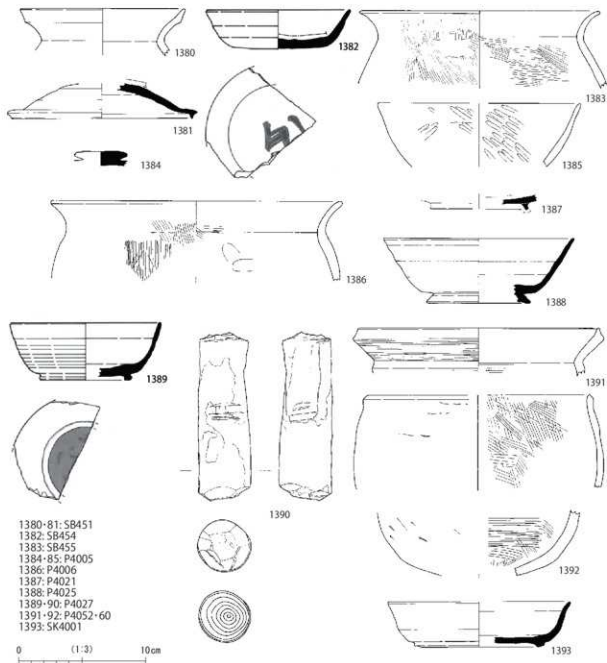


第320図 H地区 第IV面SB、ピット平面図・土層断面図(S=1/60)

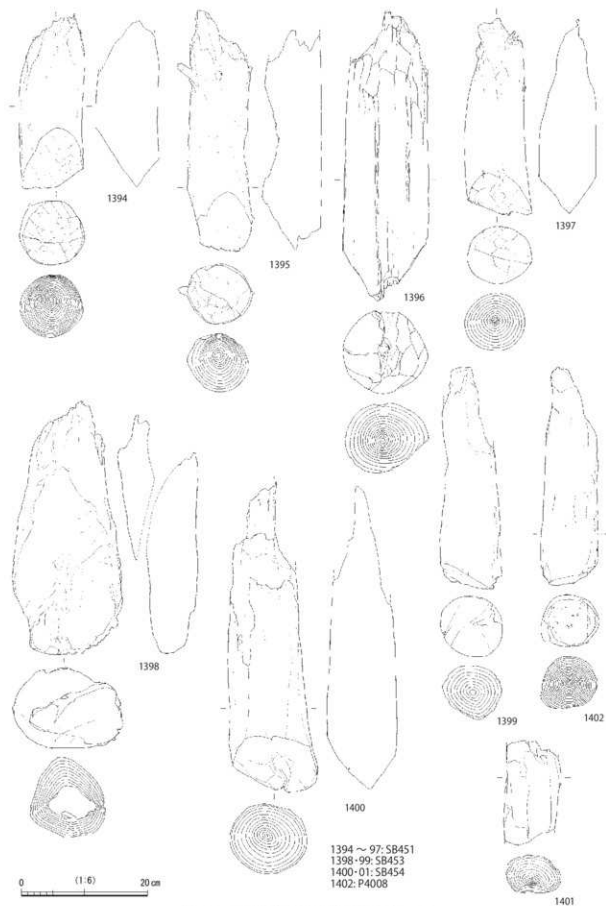
第71表 H地区 第Ⅱ面SB規模等一覧表

※ 柱間寸法は北端から南端柱迄、または東端から西端柱迄の順に記述。() は推定。

遺構名	BSNo.	アソビ石	柱構造	柱配置	柱間幅 (m)	軒行長 (m)	軒行間寸法 (m)	棟行長 (m)	棟間柱間寸法 (m)	主要方位	柱式の平面形制	柱型の名称	備 考
SB41	204	C-D-27	輻柱	3×2間	180	500	(南東) 210+120+210	360	(北東) 133+133	N-60° 東	不要西形	なし	P4017・P4024柱式P4026より新。南東端の柱式P4025柱式より新。
SB42	214	D-27	輻柱小	1×1-1-1間	-	220	(北) 270	220	(西) 220+	N-12° 西	隅丸方形 不要西形	なし	P4018・P4020柱式より新。
SB43	219	C-D-27	輻柱小	1×1-1-1間	-	-	-	220	(南) 220+	N-26° 西	隅丸方形 不要西形	なし	P4018・P4020柱式より新。
SB44	219	C-D-26-27	輻柱	3×2間	180	510	(南東) 170+120+120	370	(北東) 185+185	N-60° 東	不要西形	あり 3本	P4018・P4021柱式P4027より古。
SB45	219	C-D-27-28	輻柱小	1×1-1-1間	-	300	(南) 300+	220	(西) 220+	N-10° 西	不要西形	なし	P4018・P4022より新。P4020より古。
SB46	214	D-27	輻柱小	1×2-1間	-	-	-	300	(北) 130+130	N-30° 西	不要西形	なし	SB45柱式と同じより古。
SB47	200	D-27	輻柱	2×1-1間	-	-	(北東) 140+140+	400	-	N-60° 西	不要西形	なし	P4018・P4022より古。南端柱式P4025柱式より古。



第321図 H地区 第Ⅱ面出土遺物実測図1 (S=1/3)



第322図 H地区 第IV面出土遺物実測図2 (S=1/6)

主軸方位はN-66°Eを示し、桁行3間(5.10m)×梁行2間(3.70m)、床面積は約19㎡を測る。桁行の柱間寸法は1.70m等間、梁間の柱間寸法は1.85m等間で、柱筋の通りはよくない。柱穴の平面形態は不整形を呈するものが主体で、P4004が長辺80cm、短辺76cm、深さ30cmを、P4032が径約52cm、深さ23cmを測る。柱根はP4016等の3本が残存し、柱穴覆土は濁灰～暗灰色砂質土を基本とする。建物の主軸方向や柱配置はSB451と類似する。建物敷地はSB451・453・457と重複し、遺構の切り合い関係はP4016がSB451柱穴P4017より古く位置付けられる。遺物は、P4016出土の第321図1382、P4007出土の第322図1400、P4032出土の1401を図化した。須恵器無台坏1382は底部外面中央に太い筆使いで墨書するが、薄いため判読できない。IV₂前期～V₁期に位置付けられる。クリ材を用いた柱根1400は径13.4cmを測り、先端を2方向から加工する。柱根1401は欠損・腐朽が目立つ。他に、P4004・07から土師器、須恵器片が、P4016から土師器甕片、柱根残欠が出土した。

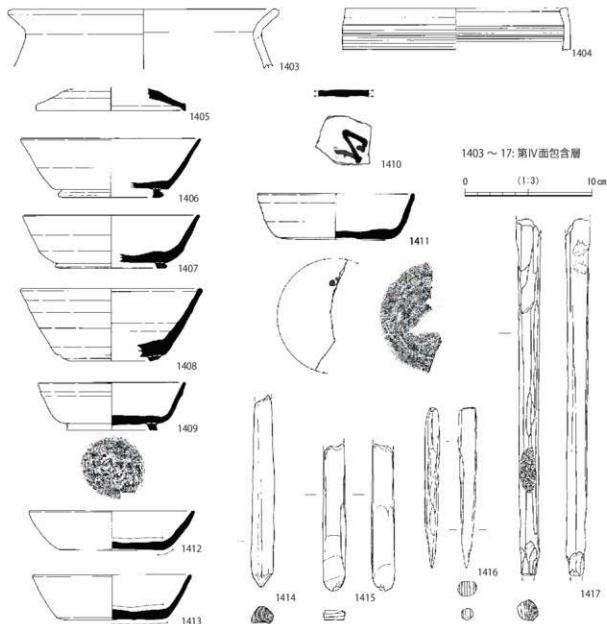
SB455 C・D-27・28区で復元した側柱構造と考えられる掘立柱建物で、調査区外西側にのびる(第319図)。建物主軸方位はN-10°Wを示し、桁行の柱間寸法3.00m、梁行柱間寸法2.20mを測る。柱穴の平面形態は不整形を呈し、P4028が長径86cm、短径58cm、深さ33cmを、P4059が長径86cm、短径82cm、深さ27cmをそれぞれ測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗褐色砂質土を基本とする。遺物は、P4028出土の土師器甕1383を図化した。1383は口径12.7cmを測り、細かい単位のハケ原体を用いる。他にP4028から須恵器甕、土師器甕の小片が出土した。

SB456 D-27区で復元した掘立柱建物で、調査区外南東側にのびる(第318図)。建物主軸方位はN-30°Wを示し、2間の梁行柱間寸法は1.50m等間を測る。柱穴の平面形態は不整形を呈すると考えられ、長径90cm前後、短径50cm前後、深さ22～39cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は暗灰色砂質土を基本とする。建物敷地はSB452・457と重複し、SB452柱穴P40241との切り合い関係から、SB452より古い建物となる。遺物は、P4023からII₃期と考えられる須恵器有台坏片や土師器甕片が出土した。

SB457 D-27区で桁行を検出した側柱構造の掘立柱建物で、調査区外にのびる(第320図)。建物主軸方位はN-60°Wを示し、北東側桁行の柱間寸法は1.60m等間である。柱穴の平面形態は不整形を呈し、長径70～98cm、短径58～68cm、深さ22～42cmを測る。柱根は残存せず、柱穴覆土は濁灰褐色砂質土、淡乳灰色粗砂を基本とする柱抜取埋土である。建物敷地はSB451・453・454・456と重複し、遺構の切り合い関係は南西側柱穴がSB451柱穴より古く位置付けられる。遺物は、P4013から土師器甕、P4022からII₃期と考えられる須恵器有台坏、土師器甕、P4033から須恵器、土師器、製塩土器の小片がそれぞれ出土した。

ピット 約90基のピットを検出しており、P4008・18・20・35・54等のように復元できなかった建物等構造物の柱穴を含むものとする。以下では、出土遺物について記す。

出土遺物は、第321図1384～1394、第322図1402を図化した。1384・85は、P4005から出土した。須恵器坏類蓋1384は径4.2cmを測る大型品である。非ロクロ成形の塊1385は、外面に粘土紐の積上げ痕を残す。P4006出土の土師器甕1386は口径23.0cmを測る。P4021出土の須恵器1387は有台盤脚部と考えられ、使用に伴う摩耗が目立つ。P4025出土の須恵器有台坏1388は、直線的に外傾する体部であり、II₃期に位置付けられる。P4027出土の須恵器有台坏1389は、ロクロひだが目立つ。底部外面を視面に転用し、V₂期に位置付けられる。また、1390は中央付近の樹皮に擦痕を残すことから、木鏝と考えられる。長さ13.1cm、径4.1cmを測る。P4052・60から1391・92が出土した。1391はロクロ土師器甕である。土師器甕1392は口径約17cmを測り、口縁部が直立する。胎土調整の類似性から図化した丸底の底部が接合する可能性をもつ。P4008出土の掘立柱建物柱根1402は樹皮を残したクリ材で、底面を平坦に仕上げる。他にP4035・52・54から柱根の樹皮のみが出土した。



第323図 H地区 第IV面出土遺物実測図3 (S=1/3)

SK4001 C-27区で検出し、2基の大型柱穴が重複している可能性が高い。長軸152cm、短軸134cm、深さ41～57cmを測り、覆土は暗褐色砂質土を基本とする。遺構の切り合い関係から、SK4002より新しく位置付けられる。出土遺物のうち、第321図1390の須恵器有台坏を図化した。扁平な1390は口径14.6cm、器高3.5cmを測り、底部外面に墨痕が残る。他にⅡ₃～Ⅲ期を中心とする須恵器有台坏、土師器甕、裂塩土器等の小片が出土した。

SK4002 C-27区で検出した平面不整形を呈する浅い落ち込みである。長軸約2m、短軸約1m、深さ13cmを測り、覆土は濁暗褐色砂質土である。少量の土師器甕片が出土した。

包含層出土遺物 第323図1403～17を図化した。非ロクロの土師器甕1403は口径21.2cmを測り、煮炊きに伴う煤・ヨグレが付着する。ロクロ成形の土師器甕1404は口径17.5cmを測り、口縁端部を平坦に仕上げる。1405～13は須恵器で、1405が坏蓋、1406～1409が有台坏、1410～13が無台坏となる。

1405は口縁端部を小さく折り曲げる。薄手の1406は底部内面にかすかに墨痕が残る。1407は台部の摩耗が目立つ。1408は狭い底部から体部が直線的に外傾する。1409は口径11.4cm、器高3.8cmを測り、焼成前にヘラ記号「×」を刻む。1410に大きく記された墨書土器は判読できない。1411は底部外面に墨痕が残る。1412は使用に伴う摩耗が目立ち、破片化後に被熱する。1413も摩耗が目立ち、口縁部外面に暗褐色を呈した灯明様の煤が付着する。1414～1417は加工材であり、1416の同形状の個体がE地区第Ⅲ-2面(127)で出土している。

小結 第Ⅳ面の調査成果から集落域が、G地区と同様に調査区外西側に延びることは確実である。検出・復元した掘立柱建物の変遷は、建物規模・主軸方位や、少ない出土遺物から保留部分を多く残すものの、第4章で記したG地区東群との連続性を重視して、ここでは集落1期がSB457からSB454に、集落2期がSB452、SB453、集落3期がSB451、SB456、集落4期がSB455と、それぞれ位置付けておく。

第72表 H地区 第Ⅳ面出土土器観察表

検出番号	番号	ブリード名	出土遺構	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	内径測定	外径測定	胎土	焼成	内装装飾	外装装飾	透輝率	備 考	調査者
130	130	29-1	溝4(1)P401	赤土ロクロ土器	壺	12.8	-	13.7	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ	03/34		401018
131	131	29-2	溝4(1)P402	赤土ロクロ土器	壺	15.0	-	12.5	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	内面黒色1層、外面黒色	401019
132	132	29-3	溝4(1)P403	赤土ロクロ土器	壺	11.2	8.0	3.1	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	内面黒色、外装黒色判別できず、口縁部黒色一帯黒色	401040
133	133	29-4	溝4(1)P404	赤土ロクロ土器	壺	18.7	-	18.7	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ハヤ	30×30ナデ、ハヤ	03/36	外面黒色	401020
134	134	29-5	P405	赤土ロクロ土器	壺	-	10.0	11.0	口縁部	口縁部	黒	灰	ナデ	30×30ナデ	-		401043
135	135	29-6	P406	赤土ロクロ土器	壺	10.0	-	10.0	口縁部	口縁部	黒	灰	ナデ	30×30ナデ	-		401044
136	136	29-7	P407	赤土ロクロ土器	壺	22.0	-	20.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ、ハヤ	01/28	外面黒色	401021
137	137	29-8	P408	赤土ロクロ土器	壺	10.0	-	10.0	口縁部	口縁部	黒	灰	ナデ	30×30ナデ	-		401044
138	138	29-9	P409	赤土ロクロ土器	壺	14.0	8.0	3.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	外面黒色	401040
139	139	29-10	P410	赤土ロクロ土器	壺	11.0	7.0	4.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	外面黒色、底面内装赤色に黒色判別	401040
140	140	29-11	P411	赤土ロクロ土器	壺	18.0	-	18.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ、ナデ	02/28		401045
141	141	29-12	P412	赤土ロクロ土器	壺	10.0	-	10.0	口縁部	口縁部	黒	灰	ナデ	30×30ナデ、ナデ	04/38	内面黒色一帯黒色	401043
142	142	29-13	溝4(1)P403	赤土ロクロ土器	壺	14.0	8.0	3.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	内面黒色、外装赤色に黒色判別	401040
143	143	29-14	溝4(1)P404	赤土ロクロ土器	壺	21.0	-	18.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	03/36	内面黒色、外装黒色	401020
144	144	29-15	溝4(1)P405	赤土ロクロ土器	壺	17.0	-	18.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ、ナデ	04/38		401040
145	145	29-16	溝4(1)P406	赤土ロクロ土器	壺	11.0	-	11.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	01/28		401040
146	146	29-17	溝4(1)P407	赤土ロクロ土器	壺	16.0	7.0	4.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ、ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	内面黒色一帯黒色	401040
147	147	29-18	溝4(1)P408	赤土ロクロ土器	壺	12.0	8.0	4.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	04/38	内面黒色	401040
148	148	29-19	溝4(1)P409	赤土ロクロ土器	壺	18.0	8.0	5.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	04/38	内面黒色	401040
149	149	29-20	溝4(1)P410	赤土ロクロ土器	壺	11.0	7.0	3.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	04/38	内面へラ付り「×」、外装黒色判別	401040
150	150	29-21	溝4(1)P411	赤土ロクロ土器	壺	12.0	-	12.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	04/38		401040
151	151	29-22	溝4(1)P412	赤土ロクロ土器	壺	12.0	-	12.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ	04/38		401040
152	152	29-23	溝4(1)P413	赤土ロクロ土器	壺	12.0	8.0	2.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	03/36	内面黒色判別、口縁部黒色、内装赤色に黒色判別	401040
153	153	29-24	溝4(1)P414	赤土ロクロ土器	壺	12.0	8.0	3.0	口縁部	口縁部	黒	灰	30×30ナデ	30×30ナデ、口縁部へラ付り痕ナデ	03/36	口縁部黒色、内装黒色、外装へラ付り痕ナデ	401040

第73表 H地区 第Ⅳ面出土木製品観察表

注：()は製作法推定を示す。

発掘 番号	番号	フリット号	出土遺構	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	形状 測定	備 考	観察番号	発掘番号
221	1300	3F	Q7-4	F407	木簡	12.1	10.5	-	-	志保丸太、一端に紐状突起	917A-07
222	1304	3F	Q7-3	38401(3402)	棺蓋	127.45	12.3	10.1	ヤシ葉編織管束蓋	志保丸太、一端を7方向から加工	918A-20
223	1305	3F	Q7-3	38401(3402)	棺蓋	126.11	12.1	9.5	ヤシ葉編織管束蓋	志保丸太、一端を7方向から加工	918A-21
224	1306	3F	Q7-3	38401(3402)	棺蓋	125.85	12.2	11.9	ヤシ葉編織管束蓋	志保丸太、一端を7方向から加工	918A-7
225	1307	3F	Q7-3	38401(3402)	棺蓋	121.85	12.6	9.1	ヤシ葉編織管束蓋	志保丸太、一端を7方向から加工	918A-22
226	1308	3F	Q7-1	38402(3402)	棺蓋	140.25	17.4	12.4	ヤシカサ	志保丸太、漆塗	918A-11
227	1309	3F	Q7-1	38403(3402)	棺蓋	124.45	9.7	9.5	ナシ	志保丸太、漆塗加工	918A-18
228	1400	3F	Q7-1	38404(3402)	棺蓋	149.25	12.4	11.9	ナシ	志保丸太、一端を7方向から加工	918A-9
229	1401	3F	Q7-3	38404(3402)	棺蓋	138.35	9.1	8.9	-	志保丸太、漆塗	917A-26
230	1402	3F	Q7-1	F408	棺蓋	124.21	9.9	2.2	ナシ	志保丸太、一端に紐状突起、縁部に小石付着	918A-8
231	1404	3F	Q-27-1	生活器	鍔か	114.85	1.8	1.4	-	分動釘、一端平直	917A-23
232	1405	3F	Q-27-1	生活器	加工材	114.45	1.8	0.7	-	分動釘、縁部平直、一端平直	917A-25
233	1418	3F	Q-27-1	生活器	加工材	12.8	1.5	1.1	-	分動釘、縁部平直、一端平直に加工	918A-13
234	1417	3F	Q-27-1	生活器	加工材	126.11	1.8	1.6	-	分動釘、縁部平直、一端平直ナシ	917A-24

第6章 自然科学的分析

1 分析の目的と試料

G・H地区は、他地区と同様に地下水位が高いことから、柱根を主体に多くの木製品が出土している。一般に木材は、花粉等の微化石と比較して移動性が低く、本遺跡近隣の森林植生の推定が可能であることに加え、出土木製品の樹種の分析からみた当時の木材の利用状況や流通の検討が可能となることから、平成17年度は(株)パレオ・ラボに、平成28年度は(株)古環境研究所に、それぞれ樹種同定分析の業務委託を行った。平成17年度に分析した135点の内訳はD地区25点、F地区79点、G地区31点、また平成28年度に分析した60点の内訳はG地区46点、H地区10点、J・I地区4点を数え、G地区で77点、H地区で10点の樹種同定を実施したこととなる。本章では、第2～4項で平成28年度に委託実施した第VI-1面(弥生時代後期後半以降)から第0-I面(16世紀後半～17世紀)の柱根、杭、齋串、加工材、漆皿等の分析結果を、出土地点や遺物番号等を一部補足したうえで掲載する。また、平成17年度実施の分析結果は調査報告書Ⅳに掲載済みであるが、G・H地区出土木製品について第75表に再掲載するとともに、第76表で時代・器種別の数量を示した。結果として、第4節の(株)古環境研究所による所見とはほぼ同じ様相となる。なお、材組織標本は、石川県埋蔵文化財センターにて保管している。

2 分析方法

樹種同定の方法は、次のとおりである。各木製品の木取りを観察した後、剃刀を用いて試料から新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柎目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。また、同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

3 分析結果

第74表に結果を示し、各分類群の基本三断面の写真を第324～327図に示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

(1) マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyylon* マツ科 第324図上段写真No1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管、垂直・水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急である。放射柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。以上の特徴からマツ属複雑管束亜属に同定される。マツ属複雑管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、いずれも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材はいずれも水湿によく耐え、広く用いられる。

(2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 第324図中・下段写真No2, 3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高である。以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

(3) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第325図上・中段写真No4, 5

年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少し、晩材部では小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。以上の特徴からクリに同定される。クリは北海道西南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20m、径0.4mぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性・保存性が高く、水湿によく耐える材で、現在では建築、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、ほだ木など広く用いられる。

(4) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第325図下段写真No6

小型でやや角張った道管が単独あるいは2～3個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。放射組織はほぼ同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。以上の特徴からブナ属に同定される。ブナ属にはブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する落葉高木である。通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ35m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ肌目が緻密であるが保存性は低い。容器などに用いられる。

(5) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第326図上段写真No7

中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ強韌で耐湿性も高く、特に農耕具に用いられる。

(6) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 第326図中段写真No8

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔部部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁には、らせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の方形細胞の中には大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する落葉高木で、通常高さ20～25m、径0.6～0.7mぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強韌で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

(7) サイカチ *Gleditsia japonica* Miq. マメ科 第326図下段写真No9

年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは2～3個不規則に複合して並ぶ環孔材である。道管の径は早材から晩材にかけて緩やかに減少し、孔部部外では2～多数、団塊状に複合して散在する。孔部の幅は広く、軸方向柔細胞は晩材部で帯状に配列する傾向を示す。道管の穿孔は単穿孔である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性放射組織型で1～10細胞幅であるが、不完全な鞘細胞を持つものが存在する。以上の特徴からサイカチに同定される。サイカチは本州、四国、九州に分布する落葉高木で、高さ15m、径1mに達する。材はやや重硬で、建築、器具などに用いられる。

(8) ツゲ *Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* Rehd. et Wils. ツゲ科 第327図上段写真No10

小型でやや角張った道管がほぼ単独に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少ない。放射組織は異性放射組織型でほとんどが1～2細胞幅である。以上の特徴からツゲに同定される。イヌノキは関東以西の本州、四国、九州に分布する常緑高木で、

第74表 出土木製品樹種同定結果一覧表1(平成28年度実施分)

分析番号	種類	標本番号	番号	実測番号	測定地	形状	区	出土遺構	木種名	所属時期	結果(学名/和名)		
1	杵類	62	26	H0605-15	伏	G-O-1	F-21-2	P1063	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
2	杵類	50	24	H0605-16	伏	G-O-1	F-22-3	SA002(P1066)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
3	杵類	47	23	H0605-17	伏	G-O-1	F-20-2	F-S009(P1066)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
4	杵類	47	1	H0605-18	伏	G-O-1	F-20-1	F-S009(P1067)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
5	杵類	47	7	H0605-19	伏	G-O-1	F-23-2	SB065(P1067)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
6	杵類	48	8	H0605-20	伏	G-O-1	F-22-2	SB065(P1067)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
7	杵類	47	5	H0605-21	伏	G-O-1	F-21-1	SB065(P107)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
8	杵類	44	23	H0605-22	伏	G-O-1	F-31-4	P1055	ミナ	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
9	杵類	48	10	H0605-23	伏	G-O-1	G-21-1	SB066(P1100)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
10	杵類	48	14	H0605-24	伏	G-O-1	F-25-2	SB066(P1069)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
11	杵類	47	3	H0605-25	伏	G-O-1	F-20-1	F-S009(P1069)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
12	杵類	64	72	H0605-26	伏	G-O-1	F-25-3	P1055	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Gleditsia japonica</i> Miq.	ヤイカサ
13	杵類	47	4	H0605-27	伏	G-O-1	F-22-3	SB065(P106)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
14	杵類	49	15	H0605-28	伏	G-O-1	G-25-1	SB17(P106)	ミナ	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
15	杵類	50	23	H0605-29	伏	G-O-1	G-23-3	SA002(P1110)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
16	杵類	48	9	H0605-30	伏	G-O-1	F-23-2	SB065(P112)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
17	杵類	57	50	H0605-31	伏	G-O-1	E-36	SK000(SE003)取上F2)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
18	杵類	57	49	H0605-32	伏	G-O-1	E-36	SK000(SE003)取上F2)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
19	杵類	57	51	H0605-33	伏	G-O-1	E-36	SK000(SE003)取上F2)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
20	杵類	56	52	H0605-34	伏	G-O-1	E-36	SK000(SE003)取上F2)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
21	杵類	57	48	H0605-35	伏	G-O-1	E-36	SK000(SE003)取上F2)	ミナ	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
22	杵	55	53	H0605-37	伏	G-O-1	F-23-3	SE001 榭燐	ミナ	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
23	杵	102	290	H16-5-114-1	伏	G-墓1	G-22	H060001(黒褐色色粉)	ミナ	縄文前期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
24	杵類	106	844	H16-6-15	伏	G-墓2	G-22-3	SA005(P1067)	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
25	杵類	106	855	H16-6-16	伏	G-墓2	F-22-2	P1055	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
26	杵類	106	856	H16-6-17	伏	G-墓2	F-22-2	P1055	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
27	杵小	-	-	H16-6-24	伏	G-墓2	G-25	H060001(古土北層部出土(灰褐色色粉)	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
28	杵	140	618	H16-6-25	伏	G-墓2	G-25	H060001(古土北層部)	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭
29	杵	140	610	H16-6-26	伏	G-墓2	F-21-2	H060001(古土北層部)	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
30	杵	140	615	H16-6-28	伏	G-墓2	F-25	H060001(古土北層部)	ミナ	縄文中期	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ
31	瓦片類	106	865	H16-6-31	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(1) 内側	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
32	杵	200	880	H16-6-39	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(4)(南東側)	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
33	漆器	201	892	H16-6-41	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
34	漆器	201	893	H16-6-42	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
35	漆器	201	894	H16-6-43	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
36	漆器	201	896	H16-6-44	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
37	漆器	201	895	H16-6-45	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
38	漆器	201	897	H16-6-46	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Pinus mitis</i> Sieb. et Zucc. var. <i>japonica</i> K. et W.	ツツ	
39	加工材	201	898	H16-6-47	伏	G-墓2	G-22-1	SE000(5) 漆	板目取	縄文中期	<i>Calycarpus</i>	ムラサキシブツ属	
40	漆器	201	899	H16-6-48	伏	G-墓2	G-22-1	SE000	板目取	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
41	加工材	201	900	H16-6-49	伏	G-墓2	G-22-1	SE000	板目取	縄文中期	<i>Calycarpus</i>	ムラサキシブツ属	
42	加工材	-	-	H17-6-18	伏	G-V	E-25	榭燐上(褐色炭)	板目取	古墳時代中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
43	加工材	238	1120	H17-6-3	伏	G-V	E-25	榭燐上(褐色炭)	1/4ン取り	古墳時代中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
44	加工材	238	1114	H17-6-4	伏	G-V	E-25	榭燐上(褐色炭)	1/4ン取り	古墳時代中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
45	加工材	238	1119	H17-6-5	伏	G-V	E-25	榭燐上(褐色炭)	1/4ン取り	古墳時代中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
46	加工材	-	-	H17-6-2	伏	G-V	F-26-2	バースA-硝化燐	1/4ン取り	古墳時代中期	<i>Ostrya japonica</i> C. Yab.	コナラ属アケボノ科属	
47	漆器類	211	1300	H16-6-40	伏	H-O-1	D-26-3	SK000	榭燐取	縄文中期	<i>Panus</i>	ナツ属	
48	杵類	211	1305	H16-6-10	伏	H-O-1	D-28-1	榭燐炭土層	板目取	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
49	杵類	322	1306	H16-6-11	伏	H-墓2	D-27-1	SB053(P1000)	板目取	縄文中期	<i>Gleditsia japonica</i> Miq.	ヤイカサ	
50	杵類	322	1306	H16-6-7	伏	H-墓2	C-27-2	SB053(P1007)	板目取	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
51	杵類	322	1300	H16-6-8	伏	H-墓2	D-27-1	SB053(P1000)	板目取	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
52	杵類	322	1302	H16-6-9	伏	H-墓2	D-27-1	P1000	板目取	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
53	杵類	322	1300	H16-6-19	伏	H-墓2	D-27-1	SB053(P1000)	板目取	縄文中期	<i>Castanea cretata</i> Sieb. et Zucc.	ナリ	
54	杵類	322	1304	H16-6-20	伏	H-墓2	D-27-3	SB053(P1000)	板目取	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
55	杵類	322	1307	H16-6-22	伏	H-墓2	D-27-3	SB053(P1005)	板目取	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
56	杵類	322	1305	H16-6-23	伏	H-墓2	D-27-3	SB053(P1000)	板目取	縄文中期	<i>Pinus ssp.</i> , <i>Dalmanella</i>	マツ属類群木炭	
57	漆器	-	-	H16-6-2	伏	J-I	D-30	SK000	榭燐取	縄文中期	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ	
58	漆器	-	-	H16-6-4	伏	J-I	D-30	SK000	榭燐取	縄文中期	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ	
59	漆	-	-	H16-6-6	伏	J-I	D-30	SK000	榭燐取	縄文中期	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ヒノキ	
60	漆器	-	-	H16-6-5	伏	I-I	D-32	SK000	榭燐取	縄文中期	<i>Acer</i>	ホノムシ属	

高さ10m、径0.4m程度に達する。粘りが強く耐朽性・保存性の高い材で、器具、楽器、彫刻、櫛などに用いられる。

(9) カエデ属 *Acer* カエデ科 第327図中段写真No.11

小型で丸い道管が主に放射方向に2～3個複合して散在する散孔材である。木繊維の壁厚の違いにより、木口面において不規則な模様が見られる。道管の穿孔は単穿孔であり、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織で1～6細胞幅である。以上の特徴からカエデ属に同定される。カエデ属にはイタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の特徴からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。カエデ属は北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性・保存性が中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

(10) ムラサキシキブ属 *Callicarapa* クマツヅラ科 第327図下段写真No.12

小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互壁孔は極めて小型で密である。放射組織は単列部が長い異性放射組織で、1～3細胞幅である。以上の特徴からムラサキシキブ属に同定される。ムラサキシキブ属には、ヤブムラサキ、ムラサキシキブなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉ないし常緑の低木から小高木である。材は硬く、器具材、箸、木釘などに用いられる。

4 所 見

平成28年度に実施した同定の結果、マツ属複維管束亜属27点、クリ15点、スギ8点、ケヤキ2点、サイカチ2点、ムラサキシキブ属2点、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属、ツゲ、カエデ属が各1点であった。

器種別に見ると、柱根33点ではマツ属複維管束亜属22点で最も多く、次いでクリ9点、サイカチ2点であり、杭(杭かを含む)7点ではクリ5点、マツ属複維管束亜属1点、スギ1点であった。また、齋申5点、井戸側板1点、箸1点はいずれもスギであった。加工材7点ではマツ属複維管束亜属4点、コナラ属アカガシ亜属1点、ムラサキシキブ属2点であった。錐柄ではクリ1点であった。漆皿2点はいずれもケヤキで、漆器椀1点はブナ属、漆器椀1点はカエデ属であった。横櫛1点はツゲであった。

最も多いマツ属複維管束亜属は柱根、杭、加工材に使われている。マツ属複維管束亜属は針葉樹の中では重硬な材で、水湿にもよく耐え腐りにくく、土木材や建築材などに適している。次いで多いクリは柱根、杭(杭の可能性をもつ個体を含む)、錐柄に使われている。クリは重硬で耐朽性・保存性が極めて高く、水湿によく耐える材であり、建築材や土木材に適している。スギは齋申、井戸側板、杭、箸に使われている。スギは木理通直で加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。コナラ属アカガシ亜属は加工材に使われている。コナラ属アカガシ亜属は重硬かつ強靱な材で、弥生時代以降、西南日本では主に農耕土木具に多用されている。ケヤキ、ブナ属、カエデ属は椀や皿の漆器に使われている。ケヤキ、ブナ属、カエデ属はいずれも概して重硬な材である。古墳時代末以降、北陸地方ではケヤキやブナ属は椀や皿などの挽物容器によく用いられるが、カエデ属の利用は少ない。なお、ケヤキ、ブナ属、カエデ属の漆器椀は石川県鳳珠郡穴水町白山橋遺跡(鎌倉時代～江戸時代初期)からも出土している。サイカチは柱根に使われている。サイカチはやや重硬で切削加工はやや困難であるが、耐朽性が高く割裂しにくい材であり、建築材や土木材に用いられる。なお、石川県では本遺跡(古墳時代末～平安時代初頭)や、羽咋郡志賀町館開野遺跡(室町時代前半)からサイカチの柱材が出土している。ツゲは櫛に使われて



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.1. マツ属複雑管束亜属 番号20 柱根 4次 番号52(016特3-34) G地区0-I面 E-26区SK1003(SE1013)取上げ⑥



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.2. スギ 番号31 井戸側板 番号865(016木-34) G地区IV面G-22-1区 SE4001西-1

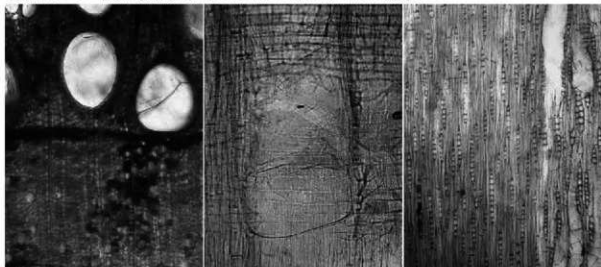


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.3. スギ 番号32 杭 番号880(016木-39) G地区IV面G-22-1区 SE4001杭4

第324図 出土木製品樹種同定分析木材写真1



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.4. クリ 番号22 杭 番号37 (H16特3-37) G地区O・I面G-23区 SE1011 楠強杭



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.5. クリ 番号26 柱根 番号858 (H16木-17) G地区IV面E-22-4区 P4223

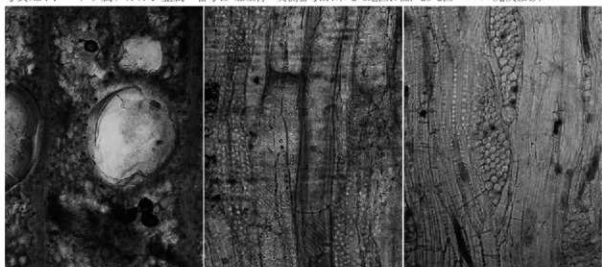


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.6. ブナ属 番号47 漆器桶 番号1300 (H16木-40) H地区O・I面 SK1001

第325図 出土木製品樹種同定分析木材写真2



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.7. コナラ属アカガシ亜属 番号46 加工材 実測番号H17木-2 G地区IV面F-26-2区 ベース(暗灰細砂)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.8. ケヤキ 番号57 津皿 実測番号H16-木6-2 6次J地区I面D-30区 SK1003



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 写真No.9. サイカチ 番号12 柱根 番号61(H16特3-26) G地区・I面F-25-3区 P1035

第326図 出土木製品樹種同定分析木材写真3



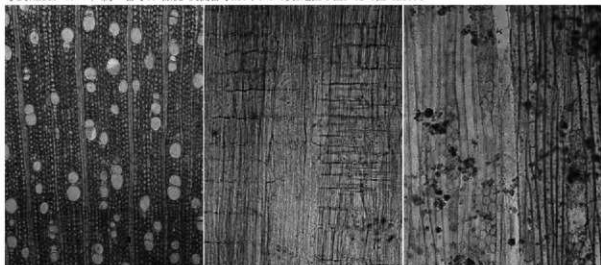
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

写真No.10. ツゲ 番号38 横断 番号897 (H16木-46) G地区IV面G-22-1区 SE4001第6層



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

写真No.11. カエデ属 番号60 漆輪 実測番号H16木6-5 6次I地区I面D-32-3区 SK1004



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

写真No.12. ムラサキシキブ属 番号39 加工材 番号898 (H16木-47) G地区IV面G-22-1区 SE4001第5層

第327図 出土木製品樹種同定分析木材写真4

第75表 出土木製品樹種同定結果一覧表2(平成17年度実施分)

分析番号	種別	検出番号	番号	実測番号	測定方法	種	区	出土遺構	採取年	所蔵時期	結果(学名/科名)	
51	櫛	71	172	H15-8-51	1次	G-0-1	F-21-3	包漆層(制作上表下)	痕目	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
71	枳殻	49	21	H15-8-71	1次	G-0-1	F-23-3	SA08(P109)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
72	枳殻	50	27	H15-8-72	1次	G-0-1	E-25-2	SA05(P101)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
73	枳殻	58	36	H15-8-73	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Sellea serrata</i> Makino	ササキ
85	枳殻	50	26	H15-8-85	1次	G-0-1	E-25-2	SA05(P100)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
94	枳	49	18	H15-8-94	1次	G-0-1	F-26-1	SH20(P105)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
102	枳小	50	25	H15-8-102	1次	G-0-1	F-23-1	SA08(P105)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
103	加工材	49	17	H15-8-103	1次	G-0-1	F-26	SH20(P108)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
104	枳	57	45	H15-8-104	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)R.L1(F)	分製材	16世紀~17c	<i>Quercus subsp. Quercus sect. Prina</i>	コナラ類
105	枳	57	46	H15-8-105	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
106	枳殻	49	19	H15-8-106	1次	G-0-1	F-26-1	SH20(P105)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
107	枳殻	49	16	H15-8-107	1次	G-0-1	F-25-2	SH17(P108)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Quercus subsp. Quercus sect. Prina</i>	コナラ類
109	漆器残片	55	30	H15-8-109	1次	G-0-1	F-23-3	SE009	痕目	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
112	枳殻	49	22	H15-8-112	1次	G-0-1	F-23-1	SA08(P107)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
113	枳殻	58	53	H15-8-113	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)R.L1(F)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
114	枳	102	200	H15-8-114	1次	G-0-1	G-22	内庫300(新)茶灰色漆層	分製材	16世紀以前	<i>Quercus subsp. Quercus sect. Prina</i>	コナラ類
115	枳殻	57	47	H15-8-115	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)R.L1(F)	分製材(半製)	16世紀~17c	<i>Elms</i>	ニレ属
116	枳殻	55	30	H15-8-116	1次	G-0-1	E-25-2	SE002(漆土層/内)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Elms</i>	ニレ属
117	枳	62	82	H15-8-117	1次	G-0-1	G-23-2	P122	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
118	枳殻	48	13	H15-8-118	1次	G-0-1	F-23-2	SH06(P111)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
119	枳小	58	55	H15-8-119	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
120	枳	102	261	H15-8-120	1次	G-0-1	G-22	内庫300(新)茶灰色漆層	芯持ち	16世紀頃	<i>Juglans mandchurica</i> Maxim. subsp. <i>Sibiricola</i> (Maxim.) Kitamura	イヌブナ
122	枳	55	38	H15-8-122	1次	G-0-1	G-23-1	SE011	分製材	16世紀~17c	<i>Quercus subsp. Quercus sect. Prina</i>	コナラ類
124	漆器残片	55	30	H15-8-124	1次	G-0-1	F-23-3	SE009	痕目	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
125	漆器残片	41	47	H15-8-125	1次	G-0-1	F-24-1	P108	痕目	16世紀~17c	<i>Sellea serrata</i> Makino	ササキ
126	枳殻	49	20	H15-8-126	1次	G-0-1	F-27-1	SH20(P108)	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
127	枳殻	62	81	H15-8-127	1次	G-0-1	F-26-1	P120	芯持ち	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ
128	漆材	58	54	H15-8-128	1次	G-0-1	E-26	SK003(SE003)R.L1(F)	分製材	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
129	加工材	61	71	H15-8-129	1次	G-0-1	E-26-3	P108	痕目	16世紀~17c	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
130	枳殻	62	80	H15-8-130	1次	G-0-1	F-26-1	P120	分製材	16世紀~17c	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	クリ

第76表 G・H地区出土木製品樹種同定結果一覧表

種別	樹種	年代・層位					
		単位1-1面 弥生後期~古墳前期	単位5面 古墳中期	単位6面 8~9c末	単位11面 10c中葉頃	単位0-1面 16c後半~17c	
枳殻	針葉樹	スギ				3	
		マツ属残葉管束系属			4	18	
	クワ			6	14		
	広葉樹	ケヤキ					1
		コナラ類					1
サトウチ				1		1	
ニレ属					2		
加工材	針葉樹	スギ				3	
		マツ属残葉管束系属		4			
	広葉樹	コナラ属アカガシ系属	1				
		ムウサキシキブ属				2	
		スギ				1	
枳	針葉樹	マツ属残葉管束系属			1		
		オニダルミ				1	
	クワ			3	1	2	
	コナラ類					1	
	2						
植物	針葉樹	スギ				2	
植物	針葉樹	スギ				1	
漆器残片	広葉樹	ケヤキ				1	
	広葉樹	ブナ属				1	
積層	広葉樹	ツゲ		1			
漆材	広葉樹	クワ		1			
高木	針葉樹	スギ		5			
計			1	4	25	3	50

いる。ツゲは重硬かつ緻密なうえ、狂いが少ない材であり、現在でも櫛に用いられる。ムラサキシキブ属は加工材に使われている。ムラサキシキブ属は重硬かつ緻密な材である。

以上から、同定した柱根、杭、加工材などには、概して重硬で耐朽性・保存性が高いマツ属複雑管束亜属やクリが多用されているほか、数は少ないが柱根にはやや重硬で耐朽性が高いサイカチが使われている。また、竈串、備板、杭、箸には木理通直で加工工作が容易なスギが使われ、椀や皿の漆器、横櫓、錐柄にはいずれも概して重硬な広葉樹が使われている。本遺跡で同定された樹種はいずれも温帯に分布するものばかりであり、当時の遺跡周辺か周辺地域から流通によってもたらされたと考えられる。

(参考文献)

- 伊東隆夫・山田昌久 2012「木の考古学 出土木製品用材データベース」海音社、A49p。
 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」[木材の構造]文永堂出版、p.20-48。
 佐伯浩・原田浩 1985「広葉樹材の細胞」[木材の構造]文永堂出版、p.49-100。
 島地謙・伊東隆夫 1988「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣、296p。
 バリノ・サーヴェイ 2005「館開野開遺跡の自然科学分析」[志賀町館開野開遺跡]（財）石川県埋蔵文化財センター、p.103-114。
 松田隆嗣 1987「西川島遺跡群より出土した木製遺物の樹種について」[西川島 能登における中世村落の発掘調査]穴水町教育委員会、p.662-670。
 光谷拓実 1989「木製品」[平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告]奈良国立文化財研究所学報第 46 冊、奈良国立文化財研究所、p.111-119。
 三村昌史 2006「1・2次調査出土木製品の樹種同定」[羽咋市四柳白山下遺跡Ⅱ]石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター、p.182-198。
 山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物間関係史－」[植生史研究特別第 1 号]植生史研究会、242p。

第7章 総括

第1節 G地区第Ⅲ面の存続年代について

G地区第Ⅲ-1・2面は、ベース土を土石流災害3(河跡3001(古))で堆積した土砂層、また直上の被覆土が土石流災害2(河跡3001(新))で堆積した土砂層となる生活面であり、主に耕作地(第Ⅲ-1面・畠地、第Ⅲ-2面・水田・畠地)に利用されるため、第Ⅳ面に伴う須恵器、土師器を除けば、出土遺物は限られる。そのため、南接するF地区第Ⅲ面出土遺物を含めて、その存続年代を整理したい。

G地区の出土遺物(第328図)については、第Ⅳ面がⅥ₂期を下限とし、第1次以降の第Ⅳ面調査でも施軸陶器は共伴しない。G地区第Ⅲ-2面は、内黒調整のロクロ土師器埴類と須恵器埴類の様相が、中能登町武部ショウブタ遺跡5号土坑出土遺物³⁰⁾と並行する部分が多いことからⅥ₃期に位置付けられる。また、第Ⅲ-1面は、須恵器埴類の欠落や内黒調整のロクロ土師器埴比率の減少、ロクロ土師器有台埴に足高台が定量認められる様相から、Ⅶ₁期に下る要素をもつ。

南接するF地区第Ⅲ面は、G地区と同様の土層堆積を示し、G地区第Ⅲ-2面に対応する下層が側柱構造の獨立柱建物を主屋とする建物域に、G地区第Ⅲ-1面と連続する上層は条里地割りを想起させる畠地に利用される。F地区第Ⅲ面出土の須恵器、土師器は、SD294出土の内黒のロクロ土師器(報告書Ⅳ第266図480、Ⅶ_{2(古)}期)以外は、前述のG地区と同じ様相を示し、搬入品として白磁碗Ⅰ類1点、緑軸陶器埴2点、灰軸陶器埴6点、Ⅲ6点、Ⅲ1点が出土する。緑軸陶器205は淡灰色を呈する須恵質の胎土に淡オリーブ灰色の釉を薄くロクロ掛けする特徴をもち、摩滅した軟陶の平高台の埴25とともに京都産と考えられ、灰軸陶器より古く位置付けられる。灰軸陶器は、淡灰色を呈する胎土から東濃産と考えられ、体部外面下半に丁寧な回転ケズリ調整を施す点、内外面とも釉をツケ掛ける点、焼成時の直接重ね焼き痕を残す点で共通し、小埴723、Ⅲ726は上部の貼り付けが若干雑である。灰軸陶器は、おおむね斎藤孝正氏のK-90並行期後葉～0.53並行期前半(光ヶ丘1号窯式後半期～大原2号窯式前半期)の様相を示し、畿内の編年観では10世紀前後～中葉の暦年代が与えられる³¹⁾。

磁器、施軸陶器の搬入・所有に関しては、能登国衙を介した在地有力者層の二次的入手・再分配や、荘園・市を介した中央からの直接入手等、様々な状況が想定可能である。また、廃棄の様相に関しても、施軸陶器・在土器とも複数の型式が混在しながら出土する様相が指摘されている³²⁾。在地の土器とは異なる、磁器・施軸陶器の入手・使用～廃棄のサイクル期間という、大きな課題を残すものの、F地区第Ⅲ-2面の建物域に伴う可能性が高い搬入品を根拠として、Ⅵ₃期～Ⅶ₁期初め頃に位置付けた第Ⅲ-2面に10世紀前葉を中心とし、10世紀中頃を下限とする暦年代観を設定したいと考える(第77表)。

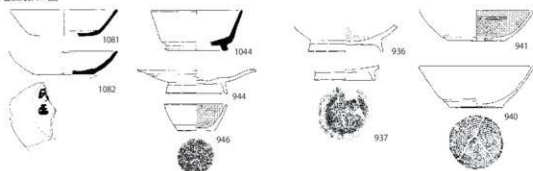
第77表 加賀・能登の在地形式の編年と暦年代対比表

暦年代	田嶋明人 (2012)	出越茂和 (1997a・b)	望月精司 (2008-10)
750	Ⅲ期 (新)		4A期(Ⅲ期新 ～Ⅳ ₁ 期(古))
	Ⅳ ₁ 期	上瓦屋1期(Ⅳ ₁ 古期)	4B期(Ⅳ ₁ 期(古))
800	Ⅳ ₂ 期(古)	上瓦屋2期(Ⅳ ₂ 期(古))	5A期(Ⅳ ₂ 期(新))
	Ⅳ ₃ 期(新)	上瓦屋3期(Ⅳ ₃ 期(新))	5B期(Ⅴ ₁ 期)
850	Ⅴ ₁ 期	I-1期(Ⅴ ₁ 期)	5C期(Ⅴ ₁ 期)
	Ⅴ ₂ 期	I-2・3期(Ⅴ ₂ 期)	6A期(Ⅵ ₁ 期)
900	Ⅵ ₁ 期	I-3・4期(Ⅵ ₁ 期)	6B期(Ⅵ ₁ 期)
	Ⅵ ₂ 期	Ⅱ-1期(Ⅵ ₂ 期)	6C期(Ⅵ ₂ 期)
950	Ⅵ ₃ 期	Ⅱ-2古期(Ⅶ ₁ 期)	6C期(Ⅵ ₂ 期)
	Ⅶ ₁ 期	Ⅱ-2新・3期 (Ⅶ ₁ 期(古))	7A期(Ⅶ ₁ 期)
1000	Ⅶ ₂ 期(古)		7B期(Ⅶ ₂ 期(古))
	Ⅶ ₃ 期(新)	Ⅲ-1・2期(Ⅶ ₃ 期(新))	7C期(Ⅶ ₃ 期(新))
1050	中世Ⅰ-1期	Ⅳ-1期(中世Ⅰ-1期)	8A期(中世Ⅰ-1期)
			8B

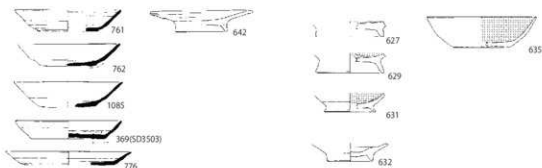
(1) 田嶋明人(2012)より転載

なお、第2節で評述するが、旧邑知湯周辺では、おおむねⅥ₃期以降、数点～20点程度の施軸陶器が出土する新たな集落遺跡が増加する。これらの集落遺跡の多くの部分は、名田経営をおこなう「富豪」、「田堵」、「負名」といわれた新たな富裕百姓層の屋敷地と考え、F地区第Ⅲ面下層も類するものであろう。

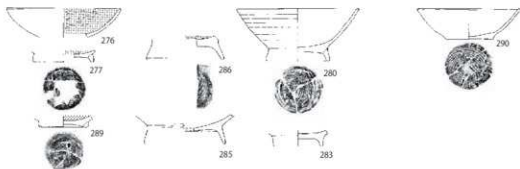
G地区第Ⅳ面



G地区第Ⅲ-2面包含層他



G地区第Ⅲ-1面上層包含層



F地区第Ⅲ面

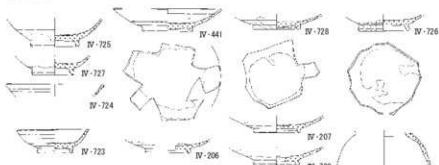
白磁碗 (I類)



緑釉陶器



灰軸陶器



G地区第0・I面



第328図 F・G地区 第Ⅲ・Ⅳ面出土土器実測図(S=1/5)

第2節 G・H地区の変遷

G・H地区は、本遺跡の立地する小規模な合成扇状地形の中心線付近にあたる。G地区中央付近を土石流災害の本流の一つ(通常は水無川か)が横断することや、扇状地形が北側の傾斜に転ずることに起因して、土砂の堆積作用が顕著であり、第1～7次調査の中で最も多い調査面(生活面)を確認した調査区となる。G地区でみれば、土層断面模式図(第329図)を示したとおり、最下層の第Ⅵ-2面(縄文時代中期～後期前葉)から最上層の第0-I面(16世紀後半～17世紀代)まで合計10面の調査面(生活面)と、その間に発生し、集落、耕作地の盛衰に多大な影響を及ぼした、8回の土石流災害痕跡を確認したこととなる。最下層の調査面(生活面)から調査着手前の水田面までの堆積層の厚さは約4mに達する。さらにG地区第Ⅵ-3面、第Ⅴ面、第Ⅳ面～第Ⅲ-1面や第0-I面では、各調査面(生活面)における遺構の変遷(小期)を、第5章各節で復元している。なお、G地区第Ⅲ-2面、第Ⅵ-2面、第Ⅶ-1面の3つの生活面と、第Ⅶ-1面、第Ⅵ-2面の間で発生した小規模な土石流災害痕(第Ⅵ-3面:土石流災害7)は新たに確認したものとなる。H地区は調査区面積の制約から、最上層の第0-I面～第Ⅳ面までの調査にとどめている。

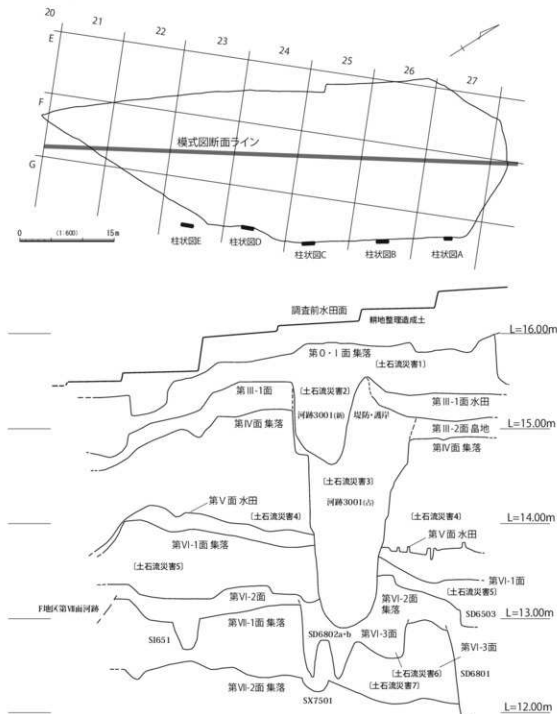
以下では、第3～5章と重複する部分もあるが、南側のC・D・F地区の調査成果を交えて、最下層の第Ⅶ-2面から順に、G・H地区の調査面(生活面)、遺構の変遷を整理する。

第Ⅵ-2面 G地区で検出した縄文時代中期～後期前葉を中心とする生活面であり、主な遺構は土坑2基、ピット等に限られ、集落域でも縁辺の様相を呈する(第330図)。また、遺物包含層から前期中葉(朝日C式)、中期前葉(新保式～新崎式)、後期前葉(前田式～気屋式)、後期中葉(酒見式)の土器片が出土している。これらの遺物は、遺物包含層の厚さを加味すれば、比較的安定的な緩斜面に、長い期間をかけて調査区外東側の集落中心域から、土砂とともに流入・堆積したものと考えられる。この中には、小規模な土石流災害が含まれ、G地区SK7501(時期不明)や、南接するD・F地区第Ⅶ面調査でその一端をみることができる。D・F地区第Ⅶ面では、期中中葉～後葉(古府式後半～串田新式)に営まれた石組炉をもつ堅穴建物2棟(2101-02号堅穴建物)、ピット、溝状遺構の他、後期前葉～中葉(気屋式～酒見式)の鞍部(西端落込み)等を確認している。うち2102号堅穴建物は、廃絶後に土砂で自然に埋没した後、一度に流入した土砂層がレンズ状に堆積し、中期後葉頃に小規模な土石流災害の発生が想定できる。

また、第5章第10節で述べたとおり(第306図、第67表)、扇状地上のD・F・G地区で検出した縄文時代中期前葉～後葉および後期前葉の集落域は、本遺跡東側の舌状台地に立地する四柳貝塚(シジミの淡水貝塚を確認)や四柳中の堂遺跡と密接な関係をもちながら盛衰しており、全体の活動範囲はかなり広範に及ぶ。さらに、第67表でみる限り、後期中葉以降は扇状地上に集落域の中心域が移動した可能性を指摘可能であろう。また、G地区では少量だが、前期中葉の土器片が出土しており、当該期にも調査区外東側で集落が営まれた可能性が高い。このように縄文時代前期中葉から後期末葉まで、調査区外東側の舌状台地～扇状部で継ぎ的に集落が営まれ、その活動範囲は現在把握される埋蔵文化財包蔵地よりも大きく拡がるのが予想できる。

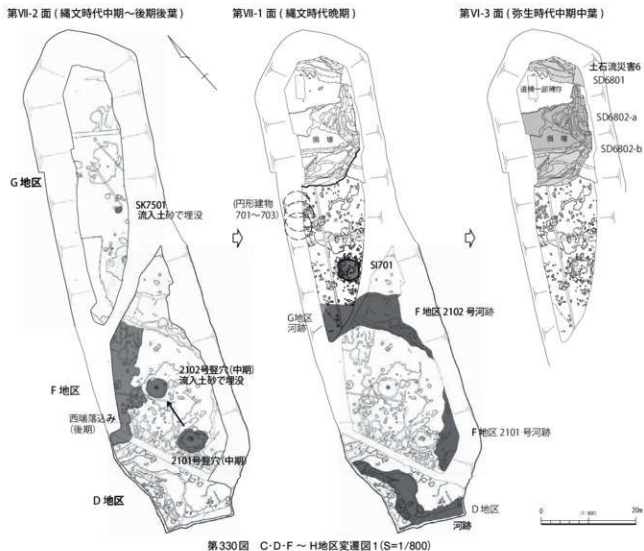
第Ⅶ-1面 G地区南半で検出した縄文時代晩期後半～末(下野式～長竹式)の集落域で、調査区北半は弥生時代中期中葉に相次いだ3条の土石流災害(第Ⅵ-3面、SD6801-02)により損壊する(第330図)。調査の結果、堅穴状遺構1基(SI701)、溝、ピット多数を検出し、ピットの一部は円形建物柱穴の可能性を指摘できる(SB701～703)。6本主柱を復元したSI701(第294図)は、崩れた隅丸方形の平面プランをもち、北西辺には堅穴部の規模を縮小した痕跡が残る。堅穴部の規模は、北東～南西方向約510cm、南東～北西方向が約390～400cm(当初約510cm)、平面積約20㎡(当初約26㎡)を測る。床面には

第2節 G・H地区の変遷



第329図 G地区調査面模式図(S=1/600)

顕著な硬化面や炉跡・焼土面を確認できないものの、平面略方形を呈する大形土坑(SK7005)の存在から、縄文時代晩期末の短期間で廃絶した建物と考えたい。また、E・F・22・23区のピットの一部について、全主柱穴配置が未確認で、かつ柱の沈降痕跡や出土遺物をみないものの、円形建物701～703として復元案を図示した(第295図)。SB701(8本主柱)が柱で囲まれた空間の直径5.76m(床面積約26㎡)を、SB702(10本主柱)が柱で囲まれた空間の直径6.30m(床面積約31㎡)を、SB703(8本主柱)が柱で囲まれた空間の直径5.60m(床面積約26㎡)をそれぞれ測り、県内の円形建物でも小型の部類に属する。G地区第VII-1面で営まれた集落域は、南接するF地区第VII面では不鮮明であり、後述する数条の土石流痕跡からも、弥生時代前期(柴山出村式併行)を含めた集落域の中心は調査区外東側にあると考えられる。また、並行期の集落として、北側の四柳ミッコ遺跡B区Ⅲ面・D区Ⅱ面下層で晩期末(長竹式後半)



第330図 C-D-F～H地区変遷図1(S=1/800)

の円形建物10棟以上(6棟が8本主柱・直径5.7～8m、4棟が10本主柱・直径7.6～8.4m)、方形建物2棟以上を、小金森ヘイナイメB遺跡で土器棺墓を、曾祢C遺跡で円形建物をそれぞれ確認しており、県内他地域と同様に低地に向けた集落形成の活発化がうかがえる。なお、G地区F・21区南端河跡から縄文時代晩期後葉(下野式)の土器片が、D地区河跡(幅1.8～5m、深さ約0.7m)とF地区第Ⅶ面2101号河跡・2102号河跡(幅7.5～8.3m、深さ約1.5m)から晩期後半～弥生時代前期(中屋式～柴山出村式)の土器片が、それぞれ出土する(第330図)。いずれの流路も石・砂利等が一度に堆積した砂礫層を覆土としており、調査区外東側に中心域をもつ第Ⅶ-1面の集落域は、数次の自然災害を被ったと推定できる。

第Ⅵ-3面(土石流災害6) G地区北半で初めて検出した第Ⅵ-3面の変遷(第330図)は、集落存続期(a小期)と3条の土石流災害(土石流災害6)に伴う集落廃絶期(b小期)に大別でき、いずれからも弥生時代中期中葉(八日市地方遺跡8期)を下限とした土器が出土する。集落存続期の様相は、b小期の大きな損壊もあり、数基のピットを確認した程度で、詳細は不明である。おそらく調査区外北東側及び南東側にも集落域が展開、中でも南東側に中心域をもつものと推定できる。また、第Ⅵ-2面との関係から、中期中葉でも後葉に近い時期に営まれた集落と考えられる。

b小期とした土石流災害6は、砂利・礫・石(10～30cm大)層を基本覆土とする。土石流災害は、幅約25mにわたりa小期の集落域を浸食、土層の切り合い関係からSD6802-a(幅8.2～12m、深さ0.7～1m弱)→SD6802-b(幅3～8m、深さ0.5m弱～0.8m)→SD6801(幅3～4m、深さ1m弱～1.3m強)の順に発生する。

SD6802-bからは、東海系の細頸甕(第293図1289)等の土器片が出土した。

第VI-2面 一連の調査で初めて検出した弥生時代中期後葉の生活面である(第331図)。土石流災害6の流入・堆積土をベース面としており、土石流災害6の被害を免れた第VI-1面a小期集落を母体に再興した遺構群と考えられる。遺構群は、調査区北側に偏在しており、周溝をもつ建物1棟(SI651)、土坑、溝、ピット多数等を検出した他、数棟の建物が存在した可能性をもつ(第279図)。SI651外周溝を主体に出土した弥生土器は、加賀地域でいえば小松市八日市地方遺跡8・9期、金沢市磯部運動公園遺跡出土土器群と、周辺地域でいえば羽咋市長者川遺跡平成15年度調査SD03出土土器群や中能登町曾祢C遺跡A区自然河道出土土器群と、並行する部分が多いと考えられる。また、SI651を中心に志賀町富来周辺を産地とする黒色ガラス質安山岩の剥片が多く出土し、活発な石器製作を行う。

周溝をもつ建物SI651は、調査区北隅の弧状の土坑・溝群の連なりを外周溝として復元した建物で、調査区外北西側にのびる。外周溝南東辺は4回の掘り直しが認められ、壁溝のない堅穴部(SK6504)は主柱穴が特定できなかった。復元した建物規模は、外周溝外径約12m、内径約8.6m、堅穴部径6.7m前後、外周溝内径と堅穴部の間の幅1～1.6mとなる。連結土坑群で構成される外周溝をもつ堅穴系建物は、平地系建物の影響を受けたあり方を示すものといえよう。

また、G地区第VI-3面a小期～第VI-2面に営まれた集落を、旧邑知湯周辺の集落遺跡の分布・消長との対比で位置付けた場合、第4章第8節のとおり、弥生時代中期前半(おおむね中期中葉)に生業空間の基盤が成立した主要グループの一つとなる。その中で、弥生時代後期前半までは、旧邑知湯南縁の吉崎・次場遺跡、東的場タケノハナ遺跡を核とする単位集団が集落規模、内容とも一貫して卓越した存在であり続けており、本遺跡は「衛星的」集落の一つと位置付け可能となろう。なお、弥生時代中期前半に広い範囲で同時期的に成立をみた主要グループの生業空間の基盤は、その後の集落遺跡数の増減や、弥生時代後期後半に顕在化するグループ間の政治的・経済的關係の変化とは、あまり相関関係を示しておらず、古墳時代以降も基本的に踏襲されたものと考えられる。

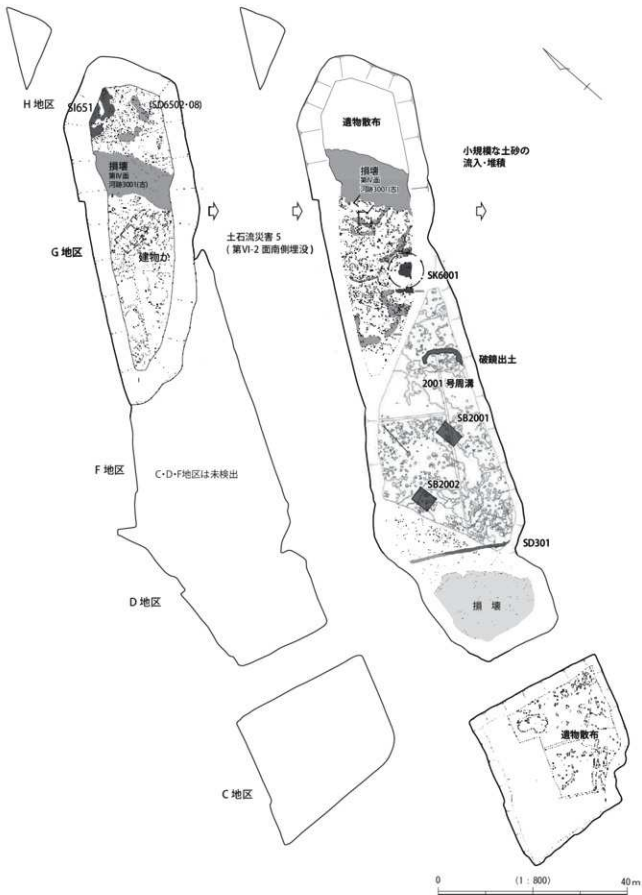
土石流災害5 第VI-2面と第VI-1面との間に発生した土石流災害で、流入・堆積土は第VI-1面ベース土となる。より厚い堆積を示す調査区南側を中心として、調査区北側では第VI-2面遺物包含層の一部を浸食することから、かなり規模の大きい災害と想定できる。堆積した土砂は、灰黄色や茶灰色の粗砂～砂利を基調とする。

第VI-1面 仿製乳文鏡の破鏡が出土したF地区第VI面に連続する弥生時代後期後半および古墳時代前期を中心とする生活面(第331図)で、a～cの3小期に細分可能である。弥生時代後期後半(a小期)は、調査区南側でP6005を、また調査区北側で遺物包含層から定量の土器が出土したにとどまり、C地区第V面と同様に、集落域の中でも縁辺の様相を呈する。弥生時代終末期～古墳時代初頭(b小期)は、遺構・遺物ともほとんど確認できないことから、扇状地全体として集落活動は低調であった可能性が高い。古墳時代前期(c小期)は、調査区北側はほとんど利用されない。調査区南側では、平面不整形を呈する堅穴状遺構1基(SK6001、長軸316m)、土坑、溝約25条、ピット多数等を検出した他、屈曲する溝の一部は主柱穴の欠落等もあり躊躇するものの、平地建物の外周溝の可能性を多分に残す(第259図)。これまでの調査区では、C地区第V面で溝状遺構を、D地区第VI面でSD301を、F地区第VI面で2001号周溝や小型の掘立柱建物SB2001・02(2×1間、平面積12～13m²)をそれぞれ検出しており、J地区第VI-1～4面を含めた集落域は、同時期の土器が出土する四柳貝塚を含めた東側舌状台地を中心に展開したと判断できる。なお、G地区北側(E～G-25区付近)の土層には、第V面との間に小規模な土砂の流入・堆積が認められる。J地区でも、4回にわたる生活面を検出できたのとおり、活発な土砂の流入・堆積がうかがえる。

第V面 扇状地の緩斜面を利用した棚田景観を呈する水田域で、古墳時代中期末頃に土石流災害4で

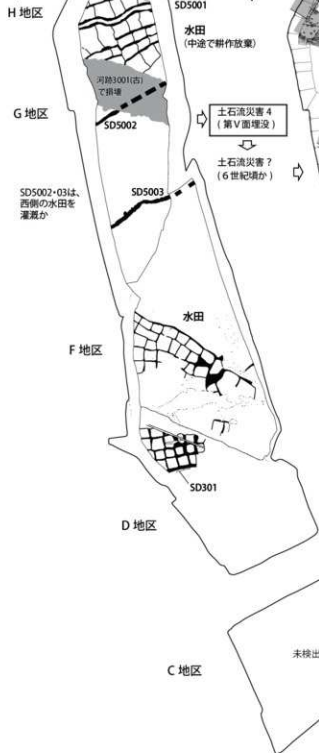
第VI-2面(弥生時代中期後葉)

第VI-1面(弥生時代後期後半~古墳時代前期)

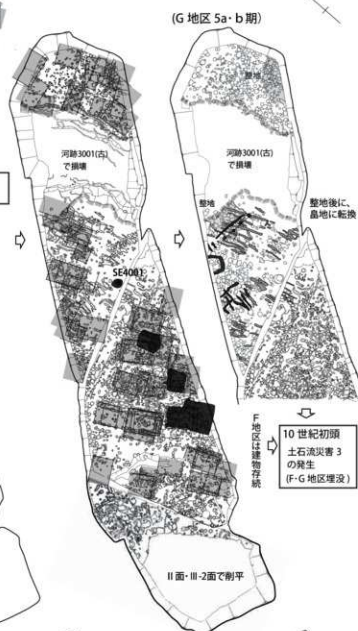


第331図 C・D・F~H地区変遷図2(S=1/800)

第V面 (古墳時代中期末頃)

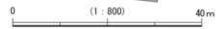


第IV面 (古墳時代末～古代VI1期 (7世紀後半～9世紀末頃)
古代集落 1～5期)



F 地区は建物存続
10世紀初頭
土石流災害3
の発生
(F-G地区埋没)

第332図 C・D・F～H地区変遷図3(S=1/800)



一度に被覆される(第332図)。河跡3001(古)北側の東西方向約17m以上、南北方向20m以上の範囲に、小区画水田27枚(平均面積約8.1㎡、最大20.3㎡以上、最小約3.1㎡)が残存し、水田間を水路(SD5001)が流下する。これらの小区画水田は、造成後、比較的短期間で耕作が放棄され、耕作土や畦畔が雨水等でかなりの程度流出した後に、土石流災害4で埋没したと考えられる。また、河跡3001(古)南側では、水田区画は未確認であるが、SD5001と約20m間隔で並行する溝2条(SD5002・03)を検出し、埋没直前まで機能しながら、調査区外北西側斜面の水田に水を供給したと考えられる。

本遺跡の一連の調査では、G地区第V面と同時期に土石流で一度に被覆・廃絶した小区画水田を、D・F・H地区およびJ・K地区第V面で確認しており、南西-北東方向で約200mを測る広大な扇状地緩斜面全体を対象として、一体的・計画的に水田経営を意図した可能性が高い。その変遷の一端については、D・F・G地区で復元した(第239-240図、a～fの6小期)。具体的には、(a)第VI-1面北側を被覆する程度の土石流災害の発生、(b)D・F・G地区を含む緩斜面全体に複数の小排水路を配した小区画水田の造成を計画(用水路を設けず、灌漑水是水田間を掛け落とし)、(c)基軸となる水路SD5001～03を約20m間隔で開削(D地区排水路SD301も掘削か)、(d)D・F地区およびG地区水路SD5001・02を基幹とした小区画水田の造成と耕作の開始(標高の高いSD5003周辺の水田区画は灌漑水等の理由から未整備)、(e)G地区北側小区画水田の耕作を放棄(D・F地区は耕作を継続)、(f)G地区北側小区画水田の表土(耕作土・畦畔)が一定程度流出した時点で土石流災害4が発生・埋没という過程に整理でき、これらは比較的短期間のうちに推移したものと考えられる。

土石流災害4 古墳時代中期末以降に発生し、黄褐色砂質土層を基調とする。また、水田が未造成のC地区第V面は、同じ頃に土石流災害(現在の四柳大谷川付近が本流か)が発生し、その後、もう1回の土石流を含めて厚さ60cm前後の土砂で被覆される。

古墳時代中期末以降、一連の調査では、7世紀末葉に始まる第IV面まで明確な集落域・耕作域は検出できない。ただし、報告書IV第14図土層9・16層(暗灰色砂質土)のような安定した生活面が存在する。また、7世紀を相前後する須恵器が少量出土している。一方、本遺跡北側では、古墳時代中期に初期須恵器、鍛冶関連資料、滑石製模造品が出土した四柳ミッコ遺跡が、さらに地獄谷右岸では、曾祿古墳群、高畠経塚古墳群が築かれ、7世紀前半に掘立柱建物群を計画的に配する曾祿C遺跡が、それぞれ活発な活動を行ない、相対的な優位性がみとれる。

第IV面 7世紀末葉に始まる第IV面は、本遺跡の集落規模が最も拡大する時期であり、8世紀代を通じて最盛期の集落規模は南西-北東方向で約200m、南東-北西方向で約300m⁽³⁰⁾という扇状地の大部分と東側の舌状台地にひろがる。F地区第IV面をピークとする遺構密度や出土遺物の量・内容からも周辺地域の中で屈指の集落といえる。さらに本遺跡北側には、谷部を隔てて四柳ミッコ遺跡や大町ゴンジョリ遺跡、小金森ヘイナイメA遺跡が、旧邑知高に面して大町C遺跡等が関連しながら展開する。

G・H地区で検出した主な遺構は、掘立柱建物33棟、欄7条、相欠式横板組(横板蒸籠組)井戸1基、畠地と考えられる小溝群約60条、整地痕跡3ヶ所等であり、多数のビットの存在から建物棟数はさらに多いものと考えられる(第332図)。G地区の遺構群は、第4章第5節で述べたとおり、7世紀末葉～10世紀初頭(田嶋氏編年Ⅱ期～Ⅵ期)の約200年間で大きく6期の変遷を復元できる。7世紀末葉～9世紀中頃に存続した集落域(古代集落1～4期)は、9世紀後葉の整地作業を経て、耕作域(畠地)に転換(古代集落5期)、10世紀初頭に発生した大規模な土石流災害3(河跡3001(古))により大部分が埋没する(第217-218図)。古代集落5期の耕作地への転換は、G地区のみならずE・F地区でも認められることから、A・B地区での大規模な整地作業痕跡や、羽咋市教委第4次調査区での集落活動の活発化を加味すれば、本集落全体の大きな再編期であった可能性が高い。

G・H地区の掘立柱建物については、建物構造が把握できる23棟全てが隅柱構造であり、明確な総柱構造をもつ建物は認めがたい。建物規模は、身舎の平面積が30㎡前後の建物が3棟(SB407・408・420)、同15～19㎡の建物が5棟(SB409・417・419・451・454)、同15㎡未満の建物が3棟(SB406・412・418)を数える他、大型の掘方をもつSB403が平面積40㎡を超える建物となる可能性をもつ。倉庫様の総柱建物や40㎡を超える大型建物が少ないことは、これまでの調査区と同じ様相である。同様に、建物の主軸方位についても、調査区全体を規するようなあり方ではなく、基本的に北西～北を指向して変遷するものの、河跡3001(古)(土石流災害3の誘因となる小河川等が存在か)を挟む東西2つのグループが、勾配の強い扇状地形の土地傾斜に応じて、それぞれのグループで建物群を順次建て替えたと考えられる。さらに、土地利用でいえば、F地区北側～G地区南東側(G-20～23区付近)に建物が展開しない空間地が存在する可能性が高い。この空間地には、古代集落4期に本遺跡で唯一の相欠式横板組(横板蒸籠組)の井戸(SE4001)が掘られ、斎申等を用いた小規模な祭祀行為を行なうことから、他とは異なる土地利用が継続したエリアであった可能性を示唆する。

G・H地区の遺物は、扇状地の堆積作用もあり、多数の須恵器、土師器が出土、中には「乙上」田地「酒田」「東」「寺」「置本」「榎女」「住」「井門」等の多様な墨書土器約110点や、本遺跡における活発な文書作成行為を裏付ける多くの円面硯、転用硯を含む。また、尖底を主体とした製塩土器小片が目立つ他、鉄刀や本遺跡4例目となる銅製巡方、生産活動を示す埴壇滓、フイゴ羽目、土錘を確認している。さらに斎申を主体としたSE4001での祭祀行為も、本地区を考慮するうえで重要である。G地区の各期における墨書土器の出土傾向は第4章第5節で示したとおりで、周辺地域を含めた墨書土器の整理は第3節3項で述べる。

なお、南側に接するF地区第IV面については、調査区の中で最も遺構密度が高く、堅穴状遺構3棟、掘立柱建物34棟(隅柱・3×2間主体)を復元している。出土遺物は、「田地」「酒田」「大家」「上家」「東」「大町」「玉万呂」「榎女」「普女」「酒女」「万」「仲」等の施設名や人名的を想起させる多様な墨書土器に加え、多くの転用硯や、鉄地金貼の耳環、石製巡方、銅製蛇尾が各1点出土している。

土石流災害3 古代集落5期とした耕作地(高地)の廃絶後、一定期間を経た、10世紀初頭(VI。期末)に発生する。G地区を寸断する河跡3001(古)を本流とし、南東方向から北西方向に一気に流れ下る。本流の規模は調査区南東壁で上幅約20m、下幅約10.7m、深さ約2.2m、調査区北西壁で上幅約25m、下幅約15m、深さ2m以上を測り、写真図版40～43のとおり、1mを大きく超える自然石が多く混ざる。流入した土石流は、右岸(北側)側表面を深く削り取る一方、左岸(南岸)側の開析作用は相対的に弱いものの、流入した土砂の一部がF地区第IV面の緩斜面上に堆積する状況であった(報告書IV第13図土層125等)。ほぼ同時期に発生したと考えられる土石流痕跡をA地区南端～E地区で確認している。

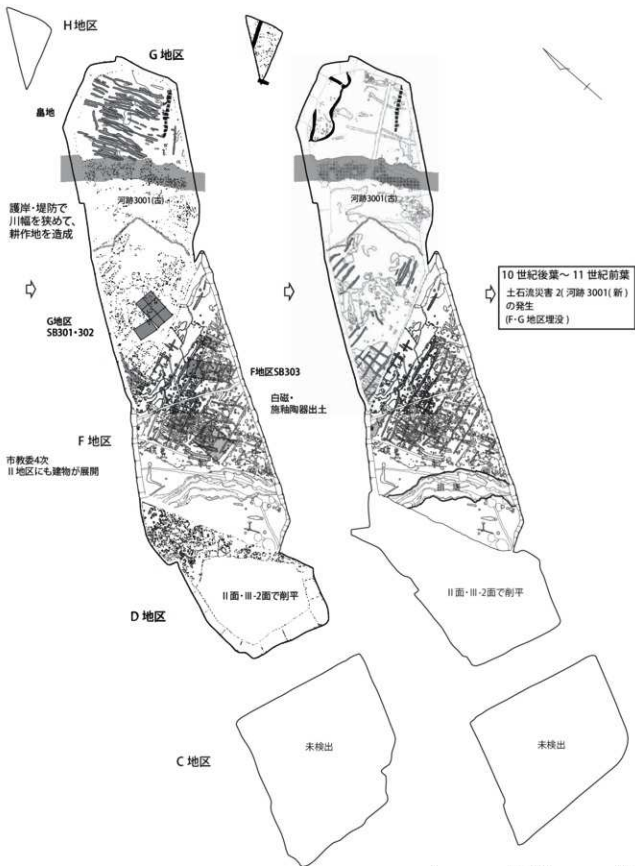
なお、10世紀初頭の土石流災害3の発生(第IV面古代集落6期)から、護岸・堤防を伴う耕作地の造成・経営(第Ⅲ-2面、第Ⅲ-1面)を経て、10世紀後半～11世紀前半(VII。期)の土石流災害2(河跡3001(新))の発生・埋没までの変遷については、第149図で示している。

第Ⅲ-2面 G・H地区で確認した生活面(第333図)で、H地区は未利用の土地であった可能性が高い。第IV面を被覆した土石流災害3をベース土とする第Ⅲ-2面の存続時期は、10世紀前半頃の比較的短い期間を想定している。G地区では、右岸(北岸)に石を積み上げながら護岸・堤防の整備を行なう河跡3001(古)を挟んで、調査区南隅でF地区第Ⅲ面と一体性が高い小溝群(高地、SD3017～26等)と小規模な掘立柱建物2棟(SB301・302)を、また調査区北側で川幅を狭める護岸・堤防の造築と一体的に開かれた小溝約60条(高地)を、それぞれ検出している。

河跡3001(古)右岸で検出した堤防の規模は、南東～北西方向の延長約21m、上幅2.4～3.6m、下幅5.2～6m、高さ約0.4mを測る。また、堤防内側斜面の石積み(護岸)は、自然石を砂質土で押さえなが

第Ⅲ-2面(古代VI3期(10世紀前半頃))

第Ⅲ-1面(古代VI3～VII1期初め(10世紀中葉頃))



第333図 C・D・F～H地区変遷図4(S=1/800)

ら乱雑に厚さ30～50cm程度積み上げたものである。一方、標高が相対的に高い左岸(南側)は、肩部中程に径2～5cmの杭が不規則に散見できる程度である。同様の護岸を目的とした片岸のみの積石の事例は、本遺跡の北東側約1.2kmに位置する中能登町小田中おぼたけ遺跡や志賀町中遺跡で確認できる³⁰⁾。小田中おぼたけ遺跡平成7年度調査1・2区の上・下層間面2号溝は、上幅約7.9m、深さ約1mを測り、相対的に標高が低い西側斜面に平均20cm大の自然石を積み上げる。溝の時期は、下層面(古墳時代前期後半)以降、上層面(8世紀中葉)より前とされ、本遺跡の護岸よりも古く位置付けられる。両遺跡で確認できる片岸のみの護岸を施工することは、より重要な土地を水害から護るため、護岸の反対側の土地に流水を誘導するための土木技法の一つの可能性をもつ。

G地区堤防北側の緩斜面を利用した畠地は、地形の傾斜に平行ないし直交する小溝を掘り、耕作単位は大きく4区画に分かれる(第149図、耕作単位a～d)。また、河跡3001(古)南岸で検出した小規模な雑舎的建物は、欄柱構造のSB302(平面積11.2m²)から総柱構造のSB301(3×2間、同27.7m²)に建て替えられ、F地区第Ⅲ面から連続する小溝群は複数回の切り合い関係をもつ。なお、F地区第Ⅲ面では、前述のとおり、在地の富裕百姓屋の屋敷地と考えられる建物群が展開、白磁碗I類、緑・灰釉陶器を含む遺物が出土する。

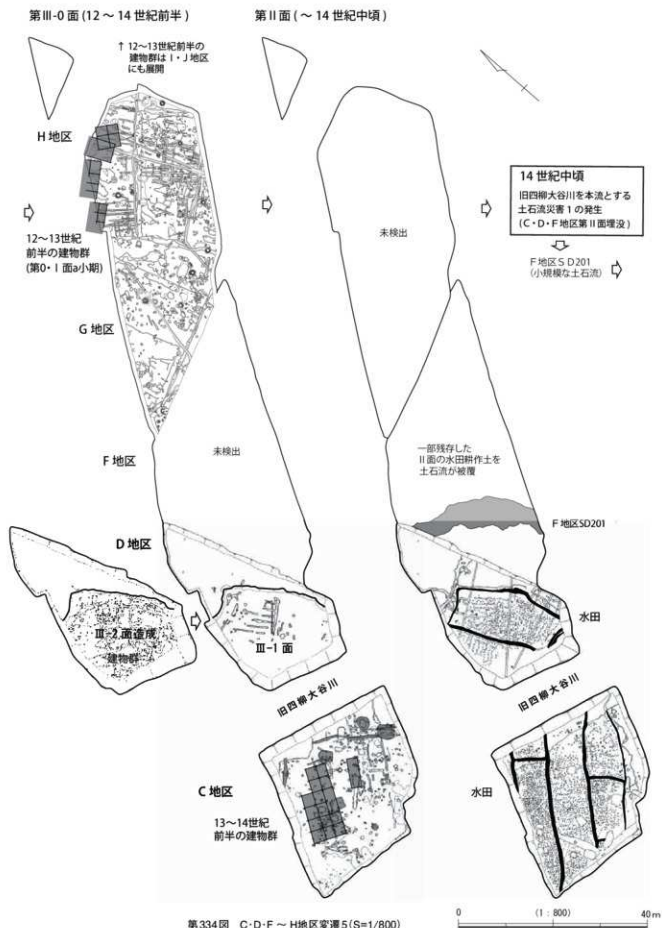
第Ⅲ-1面 G地区第Ⅲ-2面で成立した耕作域は、10世紀中頃(Ⅶ期頃か下層か)に護岸を伴う堤防を維持しつつ、再整備される(第333図)。河跡3001(古)北岸の耕作地は、一部で造成を行い、水田(水田301～303)に転換、南岸の畠地(小溝群約40条)は耕作規模を拡大する。

G地区の水田301～303は、第Ⅲ-2面の耕作単位d(第149図)を継承する範囲に占地し、緩やかに屈曲する等高線に沿って小規模な土留め工(石積)を伴いながら配される。用・排水施設は未確認であり、主に地表に湧き出る水や雨水を、低い畦畔を介して水田間を順次掛け落としとしたものと推測できる。第Ⅲ-2面で確認した耕作単位a～c(第149図)については、耕作を放棄したと考えられる。H地区第Ⅲ-1面、I・J地区第Ⅲ-1面、K地区第Ⅲ面で、G地区水田に連続する水田遺構を検出しており、その耕作範囲はG地区水田を南端とし、南西～北東方向で120m以上を測る。

河跡3001(古)南岸で検出した畠地は、切り合い関係等から3段階の変遷があり(第149図)、第Ⅲ-1面最終段階(土石流災害2埋没段階)で3つの耕作単位をもつようだ。これらの畠地は、前述の建物群廃絶後に畠地に転換した、F地区と一体のものであり、条里地割りの施行を思わせる主軸方位を示す。**土石流災害2(河跡3001(新))** 第Ⅲ-1面耕作地を襲った大規模な災害で、10世紀後葉～11世紀前葉(Ⅶ期)の発生を想定する。第Ⅲ-1面を埋没させた土石流災害2の本流(河跡3001(新))の規模は、上幅約11～18m、下幅66～135m、深さ約0.4～0.8mを測り、下流側では護岸・堤防を設けなかった左岸(南岸)の浸食が顕著である。流入・堆積した土砂は、シルト～砂利を基本とし、河跡3001(古)のような大きな自然石は混ざらない。土石流災害2の発生に伴い、G地区の利用は一時的に放棄される。なお、報告書IV掲載のロクロ土器器塚(第266図480)を第Ⅲ-1面の下限を示すとすれば、土石流災害2は10世紀後葉に発生したと考えられる。

第Ⅲ-0面(G・H地区第0-I面の一部) 第4章第2節で述べた第0-I面遺構の一部(a小期、第77図)を抽出、第Ⅲ-0面と呼称する。G地区北西側で検出した総柱構造を主体とする建物群(SB109・112～115)が該当し、出土遺物から12世紀～13世紀前半に営まれたと考えられる(第77図、第334図)。J地区やG地区西側に位置する羽咋市教育委員会第4次調査第Ⅱ地区での並行期遺物の出土から、J地区～市教委調査区付近に中心城をもつ散村的な集落・耕作地が展開したと推測できる。また、C地区第Ⅲ面では、13世紀～14世紀前半代に主体をもつ建物2棟、平面長方形の堅穴状遺構3基、井戸1基を検出している。

(第Ⅱ面) C・D地区で検出した階段状に造成された長方形の大規模水田区画を指標としており、C・D



第334図 C・D・F～H地区変遷5(S=1/800)

地区間を流れる四柳大谷川を本流の一つとする土石流災害1で一度に埋没する(第334図)。

土石流災害1 各地区で確認できる大規模な土石流痕跡で、東側から短期間に流入・堆積した粗砂・細砂層(無遺物層)をなす。G・H地区では、第Ⅲ-0面と第0・I面の間に存在し、堆積層の厚さはG地区で0.1～1m弱、H地区で0.2～0.4mを、それぞれ測る。C地区では、第I面集落と第Ⅱ面水田の間層(厚さ0.5～1.5m、1mを超える自然石が混ざる)として確認でき、上下の生活面の存続期から、14世紀中頃に発生したと推定している。また、C・D地区間を流れる四柳大谷川が本流の一つであり、C地区北隅とD地区南側を大きく削平する。なお、F地区では、土石流災害1に後出する流路(SD201)を確認している。

第0・I面 G・H地区第0・I面は、F地区第0・I面と同様に現耕作面直下で検出した最上層の生活面で、耕地整理等のため遺存状態はあまりよくない。G地区で検出した集落は、出土遺物は限られるものの、前述した第Ⅲ-0面(a小期)、土石流災害1に後出、14世紀後半～16世紀前半の第I面(b小期)、16世紀後半～17世紀代の第0面(c・d小期)が、中心域を若干変えながら営まれる(第77・335図)。また、遺物からは、少量の陶磁器が出土するものの、土師器皿の量比がかなり低いことが指摘できる。

第I面(b小期)は、出土遺物が限られるため、南側のC・D地区第I面、F地区第0・I面北側の遺構群を含めて様相を整理する。G地区南半の掘立柱建物3棟(F地区SB104、SB101・102、建物主軸方位N-16～21°W)は、F地区SB104(平面積約54㎡)のように中世的な総柱構造をもち、柱穴は径50cmに満たない小振りな円形を呈する点を特徴とする。これらは、南接するF地区北側の掘立柱建物4棟(総柱構造3×3間1棟(平面積約46㎡)、3×2間2棟(同約25㎡)、側柱構造2×1間1棟(同約27㎡)と小型の石組井戸4基等で構成される建物群と一体のものとして理解できる。一方、C・D地区第I面やF地区第0・I面南側では、土地規制がかなり弱く、側柱構造を主屋とする建物25棟以上、浅い堅穴状遺構20基以上、小型の石組井戸10基以上で構成される建物域を確認、一部建物が16世紀後半以降の可能性を残すものの、おおむね出土遺物から14世紀後半～16世紀前半(15世紀代主体)に位置付けられる。側柱構造の建物は、梁間柱間寸法を長く取り、大形の柱穴掘方(長径50～120cm)で、側面未加工の太い主柱を用いることを特徴とする。第5章第2節では、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡で総柱構造の建物SB15(6間×5間以上、14世紀代)が14世紀後半～17世紀代に主屋が側柱構造の建物に転換することや、七尾城下町遺跡シッケ地区、野々市市長池キタノハシ遺跡等で検出できる側柱構造の建物の様相⁽³⁵⁾から、F地区第0・I面北側～G地区第I面南端の中世的な総柱構造を主屋とする建物域が廃絶した後に、C・D地区第I面～F地区第0・I面北側で梁間柱間寸法を長くとする側柱構造の建物を主屋とする建物域が成立する流れに整理している。

ただし、中世的な総柱構造の建物+石組井戸で構成される建物域と、側柱構造の建物+堅穴状遺構+石組井戸で構成される建物域が、①主屋級の建物規模に大きな差がないこと、②いずれの柱根も側面未加工の芯持ち材であること等から、2つの建物群が時期的に並存し、建物域の構成や建物構造に現れる差異は、居住者の職種・階層や建物用途等の差を反映したものと評価も可能である。能州府中(七尾市中心部付近)に向かう街道に面して、潟漁の一部で行う農村集落と考えられる第I面集落の位置付けや、中世的な総柱構造の建物から側柱構造の建物への転換の実像については、出土遺物の制約もあり今回の調査では十分整理できておらず、今後の類例の増加を待ちたい。

第0面(c・d小期)は、16世紀後半～17世紀代に営まれる。前述したC・D地区第I面の側柱構造の建物を主屋とする建物域がおおむね16世紀第1四半期頃を下限に廃絶する状況から、16世紀中葉頃に自然災害あるいは政治的・経済的な要因により、建物域がG～J地区周辺にも新たに成立したと想定している。c・d小期とも、梁間寸法の長い側柱建物を主屋とし、小規模な雑舎・作業小屋、小型の石組井戸を基本に建物単位が構成されるようだ。第I面と比較すれば、堅穴状遺構は確認できず、敷地割り

第I面 (第0・I面b小期)
(14世紀後半～16世紀前半)

第0面 (第0・I面c小期)
(16世紀後半～)

第0面 (第0・I面d小期)
(～17世紀)



第335図 C・D・F～H地区変遷6(S=1/800)

を反映するように建物主軸方位は一定の振れ幅内におさまる。建物群の主軸方位は、c小期がN-41～50° W、d小期がN-69～80° Wをそれぞれ示す。また、3つの敷地を復元できるc小期は、SB111からSB110の順と推移し、平面積約48㎡を測るSB110は居住以外の特別な用途をもつ建物と考えられる。d小期は、SB105・109(約31㎡)を主屋とした2つの建物群が展開する。これらの建物群は、第0面と同様に四柳集落を構成し、遅くとも19世紀代(おそらく18世紀代)には耕作地に転じたと考えられる。

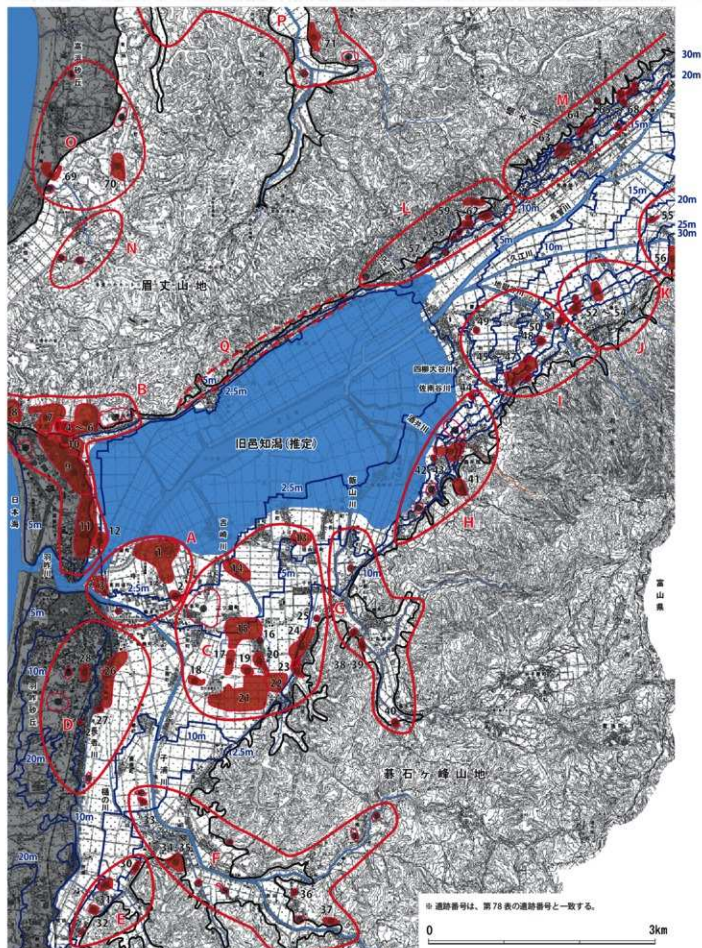
第3節 周辺の古代集落遺跡との比較検討

1 比較検討の対象について

四柳白山下遺跡は、第Ⅳ面の集落域が成立する7世紀末葉から、第Ⅲ-Ⅰ面の集落・耕作域が存続した10世紀中葉頃まで、自然災害にも係わらず、長期にわたり継続した大規模集落である点に大きな特徴をもつ。また、土壌堆積を基本とする扇状地形を一因として、多数の墨書土器や転用硯、緑・灰釉陶器を含む土器、土製品、さらに腰帯、銅鏡片、木杵、齋串、和同開珎、漆壺等の特徴的な遺物が出土する点も特徴の一つといえる。以下では、旧邑知潟に注ぎ込む水系を中心とした周辺地域(旧邑知潟周辺と仮称)の集落遺跡の消長、墨書土器の出土傾向について整理を行い、その比較検討により、本遺跡の位置付けの一助としたい。また、8世紀末に規模を拡大する吉崎川中流域の集落遺跡群(杉野屋遺跡群と仮称)についても、本遺跡の性格を考える上で重要であることから、若干の位置付けを行う。ただし、旧邑知潟に注ぎ込む水系のうち、北東側から注ぎ込む長曾川水系については、その流域が広大であるため、中能登町久江～西馬場を結ぶラインより西側の地域を対象とした(第336図)。

2 周辺の古代集落遺跡の消長

県教育委員会製作の「いしかわ文化財ナビ」によれば、旧邑知潟周辺で7世紀前後～11世紀前半代に、遺物の表面採取を含めて、何らかの遺跡情報が得られる集落遺跡は約101遺跡を数える。このうち、現時点で集落の消長を検討可能な71遺跡を、地形や水系、分布状況等からA～Pの16グループに区分した(第336図、第78表)。第4章8節で述べた弥生時代中期～後期・末の集落遺跡14グループ75遺跡の分布(第283図)と比較した場合、水耕を中心とした生業や旧邑知潟を介した流通を基盤としながら、限られた適地に集落が営まれるため、飯山川水系・酒井川水系(G・Hグループ)以外は、両期とも近似した集落分布を示す。特に、旧邑知潟東岸～邑知地溝帯両縁(H～Mグループ)は、1つの遺跡範囲の認定に左右される要素を多分にもつが、本遺跡(Na45)や杉谷チャノバタケ遺跡(Na62)等のように、小扇状地上に限られた集落適地に中心域を少しずつ変えながら、比較的長期間集落遺跡が存続する傾向が強い。以下では、第2章8節末文で述べた旧邑知潟周辺における集落遺跡の検討に係る制約(現集落との重複、外列砂丘による被覆等)に留意しつつ、71遺跡の消長を6つの時期に区切って概観する。**【古代Ⅰ期】** 12グループ21遺跡が確認でき、6世紀後葉に比して確実に集落数は急増する(第337図)。詳細が明らかな集落遺跡のうち、Bグループの寺家遺跡(Na9)砂田地区では数棟1単位の堅穴建物群を検出している。また、同グループに属する柳田シャコデ遺跡(Na6)は、同一丘陵の須臾器生産(羽咋窯跡群)に係わる堅穴建物数棟で構成された集落遺跡である。両遺跡周辺には、滝古墳群オーショージ支群、寺家モスケ古墳、柳田テンジク横穴等が分布し、その関連が指摘されている。子浦川上流のFグループは、現時点で集落遺跡は未確認であるが、小谷屋・寺山横穴古墳群等の50基を越える横穴古墳群の分布から、今後、集落遺跡の確認が期待できるグループである。Iグループに属する曾祇C遺跡

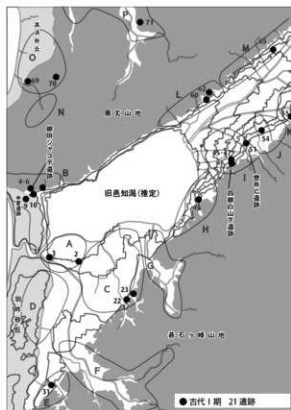


第336図 旧比叺湖周辺の古代集落遺跡分布図(S=1/60,000)

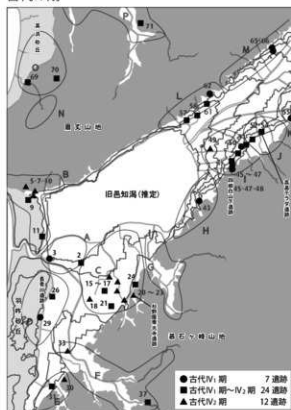
第78表 旧邑知淵周辺の古代集落遺跡の消長表

№	分布域の区分	遺跡名	遺跡 土層	発見 年	発見 時期	発見 場所	遺物出土															
							6c 600	I 21	II 22	III 20	IV 28	V 31	VI 33	VII 36	VIII 39	IX 43	X 49	XI 38	XII 12	XIII 12	XIV 9	XV 9
計			32	617	101	7	21	2	20	28	31	33	36	36	43	49	38	12	12	9	9	
〔外遺跡土層からの出土遺跡数〕			33	-	-	0	0	0	27	3	5	8	11	16	17	12	13	5	0	0	0	
1	A 邑知淵西縁	古埴・次場遺跡	1	2	知淵																	
2		次場・コウレン遺跡(T区)	18			5																
3		的場農倉庫前遺跡																				
4	B 楽壇台地南縁・	柳田台地遺跡																				
5	羽袴砂丘東縁	柳田シャコ子遺跡																				
6		柳田シャコ子遺跡																				
7		気多社壇外縁遺跡																				
8		一ノ宮遺跡																				
9	多野23・尻27・縁6	寺家遺跡	314	22	43	57																
10		柳田堀ノ目遺跡	1																			
11		菅原遺跡																				
12	C 吉崎川水系	菅原身ノ下遺跡																				
13		上江針ノ子遺跡				2																
14		深江遺跡	1		1																	
15		太田ニシカワダ遺跡	3																			
16		太田C遺跡	1																			
17		太田ツツミダ遺跡	4																			
18		二ノかみあれた遺跡	23																			
19		太田A遺跡																				
20		太田B遺跡																				
21		杉野窪ロウワリ遺跡	14	1																		
22		杉野窪遺跡	43																			
23		杉野窪専光寺跡	80	66		2																
24		中川A遺跡	24	1	3																	
25		宇土野センジヤハナ遺跡																				
26	D 羽袴砂丘東縁	長者川遺跡	17																			
27	(長者川水系)	兵庫遺跡																				
28		兵庫オウヤマチ遺跡																				
29		栗生シモテ遺跡																				
30	E 長者川水系上流	長市遺跡	1		1																	
31		伝島遺跡	1																			
32		伝島B遺跡	1																			
33	F 子溝川上流	子溝ニシノウメ遺跡																				
34	(子溝谷)	子溝蓮華山遺跡																				
35		子溝伝瓦場遺跡																				
36		敷田鶴山遺跡																				
37		敷田コダシ遺跡	1																			
38	G 龍山川水系	宇土野ヤノ寺遺跡	1																			
39		宇土野オウヤマチ遺跡	1																			
40		福水ヤシキダ遺跡																				
41	H 溝井川水系	永光寺遺跡																				
42		寺境タフ遺跡																				
43		酒井バシドウマエ遺跡																				
44		酒井ノギワ遺跡																				
45	I 沼部大谷川・	沼部山下遺跡	397	6	3	14																
46	地盤谷川水系	沼部瓦葺																				
47		沼部ミツコ遺跡	2																			
48		大野コシノガリ遺跡	2																			
49		大野C遺跡	34																			
50		小倉倉へイナイメノ遺跡	1																			
51		菅野C遺跡	2																			
52	J 久江川水系	高島カクテ・スキモト遺跡	13																			
53		高島C遺跡																				
54		高島テラダ遺跡	1																			
55	K 久江川水系	小田中おぼたけ遺跡	2																			
56		久江サザミヤシキ遺跡	1	1	3	13																
57	L 龍天山南縁	妻丸宮地遺跡	1		117																	
58	(長者川水系右岸)	沢ノウケダ遺跡	1																			
59		谷内フナギヤチ遺跡			1																	
60		妻丸テラダヤチ遺跡																				
61		妻丸杉谷遺跡	2		11																	
62		杉谷チャノバケ遺跡																				
63	M 龍天山南縁	船倉部小学校遺跡																				
64	(長者川水系右岸)	徳久遺跡																				
65		宮谷川遺跡																				
66		阿部院遺跡																				
67		中水門遺跡																				
68		中水門川遺跡																				
69	O 楽壇台地	楽壇浜田遺跡																				
70		甘田イ遺跡																				
71	P 沼部野見水	上郷中村遺跡	3		1																	

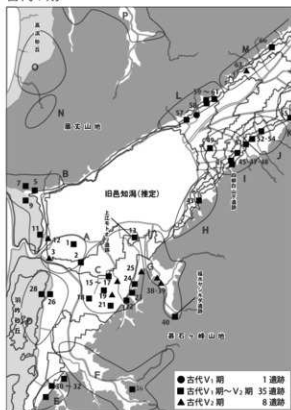
古代Ⅰ期

古代Ⅱ₂₋₃～Ⅲ期

古代Ⅳ期



古代Ⅴ期



0 3km

第337図 旧奥知淵周辺の古代集落遺跡消長模式図1 (S=1/140,000)

(No.51)では、7棟以上の掘立柱建物群(最大床面積43m²)を高い計画性をもって配する建物域が成立する。地獄谷川右岸の曾祢C遺跡については、近隣に所在する曾祢古墳群(7世紀前葉、金銅装束頭太刀、環頭太刀出土)、高島経塚古墳(6世紀末～7世紀初頭、金銅装束頭太刀、銅鎧出土)被葬者層の支配、統制のもとで営まれた比較的上位の集落と位置付けられている。なお、飯山川水系(Gグループ)で福水円山古墳、福水・飯山横穴群が、酒井川水系(Hグループ)で酒井古墳・酒井東古墳群がそれぞれ分布するように、各グループで小規模な古墳が築かれた可能性が高い。本遺跡が属するIグループでは、詳細不明ながら四柳横穴群、大町横穴群が分布、一連の調査で7世紀前後の須恵器が少量出土することから、曾祢C遺跡より下位に属する小集団が営む集落が存在する可能性が高い。このように古代I期は、6世紀後半の集落様相を継承しつつ、異なる様相を示すB・F・Iの3グループを中心としながら展開すると考えられる。

〔古代Ⅱ₁期〕 短期間ではあるが、集落遺跡数は2遺跡に急減し、土器編年上の課題を考慮しても、県内他地域と同様に、集落の大きな再編期にあたる⁽³⁶⁾。現在、Bグループの釜屋遺跡(No.11)、Lグループの谷内ブンガヤチ遺跡(No.59)で、当該期の遺物が出土しているものの、集落の詳細は不明である。なお、Bグループの経営が考えられる羽咋窟跡群では、柳田タンワリ1号窟、柳田五郎兵山1号窟が活発な採集を行い、集落遺跡の様相とは好対照をなす。

〔古代Ⅱ₂₋₃期～Ⅲ期〕 12グループ32遺跡と急増、その大部分の集落遺跡は古代Ⅱ₃期～Ⅲ期に成立をみる。集落分布からみれば、古代I期の様相を基本的に継承しつつ、Bグループの4遺跡(No.5・6・9・11)、E・Fグループの3遺跡(No.30・34・35)や、本遺跡が属するIグループの6遺跡が目立った存在といえる。また、当期における白鳳寺院の建立が「北」と「南」の2グループ(B・Fグループ)で想定されることは、旧邑知湯周辺地域の勢力や集落動向を考えるうえで象徴的な事象である他、実態は不明ながらDグループの羽咋市街地周辺に羽咋郡衙(前身含む)が存在したとされる。

「北」のBグループでは、柳田シャコデ遺跡(No.6)の掘立柱建物で構成された集落が廃絶に向かう一方、東接した台地上に柳田シャコデ廃寺(No.5)が創建される。また、寺家遺跡(No.9)砂田地区では、主軸方位を規制した堅穴建物群で銅鏡、銅鈴等を用いた神祇祭祀を行い、帯金具、ガラス容器片の出土から「国家的な関与を受ける専門的な祭祀集落の性格を帯びる」と考えられている⁽³⁷⁾。同グループは、臨海部で土器製塩(滝・柴垣製塩遺跡群)を開始する等、旧邑知湯周辺地域の中でも卓越した存在といえる。「南」の子浦川上流域E・Fグループでは、同一丘陵に分布する3遺跡(No.30・34・35)から瓦片の出土が報告されており、周辺に古代寺院が存在すると考えられている。また、Iグループは、地獄谷川右岸の曾祢C遺跡と入れ替わるように、本遺跡(No.45)や四柳ミッコ遺跡(No.47)が急速に活性化し、集落規模を大きく拡大する。さらに旧邑知湯に面した大町C遺跡(No.49)の成立や、鉄の精錬施設と考えられる小金森ヘイナイメA遺跡(No.50)の稼働等、複数の機能をもつ遺跡群としての性格を帯び始める。

〔古代Ⅳ期〕 14グループ43遺跡と、集落遺跡数はさらに増加し、古代Ⅳ₂期～Ⅳ₃期は集落遺跡数における盛期を迎える。新たに成立する集落遺跡数は、古代Ⅳ₁期が9遺跡、古代Ⅳ₂期が12遺跡を数え、古代Ⅱ₃期より若干少ないものの、新たな集落が成立し続ける点に特徴をもつ。中でも、羽咋砂丘東縁のB・Dグループ、吉崎川水系のCグループ、本遺跡が属するIグループ、久江川水系のJグループで、活発な活動がうかがえる。

Bグループの寺家遺跡(No.9)では、砂田地区で堅穴建物群が掘立柱建物群に転換、引き続き神祇祭祀を執り行う。さらに祭祀地区で、大規模な焚火と鎮火を伴う祭祀(下層構面大型焼土遺構SF16)が始まる。長者川水系のDグループは、10世紀以降に形成された外列砂丘の被覆により判然としませんが、長者川遺跡(No.26)で墨書土器が出土している。同グループは、砂丘上の開発により、粟生シモデ遺跡

(No.29)が発見される等、今後も新たな集落遺跡が確認される可能性が高い。吉崎川水系Cグループでは、古代Ⅳ₁期に3遺跡(No.18・22・24)の分布であったものが、古代Ⅳ₂期には9遺跡と急増する。詳細は、第4項で述べるが、これらの集落遺跡は、条里地割りが施行され、墨書土器の文字共有から一体的な関係を保持した荘園遺跡と考えられる。同グループの中核をなす杉野屋専光寺遺跡(No.23)では、志雄町(現、宝達志水町)教委調査区で丸瓦片や「寺」等の墨書が出土し、後の「東院寺」につながる宗教施設が成立をみる。一方、古代Ⅲ期までの「南」の中心と目されるFグループは、調査が少ないため判然とせず、散田コダシ遺跡(No.37)が確認できる程度である。

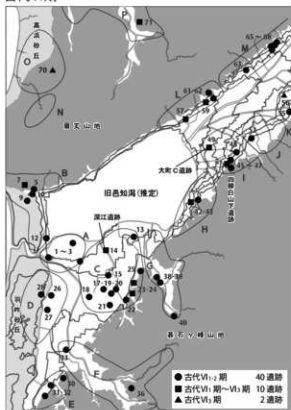
旧邑知湯北東側では、Iグループに属する本遺跡(No.45)や四柳ミッコ遺跡(No.47)等が集落規模を維持しつつ盛期を迎える。またJグループでは、高畠カタタスキモト(No.52)に加えて、高畠テラダ遺跡(No.54)で耕作域が確認されている。このように古代Ⅳ期は、Cグループの急増により、古代Ⅲ期までのB・F・Iの3グループから、B・C・Iの3グループに中心域が移動する点に特徴をもつ。

〔古代Ⅴ期〕 13グループ44遺跡が確認できる。新たな集落遺跡の成立は、古代Ⅴ₁期、Ⅴ₂期とも8遺跡を数え、集落遺跡数からみた盛期を維持する。集落遺跡の分布状況は、B・C・Iの3グループが引き続き活発である他、旧邑知湯緑のAグループで2遺跡(No.1・3)、飯山川水系上流の谷平野であるGグループで3遺跡(No.38～40)が分布するとおり、新たな動きも確認できる。

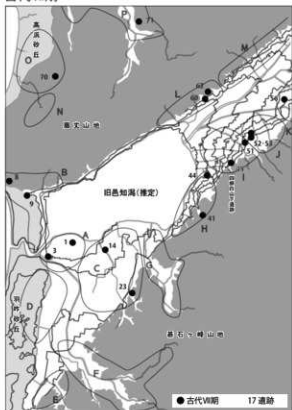
Aグループでは、詳細不明ながら旧邑知湯に面して吉崎・次場遺跡(No.1)、的場農業倉庫前遺跡(No.3)が成立、吉崎・次場遺跡、次場コウレン遺跡(No.2)から墨書土器「三宅」が出土する。Bグループの寺家遺跡(No.9)では、砂田地区で古代Ⅳ₂期末に建てられた北部建物群が、Ⅴ₂期に中央建物群に変わり、いずれの時期も墨書土器が多出する。「宮野」墨書の出土から祭具管理と饗宴関係を持ったと考えられる。北部建物群周辺では、これまでの銅製品に加え、鉄製品、多彩陶、牛馬歯骨等を用いて、神祇祭祀を中心とした多様な祭祀が執り行われるようだ。大型掘立柱建物SB01(9×2間)を主屋とする中央建物群は、祭祀を掌管する「宮司館」と考えられており、南側には神社遺構(SB21)が存在する。祭祀地区では、多量の土器と金属祭具を用いた律令祭祀が継続する。柳田シャコヤ廃寺(No.5)は、同廃寺と主軸方位を異にする大型掘立柱建物2棟(1棟は7×2間)が伽藍東側に建てられるが、古代Ⅴ₂期のうちに衰退に向かう。吉崎川水系のCグループでは、杉野屋専光寺遺跡(No.23)が宗教活動を活発化するとともに、既存の集落遺跡周辺で新たな遺跡(太田A・C遺跡(No.19・16))や、旧邑知湯に近い微高地に上江モトオリ遺跡(No.13)が成立をみる。Eグループでは、荻島遺跡・荻島B遺跡(No.31・32)が活発化するようだ。飯山川水系の谷平野であるGグループでは、初めて集落遺跡(No.38・39)が確認できる。また、杉野屋専光寺遺跡と丘陵を挟んだ反対側の谷奥に位置する福水ヤシキダ遺跡(No.40)でも、出土遺物の様相から宗教活動が始まるものと考えられる。

〔古代Ⅵ期〕 集落遺跡数は、古代Ⅵ₁期が15グループ49遺跡(新規成立11遺跡)、Ⅵ₂期が14グループ38遺跡(同1遺跡)、Ⅵ₃期が7グループ11遺跡(同2遺跡)をそれぞれ数え、集落遺跡数は古代Ⅵ₁期にピークを迎えた後、B・C・Iグループを含めた多数の集落遺跡で急速に衰退の様相を呈する(第338図)。Bグループでは、10世紀前後の大規模な飛砂現象に伴い砂丘が移動、寺家遺跡(No.9)砂田・祭祀両地区とも埋没、その機能を一時的に失う。この大規模な飛砂現象は、Dグループ等の旧邑知湯周辺地域にも何らかの影響を及ぼしたと考えられるが、集落遺跡数の推移からは判然としない。吉崎川水系のCグループは、古代Ⅵ₁期12遺跡をピークにⅥ₃期には3遺跡と急減する。Ⅵ₃期まで確認できる遺跡は、杉野屋専光寺遺跡(No.23)、中川A遺跡(No.24)、吉崎川最下流に古代Ⅵ₁期に成立した深江遺跡(No.14)に限られる。杉野屋専光寺遺跡(No.23)は、約半町(約50m)の方形回廊状遺構「院」が確認でき³⁸⁾、「東院寺」等の多量の墨書土器が出土する。隣接する中川A遺跡(No.24)は、出土遺物から杉野屋専光寺遺跡と一

古代Ⅵ期



古代Ⅶ期



第338図 旧邑知渴周辺の古代集落遺跡消長模式図2 (S=1/140,000)

0 3km

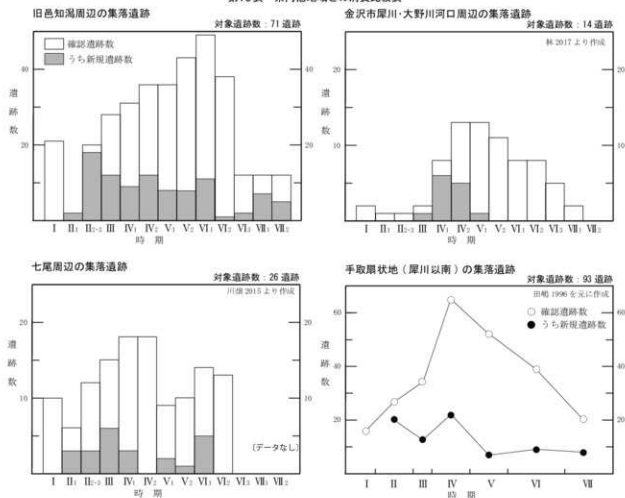
体の集落と考えられる。吉崎川下流に古代Ⅵ期に成立した深江遺跡(№14)は、詳細不明ながら、腰帯、緑・灰陶器が出土し、その立地を含めて新しい動きとして注目できる。Iグループでは、四柳白山下遺跡がE・G地区等で土石流災害が発生し、古代Ⅱ期に成立した集落域の大部分が埋没、集落域はF地区～羽咋市教委第4次調査区周辺に集約される。同時期には、旧邑知渴北東岸に面した大町C遺跡(№49)は、相欠式横板組(横板茶籠組)井戸周辺から多くの墨書土器が出土し、活発な活動が認められる。Mグループは、判然としないものの、Ⅵ期に成立する集落遺跡が目立つ傾向を示す。

〔古代Ⅶ期〕集落遺跡数は、古代Ⅶ₁期が10グループ12遺跡(新規成立7遺跡)、Ⅶ₂期が9グループ12遺跡(同5遺跡)を数える。古代Ⅵ期より続いた集落遺跡が確実に衰退・解体する一方、Ⅵ期以降に新たな集落遺跡が継起的に成立する状況にあり、古代Ⅴ₃期～Ⅶ₁期は集落遺跡の大きな再編期と位置付けられる。また、古代Ⅳ期に成立したB・C・Iの3グループを中核とするような集落遺跡の分布は、明瞭に確認できず、県内他地域でもみられる小規模・分散化した印象を受ける。

以上、旧邑知渴周辺の集落遺跡の消長は、集落遺跡数でみた場合、古代Ⅰ期及びⅡ期以降に急増し、Ⅵ₁期にピークを迎えるまで、集落規模の拡大やCグループに象徴される新規集落の成立を継続するといえる。そして、Ⅴ₃期以降に集落遺跡数が急減する状況から、Ⅵ₃期～Ⅶ₁期に継起的ながら、新たな集落構造に大きく再編されたと整理できる。四柳白山下遺跡でも、第Ⅳ面の掘立柱建物が密集する様相から第Ⅲ面への展開も、同質の流れに位置付けられよう。さらに古代Ⅴ期以降の、旧邑知渴を意識した低地への集落遺跡(上江モトオリ遺跡、深江遺跡、大町C遺跡等)の進出・活性化も、律令制の変質に起因する新たな動きといえる。

また、グループ間の様相でみれば、古代Ⅰ期は6世紀後葉の様相を継承しつつ、「北」の須恵器生産を行う羽咋砂丘東縁のBグループ、多数の横穴古墳群が分布する「南」のFグループ、そして計画性の

第79表 県内他地域との消長比較表

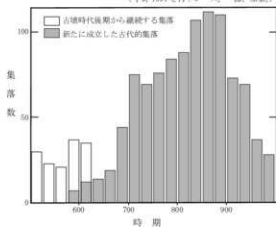


高い掘立柱建物群が象徴的な曾祢C遺跡が属するIグループが、中核的な3グループと理解できる。この3グループの優位性は、古代II₁期にみられる集落の再編期を経て、基本的にIII期まで継続したと考えられる。中でもBグループは、塩や須恵器の生産、律令国家を背景とする祭祀儀礼の執行から、III期までに卓越した存在に成長すると考えられる。また、古代寺院を建立しないIグループは、中心城を地獄谷川に面した曾祢C遺跡周辺から四柳白山下遺跡・四柳ミッコ遺跡周辺に移すとともに、複数の機能をもった集落遺跡群としての性格を示し始める。古代IV期になると、子浦谷のFグループが目立たなくなる一方、IV₂期以降は吉崎川水系のCグループが急速に集落遺跡数を増加させる。卓越した内容をもつ寺家遺跡が属するBグループ、古代寺院である杉野屋専光寺遺跡を擁するCグループ、四柳白山下遺跡が属するIグループという、異なる様相を示す3グループ（および羽咋郡衛比定地を含むDグループ）を中心とした集落展開は、古代VI₂期まで継続し、遅くともVII期に解体・再編されると考えられる。

次に、旧邑知湯周辺地域と県内の3地域³⁹⁾と比較を行う(第79表)。まず、養老2年(718)に第1次立

第80表 北陸道の集落遺跡数の推移表

(宇野1991を再トレース、一部、加筆。)



国、天平勝宝9年(757)に再び立国する能登国の国府が置かれた七尾周辺地域の様相を整理する。七尾周辺地域の集落遺跡数の推移は、古代Ⅱ₃期から増加し、Ⅳ期に盛期を迎えた後、Ⅴ期に半減、Ⅵ₁期に再び盛期を迎えるという、2つのピークが認められる。新規の集落遺跡の成立時期も、古代Ⅱ～Ⅳ₁期、Ⅴ₁～Ⅵ₁期に集中する。前者のピークは、立国に伴う東部・南部丘陵～古府扇状地を中心とした寺院、官衙等を含む各種遺跡の段階的成立を、後者のピークは、承和10年(843)の定額寺の国分寺昇格を含む古府扇状地～西部丘陵の集落活動の活発化を、それぞれ反映したものと考えられる。

金沢市臨海部の犀川・大野川河口周辺地域は、国や郡の管理する「津」を中核として、倉庫・管理を行う港湾施設群や養蚕・宿泊施設、また荘園関連施設や在地有力者の「宅」等の様々な機能をもつ遺跡が集積した地域である。第79表のとおり、古代Ⅳ期に新規遺跡の成立が集中し、弘仁14年(823)の加賀立国に伴う港湾機能の再編を経て、Ⅶ₁期までに衰退する。また、白山市～金沢市南部(犀川以南)の手取扇状地については、古代Ⅱ₃期～Ⅳ期に水系を単位とした開発に伴い新たな遺跡が急増、大部分はⅤ期のうちに衰退する。そして、古代Ⅵ期以降は、いくつかの水系に残存した長期継続集落に加え、新たな地点で比較的小規模な集落遺跡が成立する。

これらの3地域と比較した場合、旧邑知湯周辺地域は、新規集落遺跡の成立が古代Ⅱ₃期～Ⅵ₁期まで長期にわたり継続すること、集落遺跡数のピークが他地域より遅れるⅥ₁期にあること、集落遺跡の大きな再編期を6世紀後半と古代Ⅰ期、および古代Ⅰ期とⅡ₁期の境、Ⅵ₃期～Ⅶ₁期に認められることが指摘できよう。また、旧邑知湯周辺地域の消長は、北陸道(福井・石川・富山・新潟4県)の集落遺跡201遺跡の消長を整理した宇野隆夫氏の集計結果⁽⁴⁰⁾と一致する部分が多い(第80表)。氏は、律令社会の形成期である6世紀末～7世紀第3四半期に従来からの集落の再編・集約(集村)化が進み、この集村的集落形態が7世紀第4四半期以降の人口増をもたらしたとする。逆に、中世社会に向かう10世紀初め～11世紀初めには、集村的集落形態が次第に解体し、独立性を高めた小規模・短期の集落が分散化することで、埋蔵文化財包蔵地として発見しにくくなるものと考えた。現時点で、明快な答えを持ち合わせていないが、旧邑知湯周辺地域の集落遺跡の消長を考える上で、示唆に富む指摘である。

3 墨書土器等の出土傾向について

以下では、本遺跡の特徴の一つである墨書土器について、これまでの調査を含めて、現時点での整理を行う。A～C・E地区出土分は報告書Ⅲ第23・24表に、G地区出土分は本書第40・41表に、D・F地区出土分、J地区出土の2点(「法師」「吉継」)および羽咋市教育委員会第1～4次調査分は同第81表に、それぞれ取りまとめ、各報告書に掲載された墨書土器の総点数は379点を数える。これらの墨書土器の出土傾向をみるため、本遺跡が立地する扇状地を3等分(南部(A～C・E地区)、中央部(D・F・G地区、市教委第4次調査)、北部(H～K地区、市教委第1～3次調査))し、時期別に整理した表が第82～84表である。第81表のとおり、現時点で北部に含めたI～K地区の資料を欠くものの、中央部を中心にほとんど偏在することなく、墨書土器が出土している状況がわかる。また、時期ごとの推移でみれば、古代集落2期(Ⅳ₁期)～5期(Ⅴ₂期～Ⅵ₁期)の間、各期とも50点以上の墨書が出土しており、古代集落2～5期で全体の77%を占める。その中で、中央部の古代集落5期(F地区中心)、北部の古代集落2期(市第1・2次調査区中心)が比較的まとまって出土している。

第83・84表は、判読可能な墨書土器約70種220点の文字内容を整理した表である。文字内容の分類に関しては、一般的に役所名・官職・身分、施設・場所、人名・氏名、器名、用途名、数詞・容量、年紀・月日、吉祥句・呪句等に分けられる⁽⁴¹⁾が、本遺跡出土墨書土器については区分を明瞭にできない内容が多いため、便宜的に表のとおり8区分とした。この8区分での点数は、①本遺跡固有に近い特徴的

第82表 四柳白山下遺跡出土土器土器集計表

地区	実測 点数	集落1期		集落2期		集落3期		集落4期		集落5期		集落6期		時期不明
		前期	后期	前期	后期	前期	后期	前期	后期	前期	后期	前期	后期	
南部(期A～C-E地区)	133	3	27	22	28	25	11	17						
中央部(期D-F-G地区、山4次)	180	3	25	31	21	63	11	26						
北部(期H～K地区、山1～3次)※	66	6	31	8	6	5	0	10						
計	379	12	83	61	55	93	22	53						
	100%	3.2%	21.9%	16.1%	14.5%	24.5%	5.8%	14.0%						

※期1～K地区は「古跡」2点のみを集計。

第83表 四柳白山下遺跡出土土器土器内容別一覧表 1

文字 区分	文字内容	地区区分	実測 点数	集落1期		集落2期		集落3期		集落4期		集落5期		集落6期		時期不明
				前期	后期	前期	后期	前期	后期	前期	后期	前期	后期			
押 数 の 文 字 6 点	「乙上」 「□」(乙*)上 21点	南部	18		6	6	1	3							2	
		中央部	2												2	
		北部	1												1	
	「乙」 5点	南部	2					1	1							
		中央部	2		1	1										
		北部	1		1											
	「酒田」 12点	南部	0							1	4	1			2	
		中央部	12													
		北部	0													
	「□」(酒*)田 11点	南部	0													
		中央部	10		1	1					4	1			4	
		北部	1		1											
	「酒女」 2点	南部	0							1						
		中央部	1							1						
		北部	1							1						
	「酒」 7点	南部	0													
中央部		7			2					3				2		
北部		0														
「田地」 13点	南部	4		1	1											
	中央部	6		1	1	1	1	3								
	北部	3		1			2									
「田地八十」 2点	南部	0														
	中央部	0														
	北部	2	1	1												
施 込 名 4 点	「上家」 「上」上 5点	南部	3		1			1							1	
		中央部	2									1				
		北部	0													
	「下家」 7点	南部	7	1	2	2	2									
		中央部	0													
		北部	0													
	「東家」 「□」(東*) 「□」(東*) 3点	南部	0													
		中央部	0													
		北部	3	2	1											
	「原家」 「原」(原*) 4点	南部	3				1	1	1		1					
		中央部	1			1										
		北部	0													
	「東」 「人」(東*) 3点	南部	0													
		中央部	4									2 (各1)				
		北部	0													
	「青家」 「青」(青*) 6点	南部	6				1	2	2	2	1					
中央部		0														
北部		0														
「東」 「東」 7点	南部	4				2	2	2								
	中央部	3			2	1										
	北部	0														
「櫻野」 「二」 「櫻野」 3点	南部	3						2	1							
	中央部	0														
	北部	0														
「小」 1点	南部	1		1												
	中央部	0														
	北部	0														
寺 名 文 字 5 点	「寺」 4点	南部	3							3						
		中央部	1		1											
		北部	0													
	「法師」 1点	南部	0													
中央部	0															
北部	1	1														

※地区区分は、南部は期A～C-E地区、中央部は期D-F-G地区、北部は期H～K地区、山1～3次を指す。


文字73点(33.2%)、②施設名43点(19.5%)、③寺関連文字5点(2.3%)、④地名的文字10点(4.5%)、⑤人名的文字30点(18.2%)、⑥吉祥句13点(5.9%)、⑦記号的文字14点(6.4%)、⑧その他22点(10%)となり、特徴的文字、施設名、人名的文字で全体の約70%を占める。一方、吉祥句や記号的文字は各6%前後と、かなり少ないことがわかる。

本遺跡固有に近い文字は、集団表示機能を含むとされ、「乙」「乙上」、「酒田」「酒女」、「田地」「田地+数字」の3種に大別できる。「乙」「乙上」は、古代集落2・3期は南・中央・北部とも出土するが、古代4・5期は南部のみとなる。一方、「酒田」「酒女」は南部では出土しない。「田地」は、古代集落2期以降、南・中央・北部とも確認でき、「田地」と「八十」の組み合わせは、古い時期に北部のみに限られるようだ。

施設名は、それぞれが特定の建物を指す、「上家」(略形の「上」)、「下家」、「東家」、「屋東」、「東」、「大家」、「青家」(略形の「青」)、「家」、「榎野+数字」、「小庭」が確認でき、「小庭」は人名の可能性を残す。「家」を記する施設のうち、「上家」「上」と「下家」が対となり、それぞれの出土傾向から「下家」は本遺跡南寄りに存在した施設と考えられる。時間的な変遷は、古代集落1期に南部に「下家」(+「上家」)、北部に「東家」と記する施設が存在、古代集落2期に中央部に「屋東」「東」と記する対象となる「屋」が加わるようだ。また、古代集落3期に南部で「青家」、中央部で「大家」と記する施設が出現する。「大家」が短期間で廃絶するのに対して、「青家」は中央部の「上家」「屋」とともに、古代集落6期まで存続する可能性が高い。「家」墨書は南部・中央部に、「小庭」墨書は南部で確認できる。古代集落4・5期に南部で確認できる「榎野」は、「一」の数字が付すことから複数の建物群を指す可能性をもつ。寺関連の文字は、「寺」「法師」の2種が確認できる。J地区出土の「法師」は、出土墨書群の中でも古く、用途に近い内容といえる。「寺」墨書は、古代集落2期の中央部で1点、古代集落5期の南部で3点が出土、同一の建物を指すかは不明である。瓦片や瓦塔の出土をみないことから、小規模な仏堂程度の建物の存在が考えられ、古代集落5期には灯明痕をもつ坏類や仏器的な土師器大型盤が出土、活発な活動が推測できる。

地名的文字は、「罌本」1点、「大町」6点、「大海」3点の3種10点が確認できる(第83表)。「罌本」は、宝達志水町杉野屋専光寺遺跡からも出土する文字であり、「和名類聚抄」に羽咋郡郷名に同名の郷の記載があるが、その評価は判然としない。「大町」の文字は、北西約1kmの旧邑知潟津に立地する大町C遺跡(第4図)からも出土、両遺跡は「大町」と呼ばれるような一体性を有したと考えられる。本遺跡の文字が古代集落2期に出現するのに対して、大町C遺跡は古代集落6期(VI₂~VI₃期)の土器に記され、集落規模からも、本遺跡が先行するものと考えられる。南部で出土した「大海」は、やはり「和名類聚抄」羽咋郡郷名に同名の郷記載があるものの、旧邑知潟を指した可能性が高いように感じられる。

人名の墨書は、男性的な「玉万呂」、「万呂」(略形の「万」)、「小足」、「忍人」の4種27点、女性的な「倉富女」、「足女」、「菅女」、「榎女」、「女」、「若枝」、「□□(刀自カ)」の7種13点を確認、女性的な文字が新しい傾向を示す。「玉万呂」が中央部・北部で、「小足」が南部に偏在するのに対して、「万呂」(略形の「万」)、「忍人」は比較的広範な地点から出土する¹⁴⁷⁾。また、「倉富女」3点は、羽咋市教委第2次調査で検出した倉庫様の総柱構造の建物プラン内から出土しており、建物に対する祭祀行為と位置付けられている¹⁴⁸⁾。「榎女」は、古代集落5期の中央部でまともって出土する。

低い量比を示す吉祥句は、古代集落2期までは南部出土の「大」「大成」「吉」各1点にとどまるのに対して、古代集落4期以降は特定の文字に偏在せず、「吉継」「福」「満」「得」「本」が少数ながらも各地区から出土、古代集落6期は5点と全体の半数を占める。管理的要素が強いとされる記号的文字は、前述のとおり、全体に占める比率は高くない。古代集落2期まで「×」に限られていたものが、古代集落5期以降は「」が加わり、その点数も増加傾向を示す。その他に区分した文字は多岐にわたり、文字内容が判読しにくい個体が多い。中では、古代集落4・5期の中央部で「仲」が目立つ存在である。

第84表 四柳白山下遺跡出土土書土器内容別一覧表2

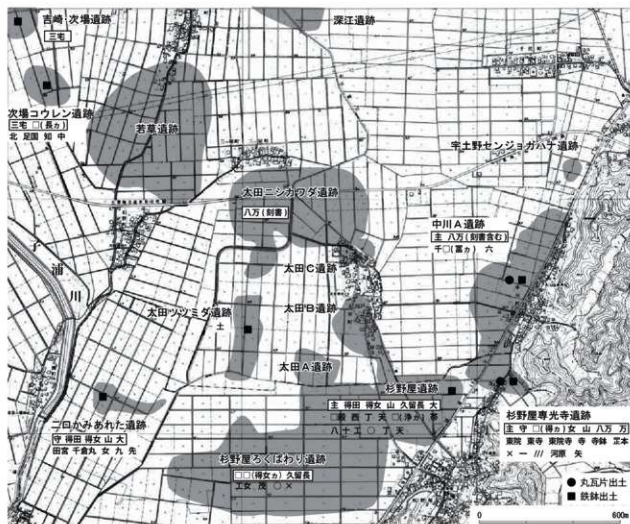
文字区分	文字内容	地区区分	実測 点数	集落1期	集落2期	集落3期	集落4期	集落5期	集落6期	時期不明
				目録	目録	目(古)期	目(新) ~ V期	V ₂ ~ VI期	VI ₁ ~ VI ₂ 期	
地名 文字 10点	「本木□」1点	南部	0			1				
		中央部	1							
	「大町」 「□(大+)町」 「大□町+」6点	南部	0							
	中央部	6		1	3		2			
	北部	0								
	「大海」3点	南部	3			1	2			
中央部	0									
北部	0									
人名 文字 男性 25点	「土万呂」1万 10点	南部	0							
		中央部	4		2		2			
		北部	6	1	2	2			1	
	「万呂」□万呂」 「□万」□万呂」 「□万呂」万」10点	南部	1		「万呂」1					
		中央部	5		「万」1	2	1		1	
		北部	4		2	2				
	「小足」□足」 2点	南部	2		「□足」1					
		中央部	0							
		北部	0							
	「足人」 「足□(人+)」 「□人」5点	南部	1			1				
中央部		0								
北部		4		3		1				
人名 文字 女性 13点	「倉屋女」倉屋 3点	南部	0							
		中央部	0							
		北部	3		3					
	「足女」点 「曾女」点 「根女」点	南部	1				「足女」1			
		中央部	5			「曾女」1		「根女」4		
		北部	0							
「□女」点 「女」1点	南部	1		「女」1						
	中央部	1					「□女」1			
	北部	0								
「若枝」点 「□□(万自+)」 1点	南部	2					「若枝」1			
	中央部	0						「□□(万自)」		
	北部	0								
吉祥 文字 13点	「大」1点 「大成」点	南部	2		各1					
		中央部	0							
		北部	0							
	「吉勝」2点 「□(吉+)」点	南部	2	「□(吉+)」1			「吉勝」1			
		中央部	0							
		北部	1				「吉勝」1			
	「根□」点 「□(根+)」 5点	南部	4					2	2	
		中央部	1					1		
		北部	0							
「漢」点 「得」点 「本」点	南部	1				「漢」1				
	中央部	2						「得」「本」各1		
	北部	0								
記号 文字 43点	「田」点 「□(田+)」 7点	南部	4					1	3	
		中央部	1					1		
		北部	2		1			1		
	「十」× 連書「十」 6点	南部	3	連書1	2			1	2	
		中央部	3							
		北部	0							
「○」点	南部	0								
	中央部	0								
	北部	1					1			
その他・不明 18点	南部	1		「得」1						
		1					「□(兼+)」1			
		1					「日」1			
		1					「左□□」1			
		1						「林□」1		
		1						「舟□」1		
		1							「知」1	
		3					「得」1	「得」「□得」各1		
		1	「□得」1							
		1				「三□」1				
	1				「空」1					
	中央部	1								
		1								
		1								
		1								
		1								
		1								
		1								
		1								
		1								
1										
北部	1									
	1									
	1									
	1									
判読できず	南部	45	0	8	7	5	10	3	12	
	中央部	86	2	12	15	11	26	7	13	
	中央部	28	1	13	3	1	2	0	8	
	北部									

以上、本遺跡出土の墨書土器の特徴を整理すれば、①古代集落2期(Ⅳ期)以降に墨書土器が急増、その点数(397点)や種類(約70種)が多いこと、②判読可能な文字内容は集団表示とも考えられる本遺跡固有の特徴的な文字(「乙」・「乙上」、「酒田」・「酒女」、「田地」)と、在地性が高い「家」を主体とする施設名(「上家」・「下家」・「東家」・「大家」・「青家」・「家」・「屋家」等)、人名的文字(「玉万呂」・「万呂」・「倉富女」・「梗女」等)で約70%を占める一方、管理的要素が強いとされる記号的文字や、一般にⅤ期(古代集落4期)以降増加する吉祥句が各6%前後と低い比率を示すこと、「長」等の役職名が存在しないことが指摘できる。また、「寺」墨書は仏堂の存在を示す他、「大町」墨書は本遺跡周辺の地名の可能性が高い。

次に、第336図、第78表で示した旧邑知潟周辺地域の集落遺跡との対比の中で、本遺跡の墨書土器の様相を位置付けたい。第78表の71遺跡中25遺跡で墨書土器が出土し、調査面積や調査箇所 성격に左右される要素が強いものの、一定の調査面積があれば、数点以上の墨書土器が出土する状況にある。一方、発掘調査報告書等で掲載された墨書土器約1,013点については、Bグループの寺家遺跡(№3)が314点、Iグループの本遺跡(№46)が397点、Cグループの「杉野屋遺跡群」(文字の共有等が認められる№15～25の遺跡を仮称、後述)が約212点と、全点数の約91%を占めており、強い偏在性を示す(残る22遺跡で計90点)。墨書土器の出土点数が、識字層と用途を背景として、各遺跡の性格を反映することも事実であろう。これらの点数・時期や文字内容の遺跡間共有関係については、第85・86表に示した。全体の傾向として、各グループ内における文字共有がかなり認められるものの、多くのグループで出土する文字は「南」「西」等の方位のみを記す施設名や、職名的文字「長」、吉祥句「大」に限定されるようだ。施設名・職名的文字については、国家が関与して神祇祭祀を執り行う寺家遺跡で「司」「宮」「中家」「長」「南」「神」が、杉野屋遺跡群で「□殿」「久留長」「長」「田宮」「西」が、長者川遺跡(№26)で「□鳥家」が、高畠カタラスギモト遺跡(№52)で「家」がそれぞれ出土する。四柳白山下遺跡のように複数の「家」が並存する事例はみあたらない。また、旧邑知潟に面した吉崎・次場遺跡(№1)で「三宅」、次場コウレン遺跡(№2)で「三宅」「長」、大町C遺跡で「前宅」「長」が出土、庄家の可能性をもつ「宅」の文字は9世紀以降に用いられるようだ。「寺」の文字は、寺家遺跡、杉野屋遺跡群で「寺」が確認できる他、杉野屋遺跡群の杉野屋専光寺遺跡では「東院寺」「東寺」「東院」が出土する。

主要遺跡内での文字内容の構成で比較した場合をみてみたい。寺家遺跡については、9世紀前半の神祇関連の厨施設と考えられる北部建物群・2号井戸周辺では記号的文字「/」・「//」が、9世紀後半の宮司館と考えられる中央建物群では吉祥句「大」が、8世紀後半以降に祭祀が始まる祭祀地区では記号的文字「/」・「//」・「///」と吉祥句「大」「太」が、それぞれ主体を占める^[44]。寺家遺跡総体の文字構成は、所有・管理を主目的とする施設名・職名的文字と記号的文字、吉祥句が大部分を占め、人名的墨書が基本的に欠落する点が指摘可能である。また、杉野屋遺跡群は、「主」「守」「得女」「得田」「八万」「山」「帯」の文字共有が指摘されており^[45]、「○」「×」等の記号的文字が比較的目立つ他、「万呂」「女」等の人名的文字や「丁」も散見する(第339図)。杉野屋遺跡群総体の文字構成としては、特徴的な文字(「主」「守」「得女」等)を主体に、施設名・職名的文字(「□殿」「久留長」「長」「田宮」)、寺関連文字「八万」^[46]、記号的文字で構成され、杉野屋専光寺遺跡で寺院関連文字(「東院寺」「東寺」「東院」「寺鉢」)が加わる。四柳白山下遺跡とは、その多様性が近い要素といえ、施設名より職名的文字が多い点が異なる。

次に、旧邑知潟周辺の腰帯、皇朝銭、多彩陶、施釉陶器、銅鏡、鉄鉢の出土状況を概観する(第87表)。腰帯は、Bグループの寺家遺跡22点が卓越し、Aグループの吉崎・次場遺跡で2点、Cグループの杉野屋遺跡群で2点、Iグループの本遺跡で6点、Kグループの久江サザミヤシキ遺跡で1点がそれぞれ出土する。皇朝銭も同様な傾向を示すが、Cグループでは出土をみない。多彩陶はBグループの寺家遺跡でのみ確認できる。施釉陶器は、Bグループの寺家遺跡34点の他、A・C・I等のグループ11遺跡で出

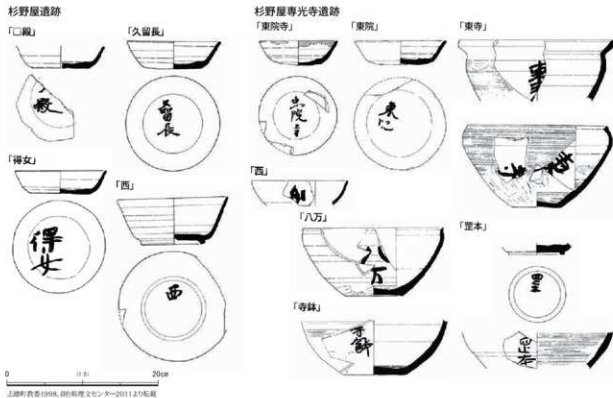


第339図 杉野屋遺跡群の文字共有等関係図(S=1/16,000)

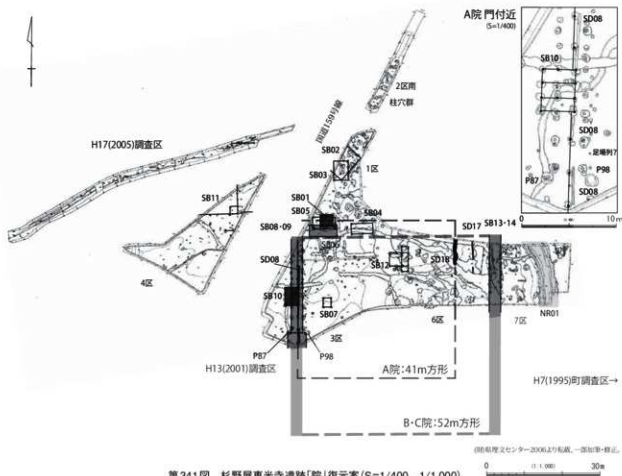
土し、一定の広がりをもった使用が推測できる。仏器である銅鉢は4遺跡で、須恵器鉄鉢は杉野屋専光寺遺跡を中心として9遺跡で、それぞれ出土する。これらから、腰帯、皇朝銭、施釉陶器については、前述の3グループに加え、旧邑知湯南岸のAグループが目立つ存在であることが指摘できる。

4 杉野屋遺跡群の性格について

本遺跡の位置付けを整理するうえで、旧邑知湯南側の吉崎川水系に分布するCグループ杉野屋遺跡群の性格について若干の検討を行う。杉野屋遺跡群については、東西約2km、南北約1.5kmの範囲に前述の墨書土器内容の共有関係から、一つの生活圏と考えられる11遺跡(第339図、第78表№15太田ニシカワダ遺跡～№25宇土野センジョガハナ遺跡)を総称して呼称するものであり、県営ほ場整備事業、国道改築事業等に伴う発掘調査が相次ぎ、その様相が少しずつ判明しつつある。杉野屋遺跡群の消長は、第2項で述べたとおり、Ⅱ₃期～Ⅲ期が丘陵寄りの2遺跡(杉野屋遺跡、中川A遺跡)であったものが、Ⅳ₁期に太田ツツミダ遺跡、杉野屋ろくばわり遺跡の2遺跡が、さらにⅣ₂期に二口かみあれた遺跡、杉野屋専光寺遺跡等の5遺跡がそれぞれ加わることで、9世紀初めまでに遺跡数は急増、Ⅴ～Ⅵ₁期に多数の墨書土器を伴いながら盛期を迎える。また、第3項のとおり、遺跡間の強い連携を示唆する墨書土器の文字内容や鉄鉢の共有関係に加え、二口かみあれた遺跡の「田宮」(Ⅳ₂期)や、杉野屋ろくばわり遺跡の「久留長」、杉野屋遺跡の「□殿」「久留長」「西」(Ⅳ₂期～Ⅴ期)、杉野屋専光寺遺



第340図 杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡出土墨書土器実測図 (S=1/5)



第341図 杉野屋専光寺遺跡「院」復元案 (S=1/400、1/1,000)

跡の「東院寺」「東寺」「東院」「寺跡」「西」(Ⅳ₂期～Ⅵ₂期)等の各遺跡特有の文字が確認できる(第339・340図)。さらに、杉野屋遺跡群の特徴の一つとして、8世紀後半(末頃か)に条里地割りが施行された可能性が高いことが指摘されている⁽⁴⁷⁾。遺跡群の西端に位置する二口かみあれた遺跡では、南北方向に主軸方位をもつSD201・209(道路状遺構の両側溝、溝心々距離約15m)、SD257(幅4.5～7.5m)を検出、SD201・257間の溝心々距離は約105mを測る。また、約1.8km東側の杉野屋専光寺遺跡(第341図)では、1区SB02(N-48°E)と、その他の建物(N-4°W～N-3°E)のように、2つの方位による土地規制が認められ、後者の方位が後出する。この2つの土地規制は、中川A遺跡等の各遺跡の溝を中心に広範な範囲で確認できる。

杉野屋遺跡群を特徴付ける遺跡として、寺院跡の杉野屋専光寺遺跡がある⁽⁴⁸⁾。平成13・17年度に(財)石川県埋蔵文化財センター実施の発掘調査で、甍瓦葺き建物を含む内部の施設は判然としないうもの、北を指向する3期の変遷をもつ区画施設を確認している。第341図は、調査報告書を元に3つの「院」を復元したものであり、A院→B院→C院の順に、おおむねⅤ₂期～Ⅵ₁期(Ⅵ₁期主体)に変遷すると考えられる。A院は、西辺の「遮蔽施設」・SB10と東辺のSD18からなり、西辺のみを整備する約41m方形の「院」を考えた。「遮蔽施設」は、7間分の柱穴列(柱間寸法約3.5m)とSD08で構成される縦板塀(N-3°E)である。さらにSD08が途切れ、柱間寸法が異なるP82～P76間に、縦板塀と柱筋をあわせてSB10(総柱構造の3×2間(4.2×3.4m)と判断)が位置することから、西側を正面とする3間1戸の八脚門と考えたい。また、東辺のSD17・18間は幅約5mを測り、通路ともみれる。B院は、西辺をSB08(9×1間、桁行柱間寸法約2.7m、梁間柱間寸法3m)、東辺をSB13(4×1間、同約2.8m、3m)という2つの回廊で画し、約51mの間隔で平行する(N-1°2°E)。報告書では、SB13に南接する大型柱穴P87・98を門支柱(四脚門か)とすることから、P87・98付近を中心線とする約51m方形の区画施設を復元した場合、北辺はSB06南桁行付近に設定できる。南北辺は、板塀と建物で構成された区画施設の可能性が高い。C院は、B院と重複して建てられ、B院と同じ構造をとる(N-3°E)。西辺の回廊はSB09(8×1間、桁行柱間寸法約2.9m、梁間柱間寸法3m)、東辺の回廊はSB14(4×1間、同約3m、3m)であり、西側を正面とする西辺の門は、B院の門を建て替えないうだ。なお、「院」の国道159号線を挟んだ西側および北側に主軸方位を同じくする掘立柱建物群が展開し、自然流路NR01を挟んだ東側谷部入口の丘陵裾に志雄町教育委員会調査区が位置する。志雄町教育委員会の調査⁽⁴⁹⁾では、当該期の溝状遺構約20条、井戸6基、水場遺構(SX108)等を検出、廃棄された丸瓦片や「東院寺」等墨書土器、多量の鉄鉢の出土から、調査区外の北側丘陵裾を中心とした、「東院寺」の祭祀場あるいは厨房施設が想定できる。このように、本遺跡は「院」を中心として、周辺に雑舎や厨房施設、祭祀場を伴う空間構造をもつと考えられる。

さて、本遺跡の性格は、「院」外にも拡がる一定の空間を占有した寺院であることは間違いない。その位置付けに関して、杉野屋周辺に設置された羽咋郡衙(Dグループ周辺が通説)の別院「東院」に付属した寺院との解釈が提起されている⁽⁵⁰⁾。そして、「東院」の成立要因を、天平13年(741)の能登国の越中国併合を契機とする、能登・加嶋地方と越中国西部を結ぶ陸路・物流の再編・強化に求める。この提起に関して、①隣接地域の発掘調査の蓄積にも係らず郡衙別院「東院」本体が未検出であること、②杉野屋専光寺遺跡出土の「東院寺」「東院」「東寺」の文字は「東」を重視し、「院」と「寺」が同義的であること、③杉野屋遺跡、杉野屋専光寺遺跡から「西」墨書が出土し、「東」の対となる「西」が杉野屋遺跡を指すとの解釈が可能であること、④郡衙別院周辺の寺院建立が全国的には白鳳期に集中すること⁽⁵¹⁾、⑤杉野屋遺跡群の盛期が能登立国より大きく遅れること等の多くの課題が残る。ここでは杉野屋遺跡群を、天平15年(743)の壱田永年私財法以降、遅くとも9世紀初頭までに施行された羽咋郡の条里地割りを前提として、小規模な新規集落・管理施設を点在させながら配した、新たな壱田開発・経営に係る遺跡

群と位置付けたい。その開発主体については、8世紀前半に確認できる2遺跡(「久留長」「□殿」墨書出土の杉野屋遺跡、「八万」墨書出土の中川A遺跡)を本貫地とする在地の中小有力者層と考える。金沢市・白山市に所在する東大寺領横江荘遺跡⁽⁵²⁾では、条里地割りに基づき、横江荘遺跡を中核に上荒屋遺跡、中屋サワ遺跡等の集落・管理施設・倉庫群・寺院を点在させた土地開発・経営や、杉野屋専光寺遺跡B・C院と近似した構造をもつ回廊状遺構(一辺約50m)の存在、多量の墨書土器や祭祀遺物の出土が確認されており、成立・存続時期にも並行する部分が多い杉野屋遺跡群の空間構造を考える一助となる。初期荘園とする文献や墨書土器等の直接的史料を欠くものの、能登地域における初期荘園事例に整理可能であり、東大寺領横江荘遺跡より「院」の果たす役割が高いようだ。

第4節 総括 - 古代の四柳白山下遺跡の評価を中心として -

1 古代の旧邑知湯周辺の公的景観について

古代の四柳白山下遺跡を評する場合、これまで旧邑知湯に面した水陸交通の結節点に位置する、能登郡「与木郷」に属した「官衙的」集落であり、古代北陸道能登路に設置された「撰才駅」有力候補地という情景を思い浮かべる場合が多いと考える。以下では、三浦純夫氏の論考⁽⁵³⁾に導かながら、本遺跡が能登郡「下日郷」に属した「官衙的」施設や小規模な「寺」を含む大規模集落であるが、古代北陸道能登路「撰才駅」候補地とならないことを説明する。また、古代北陸道能登路ルートや羽咋郡衙等についても若干触れ、本遺跡を取り巻く公的景観の復元を試みる。

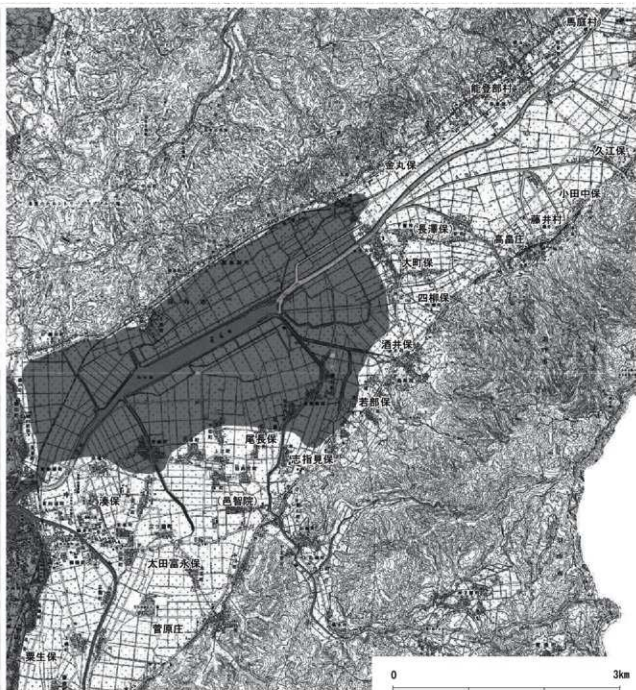
本遺跡周辺の駅家に関する文献史料には、「日本後記」大同3年(808)10月丁卯条「丁卯、癸能登國能登郡越蘇、穴水、鳳至郡三井、大市、待野、珠洲等六箇駅、以不要也」と、「延喜式」兵部省諸國伝馬条「能登國驛馬 撰才 越蘇 各五疋」がある。また、郷名については「和名類聚抄」大東急記念文庫本に、能登郡郷名として「上日 下日 越蘇 八田 加嶋 与木 能來 長濱」があり、「与木」には「与支」の訓が記される。式内社については、「延喜式」神名帳に能登郡十七座の一つとして「餘木比古神社」の名がみえる。

これまで、(a)本遺跡北側の大町集落に餘木比古神社が鎮座することから、神社周辺が「与木郷」比定地であること、(b)「撰才」は「撰木」の誤記であり、「よるき」または「よりき」の読みが「与木」に通じるとして、三段論法的に導かれた「撰才駅与木郷説」が通説に近い位置付けとなっている。三浦氏は、明治時代初めの神仏分離令に係る式内社調べの中で、それまで所在地不明であった「延喜式」神名帳の「式内社餘木比古神社」が、複数の候補の中から、大町村に鎮座する「大將軍社」に定まり、式内社の鎮座をもって、明治22年(1889)に近世まで使われなかった村名である餘木村(酒井、大町、下曾柿、金丸出、四柳5村が合併)が成立した経緯を詳述する。また、承久3年(1221)に能登国衙が作成した「能登国四郡公田田数目録案」鹿島郡の荘園・公領の記載順が、「和名類聚抄」能登郡郷名の記載順を踏襲することを指摘、古代「与木郷」を再編した「与木院」を七尾市大津川流域付近に求めた。氏の論は、(a)が根拠に乏しいことを明らかとし、さらに「与木」を前提とした、(b)及び「撰才駅与木郷説」も根拠を失うと断じた。氏の論旨は、第88表、第342図で示したとおりであり、明らかに本遺跡周辺は与木郷比定地とはなりえない。本遺跡の所属郷は、能登郡下日郷とみるのが妥当と考える。

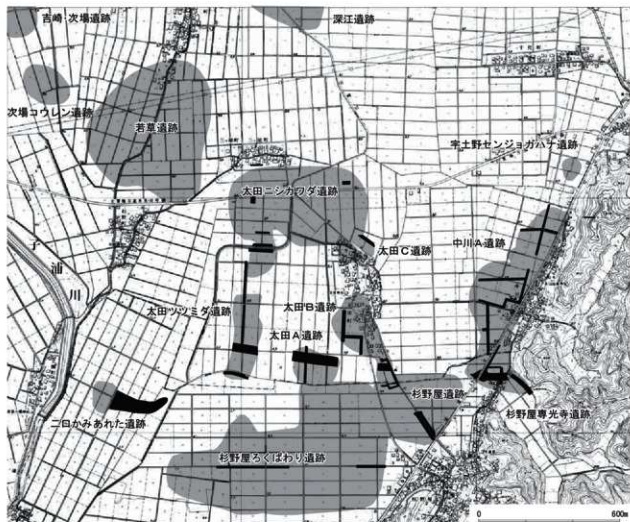
次に、古代北陸道能登路ルート、羽咋郡衙・郡津について若干触れたい。古代北陸道能登路に設置された駅家は、現在も残る地名から「横山駅」がかほく市横山近辺に、「越蘇駅」が七尾市江曾町近辺に置かれたと考えられる。古代北陸道能登路は、この横山・越蘇両駅(約35km)を直線的に結ぶルートが

第88表 記載順の比較

神戸	長浜 (赤加波嘉)	熊栄 (久高軒)		歟木 (歟岐)	加島 (加之高)	八田 (也多)	越曾 (忠宮)	下日	上日 (阿佐比)	能登郡	〔和名類聚抄〕 郷名記載順								
	熊木院	豊田保	笠師保	与木院	吉田保 (略)	南海通保	越曾郷	久江保	小田中保	長澤保	金丸保	大町保	四柳保	酒井保	藤井村 (略)	一青庄	上日庄	鹿島郷	〔能登国四郡公田 田数目録案〕 記載順

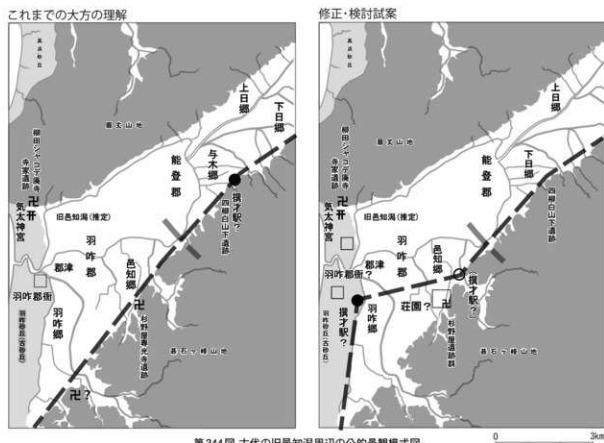


第342図 旧色知川周辺の荘園、公領分布想定図(S=1/60,000)



第343図 杉野屋遺跡群の発掘調査地点位置図(S=1/16,000)

想定されている。このルートは、能登国に入ると、現宝達志水町宿・敷浪付近で若干北東側に折れ、碓石ヶ峰山地前線に添う通称「東往来」(旧国道159号線)付近を通して、七尾市(越蘇駅・能登国府)を目指すことされ、撰才駅も宿～杉野屋遺跡群周辺のルート上のいずれかに比定地をもつ。しかしながら、第340図に示したとおり、杉野屋専光寺遺跡の院北西隅と国道159号線の位置関係、院外に一体性をもつ建物が想定できることから、現国道幅の中に、古代北陸道能登路(津幡町加茂遺跡で当初の路面幅約8m(側溝を含めれば約10m)と推測)を求めることは、かなり困難と考えられる。また、県営は場整備等に伴う試掘調査で、ほぼ遺跡範囲が確定している杉野屋遺跡群の一連の発掘調査(第343図)では、道路側溝と確定できる遺構は確認されない。7世紀末～8世紀初頭が敷設期とされる古代北陸道能登路が、8世紀後半以降の集落適地(微高地)を避けて、意図的に低湿地にルート設定したとも考えにくい。古代道路は「目的地に最短距離で到達するように直線的路線」^[54]をとる。古代道路敷設当時は、武生に国府を置く越前国に属した時期であり、県内に国府は存在せず、各郡衙は「同列的」存在であったと推測できる。越前国の各郡衙を「目的地」とし、その「最短距離」をルート設定の最重要事項と考えた場合、横山駅から旧羽咋市街地周辺に比定される羽咋郡衙まで旧砂丘上をほぼ直進、その後、杉野屋遺跡群北辺の旧邑知渴南側を通り、羽咋市飯山付近から旧邑知渴および低湿地が避けながら、旧国道159号線とほぼ重複するルートをとる可能性も検討すべきと考える。なお、本遺跡周辺の能登路ルートは、酒井バンドウマエ遺跡^[55]や、本遺跡を含む鹿島バイパス、県営は場整備事業に係る一連の発掘



第344図 古代の旧邑知潟周辺の公的景観模式図

調査で古代北陸道能登路に比定しうる道路遺構が未検出であることから、碓石ヶ峰山地裾を走る旧国道159号線とほぼ重複するルートとみるが妥当である。

羽咋郡衙については、羽咋七塚等の古墳分布、羽咋神社の鎮座地、「羽咋正院」と地元で呼ばれたこと、長者川遺跡(Na26)出土の「□鳥家」墨書等を主な根拠として、旧羽咋市街地近辺に比定し、幅約1.5kmにおよぶ厚い新砂丘に埋没しているとの考えが多い。文献史料でみれば、前述『能登国四郡公田田数目録案』の羽咋正院記載順は、現在の志賀町内を比定地とする土田庄、堀松庄の間であり、公領の位置は推測可能であるが、「羽咋正院」自体の所在地は判然としない。また、浅香山木氏⁽⁵⁶⁾は、建武5年(1338)の平行兼寄進状に「能登国湊保南方兵庫村」、貞和3年(1347)の無底良留寄進状に「羽咋湊保古崎」とあることから、旧邑知潟南西縁～羽咋川・子浦川下流域に湊保及び郡津を求め、その西側に羽咋正院及び羽咋郡衙が位置すると考えた。現時点で明快な解は持ち合わせないものの、①近代まで御陵山古墳を盟主とする羽咋七塚が旧状を保持し、旧羽咋市街地の大部分(標高3～4m台)が14世紀代の新砂丘にほとんど被覆されていないこと、②その旧羽咋市街地で古代の遺物出土例がないこと、③戦後の新砂丘の諸開発によっても古代の遺物採集、遺跡の確認例が限られること、また、④7世紀以降の「羽咋国造」羽咋公一族と関係が深いとされる主要な古墳分布や柳田シャコデ廃寺の建立に象徴される政治的中心が羽咋川以北のBグループに属することは、指摘可能であろう。羽咋川河口周辺と考えられる羽咋郡衙比定地に関しては、今後とも慎重な検討が必要と思われる。

以上、旧邑知潟周辺の郷比定、古代北陸道能登路・駅家、郡衙・郡津の現況・課題等を述べた。卓越した存在であるBグループの寺家遺跡の存在や、Cグループの杉野屋遺跡群を初期荘園とみた場合、第344図のような旧邑知潟周辺の景観も復元可能と考える。

2 古代四柳白山下遺跡の評価に向けて

古代(第Ⅳ面)の四柳白山下遺跡の評価に向けて、これまでの調査で得られた立地、消長、検出遺構、出土遺物等の概要を整理し、不足する部分については第6・7次調査(H～K区)の報告で補いたい。

立地 本遺跡は、旧邑知湯の東側約700mの小扇状地に展開する大規模集落遺跡で、調査区外東側の碁石ヶ峰山地裾には古代北陸道能登路が走ると推定できる。陸運のみならず、旧邑知湯湯に面した大町C遺跡を介して水運の利便性も高いことから、律令制下では能登郡最南端に位置する水陸交通の重要な結節点の一つといえる。

消長 7世紀前半代に盛期をもつ地獄谷川水系の勢力(曾根C遺跡、曾根古墳群)と入れ替わるように、7世紀末葉から四柳ミッコ遺跡等とともに急速に規模を拡大、内容も充実する。8世紀を通じた最盛期の集落規模は、南西～北東方向で約200m、南東～北西方向で約300mを測り、小扇状地の大部分および東側の舌状台地(四柳貝塚等)にもひろがる。出土遺物の傾向から、7世紀末葉～8世紀前葉頃は集落域北側(および四柳ミッコ遺跡)の活動がより活発であったと推測できる。律令制下では、能登郡下日郷に属し、大町C遺跡を含めて「大町」と称されるようだ。また、本遺跡を中心とする集落遺跡群は、寺家遺跡(および羽沓部衛、撰木駅?)を中心とする集落遺跡群、初期荘園である杉野屋遺跡群とともに、旧邑知湯周辺地域の主要遺跡群と位置付けられる。この第Ⅳ面の集落は、10世紀初頭(VI₂期)に発生した土石流災害3で、大半が埋没するもの、10世紀前葉(VI₃期)に扇状地中央付近(県F地区周辺)で新たな集落構造に転じた建物域が形成される。なお、鹿島バイパスに伴う発掘調査は、集落域の西隅に近い部分を幅約30mで縦断したこととなる。

検出遺構 黄色粘土粒を混ぜた比較的規模の大きい整地作業(A～C・G地区)を併いながら、集落域を形成する。建物は、堅穴建物・堅穴状遺構6棟(県A地区SBT1～3、F地区SX402～4)以外は、全て掘立柱建物となる。復元した掘立柱建物は、県A～H地区、市教委1～4次調査で110棟を超え、検出した柱穴数から実棟数はさらに増える。明確に倉庫となる2×2間の総柱構造の建物は4棟(平面積8～15㎡、県C地区SB3、市2次SB04・05)に限られ、総柱構造の倉庫群は周辺遺跡を含めた、いずれかの一定のエリアに集中するものと推測できる。掘立柱建物の大部分は、梁間寸法を狭い幅広の側柱構造であり、その規模は平面積40㎡以下(平面積20～30㎡主体)で、B地区SB22(5×3間、53㎡)のみが突出する。これらの建物は、一定の敷地単位ごとに建て替えを行い、小扇状地の特性もあり、同時期の建物全てを一律に規制する主軸方位はみだしがたい。また、小扇状地で最も標高が高い県D・F地区では建物が密集・重複する一方、市教委1～3次のように数回建て替えにとどまる調査区も存在する。井戸は、県B地区SE1・SK8(古代集落3・4期)、G地区SE4001(同4期)に限られ、後者は齋串を用いた小規模な祭祀を行なう。

出土遺物 ①扇状地の堆積作用を加味しても、須恵器、土師器を主体とした多量の遺物が出土する。②須恵器坏類を主体に約400点の墨書土器が出土する。現時点で、この点数は旧邑知湯周辺地域の中で寺家遺跡、杉野屋遺跡群とともに突出した点数となる。また、須恵器製碗の点数は限られるものの、須恵器坏・蓋類を用いた転用碗は多数にのぼり、本遺跡における継続な識字層の存在と活発な文書作成行為を示す。③墨書土器は多種にのぼり、本遺跡特有の集団表示とも考えられる文字(「乙」「乙上」、「酒田」「酒女」、「田地」と、在地性が高い「家」を主体とする多種の施設名(「上家」「下家」「東家」「大家」「青家」「家」「屋東」)、人名的文字(「玉万呂」「万呂」「倉富女」「梗女」)で全体の約70%を占める一方、管理的要素が強いとされる記号的文字や祭祀行為を示す吉祥句の比率は低い。これから、複数の異なる施設が並存するものの、寺家遺跡でみられるような統一的管理体制や律令祭祀の機能は比較的弱い

印象を受ける。⑤継起的に出土する「寺」墨書から集落内に仏堂が存在した可能性が高く、特に9世紀以降は灯明容器転用の須臾器類、土師器大型盤類の出土から活発な宗教行為が復元できる。⑥腰帯、木杵、漆器椀の出土から役人層の存在が推定できる(木杵は四柳ミッコ遺跡からも出土)。⑦塊形滓やフイゴ羽口の出土から集落内で小鍛冶作業を行ったと考えられる。

以上、第Ⅳ面は、律令制下で能登郡下日郷に属した、旧邑知湯東側の水陸交通の重要な結節点に立地する大規模集落で、「大町」と呼称されたと考えられる。集落は、在地の中下級有力層を含んだ税を負担した公民層が多数居住する一方、物流・情報伝達の拠点の一つとして、それぞれが独立性を示す複数の施設において様々な実務的文書事務を継続的に行なうと考えられる。その中には、腰帯、木杵等の出土から、下級役人または下級役人を兼務する「大町」の有力者が出仕する、いわゆる「地方末端官衙」も存在した可能性が高い。さらに屋根瓦を葺かない仏堂程度の小規模な宗教施設が存在する他、在地中小有力層の居宅や、税や物品を納める複数の倉庫群も調査区周辺に想定できる。このような様々な機能を集約した集落構造を県内で求めるなら、河北湯東側の丘陵裾に位置する津幡町加茂遺跡があげられよう。加茂遺跡は、本遺跡と立地が近似し、水陸交通の重要な結節点につくられた「郡雑任クラスの氏族である文部氏の」「在地統治の拠点として、官衙の様相を持つ南半部と、谷奥のプライベートの様相の北半部とそれに付随する村営的な鴨寺」に「機能分化した古代地方支配の末端機構」とされる⁽⁵⁷⁾。本遺跡西辺部を縦断する一連の調査で得られた諸特徴は、在地性が高いと考えられる加茂遺跡北半部の様相に極めて近い印象を受ける。

また、本遺跡第Ⅲ面への転換は、旧邑知湯周辺のみならず各地域で認められる集落および社会構造の大きな転換である。本遺跡F地区第Ⅲ面と類似した集落遺跡は、中能登町久江サザミヤシキ遺跡、武部ショウブダ遺跡⁽⁵⁸⁾をはじめ、第3節で古代Ⅶ期の点在する集落遺跡の大部分が属し、新しい集落構造・社会背景をもつと考える。その特徴は、小規模な建物域(屋敷地)が独立的に立地することや、施軸陶器や腰帯、活発な文書事務を示す硯、宗教的遺物の他、多くの須臾器貯蔵具の所有、さらに土器廃棄・埋納を伴う活発な祭祀行為にある。律令制下で編成された集落が古代Ⅶ期の中で急速に解体する一方、名田経営をおこなう「富豪、田堵、負名」と称される富裕百姓層が各地で次第に成長、その中には「在庁官人」も含まれよう。本遺跡F地区第Ⅲ面で検出した建物群は、「公的施設」「官衙的遺跡」ではなく、これらの富裕百姓層の屋敷地の一つと位置付けたい。

最後に、本遺跡の一連の調査では、小扇状地上で縄文時代以降、近世に至る調査面(生活面)の累積を確認した。この集落の様相は、中能登町谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡でも確認しており、集落適地が山裾の小扇状地に限られた邑知地溝帯南半における集落形成の典型例と位置付けられる。また、現地調査で悩まされ続けた土石流災害痕跡は、一方で集落域のみならず、耕作地を良好に保存する効果をもち、邑知地溝帯における各時代の土地利用や耕作技術を知るうえで、重要な資料を提供することとなった。各調査面の検討に不十分な箇所も多いと考えられ、今後とも再検討が必要であることはいうまでもない。特に第3・4節で述べた古代の旧邑知湯周辺の様相については、実証不足を認識しながらも踏み込んだ検討・試案を提示した。本地区の調査成果を地域史にどう反映させるか、今後とも大きな課題と考える。

【註】

(30) 岩瀬由美2002「鹿島町 武部ショウブダ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

(31) 古代の土器研究会1994「古代の土器研究—律令的土器様式—西・東3 施軸陶器—」

(32) 田嶋明人1997「加賀地域での10-11世紀土器編年と暦年代」シンポジウム 北陸の10-11世紀代の土器様相」北陸古代土器研究会

- (33) 羽羽市教育委員会が実施した第4次調査では、9～10世紀代を主体とする古代の遺構・遺物を確認、第1・Ⅱ区で8世紀代の土器が出土する(牧山直樹他2008「四柳白山下遺跡―県営ほ場整備事業(経営体育成型)四柳地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―」羽羽市教育委員会)。また、石川県立羽羽高等学校が実施した四柳貝塚の調査では、四柳神社境内・参道の各試掘地点から8世紀後半～9世紀代の須恵器が出土する(高瀬勝喜1973「羽羽の縄文遺跡―四柳貝塚―」羽羽市史 原始・古代編)羽羽市役所)。羽羽市教委第4次調査区から四柳神社まで、直線距離で約300mを測る。さらに、谷部を挟んで北側に接する四柳ミッコ遺跡を含めれば、その集落規模はさらに拡大する。
- (34) 土屋宣雄・安英樹1999「鹿島町御祖遺跡群」(財)石川県埋蔵文化財センター
- (35) 北陸中世考古学研究会2004「掘立建物から礎石建物へ」第17回北陸中世考古学研究会資料集
- (36) 北陸古代土器研究会1995「北陸古代土器研究 第5号」
- (37) 牧山直樹・中野知幸2010「寺家遺跡 発掘調査報告書 総括編」羽羽市教育委員会
- (38) 松山和彦他2006「宝達志水町・羽羽市 杉野屋専光寺遺跡」石川県埋蔵文化財センター・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (39) 第78巻の七尾周辺地域、金沢市臨海部、手取屈伏地の集落遺跡の消長は、次の文献を元で作表した。
川畑 誠2015「素掘・古代七尾地域の集落遺跡の動向について」『石川県埋蔵文化財情報 第34号』(公財)石川県埋蔵文化財センター
林 大智2017「畷田・無量寺遺跡の調査」『金沢市畷田・寺中遺跡、畷田遺跡、畷田大徳川遺跡、畷田B遺跡、畷田C遺跡、畷田・無量寺遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人1996「第三章 手取屈伏地にみる古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
- (40) 宇野隆夫1991「律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として」桂書房
- (41) 巽淳一郎2003「都城出土墨書土器の性格」『古代官衙・集落と墨書土器』(独行法)文化財研究所奈良文化財研究所
- (42) 「羽羽市史」によれば、天平15年～天平勝宝8年に東大寺写経所の装演師に能登巨忍人の名がみえる。また「万葉集」に天平20年の羽羽郡城主能登巨乙美の歌があり、本遺跡出土の「乙上」を想起させる。
- (43) 今井淳一1998「墨書土器の機能面から見た地域社会の様相―能登・邑知周辺の墨書土器を中心に―」『古代北陸と出土文字資料』(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- (44) 註(37)、(43)文献と同じ。
- (45) 三浦純夫2017「能登邑知周辺の古代交通路」『地域社会の文化と史料』(株)同成社
- (46) 「八万」は小松市荒木田遺跡に出土例があり、8世紀末に全国的にひろまった八幡信仰との関連で注目できる。また、「八万」の文字は焼成前に刻まれた個体を含み、須恵器生産・流通を考えるうえでも興味深い。
- (47) 上野 敬他1995「二口かみあれた遺跡」志雄町教育委員会
- (48) 註(38)文献と同じ。
- (49) 上野 敬他1998「杉野屋専光寺遺跡」志雄町教育委員会
- (50) 註(38)文献と同じ。
- (51) (独行法)文化財研究所 奈良文化財研究所2005「地方官衙と寺院―郡部周辺寺院を中心として―」
- (52) 吉岡康暢・田嶋明人・金山弘明他2013「加賀横江庄遺跡―範囲内容確認発掘調査報告書―」白山市教育委員会
- (53) 註(45)文献と同じ。
- (54) 古代交通研究会2004「日本古代道路事典」八木書店
- (55) 中野知幸・小船井陽2015「酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡」羽羽市教育委員会。県営ほ場整備事業に係る調査で、調査区は東西方向にのびる。調査区西端は標高約4.3mを測り、さらに西側は標高2m台の旧邑知湯につながる低湿地となる。
- (56) 浅香年木1973「古代の羽羽」『羽羽市史 原始・古代編』羽羽市役所
- (57) 和田龍介・岩瀬由美・林大智他2018「津幡町 加茂遺跡・加茂池跡群」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- (58) 岩瀬由美2002「鹿島町 武部ショウブダ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
三浦純夫・柿田裕司他2007「中能登町 久江サザミヤシキ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

【引用・参考文献】

- 秋田喜一・酒井正善1954「羽羽郡飯山町字穀野出土の須恵器」『石川考古学研究会々誌 第6号』石川考古学研究会
- 沼田啓太郎1955「下甘田の調査概要」『石川考古学研究会々誌 第7号』石川考古学研究会
- 秋田喜一1956「羽羽郡押水町発見資料二点について」『石川考古学研究会々誌 第8号』石川考古学研究会
- 高瀬勝喜1965「古窯跡と遺物」『能登半島学術調査書』石川県
- 吉岡康暢・橋本澄夫1965「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土師器」『石川考古学研究会々誌 第9号』石川考古学研究会
- 濱岡賢太郎・吉岡康暢1965「隆平永宝を包蔵した土師器蓋の新例」『石川考古学研究会々誌 第9号』
- 秋田喜一1965「羽羽郡志雄町蓮華山出土須恵器に就いて」『石川考古学研究会々誌 第9号』石川考古学研究会
- 高瀬勝喜・濱岡賢太郎・橋本澄夫・吉岡康暢他1966「鹿島町史 資料編」鹿島町
- 橋本澄夫1968「石川県小松市八日市地方遺跡の調査―県下の櫛目文系土器―」『石川考古学研究会々誌 第11号』石川考古学研究会
- 橋本澄夫1969「七尾・鹿島における土師器出土遺跡の紹介」『石川考古学研究会々誌 第12号』石川考古学研究会
- 嶋崎井亮1971「羽羽市長若川遺跡D地点出土の墨書土器」『石川考古学研究会々誌 第14号』石川考古学研究会
- 濱岡賢太郎・浅香年木・高瀬勝喜他1973「羽羽市史(原始・古代編)」羽羽市役所

- 橋本澄夫・中島俊一 1974「志賀町矢駄遺跡」石川県教育委員会
- 桜井基一他 1974「志賀町史 資料編第1巻」志賀町役場
- 浅香山木・吉岡康暢・濱岡賢太郎他 1974「石川県志雄町史」志雄町役場
- 高橋裕 1975「羽咋市深江遺跡(第1・2次)」石川県教育委員会
- 湯尻修平・左古隆 1975「志雄町杉野屋ロクバワリ遺跡 農道整備事業関係埋蔵文化財発掘調査概報」石川県教育委員会
- 田嶋正和 1975「羽咋市本江B遺跡出土遺物」[石川考古学研究会々誌 第18号]石川考古学研究会
- 西野秀和他 1976「羽咋郡押水町竹生野トリケ山遺跡」[石川考古学研究会々誌 第19号]石川考古学研究会
- 高一男 1978「羽咋市寺家チヨウエイ遺跡発掘調査報告」羽咋市教育委員会
- 河村好光 1979「羽咋市一の宮遺跡A地区」羽咋市教育委員会
- 桜井基一・高橋勝喜・濱岡賢太郎他 1980「志賀町史 資料編第5巻」志賀町役場
- 河村好光 1980「羽咋市一の宮遺跡B地区-滝古墳群-」羽咋市教育委員会
- 桜井基一 1983「能登 敷田金谷古墳 -之乎路の族長墓とその周辺-」志雄町教育委員会
- 羽咋市教育委員会 1981「羽咋市古崎・次場遺跡 -市道12号線改良工事に伴う発掘調査概報-」羽咋市教育委員会
- 河村好光 1981「滝古墳群」[石川考古学研究会々誌 第24号]石川考古学研究会
- 谷内尾吉司他 1982「能登海浜遺関係埋蔵文化財調査報告書I(志賀町女郎塚遺跡)」石川県立埋蔵文化財センター
- 高橋勝喜・桜井基一・橋本澄夫他 1984「鹿島町史 資料編(続)上巻」鹿島町
- 谷内碩史 1982「釜屋・新保・猫ノ目遺跡」羽咋市教育委員会
- 谷内碩史・濱岡賢太郎 1982「古崎・次場遺跡-住宅建設に伴う緊急発掘調査概報-」羽咋市教育委員会
- 荒木孝平・小嶋芳孝・谷内碩史 1983「寺家遺跡-住宅建設に伴う緊急発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会
- 桜井基一 1983「福水出土の古書教具からみた能登の山林宗教」[北陸の考古学 石川考古学研究会々誌 第26号]石川考古学研究会
- 石川県立埋蔵文化財センター 1984「県内遺跡詳細分布調査報告書I(昭和54・55年度)」石川県立埋蔵文化財センター
- 河村好光 1984「羽咋市柳田シャコア遺跡 能登海浜遺関係埋蔵文化財調査報告書III」石川県立埋蔵文化財センター
- 湯尻修平・越坂一也 1984「羽咋市気多社借坊跡群-能登海浜遺関係埋蔵文化財調査報告書IV-」石川県立埋蔵文化財センター
- 石川県立埋蔵文化財センター 1985「県内遺跡詳細分布調査報告書II(昭和55~59年度)」石川県立埋蔵文化財センター
- 米澤義光他 1985「昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概報」石川県立埋蔵文化財センター
- 濱岡賢太郎・浅香山木他 1985「鹿島町史 通史・民俗編」鹿島町
- 谷内碩史・荒木孝平 1985「昭和59年度羽咋市埋蔵文化財発掘調査報告書」羽咋市教育委員会
- 小嶋芳孝他 1986「寺家遺跡発掘調査報告I」石川県立埋蔵文化財センター
- 谷内碩史他 1986「柴垣須田遺跡」羽咋市教育委員会
- 湯尻修平他 1986「石川県能都町真脇遺跡」能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団
- 福島正実 1987「古崎・次場遺跡 ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 第1分冊(資料編(1))」石川県立埋蔵文化財センター
- 木立雅朗他 1987「柳田シャコア廃寺跡 詳細分布調査報告書」羽咋市教育委員会
- 木立雅朗他 1987「北陸の古代寺院 -その源流と古瓦-」桂書房
- 小嶋芳孝他 1988「寺家遺跡発掘調査報告II」石川県立埋蔵文化財センター
- 福島正実他 1988「古崎・次場遺跡-県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第2分冊(資料編(2))-」石川県立埋蔵文化財センター
- 増山仁 1988「金沢市磯部運動公園遺跡」金沢市教育委員会
- 今井淳一・東四柳史明 1988「永光寺遺跡-永光寺川荒廃砂防工事に伴う緊急発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会
- 谷内碩史他 1988「羽咋市市内遺跡詳細分布調査報告書」羽咋市教育委員会
- 平田天秋 1988「杉野屋ロクバワリ遺跡」志雄町教育委員会
- 北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988「シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題」
- 今井淳一 1989「釜屋遺跡」羽咋市教育委員会
- 末森城跡調査団・押水町教育委員会 1989「末森城跡」押水町教育委員会
- 今井淳一 1990「四柳白山下遺跡I」羽咋市教育委員会
- 金沢大学考古学研究室(財)古代学協会北陸支部 1990「石川県鹿島郡鹿西町における考古学的分布調査概報-1989年-」[日本海文化 第16号]金沢大学文学部
- 今井淳一他 1991「四柳白山下遺跡II」羽咋市教育委員会
- 谷内碩史 1991「太田遺跡-羽咋市農業協同組合開発事業計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」羽咋市教育委員会
- 貞末竜司・金沢大学文学部考古学研究室 1991「阿弥陀敷遺跡の発掘(1990年)-阿弥陀敷遺跡発掘調査報告書-」[金沢大学日本海城研究報告23]金沢大学文学部考古学研究室
- 吉岡康暢 1991「日本海城の土器・陶器(古代編)」(株)六興出版

- 増山仁1992「金沢市専光寺養魚場遺跡」金沢市教育委員会・(株)本家建設
- 今井淳一他1992「眉丈台の遺跡群」羽咋市教育委員会
- 安井重幸他1992「石川県鹿島郡鹿西町 能登部小学校遺跡」鹿西町教育委員会
- 今井淳一他1993「寺家遺跡第10次調査報告書—個人住宅建設に伴う発掘調査報告書—」羽咋市教育委員会
- 濱岡賢太郎他1993「石川県内生産遺跡分布調査報告書」石川考古学研究会
- 中島俊一・川畑誠1994「大町C遺跡 小森ヘイナイメA・B遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
- 藤田邦雄他1994「藤井サンジョリ遺跡・高富テラダ遺跡・高富カンジダ遺跡」(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 今井淳一・牧山直樹1994「四柳白山下遺跡Ⅲ」羽咋市教育委員会
- 今井淳一他1994「吉崎・次場遺跡 第13次発掘調査」羽咋市教育委員会
- 谷内碩史他1994「三ツ屋遺跡」羽咋市教育委員会
- 牧山直樹他1994「新保ゼンボン遺跡」羽咋市教育委員会
- 藤本英道他1995「谷内・杉谷遺跡群」石川県立埋蔵文化財センター
- 岡本恭一・久田正弘1995「曾村C遺跡発掘調査報告書」(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 今井淳一・牧山直樹1995「太田ツツミダ遺跡」羽咋市教育委員会
- 上野敬他1995「二口かみあれた遺跡」志雄町教育委員会
- 社団法人石川県埋蔵文化財保存協会1996「社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報7(平成7年度)」
- 田嶋明人1996「第三章 手取原状地にみる古代遺跡の動態」『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』松任市教育委員会
- 平田天秋他1997「永光寺遺跡—境内地の発掘調査—」石川県立埋蔵文化財センター
- 本田秀生・土屋宜雄他1997「寺家遺跡—県営ほ場整備事業羽咋西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」石川県立埋蔵文化財センター
- 坂元勇1997「寺家遺跡第12次調査報告書」羽咋市教育委員会
- 牧山直樹他1997「長者川遺跡」羽咋市教育委員会
- 上野敬他1997「石坂鍋山古墳群・石坂鍋山遺跡」志雄町教育委員会
- 川畑誠・沢辺利明他1998「获市遺跡 一般国道159号線获市歩道設置工事に係る発掘調査報告書」(社)石川県埋蔵文化財保存協会
- 大畑喜代志1998「大坂A遺跡」志賀町教育委員会
- 宮下栄仁1998「吉崎・次場遺跡第16次発掘調査報告書」羽咋市教育委員会
- 今井淳一他1998「新保ゼンボン古墳群」羽咋市教育委員会
- 上野敬・北野博司他1998「杉野屋専光寺遺跡」志雄町教育委員会
- 芝田悟1998「羽咋町志賀町坪野中世墳墓の出土品」『石川考古学研究会々誌 第41号』石川考古学研究会
- 土屋宜雄・安英樹1999「鹿島町 御粗遺跡群」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 藤井秀明1999「能登部下仲町遺跡」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 今井淳一他1999「太田ニシカワダ遺跡」羽咋市教育委員会
- 上野敬他1999「二口かみあれた遺跡第2次」志雄町教育委員会
- 出越茂和1999「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『北陸の考古学Ⅲ 石川考古学研究会々誌 第42号』石川考古学研究会
- 安 英樹他2000「鹿島町 久江遺跡群」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁2000「寺家遺跡—第13次発掘調査報告書—」羽咋市教育委員会
- 牧山直樹・今井淳一2000「住宅建設にともなう吉崎・次場遺跡第17次発掘調査報告書」羽咋市教育委員会
- 出口成治他2000「永光寺遺跡—市道余喜46号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」羽咋市教育委員会
- 山本信夫2000「大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—」大宰府市教育委員会
- 久田正弘2001「志賀町 甘田タイ遺跡」(財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮下栄仁他2001「羽咋市内遺跡発掘調査報告」羽咋市教育委員会
- 加藤克郎2001「羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨」『石川県埋蔵文化財情報第5号』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 牧山直樹他2002「粟生シメダ遺跡」羽咋市教育委員会
- 安 英樹2003「鹿島町 久江ツカノコシ遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 三浦純夫2003「鹿西町 金丸宮地遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 澤辺利明2003「羽咋市 兵庫遺跡・粟生B遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘・立原秀明他2003「志雄町 获島遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 立原秀明・加藤克郎2003「志雄町 获島B遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 牧山直樹他2003「滝谷八幡社遺跡」羽咋市教育委員会
- 安井重幸2003「沢ソウダグ遺跡・宮地遺跡」鹿西町教育委員会
- 岡本淳一他2003「周溝をもつ建物」の基礎的研究」『富山大学考古学研究会論集 賢賀楼—秋山進午先生古希記念—』六一書房
- 岡本恭一・横山誠2004「鹿西町 徳丸遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 久田正弘・宮川勝次他2004「羽咋市 東の場タケノハナ遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 安井重幸2004「ゴロジヤマ遺跡・テラダヤチ遺跡」鹿西町教育委員会
- 澤辺利明・宮川勝次2005「志賀町 大坂古屋垣内遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

- 布尾和史・澤辺利明他2005「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅰ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 小林直樹・宮下栄仁他2005「長者川遺跡」羽咋市教育委員会
 澤辺利明他2006「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅱ」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 松山和彦他2006「宝達志水町・羽咋市 杉野屋尊光寺遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 牧山直樹・宮下栄仁2006「寺家遺跡 市内遺跡発掘調査事業 第14次～第18次発掘調査報告書」羽咋市教育委員会
 三浦純夫・柿田祐司他2007「中能登町 久江サザミヤシキ遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 白田義彦・澤辺利明他2008「羽咋市 中川・太田遺跡群(中川A遺跡、太田A遺跡、太田B遺跡、太田C遺跡、太田ニシカワダ遺跡、太田ツツミダ遺跡)」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 宮川勝次他2008「羽咋市 的場農業倉庫前遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 牧山直樹・宮下栄仁2008「四柳白山下遺跡Ⅳ」羽咋市教育委員会
 牧山直樹・中野知幸2010「寺家遺跡発掘調査報告書 総括編」羽咋市教育委員会
 村井伸行・下濱聡2010「子浦ニシヨウA・B遺跡-県営はちまき整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」宝達志水町教育委員会
 澤辺利明・宮川勝次・岩瀬由美他2011「羽咋市 太田A遺跡 太田B遺跡 太田ツツミダ遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 澤辺利明他2011「宝達志水町 杉野屋遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 澤辺利明2012「七尾市 須曾ウツワダ遺跡 中能登町 水白モンショ遺跡 金丸宮地遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 久田正弘・土屋宜雄他2012「中能登町 高島カタク・スギモト遺跡」石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
 田嶋明人2013「平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の編年」加賀 横江荘遺跡 白山市・白山市教育委員会
 林 大智他2015「羽咋市 四柳ミッコ遺跡」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
 中野知幸他2015「酒井ノギワ遺跡・酒井バンドウマエ遺跡」羽咋市教育委員会
 川畑 誠2015「素描・古代七尾地域の集落遺跡の動向について」〔石川県埋蔵文化財情報 第34号〕(公財)石川県埋蔵文化財センター
 (公財)石川県埋蔵文化財センター 2016「石川県埋蔵文化財情報 第35号」
 櫻田 誠・下濱貴子・宮田 明他2016「第1章 土器」〔八日市地方遺跡Ⅱ-小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-〕小松市教育委員会
 林 大智2017「畷田・無量寺遺跡の調査」〔金沢市 畷田・寺中遺跡、畷田遺跡、畷田大徳川遺跡、畷田B遺跡、畷田C遺跡、畷田・無量寺遺跡〕石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
 三浦純夫・久田正弘・白田義彦2018「羽咋市 四柳白山下遺跡Ⅳ」石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ネリがな	はくいし よつやなぎはくさんしたいせき こ							
書名	羽咋市 四柳白山下遺跡V							
副書名	一般国道159号改築(鹿島バイパス)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書〔本文編〕(図版編)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川畑 誠、(株)パレオ・ラボ、(株)古環境研究所							
編集機関	公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2019年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よつやなぎはくさん 四柳白山下 遺跡	石川県 羽咋市 四柳町地内	17202	711700	36度 55分 53秒	136度 51分 23秒	19970410～ 19971224 19980512～ 19981228	2,800㎡ 7,900㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
四柳白山下 遺跡	集落跡 散布地	縄文	竪穴状遺構、 土坑、自然流路	縄文土器	中期～後期後葉 晩期後半			
	集落跡	弥生	平地建物、土坑、 溝	弥生土器、石器				
	耕作地	古墳	水田	土師器	小区画水田			
	集落跡 耕作地	奈良・平安	掘立柱建物、井戸、 堤防・護岸、溝、 水田、畠地	須恵器、土師器、 灰軸陶器、木製品、 帯金具、齋串	土石流痕跡、石積みの 護岸・堤防を検出。墨 書土器多数出土			
	集落跡	鎌倉	掘立柱建物	土師器皿				
	集落跡	室町～江戸	掘立柱建物、井戸、 土坑	陶磁器、土師器皿、 漆器、木製品、 石製品、銅銭、 金属製品				
要約	<p>碓石ヶ峰山地西麓の小合成層状地上に立地する縄文時代中期～近世の複合遺跡である。土石流災害と各時代の遺構面が累積し、邑知地溝帯における集落形成を考えるうえで典型例となる。中でも、7世紀末葉～9世紀代に営まれた集落は、北東～南西方向で約300mの規模をもち、多数の掘立柱建物や墨書土器、陶製硯、転用硯、腰帯等の出土から、「地方末端官衙」や小規模な仏堂を含む、水陸交通の要衝に位置した中核的集落と考えられる。また、土石流災害で埋没した、古墳時代中期以降の耕作地(水田、畠)は、邑知地溝帯における耕作技術の変遷を知るうえで、重要な資料を提供している。</p>							

羽咋市 四柳白山下遺跡 V
〔本文編〕

発行日 平成31(2019)年2月28日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)
(公財)石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail address daihyou@ishikawa-muibon.or.jp

印刷 鶴川印刷株式会社